多可郡多可町

坂本・土井の畑遺跡

－(国)427号　(曽我井バイパス)地域自主戦略交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成２６（2014）年３月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

多可郡多可町

坂本（さかもと）・土井（どい）の畑（はた）遺跡

－(国)427号　(曽我井バイパス)地域自主戦略交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成２６（2014）年３月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

遺跡遠景　南東上空から

遺跡遠景　北西上空から

巻首図版2

遺跡遠景　南上空から

遺跡近景　西上空から

遺跡全景　東上空から

遺跡遠景　北西上空から

巻首図版4

1区・2区第1面 俯瞰

耕作痕列群 6　東から

耕作痕列群 10　南から

巻首図版6

1区第2面全景　東から

1区第2面掘立柱建物跡群　西から

SX01 全景　東から

SX01 出土土器

巻首図版8

坂本・土井の畑遺跡の位置

例　言

１．本書は、多可郡多可町中区坂本に所在する坂本・土井の畑遺跡の発掘調査報告書である。

２．本調査は、（国）427 号　（曽我井バイパス）地域自主戦略交付金事業に伴うもので、兵庫県北播磨県民局　加東土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館（現公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部）を調査機関として実施した。

３．調査の推移は以下のとおりである。

（発掘作業）

確認調査　　平成 23 年 4 月 20 日～ 22 日
　　平成 23 年 7 月 25 日
　　実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査　平成 23 年 8 月 22 日～ 12 月 22 日
　　実施機関：兵庫県立考古博物館
　　工事請負：株式会社　林本興業

本発掘調査　平成 23 年 11 月 21 日～ 11 月 25 日
　　実施機関：兵庫県立考古博物館

（出土品整理作業）

　　平成 24 年 4 月 6 日～平成 26 年 3 月 31 日
　　実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

４．本書の編集は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　山田清朝が増田麻子の補助のもと行った。また原稿執筆は、第２章を山田、４章をパリノサーベイ株式会社・東根　久（パレラボ）、他を垣内拓郎が担当した。

５．本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

６．調査後の空中写真の撮影および図化は、株式会社　サンコムに委託して行った。

７．遺物写真の撮影は、株式会社クレアチオに委託して行った。

８．調査成果の測量については、地籍図根三角点Ｖ 13・Ｃ１－ 42・Ｃ１－ 43 を使用し三級基準点を設置し、これを基準とした。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第Ｖ系に位置する。

９．本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とし、曽我井・堂ノ元遺跡空中写真測量成果をもとに３級水準点を設置した。

10．本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。

11．最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

宮原文隆・安平勝利・岡田章一・森内秀造

目　　次

第１章　坂本・土井の畑遺跡
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 6
第２章　調査の経緯
　第１節　調査の起因 ……12
　第２節　本発掘調査 ……15
　第３節　整理作業 ……17
第３章　調査の成果
　第１節　概要 ……18
　第２節　１区の調査 ……23
　第３節　２・４区の調査 ……97
　第４節　３区の調査 …… 111
　第５節　５区の調査 …… 119
第４章　分析・鑑定
　第１節　坂本・土井の畑遺跡の花粉分析 …… 123
　第２節　坂本・土井の畑遺跡の石材同定 …… 128
第５章　遺物のまとめ
　第１節　弥生土器 …… 131
　第２節　古墳時代 …… 132
　第３節　奈良時代～平安時代中期 …… 135
　第４節　中世 …… 138
第６章　遺構のまとめ
　第１節　検出面と遺構の概要 …… 143
　第２節　遺構の検討 …… 144
第７章　総括 …… 166
報告書抄録 ……

挿　図　目　次

第１図　多可町の位置 …… 1
第２図　多可町内水系図 …… 2
第３図　坂本・土井の畑遺跡の位置 …… 2
第４図　遺跡周辺の地形分類 …… 3
第５図　遺跡周辺の微地形 …… 4
第６図　主要周辺遺跡 …… 6
第７図　確認調査位置図 …… 13
第８図　工事と調査位置 …… 14
第９図　地区割図 …… 15
第10図　現地説明会 …… 16
第11図　調査位置図 …… 18
第12図　基本土層（Ｅ－Ｊ）…… 20
第13図　基本土層（Ａ－Ｄ）…… 21
第14図　基本土層（Ｃ－Ｏ）…… 22
第15図　１区基本土層 …… 23
第16図　１区　調査風景…… 24
第17図　１区第１面 …… 25
第18図　耕作痕列群１・５の位置 …… 26
第19図　耕作痕列群１　Ｐ１・Ｐ２ …… 27
第20図　耕作痕列群１ …… 27
第21図　耕作痕列群２の位置 …… 28
第22図　耕作痕列群２ …… 29
第23図　耕作痕列群３の位置 …… 30
第24図　耕作痕列群３ …… 31
第25図　耕作痕列群３　Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７ …… 31
第26図　耕作痕列群４・７の位置 …… 32
第27図　耕作痕列群４ …… 33
第28図　耕作痕列群５ …… 34
第29図　耕作痕列群６の位置 …… 35
第30図　耕作痕列群６ …… 36
第31図　耕作痕列群６　Ｐ１～Ｐ４ …… 37
第32図　耕作痕列群７ …… 38
第33図　耕作痕列群８・９の位置 …… 39
第34図　耕作痕列群８　Ｐ１～Ｐ３ …… 39
第35図　耕作痕列群８ …… 40
第36図　耕作痕列群９　Ｐ１・Ｐ３・Ｐ５ …… 41
第37図　耕作痕列群９ …… 42
第38図　耕作痕列群 10 の位置 …… 43
第39図　耕作痕列群 10　Ｐ１・Ｐ２・Ｐ５・Ｐ６ …… 43
第40図　耕作痕列群 10 …… 44
第41図　耕作痕列群 10　２列目 …… 44
第42図　耕作痕列群 11 の位置 …… 45
第43図　耕作痕列群 11 …… 46
第44図　耕作痕列群 11　Ｐ１・Ｐ２ …… 47
第45図　耕作痕列群 12 の位置 …… 47
第46図　耕作痕列群 12 …… 48
第47図　耕作痕列群 12　Ｐ１ …… 48
第48図　耕作痕列群 13 の位置 …… 49
第49図　耕作痕列群 13 …… 50
第50図　耕作痕の検出作業 (1) …… 50
第51図　耕作痕の検出作業 (2) …… 50
第52図　耕作痕列群 14 の位置 …… 51
第53図　耕作痕列群 14 …… 52
第54図　耕作痕列群 15 …… 52
第55図　耕作痕列群 15 ～ 17 の位置 …… 53
第56図　耕作痕列 17 …… 54
第57図　耕作痕列 16 …… 54
第58図　１区第１面　鋤溝群１ …… 55
第59図　鋤溝１断面 …… 56
第60図　鋤溝４断面 …… 56
第61図　１区第１面　小穴・溝・土坑 …… 57
第62図　ＳＤ 01 断面 …… 59
第63図　ＳＤ 02 断面 …… 60
第64図　ＳＫ 01 …… 61
第65図　ＳＫ 02 …… 62
第66図　ＳＫ 03 …… 62
第67図　ＳＫ 04 …… 62
第68図　ＳＫ 05 …… 63
第69図　１区第２面…… 66
第70図　ＳＨ 01 …… 67
第71図　ＳＨ 01 検出作業 …… 68
第72図　ＳＨ 01 土器出土位置 …… 68

第73図　ＳＨ02　土坑１ …… 69
第74図　ＳＨ02 …… 70
第75図　ＳＨ02　土器出土位置 …… 71
第76図　出土土器実測作業 …… 72
第77図　ＳＢ01 …… 73
第78図　ＳＢ02 …… 73
第79図　ＳＢ03 …… 74
第80図　ＳＢ04 …… 75
第81図　ＳＢ05 …… 77
第82図　ＳＢ06 …… 78
第83図　ＳＢ07 …… 79
第84図　ＳＢ08 …… 80
第85図　ＳＢ09 …… 81
第86図　ＳＢ10 …… 82
第87図　ＳＢ10　柱穴断面 …… 83
第88図　ＳＢ11 …… 84
第89図　ＳＢ12 …… 85
第90図　ＳＤ03横断面 …… 87
第91図　ＳＤ04断面 …… 88
第92図　ＳＤ05断面 …… 88
第93図　ＳＤ06断面 …… 89
第94図　ＳＤ07断面 …… 90
第95図　ＳＤ08断面 …… 90
第96図　ＳＤ08内土器出土状況（２層上面）… 91
第97図　ＳＤ09断面 …… 92
第98図　ＳＫ06 …… 92
第99図　ＳＫ07 …… 93
第100図　ＳＸ01 …… 94
第101図　２・４区　基本土層図 …… 97
第102図　２区第１面 …… 98
第103図　ＳＤ10断面 …… 99
第104図　ＳＤ11断面 …… 100
第105図　ＳＫ08 …… 100
第106図　ＳＫ09 …… 101
第107図　２・４区第２面 …… 102
第108図　ＳＢ13 …… 102
第109図　ＳＢ14 …… 103
第110図　ＳＢ15 …… 104
第111図　ＳＢ16 …… 105
第112図　ＳＢ17 …… 105
第113図　ＳＢ18 …… 106
第114図　ＳＤ12断面 …… 108
第115図　ＳＤ13断面 …… 108
第116図　ＳＫ10 …… 109
第117図　３区基本土層 …… 111
第118図　３区第１面 …… 112
第119図　ＳＫ11 …… 112
第120図　ＳＫ12 …… 113
第121図　ＳＫ14 …… 113
第122図　ＳＫ13 …… 113
第123図　ＳＫ15 …… 113
第124図　３区第２面 …… 115
第125図　柱穴断面の実測 …… 116
第126図　ＳＢ19 …… 116
第127図　ＳＢ19　柱穴断面 …… 117
第128図　５区基本土層図 …… 119
第129図　５区第２面 …… 120
第130図　資料サンプリング標準位置図 …… 123
第131図　花粉化石 …… 127
第132図　坂本・土井の畑遺跡出土石材の
マイクロスコープ写真 … 129
第133図　坂本・土井の畑遺跡の位置と周辺の地質
…… 130
第134図　遺構の変遷　弥生時代・古墳時代　145
第135図　遺構の変遷　奈良時代・中世 (1)　146
第136図　遺構の変遷　中世 (2) …… 148
第137図　遺構の変遷　中世 (3) …… 149
第138図　遺構の変遷　中世 (4) …… 150
第139図　中世Ⅱ期１・２段階Ｅグループ変遷図
…… 157
第140図　中世Ⅱ期２段階Ｗグループ変遷図　159
第141図　耕作痕列群の類例 …… 162

表　目　次

第１表　主要周辺遺跡 …… 7
第２表　ＳＢ 01 規模一覧 …… 72
第３表　ＳＢ 02 規模一覧 …… 74
第４表　ＳＢ 03 規模一覧 …… 75
第５表　ＳＢ 04 規模一覧 …… 76
第６表　ＳＢ 05 規模一覧 …… 77
第７表　ＳＢ 06 規模一覧 …… 78
第８表　ＳＢ 07 規模一覧 …… 79
第９表　ＳＢ 08 規模一覧 …… 80
第10表　ＳＢ 09 規模一覧 …… 81
第11表　ＳＢ 10 規模一覧 …… 83
第12表　ＳＢ 11 規模一覧 …… 84
第13表　ＳＢ 12 規模一覧 …… 84
第14表　ＳＢ 13 規模一覧 …… 103
第15表　ＳＢ 14 規模一覧 …… 103
第16表　ＳＢ 15 規模一覧 …… 104
第17表　ＳＢ 16 規模一覧 …… 104
第18表　ＳＢ 17 規模一覧 …… 106
第19表　ＳＢ 18 規模一覧 …… 107
第20表　ＳＢ 19 規模一覧 …… 117
第21表　資料一覧 …… 123
第22表　花粉分析結果 …… 125
第23表　石器および川原石の肉眼的特徴と同定結果 … 128
第24表　第１面遺構一覧 …… 143
第25表　第２面遺構一覧 …… 143
第26表　耕作痕列群一覧表 (1) …… 152
第27表　耕作痕列群一覧表 (2) …… 153
第28表　時期別遺構一覧 …… 165

図　版　目　次

図版１
耕作痕列群１出土土器（１）
耕作痕列群２出土土器（13）
耕作痕列群３出土土器（２・８・11・14）
耕作痕列群４出土土器（６）
耕作痕列群５出土土器（９・15）
耕作痕列群６出土土器（７・12）
耕作痕列群 10 出土土器（４）
耕作痕列群 14 出土土器（16）
耕作痕列 15 出土土器（３）
耕作痕列 16 出土土器（10）
耕作痕列 17 出土土器（17）
鋤溝群 01 出土土器（５）
柱穴出土土器（18 ～ 27）
ＳＤ01 出土土器（28 ～ 32）
ＳＤ02 出土土器（33・34）
ＳＫ01 出土土器（38・39）
ＳＫ02 出土土器（36）
ＳＫ03 出土土器（40）
ＳＫ04 出土土器（37）
ＳＫ05 出土土器（35）
図版２
１区第１面包含層出土土器（41 ～ 72）
図版３
１区第１面包含層出土土器（73 ～ 96）
１区第１面出土土器金属製品（Ｍ１～Ｍ３）
１区第１面出土土器土製品(Ｄ１・Ｄ２・Ｄ４~Ｄ６)
ＳＤ01 出土土製品（Ｄ３）
図版４
ＳＨ01 出土土器（97 ～ 105）

ＳＨ02 出土土器（106 ～ 119）
図版５
ＳＢ05 出土土器（120 ～ 122）
ＳＢ09 出土土器（123 ～ 129）
ＳＢ10 出土土器（130 ～ 132）
１区第２面柱穴出土土器（133 ～ 136）
ＳＤ03 出土土器（137 ～ 143）
ＳＤ05 出土土器（144 ～ 148）
ＳＤ07 出土土器（149・150）
ＳＤ09 出土土器（151・152）
図版６
ＳＤ08 出土土器（153 ～ 155）
ＳＸ01 出土土器（156 ～ 167）
１区第２面包含層出土土器（168 ～ 174）
図版７
ＳＨ02 出土土器石製品（Ｓ 1）
Ｐ13 出土土器金属製品（Ｍ 4）
ＳＢ12 出土土器金属製品（Ｍ 5）
２区第１面柱穴出土土器（175・176）
ＳＤ10 出土土器（177 ～ 179）
２区第１面包含層出土土器（180 ～ 182）
２区第１面出土土製品（Ｄ７・Ｄ８）
ＳＢ13 出土土器（183）
ＳＢ14 出土土器（184）
２・４区第２面柱穴出土土器（185 ～ 187）
ＳＤ13 出土土器（188 ～ 201）
図版８
ＳＤ13 出土土器（202 ～ 204）
２・４区第２面包含層出土土器（205 ～ 212）
２・４区第１・２面出土土製品（Ｄ９・Ｄ 10）
ＳＢ19 出土土器（213 ～ 215）
３区第１面出土土製品（Ｄ 11・Ｄ 12）

写 真 図 版 目 次

１区
写真図版１　遺構
１区･２区第１面　全景　西から
１区第１面　全景　西から
写真図版２　遺構
１区第１面全景　北西から
１区第１面全景　南から
写真図版３　遺構
１区第１面全景　南東から
耕作痕列群１　南から
耕作痕列群１　Ｐ１断面　東から
耕作痕列群１　Ｐ３断面　南から
写真図版４　遺構
耕作痕列群２　北から
耕作痕列群２　Ｐ１断面　東から
耕作痕列群３　Ｐ３断面　東から
耕作痕列群２　Ｐ２断面　南から
耕作痕列群３　Ｐ７断面　南から
写真図版５　遺構
耕作痕列群３　北から　耕作痕列群５　北から
耕作痕列群４　南から
耕作痕列群６　Ｐ１断面　南から
耕作痕列群６　Ｐ３断面　南から
耕作痕列群６　Ｐ５断面　東から
耕作痕列群６　Ｐ６断面　東から
写真図版６　遺構
耕作痕列群７　北から　耕作痕列群８　南から
耕作痕列群８　Ｐ２断面　東から
耕作痕列群８　Ｐ３断面　南から
写真図版７　遺構
耕作痕列群９　北から
耕作痕列群９　Ｐ２断面　東から
耕作痕列群９　Ｐ４断面　東から
耕作痕列群９　Ｐ３断面　東から

耕作痕列群９　Ｐ５断面　東から
耕作痕列群10　Ｐ１断面　東から
耕作痕列群10　Ｐ３断面　東から
写真図版８　遺構
耕作痕列群10　Ｐ６断面　南から
耕作痕列群10　Ｐ６断面　南から
耕作痕列群10　南から
写真図版９　遺構
耕作痕列群12　北西から
耕作痕列群14　南から
耕作痕列群12　Ｐ１断面　南から
耕作痕列群14　Ｐ１土器出土状況　南から
写真図版10　遺構
ＳＤ01　全景　北東から
ＳＤ02全景　南から　ＳＤ02断面①　北から
ＳＤ02断面②　北東から
写真図版11　遺構
ＳＫ02断面　南から　ＳＫ03断面　南から
ＳＫ04断面　北から　ＳＫ05断面　南から
Ｐ02土器出土状況　南から
鋤溝群01　鋤溝２　南から
鋤溝群01　鋤溝３　南から
写真図版12　遺構
第２面　俯瞰
写真図版13　遺構
第２面全景　西から　第２面西半部　南東から
写真図版14　遺構
第２面西半部　北東から
第２面東半部　南から
写真図版15　遺構
ＳＨ01　東から　ＳＨ01　北から
写真図版16　遺構
ＳＨ01土器　東から
ＳＨ01土器出土状況　北から
ＳＨ01　97出土状況　東から
ＳＨ01　98出土状況　東から
ＳＨ01　99出土状況　東から
ＳＨ02　Ｐ１　東から　ＳＨ02　Ｐ２　東から
写真図版17　遺構
ＳＨ02全景　東から　ＳＨ02全景　南東から
ＳＨ02全景　南から
写真図版18　遺構
ＳＨ02　土器出土状況　東から
ＳＨ02　土器出土状況　西から
ＳＨ02　116出土状況　西から
ＳＨ02　115出土状況　北から
ＳＨ02　117出土状況　西から
ＳＨ02　108出土状況　西から
写真図版19　遺構
第２面建物群　南から　第２面建物群　北から
写真図版20　遺構
ＳＢ01　東から　ＳＢ03　東から
ＳＢ04　北から　ＳＢ05　北から
写真図版21　遺構
ＳＢ05　Ｐ２断面　北から
ＳＢ05　Ｐ２土器出土状況　北から
ＳＢ06　東から　ＳＢ07　南から
写真図版22　遺構
ＳＢ09　Ｐ５断面　西から
ＳＢ09　Ｐ６断面　西から
ＳＢ09　Ｐ５土器出土状況　西から
ＳＢ09　Ｐ８断面　西から
ＳＢ10　Ｐ１土器出土状況　東から
ＳＢ10　Ｐ３断面　南から
ＳＢ10　Ｐ２断面　東から
ＳＢ10　Ｐ４断面　南から
写真図版23　遺構
ＳＢ11　南東から
Ｐ06土器出土状況　西から
写真図版24　遺構
ＳＸ01全景　北から
ＳＸ01土器出土状況　東から
ＳＸ01土器出土状況　南から
写真図版25　遺構
ＳＤ03断面　南から　ＳＤ04断面　南東から
ＳＤ05　全景　南から

ＳＤ05　断面Ａ　南から
ＳＤ05　断面Ｂ　南から
ＳＤ06　Ａ断面　南から
ＳＤ06　Ｂ断面　南から
ＳＤ08Ａ断面　南から　ＳＤ08Ｂ断面　南から
写真図版26　遺構
ＳＤ08土器出土状況　東から
ＳＤ09Ａ断面　東から
ＳＤ09Ｂ断面　東から
ＳＤ09　151出土状況　南から
ＳＤ09　152出土状況　北から
ＳＫ06断面　南から　ＳＫ07断面　南から

２区
写真図版27　遺構
第１面全景　西から　ＳＤ10断面　西から
ＳＤ11断面　西から
Ｐ15土器出土状況　南西から
ＳＫ09断面　北から
写真図版28　遺構
第２面全景　東から　第２面全景　西から
写真図版29　遺構
ＳＢ13　北から　ＳＢ13　Ｐ1断面　北から
ＳＢ14　Ｐ5土器出土状況　西から
ＳＢ14　東から
写真図版30　遺構
ＳＢ15　北から　ＳＢ16　南から
ＳＢ17　南から
写真図版31　遺構
ＳＢ18　南から　ＳＤ12断面　南から
ＳＤ13断面　西から
ＳＤ13土器出土状況　北から
ＳＤ13　202出土状況　南から
ＳＫ10断面　南から
写真図版32　遺構
第１面全景　東から　ＳＫ14断面　南から
ＳＫ15断面　東から

３区
写真図版33　遺構
ＳＢ19　東から　ＳＢ19－Ｐ11断面 東から
ＳＢ19－Ｐ11　土器出土状況　東から
ＳＢ19－Ｐ12断面　東から
ＳＢ19－Ｐ13断面　南から
写真図版34　遺構
全景　北西から　全景　南東から
写真図版35　遺物
耕作痕列群１出土土器（1）
耕作痕列群３出土土器（2・11）
耕作痕列 15 出土土器（3）
耕作痕列群 10 出土土器（4）
鋤溝群１出土土器（5）
耕作痕列群４出土土器（6）
耕作痕列群６出土土器（7・12）
耕作痕列群５出土土器（9）
耕作痕列 16 出土土器（10）
写真図版36　遺物
耕作痕列群２出土土器（13）
耕作痕列群３出土土器（14）
耕作痕列群５出土土器（15）
耕作痕列群 14 出土土器（16）
耕作痕列 17 出土土器（17）
写真図版37　遺物
耕作痕列群３出土土器（8）
柱穴出土土器（18 ～ 21・25）
ＳＤ 01 出土土器（29）
ＳＤ 02 出土土器（34）
写真図版38　遺物
柱穴出土土器（22 ～ 24・26・27）
写真図版39　遺物
ＳＤ 01 出土土器（28・30 ～ 32）
ＳＤ 02 出土土器（33）
写真図版40　遺物
ＳＫ 05 出土土器（35）
ＳＫ 02 出土土器（36）
ＳＫ 04 出土土器（37）

ＳＫ 01 出土土器（38・39）
ＳＫ 03 出土土器（40）
写真図版 41　遺物
1 区第 1 面包含層出土土器（41 ～ 45・47）
写真図版 42　遺物
1 区第 1 面包含層出土土器
（46・48・65・73・74・78・79・82・90）
写真図版 43　遺物
1 区第 1 面包含層出土土器（49 ～ 55）
写真図版 44　遺物
1 区第 1 面包含層出土土器（56 ～ 64）
写真図版 45　遺物
1 区第 1 面包含層出土土器（66 ～ 72）
写真図版 46　遺物
1 区第 1 面包含層出土土器
（73・75 ～ 77・80・81）
写真図版 47　遺物
1 区第 1 面包含層出土土器（83～89･91～94）
写真図版 48　遺物
1 区第 1 面包含層出土土器（95・96）
写真図版 49　遺物
1 区第 1 面出土鉄製品（Ｍ１～Ｍ３）
1 区第 1 面出土土製品（Ｄ１～Ｄ６）
写真図版 50　遺物
ＳＨ 01 出土土器（97 ～ 100）
写真図版 51　遺物
ＳＨ 01 出土土器（101 ～ 105）
ＳＨ 02 出土土器（106）
写真図版 52　遺物
ＳＨ 02 出土土器（107 ～ 111・114 ～ 116）
写真図版 53　遺物
ＳＨ 02 出土土器（ 112・113・117 ～ 119）
ＳＢ 05 出土土器（120 ～ 122）
写真図版 54　遺物
ＳＢ 09 出土土器（123 ～ 129）
写真図版 55　遺物
ＳＢ 10 出土土器（130 ～ 132）
1 区第 2 面柱穴出土土器（133 ～ 136）
写真図版 56　遺物
ＳＤ 03 出土土器（137 ～ 143）
ＳＤ 05 出土土器（144・145）
ＳＤ 07 出土土器（149・150）
写真図版 57　遺物
ＳＤ 09 出土土器（151・152）
ＳＤ 08 出土土器（153 ～ 155）
ＳＸ 01 出土土器（156 ～ 158）
写真図版 58　遺物
ＳＸ 01 出土土器（159 ～ 166）
写真図版 59　遺物
ＳＸ 01 出土土器（167）
1 区第 2 面包含層出土土器（168 ～ 174）
ＳＨ 02 出土石製品（Ｓ 1）
Ｐ 13 出土金属製品（Ｍ４）
ＳＢ 12 出土金属製品（Ｍ５）
写真図版 60　遺物
2 区第 1 面柱穴出土土器（176）
ＳＤ 10 出土土器（177 ～ 179）
2 区第 1 面包含層出土土器（180 ～ 182）
ＳＢ 14 出土土器（184）
2 ・ 4 区第 2 面柱穴出土土器（185 ～ 187）
ＳＤ 13 出土土器（191・192）
2 区第 1 面出土土製品（Ｄ７・Ｄ８）
2 ・ 4 区第 2 面出土土製品（Ｄ９）
写真図版 61　遺物
ＳＤ 13 出土土器（188～190･194･195･199～
201･203･204）
写真図版 62　遺物
ＳＤ 13 出土土器（193･196･197･198･202）
2 ・ 4 区第 2 面包含層出土土器（205･212）
写真図版 63　遺物
2 ・ 4 区第 2 面包含層出土土器（207 ～ 212）
ＳＢ 19 出土土器（213 ～ 215）
2 ・ 4 区第 2 面出土土製品（Ｄ10）
3 区第 1 面出土土製品（Ｄ11･Ｄ12）

第１章　坂本・土井の畑遺跡

第１節　地理的環境

１．遺跡の所在

坂本・土井の畑遺跡は、多可郡多可町中区坂本に所在する。多可町は、兵庫県のほぼ中央内陸部、北播磨地方の最北部に位置し、多可郡内の加美町・中町・八千代町が平成17年11月１日に合併して誕生した町である。合併後、旧各町はそれぞれ加美区・中区・八千代区の地域自治区として設置されている。平成25年７月現在、人口は22,888人である。

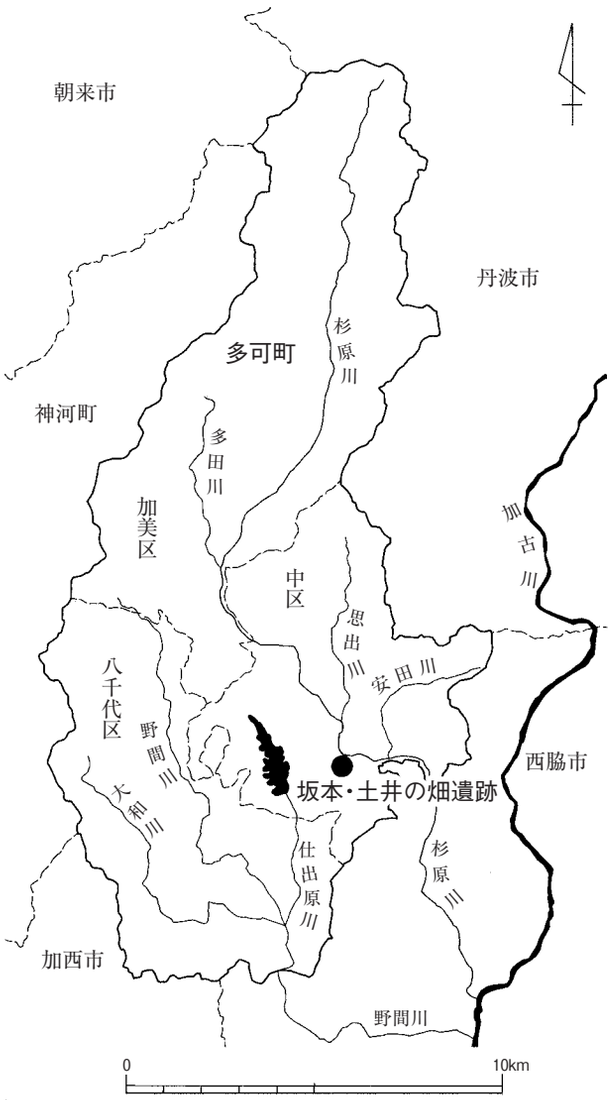
町域は、南北に長く、東西約13km、南北約25mを測り、総面積は185.15㎢に達する。その行政境は、北西端は朝来市、北東側は丹波市、南東側は西脇市、西側は神崎郡神河町・市川町、南西側は加西市と境をなしている（第２図）。

第１図　多可町の位置

多可町の主要な交通路として、西脇市から丹波市青垣町へと抜ける国道427号が中区・加美区を通る。南部には主要県道多可北条線が通り、八千代区、西脇市西部を経て加西市北条へと抜ける。旧中町域には、かつてJR鍛冶屋線が走行しており、「曽我井駅」・「中村町駅」、および終着の「鍛冶屋駅」の３駅があったが、平成２（1990）年に廃線となっている。

多可町は、総じて北に高く、南に低い地形となっている。多可町の周囲は、三国岳（標高855ｍ）・千ヶ峰（標高1005ｍ）・笠形山（標高939ｍ）・篠ヶ峰（標高827ｍ）などの山々が巡り、山地が多可町域の約８割を占める。

多可町内を流れる河川は、加古川水系に属する。このうち杉原川と野間川はこれらの山地間を南へ貫流する。杉原川は三国岳を源として加美区・中区の中央部を流れ、野間川は笠形山を源流として八千代区の中央部を流れ、それぞれ西脇市において加古川と合流し、瀬戸内海へと注いでいる（第２図）。これらの河川は谷底平野を形成し、町内の平野部を構成する。このうち杉原川は、中区において北西から南東へと大きく蛇行し、その流域に平野部が広がっている。この平野部は、杉原川によって３つに区分され、上流より北部平野、中央平野、安田平野と呼称されている。



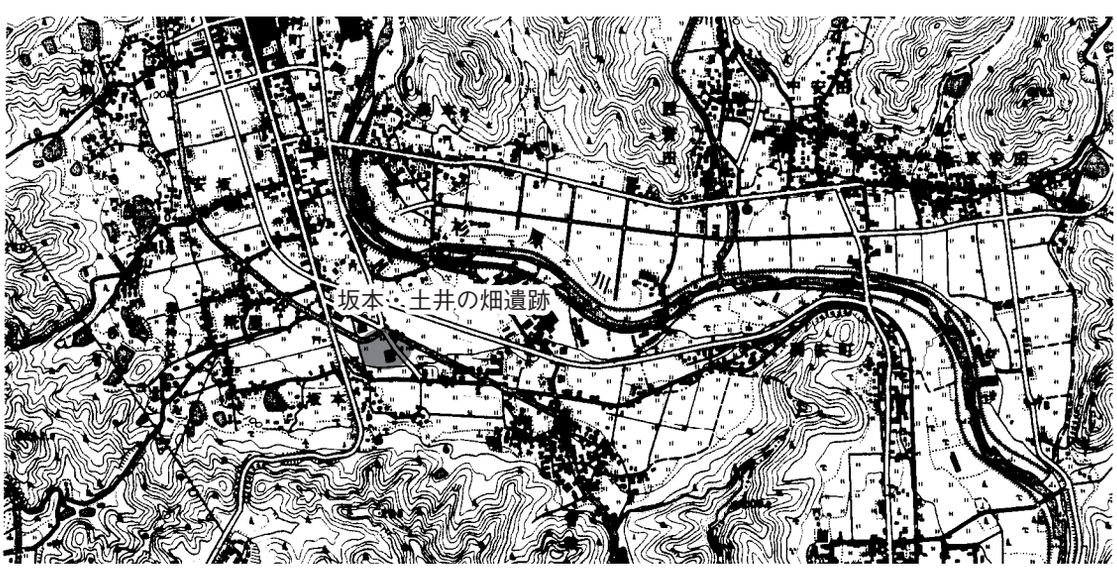
第２図　多可町内水系図

２．遺跡の立地

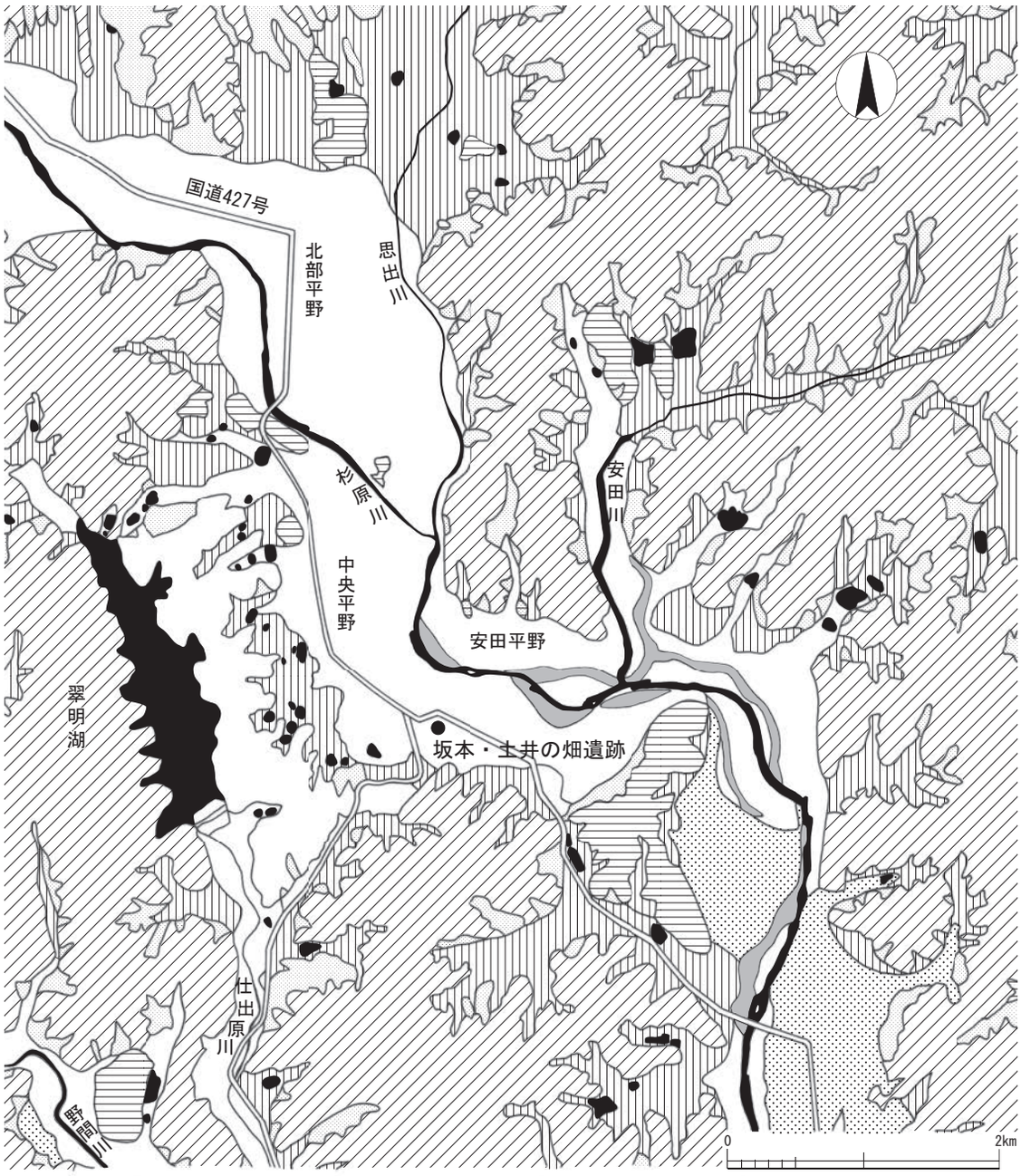
報告する坂本・土井の畑遺跡は、中央平野に立地する。中央平野は、杉原川が大きく南東へ蛇行する右岸域にあたる。平野部の西から南西側にかけては、比較的傾斜の緩い丘陵が続き、南側は山地となり、南東側では緩やかな丘陵が北側に向かって舌状に突き出す。さらに、西から南西側の丘陵及び、南側の山地の小谷地形からは、扇状地が広がって中央平野部へと続く。中央平野部は、ちょうど西から南東側にかけての丘陵・山地と北側で蛇行しながら南流する杉原川に囲まれたようなＬ字状の形に広がっている（第４図）。

遺跡は、そのＬ字形の屈曲するあたりに位置し、そこからは北側に広がる平野越しに妙見山（標高 692.2m）を望むことができる。中央平野南部を中心とする圃場整備前の水田面高を基に、20㎝間隔の等高線を復元し、微地形を図示した（第５図）。

地形は、大局的にみると南の山地側から北側の杉原川に面する平野部に向かって低くなり、平野部も西から東に向かって緩やかに傾斜している。平野部南側は、平地との比高が約１ｍを測る段丘状を呈する部分があり、ちょうど第４図で見た扇状地と谷底平野との境



第３図　坂本・土井の畑遺跡の位置



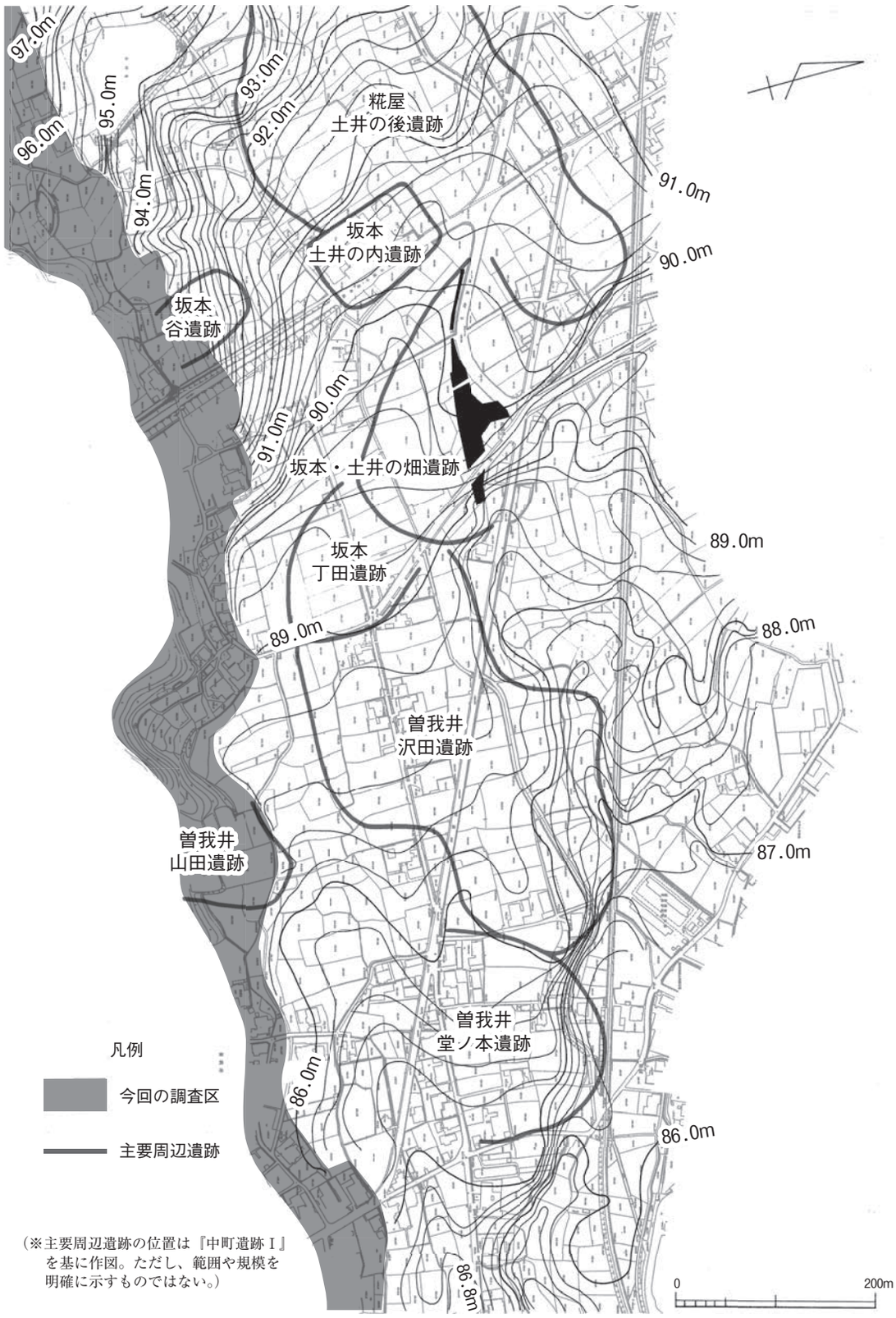
（※『1/50,000土地分類基本調査図（地形分類図）「生野」兵庫県（1986）』をもとに作成。）

山地　谷底平野　旧河道
丘陵地　麓屑面　現河道
低位段丘　扇状地　湖・池・沼

第４図　遺跡周辺の地形分類

界にあたる。

一方、平野部では等高線から北と南に２本の谷筋が入っているのが認められる。そのうち、南谷筋は東側から北西側にかけて曲線を描いて入り、ちょうど谷筋が北西から東へ曲がる部分は、山地の小谷地形から派生する扇状地に接する。この部分は、平野部よりも約１ｍ高くなって小規模な段差がみられる。この谷筋は、かつての杉原川の蛇行によって形成されたとみられ、この小規模な段差は、その攻撃斜面部にあたると考えられる。また、北西部分は、西から東へ傾斜し、杉原川の氾濫原と西から派生する扇



第５図　遺跡周辺の微地形

状地が重なる地形となっている。

次に、北側谷筋については同様に西から北東にかけて曲線を描いて入っている。この谷筋も、かつて杉原川が蛇行しながら流れたことによって形成された地形とみられる。さらに、南谷筋と同様に、谷筋

が北西から東へ曲がる部分は比高約１ｍの段差が形成されており、この部分も杉原川の攻撃斜面と考えられる。そして、これら２本の谷筋に挟まれた部分は、幅約 200 ｍ、延長は直線距離にして約 １㎞の自然堤防状の微高地が形成されており､西から東へ傾斜しながら延びる。これまでに周知されている遺跡は、この微高地上に分布が見られ、今回報告する坂本・土井の畑遺跡もその一つである。そして、坂本・土井の畑遺跡は、これらの蛇行する谷筋が北西から東側へ方向を変える曲折部に位置する。

《参考文献》

中町史編集委員会『中町史』 1991
田中真吾『播磨の地理（自然偏)』神戸新聞総合出版センター　1994
中町教育委員会『曽我井・沢田遺跡、曽我井・山田遺跡』中町文化財報告 11　1996
中町教育委員会『中町の遺跡Ⅱ』中町文化財報告 30　2003

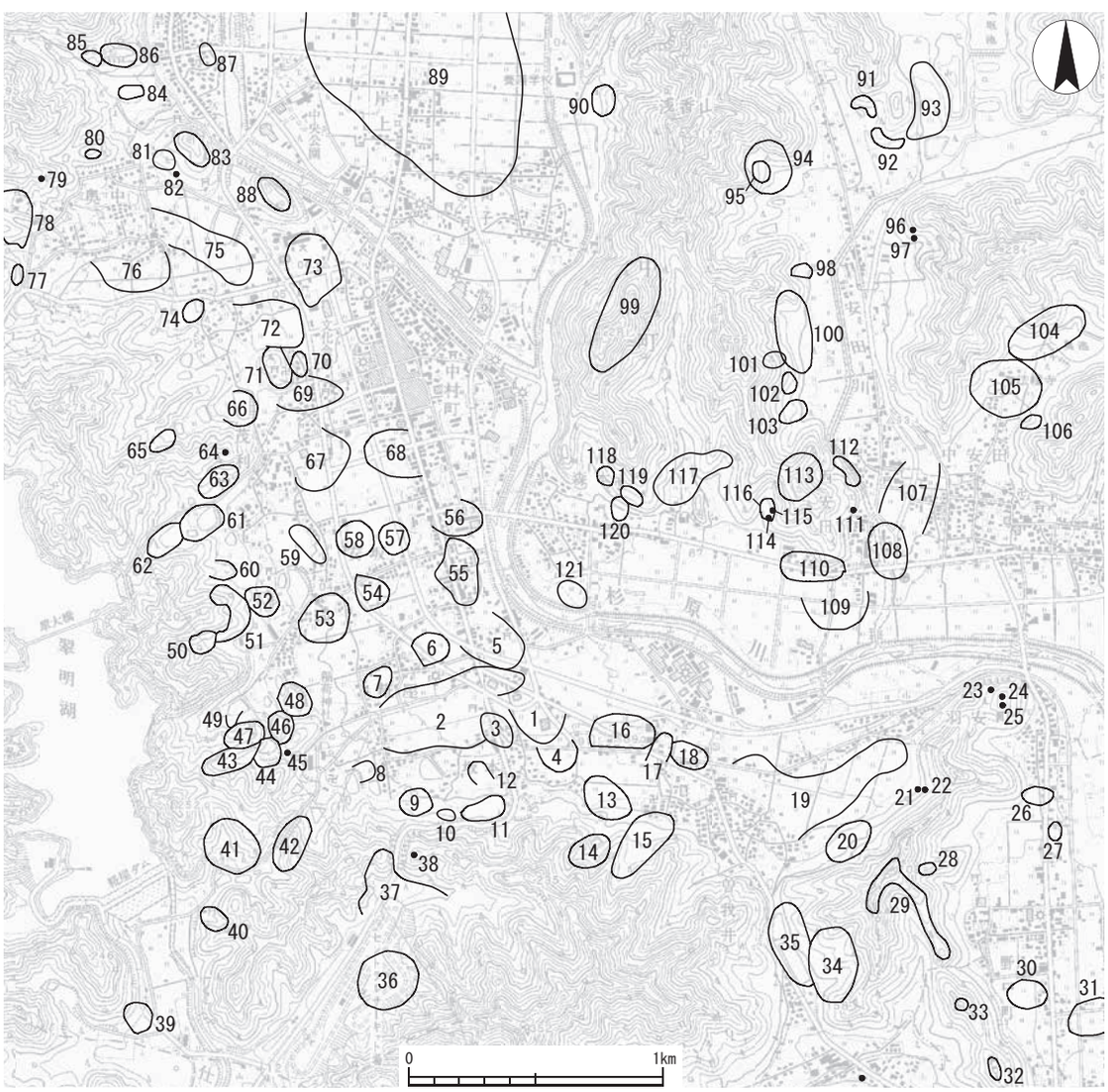
第２節　歴史的環境

今回の調査によって、弥生～鎌倉時代の遺構・遺物が確認できた。ここでは、坂本・土井の畑遺跡に関連する中区の歴史的環境について、上記の時代ごとに概観する（第６図）。

１．弥生時代

前期では、奥中・三内遺跡（72）、糀屋・土井の後遺跡（２）、糀屋・里の垣内遺跡（５）、坂本・土井の畑遺跡（１）などで少量の土器が出土している。このうち、坂本・土井の畑遺跡から当該期の溝が検出されている[(1)]。

中期前半の遺跡は目立って見られないが、中期後半になると遺跡数が増加する。北部平野･中央平野･安田平野の各平野部だけでなく、山頂や谷部に集落を中心とした遺跡が形成されている。多くの集落が次期へと継続しないなかで、北部平野の思い出遺跡（89）、中央平野の安坂・城の堀遺跡（68）は後期以降まで存続し、拠点集落的な性格をもっていたとみられる。そして、中期後半に属する糀屋祇園神社遺跡（47）は、高地性集落の可能性が指摘[(2)]されており注目される。



第６図　主要周辺遺跡

第１表　主要周辺遺跡

番号	遺跡名	遺跡番号	番号	遺跡名	遺跡番号
1	坂本・土井の畑遺跡	260245	62	茂利・畑ノ堂遺跡	260338
2	糀屋・土井の後遺跡	260235	63	茂利１～６号墳	260207 ～ 212
3	坂本・土井の内遺跡	260236	64	中山山頂遺跡	260206
4	坂本・丁田遺跡	260246	65	茂利・皿池西遺跡	260310
5	糀屋・里の垣内遺跡	260319	66	富山地池遺跡	260204
6	糀屋・北縄手遺跡	260226	67	茂利・大将軍遺跡	260214
7	糀屋遺跡	260381	68	安坂・城の堀遺跡	260215
8	糀屋・中池遺跡	260228	69	茂利・宮の西遺跡	260205
9	坂本２号墳	260240	70	丸山遺跡	260326
10	坂本中世墓群	260238	71	丸山１・２号墳	260202・260203
11	坂本１号墳	260239	72	奥中・三内遺跡	260200
12	坂本・谷遺跡	260237	73	軍勢遺跡	260201
13	曽我井・山田遺跡	260247	74	旧天神社遺跡	260367
14	曽我井・スズヶ谷遺跡	260340	75	奥中・桜木遺跡	260199
15	曽我井大谷遺跡	260341	76	奥中・前田遺跡	260198
16	曽我井・沢田遺跡	260248	77	奥中中世墓群	260456
17	曽我井・瓜生遺跡	260320	78	奥中・観音寺遺跡Ａ群	260316
18	曽我井・堂ノ元遺跡	260249	79	奥中２号墳	260314
19	曽我井・野入遺跡	260250	80	ホウガ谷遺跡	260315
20	曽我井１～３号墳	260251 ～ 260253	81	新宮山遺跡	なし
21	曽我井４号墳	260361	82	奥中東中世墓	260455
22	曽我井５号墳	260362	83	新宮山１～３号墳	260452 ～ 260454
23	道の上４号墳	140004	84	茨谷南遺跡	260447
24	道の上２号墳	140003	85	茨谷１～３号墳	260448 ～ 260450
25	道の上１号墳	140002（県史 15）	86	高岸・茨谷遺跡	260327
26	羽安・横長遺跡	140005	87	高岸中世墓	なし
27	野中・前遺跡	140006	88	中村構居、岡山１・２号墳	260197・260401・260402
28	野中・墓所谷遺跡	140483	89	思い出遺跡	260185
29	野中小山遺跡第１～５地点	140485 ～ 140189	90	間子中世墓群	260379
30	野中・ハゼノ木遺跡	140007	91	西安田西窯跡	260352
31	野中・国影遺跡	140008	92	西安田・銭亀遺跡	260351
32	大木城跡	140009	93	西安田・長野遺跡	260285
33	野中・小屋辻遺跡	140484	94	西安田１～５号墳	260283・260397 ～ 260400
34	徳部野１～ 19 号墳	260255 ～ 260272・260363	95	花の木谷遺跡	260353
35	曽我井逆池遺跡	260273	96	西北山２号墳	260345
36	坂本・観音谷遺跡	260244	97	西北山１号墳	260344
37	産坂遺跡	260242	98	西安田西窯跡	260350
38	産坂古墳	260243	99	森本城	260274
39	佛ヶ谷口遺跡	260365	100	西安田・ガマク谷遺跡	260282
40	糀屋新田八幡遺跡	260233	101	西安田１・２号墳	260287・260288
41	糀屋・奥の谷遺跡	260232	102	西安田中世墓群	260349
42	糀屋１～３号墳	260241・260395・260396	103	西安田・宮池遺跡	260348
43	糀屋・法領寺遺跡	260336	104	中安田１～６号墳	260289 ～ 260294
44	糀屋・上池遺跡	260227	105	法幢寺遺跡	260295
45	糀屋稲荷神社遺跡	260231	106	中安田中世墓群	260390
46	糀屋・中池遺跡	260228	107	西安田長野遺跡Ａ地点	260286
47	糀屋・祇園神社遺跡	260230	108	西安田・札ノ辻遺跡	260329
48	糀屋・下池遺跡	260229	109	西安田・岩ヶ鼻遺跡	260280
49	糀屋・柳谷遺跡	260337	110	西安田・山根遺跡	260311
50	安坂・スギ遺跡	260342	111	西安田・イヤガ谷遺跡Ｂ	260346
51	安坂１～ 11 号墳	260218～260223･260321～325	112	西安田・イヤガ谷遺跡Ａ	260347
52	安坂・ケンキョ遺跡	260374	113	西安田城	260281
53	安坂・門田遺跡	260224	114	塚ヶ谷１号墳	260354
54	安坂・前田遺跡	260225	115	塚ヶ谷２号墳	260355
55	森本・村の内遺跡	260343	116	塚ヶ谷遺跡	260377
56	森本・上島原遺跡	260306	117	森本１～６号墳	260275 ～ 260279・260356
57	安坂・きくま遺跡	260333	118	奥中・観音寺遺跡Ｃ群	260318
58	安坂・津ぶら遺跡	260217	119	森本・中世墓群	260357
59	安坂・北山田遺跡	260216	120	城山古墳群	260312
60	安坂・南山遺跡	260375	121	森本近世墓	260305
61	田中大池遺跡	260213			

※古墳や窯跡など複数の遺跡が近隣に存在する場合は、「1 ～ 4 号墳」などを古墳群や窯跡群などと一括りにして示したものもある。

後期末～庄内併行期には、中央平野部を中心に遺跡数は増加傾向にある。しかし、現時点では、当該期から古墳時代へと明確に続くとみられる遺跡は思い出遺跡に限られている。

２．古墳時代

古墳時代になると再び遺跡数は減少する。そのなかで、古墳時代前期に、前時期から連綿と継続している集落遺跡が思い出遺跡である。この遺跡からは、前期の竪穴住居４棟が検出されている。また、思い出遺跡に近い鍛冶屋・下川遺跡においても当該期の竪穴住居３棟が検出されている。中期には、西安田・宮ヶ谷遺跡から竪穴住居１棟が検出されている。また、安坂・城の堀遺跡からは当該期の土器が溝内から多量に出土しており、集落として維持されていたとみられる。後期には遺跡数が減少するが終末期になると増加する。とくに７世紀中葉以降に北部平野では遺跡が増加する一方、中央平野では減少するようである。北部平野では７世紀前葉～中葉にかけて思い出遺跡をはじめとする６遺跡が認められ、総柱掘立柱建物を含む掘立柱建物が検出されている。中央平野では、７世紀前葉に安坂・城の堀遺跡、糀屋・土井の後遺跡をはじめとする４遺跡が確認されているが、中葉には60㎡を超える大型竪穴住居が検出された坂本・丁田遺跡が加わるも、３遺跡に減少する。さらに後葉には、安坂・城の堀遺跡のみとなる。

一方、古墳についてみると、前～中期ついは、中区では前方後円墳や前方後方墳は確認されていないが、計12基の円墳と方墳の存在が推定されている。このうち、発掘調査が実施されたのが、方墳の岡山１号墳・２号墳（88）である。１号墳は竪穴式石室４基、２号墳は箱式石棺１基が検出されており、４世紀後半～末期頃の築造とされている。後期～終末期に属する古墳は280基以上が確認されている。しかし、後期に属すると推定されるものは少なく、終末期には北部平野の集落の増加と対応するように、北部の妙見山南麓を中心として、妙見山麓古墳群と称される多くの古墳が築造されるようになる。中区における当該期の古墳の７割が、この山麓に存在しており、６世紀末～７世紀後葉には墳丘や石室の規模、副葬品などからこの地域をまとめる首長クラスが築造したと考えられる古墳群も含まれる[(3)]。

３．飛鳥・奈良時代

中区において大局的に当該期の遺跡数をみると、７世紀中葉頃から８世紀前半頃までは遺跡の減少がみられるが、分布状況をみると７世紀後葉頃～８世紀前半頃に中央平野で遺跡が減少する一方、北部平野において増加する。遺跡が再び増加するのは８世紀後半～９世紀の初め頃で、この頃には全平野に遺跡の分布がみられる。そのなかでも、円面硯が出土する思い出遺跡などの官衙的様相を示す遺跡は注目される。また、安坂・城の堀遺跡からは、８世紀代の木製祭祀具や墨書土器が多量に出土しており、一般の集落遺跡とは異なる様相を示す重要な遺跡[(4)]である。

さらに中区では、古代に遡ると推定される寺院跡が、平野部の多哥寺遺跡で確認されている。多哥寺遺跡は、四天王寺式伽藍配置を有し、素弁蓮華文軒丸瓦や忍冬文軒丸瓦が出土しており、７世紀中葉～後半に創建されたと考えられている[(5)]。また、天福二（1234）年銘の『地頭代官中原某燈油畠寄進状』にある記載内容から、かつて「多哥寺」と呼称された郡名を冠する寺院が存在していたことが判明しており、多哥寺遺跡がこれに比定されている[(6)]。なお、多哥寺遺跡の北側では８世紀後半の残存状況のよい梵鐘遺構が検出されており、梵鐘生産を復元できる貴重な資料といえる。

当該期の中区に関する文献についてみると、まず８世紀初頭に成立したとされる『播磨国風土記』には、

現在の多可町および西脇市黒田庄町は託賀郡として記され、賀眉里・黒田里・都麻里・法太里の里名がみえる[7]。そして、８世紀中頃の平城京跡出土木簡や正倉院文書には那珂郷の文字が見られる。少なくとも、この頃には「中」区の由来となった那珂郷は成立していたと推定される。同文書・木簡からは、当該期の在地氏族として山直・針間直・宗我部などの存在が知られる[8]。とくに宗我部に関連する墨書土器が、坂本・土井の畑遺跡の東に位置する曽我井・沢田遺跡で実施された平成 19 年の調査おいて出土している。墨書土器は流路内から木製祭祀具とともに多量に出土しており、そのうちの８世紀前半に位置づけられる須恵器杯には「宗我」･「宗我西」と記すものが認められた。このことは現地名の「曽我井」のルーツが８世紀まで遡ることを示すとともに、宗我部の所在を裏付けるものである[9]。

４．平安時代

平安時代に属する遺跡については、前期（９～ 10 世紀前半）及び中期（10 世紀中葉～ 11 世紀）の様相は不明な部分が多い。その中で、今回報告する坂本・土井の畑遺跡が所在する中央平野部についてみると、９世紀～ 10 世紀にわたって遺物が確認できるのは安坂・城の堀遺跡、糀屋・土井の後遺跡である。特に、糀屋・土井の後遺跡は、平安時代中期の遺物の中に灰釉陶器や緑釉陶器が多量に出土しており、後期には青磁や白磁が多く認められ、三面庇の建物跡が検出されていることから在地領主クラスの館として推定れており[10]注目される。この遺跡は、当期の遺構が検出されている坂本・土井の畑遺跡の西側に隣接しており、関連性が極めて高いとみられる。また、坂本・土井の畑遺跡の東に位置する曽我井・沢田遺跡（16）の平成 19 年に実施された調査おいて、大規模な掘立柱建物が検出されている。そして、同調査では流路内から多量の墨書土器が出土しており、そのなかに「西殿」と墨書された平安時代後期の須恵器碗が確認されている。この二者の存在から、当期の曽我井・沢田遺跡の地に安田荘の荘所が存在していた可能性が指摘されている[11]。

一方、北部平野についてみると、多哥寺遺跡からは９世紀代の遺物がみられるものの、後半の遺物はなくなることから、多哥寺は廃絶されたと考えられる。そして、10 世紀以降には思い出遺跡からは、緑釉陶器が出土している他に、10 ～ 11 世紀代の越州窯系青磁あるいは初期高麗青磁の壷の破片が出土している。また, 安田平野では、９世紀に遡る山岳寺院跡である円満寺遺跡、そして円満寺周辺の塔頭に関連すると見られる 10 ～ 11 世紀の遺物が顕著に出土する円満寺東の谷遺跡が注目される。

次に、当期の中区についてみてみる。承平年間（931 ～ 938）に成立した『和名類聚抄』には、多可郡に荒田・賀美・那珂・資母・黒田・蔓田の６郷が記されている[12]。そして、平安時代の後半には、多可郡に大山荘・大幡荘・椙原荘・松井荘・安田荘・黒田荘・比延荘・富田荘・這田荘の９つの荘園が存在していた。今回報告する坂本・土井の畑遺跡は、そのうちの安田荘に含まれる。安田荘には、安田郷・曽我部郷・野間郷・高田郷・中村郷の５つが含まれており、当遺跡はそのうちの曽我部郷に位置する。

『吾妻鏡』の文治二年（1186）には、鎌倉武士である梶原景時が領家若狭局（平政子）から預かったと称して安田荘を押領し、そのことについて後白河法皇が糾弾していることが記される。なお、『平家物語』（延慶本）のなかに源義経を鵯越えまで案内した多賀管六久利が、先祖代々勤めた安田荘下司職を平家の侍大将である越中前司平盛俊に押領されたという説話がみられる。少なくとも、平安時代末期の安田荘は平氏の支配下にあった可能性がある。

５．鎌倉時代

掘立柱建物をはじめ各種の当期の遺構はほとんどの調査地で検出されるが、当期の遺跡の分布状況は散在的傾向にある。当期の遺跡なかでも注目されるのは、牧野・町西遺跡、思い出遺跡がある。牧野・町西遺跡からは、煙管状窯が確認されており、この窯で生産されたのはロクロによって成形される土師器皿で、13 世紀頃の所産と推定される。在地の土器生産を知る好例といえる。また、この遺跡からは羽釜を鋳造したとみられる同時期の鋳造遺構も検出されており、河内鋳物師との関連性が指摘されている[13]。思い出遺跡からは、当期の木棺墓もしくは土坑墓が単独～数基が一定範囲に集まって検出されており、ほぼ同時期に存在した集落内あるいはその近辺で作られたとみられている。それらの墓の一つからは、立烏帽子が極めて良好な状態で出土しており、当期の習俗や被葬者像あるいは社会像を知る上で貴重な資料である。さらに、特記すべきは、坂本・土井の畑遺跡の東側に隣接する曽我井・沢田遺跡である。この遺跡は、兵庫県立考古博物館が平成 19 年に調査し、平安時代後期から鎌倉時代に位置づけられる畠に伴う南北方向の溝が複数検出されている。また、平成 23 年には多可町教育委員会が同遺跡の調査を実施しており、複数の小穴列が検出されており、坂本土井の畑遺跡との関連性が指摘されている[14]。いずれも、坂本・土井の畑遺跡の土地利用の変遷と関連すると考えられ注目される。

次に坂本・土井の畑遺跡が位置した安田荘についてみてみる。建久三（1192）年には、後白河法皇が尊勝寺領・蓮華王院領であった安田荘の預所として、法皇の寵姫高階栄子（丹後局）を補任し、伝領を認めている。前述した若狭局は高階栄子の母であり、このことは栄子が家領を伝領したと考えられ、この預所職は領家職と同義であったとみられる。そして、正応六（1293）年には、当荘は九条家文庫文書目録に九条家領としてみえ、高階栄子のもつ領家職は九条家に伝えられ、以後同家に相伝されたことがわかる。その後、九条家は建武元（1334）年に後醍醐天皇から安田荘五ヶ郷の地頭職が安堵され、建武三（1336）年には、足利尊氏から当荘の領家職を認められている。

なお、承久三（1221）年には、承久の乱における後藤基重の軍忠に対し、六波羅探題は後家の住む安田荘の曽我部・安田・中村の三ヶ郷の公文職を安堵している。その後三ヶ郷の公文職および曽我部郷長枝名の田畠屋敷は、後藤氏によって南北朝期・室町期を通じて相伝されている。

〔註〕

⑴　中町教育委員会『中町の遺跡Ⅱ　付岡山１・２号墳、中村構居』中町文化財報告 30　2003

⑵　前掲（1）

⑶　前掲（1）

⑷　中町教育委員会『安坂・城の堀遺跡Ⅱ』中町文化財報告 23　2002

⑸　前掲（1）

⑹　中町史編集委員会『中町史』1991

⑺　秋本吉郎校注『日本古典文学大系２　風土記』岩波書店　1958

⑻　前掲（6）

⑼　兵庫県教育委員会『曽我井・堂ノ元遺跡、曽我井・野入遺跡、曽我井・沢田遺跡』兵庫県文化財調査報告第 434 冊　2012

⑽　中町教育委員会『糀屋・土井の後遺跡―ウェルマート建設に関わる文化財発掘調査―』中町文化財報告 14　1997

⑾　前掲（9）

⑿　平凡社地方資料センター編「多可郡」『日本歴史地名大系第二九巻Ⅱ　兵庫県の地名』 平凡社　1999

⒀　前掲（1）

⒁　多可町教育委員会『曽我井・沢田遺跡Ⅱ－（国）427 号（曽我井バイパス２期）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』2013

第２章　調査の経緯

第１節　調査の起因

１．はじめに

当地においては、兵庫県北播磨県民局加東土木事務所が、（国）427 号（曽我井バイパス）地域自主戦略事業を進めている。工事は、国道 427 号線坂本交差点を回避するバイパスを建設するものである（第８図）。

当地は、以前から坂本・土井畑遺跡（後に「坂本土井の畑遺跡」と改称）及び曽我井・沢田遺跡として周知されていた。さらに、中町教育委員会（現多可町教育委員会）により、確認調査・試掘調査が数度にわたり行われ、遺構の存在が確認されていた。しかし、現況の改変があったこと等から、遺構の遺存状況等の確認も含めて、兵庫県教育委員会により、改めて調査を行うこととなった。その確認調査は、２次わたり行われている。各確認調査の詳細は、以下のとおりである。

２．第１次確認調査

遺跡調査番号　2011004

調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部

調査第２課　西口圭介

調査期間　平成 23 年 4 月 20 日～ 22 日

調査概要　対象としたのは、国道 427 号線と水路が交差する地点から糀屋交差点の東側手前までである。東端は、平成 19 年度曽我井・沢田遺跡調査地点の西端にあたる地点である。この間、２地区において調査ができない箇所があった。幅 1.5 ｍのトレンを 12 箇所（Ｔ 36 ～Ｔ 47）に設定し、埋蔵文化財の有無についての確認を行った（第７図）。各トレンチの長さは、３ｍ～４ｍである。調査の結果、Ｔ 38 ～Ｔ 40 を除くほぼ全域で遺構もしくは遺物を確認した。

３．第２次確認調査

遺跡調査番号　2011251

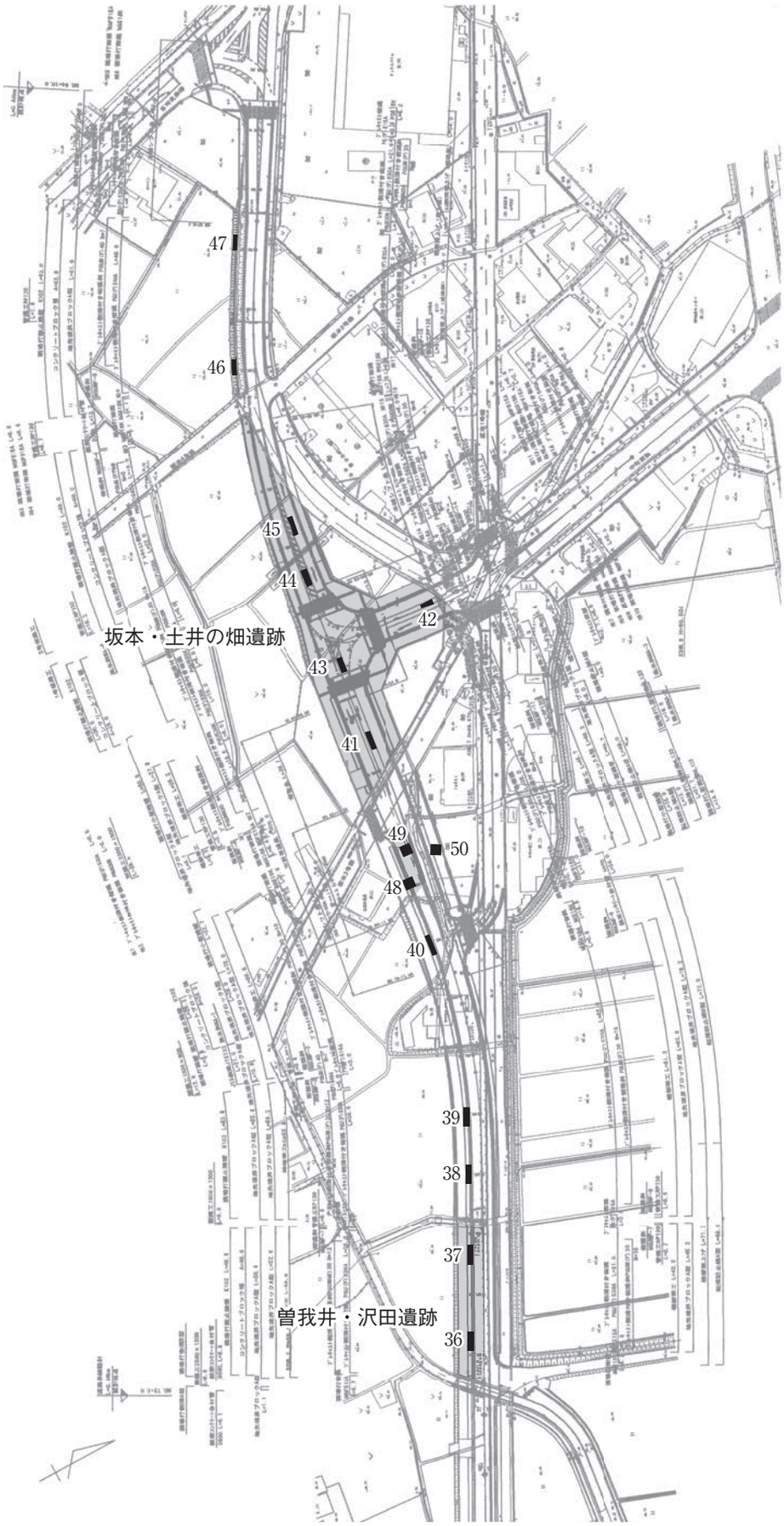
調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当　兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部

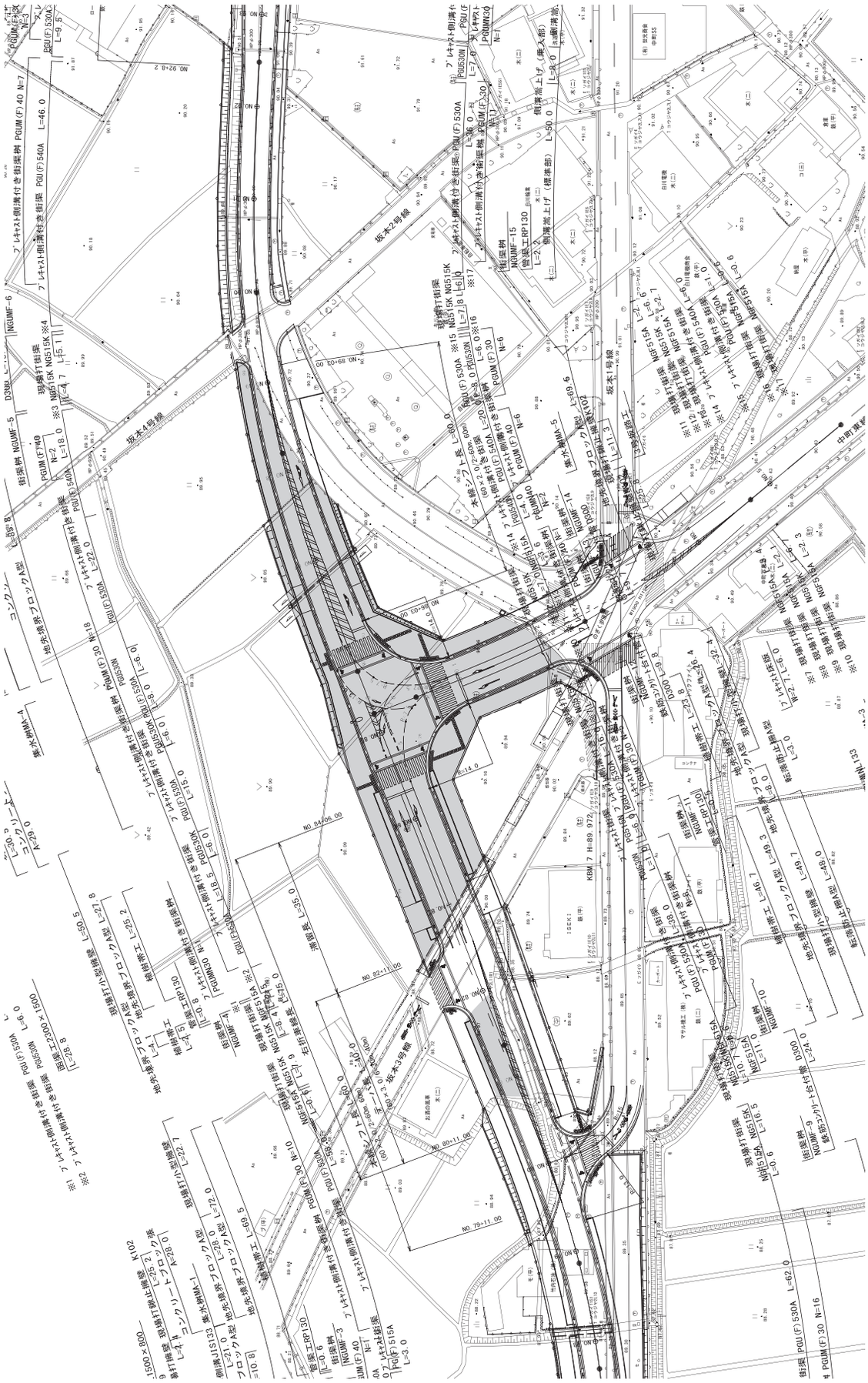
企画調整課　上田健太郎

調査期間　平成 23 年 7 月 25 日

調査概要　対象としたのは、第１次確認調査ができなかった地区である。２ｍ×２ｍのトレンチを３箇所（Ｔ 48 ～Ｔ 50）に設定し、埋蔵文化財の有無についての確認を行った（第７図）。調査の結果、Ｔ 48 とＴ 49 で埋蔵文化財の包蔵が明らかとなった。このため、第１次確認調査で確認された範囲よりさらに東側に埋蔵文化財の包蔵地が拡がることが明らかとなった。



第７図　確認調査位置図



第８図　工事と調査位置

第２節　本発掘調査

１．はじめに

２次に及ぶ確認調査の結果、坂本地区と曽我井地区で本発掘調査が必要となった。しかし、曽我井地区については、本体工事の工期から判断して兵庫県立考古博物館での対応は困難な状況であった。このため、北播磨県民局（加東土木事務所）及び多可町教育委員会との協議を行い、多可町教育委員会により本発掘調査を行うこととなった。

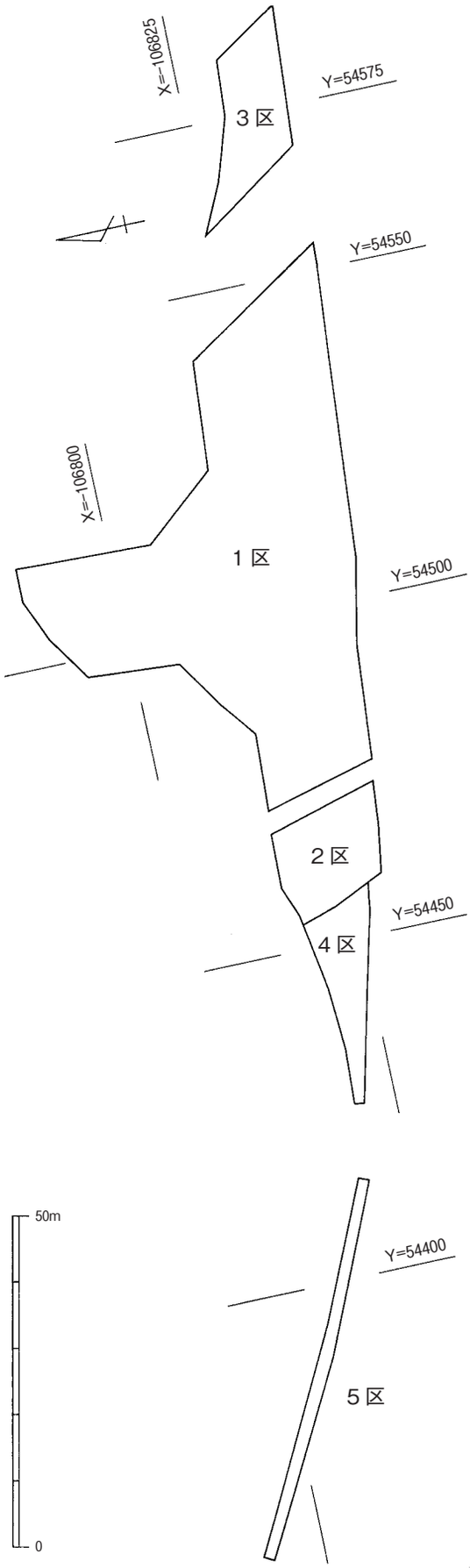
なお、当地は曽我井・沢田遺跡に隣接した地域であることから、「曽我井・沢田遺跡」として本発掘調査が行われ、すでに平成24年度に調査報告書（兵庫県多可町教育委員会『曽我井・沢田遺跡Ⅱ～(国)427号（曽我井バイパス２期）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査～　2013）が刊行されている。

本報告の対象となる調査は２次にわたり行われている（第１次調査・第２次調査)。第１次調査が主となるもので、本報告の大半を占めるものである。第２次調査は、後述するように、第１次調査で調査ができなかった地区の調査である。

２．第１次調査

調査概要　１区から４区を対象とした（第９図)。当初は１区～３区の３地区を対象として調査を開始した。１区と２区との間には町道（坂本３号線）と水路が存在するため、連続して調査を行うことができる状況にはなかった。そこで、上記の３地区に分割して調査を行うことになったものである。

また４区については、２区の西側に連続する地区である。しかし、２区の調査を開始した時点では、稲刈りが完了していないため調査を行える状況にはなかった。その後、３区第２面の調査を行う段階で、調査が可能となったため、３区第２面の調査と併行して、４区として調査を行うこととなったものである。結果として、４区においては層位的に第１面と第２面に分けることができず、３区から連続する第２面として調査を行うこととなった。



第９図　地区割図

なお、調査については、第１面の上層にあたる土壌層上面までは重機により掘削し、以下は人力により調査を進めていった。また、調査終了後には、埋戻しを行った。

調査の成果については、中型ヘリコプターによる空中撮影を行い、そのデータをもとに図化を行った。空中写真撮影は２回に分けて実施し、１回目は10月26日に１区～３区第１面を、２回目は12月２日に１区～４区第２面を、それぞれ対象とした。

また、第１面の調査がほぼ終了した10月30日と、第２面の調査がほぼ終了した12月３日に、それぞれ一般市民を対象とした現地説明会を開催した（第10図）。１回目は約40名、２回目は約30名の参加が得られた。

第10図　現地説明会

調査体制　本発掘調査の体制等は以下の通りである。

遺跡調査番号　2011253

調査期間　　平成23年８月22日～12月22日

調査面積　　2623㎡(1区：1997㎡　２区：221㎡　３区：237㎡　４区：168㎡)

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当　　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第１課　山田清朝・垣内拓郎

現場事務員　藤田由美

現場補助員　西本寿子

３．第２次調査

調査概要　５区を対象とした（第９図）。遺構が検出される面まで重機により掘り下げ、以下は人力により遺構の検出に努めた。なお、調査成果については、手実測により行った。

調査体制　本発掘調査の体制等は以下の通りである。

遺跡調査番号　2011183

調査期間　　平成23年11月21日～11月25日

調査面積　　141㎡

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当　　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

企画調整課　平田博幸・上田健太郎

第３節　整理作業

１．はじめに

整理作業は、平成 24 年度と平成 25 年度の２箇年にわたり、平成 24 年度以降は（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部（兵庫県立考古博物館内）で行われた。各年度の調査概要は以下のとおりである。

２．平成 24 年度

整理概要　土器の接合・実測を行った。合わせて、遺構図の整図・トレース原図の作成を行った。

整理体制　整理保存課　篠宮　正・深江英憲

調　査　課　山田清朝・垣内拓郎

嘱　託　員　栗山美奈・八木和子・森本貴子・榎真菜美

３．平成 25 年度

整理概要　遺構図・土器実測図のトレース、編集作業を行い、刊行に至った。また、出土石材の同定をパレオ・ラボに、耕作痕内埋土の花粉分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その成果は第４章に掲載している。

整理体制　整理保存課　深江英憲・長濱誠司

調　査　課　山田清朝・垣内拓郎

嘱　託　員　増田麻子・古谷章子・柏木明子

第３章　調査の成果

第１節　概要

１．概要

調査対象地は、１～５区の５地区からなる。調査は、当初、最も面積の大きく凸形をした１区、そして１区の西側に水路を挟んで位置する２区、１区の東側に市道を挟んで位置する３区を対象とした。調査開始後、２区西側隣接地の調査が可能となった。そこで４区として追加し、２区と連続して調査を実施した。また、４区の西側で里道を挟んだ位置に、国道 427 号に沿った細長い調査区の５区を追加した。

第 11 図　調査位置図

各地区とも、遺物を包含する層の直上まで重機により掘削し、以下を人力によって調査を実施した。調査面の詳細は次項で触れるが、１～３区については第１面と第２面に渡って調査を実施し、４区については隣接する２区第２面の調査と併行して実施した。また、５区についても第２面のみの調査を実施した。調査手順については、２区第１面→１区第１面→３区第１面→１区第２面→２・４区第２面→３区第２面→５区第２面の順に着手した。ただし、各面の調査については、結果的に全調査区で併行して実施している。

個別の調査成果については、地区単位で遺構検出面ごとにまとめて報告し、第５・６章において５地区を総括して報告する。本報告における遺構番号については、遺構種ごとに１区第１面・第２面→２区第１面→２・４区第２面→３区第１面・第２面→第５区第２面の順に付した。また、出土遺物の報告番号についても同様である。

２．基本層序と遺構の検出

⑴　基本層序

坂本・土井の畑遺跡の基本層序は、上から盛土層、現代耕作土層、土壌層Ⅰ、土壌層Ⅱ、土壌層Ⅲ、土壌層Ⅳ、黒ボク土層、基盤層からなる（第 12 図～第 14 図）。

現地表は、１区東半より以東は盛土層上面が、１区西半以西は現代耕作土層上面となっている。盛土層は、１区の東半から３区にわたる部分のみ現代耕作土上部に堆積し、現代耕作土層は１区西半から２・４・５区に広がって堆積する。現地表面の標高は、５区西半が最も高く 90.30 m、それより東側は４区で 90.20 m、１区西半で 90.00 m、１区の中央部は盛土が厚く堆積して 90.30 m、１区東半で 89.90 m、１区北側は 90.00 m、３区で 89.50m mを測る。現地形は概ね平坦であるが、東に向かってやや傾斜する。

盛土層は駐車場利用のために現代に造成されたもので、現地表面部分には１区東半から３区にわたって砕石が盛られていた。その下部は、基本的に礫を含む客土と現代耕作土層や土壌層Ⅰのブロックが混ざって構成されている。３区については、旧地形が１区から３区にかけて約１mの落差をもつものであるため、大幅に盛土造成されている。層厚は１区東半で 20㎝～ 50㎝、３区で 1.1 mを測る。

現代耕作土層は基本的に１区西半から２・４・５区に広がる。当層は盛土層の直下の攪乱が激しく、１区北側では比較的残るが、１区東半以東は部分的にのみ残る。層厚は、１区西半で 15 ～ 20㎝、２区で 15 ～ 25㎝、４区から５区では 30 ～ 45㎝を測る。

土壌層Ⅰは、現代耕作土層の直下で調査区全体に認められる。幾度となく攪乱を受けたかつての耕作土と推測され、本来なら複数層に分かれるとみられるが厳密に分層できないため、ここでは単一層としてまとめて認識した。現代耕作土との境目付近には酸化鉄が帯状に沈着する。また上部は、現代耕作土などによってやや攪乱を受ける箇所もみられる。なお、４区から５区の南半にかけては下層に存在する旧河道の影響により一段低くなっている。層厚は 10㎝～ 20㎝を測る。

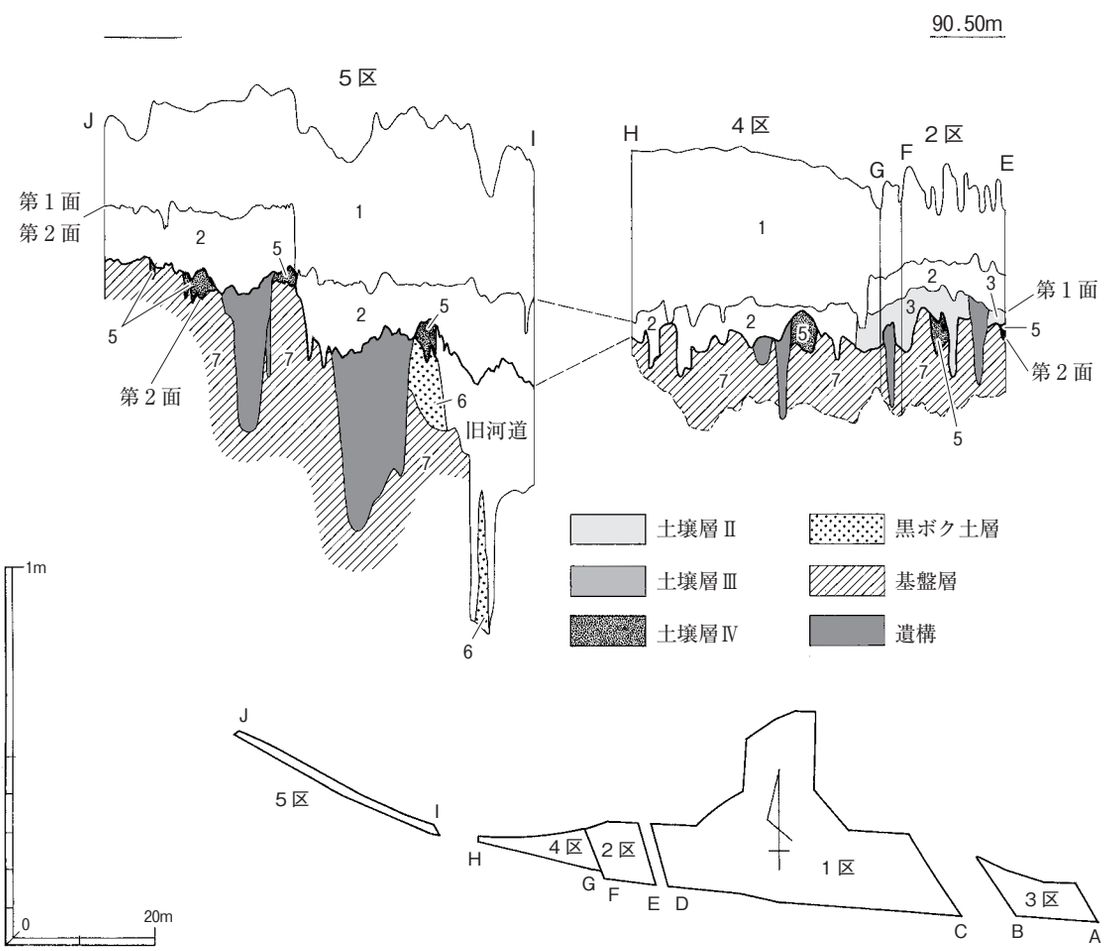
土壌層Ⅱは、基本的に１区から２区にかけて広がるが、土壌層Ⅰによって上部が攪乱されているため残りが悪く、薄い層となっている。ただし、基盤層が北側へ傾斜する１区北側では厚く堆積する。また、３区については、西半では土壌層Ⅰによる攪乱のため確認できなかったが、基盤層が東へ傾斜する東半にわずかに残っていた。４区・５区では土壌層Ⅰによって攪乱されているため確認できなかった。土壌層Ⅱの下面には遺構が形成されており、これを除去した面を第１面とした。また下部には、土壌層Ⅲのブロックも見られた。土壌層Ⅱの層厚は約５㎝を測る。

土壌層Ⅲは、基盤層が傾斜して形成される落ち込み部分に堆積する層である。１区の東端部と北側部分及び３区の東端部に認められた。特に、１区北側部分の基盤層の落ち込み部分には厚く堆積していた。層の厚さは１区東端部で 10cm～ 30cm、北側で 10cm～ 55cm、３区で 10cmを測る。

土壌層Ⅳは、基本的に直下の黒ボク土層がさらに土壌化した層である。黒ボク土層は後世の攪乱により削られているため、厚さが一定でない。そのため、土壌層Ⅳは、黒ボク土層が削られた後にその厚い部分はその上部が、薄い部分はその下部が土壌化したものである。概ね１区で堆積の広がりが認められるが、２区・４区・５区では、土壌層Ⅰによる攪乱のために部分的に確認できるのみであった。一方、３区では認められなかった。なお、この層を除去した面を第２面とした。層厚は概ね 10cmである。

黒ボク土層は、基盤層直上に堆積する層で、基盤層の起伏ある部分に認められた。特に１区中央の基盤層が落ち込む箇所に厚く堆積していた。基盤層の凹部を埋めるように堆積したものと考えられる。また、２区～５区においても部分的に認められた。遺構は、この上面において検出されている。なお、層厚については、１ 区では下部の層界を未確認のため不明であるが、確認できる最も厚い場所で 40cm以上を測る。また、３区・５区では 20cm～ 25cmを測る。

基盤層は、黄褐色砂質シルトを主とする層で、その上部はやや暗色化して、黒ボク土層下部とやや漸移的になる部分も認められた。また、部分的に径 10cmの亜円礫が露出する箇所もあり、おそらく、基盤層はかつての杉原川の活動によってもたらされた河成堆積物とみられる。この基盤層は、大きく西から

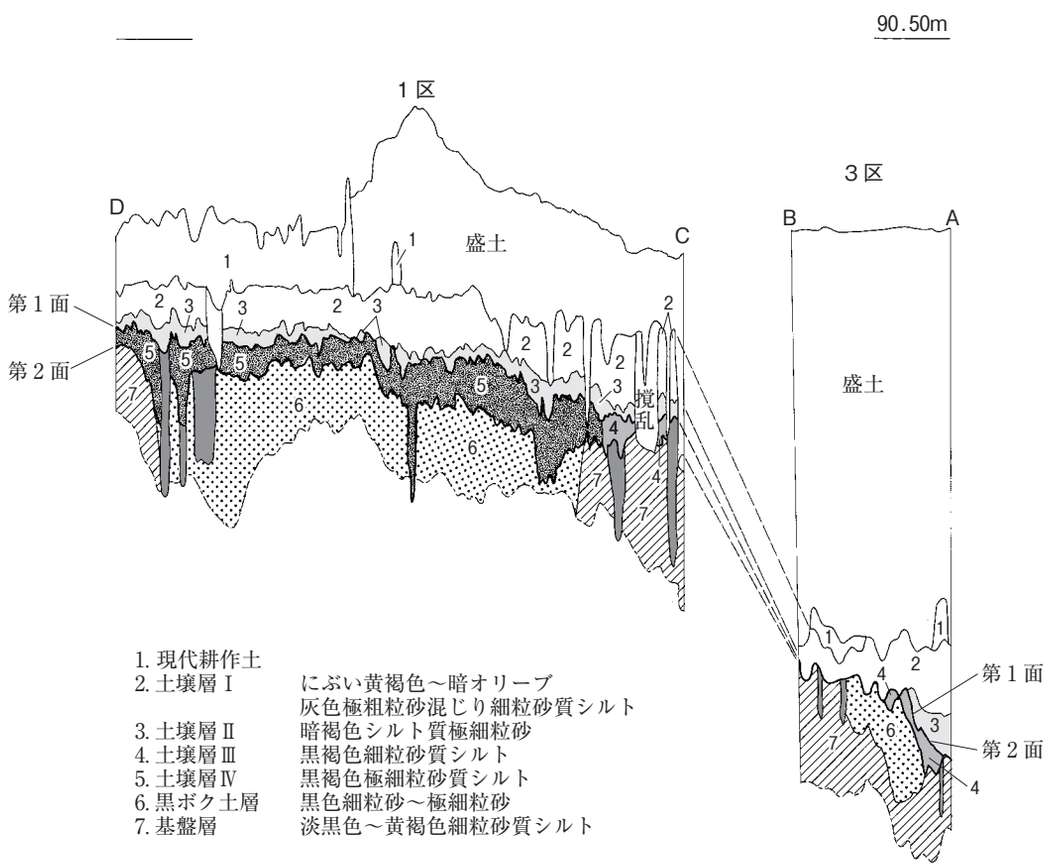


第 12 図　基本土層（Ｅ－Ｊ）

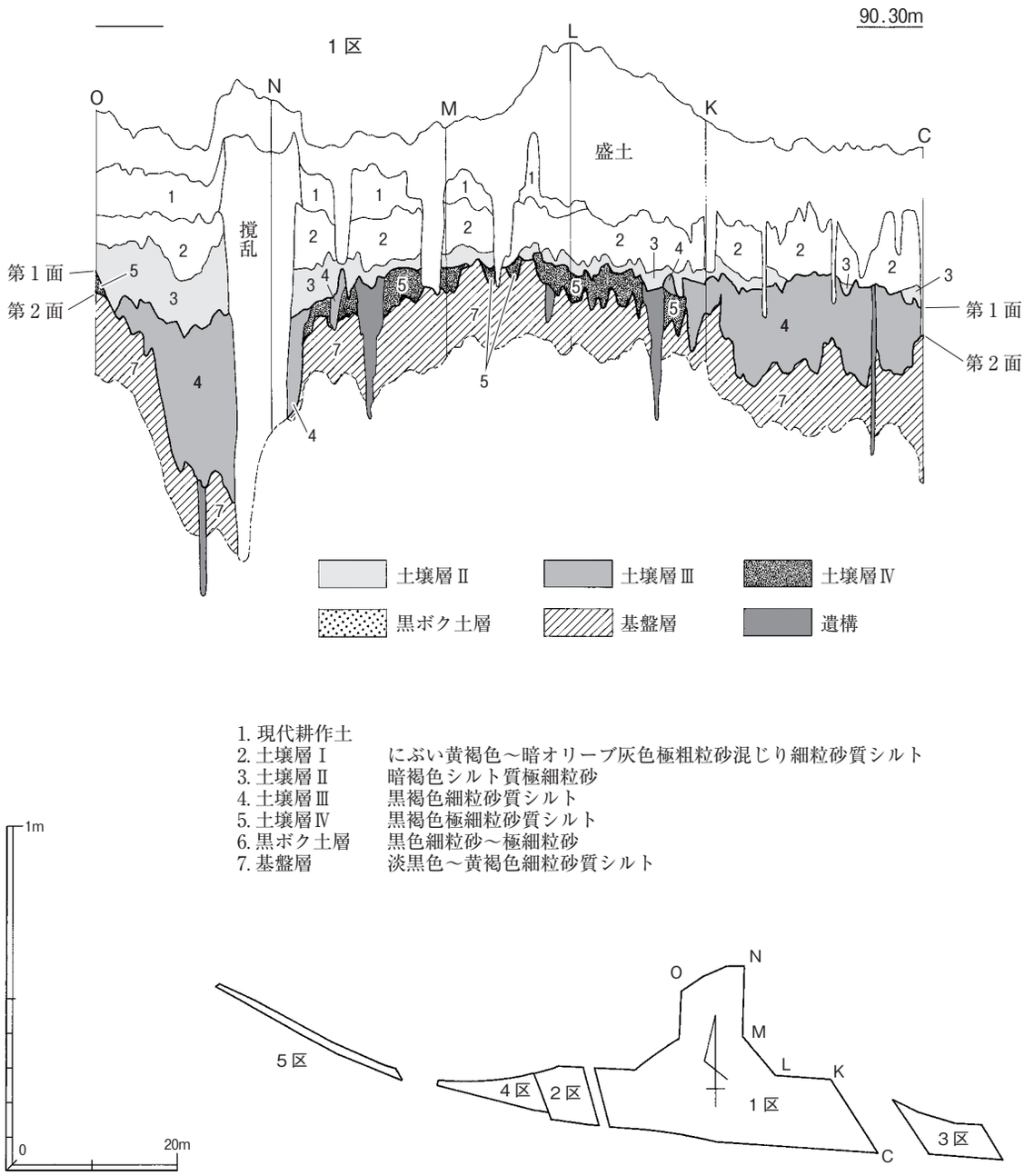
東へ傾斜し、ところどころに起伏が認められる。遺構は、この起伏が直上の黒ボク土層と共に後世の削平を受けた部分の上面で検出されている。調査区北側へも傾斜して落ち込み部分を形成しているが、厚い黒ボク土層の堆積が見られないことから、後世に何らかの作用で削られたものと考えられる。一方、１区と３区では約１ｍの落差があり、この地形が現代耕作土層にまで影響している。この地形は、第１章１節の微地形分析でみた等高線の北側谷筋に対応しており、杉原川の蛇行によって形成された地形と考えられる。検出された遺構が平安時代後期以降に限られることから、完新世段丘Ⅱ面に相当する可能性が考えられる。

⑵　遺構の検出

遺構の検出は第１面と第２面に分けて行った。第１面は、土壌層Ⅱを除去した面、すなわち土壌層Ⅲ・土壌層Ⅳ上面で検出した。そして第２面は、土壌層Ⅲ・Ⅳ層を除去した面、すなわち黒ボク土層および基盤層上面において検出した。１～３区では第１面および第２面の調査を実施したが、４・５区については、第１面がないため第２面のみ調査を実施した。



第13図　基本土層（A－D）


90.30m
１区
O
N
M
L
K
C
盛土
撹乱
第１面
第２面
第１面
第２面
土壌層Ⅱ
土壌層Ⅲ
土壌層Ⅳ
黒ボク土層
基盤層
遺構
1. 現代耕作土
2. 土壌層Ⅰ　にぶい黄褐色～暗オリーブ灰色極粗粒砂混じり細粒砂質シルト
3. 土壌層Ⅱ　暗褐色シルト質極細粒砂
4. 土壌層Ⅲ　黒褐色細粒砂質シルト
5. 土壌層Ⅳ　黒褐色極細粒砂質シルト
6. 黒ボク土層　黒色細粒砂～極細粒砂
7. 基盤層　淡黒色～黄褐色細粒砂質シルト
1m
0
20m
５区
４区
２区
１区
３区

第 14 図　基本土層（C － O）

第２節　１区の調査

１．概要

⑴　概要

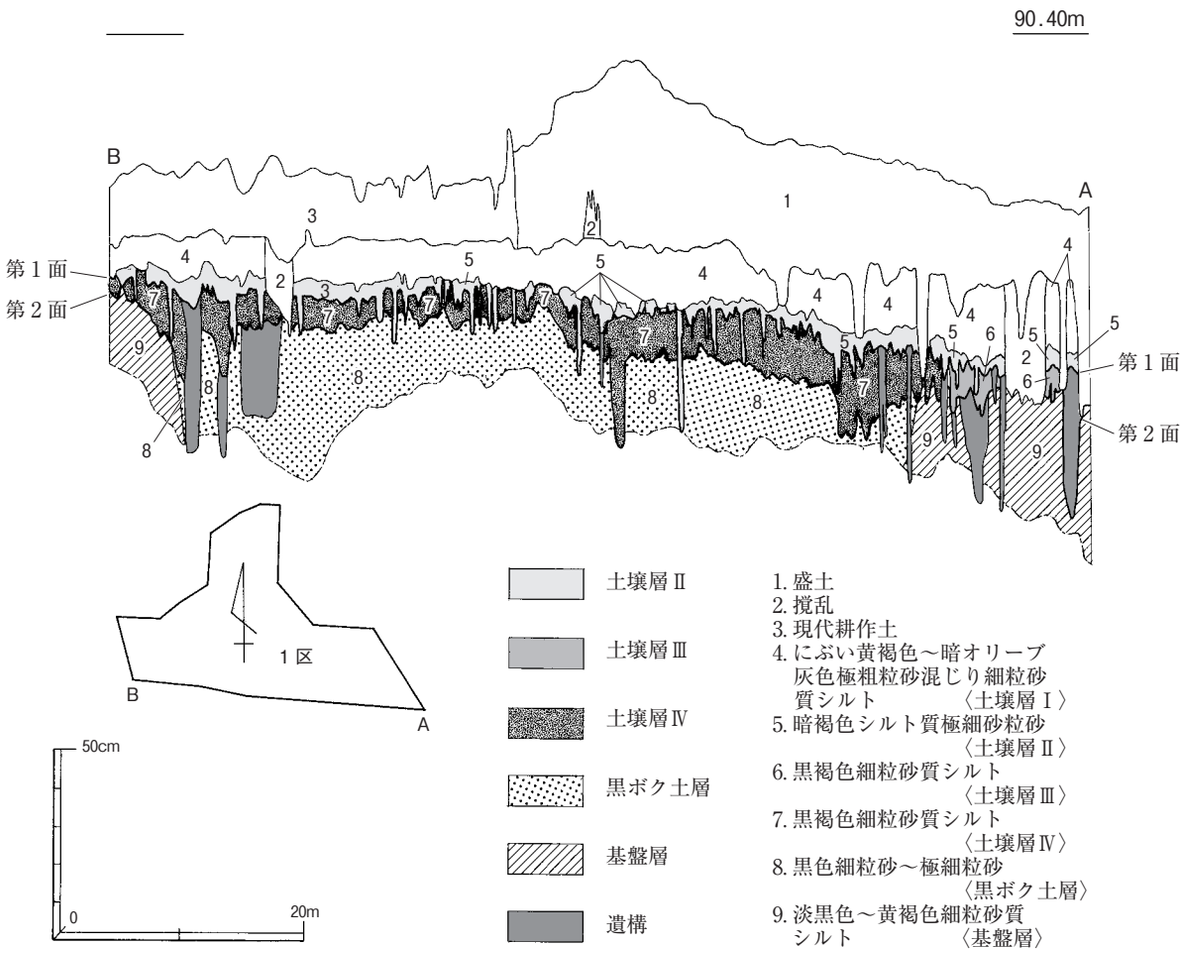
１区は、第１面と第２面に分けて遺構を検出した。第１面では、2000を超える小穴で構成される耕作痕列群や、鋤溝群・小穴・溝・土坑を検出している。耕作痕列群は１区第１面でのみ顕著に確認できた特徴的な遺構である。第２面は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・溝・土坑・墓を検出している。

⑵　基本層序

上から、盛土層・現代耕作土層・土壌層Ⅰ・土壌層Ⅱ・土壌層Ⅲ・土壌層Ⅳ・黒ボク土層・基盤層からなる（第15図）。

現地表面は、１区東半部は盛土層、西半部では現代耕作土層の各上面である。現地表は、高く盛土される中央部は標高90.30ｍだが、東側の盛土層上面及び西側の現代耕作土層上面は標高89.90ｍである。

盛土層は平成時代に入って駐車場利用のために造成されたものである。この造成時に、１区東半部の大半の現代耕作土層は削り取られており、盛土層下部には、現代耕作土層や土壌層Ⅰのブロックが混じる部分も見られる。ただし１区の北側では、現代耕作土層の上部に砕石が盛られた部分も認められる。



第15図　１区基本土層

現代耕作土層は、１区中央部に畦を地境として西側に広がる。調査時まで畑地として利用されていた。

土壌層Ⅰは、１区全体に広がるかつての耕作土層である。経年と共に幾度となく攪乱を受けており、明確に細分するのは困難である。なお、上部には酸化鉄が沈着していた。

土壌層Ⅱは、１区全体に薄く広がる層である。この層も耕作土層であったとみられ、この下面で検出された遺構が１区に特徴的な耕作痕列群である。

土壌層Ⅲは、基盤層が傾斜してできる落ち込み地形に堆積する層で、主に１区の東端部、北端部に認められた。この層は、土壌層Ⅱ・土壌層Ⅲとは異なり、地表として機能している段階の堆積土が土壌化したものとみられる。当層には遺物が多く含まれていた。

土壌層Ⅳは、下層の黒ボク土層の上部がさらに土壌化したもので、そのほとんどは土壌層Ⅲが堆積する１区の東端部や北端部を除いた部分に広がっている。母材が土壌層Ⅲとは異なるものの、土壌化の進行が土壌層Ⅲの形成と同時だった段階があった可能性が考えられる。

黒ボク土層は、起伏する基盤層の落ち込み部分に厚く堆積する。特に１区では中央部分が顕著に認められる。この層は、上部ほど暗色化が顕著になるが下部ほど薄くなり、基盤層との境が漸移的な部分も見られる。したがって、黒ボク土層の堆積が薄かった部分は、土壌層Ⅳを除去すると当層の下部のみが面的に検出されている。

基盤層は、河成堆積物に由来する黄褐色細粒砂質シルトからなり、１区では起伏があり中央部分が落ち込む。また局所的に礫層の露出部分も見られる。また、この層の上部は、黒ボク土層の影響により淡黒褐色になる部分も見られる。

⑶　検出面

遺構は、第１面と第２面にわけて検出している。

第１面は、土壌層Ⅱ（５層）を除去した面、すなわち土壌層Ⅲ（６層）・土壌層Ⅳ（７層）の上面で遺構を検出した（第16図）。第１面の遺構は主に土壌層Ⅱの下面遺構であるが、土壌層Ⅲ上面遺構もわずかであるが認められた。なお、１区北端側では、調査時点で土壌層ⅢとⅣの認識が困難であったため、結果的に土壌層Ⅳも含めて除去した部分がある。第１面は、極めて緩やかに東へ傾斜し、標高は西側で89.70ｍ、東側で89.50ｍである。

第２面は、土壌層Ⅲ及び土壌層Ⅳを除去した面、すなわち黒ボク土層（８層）上面および基盤層（９層）上面で検出した。検出遺構は、土壌層Ⅲ下面遺構、土壌層Ⅳ上面遺構、土壌層Ⅳ下面遺構、黒ボク土・基盤層の上面遺構が認められた。第２面は、西側は概ね平坦で標高89.60mであるが、北端と東端部に向かって傾斜しており、北端部は標高88.90ｍ、東端部は標高89.30ｍである。

第16図　１区　調査風景

第 17 図　１区第１面

２．第１面

遺構としては、耕作痕列群・耕作痕列・柱穴・土坑・溝を検出している（第 17 図）。

⑴　耕作痕列群

第１面では、2000 を超える小穴が検出された。この小穴は、検出面では長軸約 20cm～ 40cmの不整形な楕円形ないし小判型に近い平面形を呈す。検出面からの深さは５cm～ 10cm程度で、中には、深さが２cm程度のものも存在する。断面形はＵ字形を基本とする。これらの小穴は、土壌層Ⅱの形成とともに形成されており、埋土には下層のブロックが混じるものも認められた。

いくつかの小穴は、長軸が同一方向を指向し、ほぼ等間隔に並んで列をなす。さらに、小穴列のいくつかは同一方向かつほぼ等間隔に並んで「群」をなすものもあり、複数の小穴列群が抽出されている。

第 18 図　耕作痕列群１・５の位置

小穴は、土壌層Ⅱの下面で検出された遺構であるが、土の規則的な耕耘作業に伴う痕跡、すなわち耕作痕と考えられる。したがって、小穴列を耕作痕列、小穴列群を耕作痕列群と呼称する。

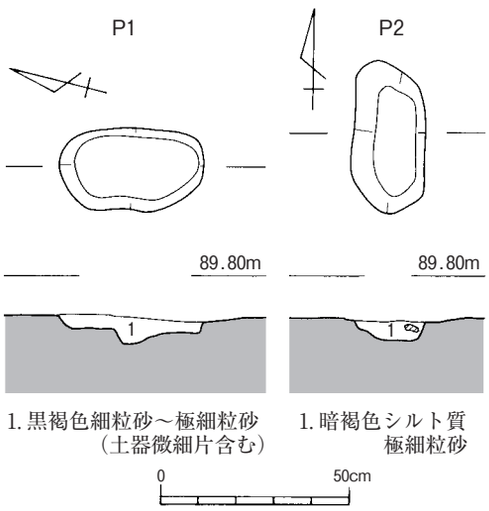
今回の調査で確認・抽出できた耕作痕列群は、14 群（耕作痕列群１～14）である。また、それ以外に群として抽出できなかった耕作痕列が３列（耕作痕列 15・16・17）認められた。

なお、耕作痕列群における耕作痕列の呼称は、西から順に１列目、２列目とする。

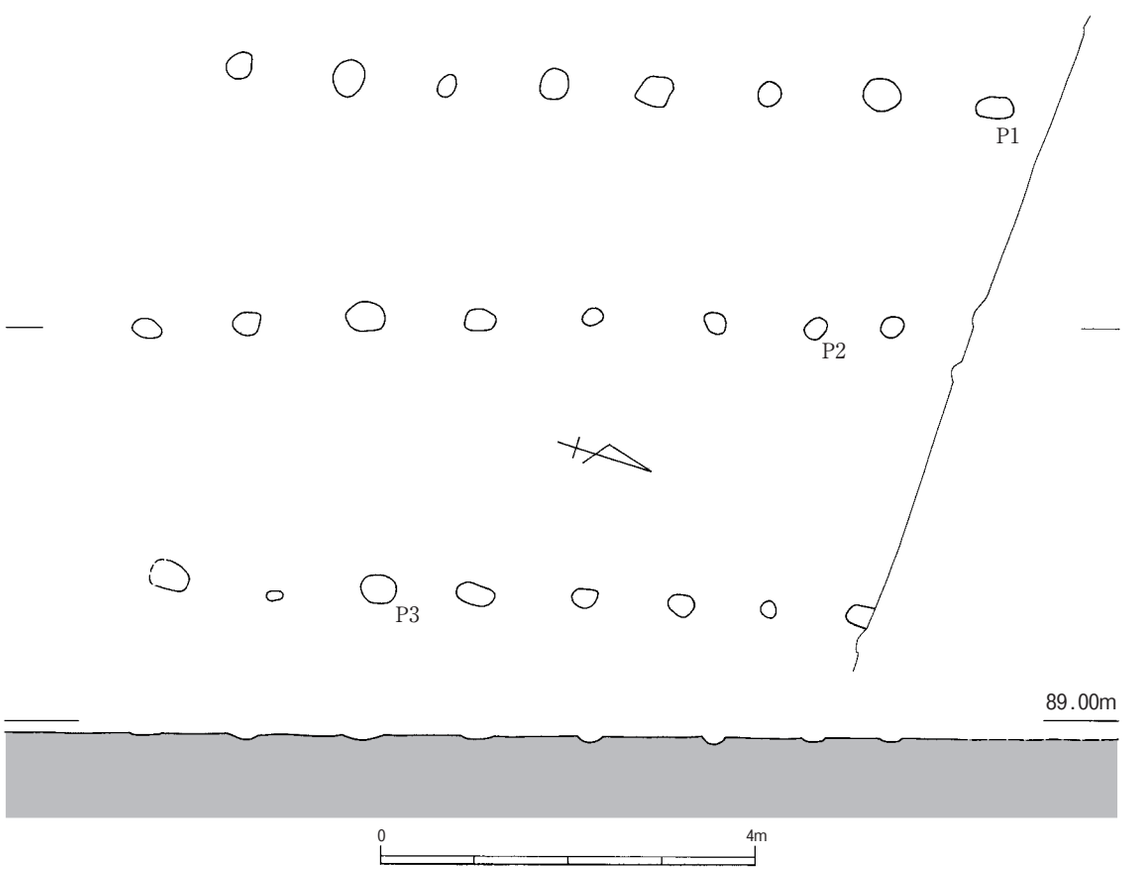
耕作痕列群１

検出状況　調査区西部で検出した（第 18 図）。耕作痕列群２の北側に位置する。耕作痕列群１の北側は調査区外へ広がるとみられるが、南側は調査区中央部で途切れる。耕作痕列群１の南側は、耕作痕列群２の北側部分より、わずかに東へずれている。そして、耕作痕列群１の３列目は、耕作痕列群３の１列目の北半分と部分的に重なる部分があり、耕作痕列群３が切っている。

規　　模　３列の耕作痕列を確認した（第 20 図）。延長は１列目が 8.50 m、２列目が 8.20 m、３列目が 7.55 m である。列相互の間隔は、１列目と２列目が 2.30 m～2.70 m、２列目と３列目が 2.70 m～3.00 mを測る。また、



第 19 図　耕作痕列群１　P1・P2



第 20 図　耕作痕列群１

１～３列目までの列群として広がる最大幅は 5.80 ｍである。面積は、49.3㎡である。耕作痕列群の軸方向はＮ 15°～ 17° Ｗを示す。

耕作痕　各列における耕作痕同士の間隔は 1.00 ｍ～ 1.20 ｍを測る。耕作痕の平面形は、直径 20㎝～ 40㎝の不整形な円形を呈するものが多いが、Ｐ１・Ｐ２のように長軸 40㎝、短軸 20㎝の楕円形ないし小判型を呈するものものある（第 19 図）。断面形は、Ｕ字形をなし、深さは、検出面から２㎝～６㎝である。埋土は土壌層Ⅱが堆積している。

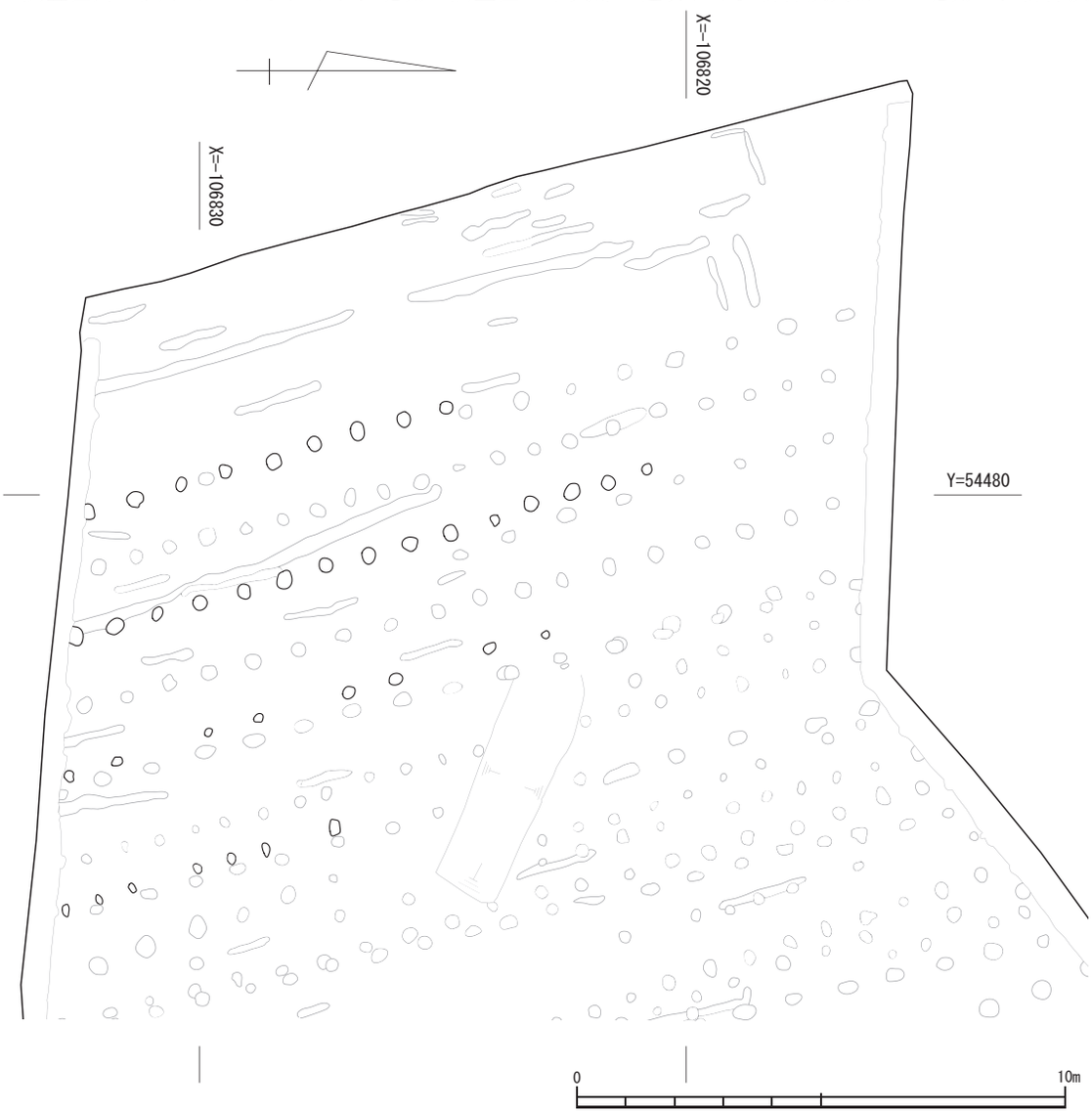
出土遺物　土師器が出土している（図版１）。

土師器は、Ｐ２から皿（１）の口縁部から底部にかけての破片が出土している。底部はユビオサエの痕跡が認められ、手捏ねによって成形されている。

時　　期　出土遺物から、13 世紀と考えられる。

耕作痕列群２

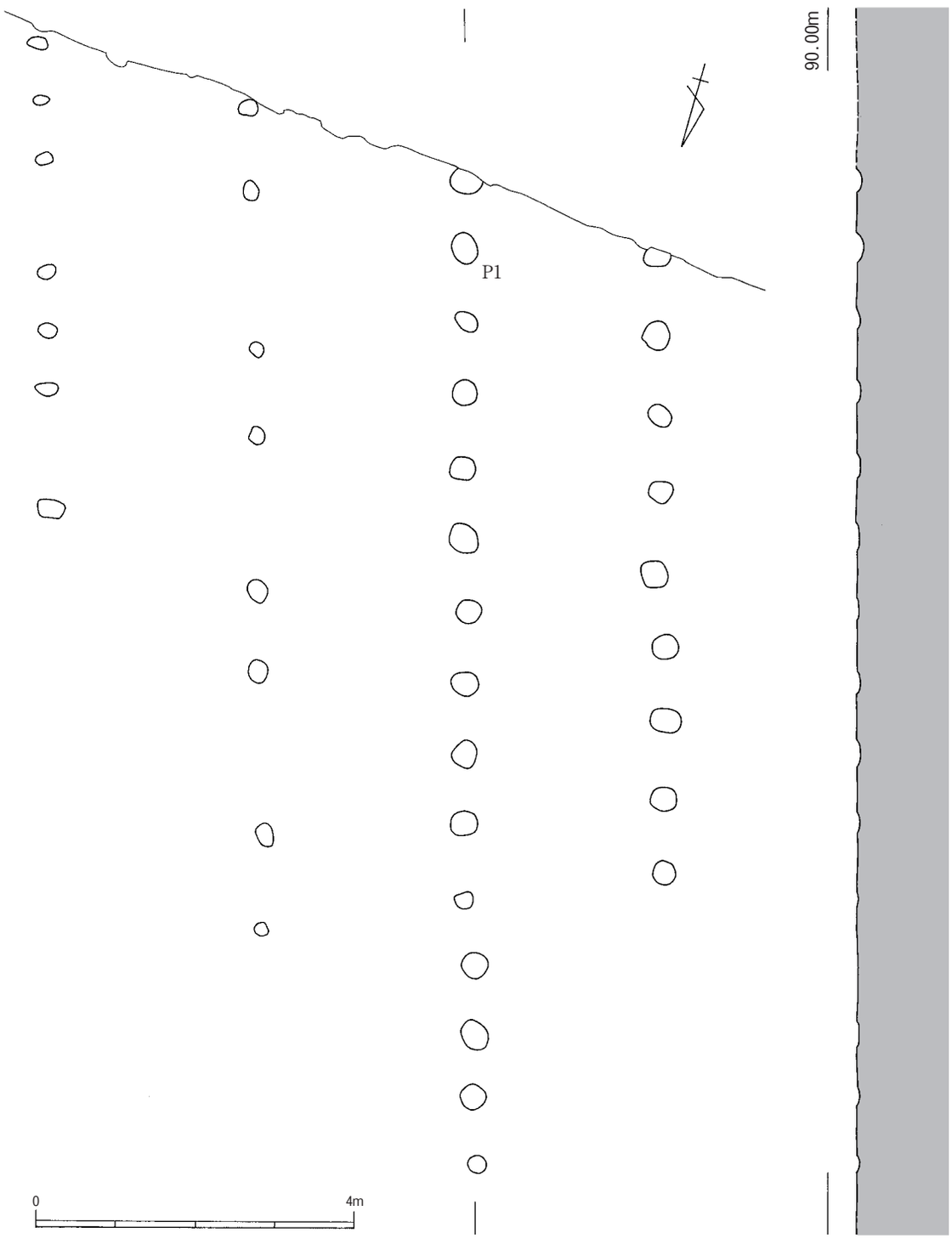
検出状況　調査区西端部で検出した（第 21 図）。耕作痕列群１の南側に位置する。耕作痕列群２の北側は調査区外へ広がるとみられるが、北側は調査区の中央部で途切れる。耕作痕列群２の北側は、耕作痕



第 21 図　耕作痕列群２の位置

列群01の南側部分より、わずかに西へずれている。なお、調査時点では１～３列目までを認識していたが、整理段階で４列目の存在が明らかとなっている。

規　　模　４列の耕作痕列を確認した（第22図）。延長は１列目が8.00 m、２列目が12.60 m、３列目が10.40 m、４列目が6.00 mである。列同士の間隔は、１列目と２列目が2.30 m～2.40 m、２列目と３列目が2.70 m、３列目と４列目が2.60mを測る。１～４列目までの列群として広がる最大幅は8.00 mである。面積は、100.8㎡そして、耕作痕列群の軸方向はN 15° 30″～17° Wを示す。



第22図　耕作痕列群２

耕作痕　各列における耕作痕同士の間隔は 80cm～ 1.00 ｍを測る。ただし、３列目・４列目については耕作痕が部分的に検出できなかった部分があり、それについては除外している。

耕作痕の平面形は、直径 20cm～ 30cmの不整形な円形を呈するものが多い。断面形は、Ｕ字形をなし、深さは検出面から１cm～ 6.5cmである。埋土は、土壌層Ⅱが堆積している。

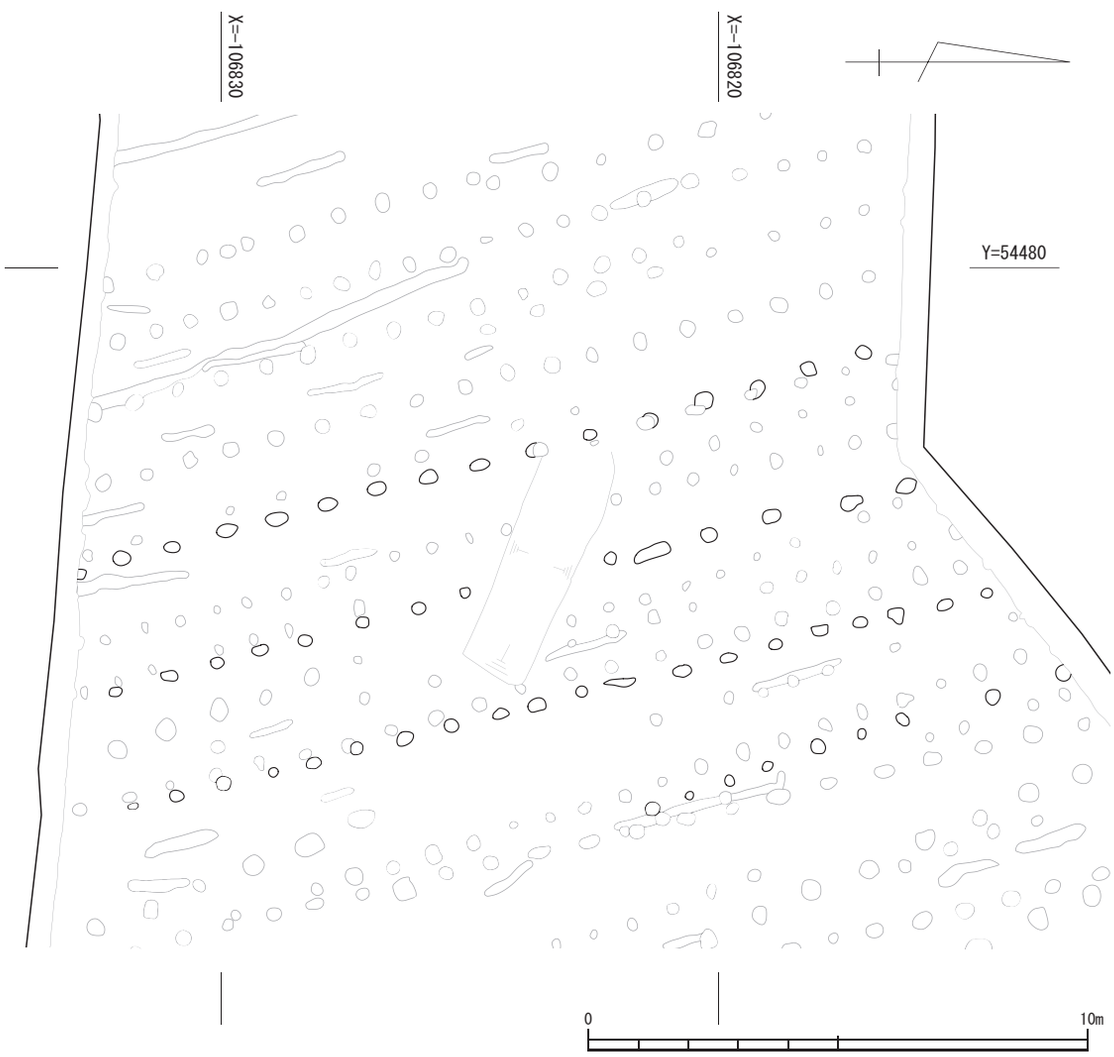
出土遺物　Ｐ１から鍋（13）の口縁部の破片が出土している（図版１）。口縁端部は外側へわずかにつまみ出されているのが特徴である。

時　　期　出土遺物から、12 世紀後半～末と考えられる。

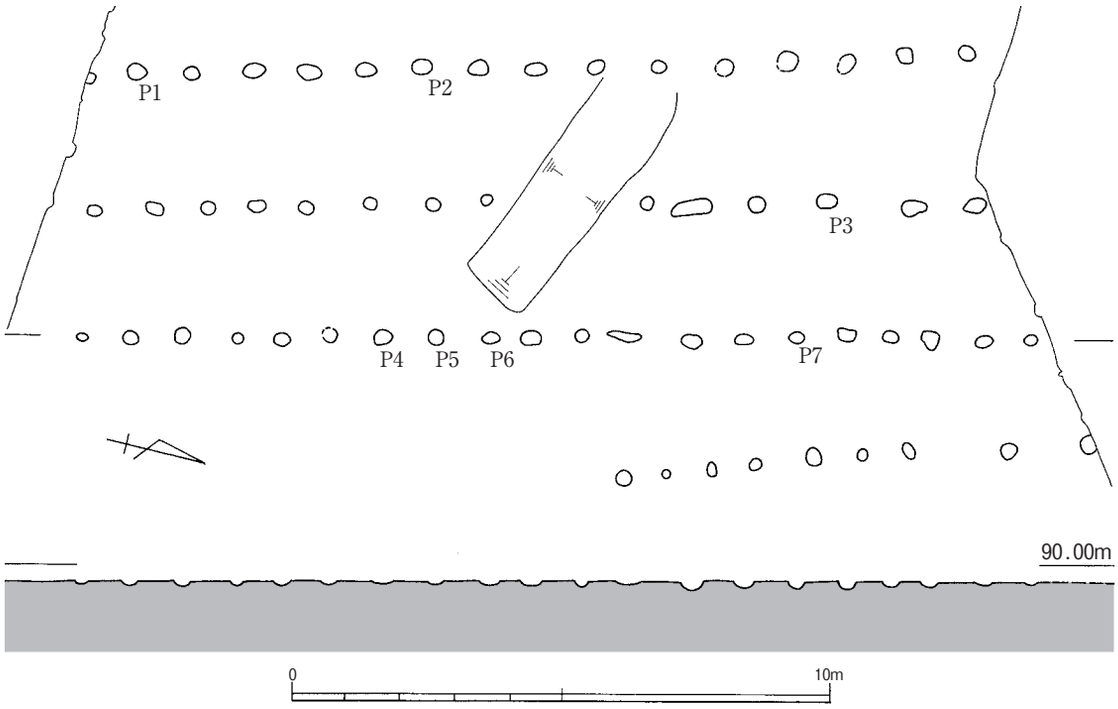
耕作痕列群３

検出状況　調査区西側で検出した（第 23 図）。耕作痕列群１の東側に位置し、耕作痕列群４、同６、同９と重なる。耕作痕列群１とは、１列目が切られる関係にあり、耕作痕列群６とは３列目が切る関係にある。そして、耕作痕列群３は、北側および南側の調査区外へ広がるとみられる。ただし、４列目の南側は調査区中程で途切れる。なお、調査時点では１～３列目までを認識していたが、整理段階で４列目が抽出できた。

規　　模　４列の耕作痕列を確認した（第 24 図）。延長は１列目が 16.50 ｍ、２列目が 16.70 ｍ、３列目



第 23 図　耕作痕列群３の位置



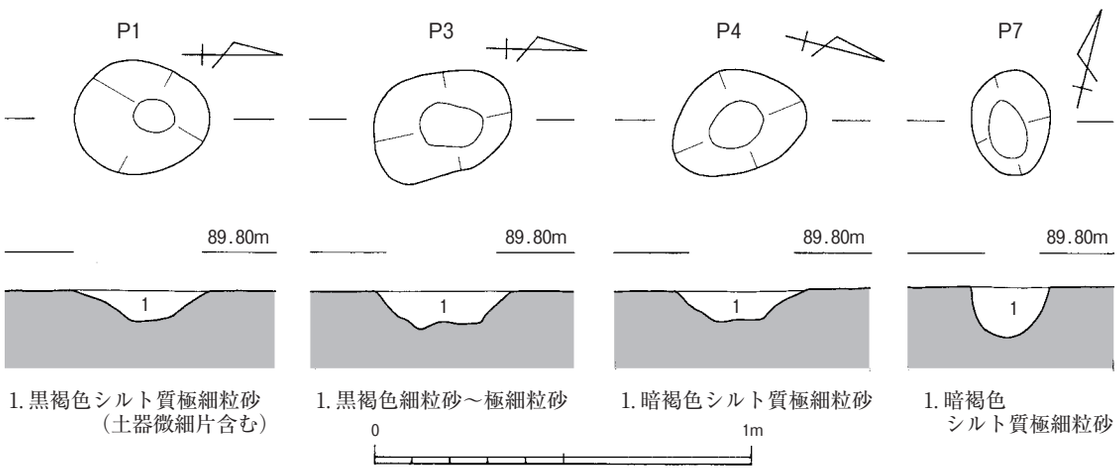
第 24 図　耕作痕列群 3

が 18.00 m、４列目が 9.00 mである。列同士の間隔は、１列目と２列目が 2.50m ～ 2.80 m、２列目と３列目が 2.35m ～ 2.50 m、３列目と４列目が、2.00 m ～ 2.60 mを測る。また、１～４列目までの列群として広がる最大幅は 7.60 mである。面積は、136.8㎡である。そして、耕作痕列群の軸方向はN 14° ～ 17° Wを示す。

耕作痕　各列における耕作痕相互の間隔は 1.00m ～ 1.20 mを測る。耕作痕の平面形は、基本的に直径 15㎝ ～ 30㎝の不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多い。しかし、２列目には長軸 40㎝の長楕円形の耕作痕がみられ、３列目には長軸 33㎝の細長の耕作痕が見られる。このような耕作痕の存在は、後述する鋤溝群とも関連すると考えられる。

断面形は逆台形もしくはU字形で、深さは、浅いもので検出面から３㎝～５㎝、深いもので８㎝～ 15㎝である（第 25 図）。なお、Ｐ３・Ｐ４については、埋土の土壌分析を実施している（第４章第１節）。

出土遺物　土師器・須恵器が出土している（図版１）。



第 25 図　耕作痕列群 3　P1・P3・P4・P7

土師器は、Ｐ５からは小皿（11）の破片が、Ｐ６・７からは皿（２・８）の口縁部を中心とする破片が出土している。これらは、底部にユビオサエ痕があり、手捏ね成形によっている。

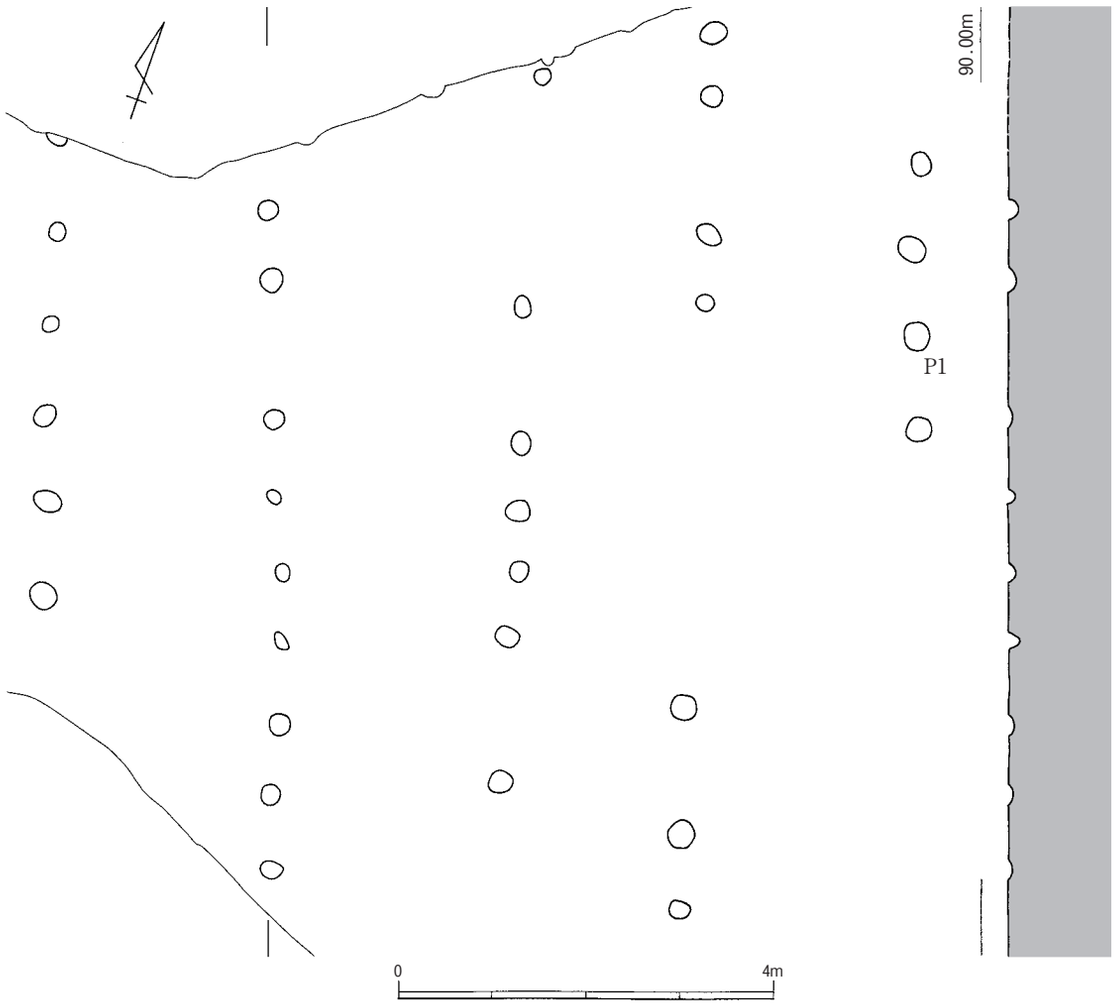
須恵器は、Ｐ２から椀（14）の体部～底部の破片出土している。

時　　期　出土遺物から、13 世紀と考えられる。

耕作痕列群４

検出状況　調査区北西側中央寄りで検出した（第 26 図）。耕作痕列群３・同５・同６の北側と重なる。耕作痕列群４の４列目南端部の耕作痕は耕作痕列群６の５列目とわずかに切り合う。また、耕作痕列群

第 26 図　耕作痕列群４・７の位置



第 27 図　耕作痕列群 4

４の５列目は、耕作痕列群８の一列目と重なる。なお、耕作痕列群４北側は調査区外へ伸びるとみられるが、南側は調査区の中程で途切れている。

規　　模　５列の耕作痕列を確認した（第 27 図）。延長は１列目が 5.00 m、２列目が 7.20 m、３列目が 7.70 m、４列目が 9.50 m、５列目は 3.20 mである。列同士の間隔は、1 列目と２列目が 2.35 m～ 2.40 m、2 列目と３列目が 2.50 m～ 2.80 m、３列目と４列目が 1.80 m～ 1.95 m、４列目と５列目が 2.25 m～ 2.40 mを測る。１列目、２列目は南側ではやや広がる傾向にあるが、３列目は２列目に対して南側で狭まる傾向にある。ただ、３列目－４列目間が他よりも間隔が短く、これを境として別群になる可能性もある。１～５列目までの列群として広がる最大幅は 9.50 mである。面積は、85.5㎡である。そして、耕作痕列群の軸方向はＮ 16°～ 18°Ｗを示す。

耕 作 痕　各列における耕作痕同士の間隔は約 80㎝～ 90㎝を測る。ただし、３列目・４列目については耕作痕が部分的に検出できなかった部分があり、それについては除外する。

耕作痕の平面形は、直径 20㎝～ 40㎝の不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多い。断面形は、Ｕ字形で、深さは、検出面から４㎝～ 12㎝である。埋土は土壌層Ⅱが堆積していた。

出土遺物　土師器の皿（６）がＰ１から出土している（図版１）。６は、口縁端部が外側へわずかにつまみ出されているのが特徴である。底部にユビオサエ痕があり、手捏ね成形によっている。

時　　期　出土遺物から、13 世紀と考えられる。

耕作痕列群５

検出状況　調査区北西側中央寄りで検出した（第 18 図）。耕作痕列群３・同４・同６と重なる。耕作痕列群５の北側は調査区外へ伸びるとみられるが、南側は調査区の南側で途切れる。南側がさらに調査区外へ伸びるのかについては不明である。

規　　模　２列の耕作痕列を確認した（第 28 図）。延長は１列目が 15.60 ｍ、２列目が 16.80 ｍである。列同士の間隔は 2.80m ～ 3.35 ｍを測り、南側にむかって広がる傾向にある。１～２列目までの列群として広がる最大幅は 3.40 ｍである。

面積は 57.10㎡である。耕作痕列群の軸方向はＮ 16°～ 18° 30″Ｗを示す。

耕 作 痕　各列における耕作痕同士の間隔は約 80cm～ 90cmを測る。ただし、３列目・４列目については耕作痕が部分的に検出できなかった部分があり、この箇所については除外する。

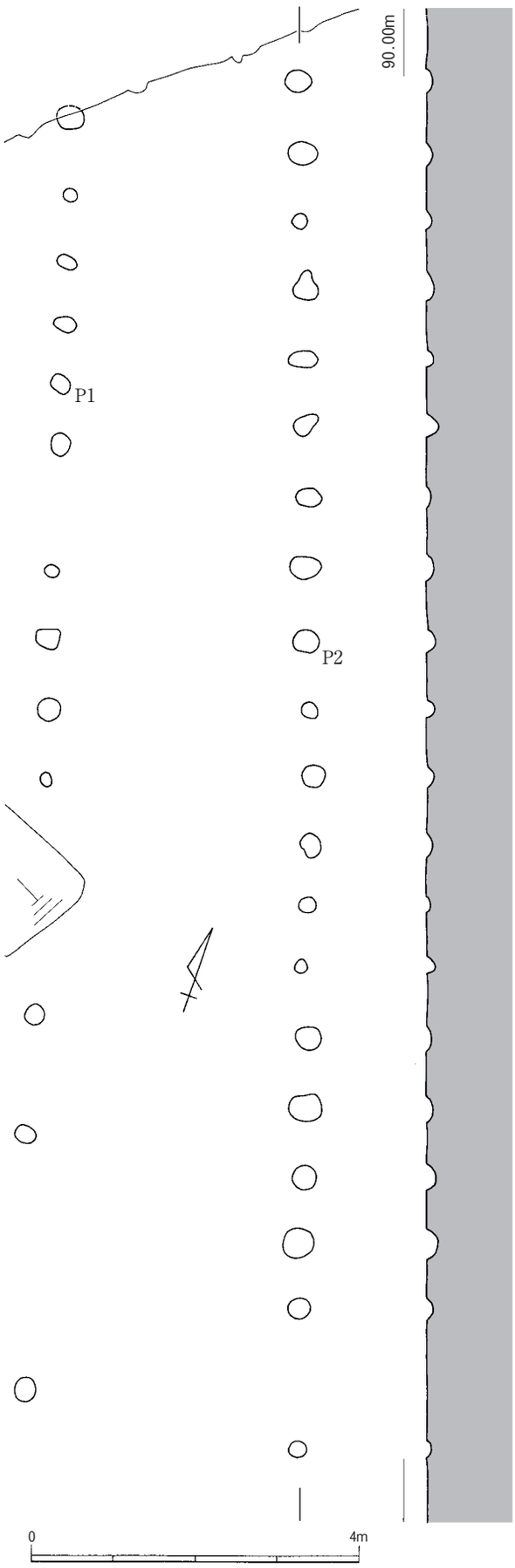
耕作痕の平面形は、直径約 20cm～ 40cmの不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多い。断面形はＵ字形をなし、深さは検出面から２cm ～ 11cmである。埋土は土壌層Ⅱが堆積していた。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版１）。

土師器は、Ｐ２から、皿（９）が出土している。口縁部から底部にかけての小片である。手捏ねによって成形されている。

須恵器は、Ｐ１から椀（15）の体部～底部の破片出土している。底部は外面には回転糸切り痕が残存する。底部内面見込は落ち込まず、平坦である。

時　　期　出土遺物から､13 世紀と考えられる。

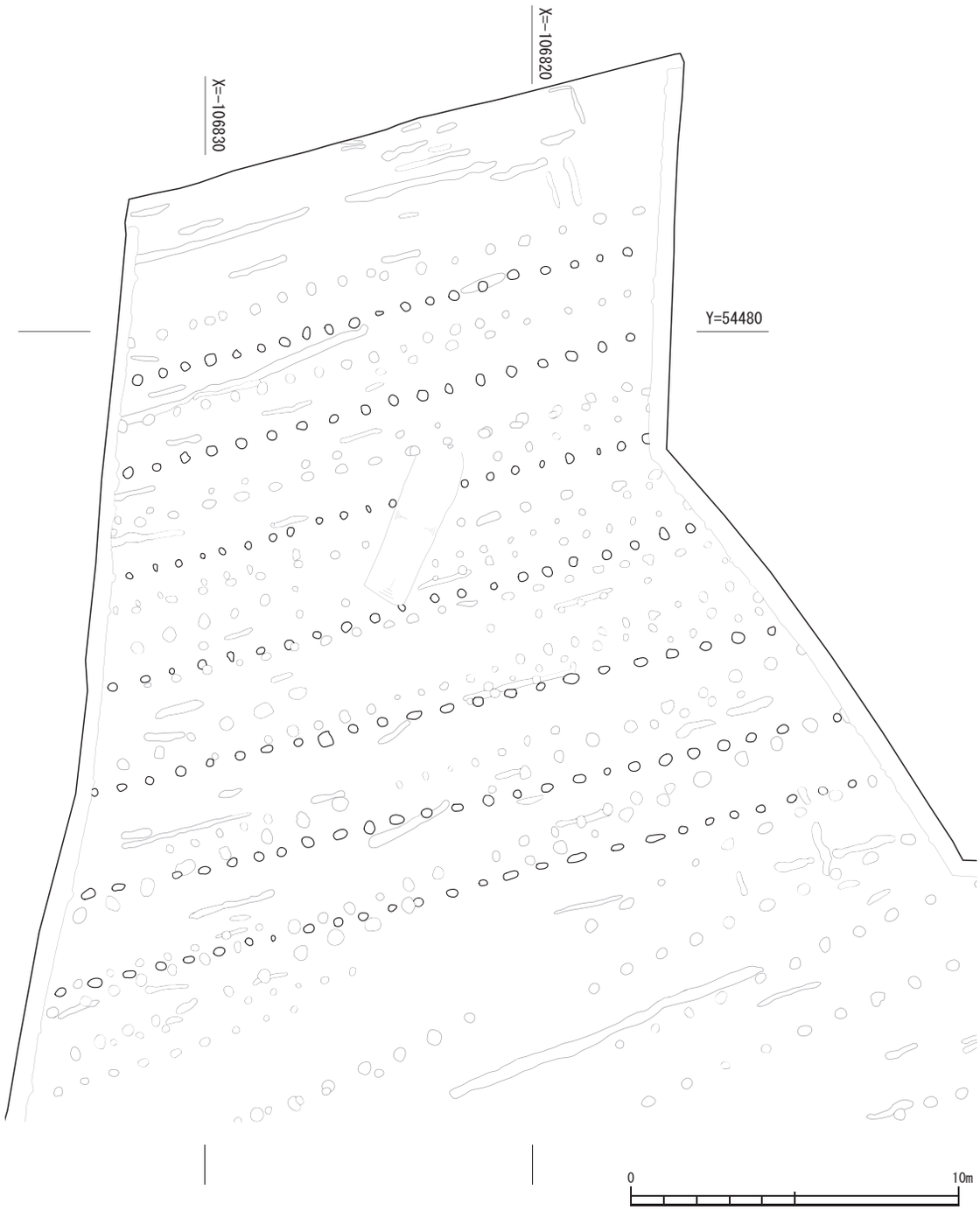


第 28 図　耕作痕列群５

耕作痕列群６

検出状況　調査区の西側で検出した（第 29 図）。耕作痕列群１～同５・同７～同９と重なる。このなかで、耕作痕列群３に切られ、同９を切る。耕作痕列群６の北側・南側は、調査区外へ伸びるとみられる。当該列群は今回抽出した中で、最も耕作痕列が幅広くかつ整然とした形で検出されている。

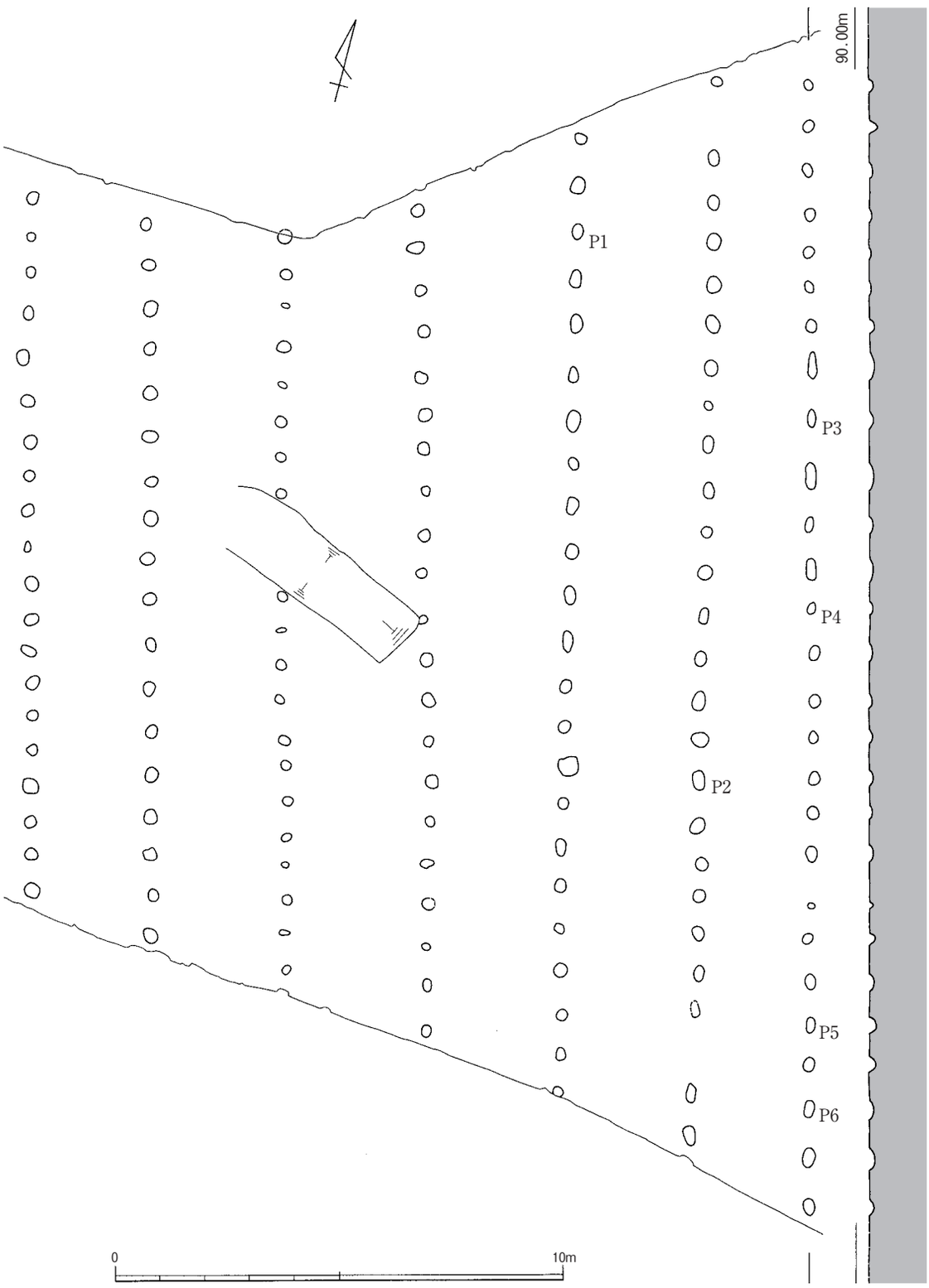
規　　模　７列の耕作痕列を確認した（第 30 図）。延長は１列目が 15.90 m、２列目が 16.30 m、３列目が 17.00 m。４列目が 18.60 m、５列目が 21.60 m、６列目が 24.00 m、７列目が 25.60 mである。列同士の間隔は、１列目と２列目が 2.60m ～ 2.70 m、２列目と３列目が 3.10 m、３列目と４列目が 3.00m ～ 3.20 m、４列目と５列目が 3.00m ～ 3.70 m、５列目と６列目が 3.00m ～ 3.10 m、６列目と７列目が



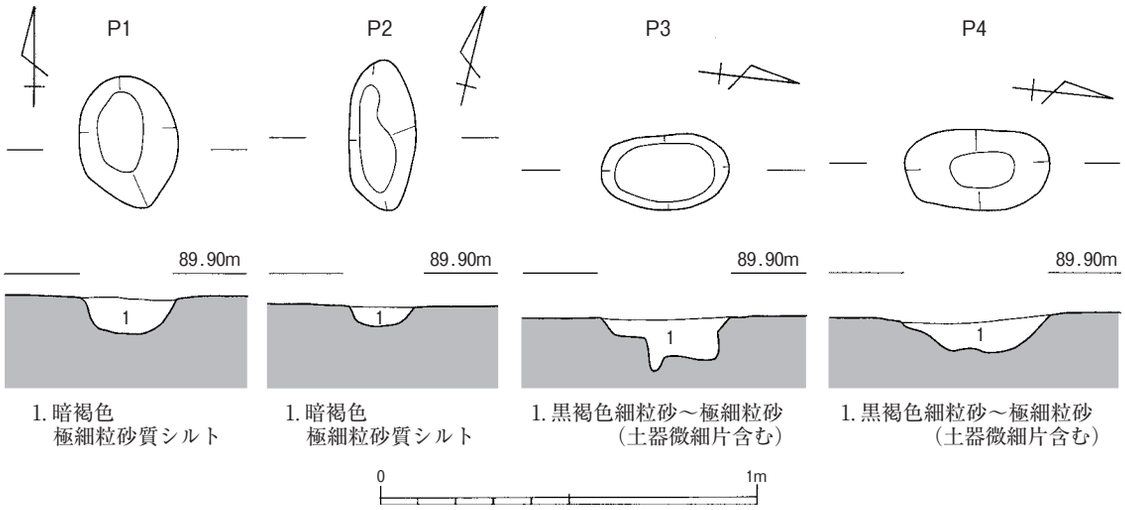
第 29 図　耕作痕列群６の位置

2.10m ～ 2.70 mを測る。４列目及び５列目は、北側がやや幅広くなって 3.70m になる。また、６列目及び７列目は北側にむけて幅が狭くなって 2.10 mになる。１～７列目までの列群としての最大幅は 18.00 mである。面積は 460.8㎡を測り、耕作痕列群の軸方向はＮ 13°～ 15°Ｗを示す。

耕作痕　各列における耕作痕同士の間隔は約 80㎝～ 1.00 mを測る。耕作痕の平面形は、直径約 20㎝～ 40㎝の不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多い。中には、Ｐ２のように長楕円になるものもあり、



第 30 図　耕作痕列群 6



第 31 図　耕作痕列群６　P1 ～ P4

特に７列目に目立つ（第 31 図）。断面形は、Ｕ字形をなす。検出面からの深さは、３㎝～ 15㎝を測る。埋土には土壌層Ⅱが堆積する。なお、Ｐ５・Ｐ６については、埋土の土壌分析を実施している（第４章第１節）。

出土遺物　Ｐ２から土師器の小皿（12）が出土している（図版１）。口縁部から底部にかけて残存する小片である。底部にユビオサエの痕跡がみられ、手捏ねによって成形されたと判断される。

　また、Ｐ４から土師器の皿（７）が出土している。口縁部から底部にかけて残存する破片である。これも、12 同様に手捏ね成形とみられる。

時　　期　出土遺物から、13 世紀と考えられる。

耕作痕列群７

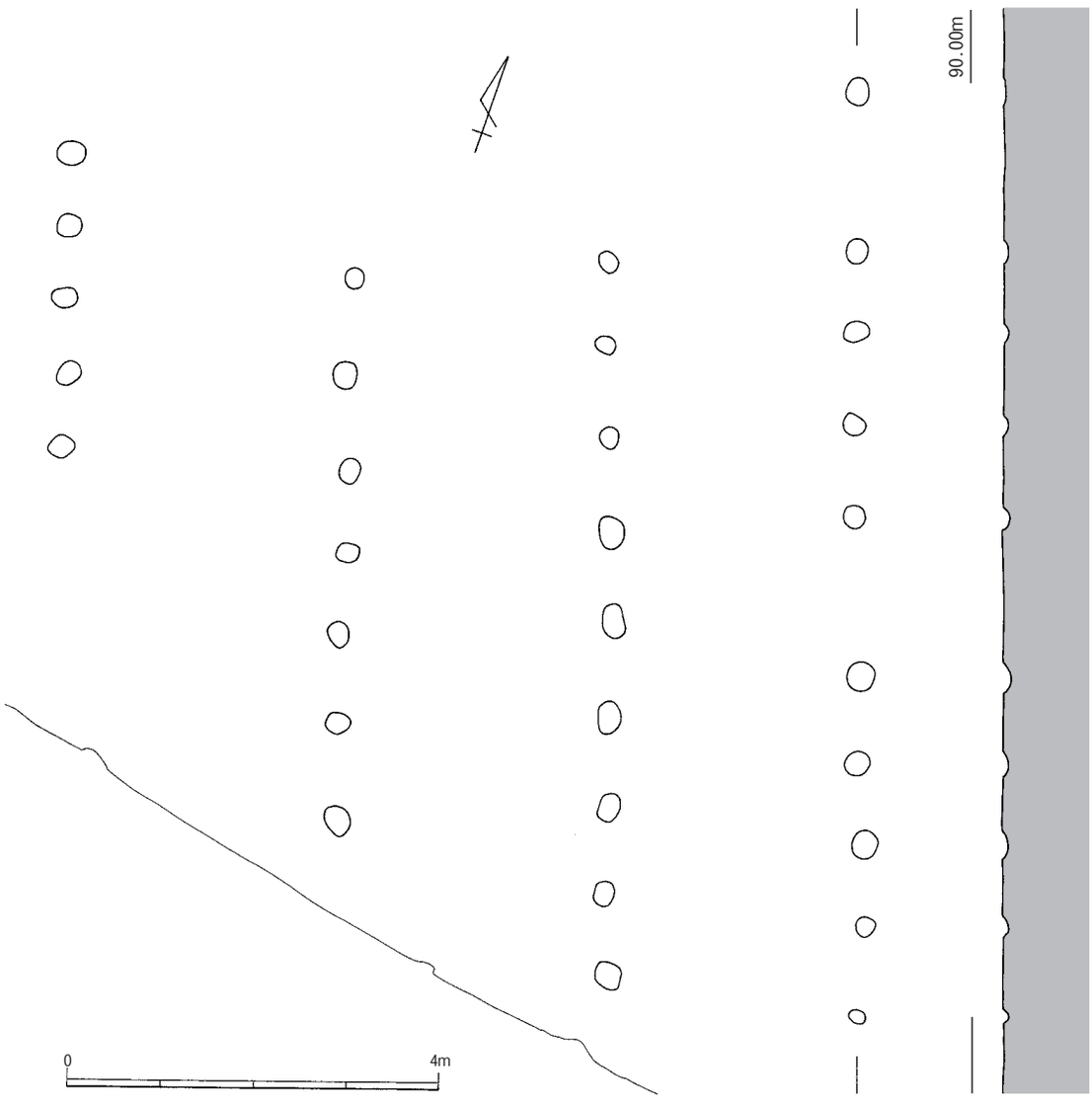
検出状況　調査区のほぼ中央南側で検出した（第 26 図）。耕作痕列群８の南側に位置し、耕作痕列群６の南東部と重なる。特に、耕作痕列群９とはほぼ同じ地点で重なるうえに、切っている。当該列群は、北側は調査区中央付近まで延び、南側は調査区の南際付近まで延びるが、調査区外に続くかどうか不明である。

規　　模　４列の耕作痕列を確認した（第 32 図）。延長は１列目が 3.20 ｍ、２列目が 6.20 ｍ、３列目が 8.00 ｍ。４列目が 10.20 ｍである。列同士の間隔は、１列目と２列目が 3.10 ｍ、２列目と３列目が 2.70m ～ 2.90 ｍ、３列目と４列目が 2.70 ｍを測る。１～４列目までの列群としての最大幅は 8.80 ｍである。面積は、89.76㎡である。そして、耕作痕列群の軸方向はＮ 16° ～ 19° Ｗを示す。

耕作痕　各列における耕作痕同士の間隔は約 80㎝～ 1.00 ｍを測る。ただし、４列目の部分的に耕作痕が検出できなかった部分は除外する。耕作痕の平面形は、直径約 20㎝～ 35㎝の不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多い。前掲の耕作痕列群に比べて、耕作痕の平面規模がやや小さい傾向が認められる。断面形は、Ｕ字形をなす。深さは、検出面から３㎝～８㎝である。埋土は土壌層Ⅱが堆積している。

出土遺物　当該列群からは、土師器・須恵器の微細な破片が出土しているが、器種や時期的な特徴は不明であり、図化不能である。

時　　期　出土遺物から時期の特定は困難だが、埋土が土壌層Ⅱである点から、上記の耕作痕列群と同様の 13 世紀頃と考えられる。



第 32 図　耕作痕列群７

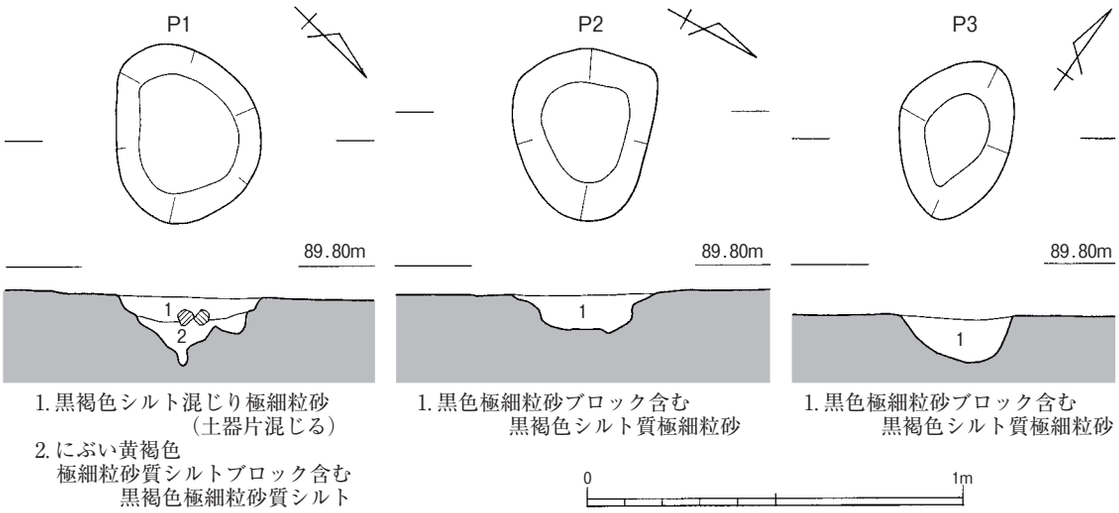
耕作痕列群８

検出状況　調査区北側ほぼ中央西寄りで検出した（第 33 図）。耕作痕列群７・同９の北側に位置し、耕作痕列群４の４列目および耕作痕列群６の北東部と重なる。特に、耕作痕列群６の６列目とは切り合い関係にあるとみられる。

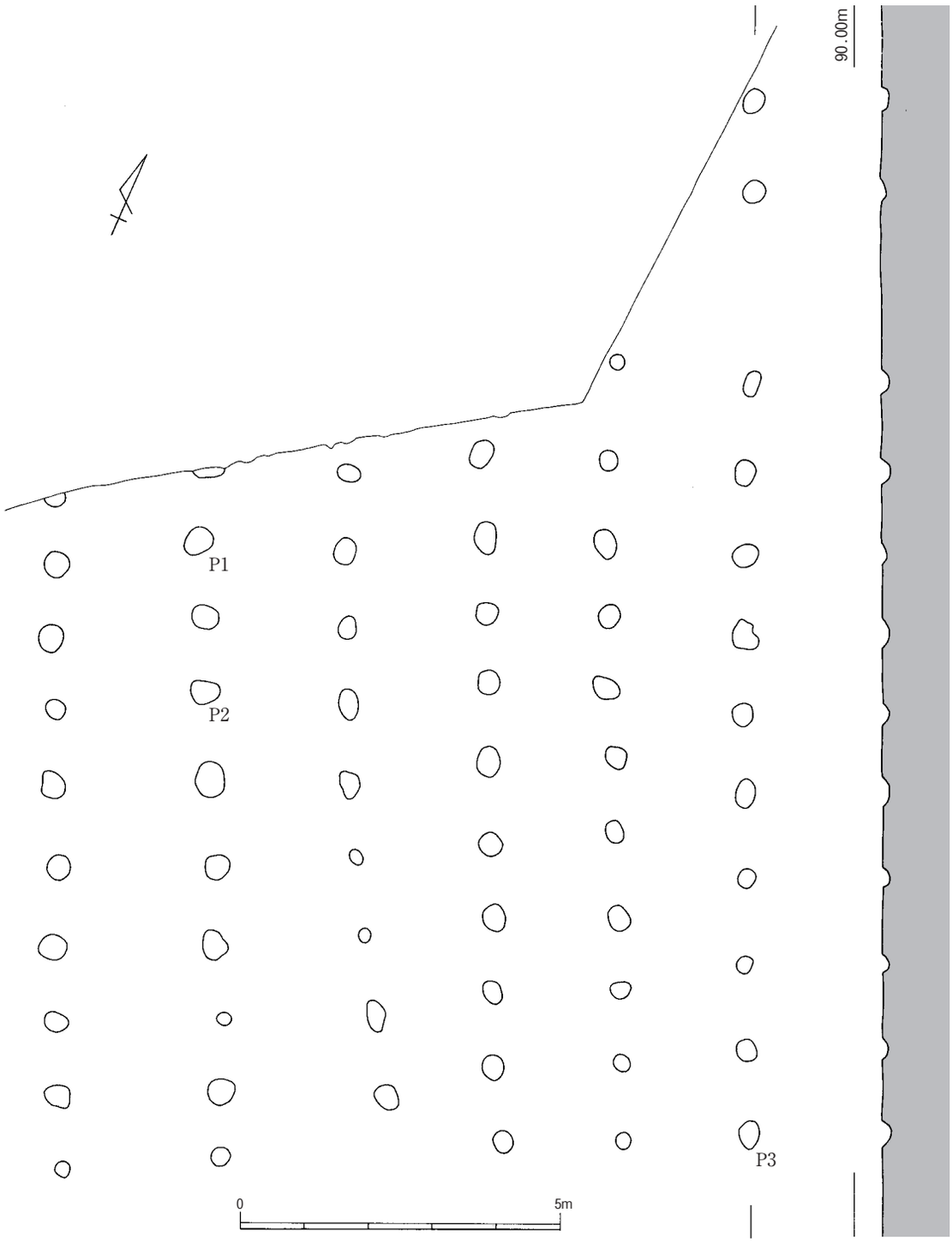
当該列群は、北側は調査区外に続くと考えられるが、南側は調査区中央付近で途切れる。特に各列南端の耕作痕はほぼ直線的に揃っており、おそらく当該列群本来の端部に相当すると考えられる。また、後述する耕作痕列群９の北端部も比較的直線的に揃っているが、当該列群南端部とは約 3.50 m～ 4.00 mの間隔がある。なお、１列目・２列目および６列目の耕作痕については、整理段階において当該列群として認識できたものである。

規　模　６列の耕作痕列を確認した（第 35 図）。延長は、１列目が 10.60 m、２列目が 10.80 m、３列目が 10.00 m、４列目が 11.00 m、５列目が 12.30 m、６列目が 16.40 mを測る。列同士の間隔は、１列目と２列目が 2.35 m～ 2.50 m、２列目と３列目が 2.30 m～ 2.60 m、３列目と４列目が 1.80 m～ 2.20 m、４列目と５列目が 1.90 m～ 2.00 m、５列目と６列目が 2.00 m～ 2.30 mを測る。

第 33 図　耕作痕列群８・９の位置



第 34 図　耕作痕列群８　P1 ～ P3



第 35 図　耕作痕列群 8

ただし、３列目の南端部は、南側にむかうにつれてやや東側へ傾きながら延びている。そのため、３列目および４列目の南端部の間隔は 1.80m を測る一方、２列目と３列目の南端部の間隔は 2.60 m を測る。１～６列目までの列群としての最大幅は 11.20 m である。面積は、183.68㎡である。そして、耕作痕列群の軸方向はＮ 24°～ 25° Ｗを示す。

耕作痕　各列における耕作痕同士の間隔は約 1.20 m～ 1.30 m を測る。ただし、６列目の部分的に耕作痕が検出できなかった部分は除外する。耕作痕の平面形は、不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多

い。当該列群の耕作痕の規模は、今回抽出できた耕作痕列群のなかでも比較的大きいものが多い。長軸が40㎝程度のものがほとんどで、中には50㎝を超えるものも存在し、20㎝程度のものは少ない。断面形は、Ｕ字形をなす。深さは、検出面から３㎝～ 13㎝を測る。埋土は土壌層Ⅱが堆積している。

特に、Ｐ１の埋土下層は、直下層のブロックが混じり、また断面ラインも不整形であることから、何らかの植物の根跡によって形成された痕跡と推測される（第34図）。なお、Ｐ１・Ｐ２については土壌分析を実施している（第４章第１節）。

出土遺物　当該列群からは、土師器・須恵器の微細片が出土しているが、器種や時期的な特徴は不明であり、図化不能である。

時　期　出土遺物から時期の特定は困難だが、埋土が土壌層Ⅱである点から、上記の耕作痕列群と同様の13世紀頃と考えられる。

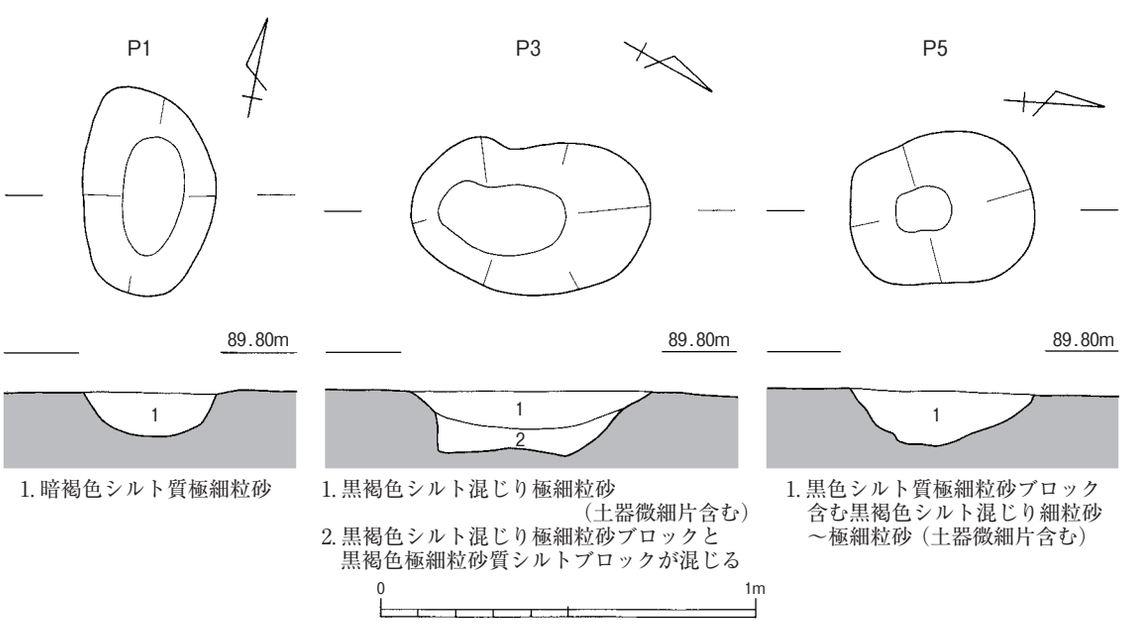
耕作痕列群９

検出状況　調査区南側のほぼ中央西寄りで検出した（第33図）。耕作痕列群４・同８の南側に位置し、耕作痕列群７と重なる。また、当該列群の１列目が耕作痕列群５の南端部と重なり、耕作痕列群６の南東部とは当該列群の１～３列目が重なる。特に、耕作痕列群６の５・６列目が当該列群２・３列目を切り、さらに当該列群４列目は耕作痕列群７の４列目を切っている。

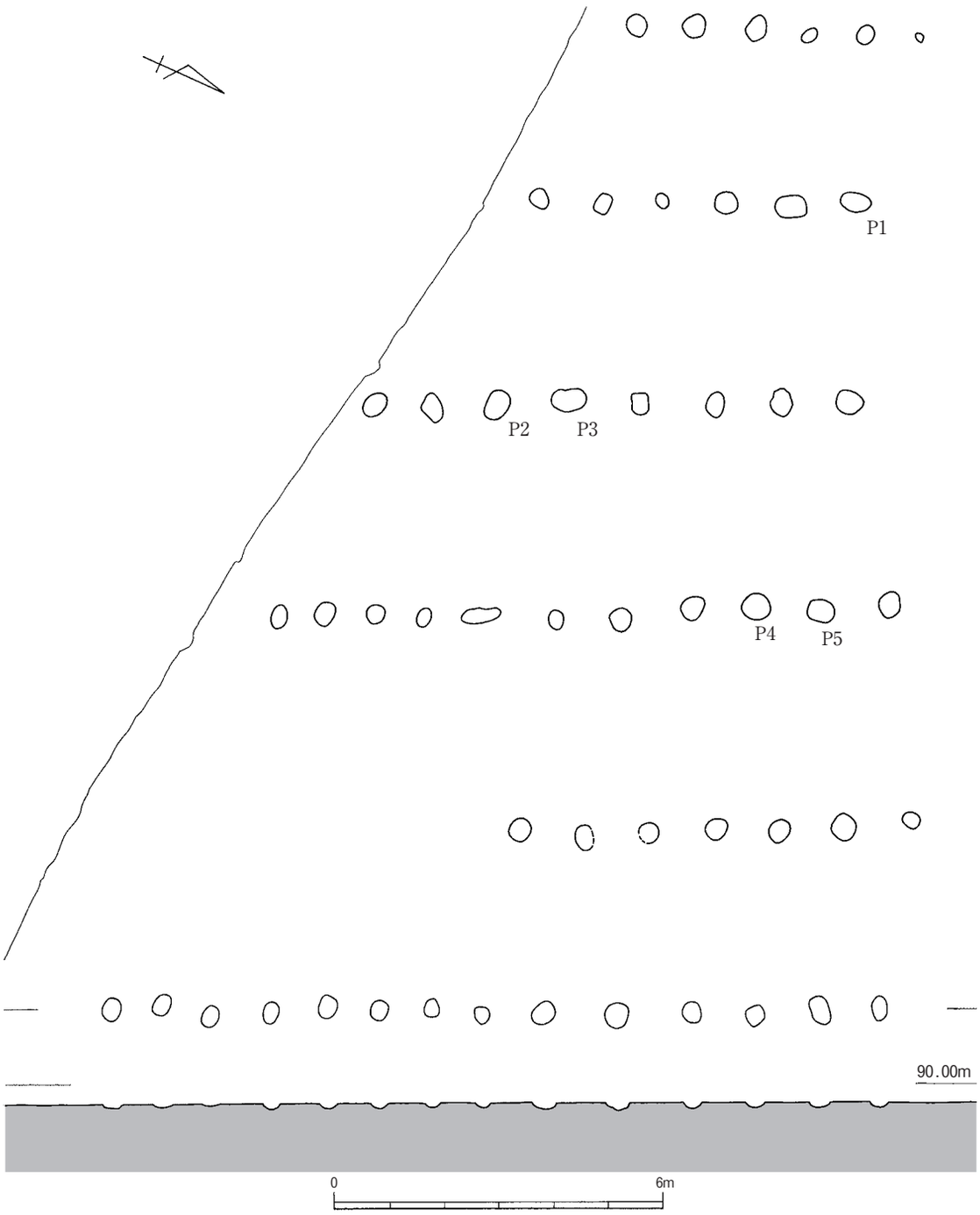
当該列群は、南側は調査区外に続くと考えられるが、北側は調査区中央付近で途切れている。特に各列北端の耕作痕は比較的揃っており、当該列群の北端部に相当すると考えられる。

規　　模　６列の耕作痕列を確認した（第37図）。延長は１列目が4.60 m、２列目が5.30 m、３列目が7.60 m、４列目が9.60 m、５列目が6.30 m、６列目が12.00 mである。列同士の間隔は、１列目と２列目が3.10m ～ 3.20 m、２列目と３列目が3.60m ～ 3.70 m、３列目と４列目3.70m ～ 3.80 m、４列目と５列目が3.80m ～ 4.00 m、５列目と６列目が3.20m ～ 3.40mを測る。１～６列目までの列群としての最大幅は12.00 mである。面積は144㎡である。そして、耕作痕列群の軸方向はＮ 23° ～ 25° Ｗを示す。

耕 作 痕　各列における耕作痕同士の間隔は約1.20m ～ 1.30 mを測る。ただし、６列目の部分的に耕作



第36図　耕作痕列群９　P1・P3・P5



第 37 図　耕作痕列群 9

痕が検出できなかった部分は除外する。耕作痕の平面形は、不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多い。

当該列群の耕作痕の規模は、長軸は 30cm～ 40cm程度であるが、２～４列目にはＰ１やＰ３等のように長軸が 40cm～ 55cmと、比較的大きなものがみられる（第 36 図）。断面形は、Ｕ字形をなす。検出面からの深さは、浅いもので３cm～６cm程度のものもあるが、多くは 10cm～ 14cm程度である。

埋土は、土壌層Ⅱが堆積していた。Ｐ３の埋土下層には直下層のブロックが混じっている。何らかの植物の根跡による痕跡の可能性がある。なお、Ｐ２～Ｐ５については土壌分析を実施している（第４章第１節）。

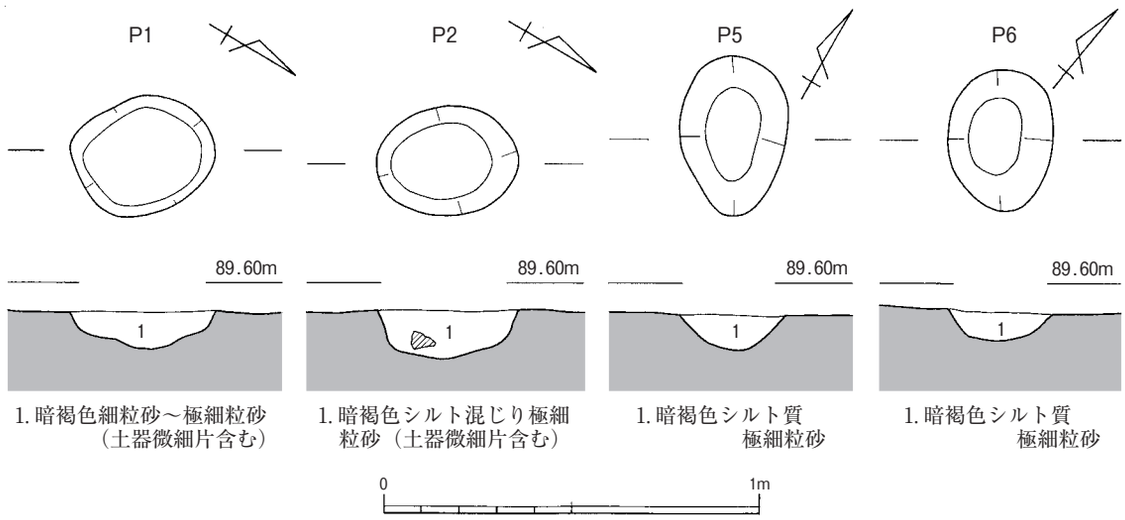
出土遺物　土師器・須恵器の微細片が出土しているが、器種等は不明であり、図化不能である。

時　　期　出土遺物から時期の特定は困難だが、埋土が土壌層Ⅱである点から、上記の耕作痕列群と同様の 13 世紀頃と考えられる。

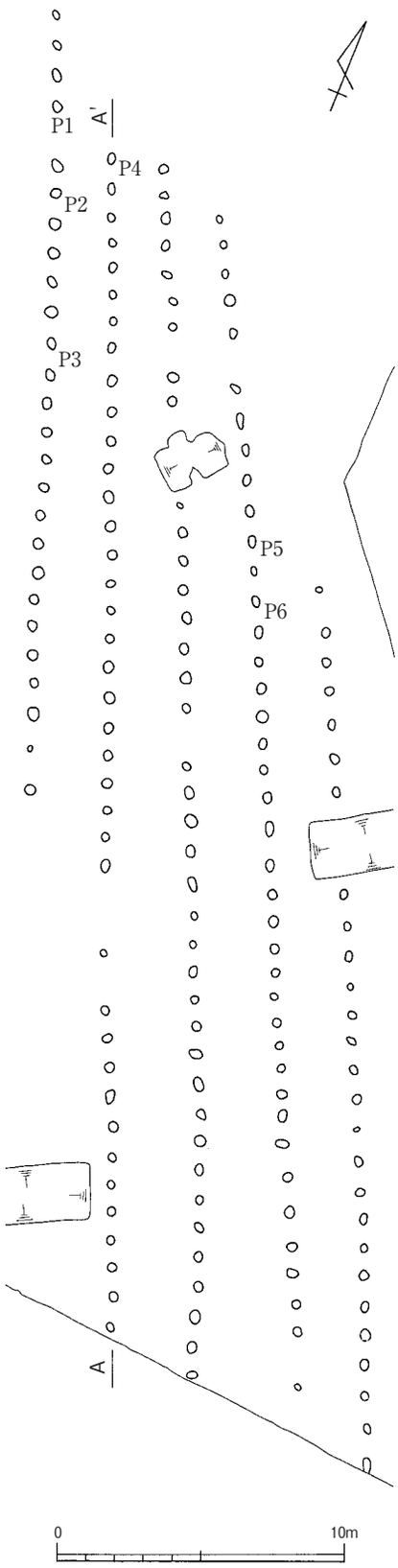
耕作痕列群 10

検出状況　調査区のほぼ中央で検出した（第 38 図）。当該列群の３～５列目の南東側が、耕作痕列群

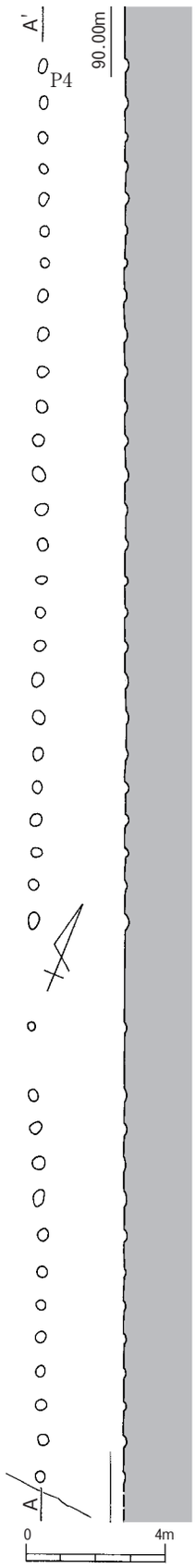
第 38 図　耕作痕列群 10 の位置



第 39 図　耕作痕列群 10　P1・P2・P5・P6



第 40 図　耕作痕列群 10



第 41 図　耕作痕列群 10　2 列目

11 の１～３列目までと平面的に重なっている。また、当該列群の４・５列目が耕作痕列群 11 を切っている。

当該耕作痕列群は、少なからず南側の調査区外に延びると考えられるが、北側へは延びていたのか不明である。そして、当該列群は、今回検出した耕作痕列群のなかで最も延長が長いものである。なお、１列目の南半部については検出できなかった。

規　　模　５列の耕作痕列を確認した（第 40 図）。延長は１列目が 26.50 m、２列目が 40.70 m、３列目が 41.80 m。４列目が 40.6 m、５列目が 30.50 mである。これら各列の間隔は、南側では広がるが、北側にむかっては間隔が狭くなっている。さらに、各列の北端部分は南側に比べてやや西側へ反りながら耕作痕列が並んでいる。２列目は、比較的直線的である（第 41 図）。

南側の間隔は、１列目と２列目が 2.50 m、２列目と３列目が 3.30 m、３列目と４列目が最も幅広くなって 3.40 m、４列目と５列目は 2.90 mを測る。一方、北側の間隔は１列目と２列目が 2.20 m、２列目と３列目が 2.00 m、３列目と４列目が 1.90 m を測る。また、１～５列目までの列群としての最大幅は、北側で 10 m、南側で 12 mを測る。

面積は 501.6㎡である。耕作痕列の軸方向は、北側でN 20°～27° W、南側でN 23°～26° Wを示している。

耕作痕　各列における耕作痕同士の間隔は約 90㎝～ 1.00 mを測る。ただし、各列の部分的に耕作痕が検出

できなかった部分は除外する。

耕作痕の平面形は、不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多く認められる。当該列群の耕作痕の規模は、長軸で 35 ～ 40cm、その直交方向で 30cmを測る（第 39 図）。

断面形は、Ｕ字形をなす。底部の検出面からの深さは、３cm～ 11cmを測る。また、埋土は、土壌層Ⅱが堆積していた。

出土遺物　Ｐ２から土師器の皿（４）が出土している（図版１）。４は､体部から底部にかけて残存する。底部は、回転糸切りにより切り離されている。

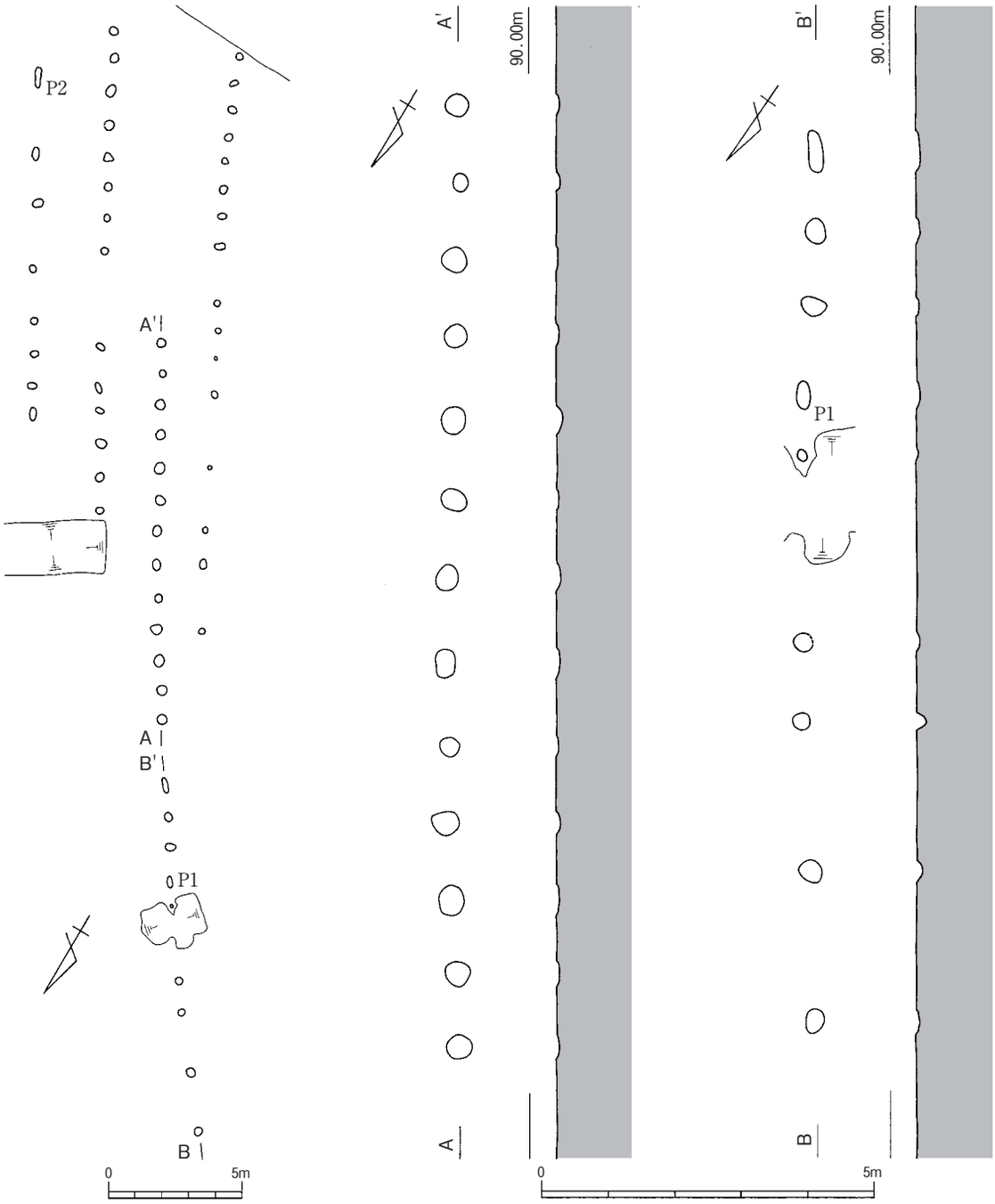
時　　期　出土遺物は 11 世紀末～ 12 世紀中頃の所産と判断される。しかし、埋土が土壌層Ⅱであることを考慮に入れると、他の耕作痕列群と同様、13 世紀と考えられる。

耕作痕列群 11

検出状況　調査区ほぼ中央のやや南寄りで検出した（第 42 図）。耕作痕列群 10 が、当該列群の４列目・５列目と切り合い関係にあり、これらを切っている。また、当該列群の４列目・５列目は耕作痕列群と切り合い関係にある。

当該耕作痕列群は、調査区南側へ延びる可能性はあるが、断定できない。北側へは、２列目が調査区中央より伸びるが、耕作痕列群 10 に届かず、途切れている。なお、２列目は南半の続き部分を特定で

第 42 図　耕作痕列群 11 の位置



第 43 図　耕作痕列群 11

きなかった。

規　　模　４列の耕作痕列を確認した（第 43 図）。延長は、１列目が 21.60 m、２列目が 29.70 m、３列目が 18.20 m、４列目が 26.40 mを測る。耕作痕列の間隔は、１列目と２列目が 1.70 m～ 2.20 m、２列目と３列目が 2.30 m、３列目と４列目が 2.70 mを測る。最も狭い部分は１列目と２列目間の北側で 1.70 m、最も広い部分は、３列目と４列目間の 2.70 mである。１列目～４列目までの最大幅は 7.50 mを測る。

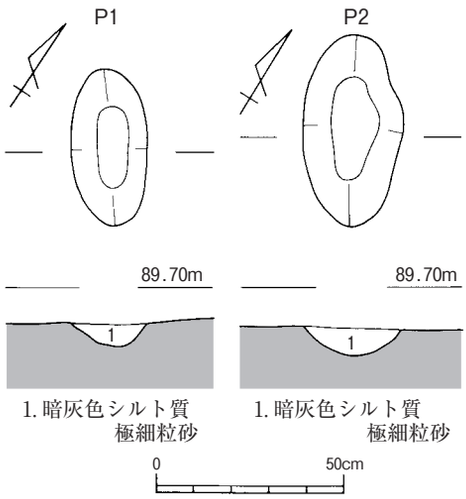
面積は、305.25㎡である。耕作痕列の軸方向はN 26°～ 29° Wを示す。なお、２列目は、北側ほどやや西側へ傾き、N 35° Wを示す。

耕 作 痕　各列における耕作痕同士の間隔は約 1.0m ～ 1.2m を測る。耕作痕の平面形は、不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多いが、Ｐ１・Ｐ２などのように長楕円形になるものも認められる。当該

列群の耕作痕の長軸規模は、35cm～ 40cmを測る（第 44 図）。断面形は、Ｕ字形をなす。検出面からの深さは３cm～ 10cmを測る。埋土は土壌層Ⅱが堆積していた。

出土遺物　当該列群からは、土師器・須恵器の微細片が出土しているが、器種や時期的な特徴は不明である。図化は困難である。

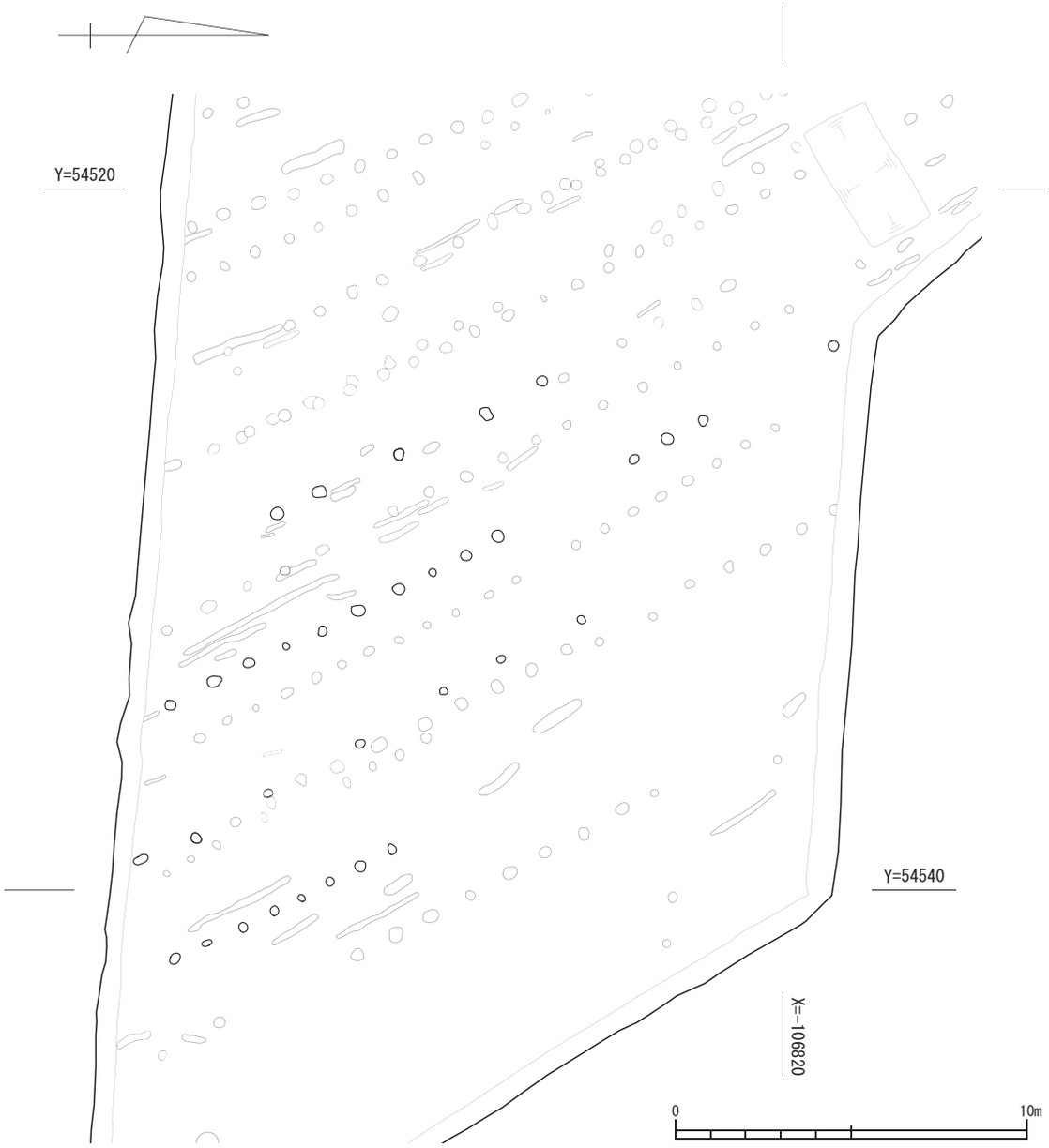
時　　期　出土遺物から時期の特定は困難である。埋土が土壌層Ⅱである点から、13 世紀頃と考えられる。



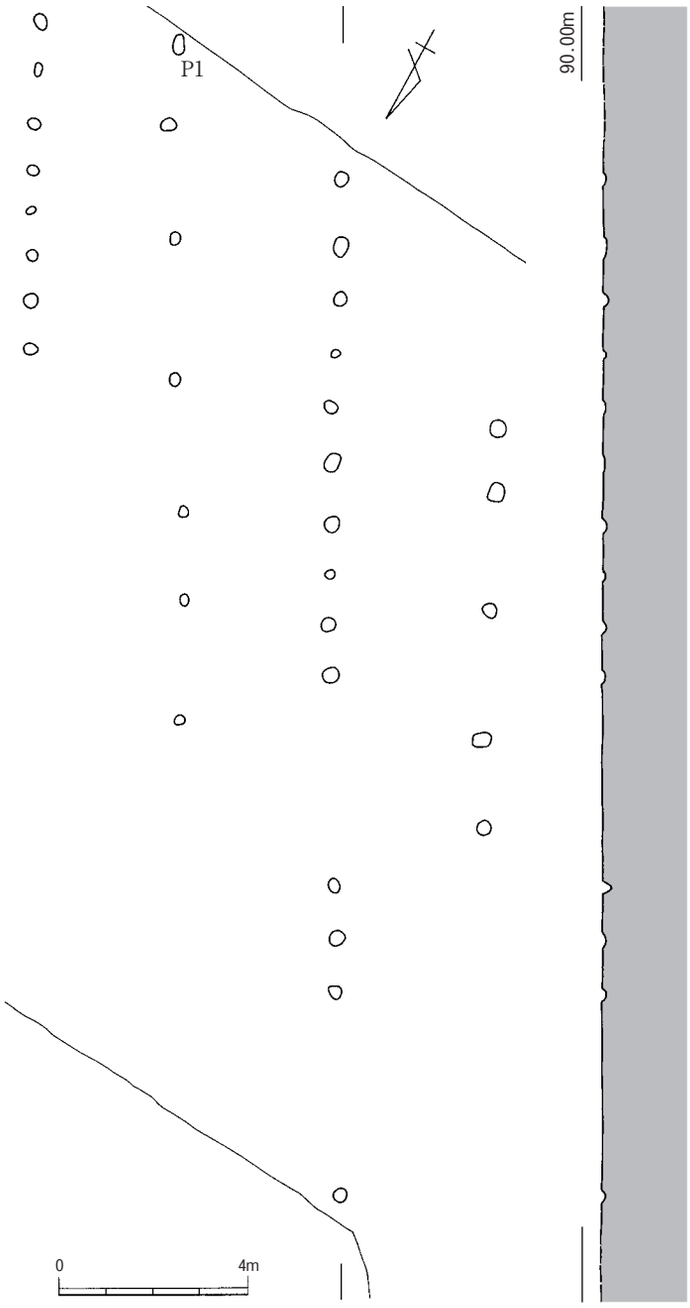
第 44 図　耕作痕列群 11　P1・P2

耕作痕列群 12

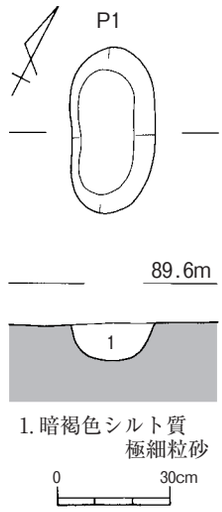
検出状況　調査区東側で検出した（第 45 図）。耕作痕列群 13 と全体的に重なっている。また、当列群の１列目は耕作痕列群 11 の４列目と、３列目は耕作痕列群 14 の１列目と重なっている。耕作痕列群 10 の３～５列目南東側は、当該列群の１～３列目までと重なって



第 45 図　耕作痕列群 12 の位置



第 46 図　耕作痕列群 12



第 47 図　耕作痕列群 12　P1

いる。

規　　模　４列の耕作痕列を確認した（第 46 図）。延長は１列目が 8.80 m、２列目が 21.80 m、３列目が 14.80 m、４列目が 7.20 mである。当該列群は検出状況があまりよくないが、耕作痕列の間隔は、１列目と２列目が 3.10 m ～ 3.30 m、２列目と３列目が 3.20 m ～ 3.50 m、３列目と４列目が 3.00 m～ 3.20 mを測る。当耕作痕列群のなかでは、比較的間隔が広い。最も狭い間隔は３列目と４列目間の 3.00 m、最も広い間隔は１列目と２列目間の 3.50 mである。１～４列目までの最大幅は 10.10 mを測る。

面積は、220.18㎡である。耕作痕列の軸方向はＮ 25°～ 28°Ｗを示す。

耕 作 痕　各列における耕作痕同士の間隔は約 1.00 m～ 1.20 mを測る。ただし、各列の部分的に耕作痕が検出できなかった部分、特に１・３列目や、２列目の北半分などは除外する。耕作痕の平面形は、不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多いが、Ｐ１のように長楕円形になるものも認められる。当該列群の耕作痕の長軸規模は、35㎝～ 40㎝である（第 47 図）。断面形は、Ｕ字形をなす。検出面からの深さは、５㎝～ 12㎝を測る。埋土は土壌層Ⅱが堆積していた。

出土遺物　当該列群からは、土師器・須恵器の微細片が出土しているが、器種や時期的な特徴は不明であり、図化は困難である

時　　期　出土遺物から時期の特定は困難だが、埋土が土壌層Ⅲである点から、前述の耕作痕列群と同様の 13 世紀頃と考えられる。

耕作痕列群 13

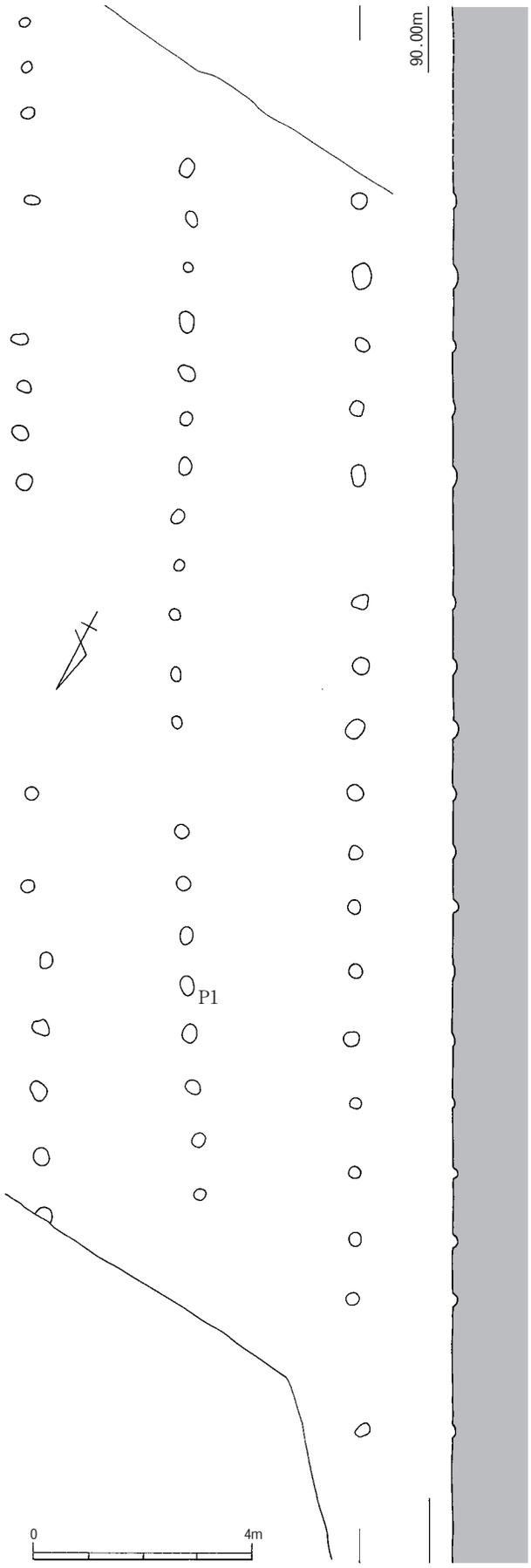
検出状況　調査区の東側で検出した（第 48 図）。耕作痕列群 12 と全体的に重複している。また、当該列群の３列目は耕作痕列群 14 の１列目と重複している。また、当該耕作痕列群は、南北の調査区外に延びるものと考えられる。

規　　模　３列の耕作痕列を確認した（第 49 図）。延長は１列目が 22.60 m、２列目が 19.00 m、３列目が 22.00 mを測る。２列目に北側部分はやや西側に振れている。また、３列目の中央部分も耕作痕の並びもやや乱れている。耕作痕列の間隔は、１列目と２列目が 2.90 m～ 3.15 m、２列目と３列目が 2.90 m～ 3.00 mを測る。本耕作痕列群のなかでも比較的間隔が広い傾向にある。１～３列目までの最大幅は 6.10 mを測る。

面積は、137.86㎡である。耕作痕列の軸方向はN 27°～ 28°Wを示す。

耕 作 痕　各列における耕作痕同士の間隔は 1.00 m～ 1.20 mを測る。ただし、各列の部分的に耕作痕が検出できなかった部分は除外する。耕作痕の平面形は、不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多い。当

第 48 図　耕作痕列群 13 の位置



第 49 図　耕作痕列群 13

該列群の耕作痕の長軸規模は 35cm～ 40cm程度である。断面形は、Ｕ字形をなす。検出面からの深さは５cm～ 11cmである。埋土には土壌層Ⅱが堆積している。

出土遺物　釘が１点（Ｍ３）Ｐ１から出土している（図版３）。断面方形の角釘の尖端部分が出土している。頭部は欠失している。残存長は 4.10cmである。

時　　期　出土遺物から時期の特定は困難だが、埋土が土壌層Ⅱである点から、他の耕作痕列群と同様の 13 世紀頃と考えられる。

第 50 図　耕作痕の検出作業（1）

第 51 図　耕作痕の検出作業（2）

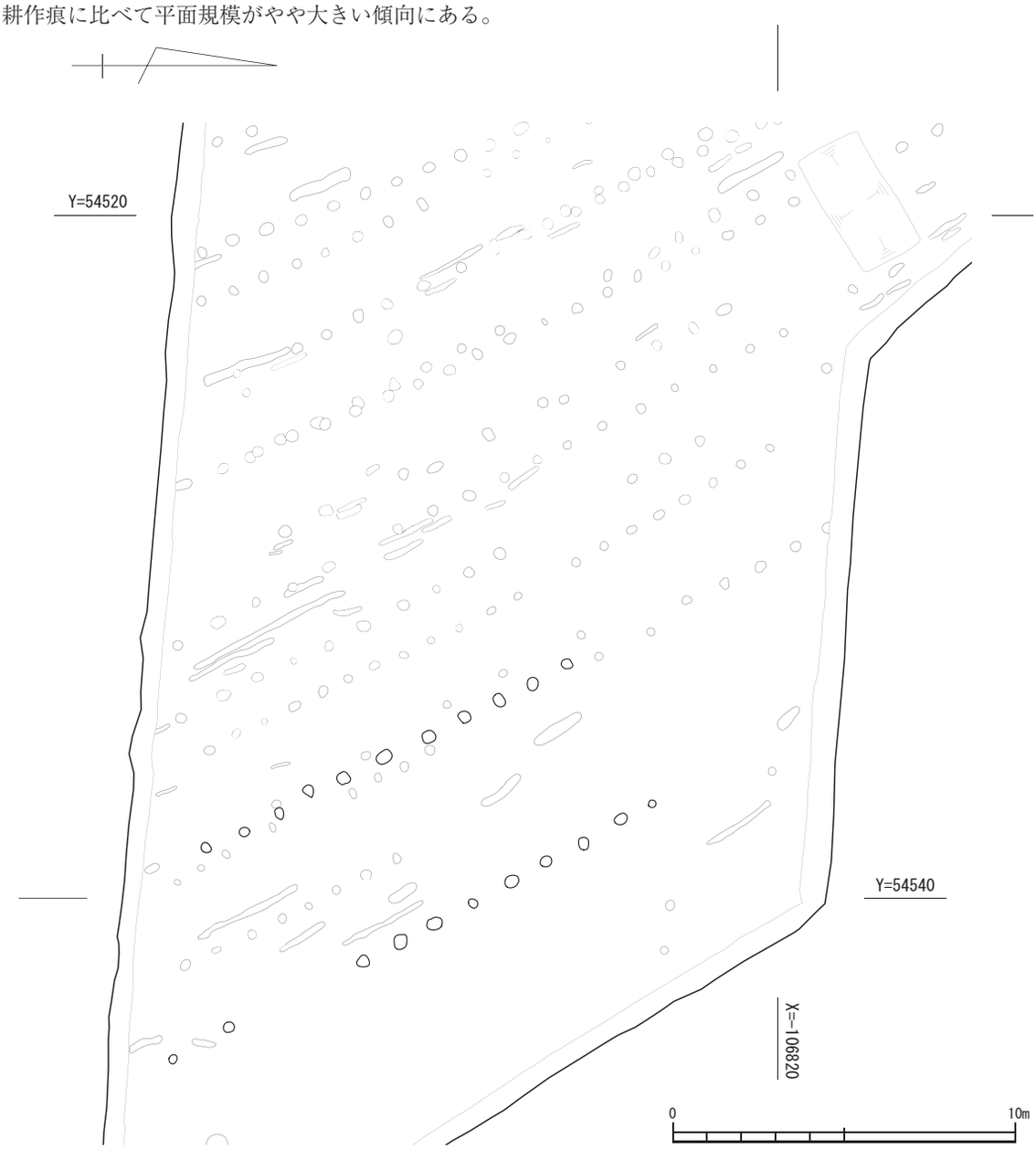
耕作痕列群 14

検出状況　調査区東側で検出した（第 52 図）。抽出した耕作痕列群のなかでは、最東端に位置する。当該列群の１列目が耕作痕列群 13 の４列目と重複している。

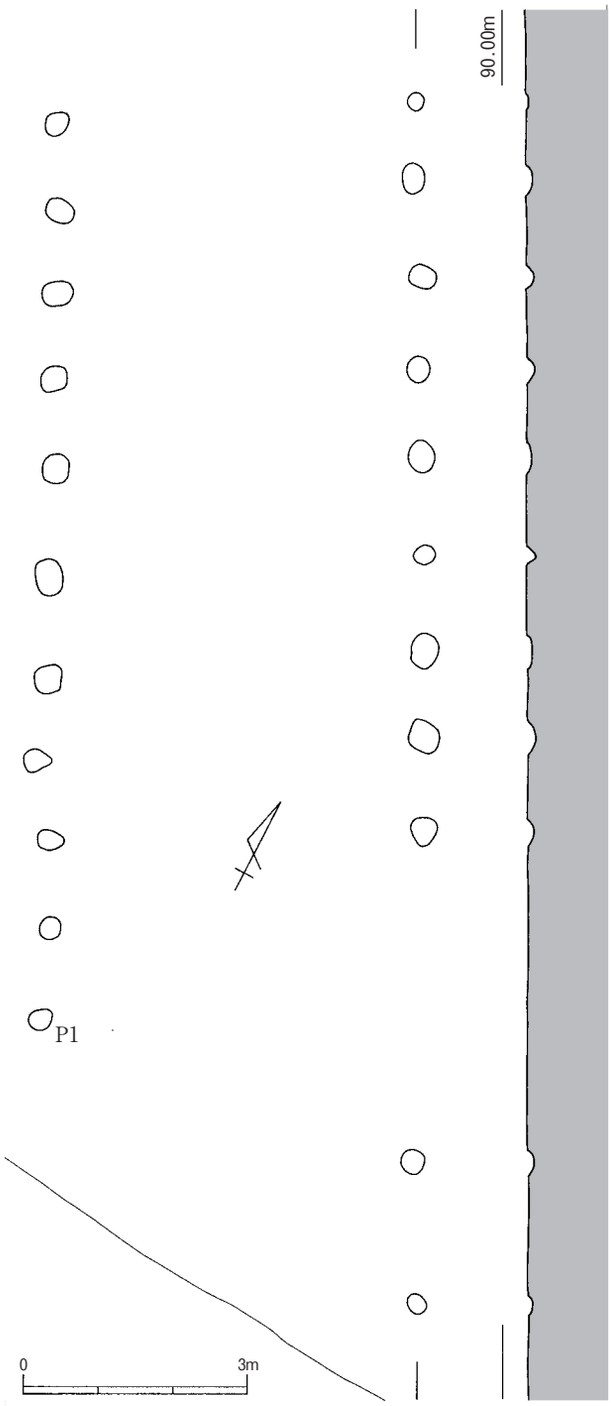
耕作痕は調査区の北端、南端では検出できなかった。当該耕作痕列群は、南北の調査区外に延びるか不明である。

規　　模　２列の耕作痕列を確認した（第 53 図）。延長は１列目が 12.20 m、２列目が 16.30 mである。耕作痕列の間隔は、4.80 m～ 5.00 mを測る。今回抽出できた耕作痕列群のなかでは最も間隔が広い傾向にある。面積は 81.5㎡である。耕作痕列の軸方向はN 27°～ 28°Wを示す。

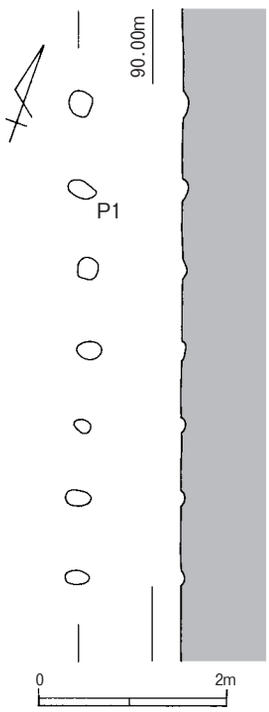
耕 作 痕　各列における耕作痕同士の間隔は約 1.00 m～ 1.20 mを測る。ただし、各列の部分的に耕作痕が検出できなかった部分は除外する。耕作痕の平面形は、不整形な円形ないし楕円形を呈するものが多い。当該列群の耕作痕検出面における長軸規模は、35㎝～ 40㎝を測る。幅についても同様の値を示し、他の耕作痕に比べて平面規模がやや大きい傾向にある。



第 52 図　耕作痕列群 14 の位置



第 53 図　耕作痕列群 14



第 54 図　耕作痕列群 15

断面形は、Ｕ字形をなす。検出面からの深さは５cm～ 11cm程度である。埋土は、土壌層Ⅱが堆積していた。

出土遺物　Ｐ１から須恵器甕（16）の口縁部の破片が出土している（図版１）。

頸部外面には平行文のタタキメが施されたあとナデ調整されている。頸部内面は、接合の痕跡とユビオサエの痕が残る。口縁端部はやや厚く端面をもち、内部外縁がわずかに上方に摘み出されている。焼成は良好ではなく、やや瓦質を呈する。胎土は、密で砂粒もほとんど含まれない。16 はいわゆる東播系と考えられる製品である。

時　　期　出土遺物や、耕作痕埋土が土壌層Ⅱである点から、他の耕作痕列群と同様、13 世紀に位置付けられる。

耕作痕列群 15

検出状況　調査区東側中央寄りの位置で検出した（第 55 図）。耕作痕列群６の５列目と６列目の間で、耕作痕列群８の南側、耕作痕列群９の北側に位置する。

規　　模　１列からなり、延長は 5.20 ｍを測る（第 54 図）。耕作痕列の軸方向はＮ 18°Ｗを示す。

耕 作 痕　耕作痕同士の間隔は約 80㎝を測る。耕作痕の平面形は､不整形な円形ないし楕円形を呈する。耕作痕の検出面における規模は、長軸で 20㎝～ 22㎝を測り、他の耕作痕列群に比べて小規模である。

断面形はＵ字形をなし、検出面からの深さは３㎝～８㎝を測る。埋土は、土壌層Ⅱが堆積していた。

出土遺物　土師器の皿が１点（３）、Ｐ１から出土している（図版１）。３は、口縁部から底部にかけて残存する。底部にはユビオサエ痕が残り、手捏ねによる成形が認められる。

時　　期　出土遺物や埋土が土壌層Ⅱである点から、前述の耕作痕列群と同様の 13 世紀と考えられる。

耕作痕列 16

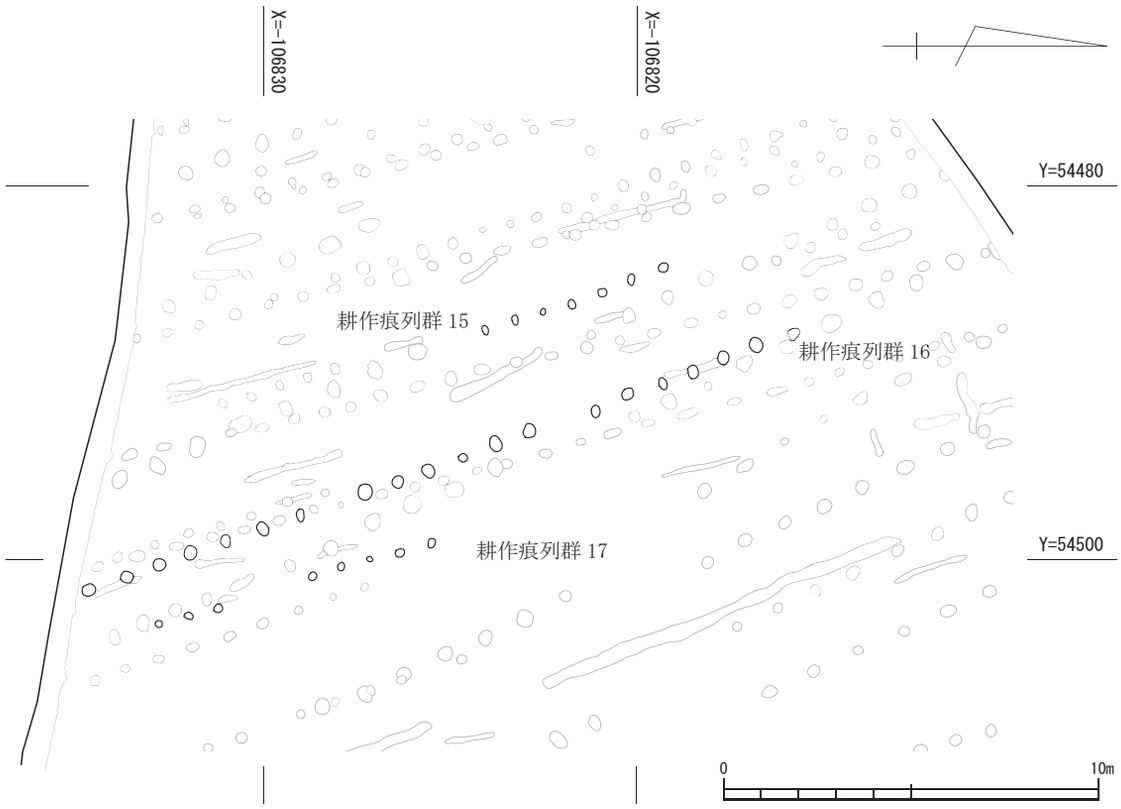
検出状況　調査区の東側中央寄りの位置で検出した（第 55 図）。耕作痕列群６の６列目と７列目の間に位置し、南側で７列目と重なる。南側は調査区外に続くと考えられるが、調査区北端部では耕作痕は検出されていない。

規　　模　１列からなり、延長は 25 ｍを測る（第 57 図）。耕作痕列の軸方向はＮ 20°Ｗを示す。

耕 作 痕　耕作痕同士の間隔は約 90㎝～ 1.00 ｍを測る。耕作痕の平面形は、不整形な円形ないし楕円形をなす。耕作痕の検出面における規模は、長軸で 40㎝を測る。断面形はＵ字形をなし、検出面からの深さは３㎝～ 13㎝を測る。埋土は、土壌層Ⅱが堆積していた。

出土遺物　土師器の皿が１点（10）、Ｐ１から出土している（図版１）。10 は、口縁部から底部にかけて残存する。底部にはユビオサエ痕が残り、成形は手捏ねによっている。

時　　期　埋土が土壌層Ⅱである点から、前述の耕作痕列群と同様の 13 世紀と考えられる。



第 55 図　耕作痕列群 15 ～ 17 の位置

耕作痕列 17

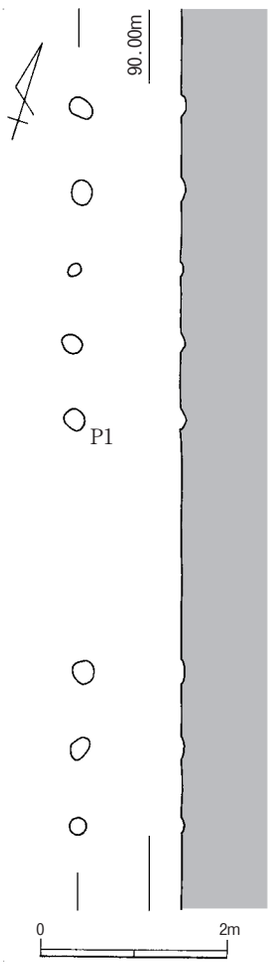
検出状況　調査区中央南側の西寄りの位置で検出した（第 55 図）。耕作痕列群７の２列目と３列目の間に位置し、耕作痕列群９の３列目の東に隣接する。また、当列の北側は、調査区中央より以北では検出できなかった。

規　　模　延長は 7.80 m を測る（第 56 図）。耕作痕列の軸方向は、N 16° 30″ W を示す。

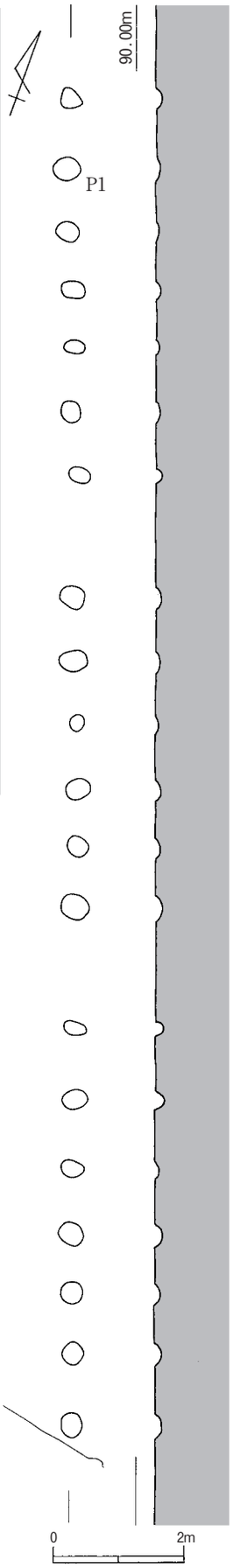
耕作痕　耕作痕間は約 80cm～ 90cm を測る。耕作痕の平面形は、不整形な円形ないし楕円形を呈する。耕作痕の検出面における長軸規模は、20cm～ 22cm 程度と比較的小規模である。断面形は、U 字形をなす。検出面からの深さは、１cm～６cm と浅い傾向にある。埋土は、土壌層Ⅱが堆積していた。

出土遺物　土師器の羽釜が１点（17）、Ｐ１から出土している（図版１）。17 は、口縁部と鍔が残存する。口縁部の立ち上がりは短く、鍔の位置も高い。色調はにぶい赤褐色を呈し、硬く焼き上がっている。

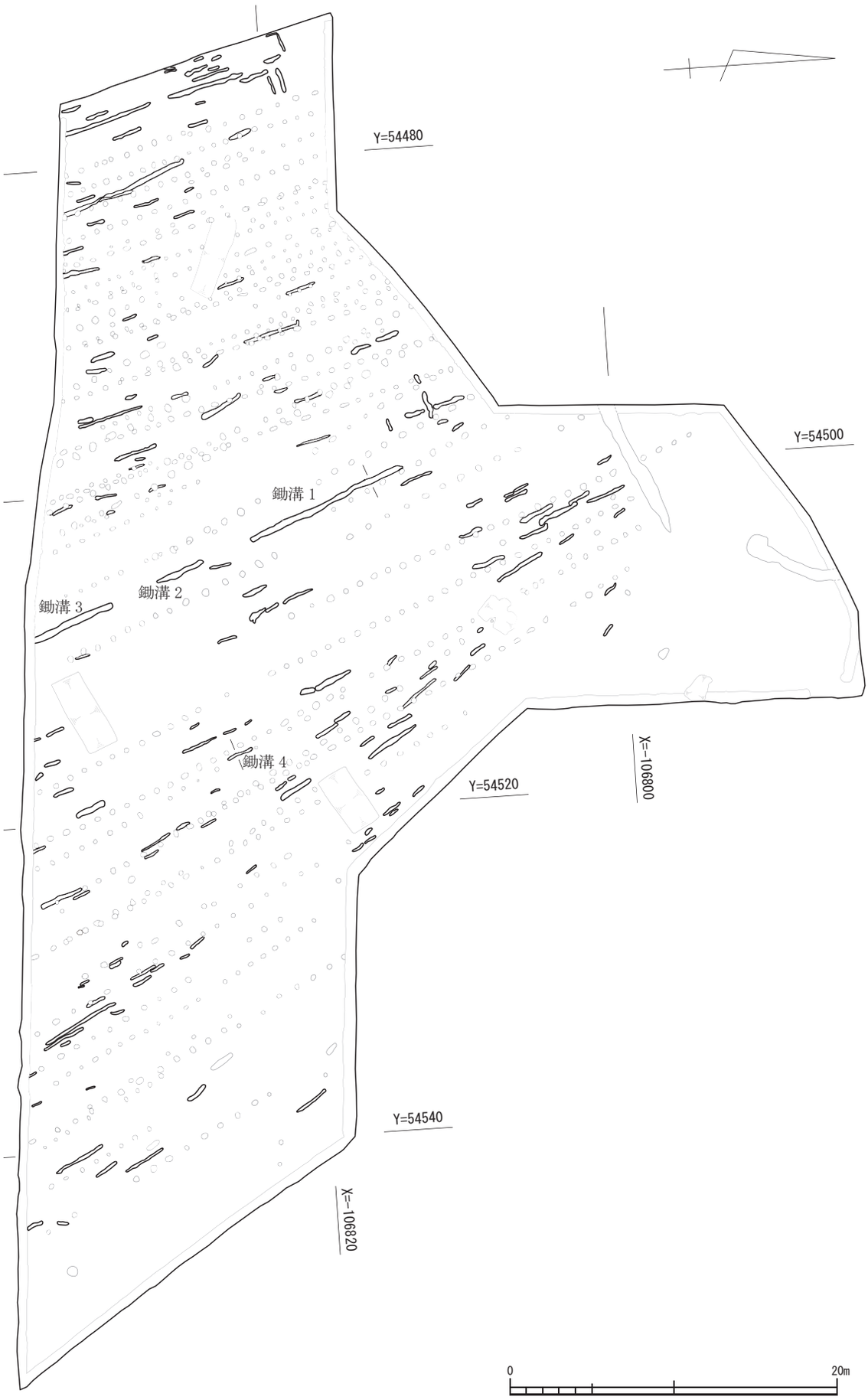
時　　期　出土遺物や埋土の特徴から、他の耕作痕列群と同様、13 世紀頃と考えられる。



第 56 図　耕作痕列 17



第 57 図　耕作痕列 16



第 58 図　1 区第 1 面　鋤溝群 1

⑵　鋤溝群

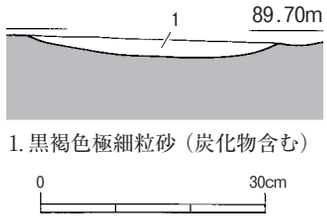
１区第１面では、複数の鋤溝を検出しており、一括して鋤溝群１として報告する（第 58 図）。

鋤溝群１

検出状況　鋤溝群１は、多少の粗密はあるが１区の西から東までの全域にわたり検出されている。鋤溝の幅は、30㎝～ 35㎝を測る。また、鋤溝群１における各鋤溝の主軸方向は、前述した耕作痕列群とほぼ同様で、やや西側に振れるが南北を指向する。鋤溝の中には耕作痕列の縁辺に沿って検出されたものも認められる。埋土は、耕作痕列と同様に土壌層Ⅱが堆積していた。

ここでは鋤溝群１のうち、鋤溝１～鋤溝４について報告する。

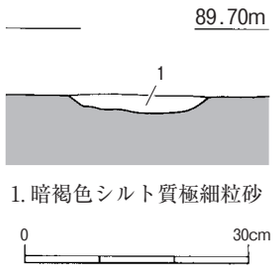
鋤溝１～鋤溝３は、調査区中央やや西寄りの位置で、北から順に一列に並んだ状態で検出されている。鋤溝１は延長 10.50 ｍ、幅 34㎝、深さ３㎝を測る（第 59 図）。鋤溝２は延長 3.20 ｍ、幅 35㎝で、鋤溝３は、延長 5.30 ｍ、幅 35㎝を測る。いずれもＮ 22° Ｗを示す。



第 59 図　鋤溝１断面

これらの鋤溝は、検出面において間隔が認められるが、同じ幅でありかつ一直線に並ぶことから、一連の遺構と考えられる。また、他の鋤溝に比して延長が長く、幅も広くなっている点は、特徴的である。

鋤溝４は、調査区中央やや東寄りの位置で検出した。延長 1.80 ｍ、幅 20㎝、深さ３㎝を測る（第 60 図）。当該鋤溝からは、土師器皿の口縁部から底部の破片が出土している。ただし、小片のため図化できなかった。耕作痕列の成立と同時に形成されたとみられる。



第 60 図　鋤溝４断面

時　　期　鋤溝群１の年代は、埋土が土壌層Ⅱである点や、出土遺物から 13 世紀頃に位置付けられる。

⑶　小穴

遺物が出土している小穴を数基確認している。ここでは、これらからの出土遺物を中心に報告する。報告する小穴は、Ｐ 01 ～Ｐ 09 の９穴である。

Ｐ 01

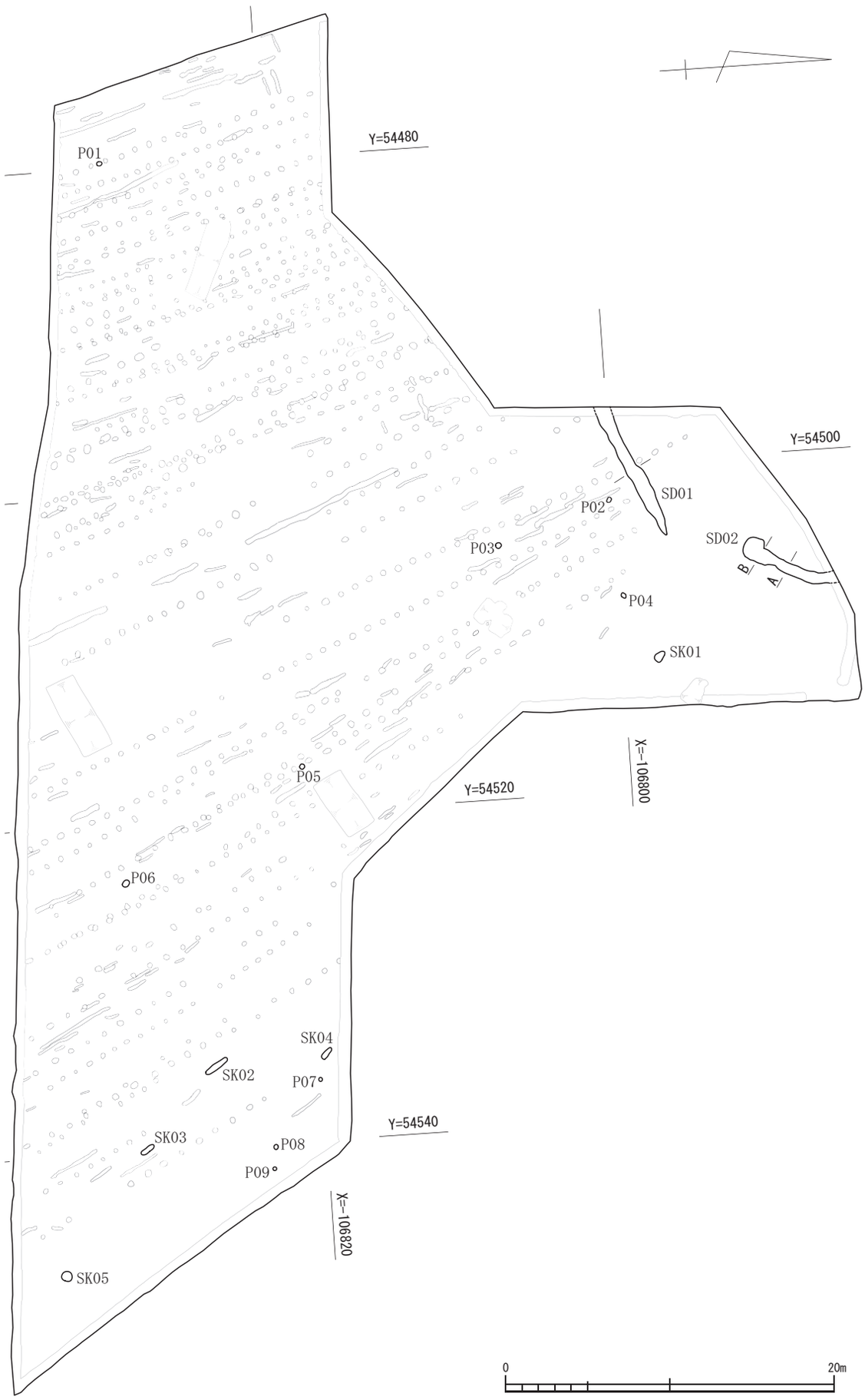
検出状況　調査区南西隅部で検出した（第 61 図）。耕作痕列群２の一列目とほぼ同一線上の南寄りに位置する。

出土遺物　土師器鍋の口縁部片（27）が出土している（図版１）。口縁部はやや外側に開き、口縁端部は面を持ちつつ、その両縁部はわずかに摘み出されている。

時　　期　出土遺物から 12 世紀後半～末に位置付けられると考えられる。

Ｐ 02

検出状況　調査区中央北側で検出した（第 61 図）。耕作痕列群 10 の１列目と２列目の北端部の間、Ｐ 03 の北側に位置する。



第 61 図　１区第１面　小穴・溝・土坑

出土遺物　須恵器椀の口縁部から底部にかけて残存する小片（25）が出土している（図版１）。底部は平底をなす。体部はわずかに内湾しつつ底部から外側に開きながら立ち上がり、口縁部は丸く収められている。体部と口縁部までの厚さはほぼ同じである。

時　　期　出土遺物から 12 世紀末～ 13 世紀初頭に位置付けられる。

Ｐ 03

検出状況　調査区中央北側で検出した（第 61 図）。耕作痕列群 10 の１列目と２列目の北端部の間、Ｐ 02 の南側に位置する。

出土遺物　土師器の小皿の口縁部から底部にかけて残存する破片（18）と皿の口縁部から底部にかけての破片（22）が出土している（図版１）。

18 は、底部に回転ヘラ切りの痕跡が残る。口縁部はやや外側に開きながら、同じ厚さで立ち上がり、口縁端部は丸く収められている。

22 は、口縁部～体部の残りは悪いが、底部には回転ヘラ切りの痕跡が残る。体部は外側に開きながら立ち上がり、口縁部はやや尖り気味に収められている。体部から口縁部には、ロクロナデの痕跡が残る。

時　　期　出土遺物から 12 世紀前半～ 13 世紀初頭に位置付けられる。

Ｐ 04

検出状況　調査区中央北東側で検出した（第 61 図）。耕作痕列群 10 の４列目北端部の東側、Ｐ 02・Ｐ 03 の東側に位置する。

出土遺物　須恵器椀の口縁部から体部にかけて残存する小片（26）が出土している（図版１）。体部は外側に開きながら立ち上がり、口縁部は丸く収められている。器壁は、体部から口縁部まではほぼ同じ厚さである。体部から口縁部にはロクロナデの痕跡が残る。

時　　期　出土遺物から、12 世紀末～ 13 世紀初頭に位置付けられる。

Ｐ 05

検出状況　調査区中央東寄りの南側で検出した（第 61 図）。耕作痕列群 10 の４列目のほぼ同一線上のやや中程に位置する。また、Ｐ 04 の南側、Ｐ 06 の北側に位置する。

出土遺物　土師器小皿の口縁部から底部にかけて残存する破片（19）が出土している（図版１）。底部には回転糸切り痕が残る。口縁部は外側に開きながら立ち上がり、端部は丸く収められている。器壁は、底部から口縁部にかけて、やや強く摘んでロクロから引き出されているため、中程がやや薄くなっている。

時　　期　出土遺物から、11 世紀末～ 12 世紀前半に位置付けられる。

Ｐ 06

検出状況　調査区中央東寄り南端付近で検出した（第 61 図）。耕作痕列群 10 の４列目と５列目の南側の間、かつＰ 05 の南側に位置する。

出土遺物　土師器小皿のほぼ完存する個体（20）と口縁部から底部にかけて残存する破片（21）が出土している（図版１）。

20 は、底部には回転糸切りの痕跡が残る。口縁部は、短く外側に開きながら立ち上がり、端部はやや

尖り気味に収められている。21 は、底部にナデの痕跡のみが残る。口縁部は短く外に開きながら立ち上がる。内外面にはヨコナデ調整がみられる。手捏ねによる成形によるか判然としない。

時　　期　出土遺物から、13 世紀頃に位置付けられる。

Ｐ 07

検出状況　調査区東端の北東隅部で検出した（第 61 図）。耕作痕列群 14 の２列目北端部の北東、Ｐ 08・Ｐ 09 の北西に位置する。

出土遺物　鉄製の煽止（Ｍ２）が出土している（図版３）。断面方形の金属棒の一方を曲げて体部に接着させて環を作り、鈎部を引っかける頭部を作る。もう一方の端部は欠損しているが、頭部から次第に細くなっていることから、おそらく打ち込むために尖端になるとみられる。

時　　期　出土遺物からは判断できないが、埋土が土壌層Ⅱであることから 13 世紀と考えられる。

Ｐ 08

検出状況　調査区東端の北東隅部で検出した（第 61 図）。耕作痕列群 14 の２列目北端部の北東に位置する。また、Ｐ 07 の南東、Ｐ 09 の北西に位置する。

出土遺物　須恵器椀の体部～底部にかけて残存する破片（23）が出土している（図版１）。底部は平高台になっており、回転糸切りの痕跡が残る。また、底部内面はやや落ち込む。

時　　期　出土遺物からは、11 世紀後半に位置付けられる。

Ｐ 09

検出状況　調査区東端の北東隅部で検出した（第 61 図）。耕作痕列群 14 の２列目北端部の北東、Ｐ 07・Ｐ 08 の南東に位置する。

出土遺物　須恵器椀の体部～底部にかけての破片（24）が出土している（図版１）。底部は平高台になっており、回転糸切りの痕跡が残る。また、底部内面はやや落ち込む。

時　　期　出土遺物からは、11 世紀後半に位置付けられる。

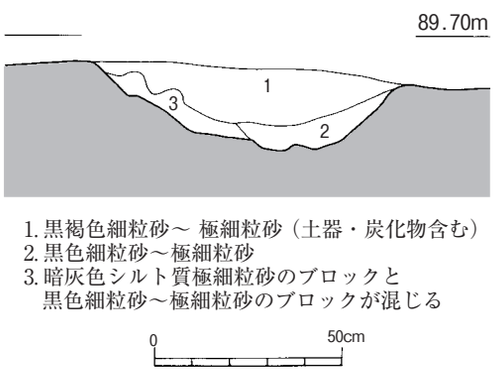
(4)　溝

ＳＤ 01・ＳＤ 02 の２条の溝を検出した（第 61 図）。

ＳＤ 01

検出状況　調査区北側中央部で検出した（第 61 図）。ＳＤ 02 の南西に位置し、耕作痕列群 10 の１列目・２列目と交差する。ＳＤ 01 はほぼ東西方向に延びる溝で、西側は調査区外へ続くとみられる。検出面が調査区北東側に向かって落ち込むのに従って、一方の溝の東側は次第に細くなって消えている。

形状・規模　検出した長さは、8.80 ｍである。検出面における幅は 83㎝を測り、横断面は逆台形をなす（第 62 図）。



第 62 図　SD01 断面

底部はやや丸みを帯び、深さは20cmを測る。底部の標高は、西端部で89.48ｍ、東端部で89.37ｍを測り、底部は西から東へ傾斜している。

埋没状況　埋土は３層に分けられる（第62図）。下部には、掘削時形成層である３層、機能時に堆積した黒色細粒砂～極細粒砂の２層が堆積する。上部には土器や炭化物を含む黒褐色砂層の１層が堆積しており、人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物　土師器・須恵器・白磁・土製品が出土している（図版１）。

土師器は、小皿（28）と皿（30・31）が出土している。

28は、口縁部から底部にかけて残存する破片である。器高は低く、底部は丸みを帯び、外面にはユビオサエの痕跡が残る。手捏ね成形によるものと見られる。30は、口縁部から底部にかけて残存する破片である。口縁部の立ち上がりは短く、端部はやや尖る。底部はやや平坦で、外面にナデの痕跡残る。ただし、28は上部層から、30は下部層から出土しており、30が時期的に微妙に遡る可能性を示唆する。

31は、口縁部から底部にかけて残存する破片である。底部外面にはナデ調整の痕跡が残る。31は、上層から出土している。

須恵器は、小皿（29）が出土している。

小皿の29は、完存する個体である。底部には、回転糸切りの痕跡が残る。口縁部は底部から内湾しながら外側に開き、短く立ち上がる。29は、32と共に上部層と下部層の境付近で出土している。

白磁は、碗の口縁部から体部にかけて残存する破片（32）が出土している。碗は、口縁端部外面にやや面を持ち、断面形が三角形状に肥厚する特徴を持ち、底部内面に沈線が認められる。

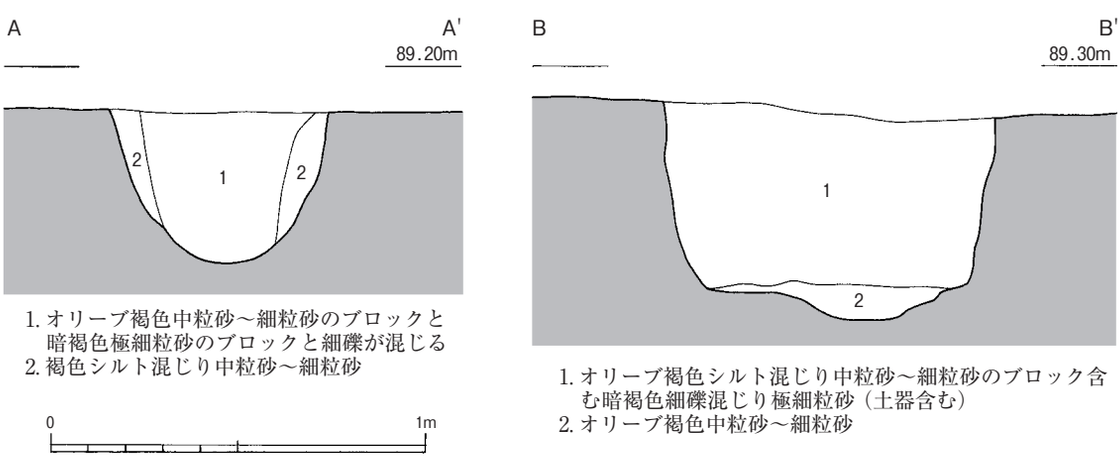
土製品は、土錘の破片（Ｄ３）が出土している（図版３）。残存長は3.6cm、幅1.9cm、通し穴の直径は４㎜を測る。外面はナデ調整される。後述する（第３章第２節）、土錘の中型に該当する。

時　　期　出土遺物から、12世紀末～13世紀初め頃に収まるものと考えられる。

ＳＤ02

検出状況　調査区北端中央部で検出した（第61図）。ＳＤ01の北東に位置する。ＳＤ02はほぼ南北を指向し、北側は調査区外へ続く。調査区北東側に向かって落ち込む基盤層上面で検出した。

形状・規模　検出した長さは、6.30ｍである。検出面の平面形状は、南西端部が土坑状の幅88cmの不整形の隅丸方形を呈し、ここから北東へ向かって幅50cm～60cmの溝が少し蛇行しながら延びている。



第63図　SD02断面

断面形は、南西端がほぼ箱形を呈し、最下部は丸みを帯びている。また、北東側の狭い部分はＵ字形をなす。検出面から深さは、南西端で 58cm、北東側は 40cmを測る（第 63 図）。底部の標高は、南西部で 89.64 m、北東部で 89.66 mを測り、底部はほぼ水平である。

埋没状況　南西端は、上層には土壌層Ⅲに由来するオリーブ褐色のシルト混じり中粒砂～細粒砂ブロックが含まれており、人為的に埋め戻されたとみられる。下層には同色の中粒砂～細粒砂が認められ、暗色化が進行していないことから、極短期間機能して堆積した可能性がある。一方、北東側部分は、調査区北東部の基盤層上面に見られる局所的な細礫の堆積を掘り込んでおり、埋土もこれに由来するブロックを含んでいる。同じく人為的に埋め戻されたと推測される。埋土の状況から判断すると、遺構の掘削は土壌層Ⅲ上面と考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版１）。

土師器は、鍋の口縁部から体部にかけての破片（34）が出土している。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は体部の器壁に比して肥厚する。口縁端部は外傾する面をもつが､面の中央部はごく僅かに窪む。体部には平行目のタタキ痕が残る。また、外側より穿孔された痕跡も残る。

須恵器は、椀の口縁部から体部にかけての破片（33）が出土している。体部から口縁部は外上方に開き、口縁端部を僅かに肥厚させ、丸く収められている。

時　　期　出土遺物から判断すると 12 世紀末～ 13 世紀初頭の位置付けが考えられる。

(5)　土坑

ＳＫ 01 ～ 05 の５基を検出した（第 61 図）。

ＳＫ 01

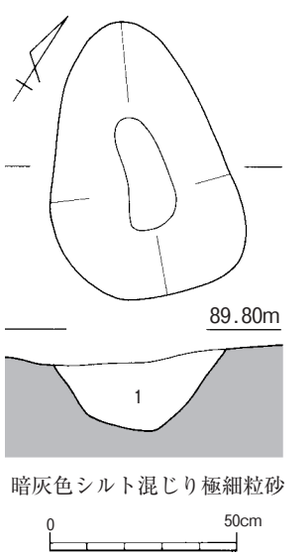
検出状況　調査区中央北端部の東寄りで検出した（第 61 図）。ＳＤ 01・ＳＤ 02 の南東に位置する。

形状・規模　検出した平面形状は、不整形な楕円状を呈し、やや南側が膨らみ、北側がやや尖る。検出した規模は、長軸方向で 74cm、その直交方向で 45cmを測る。断面形状はやや丸み帯びた逆台形状で、検出面からの深さは 22cmである（第 64 図）。

埋没状況　埋土は、土壌層Ⅲに相当する暗灰色シルト混じり極細粒砂が堆積していた。人為的に埋め戻された層とみられる。

出土遺物　須恵器椀の体部から底部にかけて残存する破片（38・39）が出土している（図版１）。38 は、底部は平高台をなし、見込み部分がやや一段落ち込む。39 は、底部が平底をなす。

時　　期　出土遺物から 12 世紀中頃以降に埋没したとみられるが、土壌層Ⅱが埋土であることから、13 世紀の位置付けが考えられる。



第 64 図　SK01

ＳＫ 02

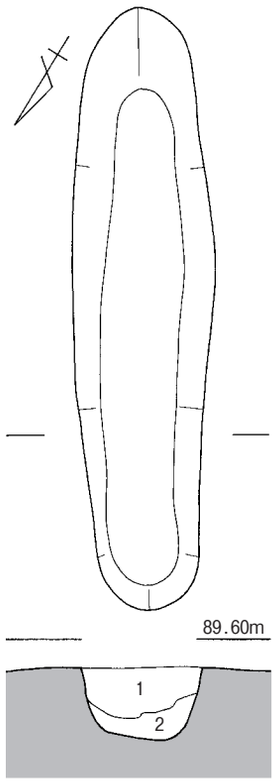
検出状況　調査区東端部で検出した（第 61 図）。ＳＫ 03 の北西部に位置し、耕作痕列群 14 の１列目と２列目北端部の間に位置する。

形状・規模　検出した平面形は、溝状をなす。その規模は、長軸方向で 1.60 m、その直交方向で 38cmを測る。断面形は逆台形をなし、検出面からの深さは 18cmである（第 65 図）。

埋没状況　埋土は、上から１層と２層からなる（第 65 図）。１層は土壌層Ⅱに相当する黒褐色シルト質極細粒砂である。２層は黒ボク層あるいは土壌層Ⅳがさらに擾乱を受けたものを基質とし、地山由来の 1cm以下のブロックが含まれる。２層はなんらかの人為的な掘削に伴って堆積したものと考えられる。

出土遺物　土師器皿の口縁部から底部の破片（36）が出土している（図版１）。底部は摩滅が激しく、調整痕は観察できない。口縁端部は、上方へ摘み出してやや尖る特徴をもつ。

時　　期　出土遺物と埋土から 13 世紀の位置付けが考えられる。



1. 黒褐色細粒砂質シルト
2. オリーブ褐色シルト質極細粒砂のブロック含む黒褐色シルト質極細粒砂

0　50cm

第 65 図　SK02

ＳＫ 03

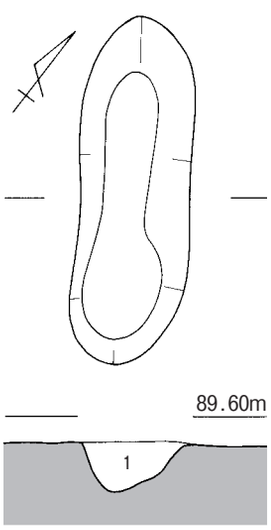
検出状況　調査区東端部で検出した（第 61 図）。ＳＫ 02 の南東部に位置し、また耕作痕列群 14 の１列目と２列目中央付近の間に位置する。

形状・規模　検出した平面形は、ＳＫ 02 より短い溝状を呈し、長軸方向で 94cm、短軸方向で 28cmを測る。断面形は丸みを帯びた逆台形状で、検出面からの深さは 13cmである（第 66 図）。

埋没状況　埋土は、土壌層Ⅱに相当する暗灰色シルト質極細粒砂である（第 66 図）。埋土下面を微視的に観察するとややこまかな凹凸が見られる。基盤層が何らかの掘削・耕作ないし、抜根のような作用により団粒状ないしブロック状に土が除去された可能性がある。

出土遺物　須恵器椀の体部から底部にかけての破片（40）が出土している（図版１）。40 は、底部に高台はなく回転糸切りの痕跡が見られ、見込み部には窪みがみられない。

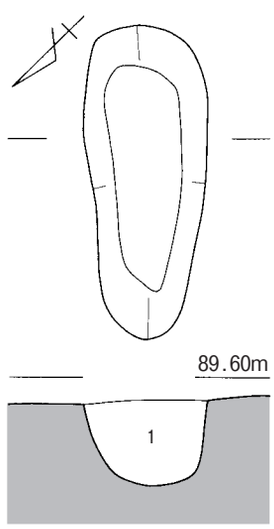
時　　期　出土遺物と埋土から 13 世紀の位置付けが考えられる。



1. 暗褐色シルト質極細粒砂

0　50cm

第 66 図　SK03



1. 黒褐色シルト質極細粒砂（炭化物・土器含む）

0　50cm

第 67 図　SK04

ＳＫ 04

検出状況　調査区東端部の北端寄りで検出した（第 61 図）。Ｐ 07 の北西に隣接し、位置し、ＳＫ 02 の北東、耕作痕列群 14 の２列目の北側に位置する。

形状・規模　検出した平面形状は、ＳＫ 02 より短い長楕円状を呈し、長軸方向で 83cm、その直交方向で 34cmを測る。断面形は丸みを帯びた逆台形をなし、検出面からの深さは 23cmである（第 67 図）。

埋没状況　埋土は、土壌層Ⅱに相当する黒褐色シルト質極細粒砂１層からなる。人為的に埋められたとみられる。

出土遺物　土師器椀の口縁部から体部にかけての破片（37）が出土している（図版１）。体部から口縁部にかけて内湾し、口縁部内外面にはロクロナデの痕跡が見られる。

時　　期　出土遺物と埋土から 13 世紀の位置付けが考えられる。

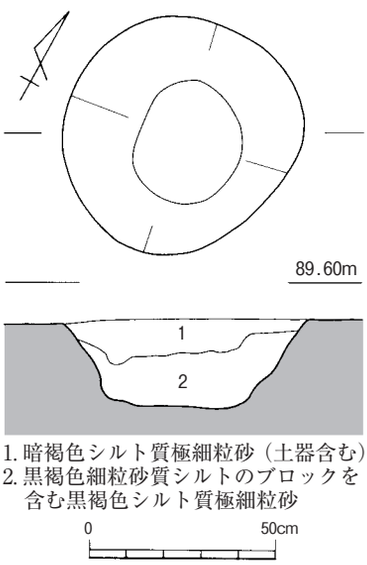
ＳＫ 05

検出状況　調査区東端部の南東隅部で検出した（第 61 図）。Ｐ 09 の南側に位置する。

形状・規模　検出した平面形は、円形状を呈し、検出面における平面規模は 63cm× 64cmを測る。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは 24cmである（第 68 図）。

埋没状況　埋土は、１層と２層の２層からなる（第 68 図）。１層は土壌層Ⅱに相当する暗褐色シルト質極細粒砂である。２層は、土壌層Ⅲあるいは土壌層Ⅳのブロックを含んでおり、淘汰が悪い。人為的に埋め戻されたとみられる。

検出状況　土師器皿の口縁部から底部にかけての破片（35）が出土している（図版１）。底部には回転糸切りの痕跡が残り、体部から口縁部にはロクロナデの痕跡が見られる。



第 68 図　SK05

時　　期　出土遺物と埋土から 12 ～ 13 世紀頃の位置付けが考えられる。

⑹　包含層（図版２・３）

遺構に伴わないが、残存状況が比較的良好な資料が遺物包含層より出土している。出土資料は、土器・土製品・金属製品である。

土　　器　土器は大きく弥生時代、古代、古代末～中世以降に区分できる。

弥生時代　弥生土器が出土している（図版２）。器種としては甕に限られる。

甕は２個体（41・42）出土している。41 は口縁部から体部にかけて残存する。口縁端部にキザミが施され、口縁部下には５条の篦描き平行沈線が施される。42 も口縁部から体部にかけて残存する。口縁端部にはキザミが施され、口縁部下には７条の篦書き平行沈線が施されている。体部外面はヘラミガキが施されている。いずれも弥生時代前期に位置づけられる。

古　　代　製塩土器と須恵器が出土している（図版２）。

製塩土器（43）は、口縁部のみの破片が出土している。器壁の内外面にはユビオサエの後ナデ調整された痕跡が見られる。口縁部の断面形状は方形を呈する。

須恵器は、杯Ｂ（44・45）、壺Ｌ（46）、椀（47）、杯Ａ（48）が出土している。

杯Ｂは44と45の２点が出土している。44は底部から口縁部までロクロナデの痕跡が残る。高台は、粘土紐を貼り付け、ロクロナデを施して整形する。45は、底部から口縁部までロクロナデの痕跡が残る。高台は、粘土紐を貼り付け、ロクロナデを施して整形する。高台基部の両側、すなわち底部の接点部分には、粘土紐の接着・成形時にはみ出た余分な粘土を切り取った痕跡が残る。

壺Ｌは、46の口縁部から頸部の破片の１点が出土している。頸部は一体に作らず、体部に貼り付け接合している。口縁は、内側端部を上方に摘み出す。なお、外面は透明の自然釉が全体にかかり、色調は灰黄褐色を呈しており、志方窯跡群製品に胎土・焼成が類似する。

椀は、47の底部片１点のみが出土している。底部には静止糸切りの痕跡が残るが、高台部分の整形によってやや不明瞭になっている。神出窯跡群の製品とみられる。

杯Ａは、48の１点のみ確認できた。48は、口縁部から底部にかけての破片である。底部には、回転ヘラ切りの痕跡が残る。器高は低くなり、口径は13.1cmと復元できる。

古代末以降　土師器・須恵器・磁器・陶器が出土している（図版２・３）。

土師器は、 皿（49～51）・小皿（52）・鍋（53～55）が出土している（図版２）。

皿は、49～51の３点が図化できた。いずれも口縁部から底部にかけての破片である。49は、底部がナデ調整され、口縁部もヨコナデ調整されている。おそらく、手捏ね成形によると考えられる。50は、底部にはユビオサエの痕跡が残り、手捏ね成形である。51は、底部はナデ調整され、口縁部もヨコナデ調整されている。おそらく、手捏ね成形によると考えられる。

小皿は、52の１点が図化できた。52は、口縁部から底部にかけての破片である。口縁部から体部にかけては、ロクロナデの痕跡が残り、底部には回転糸切りの痕跡が残る。

鍋は、53～55の３点が代表的なものとして取り上げられる。53は、口縁部から体部にかけての破片である。頸部は逆「く」の字に屈曲し、口縁端部は面を持つ。口縁端部の外縁部はごくわずかに摘み出される。体部外面には平行文のタタキ目が残る。54は、口縁部から体部にかけての破片である。頸部は逆「く」の字に屈曲し、体部には平行文のタタキ目が残る。口縁端部は面を持つが、内縁部分を上方にやや摘み出す。55も口縁部から体部にかけての破片である。頸部は、逆「く」の字形に屈曲し、体部には平行のタタキ目が残る。体部内面には、ほぼ楕円状に近い平面形の窪みがみられ、当て具の痕跡とみられる。口縁端部は、端部外縁を外側に水平に摘み出されている。いわゆる播但型甕に該当する。

須恵器は、椀（56～66）・小椀（73）・鉢（67～72）・小皿（74～82）が出土している（図版２・３）。

椀は、56～64と73の10点が出土している。椀は、平高台をもつ56～60と、平高台をもたない61～65に分けられる。56～60は、底部には回転糸切りの痕跡が残り、見込み部分は窪む。61～65は、底部には回転糸切りの痕跡が残り、見込みには窪みが見られない。また、体部も直線的に外側にむけて立ち上がる。

特筆すべきは64の出土位置で、調査区北端の落ち込み部分の最下層、すなわち土壌層Ⅲの最下層で出土しており、落ち込み部分の埋没時期の下限を示す。66は、口縁部から体部にかけての破片である。なお、56の底部は、焼成後に穿孔されている。

73は口縁部から体部にかけての破片であるが、体部はやや内湾しながら短く立ち上がる。また、体部への焼成前の穿孔が一カ所確認できた。

鉢は、67～72の６点が出土している。67～72は、いずれも口縁部の破片ないし、口縁部から体部の破片であるが、口縁部の断面形状が方形を呈するものと、端部内縁が上方に立ち上がり、かつ外縁やや外

側下方に張り出して三角形状を呈するもの、と大きく２つに分かれる。68 ～ 71 が前者で、67 と 72 が後者である。前者は、69 のみが口縁部端面が上方を向くが、それ以外は端面が外側に傾く。後者は、67 の口縁端部内縁が上方へ低く立ち上がるが、72 は同部分が高く立ち上がり、差異が認められる。

小皿は、72 ～ 82 の 10 点を図化することができた。78・79・82 はほぼ完存する。

小皿は大きく２つに分かれる。一つは、底部がわずかに突出して極小の平高台状になり、かつ体部がやや内湾しながら外側へ立ち上がり、器高が２㎝を超えるもの。もう一つは、底部は円盤状で高台状の突出はなく、体部が外側へ比較的直線的に短く立ち上がり、器高が 2㎝未満の低いものである。74・78 は前者に、それ以外の 75 ～ 77・79 ～ 82 は後者に含まれる。いずれも底部は回転糸切りの痕跡が残る。

磁器は、 白磁皿（83）・白磁碗（84 ～ 91）・青磁碗（92 ～ 94）が出土している（図版３）。

白磁皿は、83 の１点のみ出土した。口縁部から体部の破片である。体部はやや内側に屈曲し、口縁部は直口になる。屈曲部の体部内面には沈線状の段を有する。無文で、施釉はやや厚めにかかる。

白磁碗は、84 ～ 91 の８点が出土した。84 ～ 86 は口縁部の破片で、口縁端部は断面三角形状の肉厚な玉縁を有する。87・86 は、いずれも体部外面から高台部にかけて回転ヘラケズリを施すが、高台部の削りはわずかである。87 は高台部を欠くが、88 と同様のものである。釉薬は高台部には及ばない。底部内面にはいずれも沈線を施す。89 は、口縁部から体部にかけての破片で、口縁部には小さな玉縁を有し、無文である。90 は、底部から体部の破片で、高台部は削り出し成形である。高台部外面が比較的直に、また内面はやや膨らみながら内面を削っている。91 は、高台部が削り出しよって、細く高く直立する。釉薬は、基本的には体部と高台部境まで施される。また、見込み部分には櫛描き文が施されている。

青磁碗は 92 ～ 94 の３点が出土している。92 は、口縁部から体部の破片で、口縁端部は少し外反する。体部外面には、素地に縦方向の粗い複数条の篦描きにより退化した蓮弁文が表現されている。また、内面には、短く細かな櫛描き文が施されている。92 は質の悪い龍泉窯系青磁碗である。93 は、口縁部が丸くやや肉厚で直口となる。胎土は密で灰色を呈し、釉薬はオリーブ色を帯び、無文である。94 は、器壁はやや肉厚で、わずかに内湾し、口縁端部は丸くおさめられている。体部外面には、軸と剣頭がずれた退化した細蓮弁を表現した劃花文が施される。

陶器は、天目茶碗（95）と香炉（96）が出土している（図版３）。

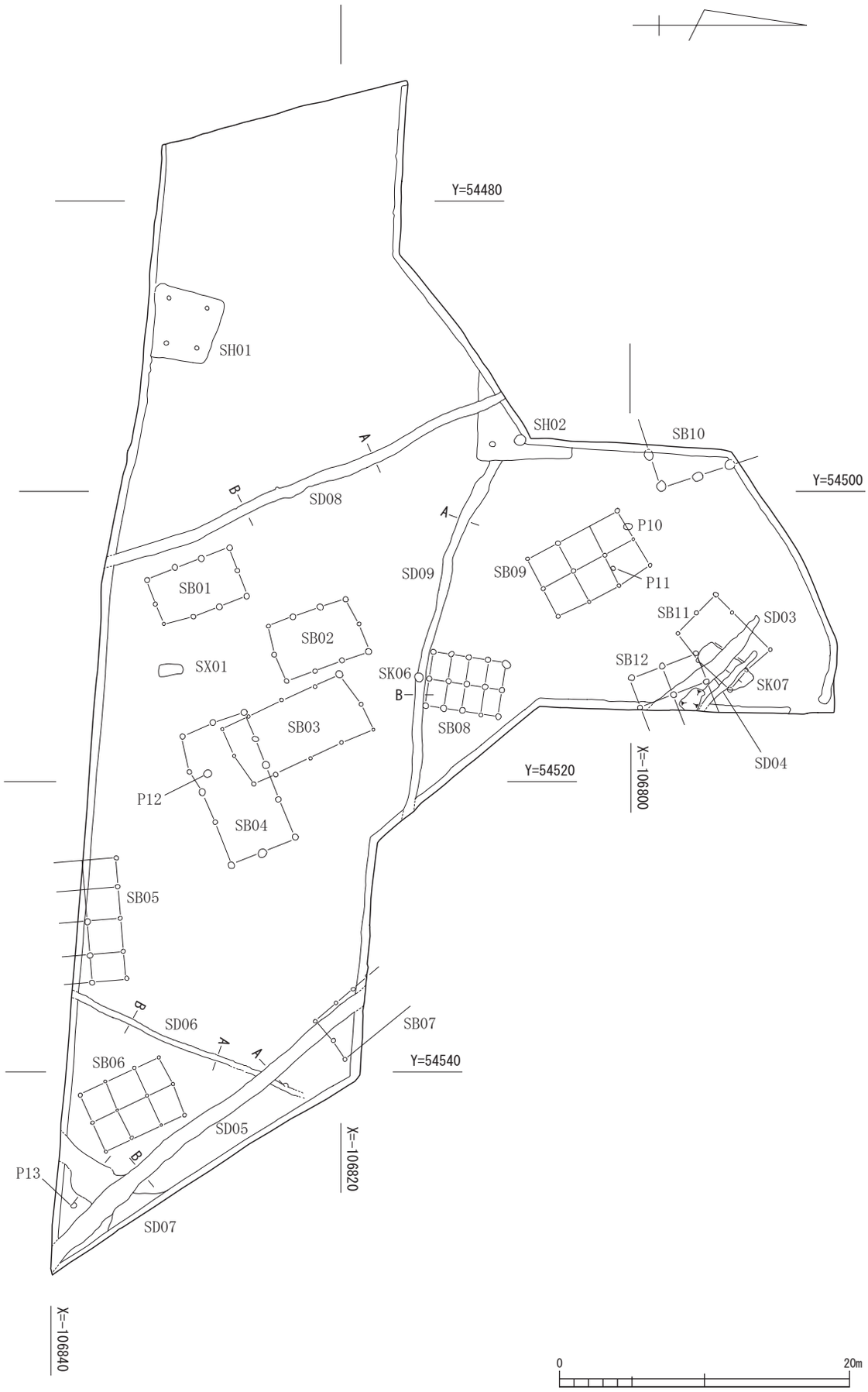
天目茶碗は、口縁部から体部かけて残存する。体部は緩やかに屈曲して、口縁端部は短くくびれて外反する。胎土は密で淡黄灰色を呈する。美濃焼である。

香炉は、底部外面には、回転糸切りの痕跡残る。また、底部の縁辺部には、３点の１㎝大の丸い粘土塊を潰して等間隔に貼り付けて脚部を作られている。底部内面にはロクロナデによる螺旋状の溝が残り、施釉されない。体部外面には、わずかに灰釉が施された痕跡が残る。瀬戸焼である。

土 製 品　土錘（Ｄ１・Ｄ２・Ｄ４～Ｄ６）が出土している（図版３）。

土錘は幅の大きさから大きく大型・中型・小型に区別できる。大型は幅３㎝以上のもので、Ｄ１が該当する。残存長 7.45㎝、通し穴の直径７㎜を測り、最も大きい。次に中型は幅 1.8㎝～ 1.9㎝を測るもので、Ｄ２が該当する。小型は幅が 0.9㎝～ 1.3㎝のもので、Ｄ４～６が該当する。Ｄ５は完存し、長さ 2.8㎝、幅 1.1㎝、通し穴の直径３㎜を測る。いずれも外面はナデ調整されている。

金属製品　煽止（Ｍ１）１点が出土している（図版３）。Ｍ１は、軸部の断面は、径 3.6㎝の円形をなす。その両端を欠くが、残存部から軸両端部にそれぞれ環頭が互い違いに取り付く形状が復元できる。


Y=54480
SH01
SH02
SB10
Y=54500
A
B
SD08
A
P10
SD09
SB09
P11
SB01
SB11
SD03
SB02
SB12
SX01
SK06
SK07
B
SB08
SB03
SD04
Y=54520
X=-106800
P12
SB04
SB05
B
SD06
SB07
A
A
SB06
Y=54540
SD05
X=-106820
B
P13
SD07
X=-106840
0
20m

第69図　1区第2面

３．第２面

遺構としては、竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・墓が検出されている。

⑴　竪穴住居

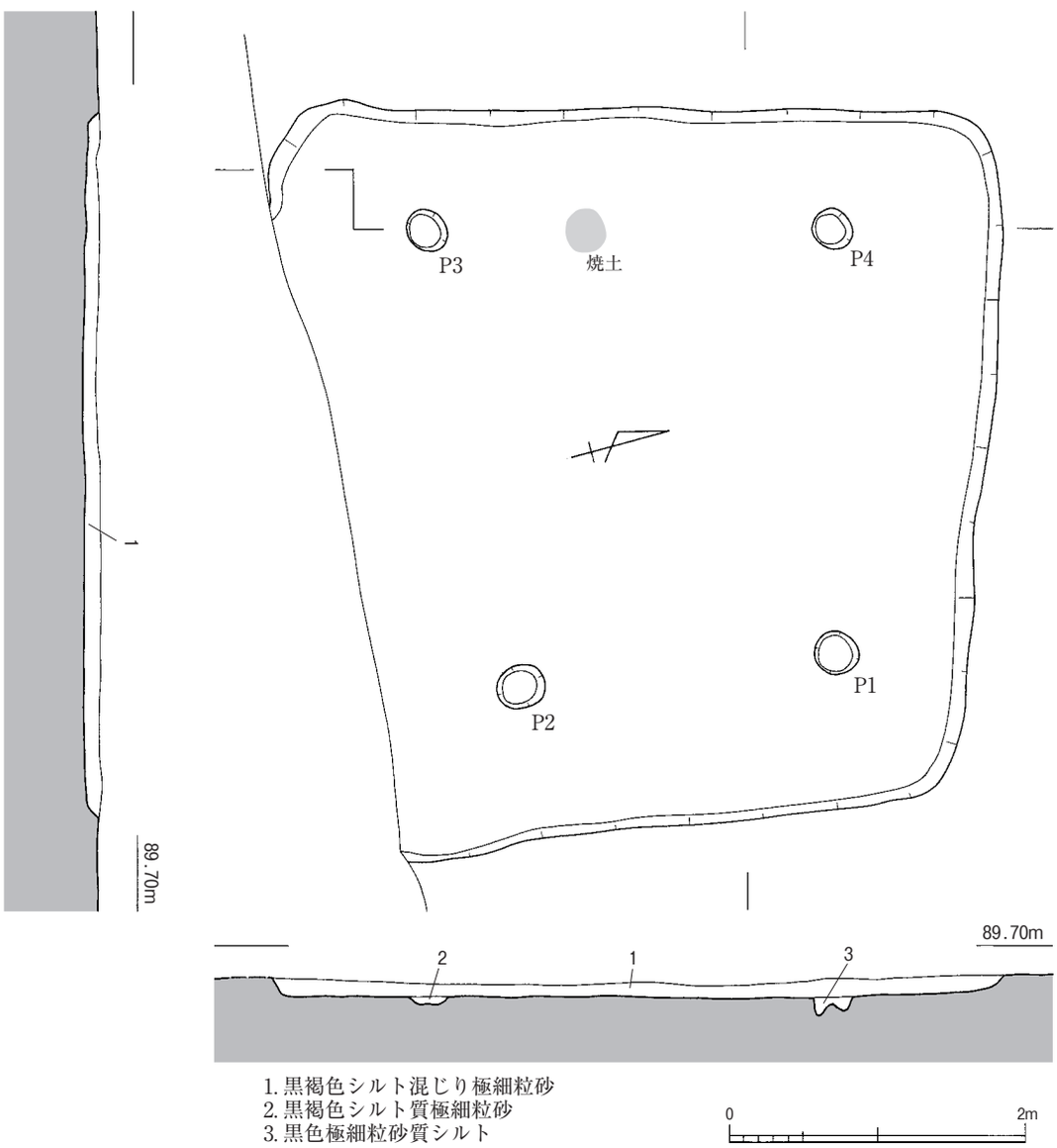
ＳＨ01

検出状況　調査区西側南端部で検出した(第69図)。ＳＨ02の南側、ＳＢ01・ＳＤ08の西側に位置する。住居跡の大半を検出しているが、南端から南東隅は検出できなかった。

形状・規模　検出した平面形は隅丸方形を呈する（第70図)。検出規模は、南北方向は５ｍを測り、東西方向は南側で５ｍ、北側で4.6ｍを測る。検出面からの深さは約12㎝を測り、その標高は89.36ｍである。

付属施設　主柱穴・焼土集中部を検出した。

主柱穴は、４穴（Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４）検出した。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４は方形プランに合わせてほぼＬ字型に並ぶが、Ｐ２のみがやや北側へずれている。各柱穴の床面における平面形は、ほぼ円形を呈



第70図　SH01

第 71 図　SH01 検出作業

する。平面規模は、Ｐ１が 28cm × 30cm、Ｐ２が 28cm × 30cm、Ｐ３が 28cm × 28cm、Ｐ４が 28cm × 28cmを測る。深さはＰ１が９cm、Ｐ２が９cm、Ｐ３が６cm、Ｐ４が 12cmを測る。柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間は 2.16m、Ｐ２－Ｐ３間は 3.12 m、Ｐ３－Ｐ４間は 2.74 m、Ｐ４－Ｐ１間は 2.81m を測る。

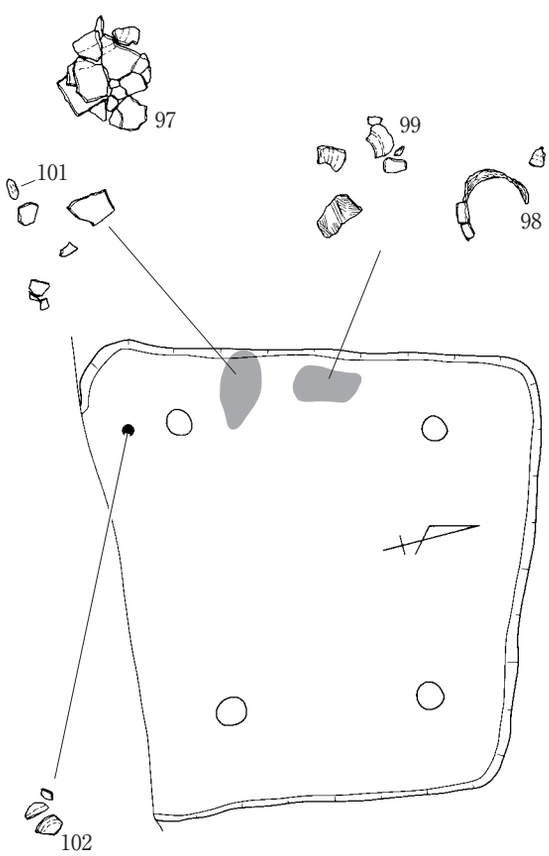
焼土集中部は、ＳＨ 01 の西側で検出された。Ｐ３・Ｐ４の間に 30cm × 28cmの範囲に焼土が集中する部分が認められ、この周辺には後述する甕などの遺物が出土している（第 72 図）。カマドが存在した可能性が考えられる。

埋没状況　主柱穴から柱が抜き取られた後、黒褐色細粒砂質からシルト質極細粒砂が堆積していた。その後住居跡全体に、各黒褐色シルト混じり極細粒砂層の１層が堆積していた。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版４）。

土師器は、甕（97・98）・短頸壷（99）・椀（100）・甑（101）が出土している。

甕は、97 と 98 の２点が出土している。97 と 98 は、口縁部から体部にかけての破片で、97 は部分的ではあるが底部付近まで残り、やや長胴な様相を示す。97 と 98 は、いずれも頸部は明瞭に屈曲せず、体部から頸部にかけて緩やかにすぼみ、口縁部で再びやや外反し、口縁端部をやや尖らせながら丸くおさめられている。また、いずれも外面は体部から頸部にかけてタテハケメ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整により仕上げられている。内面は頸部から頸部付近の体部はヨコハケメ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整により仕上げられている。97 を観察すると、体部下半はヨコナデツケ後タテナデされている。口縁は、水平ではなくやや歪んで波打つ部分がみられる。



第 72 図　SH01　土器出土位置

短頸壷は、99 の１点が出土している。99 は、口縁部から底部にかけての破片である。外面は、やや摩滅が激しいが、底部から外面にかけてヘラケズリを施し、さらに体部にタテハケメを施す。底部内面はタテヘラケズリが施され、体部から口縁部にかけてヨコナデされている。なお、外面は二次的な被熱が考えられ、器面が剥離しにぶい赤褐色を呈する。

椀は、100 の１点が出土している。100 は、口縁部から体部にかけての破片である。体部はやや内湾しつつ外側に広がる。口縁部は外面の強いヨ

コナデ調整により体部より薄くなり、外面にわずかな段差が認められる。内外面ともにナデ調整される。なお、口縁部端面にはごくわずかな深さの刻みが細かく施されている。

甑は、101 の１点が出土している。101 は、把手の片方のみの破片で、端部の一方は体部にから剥離した部分が露出し、体部に差し込む形で接合したことがわかる。外表面の調整はハケメ調整が施される。把手部分の断面形状はやや肉厚な楕円形を呈している。

須恵器は、杯Ｈ蓋（102）・杯Ｈ（103・104）・高杯（105）が出土している。

杯Ｈ蓋は､102 の１点が出土している。102 は､天井部から口縁部にかけて残存する。天井部は平坦で、回転ヘラケズリが施され、中央部はナデ調整されている。口縁部は、体部からやや垂下し、その内面には凹線が一条施されている。また、天井部内面には、置台の痕跡と思われる輪状の圧痕が認められる。

杯Ｈは、103 と 104 の２点が出土している。103 は、受部から体部の破片であるが、口縁部は欠失している。104 は、口縁部から底部までの破片で、口縁端部は欠失している。いずれも体部外面下半にはヘラケズリが施されるが、103 はロクロを利用したとみられる一方、104 は静止した状態で施した部分が認められる。

高杯は、105 の１点が出土している。105 は、脚柱部のみの破片で、脚端部や杯部は欠失している。外面には、櫛歯状工具で細かな波状文を施した後、波状文を挟むような形で二条の沈線を上下に施す。ただし、上方の沈線は波状文に重なる。

時　　期　出土遺物、特に須恵器から６世紀後半に位置付けられる。

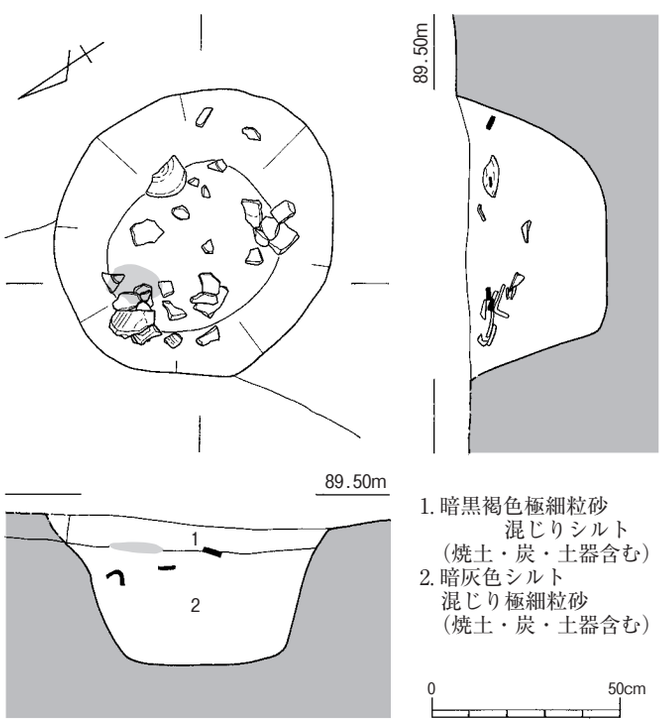
ＳＨ０２

検出状況　調査区西側南端部で検出した(第69図)。ＳＢ10の南側、ＳＢ09の西側に位置する。ＳＨ02は、ＳＤ 08 の北端部で切られ、逆にＳＤ 09 の西端部を切っている。今回、住居跡南側から東側にかけてＬ字型に検出できたが、残りの住居跡の凡そ半分は調査区外になる。なお西南隅は検出できなかった。

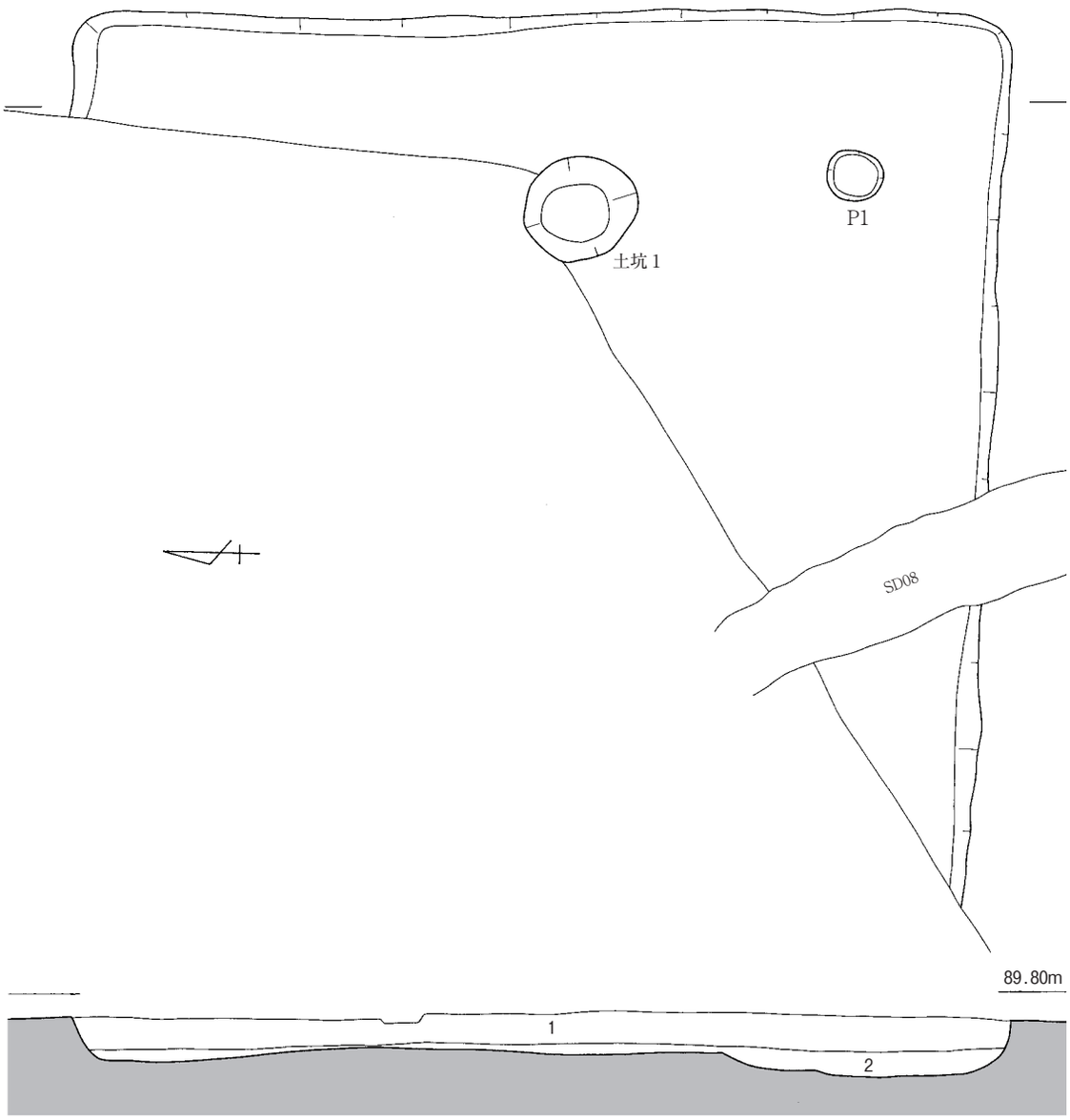
形状・規模　検出した部分から推測すると、平面形は隅丸方形を呈する（第 74 図)。検出規模は、南北方向で 6.60 ｍを測り、東西方向は少なくとも 6.20 ｍ以上を測る。検出面からの深さは、最も深い南側で 42㎝を測り、その標高は 89.18m である。一方、北側は検出面からの深さは 32㎝、その標高は 89.32m である。

付属施設　主柱穴・土坑を検出した。

主柱穴は、１穴（Ｐ１）検出した。本来は４穴からなると考えられるが、調査区内に存在する可能性のある西側および北側の２穴においては検出できなかった。柱穴の床面での平面形はやや楕円形を呈



第 73 図　SH02　土坑 1



1. 黄褐色シルト混じり暗褐色シルト質極細粒砂
2. 黄褐色シルトブロック含む暗黒灰色シルト混じり極細粒砂

0　2m

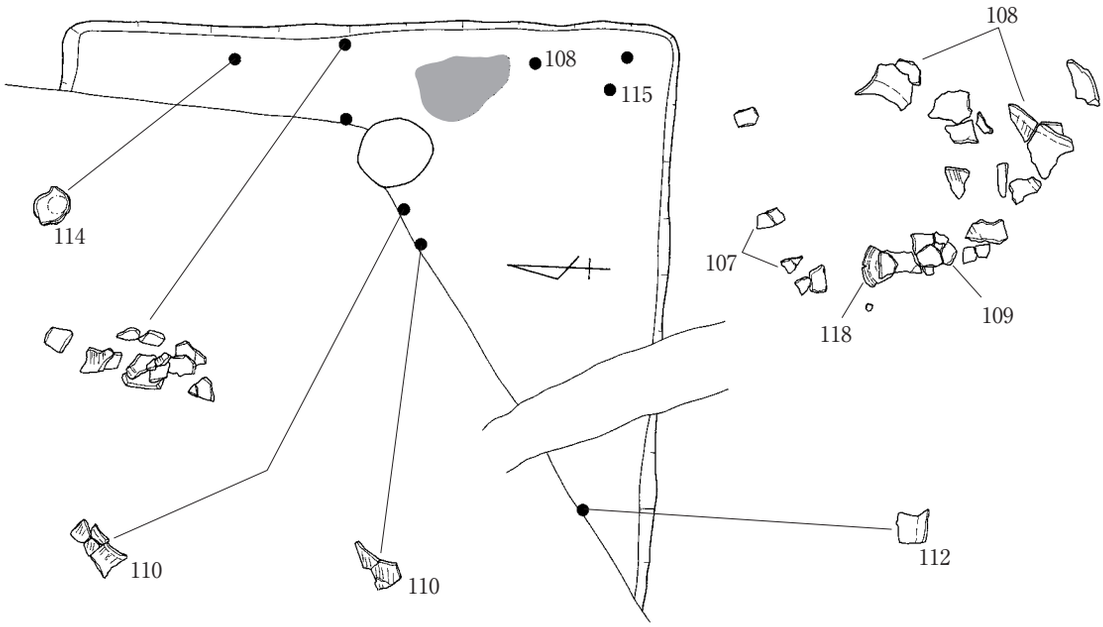
第 74 図　SH02

し、平面規模は 44cm× 32cmを測る。検出面からの深さは 32cmを測り、底部の標高は 89.18 mである。

土坑は、１基（土坑１）検出した（第 73 図）。土坑１は、ＳＨ 02 の西側中央部に位置し、後述する住居跡埋土上層を除去した面で検出されている。検出面における平面形はほぼ円形で、平面規模は 75cm× 75cmである。断面形はやや丸みを帯びた逆台形で、検出面からの深さは 37cmを測る。

土坑１の埋土は２層からなり、上層は暗褐色極細粒砂混じりシルト、下層は暗灰色シルト混じり極細粒砂である。いすれの層にも焼土・炭・土器が含まれるが、主に上層からの遺物の出土が顕著である。

埋没状況　埋土は１層と２層に区分できる。１層は、基盤層由来の黄褐色シルトが混じる暗褐色シルト質極細粒砂で、埋め戻し土と見られる。一方、２層は基盤層由来の黄褐色シルトがブロックで含まれる暗黒灰色シルト混じり極細粒砂である。住居の一整地土と見られる。主柱穴から柱が抜き取られた後、柱穴は埋まり、黒褐色細粒砂質からシルト質極細粒砂が堆積する。なお、１層除去後、住居跡東側で土器が集中して出土している（第 75 図）。



第 75 図　SH02　土器出土位置

出土遺物　土師器・須恵器・石器が出土している（図版４・７）。

土師器は、甕（106 ～ 113）・小型甕（114）・甑（115）が出土している（図版４）。

甕は､106 ～ 113 の８点が出土している。106 ～ 110・112・113 は口縁部から体部にかけての破片である。111 のみ、底部から体部にかけての破片である。住居跡から出土した甕は、口縁部から頸部にかけての形態と製作技法から、大きく３種類に分類できる。

１種類目は、頸部を「く」の字に屈曲させ、口縁部を外反させて口縁端部に面を持つものである。体部は丸く膨らむとみられる。体部外面にはやや細かい目のタテハケメ調整を施す。体部内面は板状工具でタテナデし、頸部内面の特に屈曲部下方にヨコハケメ調整を施して、頸部を屈曲させている。これに該当するのが、106・107 である。

２種類目は、頸部は明瞭に屈曲せず、体部から頸部にかけて緩やかにすぼみ、口縁部で再びやや外反し、口縁端部をやや尖らせながら丸くおさめるものである。体部はあまり丸く膨らまない。また、外面には体部から頸部にかけてやや粗い目のタテハケメ調整を施す。内面には、体部を縦方向ないし横方向のヘラケズリが施される。そして頸部から頸部付近の体部内面はヨコハケメ調整が施されている。これに該当するものが 108 ～ 110 である。ただし、109 は、頸部内面が板状工具でナデツケされている。

３種類目は、頸部を「く」の字に屈曲させ、口縁部を外反させて、端部はやや尖らせながら丸くおさめるものである。体部は、丸く膨らむとみられる。体部外面はタテハケメが施される。内面は、体部から口縁部までヨコナデ調整されている。これに該当するのが 112・113 である。なお、111 は、外面には粗い目のタテハケメが、内面にはヘラケズリが施されている。このような特徴や、胎土や焼成から、111 は２種類目の甕の底部と考えられる。なお、106・111・113 は土坑１から出土している。それ以外は、1 層除去面で出土している。

小型甕は、114 の１点が出土している。114 は体部から底部の破片で、樽型状に体部の中程が最大幅になり、底部は平坦になる。体部外面は棒状工具でナデツケ調整され、内面は基本的にヨコナデ調整されているが、体部が最も膨らむ中腹部はタテナデ調整されている。1 層を除去した面から出土している。

甑は、115 の１点が出土している。115 は、把手の片方のみの破片で、端部の一方は体部にから剥離した部分が露出し、体部に貼り付けて接合したことがわかる。外表面にはユビオサエの後が明瞭に残る。なお、把手部分の断面形状は、やや扁平な楕円形を呈している。土坑１より出土している。

須恵器は、杯Ｈ蓋（116・117）・杯Ｈ（118・119）が出土している（図版４）。

第 76 図　出土土器実測作業

杯Ｈ蓋は、116 と 117 の２点が出土している。116 と 117 はいずれも天井部から口縁部にかけての破片で、笠型に天井部が膨らむ形状になる。天井部から体部にかけての３分の１程度までは、回転ヘラケズリが施されている。口縁端部は、端面を窪ませ、段がつけられている。117 は、天井部内面に置台の痕跡と思われる輪状の圧痕が認められる。両個体は、土坑１から出土している。

杯Ｈは、118 と 119 の２点が出土している。118 は底部から口縁部かけての破片で、119 は、口縁部から体部にかけての破片である。118 は、底部外面に回転ヘラケズリが施されている。なお、118 は土師器甕 108 の下層から出土し、119 は２層内から出土している。

石器は、叩石（Ｓ１）が出土している（図版７）。Ｓ１は、花崗岩製で、平面形も断面形も同様に比較的整った楕円形を呈し、面の広い部分が２面あり、やや平坦になっている。この部分の中央あたりには細かな凹凸がみられ、敲打による痕跡の可能性が考えられる。

時　　期　出土遺物、特に須恵器から６世紀後半に位置付けられる。

⑵　掘立柱建物跡

計 12 棟（ＳＢ 01 ～ＳＢ 12）を検出した（第 69 図）。

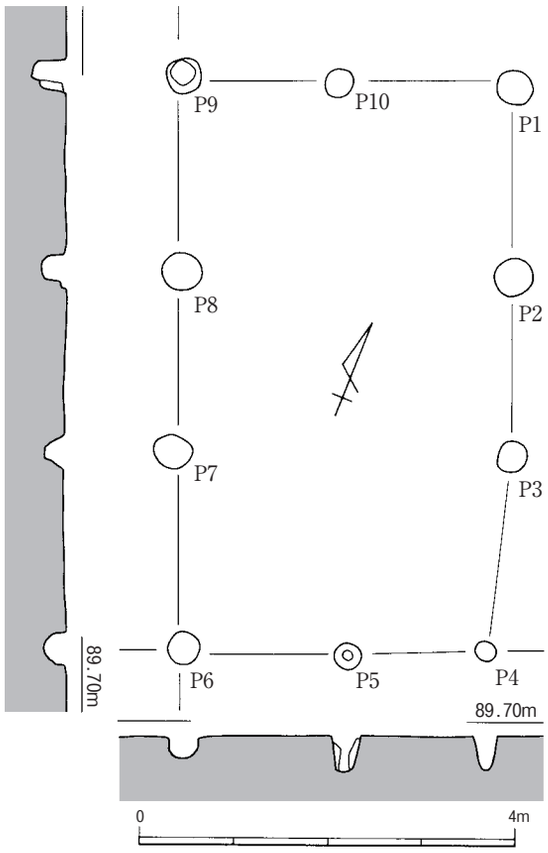
ＳＢ 01

検出状況　調査区南側中央西よりで検出した（第 69 図）。ＳＢ 02 の南西側かつ、ＳＢ 03・04 の西側に位置する。基本的に建物全体が検出されている。

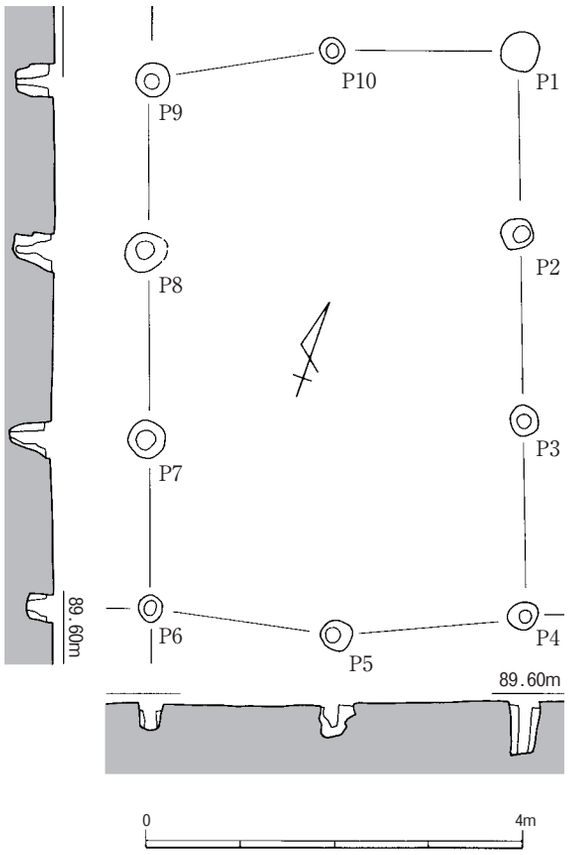
形状・規模　梁行２間、桁行３間の側柱建物である（第 77 図）。Ｐ４を除き、梁行・桁行は平行・直角関係にあり、全体として比較的整った長方形をなす。北側梁行（Ｐ１－Ｐ９間）は 3.55 ｍ、西側桁行（Ｐ６－Ｐ９間）は 6.15 ｍを測り、両者を基準とした建物の面積は 21.8㎡である。各柱間の規模は、第２表の通

第２表　SB01　規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.05	6.10	2.03
	Ｐ２－Ｐ３	2.00		
	Ｐ３－Ｐ４	2.05		
南梁行	Ｐ４－Ｐ５	1.50	3.25	1.63
	Ｐ５－Ｐ６	1.75		
西桁行	Ｐ６－Ｐ７	2.10	6.15	2.05
	Ｐ７－Ｐ８	1.90		
	Ｐ８－Ｐ９	2.15		
北梁行	Ｐ９－P10	1.65	3.55	1.78
	P10－Ｐ１	1.90		



第 77 図　SB01



第 78 図　SB02

りである。棟軸方向は、西桁行を基準としてＮ 21°Ｗを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形で、平面規模は直径 28cm～ 44cmを測る。検出面からの深さは 24cm～ 40cmである。柱痕が認められたのは、Ｐ５（直径 12cm）とＰ９（直径 24cm）に限られる。

出土遺物　出土遺物は認められなかった。

時　　期　出土遺物からは判断できないが、棟軸方向がＳＢ 09 と共通することから、12 世紀中頃に位置付けられる。

ＳＢ 02

検出状況　調査区中央部で検出した（第 69 図）。ＳＢ 01 の北東側かつ、ＳＢ 03・ＳＢ 04 の西側に位置する。基本的に建物全体が検出されている。ただし、北側一列の柱穴（Ｐ１・Ｐ 10・Ｐ９）は、整理段階で明らかとなったものである。

形状・規模　梁行２間、桁行３間の側柱建物である（第 78 図）。桁行は平行関係にある。梁行は東半のみが直角関係にあるが、西半は鈍角になる。平面形は、概ね長方形をなす。梁行は、北側（Ｐ１－Ｐ９間）は 4.00 ｍ、南側（Ｐ４－Ｐ６）は 4.05 ｍを測る。桁行は、東側（Ｐ１－Ｐ４間）が 6.10 ｍ、西側（Ｐ６－Ｐ９間）が 5.65 ｍを測る。建物の面積は東桁行と南梁行を基準とすると 24.7㎡である。各柱間の規模は第３表の通りである。棟軸方向は、東桁行を基準としてＮ 20°Ｗを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形で、検出面での平面規模は径 28cm～ 44cmを測る。検出面からの深さは 28cm～ 44cmで、Ｐ４が最も深く 56cmを測る。柱痕は、Ｐ２（径 16cm）、Ｐ３（径 14cm）、Ｐ４（径 14cm）、Ｐ５（径 16cm）、Ｐ６（径 16cm）、Ｐ７（径 20cm）、Ｐ８（径 20cm）、Ｐ９（径 16cm）で認

第３表　SB02 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.00	6.10	2.03
	Ｐ２－Ｐ３	2.00		
	Ｐ３－Ｐ４	2.10		
南梁行	Ｐ４－Ｐ５	2.05	4.05	2.03
	Ｐ５－Ｐ６	2.00		
西桁行	Ｐ６－Ｐ７	1.80	5.65	1.88
	Ｐ７－Ｐ８	2.00		
	Ｐ８－Ｐ９	1.85		
北梁行	Ｐ９－Ｐ10	2.00	4.00	2.00
	Ｐ10－Ｐ１	2.00		

められた。

出土遺物　出土遺物は認められなかった。

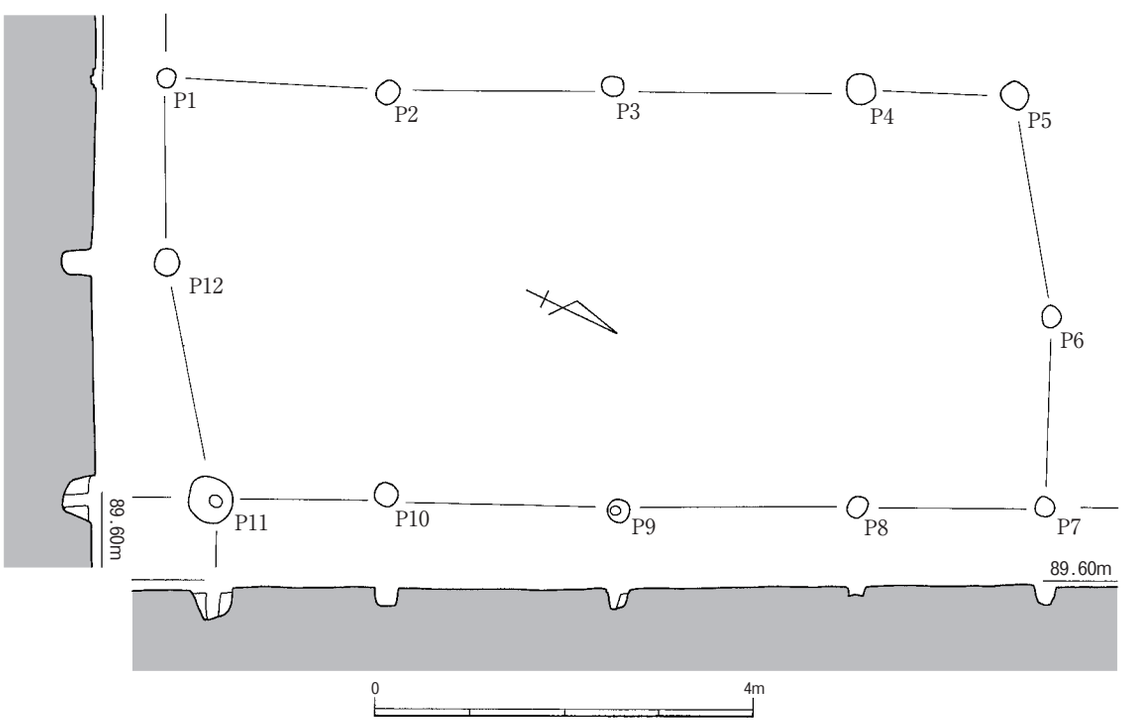
時　　期　出土遺物からは判断できないが、棟軸方向がＳＢ 09 と共通することから、12 世紀中頃に位置付けられる。

ＳＢ 03

検出状況　調査区中央部で検出した（第 69 図）。ＳＢ 01 の北東側かつ、ＳＢ 01・ＳＢ 02 の東側に位置し、南端部はＳＢ 04 の西半と重なる。基本的に建物全体が検出されている。

形状・規模　梁行２間、桁行４間の側柱建物である（第 79 図）。桁行は平行関係にある。梁行については、梁中央の柱となるＰ６とＰ 12 が、梁の外側柱を結ぶ直線（Ｐ５－Ｐ７間、Ｐ１－Ｐ 11 間）よりも外側に位置する。そのため、桁行に対して梁行はやや鈍角になる。西半は鈍角になる。

平面形は、ほぼ長方形をなす。梁行は、直線距離にして南側（Ｐ１－Ｐ 11 間）が 4.55 m、北側（Ｐ



第 79 図　SB03

第４表　SB03 規模一覧

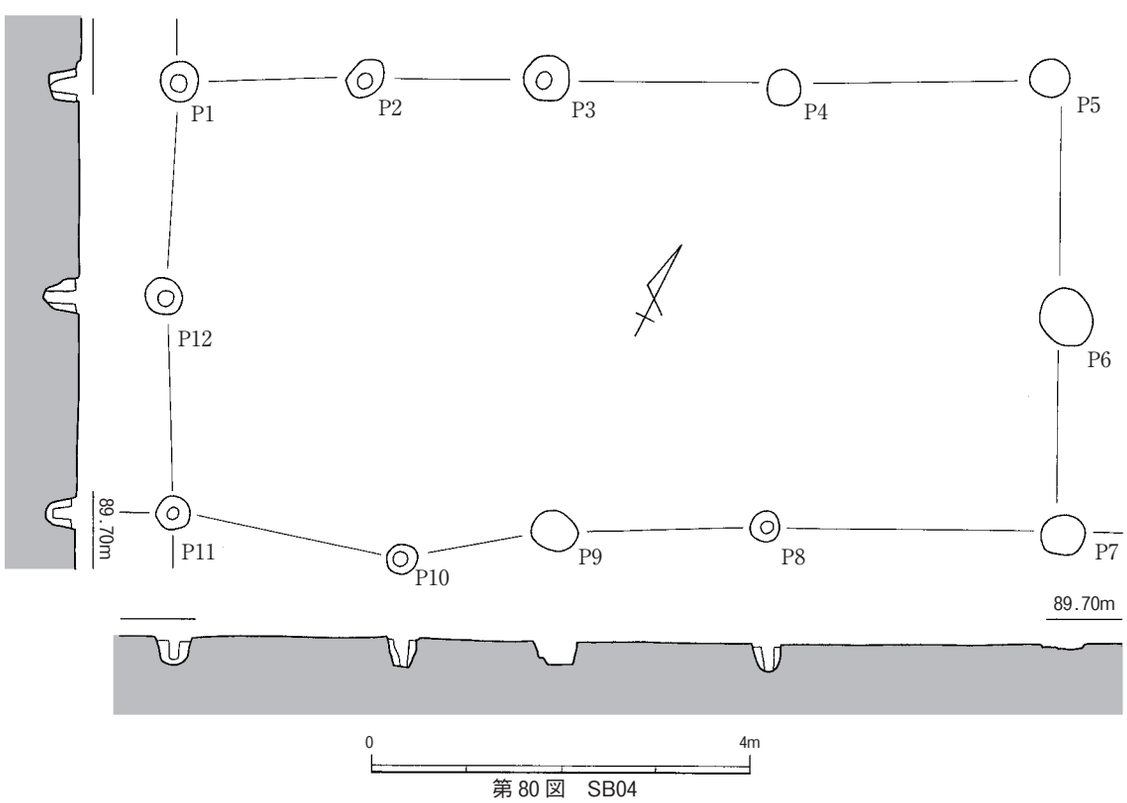
	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
西桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.40	9.10	2.27
	Ｐ２－Ｐ３	2.40		
	Ｐ３－Ｐ４	2.65		
	Ｐ４－Ｐ５	1.65		
北梁行	Ｐ５－Ｐ６	2.35	4.35	2.17
	Ｐ６－Ｐ７	2.00		
東桁行	Ｐ７－Ｐ８	2.00	8.85	2.21
	Ｐ８－Ｐ９	2.50		
	Ｐ９－Ｐ10	2.50		
	Ｐ10－Ｐ11	1.85		
南梁行	Ｐ11－Ｐ12	2.60	4.55	2.27
	Ｐ12－Ｐ１	1.95		

５－Ｐ７）が4.35ｍを測る。桁行は、西側（Ｐ１－Ｐ５間）が9.10ｍ、東側（Ｐ７－Ｐ11間）が8.95ｍを測る。建物の面積は西桁行と南梁行を基準とすると40.5㎡である。各柱間の規模は第４表の通りである。棟軸方向は、東桁行を基準としてＮ25°Ｗを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形で、検出面での平面規模は概ね直径24㎝で、Ｐ11が最も大きく48㎝を測る。検出面からの深さは、概ね12㎝～24㎝で、Ｐ11・Ｐ12が最も深く32㎝を測る。柱痕は、Ｐ９（径12㎝）、Ｐ11（径16㎝）に認められた。

出土遺物　出土遺物は認められなかった。

時　　期　出土遺物からは判断できないが、棟軸方向がＳＢ09と共通することから、12世紀中頃に位置付けられる。



第80図　SB04

第５表　SB04 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.00	9.40	2.35
	Ｐ２－Ｐ３	2.00		
	Ｐ３－Ｐ４	2.55		
	Ｐ４－Ｐ５	2.85		
東梁行	Ｐ５－Ｐ６	2.50	4.80	2.40
	Ｐ６－Ｐ７	2.30		
南桁行	Ｐ７－Ｐ８	3.20	9.60	2.40
	Ｐ８－Ｐ９	2.25		
	Ｐ９－P10	1.65		
	P10－P11	2.50		
西梁行	P11－P12	2.35	4.65	2.32
	P12－Ｐ１	2.30		

ＳＢ 04

検出状況　調査区中央部で検出した（第 69 図）。ＳＢ 01 の東側かつ、ＳＢ 03 の南側に位置する。本建物跡の北半はＳＢ 03 の南端と部分的に重なる。基本的に建物全体が検出されている。

形状・規模　梁行２間、桁行４間の側柱建物である（第 80 図）。桁行・梁行は概ね平行・直角関係にあり、平面形はほぼ整った長方形をなす。梁行は、西側（Ｐ１－Ｐ 11 間）が 4.65 m、東側（Ｐ５－Ｐ７）が 4.80 mを測る。桁行は、北側（Ｐ１－Ｐ５間）が 9.40 m、南側（Ｐ７－Ｐ 11 間）が 9.60 mを測る。建物の面積は、南桁行と東梁行を基準とすると 46.08㎡である。各柱間の規模は第５表の通りである。棟軸方向は、北桁行を基準としてＮ 110°Ｗを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形で、検出面での平面規模は直径 32㎝～ 48㎝を測る。Ｐ６が最も大きく、56㎝を測る。検出面からの深さは、概ね 32㎝～ 44㎝である。柱痕は、Ｐ１（径 18㎝）、Ｐ２（径 18㎝）、Ｐ３（径 18㎝）、Ｐ８（径 14㎝）、Ｐ 10（径 18㎝）、Ｐ 11（径 12㎝）、Ｐ 12（径 16㎝）で認められた。

出土遺物　出土遺物は認められなかった。

時　　期　出土遺物からは判断できないが、棟軸方向がＳＢ 05 と共通することから、13 世紀頃の廃絶と位置付けられる。

ＳＢ 05

検出状況　調査区南端の東側中央寄りで検出した（第 69 図）。ＳＢ 04 の南側かつ、ＳＢ 06 の西側に位置する。ＳＢ 05 は、建物の北側の一部分を検出したのみで、南側は調査区外に続くと見られる。

形状・規模　桁行４間、梁行は少なくとも１間が確認できる総柱建物である（第 81 図）。梁行・桁行は確認できる範囲では、平行・直角関係にあり、比較的整った平面形をなす。梁行は、東側にＰ５－Ｐ８の１間分が検出できたのみで、2.35 mを測る。桁行は、北側（Ｐ１－Ｐ５間）が 8.40 mを測る。検出できた南側桁行の一部分（Ｐ６－Ｐ８間）は 4.25 mを測る。建物の面積は、北桁行と東梁行を基準とすると、少なくとも 19.74㎡以上になる。各柱間の規模は第６表の通りである。棟軸方向は、北桁行を基準としてＮ 95°Ｗを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形で、検出面での平面規模は直径 28㎝～ 42㎝を測る。検出面からの深さは、32㎝～ 44㎝を測る。柱痕は、確認できたすべての柱穴（Ｐ１～Ｐ８）に認められた。その

直径は、Ｐ１が16cm、Ｐ２が18cm、Ｐ３が16cm、Ｐ４が16cm、Ｐ５が18cm、Ｐ６が16cm、Ｐ７が16cm、Ｐ８が16cmである。

出土遺物　土師器・須恵器が出土している（図版５）。

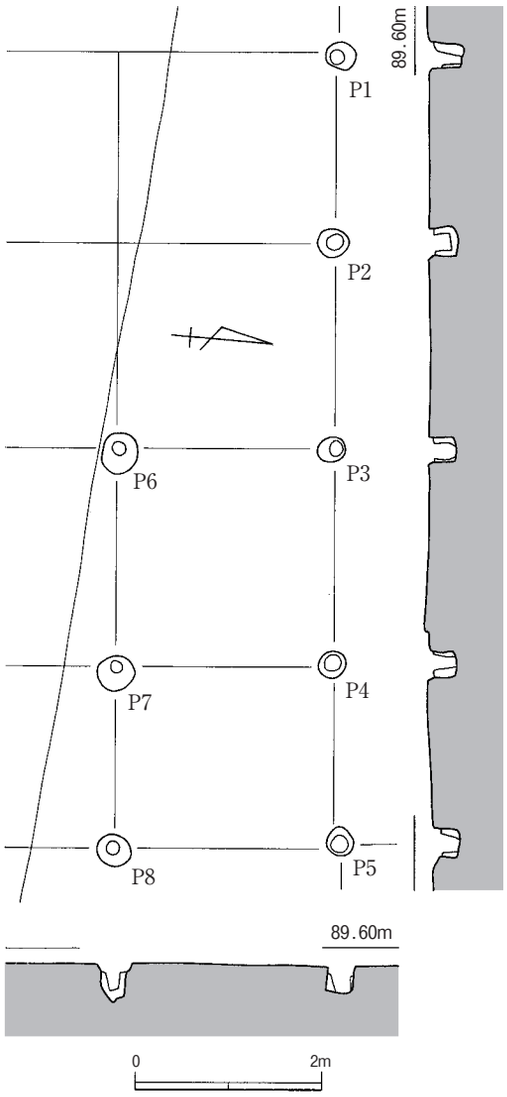
土師器は、皿（120）と小皿（121）が出土している。

皿は、Ｐ２の柱痕部より120の１点が出土している。120は、口縁部から底部にかけて残存する。底部には回転糸切りの後、板ナデされた痕跡が残る。体部は、底部から外側へ開きながら直線的に口縁部まで延び、口縁端部が丸く収められている。内外面にはロクロナデの痕跡が残る。

小皿は、Ｐ４の柱痕部より121の１点が出土している。121は、完存する。底部外面にユビオサエの後ナデ調整された痕跡が残り、手捏ね成形であることがわかる。

須恵器は、椀（122）が出土している。椀は、Ｐ６の柱痕部より122の１点が出土している。122は体部から底部にかけての破片である。底部は、平高台で回転糸切りの痕跡が残る。底部内面は、一段窪むようである。

時　　期　出土遺物から判断すると、少なくとも13世紀頃には廃絶していたことがわかる。



第81図　SB05

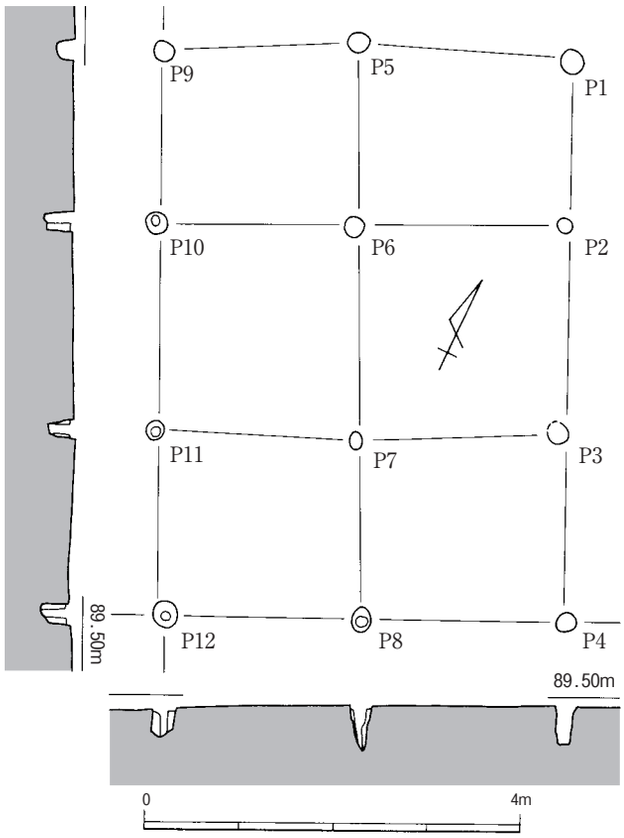
第６表　SB05規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.00	8.40	2.10
	Ｐ２－Ｐ３	2.20		
	Ｐ３－Ｐ４	2.30		
	Ｐ４－Ｐ５	1.90		
南桁行	Ｐ６－Ｐ７	2.35	4.25	2.12
	Ｐ７－Ｐ８	1.90		
東梁行	Ｐ５－Ｐ８	2.35	2.35	2.35

ＳＢ06

検出状況　調査区南東隅部で検出した（第69図）。ＳＤ05の西側、ＳＤ06の南東側に位置する。基本的に建物全体が検出されている。

形状・規模　梁行２間、桁行３間の総柱建物である（第82図）。桁行・梁行は概ね平行・直角関係にあり、平面形はほぼ整った長方形をなす。梁行は、北から順に、Ｐ１－Ｐ９間は4.40ｍ、Ｐ２－Ｐ10間は4.40ｍ、Ｐ３－Ｐ11間は4.30ｍ、Ｐ４－Ｐ12間は4.35ｍを測る。桁行は東から順にＰ１－Ｐ４間は5.95ｍ、Ｐ５－Ｐ８間は6.25ｍ、Ｐ９－Ｐ12間は6.10ｍである。建物の面積は中央桁行と北から２列



第 82 図　SB06

目の梁行を基準とすると 27.5㎡である。各柱間の規模は第７表の通りである。棟軸方向は、中央桁行を基準としてＮ 27°Ｗを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形で、検出面での平面規模は、直径 16cm～28cmを測る。検出面からの深さは、20cm～48cmである。柱痕は、Ｐ８（径 16cm）、Ｐ10（径 12cm）、Ｐ 11（径 12cm）、Ｐ 12（径 12cm）で認められた。

出土遺物　出土遺物は認められなかった。

時　　期　出土遺物からは判断できないが、棟軸方向がＳＢ 01・ＳＢ 02 と近似することから、12 世紀中頃の廃絶と考えられる。

第７表　SB06 規模一覧

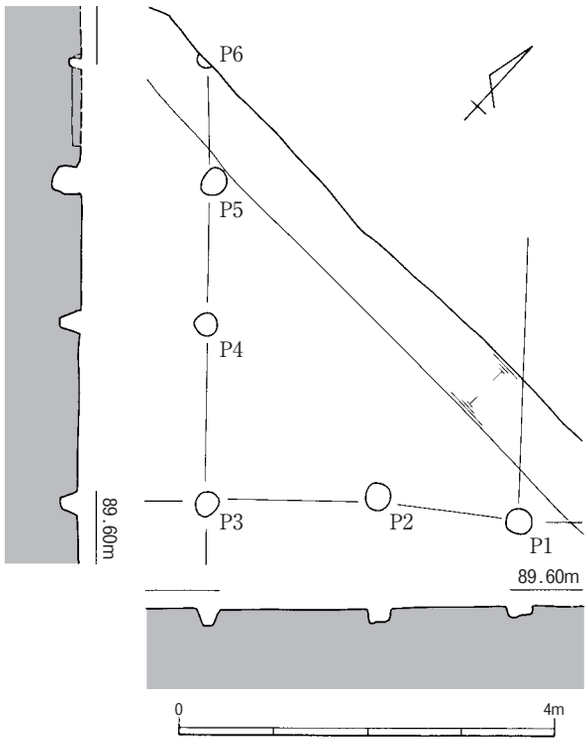
	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.75	5.95	1.98
	Ｐ２－Ｐ３	2.20		
	Ｐ３－Ｐ４	2.00		
中央桁行	Ｐ５－Ｐ６	2.00	6.25	2.08
	Ｐ６－Ｐ７	2.30		
	Ｐ７－Ｐ８	1.95		
西桁行	Ｐ９－P10	1.85	6.10	2.03
	P10－P11	2.25		
	P11－P12	2.00		
１列目梁行	Ｐ１－Ｐ５	2.30	4.40	2.20
	Ｐ５－Ｐ９	2.10		
２列目梁行	Ｐ２－Ｐ６	2.25	4.40	2.20
	Ｐ６－P10	2.15		
３列目梁行	Ｐ３－Ｐ７	2.20	4.30	2.15
	Ｐ７－P11	2.10		
４列目梁行	Ｐ４－Ｐ８	2.20	4.35	2.17
	Ｐ８－P12	2.15		

ＳＢ 07

検出状況　調査区東端部の北東隅で検出した（第 69 図）。ＳＤ 06・ＳＢ 06 の北側に位置し、ＳＤ 05 とは北端部で部分的に重なる。建物の南西部分をＬ字形に検出しており、その他は北側の調査区外へ続くと考えられる。

形状・規模　部分的に検出したため、少なくとも梁行は２間、桁行３間の側柱建物である（第83図）。桁行・梁行は概ね平行・直角関係にあり、平面形はほぼ整った形を示す。南東梁行（Ｐ１－Ｐ３間）は3.30ｍを測り、南西桁行（Ｐ３－Ｐ６間）は4.80ｍを測る。両者を基準とすると、建物の面積は少なくとも15.84㎡以上になる。各柱間の規模は第８表の通りである。棟軸方向は、南西桁行を基準としてＮ40°Ｗを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形で、検出面での平面規模は、直径24㎝～28㎝を測る。検出面からの深さは、12㎝～32㎝である。柱痕については確認できなかった。



第83図　SB07

出土遺物　出土遺物は認められなかった。

時　　期　出土遺物からは時期を判断できないが、ＳＤ05の北端部と重なることから、この溝の開削時期には建物として廃絶していたと推測できる。

後述するが、ＳＤ05出土遺物から、ＳＤ05は11世紀後半には開削され、13世紀頃には埋没する可能性がある。調査区北側断面では、Ｐ６がＳＤ05の最上層よりも下層に位置することから、少なくとも11世紀後半頃には廃絶していたと考えられる。

第８表　SB07規模一覧

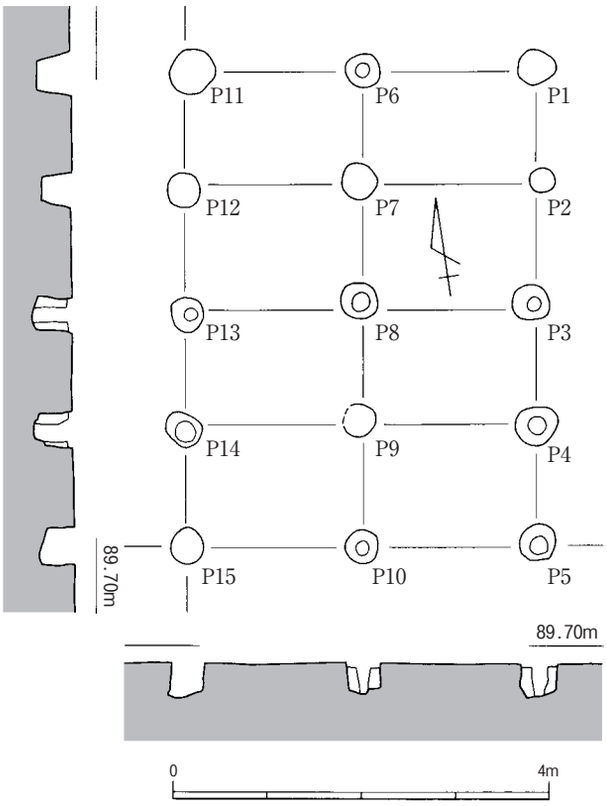
	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
南東梁行	Ｐ１－Ｐ２	1.50	3.30	1.65
	Ｐ２－Ｐ３	1.80		
南西桁行	Ｐ３－Ｐ４	1.95	4.80	1.60
	Ｐ４－Ｐ５	1.50		
	Ｐ５－Ｐ６	1.35		

ＳＢ08

検出状況　調査区中央部東寄りで検出した（第69図）。ＳＢ09の南側、ＳＢ02・ＳＢ03の北側に位置し、南梁行がＳＤ09の北側に隣接する。基本的に建物全体が検出されている。

形状・規模　梁行２間、桁行４間の総柱建物である（第84図）。桁行・梁行は概ね平行・直角関係にあり、平面形はほぼ整った長方形をなす。梁行は、概ね3.70ｍ～3.85ｍを測り、桁行は概ね5.15～5.20ｍを測る。具体的には、梁行は北から順に、Ｐ１－Ｐ11間は3.75ｍ、Ｐ２－Ｐ１２間は3.85ｍ、Ｐ３－Ｐ13間は3.70ｍ、Ｐ４－Ｐ14は3.75ｍ、Ｐ５－Ｐ15は3.80ｍである。桁行は東から順にＰ１－Ｐ５間は5.20ｍ、Ｐ６－Ｐ10間は5.15ｍ、Ｐ11－Ｐ15間は5.15ｍである。

建物の面積は中央桁行と北から２列目の梁行を基準とすると19.8㎡である。特徴的なのは、柱穴間距離が梁行は1.85ｍ～1.90ｍであるのに対し、桁行の柱間距離が1.28ｍ～1.30ｍと短くなっている点で



第 84 図　SB08

ある。各柱間の規模は第９表の通りである。棟軸方向は、中央桁行を基準としてＮ８°Ｅを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形で、検出面での平面規模は、直径は 36cm～ 40cm を測り、Ｐ２が最小の 26cm、Ｐ 11 が最大の 48cmである。検出面からの深さは、36cm～ 42cmを測る。柱痕は、Ｐ３（径 16cm）、Ｐ４（径 20cm）、Ｐ５（径 16cm）、Ｐ６（径 18cm）、Ｐ８（径 20cm）、Ｐ 10（径 14cm）、Ｐ 13（径 12cm）、Ｐ 14（径 20cm）で認められた。

出土遺物　出土遺物は、Ｐ４より土師器の微細な破片が出土したが、図化不能であり、器種・年代についても不明である。

時　　期　出土遺物からは判断できず、また棟軸方向も、今回検出した他の建物との共通性は認められず、時期の特定は困難である。しかし、柱穴の柱痕内埋土を観察すると、土壌層Ⅱは認められず、土壌層Ⅲ由来の堆積物であった。少なくとも土壌層Ⅲの堆積過程ないし後にＳＢ 08 が成立した可能性がある。土壌層Ⅲの堆積は、８世紀前半と推測される。そして、北側落ち込み部分の土壌層Ⅲの堆積の下限は、12 世紀末～ 13 世紀初め頃と考えられる（第６章第２節）。したがって、

第９表　SB08 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.25	5.20	1.30
	Ｐ２－Ｐ３	1.35		
	Ｐ３－Ｐ４	1.30		
	Ｐ４－Ｐ５	1.30		
中央桁行	Ｐ６－Ｐ７	1.20	5.15	1.28
	Ｐ７－Ｐ８	1.30		
	Ｐ８－Ｐ９	1.30		
	Ｐ９－P10	1.35		
西桁行	P11－P12	1.35	5.15	1.28
	P12－P13	1.25		
	P13－P14	1.25		
	P14－P15	1.30		
１列目梁行	Ｐ１－Ｐ６	1.85	3.75	1.87
	Ｐ６－P11	1.90		
２列目梁行	Ｐ２－Ｐ７	1.95	3.85	1.92
	Ｐ７－P12	1.90		
３列目梁行	Ｐ３－Ｐ８	1.85	3.70	1.85
	Ｐ８－P13	1.85		
４列目梁行	Ｐ４－Ｐ９	1.90	3.75	1.87
	Ｐ９－P14	1.85		
５列目梁行	Ｐ５－P10	1.90	3.80	1.90
	P10－P15	1.90		

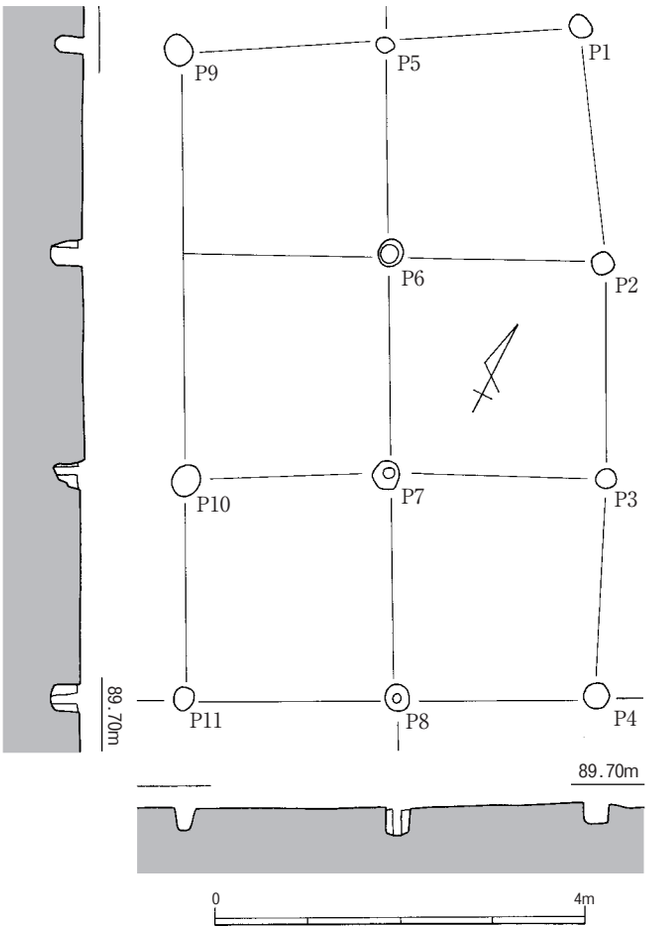
ＳＢ 08 の機能した時期は、８世紀前半～ 13 世紀初め頃と推測される。

ＳＢ 09

検出状況　調査区中央北側で検出した（第 69 図）。ＳＤ 09 の北側、ＳＢ 11・ＳＢ 12 の南西側に位置する。基本的に建物全体が検出されている。ただし。同じく西側桁行の北から２列目の梁行と共有すべき柱穴は検出できなかった。

形状・規模　梁行２間、桁行３間の総柱建物である（第 85 図）。Ｐ１を、除き桁行・梁行はほぼ平行・直角関係にあり、平面形はほぼ整った長方形をなす。梁行は 4.40 ｍ～ 4.60 ｍ、桁行は 7.00 ｍ～ 7.30 ｍになる。

具体的には、梁行は北から順にＰ１－Ｐ９間は 4.40 ｍ、Ｐ２－Ｐ６間は 2.30 ｍ、Ｐ３－Ｐ 10 間は 4.60 ｍ、Ｐ４－Ｐ 11 は 4.50 ｍである。桁行は東から順にＰ１－Ｐ４間は 7.30 ｍ、Ｐ５－Ｐ８間は 7.10 ｍ、Ｐ９－Ｐ 12 間は 7.00 ｍである。建物の面積は、中央桁行と北から３列目の梁行を基準とすると、32.6㎡である。各柱間の規模は第 10 表の通りである。棟軸方向は、中央桁行を基準としてＮ 29°Ｗを示す。



第 85 図　SB09

柱穴については、平面形は不整形な円形をなす。検出面での規模は、直径 20㎝～ 28㎝を測る。検出面からの深さは、24㎝～ 32㎝である。柱痕は、Ｐ６（径 20㎝）・Ｐ７（径 12㎝）・Ｐ８（径 10㎝）で認められた。

第 10 表　SB09 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.60	7.30	2.43
	Ｐ２－Ｐ３	2.35		
	Ｐ３－Ｐ４	2.35		
中央桁行	Ｐ５－Ｐ６	2.25	7.10	2.36
	Ｐ６－Ｐ７	2.45		
	Ｐ７－Ｐ８	2.40		
西桁行	Ｐ９－Ｐ10	4.65	7.00	2.33
	Ｐ10－Ｐ11	2.35		
１列目梁行	Ｐ１－Ｐ５	2.15	4.40	2.20
	Ｐ５－Ｐ９	2.25		
２列目梁行	Ｐ２－Ｐ６	2.30	2.30	2.30
３列目梁行	Ｐ３－Ｐ７	2.40	4.60	2.30
	Ｐ７－Ｐ10	2.20		
４列目梁行	Ｐ４－Ｐ８	2.20	4.50	2.25
	Ｐ８－Ｐ11	2.30		

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版５）。

土師器は、皿（123・124）と小皿（125 ～ 128）が出土している。

皿は 123 と 124 の２点がＰ５から出土している。123 は底部から体部にかけての破片で、124 は口縁部から体部にかけての破片であるが、別個体である。123 は、底部に回転糸切り痕がみられ、見込み中央部分は窪んで一段低くなっている。

124 は、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が丸く収められている。内外面にはヨコナデ調整が認められる。

小皿は、125 ～ 128 の４点が出土している。125 は、口縁部から底部の破片で、Ｐ６の柱痕部から出土している。底部には回転糸切りが残り、口縁部は直線的に外上方に短く立ち上がる。

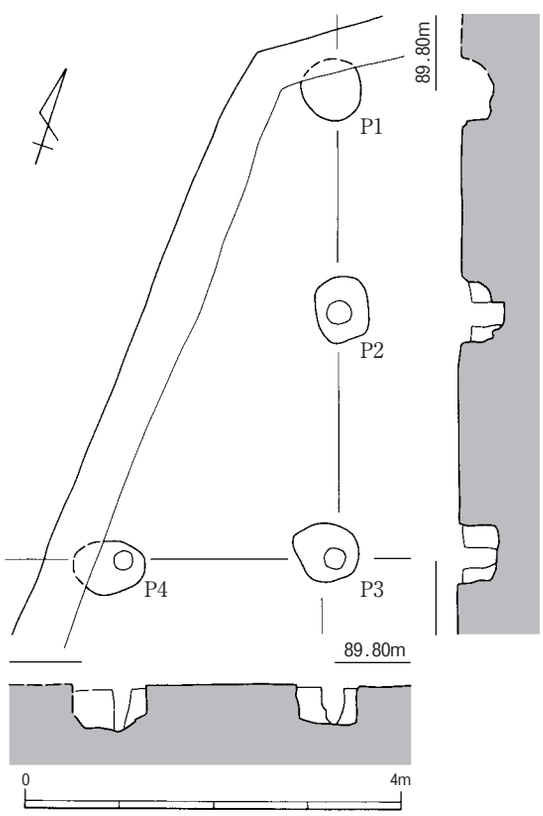
Ｐ５から出土するのは 126 と 128 である。126 は、口縁部から底部の破片で、底部のみ完存する。底部には回転糸切り痕が認められる。底部は中央部が盛り上がって厚作りである。

128 は、ほぼ完存する個体で、底部には板ナデの痕跡が残り、さらに底部外面の縁辺に沿ってヨコナデされている。

127 は、Ｐ８柱痕部から出土している。口縁部から底部にかけての破片である。底部は回転ヘラ切りの後、板ナデされ、さらにナデ調整が施されている。口縁部は、外側へ比較的大きく広がりながら極めて短く立ち上がる。

須恵器は、椀（129）が出土している。129 は、Ｐ６から出土している。129 は、口縁部から体部にかけて残存する破片である。体部はわずかに内湾しつつ外上方に立ち上がり、口縁端部を丸く収めている。

時　　期　出土遺物からは判断すると、11 世紀末～ 12 世紀中頃に廃絶したと考えられる。



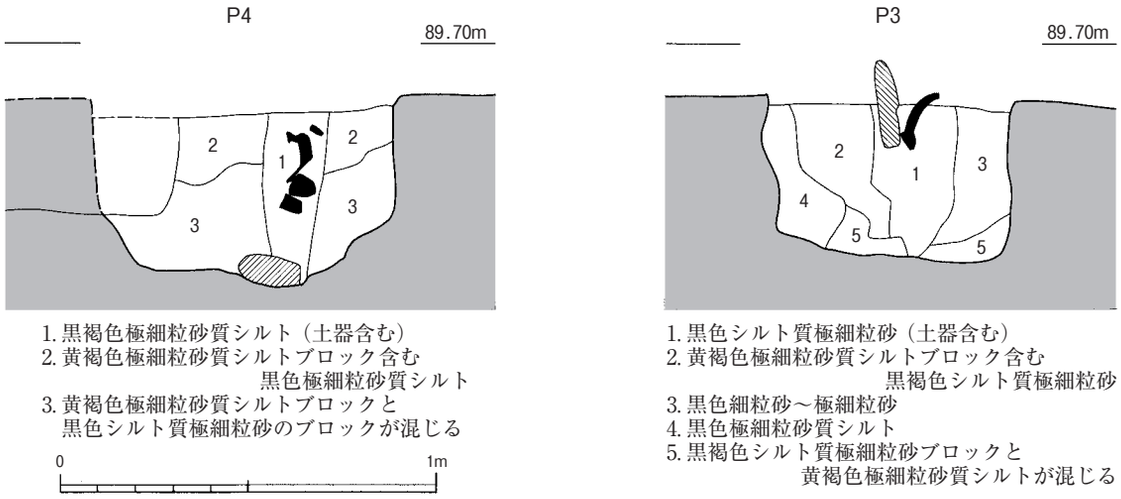
第 86 図　SB10

ＳＢ 10

検出状況　調査区中央北端部の北西隅で検出した（第 69 図）。ＳＢ 09 の北西に位置する。今回の調査では建物の南東隅部分をＬ字型に検出した。少なくとも、北西側へ建物は続くとみられる。

形状・規模　少なくとも梁行は１間、桁行２間の側柱建物である（第 86 図）。桁行・梁行は概ね平行・直角関係で比較的整った平面形をなす。南梁行（Ｐ３－Ｐ４間）は 2.40 ｍを測り、東桁行（Ｐ１－Ｐ３間）は 5.00 ｍを測り、建物面積は少なくとも 12㎡以上になる。各柱間の規模は第 11 表の通りである。棟軸方向は、東桁行を基準としてＮ 18° Ｅを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形のものから、やや隅丸方形に近いものもある。検出面での平面規模は直径 64㎝～ 80㎝と、今回検出した建物跡のなかで最も大きい。また、検出面からの深さは、36㎝～ 38㎝を測る。柱痕については、



第 87 図　SB10　柱穴断面

Ｐ２（径 24cm）、Ｐ３（径 22cm）、Ｐ４（径 20cm）で確認されている（第 87 図）。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版 5）。

土師器は、甕（132）が出土している。甕は 132 の１点がＰ４の柱痕部から出土した（第 87 図）。132 は口縁部から体部にかけて残存する破片である。体部外面にはタテハケメを施し、内面にはユビオサエの後が残る。頸部は逆「く」の字で屈曲し、やや外反して端部をやや尖らせながらおさめている。８世紀頃に位置づけられる。

須恵器は、鉢Ｄ（130）と杯Ａ（131）が出土している。

鉢Ｄは、130 の１点がＰ３の柱痕部から出土している（第 87 図）。130 は口縁部から体部にかけて残存する破片である。ロクロによって成形されるが､体部下半は外面を回転ヘラケズリを施して整形する。また頸部は逆「く」の字に状に屈曲して、口縁部をやや内湾させながら外上方へのばしている。口縁端部は面を持ち、上方を向く。130 は東播系須恵器で、10 世紀中頃～ 11 世紀に位置付けられる。

杯Ａは 131 の１点が、Ｐ１の底部中央付近から出土している。131 は底部から口縁部にかけて残存する破片である。底部には回転ヘラ切りの後削り調整される。Ｐ１からの出土は混入の可能性がある。

時　　期　出土遺物からは、ＳＢ 10 は 11 世紀には廃絶していたと考えられる。

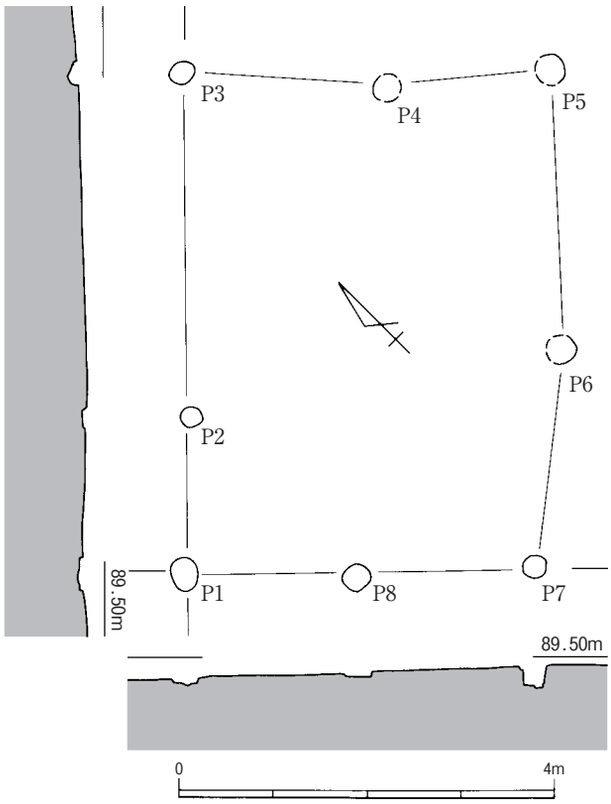
第 11 表　SB10 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.40	5.00	2.50
	Ｐ２－Ｐ３	2.60		
南梁行	Ｐ３－Ｐ４	2.40	2.40	2.40

ＳＢ 11

検出状況　調査区中央北端部で検出した（第 69 図）。ＳＢ 09 の北東に位置し、ＳＢ 12 の北側で隣接し、その北西隅部の一部が重なる。また、ＳＤ 03・ＳＤ 04・ＳＫ 07 を切っている。基本的に建物全体が検出されている。

形状・規模　梁行は２間、桁行２間の側柱建物である（第 88 図）。桁行・梁行は概ね平行・直角関係あるが、やや歪んだ長方形を示す。北東梁行（Ｐ３－Ｐ５間）は、3.95 ｍを測り、北西桁行（Ｐ１－Ｐ３



第 88 図　SB11

間）は 5.36 ｍを測り、建物面積は少なくとも 21.1㎡になる。棟軸方向は、北西桁行を基準としてＮ 45°Ｅを示す。各柱間の規模は第 12 表の通りである。

柱穴については、平面形は不整形な円形で、検出面での平面規模は、直径 22㎝～ 36㎝である。検出面からの深さは、６㎝と浅いものと、14㎝とやや深いものがある。柱痕については確認できなかった。

出土遺物　出土遺物は認められなかった。

時　　期　出土遺物からは判断できないが、柱穴の埋土から土壌層Ⅲの上層から掘り込まれていることがわかり、少なくとも土壌層Ⅲの堆積過程ないし堆積後における成立と廃絶が考えられる。つまり、上限８世紀前半から下限 12 世紀末～ 13 世紀初め頃の位置付けが考えられる。

第 12 表　SB11 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北西桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.66	5.36	2.68
	Ｐ２－Ｐ３	3.70		
北東梁行	Ｐ３－Ｐ４	2.25	3.95	1.97
	Ｐ４－Ｐ５	1.70		
南東桁行	Ｐ５－Ｐ６	3.00	5.35	2.67
	Ｐ６－Ｐ７	2.35		
南西梁行	Ｐ７－Ｐ８	1.90	3.75	1.87
	Ｐ８－Ｐ１	1.85		

ＳＢ 12

検出状況　調査区中央北端部の東寄りで検出した（第 69 図）。ＳＢ 09 の東側に位置し、ＳＢ 11 の南側に隣接し、一部分が重なる。また、ＳＤ 03・ＳＤ 04・ＳＫ 07 とも重なる。特に、ＳＤ 03 を切っている。建物の西側を検出しており、残りの部分は東側の調査区外へ続くとみられる。なお、ＳＢ 12 は、整理段

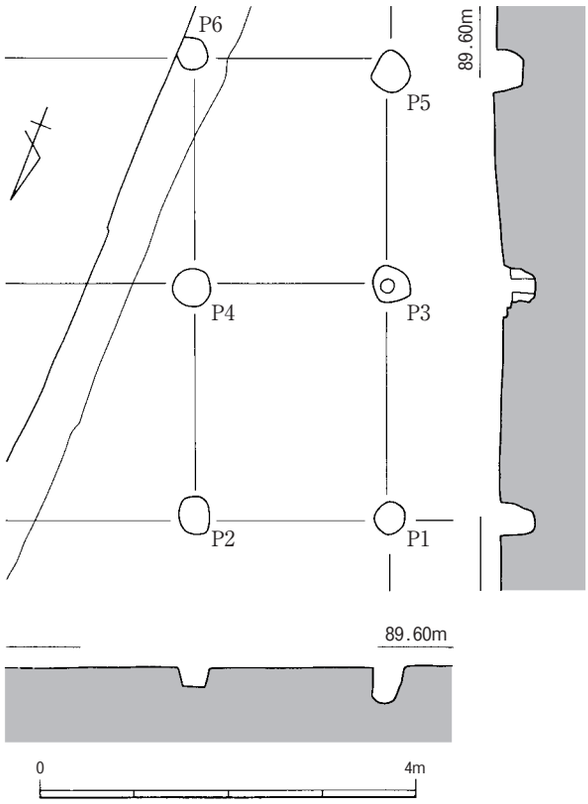
第 13 表　SB12 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.00	2.00	2.00
中央桁行	Ｐ３－Ｐ４	2.10	2.10	2.10
南桁行	Ｐ５－Ｐ６	2.10	2.10	2.10
西梁行	Ｐ１－Ｐ３	2.50	4.80	2.40
	Ｐ３－Ｐ５	2.30		
東梁行	Ｐ２－Ｐ４	2.50	5.00	2.50
	Ｐ４－Ｐ６	2.50		

階において空中写真測量図上で認識・復元できた建物である。

形状・規模　少なくとも梁行は２間、桁行１間以上からなる総柱建物である（第 89 図）。桁行・梁行は概ね平行・直角関係あり、整った平面形を示す。西梁行（Ｐ１－Ｐ５間）は 4.80 ｍを測り、東梁行は 5.00 ｍを測る。桁行は、Ｐ１－Ｐ２間 2.00 ｍ、Ｐ３－Ｐ４間 2.10 ｍ、Ｐ５－Ｐ６間 2.10 ｍを測る。建物面積は少なくとも 10.5㎡になる。各柱間の規模は第 13 表の通りである。棟軸方向は、中央桁行を基準としてＮ 70° Ｅを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形で、検出面での平面規模は直径 32㎝～ 44㎝である。検出面からの深さは、20 ～ 38㎝を測る。柱痕については、Ｐ３（径 16㎝）のみで確認できた。



第 89 図　SB12

出土遺物　釘（Ｍ５）が１点、Ｐ３の柱痕部から出土している（図版７）。Ｍ５は、断面方形の角釘で、頭部は折れ曲がり扁平となっている。尖端部は欠損する。

時　　期　出土遺物からは判断できないが、軸方向がＳＢ 04・ＳＢ 05 と近似することから、13 世紀頃の廃絶が考えられる。

⑶　柱穴

今回の調査では、建物として復元できなかった柱穴のうち比較的良好な資料が出土したものが４穴（Ｐ 10 ～Ｐ 13）ある。ここでは、これらの柱穴について出土遺物を中心に報告する。

Ｐ 10

検出状況　調査区中央北側で検出した（第 69 図）。ＳＢ 09 とほぼ同位置にあり、ＳＢ 09 －Ｐ９とＰ５の間に位置する。

出土遺物　須恵器の椀（135）が出土している（図版５）。135 は底部から口縁部にかけて残存する破片である。底部には回転糸切りの痕跡が残る。体部は底部から外側に広がって直線的に延び、口縁部端部を丸くおさめている。

時　　期　出土遺物から、12 世紀末～ 13 世紀初頭に位置付けられる。

Ｐ 11

検出状況　調査区中央北側で検出した（第 69 図）。ＳＢ 09 とほぼ同位置にあり、ＳＢ 09 －Ｐ６とＰ２の間に位置する。

出土遺物　土師器の皿（133）が出土している（図版５）。133 は、口縁部から底部にかけて残存在する破片で、底部のみ完存する。ロクロ成形で、底部には回転ヘラ切りの後、板状工具により一部ナデ調整が施される。底部内面中央部はやや窪む。体部は底部から外側に広がって外反しながら延び、口縁端部はやや厚くなって丸くおさめられている。

時　　期　出土遺物から、11 世紀後半に位置付けられる。

Ｐ 12

検出状況　調査区中央南側で検出した（第 69 図）。ＳＢ 04 とほぼ同位置にあり、ＳＢ 04 －Ｐ９とＰ 10 の北側に隣接する。

出土遺物　製塩土器（134）が出土している（図版５）。134 は、口縁部から体部にかけて残存する破片である。口縁端部には面を持たず、やや尖らせておさめる。器壁の内外面はナデ調整されている。おそらく砲弾型に復元できるものと考えられる。

時　　期　出土遺物から、奈良時代以降の位置付けが考えられる。

Ｐ 13

検出状況　調査区南東隅で検出した（第 69 図）。ＳＤ 07 の南側、ＳＤ 05 の南端部の西側に隣接する。

出土遺物　須恵器と金属製品が出土している（図版５・図版７）。

須恵器は、小皿（136）が出土している。

小皿は、136 の１点が出土している（図版５）。136 は、口縁部から底部にかけての破片で、底部のみ完存する。ロクロ成形で、底部には回転糸切りの痕跡が残る。ロクロを用いて粘土円柱から引き出して成形しており、底部は極めて低い平高台状をなす。底部内面には窪みはなく、平坦である。口縁部は、底部から外側に開き、内湾しながら立ち上がり端部が丸くおさめられている。

金属製品は、刀子（Ｍ４）が出土している（図版７）。Ｍ４は刀子の刃部の先端の破片である。先端はわずかに欠損する。残存長は 7.6㎝、幅は 2.7㎝、厚さは 6.5㎜である。

時　　期　出土遺物から、12 世紀前半の位置付けと推測される。

⑷　溝

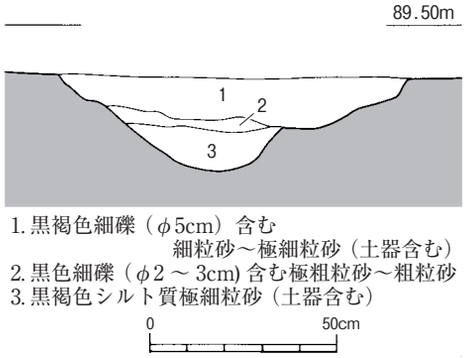
７条（ＳＤ 03 ～ＳＤ 09）を検出した。

ＳＤ 03

検出状況　調査区北側中央部の東寄りで検出した（第 69 図）。ＳＤ 04 の南西に平行して隣接する。ＳＢ 12 やＳＢ 11 と重なった位置にある。ＳＢ 12 －Ｐ２・Ｐ４は、ＳＤ 03 を切っている。一方、ＳＤ 03 はＳＫ 07 に切られている。そして、ＳＢ 03 は南東から北西を指向する。

北西側は基盤層面が調査区北東側に向かって落ち込むのに従って、溝の西端部は次第に細くなって消える。南東側は調査区外に延びるが、その先の同一線上にはＳＤ 05 が調査区東側で確認されており、これに続くものとみられる。なお、ＳＤ 03 は、調査区土層断面から、土壌層Ⅲの上面に掘り込まれることが明らかである。

形状・規模　検出した長さは、10 ｍである。検出面における幅は 95㎝を測り、横断面は緩やかなＵ字形



第 90 図　SD03 横断面

をなす（第 90 図）。深さは 25㎝である。底部の標高は、北西部で 89.16 m、南東部で 89.16 mを測り、底部は一定している。

埋没状況　埋土は１～３層の３つの層に分けられる（第 90 図）。３層の埋土は、黒褐色シルト質極細粒砂で、溝の機能時に堆積した層とみられる。常時流水があったわけではなく、次第に溝に泥が堆積して埋没していった可能性がある。３層からは土器が出土している。

２層は、細礫で構成される薄い層で、溝全体ではなく局所的に堆積が認められた。ある段階で、流速の速い水流により堆積したものと考えられる。

１層は、黒色細礫を含む細粒砂～極細粒砂だが、自然に埋没した堆積物が土壌化していった層と考えられる。１層からは土器が出土している。

出土遺物　土師器・須恵器・青磁が出土している（図版５）。

土師器は、椀（137・139・140）と皿（138）が出土している。

椀は、137・139・140 の３点が出土している。137 は口縁部から体部の破片で、器壁内外面にロクロナデが残り、ロクロ成形による製品である。また口縁部はやや薄く仕上げられており、口縁端部はやや強く摘んで外反させている。体部外面下半部には煤が付着している。

139 は、底部の破片である。底部は摩滅しており、調整については不明である。わずかな破片断面を観察すると、底部から体部へは比較的直に立ち上がることがわかる。おなじく、外面には煤が付着している。137 と 139 は明確な接合点こそないものの、同一個体と考えられる。胎土や焼成、煤の付着などの共通性が指摘できる。

140 は、体部が極わずかに残る底部の破片である。底部は回転ヘラ切りの痕跡が残る。いずれの資料も、下層から出土している。

皿は、138 の１点が出土している。138 は、口縁部の破片で、器壁外面に墨書が薄く残る。墨書は３本の線が縦に施されているのが認められる。記載される具体的な内容については不明である。

須恵器は、椀（141）と壷Ｌ（142）が出土している。

椀は、141 の口縁部の破片のみが出土している。口縁部については、口径から復元すると、直線的に底部からのびている。また､口縁端部は丸くおさめられている。なお､141 は上層部分から出土している。

壷Ｌは、142 の１点のみが出土している。142 は頸部から口縁部にかけての破片である。口縁端部は、その縁辺を上下に延ばして肥厚し、断面は三角形状を呈し面を有する。なお、142 は上層部分から出土している。

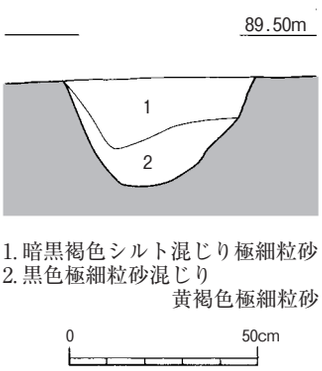
青磁は、碗の口縁部から体部にかけて残存する破片（143）が出土している。143 は、口縁部がごくわずかに外反する。内面には、素地を工具で浅く削って描かれた草花文が施されている。龍泉窯系青磁の碗である。なお、141 は上層部分から出土している。

時　　期　出土遺物から、11 世紀後半以降に溝が開削され、11 世紀末から 12 世紀頃を中心として機能し、13 世紀前半頃までには埋没していたと考えられる。

ＳＤ 04

検出状況　調査区北側中央部の東寄りで検出した(第 69 図)。ＳＤ 03 の北東に平行し、隣接する。ＳＢ 12 やＳＢ 11 と重なった位置にある。ＳＤ 04 は、南東から北西を指向する。北西側は基盤層上面が調査区北東側に向かって落ち込むのに従って、溝の西端部は次第に細くなって消えている。南東側は調査区外に延びるが、ＳＤ 03 とは異なり、調査区東端では継続する可能性のある溝は検出できなかった。なお、ＳＤ 04 は、調査区周囲の土層断面から、土壌層Ⅳの上面から掘り込まれることは明らかである。

形状・規模　検出した長さは、6.00 ｍである。検出面における幅は 52㎝を測り、横断面はＵ字形に近い逆台形をなす(第 91 図)。検出面からの深さは 28㎝である。底部の標高は、北西部で 89.18 ｍ、南東部で 89.24 ｍを測り、底部はやや北西方向へ傾斜している。



第 91 図　SD04 断面

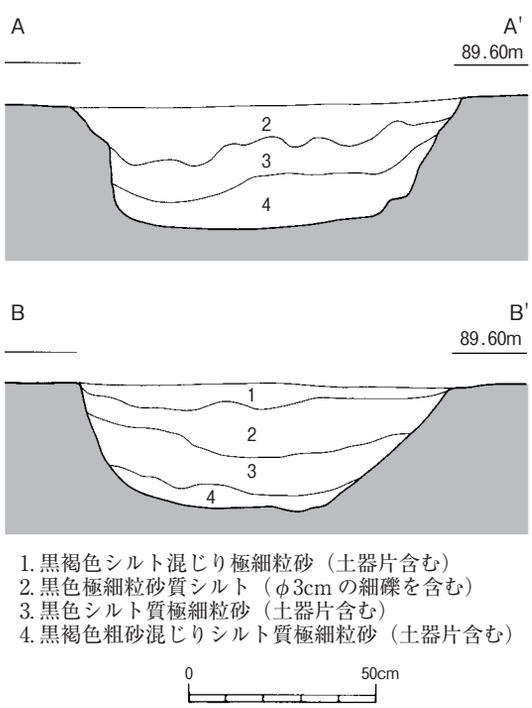
埋没状況　埋土は、１層と２層の２つの層に分けられる(第 91 図)。２層は、基盤層由来の黄褐色極細流砂と黒ボク土層が混じる、掘削段階の堆積層である。１層は、暗黒褐色シルト混じり極細粒砂層で、土器の極微細片が含まれ、土壌層Ⅱと類似した層相を示す溝の埋没土である。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

時　　期　出土遺物からは判断できないが、埋土およびＳＤ 03 と平行することから、11 世紀後半以降に開削され、11 世紀末～ 12 世紀頃に機能し、13 世紀頃に埋没したと考えられる。

ＳＤ 05

検出状況　調査区東端で検出した（第 69 図)。ＳＢ 06 の東に位置する。ＳＤ 06 とＳＤ 07 を切っている。またＳＤ 05 北 05 には、ＳＢ 07 と重なる部分がある。ＳＤ 05 は、南東から北西を指向し、北側および南側は調査区外へと継続する。特に、北側の延長線上には同一方向を指向するＳＤ 03 につながり、同一の溝と考えられる。なお、ＳＤ 05 は調査区の土層断面から土壌層Ⅳ上面に掘り込まれることが明らかである。



第 92 図　SD05 断面

形状・規模　検出した長さは、29.20 ｍである。検出面における幅は１ｍを測り、横断面は丸みを帯びた逆台形をなす（第 92 図)。深さは 30㎝～ 33㎝である。底部の標高は、北西部で 89.19 ｍ、南東部で 89.15 ｍを測り、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は１～４層に分けられる（第 92 図)。最下層である４層は、機能時に堆積した層とみられ、その上部の３つの層は人為的に埋め戻された層である。ほとんどの層に土器の微細片が含まれている。なお、当該溝の最上層上面には、土壌層Ⅱの擾乱による下面遺構が認められる部分があった。

出土遺物　須恵器の杯Ａ（144）・小椀（145）・椀（146・147）・甕（148）が出土している（図版５）。

杯Ａは、144 の１点が出土している。底部から口縁部にかけて残存し、底部には回転糸切りの痕跡が残る。体部は、底部から外側に開きながら直線的に口縁部まで延び、口縁端部はやや尖らせながらわずかに外反させておさめている。器高が低くなる。

小椀は、145 の１点が出土している。145 は口縁部から底部までの破片である。底部は平高台で、回転糸切りの痕跡が残る。

椀は、146 と 147 の２点が出土している。146 と 147 は、底部から体部にかけて残存している。いずれも底部は平高台で回転糸切りの痕跡が残り、底部内面中央部は窪んで一段低くなっている。

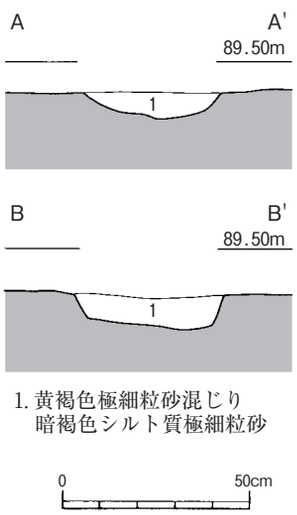
甕は 148 の１点が出土している。口縁部のみ残存し、口縁端部は面をもち、端部の内側縁辺を少し上方につまみ上げている。

時　　期　出土遺物から、少なくとも 11 世紀後半には開削されたとみられ、ＳＤ 03 との関連性や土壌層Ⅱの下層で検出したことから、11 世紀末～ 12 世紀頃を中心に機能し 13 世紀前半には埋没したと考えられる。

ＳＤ 06

検出状況　調査区南東隅で検出した（第 69 図）。ＳＢ 06 の西側、ＳＢ 05 の東側に位置し、ＳＤ 06 の東端部は、ＳＤ 05 に切られている。ＳＤ 06 は、南西から北東方向を指向しており、ＳＤ 06 の南西部は調査区外へ続くとみられる。一方、北東端部は、調査区東端部の基盤層上面が東側へ緩やかに傾斜しているため、調査区内で収束している。この基盤層上面の上層には土壌層Ⅲが堆積しているが、その堆積前に何らかの影響によって土壌層Ⅳ・黒ボク土層・基盤層が削られたためと推測され、ＳＤ 06 の北東端部も同様に削られたものと理解される。

形状・規模　検出した長さは、17.80 ｍである。検出面における幅は 36 ㎝～ 46㎝を測り、横断面は丸みを帯びた逆台形をなす（第 93 図）。検出面からの深さは８㎝である。底部の標高は、南西部で 89.27 ｍ、北東部で 89.36 ｍを測り、底部は南西方向へやや傾斜している。



第 93 図　SD06 断面

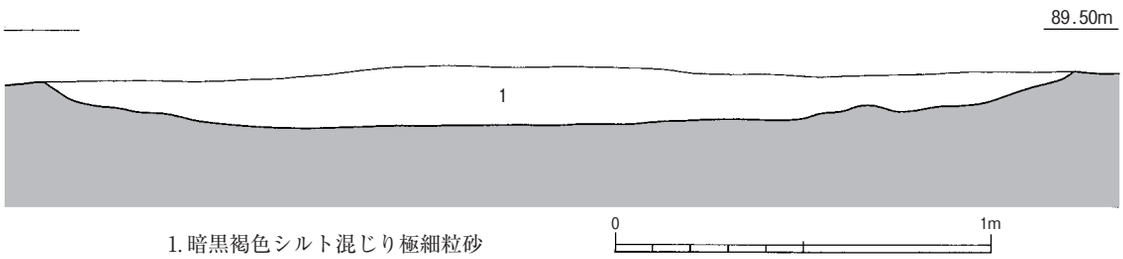
埋没状況　埋土は、暗褐色シルト質極細粒砂を基質として基盤層由来の黄褐色極細粒砂の団粒が混じる１層のみである（第 93 図）。基質は、黒ボク土層に近似しており、その上面から掘り込まれ、埋没していった可能性が考えられる。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物からは判断できないが、埋土が後述するＳＤ 09 と類似することから、少なくとも弥生時代中期頃の位置付けが考えられる。

ＳＤ 07

検出状況　調査区南東隅で検出した（第 69 図）。ＳＢ 06 の南東側に隣接し、ＳＤ 05 によって切られている。ＳＤ 07 は、南西から北東方向を指向しており、ＳＤ 06 の南西側及び北東側は調査区外へ続くとみられる。北東部は基盤層上面が東へ低くなっていくのにあわせて、溝の幅が次第に幅広くなっている。



第 94 図　SD07 断面

形状・規模　検出した長さは、8.00 ｍである。検出面における幅は南西側で 1.40 ｍ、中央部で 2.70 ｍ、北東側で 3.20 ｍを測る。検出面からの深さは中央部で 16㎝を測る。横断面は緩い弧形をなす（第 94 図）。底部の標高は、南西部で 89.23 ｍ、北東部で 89.26 ｍを測り、ほぼ一定している。

埋没状況　埋土は、暗黒褐色シルト混じり極細粒砂の１層のみである（第 94 図）。自然に埋没したと考えられる。ＳＤ 07 は調査区周囲の土層断面では、基盤層上面で検出可能な遺構で、溝の埋土上層には土壌層Ⅲが堆積している。

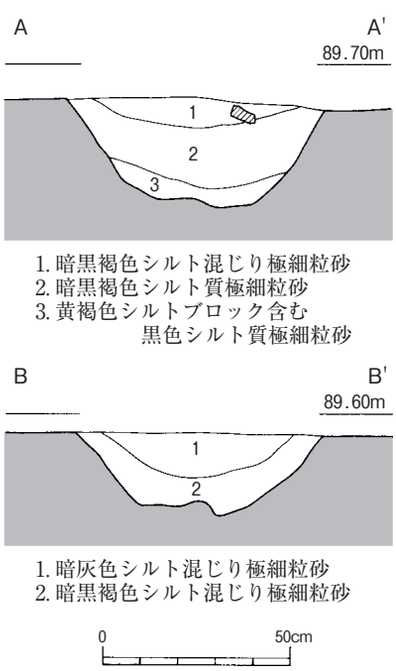
出土遺物　須恵器の杯Ｂ（149）と壺Ｋ（150）が出土している（図版５）。

杯Ｂは、149 の１点が図化できた。149 は、底部から体部の破片である。底部は回転ヘラケズリが施され、その後高台が貼り付けられている。底面は比較的丁寧にナデ調整されている。

壺Ｋは、150 の１点のみが出土している。150 は頸部のみ残存する。体部と頸部は貼り付けにより接合し、口縁部付近には一条の細い突線が巡っている。

時　　期　出土遺物から、８世紀前半頃には埋没したと考えられる。また、土壌層Ⅲの堆積もこれ以降と考えられる。

ＳＤ 08

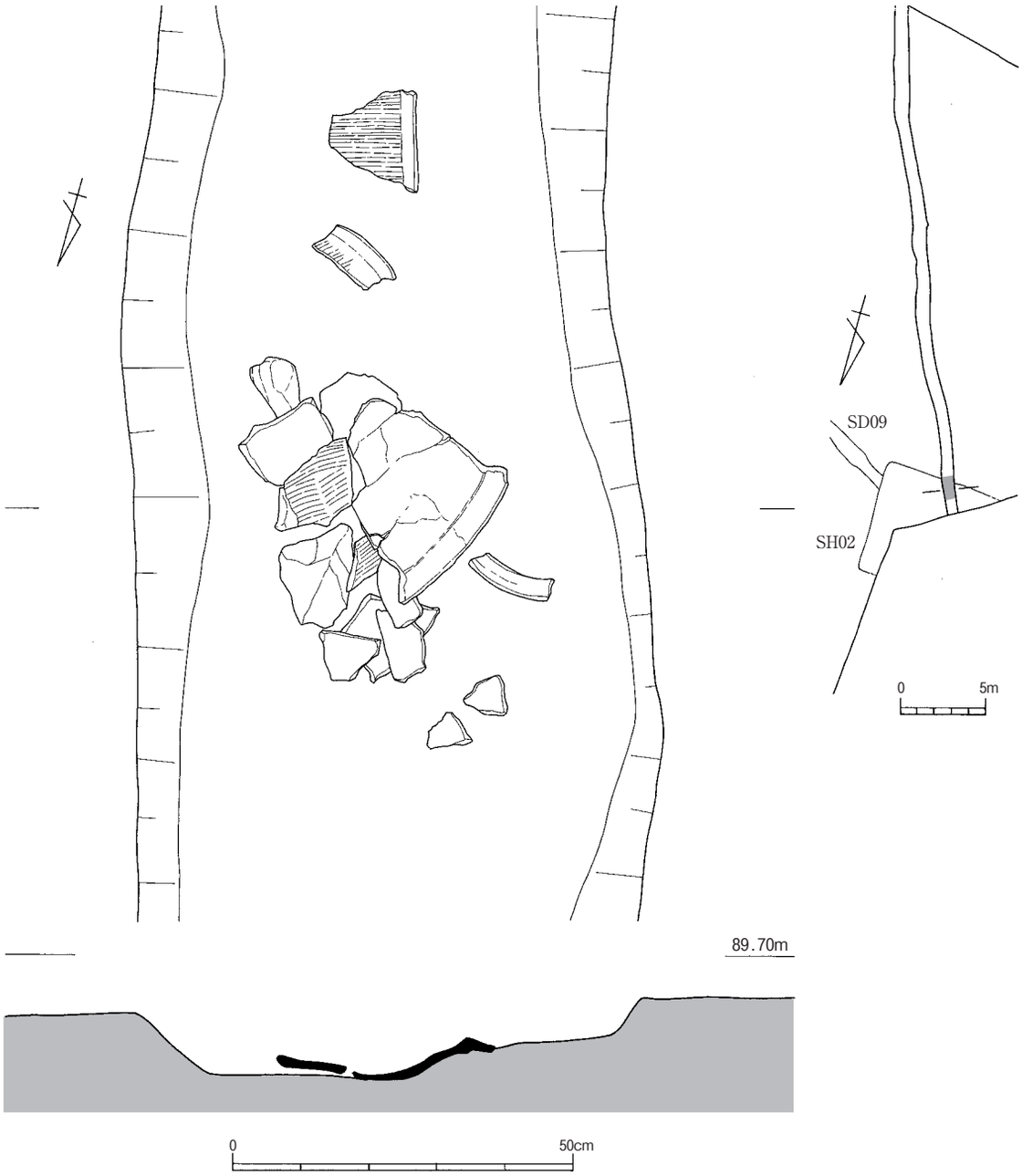


第 95 図　SD08 断面

検出状況　調査区中央部東寄りで検出した（第 69 図）。ＳＢ 01 の西側、ＳＨ 01 の東側に位置する。ＳＤ 08 は概ね南北方向を指向し、南側と北側は調査区外へと続く。そして、当溝の北側は、ＳＨ 02 を切っている。また、その切り合い箇所からは、土器がまとまって出土している（第 96 図）。

形状・規模　検出した長さは、30.00 ｍである。検出面における幅は 66㎝～ 70㎝を測り、横断面は丸みを帯びた逆台形をなす。検出面からの深さは 22㎝～ 28㎝を測る（第 95 図）。底部の標高は、北部で 89.32 ｍ、南部で 89.27 ｍを測り、わずかに南へ傾斜している。

埋没状況　埋土は、１～３層の３つの層からなる。３層（Ａ―Ａ’ライン）は、基盤層由来の黄褐色シルトブロックと黒ボク層由来の黒色シルト質極細粒砂層から構成されており、掘削時の形成層と考えられる。１層および２層は、暗黒褐色ないし暗灰色シルト混じり極細粒砂で構成されるが、３層の方がやや空隙が多い（第 95 図）。１層と３層は、機能時に堆積したと推測

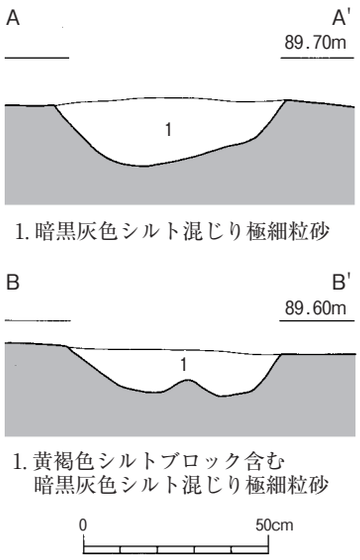


第 96 図　SD08 内土器出土状況（２層上面）

される。なお遺物は、１層を除去した部分でまとまって出土している。

出土遺物　土師器の甕３点（153 ～ 155）が出土している（図版６）。153 ～ 155 はいずれも体部から口縁部まで残存する。153 は、口頸部が完存し、体部は底部に近い部分まで部分的に残存する。体部は卵形をなし、口縁部は肥厚して外反する。口縁端部は外傾する面をもつ。154 も基本的に同様な形をなすが、口縁端部やや丸みをもった面をもつ。153 と 154 の製作技法は体部にタテハケメ調整を施す点は共通する。しかし、内面については 153 が体部下半にユビオサエの痕跡が残り、上半はヨコナデが施されるが、154 は体部上半にヨコハケメ調整が施される点が異なる。次に 155 は、前の２点に比べて小型の甕であるが、口縁部は肥厚して外反する。ただし、口縁端部は丸くおさめられている。製作技法は 154 に類似し、体部外面にはタテハケメを施し、内面にはヨコハケメが施されている。

時　　期　出土遺物から、8 世紀頃には埋没したと考えられる。



第 97 図　SD09 断面

ＳＤ 09

検出状況　調査区中央で検出した（第 69 図）。ＳＢ 02・ＳＢ 03 の北側、ＳＢ 08・ＳＢ 09 の南側に位置する。ＳＫ 06 が当溝を切っている。また。ＳＤ 09 は概ね東西方向を指向しており、東側は調査区外へ続く。一方、西側はＳＨ 02 が当溝の西端部を切っているが、調査区外へ続く可能性がある。

形状・規模　検出した長さは、26 ｍである。検出面における幅は 57 ㎝～ 64㎝を測り、横断面は丸みを帯びた逆台形をなす（第 97 図）。検出面からの深さは 12㎝～ 18㎝である。底部の標高は、西部で 89.35 ｍ、南東部で 89.44 ｍを測り、西側へ傾斜している。

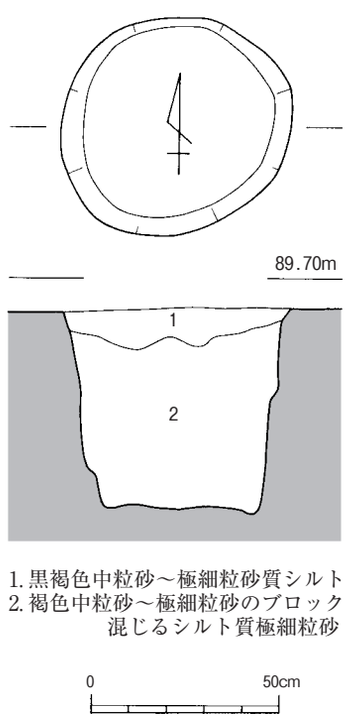
埋没状況　埋土は、暗黒灰色シルト混じり極細粒砂を基質として、基盤層由来の黄褐色シルトブロックが混じる１層のみである（第 97 図）。基質は、黒ボク土層に近似しており、その上面より掘り込まれ、埋没していった可能性が考えられる。

出土遺物　弥生土器の壺（151）と甕（152）が出土している（図版５）。

壺は 151 の１点が出土している。151 は、底部から体部にかけて残存し、底部のみ完存する。体部は底部からやや大きく外側に開いて直線的に伸びる。体部外面はタテハケメの調整を施し、内面は底部～体部までナデ調整を施す。弥生時代中期前葉の所産と考えられる。

甕は、152 の１点が出土している。152 は底部から体部にかけて残存する破片である。体部外面はタテハケメの調整を施したあと、部分的に縦位のミガキが施されている。内面は、底部から体部までナデ調整が行われている。胎土には、３㎜以下の砂粒が多く含まれている。

時　　期　出土遺物から、弥生時代中期前葉と考えられる。



第 98 図　SK06

(5)　土坑

２基（ＳＫ 06・ＳＫ 07）を検出した。

ＳＫ 06

検出状況　調査区中央部で検出した（第 69 図）。ＳＢ 08 の南に隣接し、ＳＤ 09 を切っている。

形状・規模　平面形はほぼ円形で、検出した平面規模は 61㎝× 58㎝を測る。断面形はほぼ方形に近い逆台形をなす。検出面からの深さは 55 ㎝である。

埋没状況　１層と２層が堆積している（第 98 図）。２層は、土壌層Ⅳないし黒ボク土層が擾乱されたシルト質極細粒砂を基質として、基盤層に由来する褐色中粒砂～極細粒砂ブロックが混じっており、土坑が人為的に埋め戻されたこと示唆している。１層については、同じく土壌層Ⅳないし黒ボク土層に由来する黒褐色中流砂～極細粒砂が含まれる。人為的に埋め戻された後、土壌化が進行した結果と理解される。

出土遺物　土師器の微細は破片が出土しているが、時期・器種などを

明らかにすることはできず、図化も不能である。

時　　期　出土遺物からは判断できない。ただし､埋土には少なくとも土壌層Ⅱは認められない。また、土壌層Ⅳあるいは黒ボク土層を母材として擾乱作用を受けた堆積物であることから、土壌層Ⅳないし、土壌層Ⅲの上面遺構と理解できる。よって、本遺構の下限は 12 世紀頃と考えられる。

ＳＫ 07

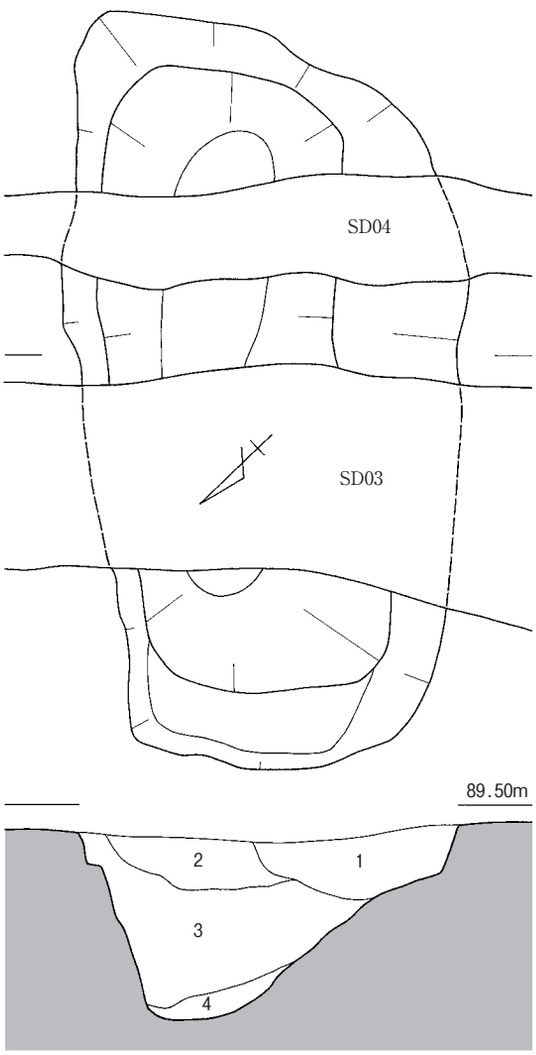
検出状況　調査区中央部北端部で検出した（第 69 図)。ＳＢ 11・ＳＢ 12・ＳＤ 03・ＳＤ 04 とほぼ同位置にあり、これらがＳＫ 07 を切っている。

形状・規模　平面形は不整形な隅丸長方形で、検出した平面規模は、長軸で 4.00 ｍ、短軸で 2.00 ｍを測る（第 99 図)。断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは最深部で 94㎝を測る。

埋没状況　埋土は、最下層にシルト黒灰色シルトが堆積しており（第 99 図)、ＳＫ 07 機能時の堆積と見られる。それより上層は３層からなるが、いずれも黒ボク土層、基盤層に由来する堆積物が中心となって構成されている。おそらく、人為的に埋められたものと考えられる。

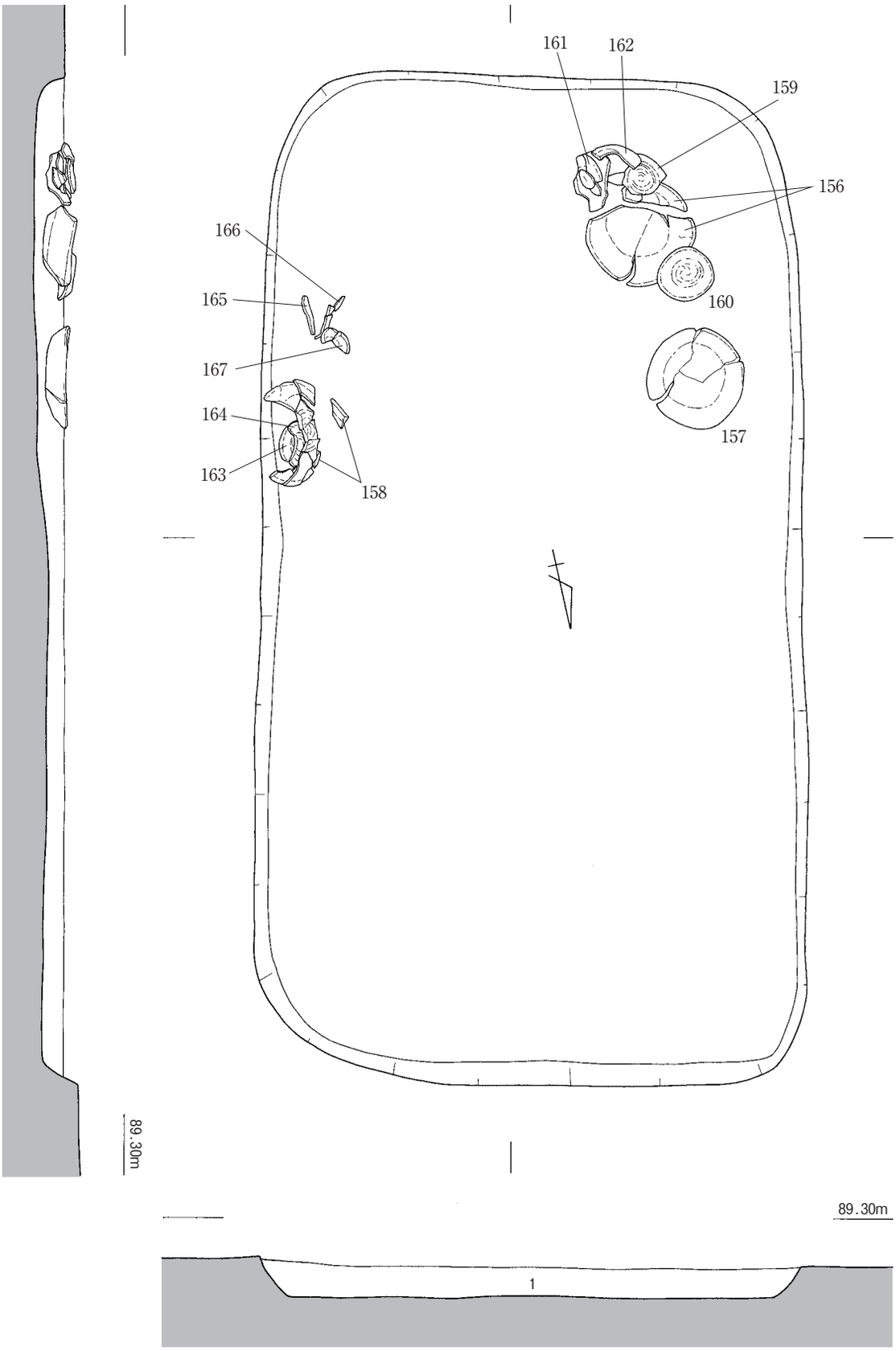
出土遺物　出土遺物は認められなかった。

時　　期　出土遺物から時期を判断することはできない。埋土内には土壌層Ⅱが認められず、基盤層・黒ボク土層が母材となっていることから、弥生時代から古墳時代の間に掘削、埋め戻しがあった可能性がある。



1. 暗黄灰色シルト混じり極細粒砂
2. 暗灰色極細粒砂
3. 暗灰色シルト質極細粒砂
4. 黒灰色シルト

第 99 図　SK07



1. 暗黒褐色シルト混じり極細粒砂（土器含む）

0　50cm

第 100 図　SX01

⑹　墓

１基（ＳＸ01）を検出した。

ＳＸ01

検出状況　調査区南側中央部で検出した（第69図）。ＳＢ01の南東、ＳＢ02の南側、ＳＢ03の南西側に位置する。切り合い関係は認められなかった。長軸方向はＮ13°Ｅを指向する。

形状・規模　検出面における規模は、長軸方向で16.60ｍ、短軸方向で9.20ｍを測る（第100図）。平面形は、隅丸長方形をなす。横断面・縦断面ともに逆台形を呈する。検出面からの深さは６㎝を測る。

埋没状況　埋土は、暗黒褐色シルト混じり極細粒砂の１層である。

出土遺物　南半には土器がまとまって出土している。土器は、東側に集中する群（東群：158・163～167）と西側に集中する群（西群：156・157・159～162）とに分けられる。

東群は、裏返しになって墓坑の肩にもたれかかった形で検出されたものがある。一方、西群は、土器は表向きのまま押し潰されているものが多く、また墓坑の肩よりも約10㎝内側に離れた場所で検出された。このような土器の出土位置は副葬時の土器の位置を少なからず反映していると考えられる。ＳＸ01からは、棺に関する遺物は出土しなかったが、木棺を使用していたが腐朽によって失われた可能性が十分にある。土器群が棺の蓋の上に置かれた場合、棺が崩れた弾みで裏返しになって墓坑の肩部に引っかかる可能性は考えられる。西群の土器については、そのまま墓壙底に落ち込んだたことも考えられる。

土器は、土師器の皿（156～158）と小皿（159～167）が出土している（図版６）。

皿は、156～158の３点が出土している。いずれも底部から口縁部が残存する資料で、ロクロ使用によって成形されている。157と158はほぼ完存し、底部には回転糸切りの痕跡が残る。

皿は大きく２種類に分類できる。156と157は、体部がやや外側に開いて少し内湾しながら立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸く収められている。見込み中央部には、一段低い窪みが認められる。一方、158は、体部は真っ直ぐ外側に開きながら口縁端部が丸く収められている。

小皿は、159～167の９点が出土している。162を除き他の小皿は、底部から口縁部まで残る資料である。底部が残る資料の内、164と166が底部に回転ヘラ切りの痕跡が残るのを除けば、すべて回転糸切りである。162は口縁部のみ残存する。

小皿は口径と器高で２群に分けられる。１群目は、159～162で、復元も含めた口径が8.75㎝～9.10㎝、器高が1.9㎝～2.1㎝になるものである。ただし、162は底部が欠損しているため口径を重視している。そして、２群目は、163～167で、口径が7.0㎝～8.1㎝、器高が1.05㎝～1.50㎝になるものである。形態についても共通点がみられ、１群目は見込み部中央に一段低い窪みを持ち、体部は内湾させながら立ち上がり、口縁端部を少し外反させて丸く収めるものである。２群目は、口縁端部を外反させるが、比較的体部の立ち上がりは直線的なものである。

なお、１群の土器は西群に、２群の土器は東群にそれぞれ対応する。土器の副葬位置と土器の種類等に何らかの意図が働いていた可能性がある。

時　　期　出土遺物から、11世紀後半から12世紀中頃と位置付けられる。

⑺　包含層（図版６）

遺構に伴わないが、残存状況が比較的良好な資料が第２面検出時に出土している。ここでは第２面を検出するにあたって掘削した土壌層Ⅲ、土壌層Ⅳを遺物包含層とし、これより出土した遺物を報告する。

出土資料は、大きく弥生時代、古代、古代末～中世以降に区分できる。弥生時代に属するものとして弥生土器、古代に属するものとして須恵器、古代末～中世以降に属するものとして須恵器・土師器・磁器がある。ここでは包含層出土遺物を種別・時代別に報告する。

弥生時代　甕（168）が出土している（図版６）。168 は体部から底部の破片である。体部外面及び内面、底部内面にはタテハケメが残り、底部外面にはナデ調整が認められる。弥生時代中期前葉と考えられる。

古　　代　須恵器の杯Ｂ蓋（169）・皿Ｂ（170）・杯Ｂ（171）が出土している（図版６）。

蓋は、169 の１点が出土している。169 は、天井部から口縁部の破片で、ツマミ部分が欠失する。天井部には回転ヘラケズリが施されている。笠形にやや盛り上がって器高は高く、口縁端部のかえり部分は屈曲して立ち上がらず、端部内縁が少しつまみ出されるのみである。

皿Ｂは、170 の１点が出土している。170 は、口縁部から底部にかけての破片である。口縁端部内面には段がつけられ、やや沈線状になる。口縁部から体部外面には、ミガキが施されて丁寧に仕上げられている。底部の高台は、粘土紐を貼り付けた後ロクロナデによって成形されている。

杯Ｂは、171 の１点のみが残存状況が良好であった。171 は、口縁部から底部にかけての破片である。体部は、底部より外側斜めに立ち上がった後、内側へやや屈曲して口縁部に延び、口縁部はやや外反する。底部は粘土紐を貼り付けてロクロナデによって成形している。

古代末～中世以降　須恵器・土師器・磁器が出土している（図版６）

須恵器は、椀（172）が出土している。172 は、口縁部から底部の破片である。底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。底部と体部の境にはわずかな屈曲部が残り、極めて低い平高台状を呈する。体部は、やや内湾して立ち上がり、口縁部まで直線的に延びて口縁端部を丸く仕上げている。底部内面中央には一段下がる窪みが認められる。

土師器は、小皿（173）が出土している。173 は、残存状況が良好で、ほぼ完存する。底部外面にはユビオサエの痕跡が残り、手捏ね成形によるものである。

磁器は、白磁の碗（174）が出土している。174 は残存状況が良好な資料で、体部はわずかに残り、底部のみ完存する。底部から体部外面は、回転ヘラケズリが施され、底部には厚く低い高台が成形されている。外面には施釉されない。底部内面には一重の沈線が入り、施釉されている。

第３節　２・４区の調査

１．概要

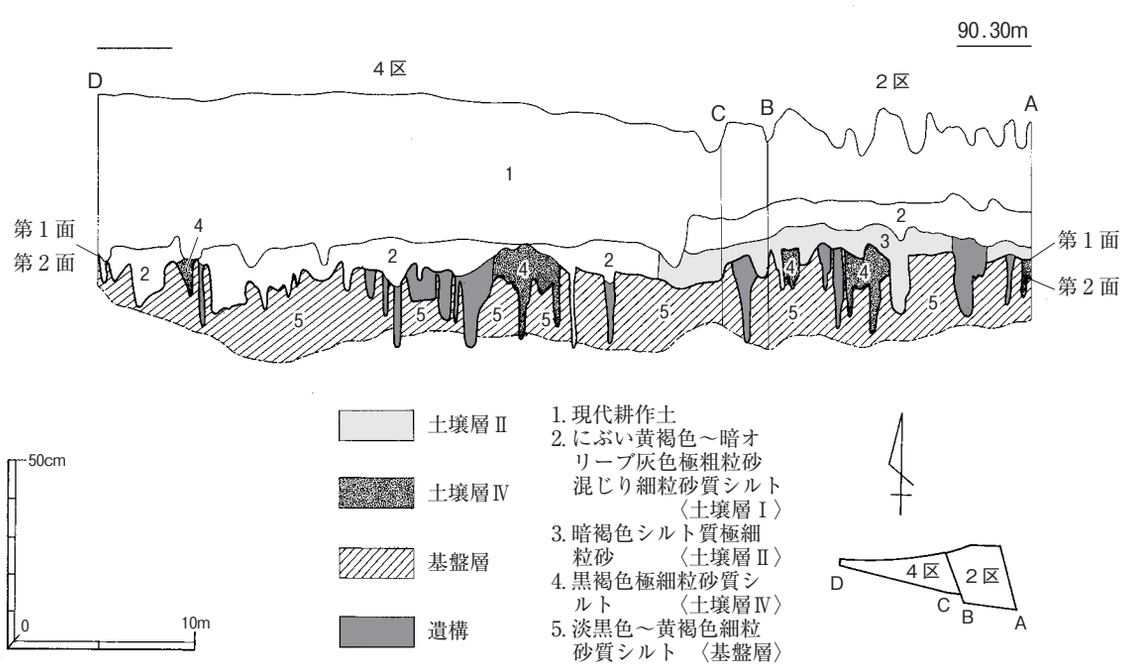
概　　要　２区と４区は、第１面と第２面に分けて遺構を検出した。ただし、本章第１節で触れたように、４区については第１面を確認できなかったため、第２面のみを２区と同時に調査した。本節での第２面の報告については、両調査区を合わせて２・４区としてまとめて取り扱う。

第１面では、２区で鋤溝群・小穴・溝・土坑を検出している（第 102 図）。第２面では、２・４区で掘立柱建物跡・柱穴・溝・土坑を検出している（第 107 図）。

基本層序　２・４区の基本層序は、上から順に現代耕作土層・土壌層Ⅰ・土壌層Ⅱ・土壌層Ⅳ・基盤層からなる（第 101 図）。

現代耕作土層は、当地区全体の全体に広がる。２区での層厚は 18cm～ 23cmであるが、４区では 36cm～ 40cmを測る。現地表の標高は、２区が 90.10 m、４区が 90.17 mである。厚さの違いは、直下層上面レベルの差に起因する。その直下層が、土壌層Ⅰである。土壌層Ⅰは、ほぼ２区と４区を境として上面レベルの落差が 20cmあり、４区側が１段下がった形になっている。層厚は当地区を通して約 20cmである。土壌層Ⅱは、２区のみで確認できるが、４区では確認できず、一段下がった土壌層Ⅰによって削られたとみられる。層厚は、10cm～ 18cmである。土壌層Ⅳは両地区に部分的に残存する。基盤層上面は、細かな凹凸がほぼ同じレベルで両地区に広がっている。その標高は 89.30 mである。

検出面　検出面については、２区では第１面と第２面を検出したが、４区では第２面のみを２区と併せて検出している（第 101 図）。土壌層Ⅰを除去した面を第１面とし、局所的に残存する土壌層Ⅳの除去面を第２面とした。実質的には、各層の残存状況が悪いため、ほぼ基盤層上面で第１面と第２面を検出している。



第 101 図　2・4 区　基本土層図

２．第１面

⑴　鋤溝群

鋤溝群 02 を検出した（第 102 図）。

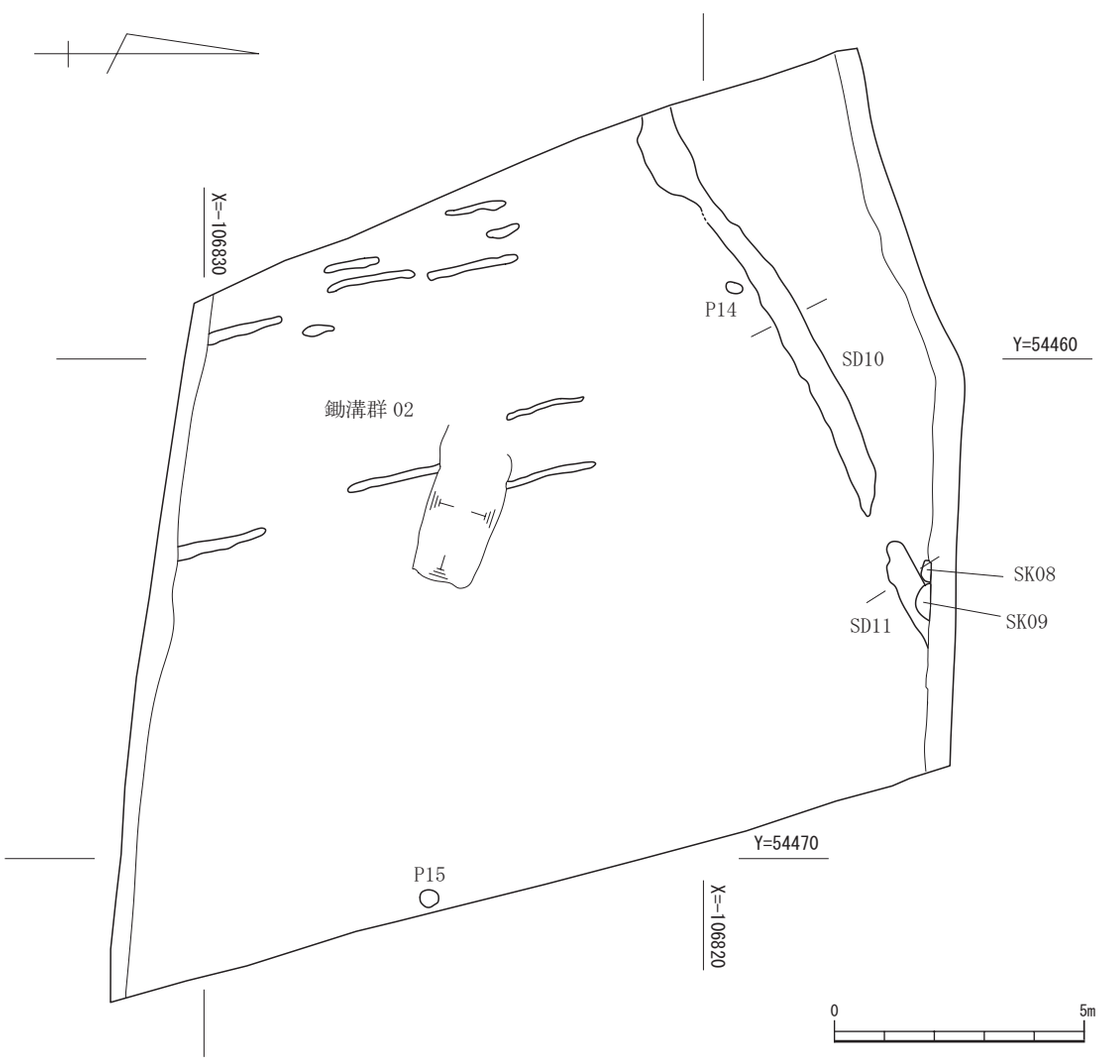
鋤溝群 02

検出状況　鋤溝群 02 は、２区南西部で集中して検出した（第 102 図）。ＳＤ 10 の南側に位置する。鋤溝群 02 における各鋤溝は南北方向を指向し、軸方位はＮ 14 ～ 15°Ｗである。これは１区で検出した鋤溝群 01 と同一方向である。埋土は、１区の耕作痕列と同様に土壌層Ⅱにあたる。

形状・規模　検出した鋤溝の幅は、30cm～ 35cmを測る。そして各鋤溝の長さは 1.60 ｍ～ 2.00 ｍ程度のものが目立つ。鋤溝同士の間隔は狭いもので約 50cm、幅広い部分で約４ｍを測る。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できないが、鋤溝群 02 の指向する方向が、１区の耕作痕列群や鋤溝群 01 と同一であり、埋土も土壌層Ⅱであることから、これらと同時期の 13 世紀頃の位置付けが考えられる。



第 102 図　２区第１面

⑵　柱穴

遺物が出土している小穴を数基検出している。ここでは、これらの小穴について出土遺物を中心に報告する。報告する小穴は、Ｐ 14 とＰ 15 である。

Ｐ 14

検出状況　調査区北西部で検出した（第 102 図）。ＳＤ 10 の南側に隣接する。

出土遺物　土師器皿が（175）が１点出土している（図版７）。175 は口縁部から底部かけて残存する破片である。底部にはユビオサエの痕跡があり、手捏ね成形によるものと考えられる。

時　　期　出土遺物から 13 世紀頃に位置付けられると考えられる。

Ｐ 15

検出状況　調査区東部で検出した（第 102 図）。

出土遺物　須恵器椀が（176）が１点出土している（図版７）。176 体部から底部にかけて残存する破片であるが、底部のみは完存している。底部は平高台で、回転糸切り痕が認められる。また、見込み部分には、一段下がった窪みが見られる。

時　　期　出土遺物から、少なくとも 11 世紀後半以後に位置付けられると考えられる。

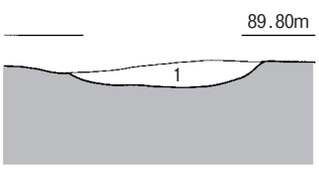
⑶　溝

ＳＤ 10 とＳＤ 11 を検出した（第 102 図）。

ＳＤ 10

検出状況　調査区北側で検出した（第 102 図）。鋤溝群 02 の北側、ＳＤ 11 の南西側の延長上に位置する。ＳＤ 10 は南西－北東方向を指向して直線的に延びる溝である。その南西側は調査区外へ続き、その延長線上には４区第２面のＳＤ 13 が位置する。

形状・規模　検出した長さは、9.20 ｍで、幅は約 60㎝を測り、最も広い部分は 90㎝である。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは８㎝と浅い（第 103 図）。底部の標高は、西部で 89.62 ｍ、東部で 89.66 ｍを測り、ほぼ一定している。



1. 黒褐色細粒砂質シルト
（土器含む）

第 103 図　SD10 断面

埋没状況　埋土は、黒褐色細粒砂質シルトの１層のみである。人為的に埋められたものとみられる。埋土は、土壌層Ⅱに由来するものと考えられ、極微細な土器片や炭化物が混じる。

出土遺物　須恵器の椀（177）と小皿（178・179）の３点が出土している（図版７）。

椀は、177 の１点が出土している。177 は、底部の破片で、僅かに回転糸切りの痕跡が残る。見込に窪みは認められない。

小皿は､178 と 179 の２点が出土している。178 と 179 は口縁部から底部にかけて残存する破片である。178 は底部に回転ヘラ切りの痕跡が残り、179 は回転糸切りの痕跡が残る。

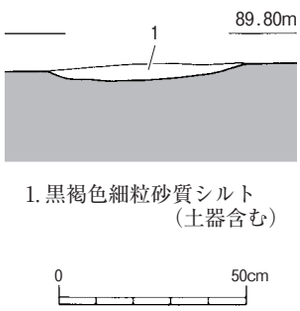
時　　期　出土遺物や埋土から判断すると、13 世紀初め頃の位置付けが考えられる。

ＳＤ 11

検出状況　調査区北東隅で検出した（第 102 図）。ＳＤ10 の北東側の延長上に位置する。ＳＤ11 は南西－北東方向を指向し、おそらく直線的に延びる溝で、その北東側は調査区外へ続く。ＳＤ11 の北側及び北東部では、ＳＫ 08・ＳＫ 09 に切られている。

形状・規模　検出した長さは、2.10 ｍで、幅は 55㎝を測る。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは５㎝と浅い（第 104 図）。底部の標高は、西部で 89.68 ｍ、北東部で 89.69 ｍを測り、そのレベルはほぼ一定している。

埋没状況　埋土は黒褐色細粒砂質シルトの１層のみである。人為的に埋没したものとみられる。埋土は、土壌層Ⅱに由来するものと考えられ、極微細な土器片や炭化物が混入している。



第 104 図　SD11 断面

出土遺物　土錘が１点（Ｄ７）出土している（図版７）。Ｄ７は、端部の一方のみが残る破片で、幅 1.9㎝を測り、第３章第２節２で言及する中型のものに含まれる。通し穴は直径５㎜を測る。

時　　期　出土遺物からの判断は困難であるが、埋土から判断すると 13 世紀頃の位置付けが考えられる。ただし、ＳＤ10 とは本来同一の遺構の可能性が高いことから 13 世紀初め頃の位置付けが想定される。

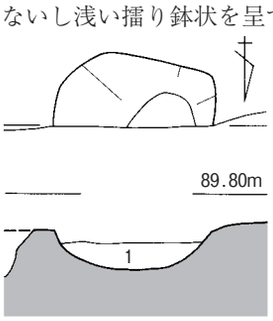
(4)　土坑

ＳＫ 08 とＳＫ 09 を検出した（第 102 図）。

ＳＫ 08

検出状況　調査区北東隅で検出した（第 102 図）。ＳＫ 09 の西側に隣接し、ＳＤ 11 を切っている。調査区側溝にかかったため、南半のみ検出した。

形状・規模　検出した平面形は、不整形な円形を呈する。検出した長さは 42㎝を測る。断面形は、皿状ないし浅い擂り鉢状を呈する。検出面からの深さは 20㎝である（第 105 図）。



第 105 図　SK08

埋没状況　埋土は、土壌層Ⅱに由来する黒褐色極粗粒砂混じり中粒砂～細粒砂の１層である。極微細な土器片が混入している。１区で検出した耕作痕と埋土が類似する。当地区では列をなさなさず、その関連性については明らかではないが、断面形や埋土から耕作痕と同様の性格をもつものと考えられる。

出土遺物　土錘の破片１点（Ｄ８）が出土している（図版７）。Ｄ８は、端部の一方のみが残る破片で、幅９㎜を測り、第３章第２節２で報告する小型のものに含まれる。通し穴の直径は４㎜である。

時　　期　出土遺物からの判断は困難だが、土壌層Ⅱが埋土であることや、ＳＤ 11 を切っていることから、少なくとも 13 世紀頃の位置付けが考えられる。

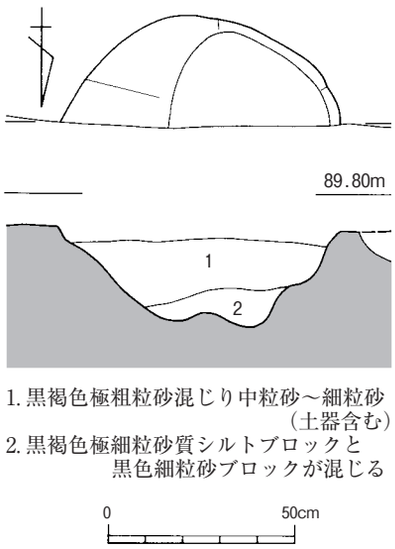
ＳＫ 09

検出状況　調査区北東隅で検出した（第 102 図）。ＳＫ 08 の東側に隣接し、ＳＤ 11 を切っている。調査区側溝にかかったため、南半のみ検出した。

形状・規模　検出した平面形は、不整形な円形を呈する。検出した長さは 74cmを測る。断面形は、丸みを持った逆台形状を呈する。検出面からの深さは 26cmである（第 106 図）。

埋没状況　埋土は、上層と下層からなり（第 106 図）、上層は土壌層Ⅱに由来する黒褐色極粗粒砂混じり中粒砂～細粒砂層である。極微細な土器片が混入している。１区で検出した耕作痕と埋土が類似する。

下層は土壌層Ⅱ由来の黒褐色極細粒砂質シルトのブロックと下層の黒ボク土層に由来する黒色細粒砂のブロックが混じる層である。



第 106 図　SK09

このような下層のあり方は１区で認められた耕作痕の下部と類似しており、掘削時に形成された層、ないしは何らかの植物を抜き取 った際に堆積した痕跡の可能性がある。ただし、ＳＫ 08 同様、当地区では列をなさなさず、その関連性については明らかではないが、断面形状や埋土から耕作痕と同様の性格をもつと考えられる。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物からの判断は困難だが、土壌層Ⅱが埋土であることや、ＳＤ 11 を切っていることから、少なくとも 13 世紀頃の位置付けが考えられる。

(5)　包含層

遺構に伴わないが、残存状況が比較的良好な資料が第１面検出時に出土している。ここでは第１面検出時の掘削層を遺物包含層として、ここから出土した遺物を報告する。出土資料は、土師器・須恵器・緑釉陶器である。

土師器は、鍋の破片（180）が１点出土している（図版７）。180 は、口縁部から体部まで残存する破片である。体部外面には平行目のタタキメが残り、内面には無文の当て具痕が認められる。体部から口縁部かけては、「く」の字状に屈曲する。口縁端部は外側斜め下方に摘み出され、その端面は外傾する。

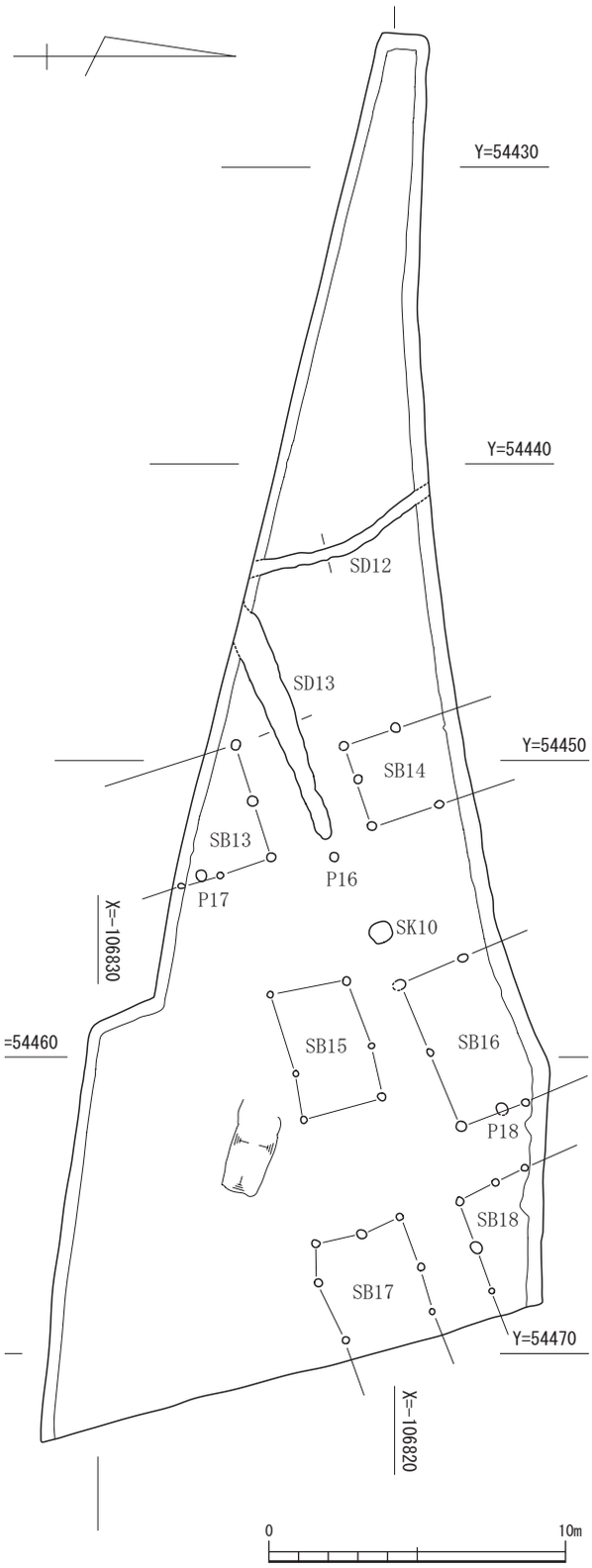
須恵器は、小皿の破片（181）が１点出土している（図版７）。181 は、口縁部から底部までの破片だが、底部のみ完存する。底部には回転糸切り痕が認められる。口縁部は底部から短く立ち上がる。

緑釉陶器は、椀の底部片（182）が１点出土している（図版７）。182 は、底部の破片で、削り出しによる輪高台である。底部は、高台内側も含めて、内外面に施釉されている。

３．第２面

⑴　掘立柱建物跡

ＳＢ 13 ～ＳＢ 18 を検出した（第 107 図）。



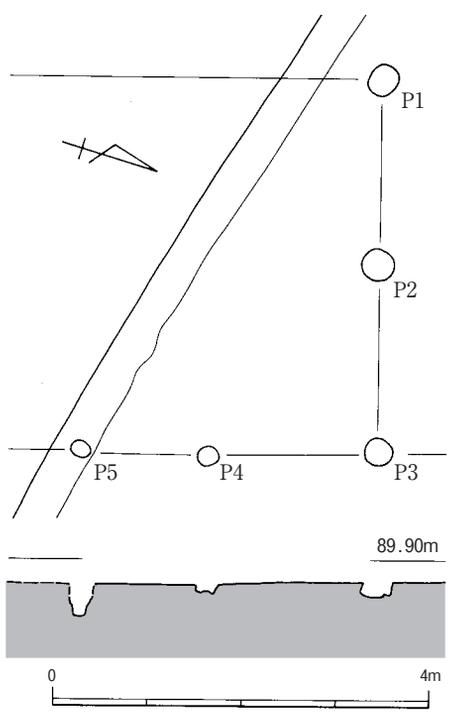
第 107 図　2・4 区第 2 面

ＳＢ 13

検出状況　４区南東側で検出した（第 107 図）。ＳＤ 13 の南側に位置する。建物の北東隅部を検出しており、その他の部分は南側調査区外へ続くと考えられる。

形状・規模　部分的に検出したため、梁行は２間、桁行は少なくとも２間の側柱建物である（第 108 図）。桁行と梁行はほぼ平行・直角関係にあり、平面形はほぼ整った形を示す。北梁行（Ｐ１－Ｐ３間）は 4.00 ｍを測り、東桁行（Ｐ３－Ｐ５間）は 3.20 ｍを測り、建物面積は少なくとも 12.8㎡以上になる。各柱間の規模は、第 14 表の通りである。棟軸方向は、西桁行を基準としてＮ 18°Ｗを示す。

柱穴については、平面形が円形で、検出面での平面規模は、直径 32㎝～ 36㎝を測る。ただしＰ４が最も小さく、直径 20㎝を測る。



第 108 図　SB13

第 14 表　SB13 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	2.00	4.00	2.00
	Ｐ２－Ｐ３	2.00		
東桁行	Ｐ３－Ｐ４	1.85	3.20	1.60
	Ｐ４－Ｐ５	1.35		

検出面からの深さは、12㎝～ 32㎝である。柱痕については確認できなかった。

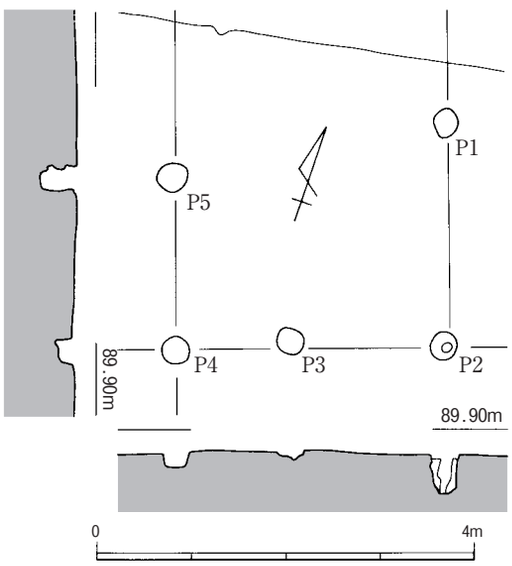
出土遺物　土師器の皿（183）がＰ１より出土している。183 は、口縁部～底部の破片で、底部にはナデの痕跡が残り、手捏ね成形されたものである。

時　　期　出土遺物から判断すると、13 世紀に廃絶したものと考えられる。

ＳＢ 14

検出状況　４区北東側で検出した（第 107 図）。ＳＤ 13 の北側に位置する。建物の南側を検出しており、その他の部分は北側調査区外へ続くと考えられる。

形状・規模　部分的に検出したため、梁行は２間、桁行は少なくとも１間の側柱建物である（第 109 図）。桁行と梁行はほぼ平行・直角関係にあり、平面形はほぼ整った形を示す。南梁行（Ｐ２－Ｐ４間）は 2.90 ｍを測り、西桁行（Ｐ４－Ｐ５間）は 1.85 ｍを測り、東桁行（Ｐ１－Ｐ２間）は 2.40 ｍを測る。建物の面積は、少なくとも７㎡以上にはなるものと考えられる。各柱間の規模は、第 15 表の通りである。棟軸方向は、南西桁行を基準としてＮ 18°Ｗを示す。



第 109 図　SB14

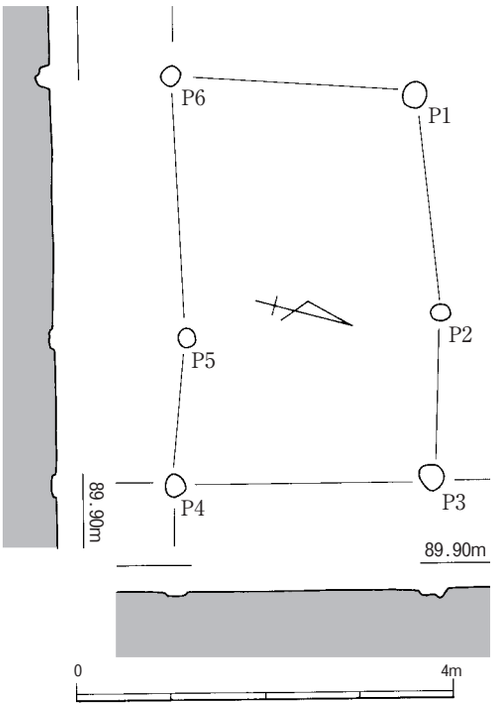
柱穴については、平面形はほぼ円形で、検出面での平面規模の直径は 28㎝～ 32㎝である。検出面からの深さは、最も浅いものでＰ３の６㎝、深いものでＰ２の 40㎝である。その他は 10㎝～ 20㎝である。柱痕については、Ｐ２（径 12㎝）で検出されている。

出土遺物　須恵器の椀(184) がＰ５より出土している。184 は口縁部～底部の破片で、底部のみ完存する。底部は平高台で、回転糸切りの痕跡が残る。見込みは、一段下がる窪みを持つ。

時　　期　出土遺物から判断すると、11 世紀後半頃に廃絶したものと考えられる。

第 15 表　SB14 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.40	2.40	2.40
南梁行	Ｐ２－Ｐ３	1.65	2.90	1.45
	Ｐ３－Ｐ４	1.25		
西桁行	Ｐ４－Ｐ５	1.85	1.85	1.85



第 110 図　SB15

ＳＢ 15

検出状況　２区中央西側で検出した（第 107 図）。ＳＢ 13・ＳＤ 13 の東側、ＳＢ 16 の南側に位置する。建物全体が検出されている。

形状・規模　梁行１間、桁行２間の側柱建物である（第 110 図）。桁行と梁行は平行・直角関係にあるが、柱穴列の軸の位置がややずれているため。平面形はやや歪んだ形を示す。東梁行（Ｐ３－Ｐ４間）は、2.80 ｍを測り、南桁行（Ｐ４－Ｐ６間）は 4.40 ｍを測る。建物面積は少なくとも 12.3㎡以上になる。棟軸方向は、南桁行を基準としてＮ 105°Ｗを示す。各柱間の規模は、第 16 表の通りである。

柱穴については、平面形はほぼ円形で、検出面での平面規模は、直径 18㎝～ 28㎝を測る。検出面からの深さは浅く、６㎝～ 12㎝である。柱痕については、確認できなかった。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できない。しかし、ＳＤ 10・ＳＤ 11・ＳＤ 13 の南側に位置し、当建物跡の棟軸がＳＢ 13 に対してほぼ 90°振っており、建物が併存していた可能性が高い。13 世紀頃の年代的位置付けが推測される。なお、ＳＢ 16 と当建物の棟軸方向は平行ないし垂直方向にあり、関連性が想起されるが、ＳＢ 16 がＳＤ 10 の下層に位置することから、所属時期が異なると判断される。

第 16 表　SB15 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.35	4.15	2.07
	Ｐ２－Ｐ３	1.80		
東梁行	Ｐ３－Ｐ４	2.80	2.80	2.80
南桁行	Ｐ４－Ｐ５	1.60	4.40	2.20
	Ｐ５－Ｐ６	2.80		
西梁行	Ｐ６－Ｐ１	2.60	2.60	2.60

ＳＢ 16

検出状況　２区北西側で検出した（第 107 図）。ＳＢ 14・ＳＤ 13 の東側、ＳＢ 15 の北側に位置する。建物の南側を検出したが、残りは北側調査区外へ続くとみられる。

形状・規模　部分的に検出しているため、梁行２間、桁行は少なくとも１間の側柱建物である（第 111 図）。桁行と梁行はほぼ平行・直角関係にあり、比較的整った平面形になる。南梁行（Ｐ２－Ｐ４間）は、

第 17 表　SB16 規模一覧

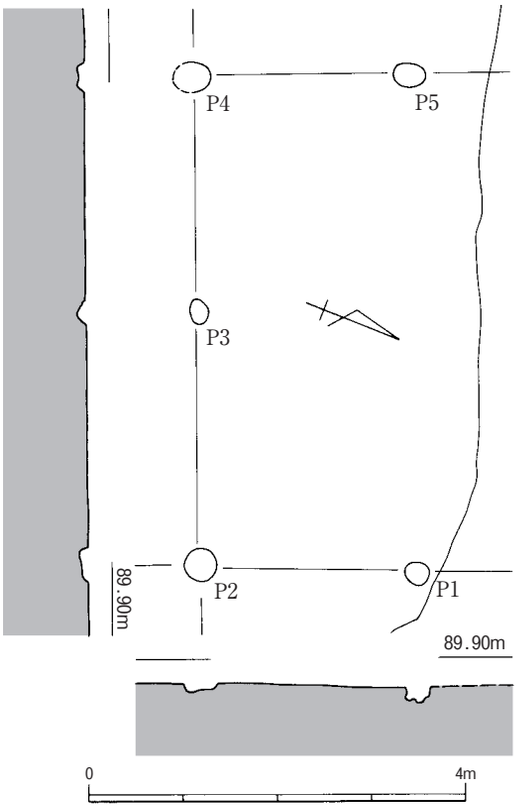
	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
東桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.30	2.30	2.30
南梁行	Ｐ２－Ｐ３	2.70	5.20	2.60
	Ｐ３－Ｐ４	2.50		
西桁行	Ｐ４－Ｐ５	2.30	2.30	2.30

5.20mを測り、西桁行（Ｐ４－Ｐ５間）は2.300mを測る。建物の面積は、12㎡以上になる。各柱間の規模は第17表の通りである。棟軸方向は、西桁行を基準としてＮ23°Ｗを示す。

柱穴については、平面形はほぼ円形で、検出面での平面規模は、直径28cmを測る。検出面からの深さは浅く、８cm～18cmである。柱痕については、確認できなかった。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できないが、ＳＤ11の下層に位置し、かつＳＤ10・ＳＤ11・ＳＤ13の以北に位置するＳＢ14と当建物跡の棟軸がほぼ同じであることから、11世紀後半に位置付けられると考えられる。



第111図　SB16

ＳＢ17

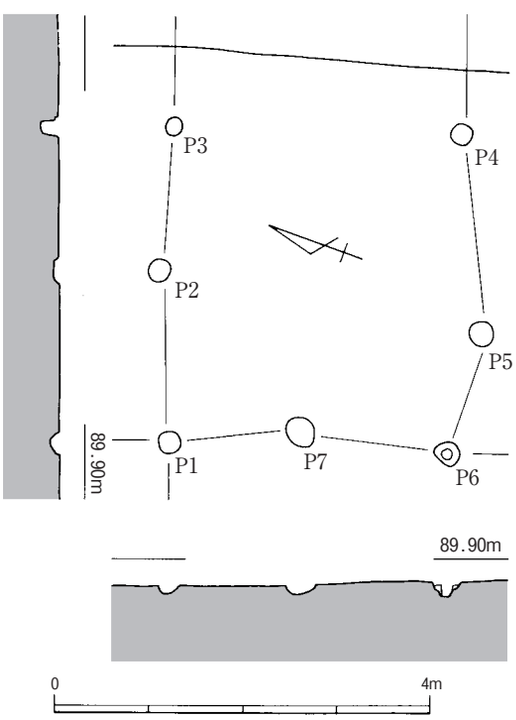
検出状況　２区東側中央で検出した（第107図）。ＳＢ18の南側、ＳＢ15の東側に位置する。建物の西側を検出した。残りは東側調査区外へ続くとみられるが、１区の西側においては続きが確認できなかったため、１区と２区の間で終わるものと推測される。

形状・規模　部分的に検出しているため、梁行２間、桁行は少なくとも２間の側柱建物である（第112図）。ただし、桁行については、上記の推測から３間の可能性が高い。桁行と梁行はほぼ平行・直角関係にあるが、南桁行の柱穴の一部がやや南へ張り出すため、やや歪んだ長方形の平面形になる。西梁行（Ｐ１－Ｐ７間）は3.05ｍを測り、北桁行（Ｐ１－Ｐ３間）は3.45ｍを測る。建物面積は少なくとも10.5㎡以上になる。各柱間の規模は第18表の通りである。棟軸方向は、北桁行を基準としてＮ109°Ｗを示す。

柱穴については、平面形はほぼ円形で、検出面での平面規模は、直径20cm～32cmである。検出面からの深さは浅く、10cm～18cmである。最も浅いものでＰ２の６cmである。柱痕については、Ｐ６（径12cm）で検出されている。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から時期を判断できない。当建物はＳＤ10・ＳＤ11・ＳＤ13の南側に位置し、当建物



第112図　SB17

第 18 表　SB17 規模一覧

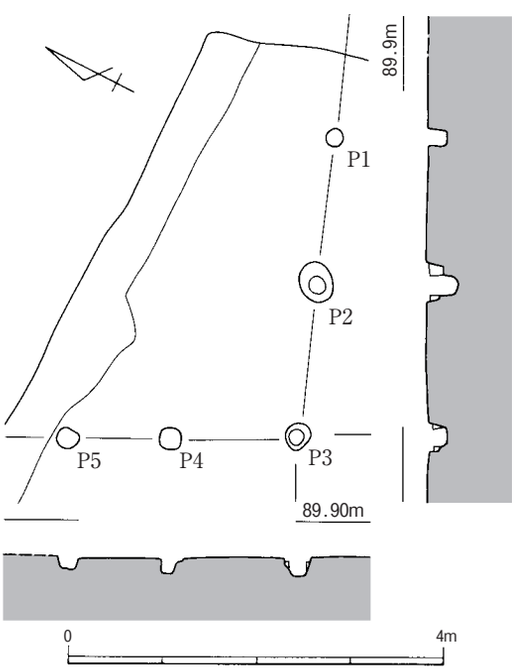
	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.85	3.45	1.72
	Ｐ２－Ｐ３	1.60		
南桁行	Ｐ４－Ｐ５	2.20	3.50	1.75
	Ｐ５－Ｐ６	1.30		
西梁行	Ｐ６－Ｐ７	1.60	3.05	1.52
	Ｐ７－Ｐ１	1.45		

の棟軸がＳＢ 15 と同様に、ＳＢ 13 対して 90° 振ることから、建物が併存する可能性が高い。したがって、当建物も 13 世紀頃に位置付けられると考えられる。

ＳＢ 18

検出状況　２区北東隅で検出した（第 107 図）。ＳＢ 17 の北側、ＳＢ 16 の東側に位置する。建物の南西側を検出した。残りは調査区外へ続くとみられるが、東へ延びた場合、１区では続きが確認できなかったため、少なくとも１間以下の続きが１区と２区の間で終わるものと推測される。一方北側については、調査区外へ続きが存在する可能性がある。

形状・規模　部分的に検出しているため、梁行と桁行を特定困難であるが、ここでは便宜的に西側を梁行、南側を桁行とする。したがって、少なくとも梁行２間、桁行２間の側柱建物となる（第 113 図）。桁行と梁行はほぼ平行・直角関係にあるが、南桁行の柱穴の一部がやや南へ張り出すため、比較的整った平面形になる。西梁行（Ｐ３－Ｐ５間）は 2.50 ｍを測り、南桁行（Ｐ１－Ｐ３間）は 3.35 ｍを測る。建物面積は少なくとも 8.37㎡以上になる。棟軸方向は、南桁行を基準としてＮ 110° Ｗを示す。各柱間の規模は、第 19 表の通りである。



第 113 図　SB18

柱穴については、平面形はほぼ円形で、検出面での平面規模は直径 20cm～ 28cmであるが、最も大きいものがＰ２の直径 42cmである。検出面からの深さは浅く、10cm～ 22cmである。最も深いもので、Ｐ２の 32cmである。柱痕については、Ｐ２（径 21cm）とＰ３（径 18cm）で検出されている。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できない。しかし、当建物はＳＤ 11 の下層にあたることから、ＳＤ 11 よりも古い段階に存在し、ＳＤ 10・ＳＤ 11・ＳＤ 13 の南の建物との併存関係の可能性が低いことがわかる。そして、当建物の棟軸がＳＢ 16 と平行関係にあり、かつＳＤ 14 に対して約 90° 振ることから、むしろこれらの建物と併存する可能性が高い。したがって、当建物も 11 世紀後半頃に位置付けられると考えられる。

第 19 表　SB18 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
南桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.55	3.35	1.67
	Ｐ２－Ｐ３	1.80		
西梁行	Ｐ３－Ｐ４	1.40	2.50	1.25
	Ｐ４－Ｐ５	1.10		

⑵　柱穴

当地区では、建物として復元できなかった柱穴のうち、比較的良好な資料が出土したものが３穴（Ｐ16 ～Ｐ 18）ある（第 107 図）。ここでは、これらの柱穴について、出土遺物を中心に報告する。

Ｐ 16

検出状況　４区中央東側で検出した（第 107 図）。ＳＤ 13 の延長上に隣接し、ＳＢ 14・ＳＢ 13 の東側に位置する。ただし、ＳＤ 13 によって上部は影響を受けている。

出土遺物　土師器の鍋（185）が出土している（図版７）。185 は、口縁部から体部にかけての破片である。体部は外面に平行目のタタキを施し、内面には無文の当て具の痕跡が残る。体部から口縁部にかけては「く」字状に屈曲し、口縁部は外上方へ立ち上がる。口縁端部は水平にやや強く摘み出される。

時　　期　出土遺物は、12 世紀末～ 13 世紀前半に位置付けられる。しかし、ＳＤ 13 の影響を受けているため、遺物もＳＤ 13 に関連する可能性が高く、遺構としては、12 世紀前半～中頃の位置付けられる可能性が考えられる。

Ｐ 17

検出状況　４区南東側で検出した（第 107 図）。ＳＢ 13 とほぼ同位置にあり、当建物のＰ４とＰ５の間に位置する。

出土遺物　土師器の小皿（186）が出土している（図版７）。186 は、口縁部から底部にかけての破片である。底部はユビオサエの痕跡が残り、手捏ね成形による。

時　　期　出土遺物から、13 世紀に位置付けられる

Ｐ 18

検出状況　２区北側で検出した（第 107 図）。ＳＢ 16 とほぼ同位置にあり、当建物のＰ１とＰ２の間に位置する。

出土遺物　土師器の皿（187）が出土している（図版７）。187 は、口縁部から体部にかけての破片である。ロクロ成形によるもので、体部はやや内湾しながら外上方へ立ち上がり、口縁端部はやや外反する。

時　　期　出土遺物から、11 世紀末に位置付けられる

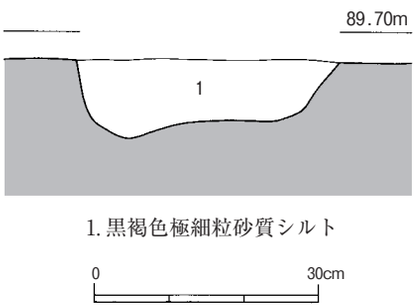
⑶　溝

ＳＤ 12 とＳＤ 13 を検出した（第 107 図）。

ＳＤ 12

検出状況　４区西側で検出した（第 107 図）。ＳＤ 13 の北西側に位置する。ＳＤ 12 は南北方向を指向する溝で、わずかに弧状をなしている。

形状・規模　検出した長さは直線距離にして 6.60 ｍで、幅は 72㎝を測る。断面形は、やや丸みを帯びた逆台形をなす。検出面からの深さは 22㎝である（第 114 図）。底部の標高は、南部で 89.55 ｍ、北部で 89.55 ｍを測り、底部は一定である。



第 114 図　SD12 断面

埋没状況　埋土は、黒ボク土層に由来する黒褐色細粒砂質シルトの１層のみである。おそらく黒ボク土層上面より掘り込まれた可能性があり、さらに人為的に埋められたものと考えられる。層相としては、１区第２面で検出したＳＤ 09 と類似する。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物がないため判断は困難だが、埋土が黒ボク土層を由来とすることや、ＳＤ 09 の埋土との類似性から、ほぼ同時期の弥生時代中期前葉に形成されたものと考えられる。

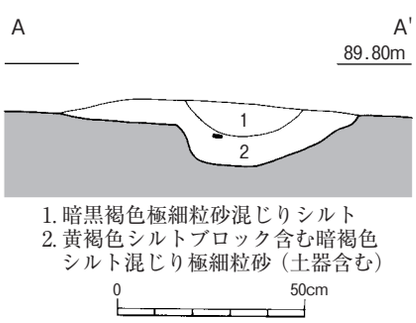
ＳＤ 13

検出状況　４区西側中央部で検出した（第 107 図）。ＳＢ 14 の南側、ＳＢ 13 の北側、ＳＤ 12 の南東側に位置する。ＳＤ 13 は南西―北東方向に直線的に延びる溝で、南西側は調査区外へ続いている。

形状・規模　検出した長さは 8.50 ｍ、平均的な幅は約 80㎝で、最大幅 105㎝を測る。断面形は逆台形に近い形状をなす。検出面からの深さは 16㎝を測る（第 115 図）。底部の標高は、南西部で 89.49 ｍ、北東部で 89.58 ｍを測り、底部は南西方向へ傾斜している。

埋没状況　埋土は、１層と２層の２つの層がある。１層は、暗黒褐色極細粒砂混じりシルトで、ＳＤ 13 の２層の上面に形成された落ち込み部分に堆積している。土壌層Ⅱと同質のものとみられる。２層は、基盤層由来の黄褐色シルトブロックを含む暗褐色シルト混じり極細粒砂で、この層からは土器が出土している。この２層は、溝が機能していた段階で自然に堆積したとみられ、土器もこの時期に廃棄され埋没していったものと考えられる。

出土遺物　土師器・須恵器が出土している（図版７・８）。



第 115 図　SD13 断面

土師器は、皿（188 ～ 194）・小皿（195 ～ 199）・鍋（200・201）が出土している（図版７）。

皿は、188 ～ 194 の７点が出土している。いずれの資料も手捏ね成形によるものである。小皿は 195 ～ 199 の５点が出土している。いずれの資料も手捏ね成形によるものである。

鍋は、200 と 201 の２点が出土している。200 は口縁部の破片で、201 は口縁部から体部にかけて残存する破片である。200 は、口縁端部を水平に強く摘み出す。201 は、体部外面に平行目のタタキが施される。体部から口縁部にかけては「く」字状

に屈曲し、口縁部は外上方に立ち上がる。口縁端部は、端面が外傾し、外縁が弱く摘み出される。

須恵器は、小皿（202）・椀（203・204）が出土している（図版８）。

小皿は、202 の完存資料１点が出土している。202 の底部には回転糸切り痕が残る。口縁部は内湾しながら外上方に短く立ち上がる。口縁端部はやや肥厚して丸く収められている。供伴する土師器皿と土師器鍋の年代から、13 世紀前半の所産と考えられる。

椀は、203・204 の２点が出土している。203・204 はともに口縁部のみの破片である。口縁部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部が丸く収められている。

時　　期　出土遺物や埋土から判断すると 13 世紀前半の位置付けが考えられる。

⑷　土坑

ＳＫ 10 を検出した（第 107 図）。

ＳＫ 10

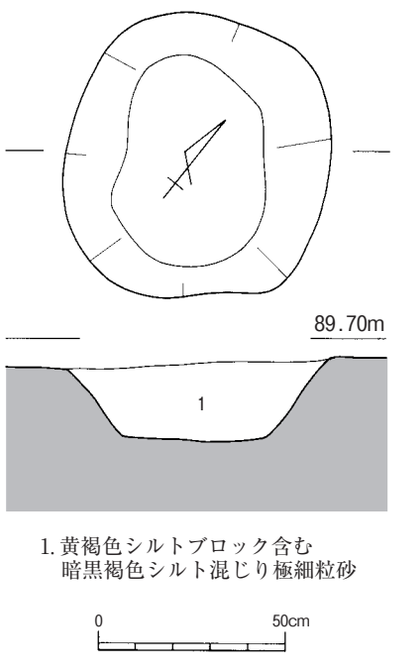
検出状況　調査区中央で検出した（第 107 図）。２区と４区の境の４区側に位置する。また、ＳＢ 15・ＳＢ 16 の西側に位置する。

形状・規模　検出した平面形状は、やや不整形な円形を呈する。検出面で 76cm× 71cmを測る。断面形は、逆台形を呈する。検出面からの深さは 22cmである（第 116 図）。

埋没状況　埋土は１層のみで、土壌層Ⅲに由来する暗黒褐色シルト混じり極細粒砂を基質として、基盤層に由来する黄褐色シルトのブロックを含んでいる。人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　鞴羽口（Ｄ 10）の１点のみ出土している（図版８）。Ｄ 10 は、羽口の尖端部分の破片である。内外面には溶融し凝固した金属が付着している。残存長 5.6cm、残存幅 4cmを測る。

時　　期　出土遺物からの判断は困難だが、ＳＤ 10 の下層で検出し、埋土が土壌層Ⅲ由来であることから、８世紀頃の位置付けが考えられる。



第 116 図　SK10

⑸　包含層

遺構に伴わないが、残存状況が比較的良好な資料が、第２面検出時に出土している。ここここでは、その際に出土した遺物について報告する。出土資料は、土師器・須恵器・土製品である。

土師器は、小皿（207・208）と皿（209 ～ 212）が出土している（図版８）。

小皿は、207 と 208 の２点が図化できた。207 と 208 は、口縁部から底部にかけて残存する破片である。底部にはナデの痕跡が残り、手捏ね整形によるものとみられる。また、208 も底部にユビオサエ痕跡が残り、手捏ね整形である。

皿は、209 ～ 212 の４点が図化できた。209 ～ 212 は、いずれも口縁部から底部にかけての破片である。底部にユビオサエの痕跡やナデ調整が顕著に残り、手捏ね整形とみられるものは 209・211・212 である。210 は、底部に回転糸切りの痕跡が残る。209 ～ 211 は、いずれもほぼ同じ約３cmの器高だが、212 は極めて低く 1.2cmである。なお、212 は、焼成後に体部が穿孔（径４㎜～５㎜）されている。

須恵器は、椀（205）と小皿（206）が出土している（図版８）。

椀は、205 の１点が図化できた。205 は、口縁部から底部の破片である。底部には回転糸切りの痕跡が残る。体部は外上方に直線的立ち上がるが、体部中程から口縁部にかけてやや外反させている。

小皿は、206 の１点のみが図化できた。206 は、底部から口縁部の破片である。底部には、回転糸切り痕が残る。

土製品は、土錘（Ｄ９）が１点出土している（図版８）。Ｄ９は、一方の端部が残存する破片である。幅は 1.8㎝を測り、第３章第２節２で記したように、中型の土錘といえる。通し穴の直径は 4.5㎜を測る。

第４節　３区の調査

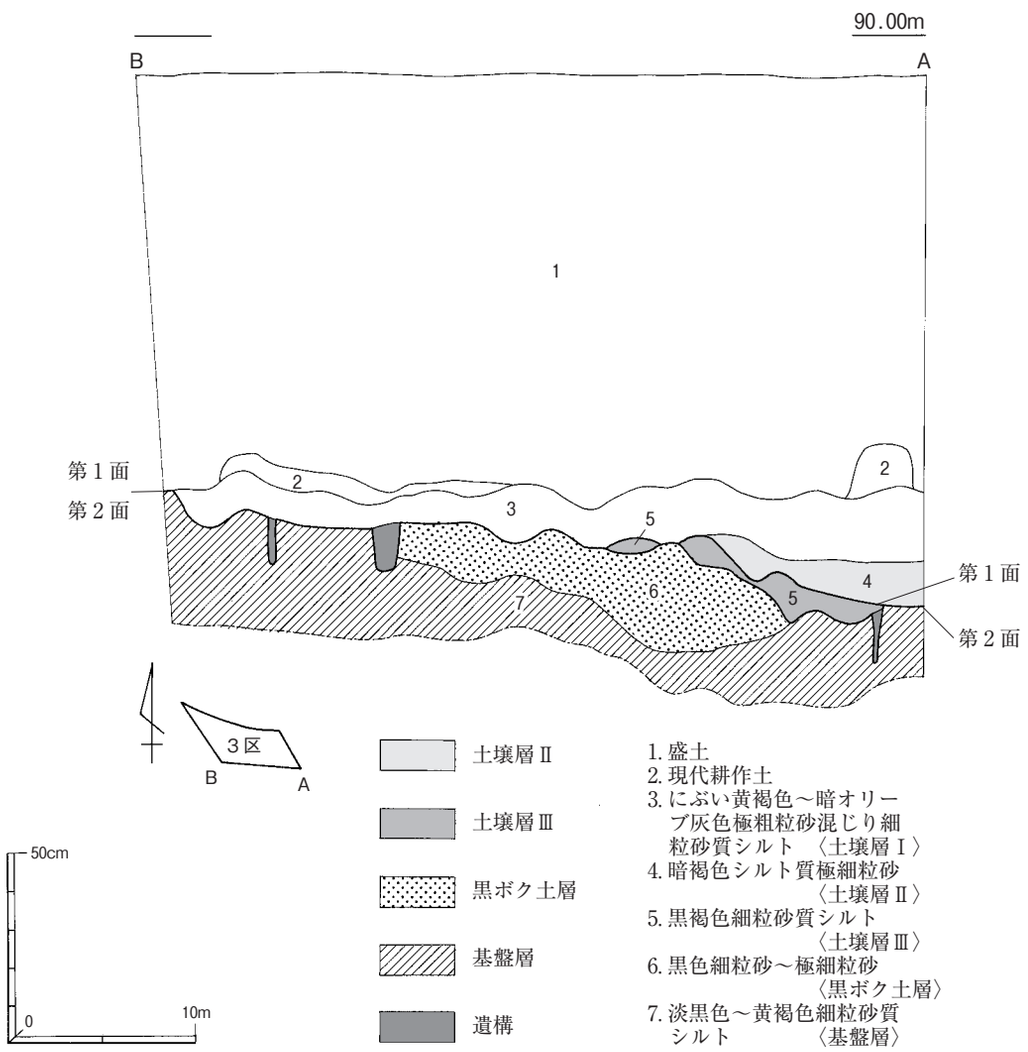
１．概要

概　　要　３区は、第１面と第２面に分けて遺構を検出した。第１面では、土坑が検出されている（第118図）。第２面では、掘立柱建物跡が検出されている（第124図）。

基本層序　当地区の基本層序は、上から順に、盛土層・現代耕作土層・土壌層Ⅰ・土壌層Ⅱ・土壌層Ⅲ・黒ボク土層・基盤層からなる（第117図）。

盛土層は、当地区では極めて厚く、厚さ1.10ｍを測る。現地表面の標高は89.80ｍである。現代耕作土層は僅かに残るのみである。土壌層Ⅰは、当地区全域に堆積し、上面の高低差はほとんど認められない。ただし、層厚は西側の20㎝に対し東側が40㎝と厚くなる。土壌層Ⅱおよび土壌層Ⅲは、３区東側で基盤層が落ち込む箇所にのみ薄く堆積する。黒ボク層は、当地区の中央部で基盤層が西から東へ傾斜する部分に認められる。基盤層は、西から東へ傾斜するが、その標高は西側で88.80ｍ、東側で88.50ｍである。

検出面　遺構は、第１面と第２面の２面にわたり検出されている（第117図）。ただし、第１面は土壌層Ⅱの、第２面は土壌層Ⅲの除去面で検出したが、厳密には調査区東側でのみ認められる。調査区の中央から西は第１面および第２面は、ともに黒ボク層および基盤層の上面で検出されている。

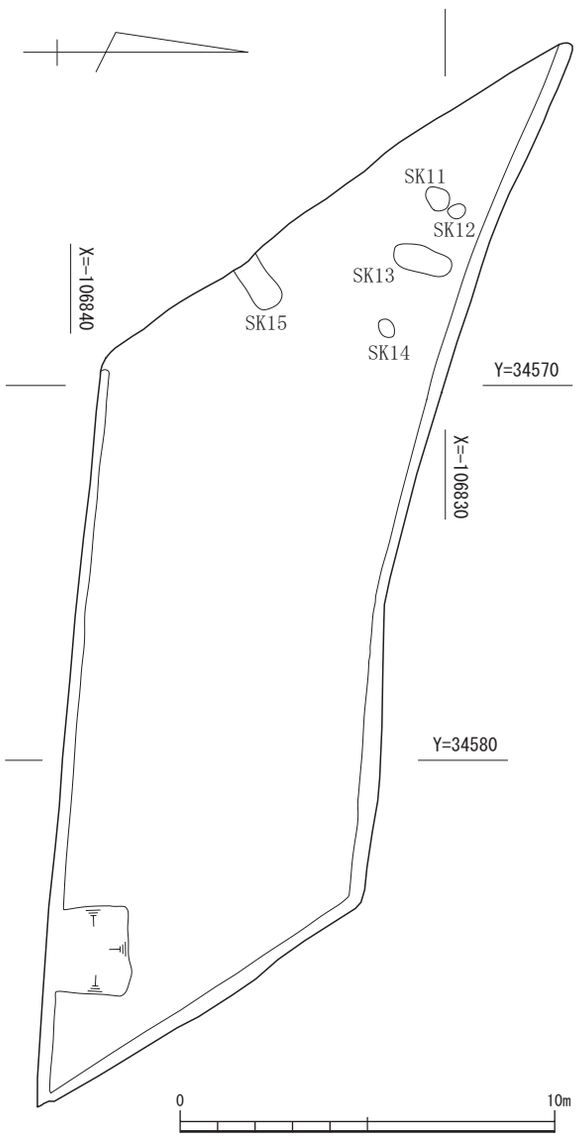


第117図　３区基本土層

２．第１面

⑴　土坑

ＳＫ 11 ～ＳＫ 15 の５基が検出されている（第 118 図）。



第 118 図　３区第１面

ＳＫ 11

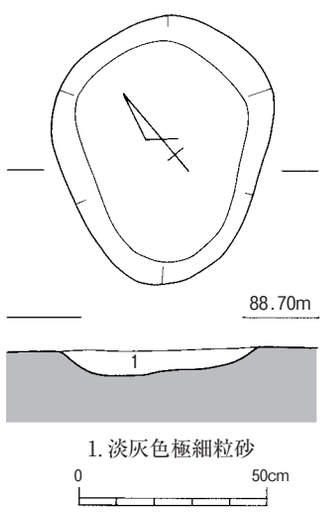
検出状況　調査区北西隅で検出した（第 118 図）。ＳＫ 12 の南西側に隣接する。

形状・規模　平面形状は、やや不整形な楕円形を呈する（第 119 図）。検出規模は、長軸で 72cm、短軸で 60cmを測る。断面形は浅い皿状をなし、検出面からの深さは 7cmを測る。

埋没状況　埋土は、淡灰色極細粒砂が堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できないが、埋土から判断して 13 世紀頃と考えられる。



第 119 図　SK11

ＳＫ 12

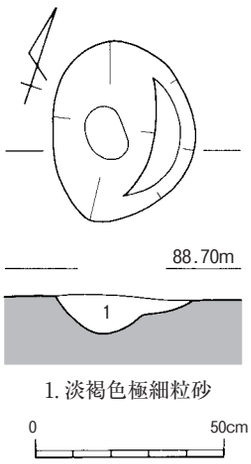
検出状況　調査区北西隅で検出した（第 118 図）。ＳＫ 11 の北東側に隣接する。

形状・規模　平面形状は、やや不整形な円形を呈する（第 120 図）。検出規模は、長軸で 40cm、短軸で 49cmを測る。断面形は緩やかなＵ字形をなし、一部２段に掘り込まれている。検出面からの深さは 11cm を測る。

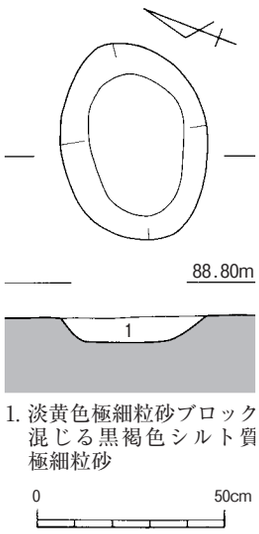
埋没状況　埋土は、淡褐色極細粒砂が堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断ですることは困難である。埋土から判断して 13 世紀頃と考えられる。



第 120 図　SK12



第 121 図　SK14

ＳＫ 13

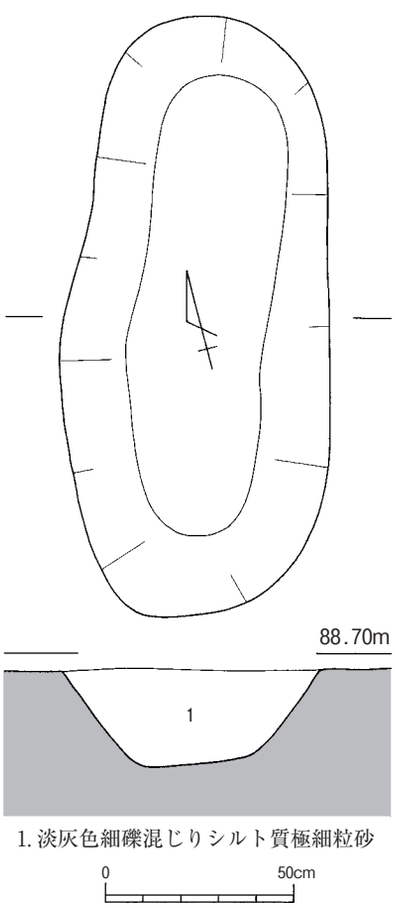
検出状況　調査区北西隅で検出した（第 117 図）。ＳＫ 11・ＳＫ 12 の東側に位置する。

形状・規模　平面形状は、やや不整形な長楕円形を呈する（第 122 図）。検出規模は、長軸で 1.58 m、短軸で 72㎝を測る。断面形は逆台形をなし、検出面からの深さは 26㎝を測る。

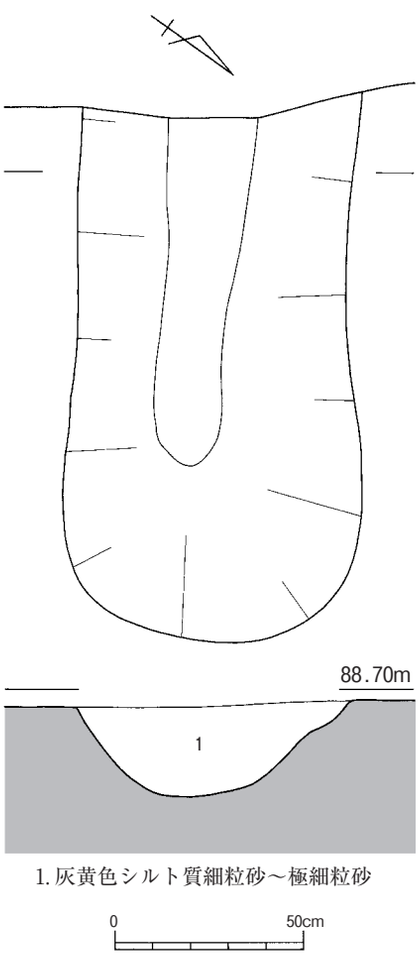
埋没状況　埋土は、淡褐色細礫混じりシルト質極細粒砂が堆積している。土壌層Ⅱに対応し、その下面遺構と考えられる。規模や断面形・埋土は、ＳＫ 15 と類似する。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できないが、埋土から判断して 13 世紀頃と考えられる。



第 122 図　SK13



第 123 図　SK15

ＳＫ 14

検出状況　調査区北西隅で検出した（第 117 図）。ＳＫ 13 の東側に位置する。

形状・規模　平面形は、楕円形を呈する（第 121 図）。検出規模は、長軸で 54cm、短軸で 40cmを測る。断面形は逆台形をなし、検出面からの深さは７cmを測る。

埋没状況　埋土は、淡黄褐色極細粒砂ブロック混じる黒褐色シルト質極細粒砂が堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できないが、埋土から判断して 12 世紀末～ 13 世紀初め頃と考えられる。

ＳＫ 15

検出状況　調査区西端で検出した（第 117 図）。ＳＫ 13 のＳＫ 14 の南側に位置する。遺構の北東部端は検出できたが、南西部については調査区外へ拡がっている。

形状・規模　平面形は、検出した部分から推測すると長楕円形を呈するとみられる（第 123 図）。検出規模は、長軸で 138cm残存し、短軸で 73cmを測る。断面形は丸みを帯びた浅い逆台形をなし、検出面からの深さは 24cmを測る。

埋没状況　埋土は、淡黄褐色極細粒砂ブロック混じる黒褐色シルト質極細粒砂が堆積している。

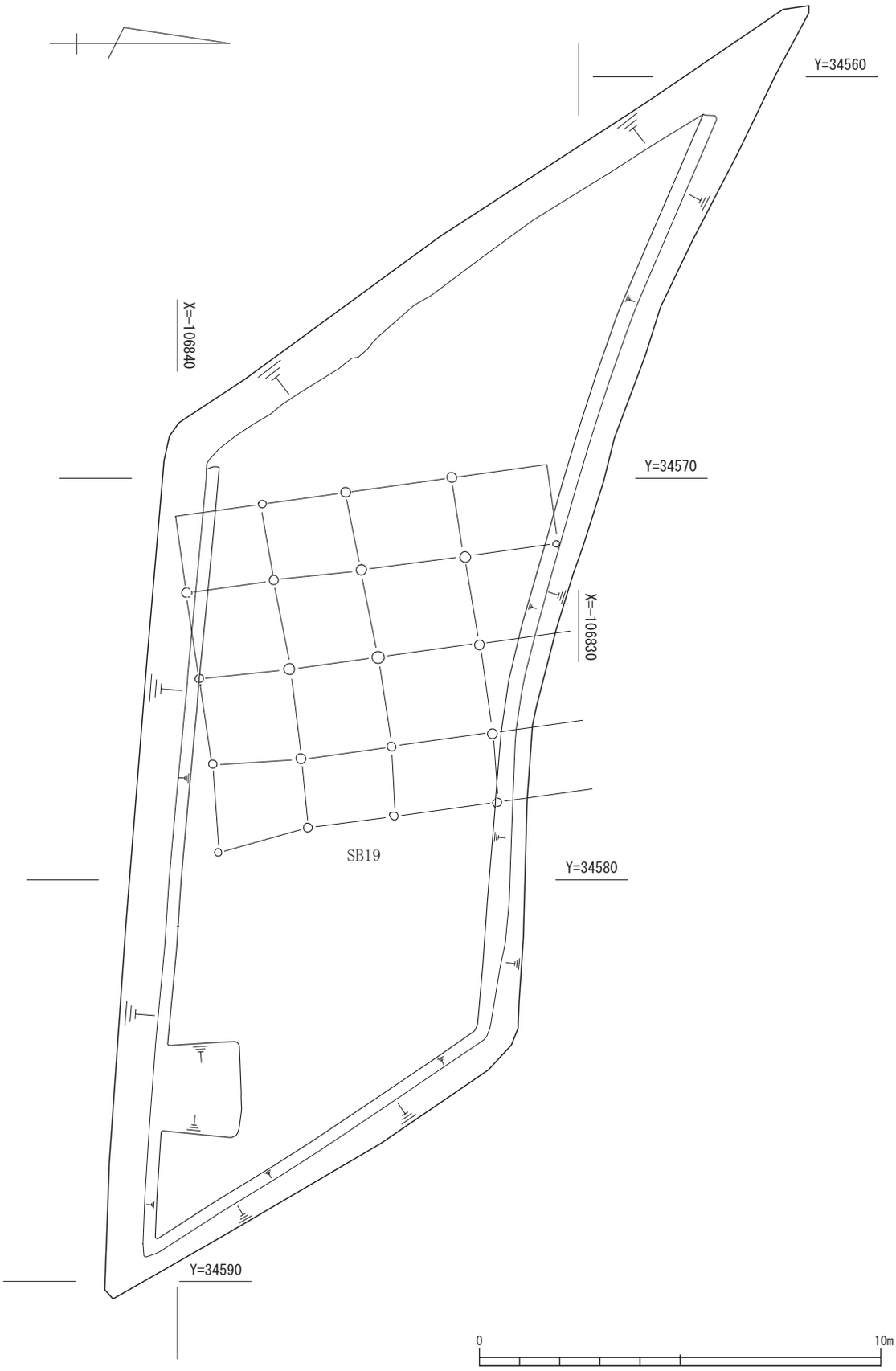
出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できないが、埋土から判断して 12 世紀末～ 13 世紀初め頃と考えられる。

⑵　包含層

遺構に伴わないが、残存状況が比較的良好な資料が第１面検出時に出土している。ここでは包含層より出土した遺物として報告する。出土資料は、土製品のみである。

土製品は、土錘が２点（Ｄ 11・Ｄ 12）出土している（図版８）。いずれもほぼ完存する。第３章第２節２項で記したように、今回確認できた土錘の中でも小型の部類に含まれる。幅は、Ｄ 11 が 1.3cm、Ｄ 12 が 1.1cmを測る。



第 124 図　３区第２面

３．第２面

⑴　掘立柱建物跡

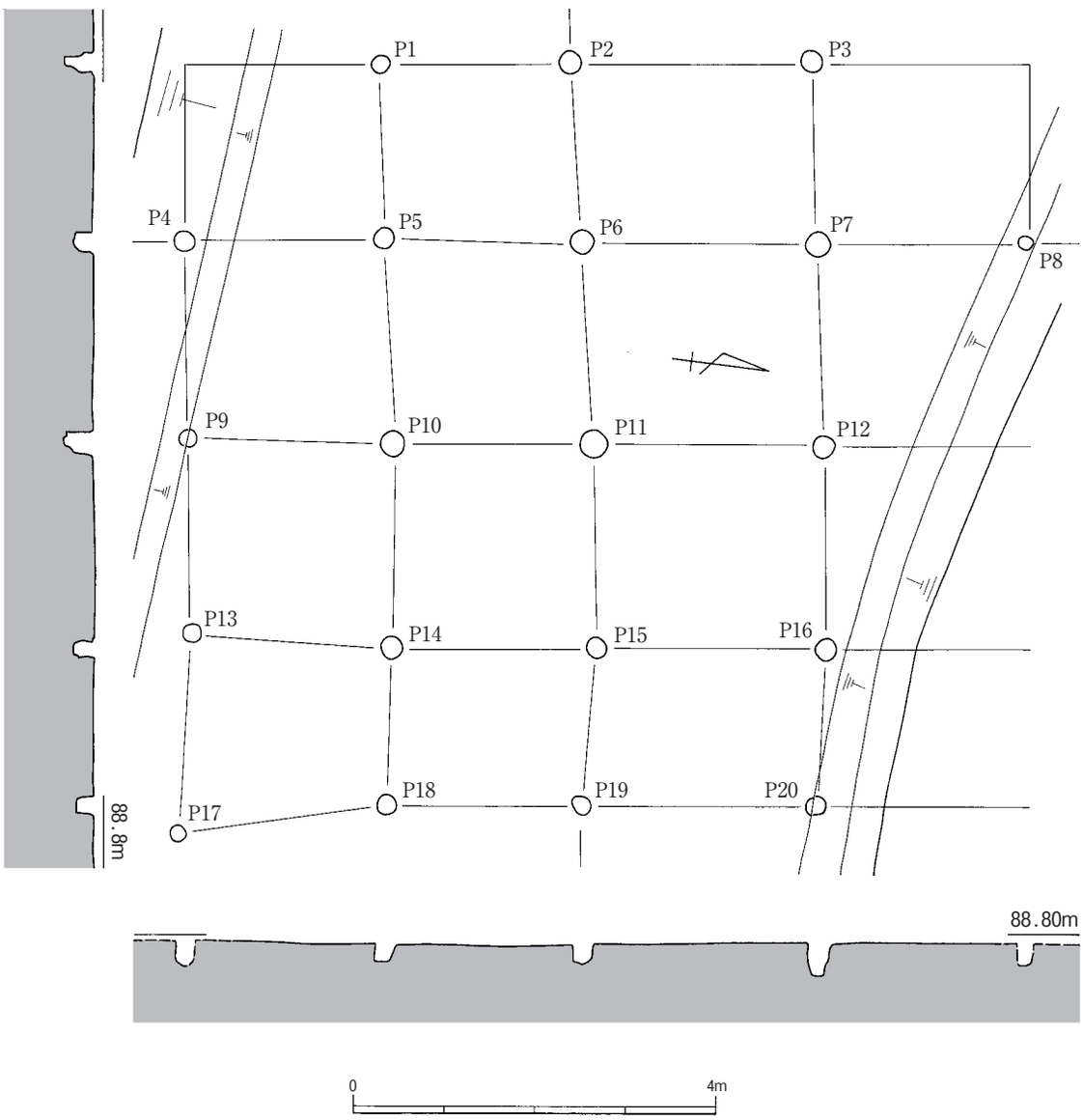
ＳＢ 19 の１棟を検出した（第 124 図）。

ＳＢ 19

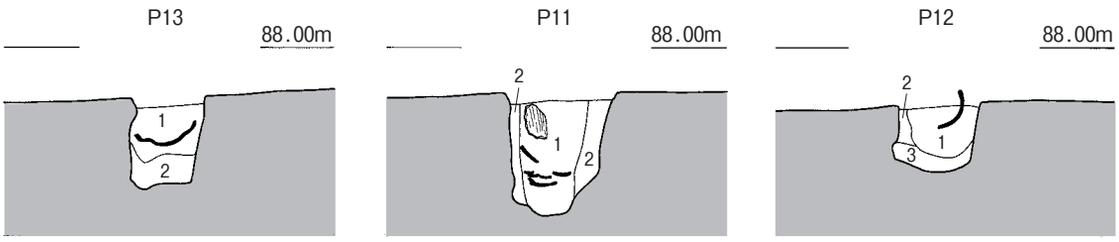
検出状況　調査区のほぼ中央で検出した（第 124 図）。ただし、Ｐ４については調査壁法面上で一部のみが検出されている。また、北側梁行については、Ｐ８のみを側溝内で検出できたが、その西側の柱穴については、調査区内で検出できなかった。

形状・規模　梁行４間、桁行は少なくとも４間の総柱建物である（第 126 図）。桁行と梁行はほぼ平行・直角関係にあり、平面形はほぼ整った長方形をなす。梁行はＰ１

第 125 図　柱穴断面の実測



第 126 図　SB19



1. 褐色細粒砂のブロック混じる極細粒砂質シルト　（土器含む）
2. 黒褐色中粒砂混じり極細粒砂質シルト

0　50cm

1. 黒色シルト質極細粒砂と黄褐色粗粒砂～中粒砂のブロック混じる黒褐色中粒砂混じり細粒砂～極細粒砂（土器含む）
2. 黒色シルト質極細粒砂と黒褐色シルト質極細粒砂のブロック混じる

1. 褐色中粒砂団粒混じるシルト質極細粒砂　（土器含む）
2. 黒褐色シルト質極細粒砂のブロック混じる黒色シルト質極細粒砂
3. 黒色シルト質極細粒砂

第 127 図　SB19　柱穴断面

－Ｐ 18 間で 8.10 ｍを測り、桁行は最大（Ｐ４－Ｐ８間）で 9.30 ｍを測る。建物の面積はこの桁行と梁行を基準とすると 75.7㎡である。各柱間の規模は第 20 表の通りである。棟軸方向は、中央桁行を基準としてＮ８°Ｗを示す。

柱穴については、平面形は不整形な円形である。検出面での平面規模は、直径が 22㎝～ 24㎝のものがほとんどで、Ｐ 17 が最小の 16㎝、Ｐ 11 が最大の 30㎝を測る。検出面からの深さは、20㎝～ 36㎝である（第 127 図）。

第 20 表　SB19 規模一覧

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
１列目桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.10	4.30	2.15
	Ｐ２－Ｐ３	2.20		
２列目桁行	Ｐ４－Ｐ５	2.20	9.30	2.32
	Ｐ５－Ｐ６	2.20		
	Ｐ６－Ｐ７	2.60		
	Ｐ７－Ｐ８	2.30		
３列目桁行	Ｐ９－P10	2.25	7.05	2.35
	P10－P11	2.25		
	P11－P12	2.55		
４列目桁行	P13－P14	2.20	7.00	2.33
	P14－P15	2.25		
	P15－P16	2.55		
５列目桁行	P17－P18	2.30	7.05	2.35
	P18－P19	2.15		
	P19－P20	2.60		
１列目梁行	Ｐ４－Ｐ９	2.15	6.50	2.16
	Ｐ９－P13	2.15		
	P13－P17	2.20		
２列目梁行	Ｐ１－Ｐ５	1.90	8.10	2.02
	Ｐ５－P10	2.25		
	P10－P14	2.25		
	P14－P18	1.70		
３列目梁行	Ｐ２－Ｐ６	2.00	8.15	2.03
	Ｐ６－P11	2.20		
	P11－P15	2.25		
	P15－P19	1.70		
４列目梁行	Ｐ３－Ｐ７	2.00	8.10	2.02
	Ｐ７－P12	2.20		
	P12－P16	2.20		
	P16－P20	1.70		

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（図版８）。

土師器は、鍋(215)がＰ 11 の柱痕より出土している。215 は、口縁部から体部にかけての破片である。体部から口縁部にかけては、「く」の字状に屈曲する。口縁部はやや外反し、口縁端部は、内縁が上方に摘み出され、端面が外傾し、面部分にはやや溝状に窪みが入る。口縁端部の器壁はやや肥厚する。体部は頸部からやや張り出し、中腹当たりに最大径をもつ。体部外面には平行のタタキ痕が残り、内面には無文の当て具痕と板ナデの痕跡が残っている。

須恵器は、椀(213・214)が出土している(図版８)。213 は、Ｐ 13 より出土した完存資料である。214 は、Ｐ 12 より出土した口縁部から底部にかけて残存する破片であるが、底部のみ完存する。

まず、213 は、底部に回転糸切り痕が残る平底である。体部は、底部からやや内湾しながら外上方にのびて、口縁端部は丸く収められている。214 は、底部に回転糸切りの痕跡が残る。底部から口縁部にかけての特徴は 213 と類似するが、見込み中央部分分は一段低くなる。

なお、213・214 は柱の抜き取り後の埋土から出土している。特に 213 は、直径がほぼ同じ平面規模のＰ 13 に正立した状態で埋められていた。

時　　期　出土遺物から判断すると、少なくとも 12 世紀頃には廃絶したものと考えられる。

第５節　５区の調査

１．概要

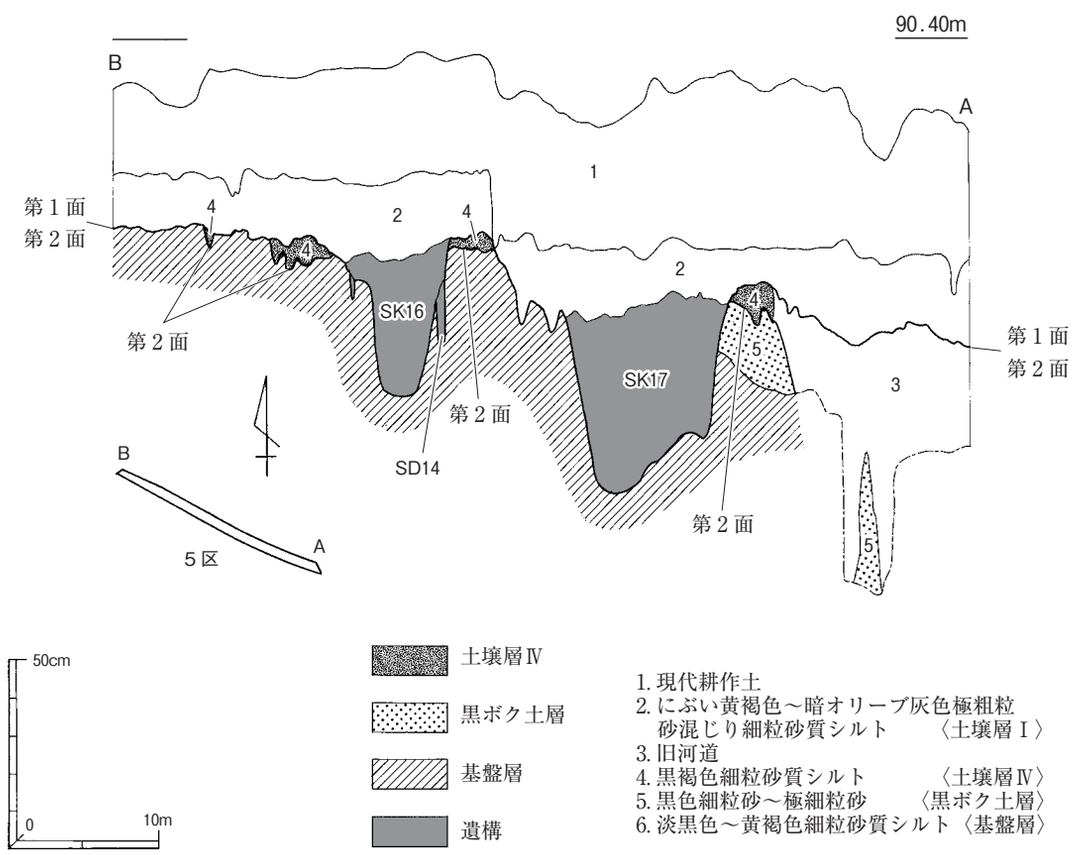
概　　要　５区は、第１面が確認できなかったため、第２面のみで遺構を検出した。第２面では、溝・土坑・旧河道が検出されている（第 129 図）。

基本層序　当地区の基本層序は、上から現代耕作土層・土壌層Ⅰ・土壌層Ⅳ・旧河道・黒ボク土層・基盤層からなる（第 128 図）。

現代耕作土層は、今回の調査区全域に見られるものだが、当地区全体に層厚 30cm～ 40cmで堆積し、やや厚い。現地表の標高は、西側で 90.20 m、東側で 90.10 mである。土壌層Ⅰは、当地区の全体に確認でき、調査区の中程で約 20cmの段差が認められる。土壌層Ⅳは、当地区では局所的に散在する。層厚は５cm～20cmである。

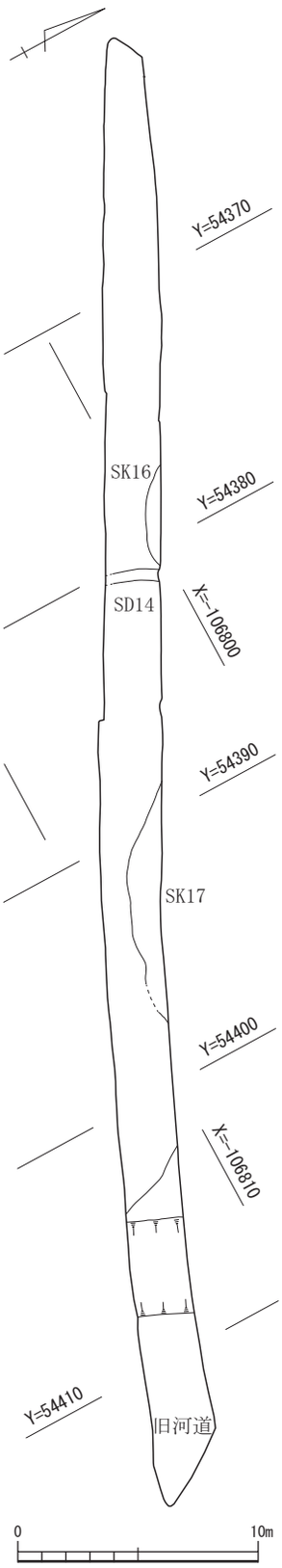
調査区東側では、土壌層Ⅳ上層より旧河道が趨る。黒ボク土層についても、調査区東側に部分的に堆積する。基盤層についても調査区全体に見られるが、淡黒褐色～黄褐色細粒砂質シルトからなる。当地区中央部の段差は先に示したように、上層からの作用に因るものだが、西から旧河道のある東側へ傾斜している。

検出面　遺構については、土壌層Ⅰ・土壌層Ⅳ除去面、すなわち黒ボク土層・基盤層上面でのみ検出した（第 128 図）。その標高は、東側で 89.70 m、西側で 89.90 mである。



第 128 図　５区基本土層図

２．第２面



第 129 図　５区第２面

(1)　溝

ＳＤ 14 の１条を検出した（第 129 図）。

ＳＤ 14

検出状況　調査区中央やや西よりで検出した（第 129 図）。ＳＫ 16 の東側に隣接する。ＳＤ 14 は南北方向を指向する。土層断面の観察では、ＳＫ 16 に切られている。

形状・規模　検出した長さは 2.20 ｍである。検出面における幅は 80㎝を測り、横断面形は逆台形をなす。検出面からの深さ 17㎝を測る。底部の標高は、南北部とも 89.59 ｍを測り、一定している。

埋没状況　埋土には、基盤層由来の黄褐色細粒砂質シルトのブロックと土壌層Ⅳ由来の黒褐色細粒砂質シルトのブロックが混じる。人為的に埋め戻されたものと見られる。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できないが、後述するＳＫ 16 の埋土が１区で認められた土壌層Ⅲに相当するとみられることから、12 世紀末～ 13 世紀初め頃の位置付けが考えられる。

(2)　土坑

ＳＫ 16 とＳＫ 17 の２基を検出した（第 129 図）。

ＳＫ 16

検出状況　調査区中央やや西よりで検出した（第 129 図）。ＳＤ 14 の西側に隣接する。調査区が細長いため、土坑の一端が半円状に検出されている。溝の一部の可能性もあるが、ここでは土坑として報告する。

形状・規模　検出面における幅は７ｍを測り、横断面は皿状をなす。検出面からの深さは 45㎝を測る。

埋没状況　埋土は、土壌層Ⅲに相当する黒褐色細粒砂質シルト層である。１区に比べてやや粒子が細かく、上層ほど土壌化が顕著で、自然に堆積した後、土壌化していったものとみられる。

ＳＫ 16 の埋土はＳＤ 14 の上面を覆っており、何らかの関係性が考えられる。また、埋土の様相はＳＫ 17 とも類似しており、何らかの関連性が推測されるが、調査区が制限されており判然としない。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できないが、埋土が１区で認められた土壌層Ⅲに相当するとみられ、12 世紀末～ 13 世紀初め頃の位置付けが考えられる。

ＳＫ 17

検出状況　調査区中央やや東よりで検出した（第 129 図）。ＳＤ 14 の西側に隣接する。調査区が細長いため、土坑の一部が半円状に検出されている。溝一部の可能性もあるが、ここでは土坑として報告する。

形状・規模　検出面における幅は 10.80 ｍを測り、横断面は皿状をなす。検出面からの深さは 47㎝を測る。

埋没状況　埋土は、ＳＫ 16 と同質で、土壌層Ⅲに相当する黒褐色細粒砂質シルト層である。同じく１区に比べてやや粒子が細かく、上層ほど土壌化が顕著で、自然に堆積した後、土壌化していったものとみられる。ＳＫ 16 はＳＤ 14 を切っており、何らかの関係性が考えられる。また、埋土の様相はＳＫ 16 とも類似しており、何らかの関連性が推測される。

出土遺物　遺物は出土していない。

時　　期　出土遺物から判断できないが、埋土が１区で認められた土壌層Ⅲに相当するとみられることから、12 世紀末～ 13 世紀初め頃の位置付けが考えられる。

⑶　旧河道

検出状況　調査区東端で検出した（第 129 図）。ＳＫ 17 の西側に位置する。旧河道は、南北方向を指向する。全体を検出しておらず、西側肩部のみが検出されている。

形状・規模　検出した長さは、3.30 ｍ、検出面における幅は 13 ｍである。調査区内では、検出面からの深さ 70㎝まで確認できた。なお、土層断面では旧河道は少なくとも２本認められる。

埋没状況　埋土としては中粒砂～細粒砂層が堆積し、上方は細粒化してシルト～極細粒砂層が堆積している。いずれも水流によって堆積した自然堆積層である。上方の堆積は、ＳＫ 16・ＳＫ 17 と類似しており、何らかの関連性が考えられる。

出土遺物　土師器の極めて微細な破片が出土している。器種については不明で、図化不能であるが、中世の所産の可能性がある。

時　　期　出土遺物については、中世頃の可能性はあるものの厳密に判断できない。しかし、ＳＫ 16・ＳＫ 17 との埋土の類似性から、12 世紀末～ 13 世紀初め頃の位置付けが考えられる。

第４章　分析・鑑定

第１節　坂本・土井の畑遺跡の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

坂本・土井の畑遺跡（多可郡多可町中区坂本所在）は、杉原川右岸の河岸段丘上に立地する弥生時代～中世の集落跡である。今回は１区南壁の基本土層や鎌倉時代と思われる耕作痕を含む小穴群の花粉分析を行い、当時の古植生に関する情報を得る。

１．試料

分析試料（サンプル）は、基本層序および耕作痕列群ピットから採取された30点である。

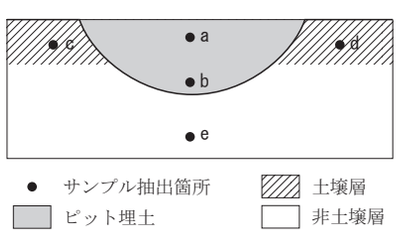
基本層序の試料は､1区南壁の土壌層Ⅰ（試料A)、土壌層Ⅱ（試料B)､土壌層Ⅱ（試料C)､土壌層Ⅳ（試料D)、黒ボク土（試料E)、基盤層（試料F）から採取されている。これらの層相は、試料および調査時の断面写真に基づくと、土壌層Ⅰ層が灰～暗灰色を呈する著しく擾乱された細礫混じり砂質泥からなる。下位の土壌層Ⅱとの層界は明瞭で、人為的に撹拌ないし削平されている可能性がある。土壌層Ⅱは著しく擾乱されている灰～暗灰色を呈する砂質泥～泥質砂からなる。土壌層Ⅳは土壌生成が進行した黒灰～黒色を呈する腐植質砂質泥、黒ボク土は土壌生成が進行した黒色を呈する腐植質砂質泥からなる。これら両層の層界は漸移的である。また、黒ボク土は基盤堆積物である灰黄色～暗灰黄を呈する泥質砂から漸移的に層相変化しており、基盤堆積物を母材とする土壌と判断される。

耕作痕列群ピットの層序および試料採取位置を模式断面図として第130図に示す。現地調査所見によると、土壌層Ⅱの下部で検出されている。耕作痕および土壌層Ⅱの形成期時期は、出土遺物から13世紀と推定されている。ピット埋土は暗灰～灰色を呈する砂質泥およびその偽礫・微小ブロックからなる。埋土下部には遺構構築時に取り込まれたとみられる土壌層Ⅱ・Ⅳに由来する偽礫が散在する。

分析は、第21表に示す、５つの耕作痕列群12のピット地点において､土壌層Ⅱ相当層とピット埋土上部について実施する。

第21表　資料一覧

地点		サンプル番号	層名	基本層序との対比
1区南壁		A	土壌層Ⅰ	－
		B	土壌層Ⅱ	－
		C	土壌層Ⅱ	－
		D	土壌層Ⅳ	－
		E	黒ボク土	－
		F	基盤層	－
耕作痕列群3	P3	a	1層	土壌層Ⅱ
		d	2層右	土壌層Ⅳ
	P4	a	1層	土壌層Ⅱ
		d	2層右	土壌層Ⅳ
耕作痕列群6	P5	a	1層	土壌層Ⅱ
		d	2層右	土壌層Ⅳ
	P6	a	1層	土壌層Ⅱ
		d	2層右	土壌層Ⅳ
耕作痕列群8	P1	a	1層	土壌層Ⅱ
		c	2層左	土壌層Ⅳ
	P2	a	1層	土壌層Ⅱ
		c	2層左	土壌層Ⅳ
耕作痕列群9	P2	a	1層	土壌層Ⅱ
		d	2層右	土壌層Ⅳ
	P3	a	1層	土壌層Ⅱ
		c	2層左	土壌層Ⅳ
	P4	a	1層	土壌層Ⅱ
		c	2層左	土壌層Ⅳ
	P5	a	1層	土壌層Ⅱ
		d	2層右	土壌層Ⅳ
耕作痕列群10	P1	a	1層	土壌層Ⅱ
		c	2層左	土壌層Ⅳ
	P3	a	1層	土壌層Ⅱ
		c	2層左	土壌層Ⅳ



第130図　資料サンプリング標準位置図

２．分析方法

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重 2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman（1952,1957）、Faegri and Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や、島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表で示す。

３．結果

結果を第 22 表に示す。分析残渣量は多くても 20 μ L 未満の試料が大半であるが、1 区南壁の黒ボク土層のみ 200 μ L 程度と多い。これらを適宜希釈してプレパラートを作成しているため、1 区南壁の黒ボク土は残渣全体の約百分の 1、他の試料では全体の数分の 1 程度を検鏡していることになる。

１区南壁の基本層序堆積物では、土壌層Ⅱと土壌層Ⅳで組成が変わる。土壌層Ⅳよりも下位層準の堆積層では、保存の悪いシダ類胞子が僅かに認められるだけである。土壌層Ⅱ層より上位層準では、シダ類胞子が 200 個前後検出され、イネ科やソバ属が微量ではあるが検出される。保存状態はまちまちで、非常に悪い個体から、非常によいものまで混じる。

耕作痕列群では、小穴埋土である 1 層と遺構が掘り込まれている基盤堆積物である 2 層（土壌層Ⅱ相当）との間で組成が異なる。２層は、1 区南壁の土壌層Ⅳ層より下位と類似する。花粉化石はほとんど見られず保存状態の悪いシダ類胞子がみられる程度である。1 層は、1 区南壁の土壌層Ⅱより上位層準の産状と似る。シダ類胞子が多く、マツ属、ツガ属、イネ科、ソバ属、サナエタデ節―ウナギツカミ節などを少量含む。これら産出する花粉化石の保存状態はばらばらである。なお、耕作痕列群のうち、耕作痕列群 10 は、上記の差があまりなく、いずれの層も保存状態が悪い。

４．考察

今回分析した試料はいずれも花粉化石の含有量が少なかった。正確な容量を測定しているわけではないが、土壌 1 cc あたりに換算すると 1 個未満とみられる。これは、湖沼や泥炭地など花粉化石がよく残っている堆積物の数千分の 1 ～数万分の 1 程度である。僅かに産出する化石の保存状態が悪かったことを合わせ考えると、堆積時および経年変化の過程で分解消失していることが推定される。

花粉・胞子の分解作用の要因としては、調査層準が土壌生成の進行した、人為的に擾乱された堆積物からなることから、科学的・生物的・物理的な複合的な風化作用が考えられる。花粉・胞子の風化作用に対する抵抗力は、花粉・胞子中の外壁中に含まれているスポロポレニンの量にほぼ一致する（Havinga,1964）。一般にシダ類胞子は花粉に比較してスポロポレニンの量が多く（Brooks　& Shaw,1971）、化石として残存しやすい。また、花粉膜の厚さが厚いコウヤマキ属やマツ属などの針葉樹花粉も広葉樹花粉・草本花粉に比較して相対的に風化に対する耐性がある（徳永・山内 ,1971）。今回の結果でも 1 区南壁の土壌層Ⅱ・Ⅰ層、耕作痕列群の 1 層でシダ類胞子の割合が多く、広葉樹や草本花粉にくらべ、針葉樹花粉が多い傾向が確認されるが、これは風化作用の影響を受けた結果とみなせる。

このように今回調査を実施した堆積物では、花粉化石の多くが分解消失しており、当時の植生を推定

第22表　坂本土井畑遺跡の花粉分析結果

種類	上段:サンプル箇所,中段:層名,下段:サンプル番号						1段目：耕作痕列番号，2段目：ピット番号，3段目：層名・位置，4段目：サンプル番号																							
	1区南壁						耕作痕列群03				耕作痕列群06				耕作痕列群08				耕作痕列群09								耕作痕列群10			
	土壌層Ⅰ	土壌層Ⅱ	土壌層Ⅱ	土壌層Ⅳ	黒ボク土	基盤層	P3		P4		P5		P6		P1		P2		P2		P3		P4		P5		P1		P3	
							1層	2層右	1層	2層右	1層	2層右	1層	2層右	1層	2層左	1層	2層左	1層	2層右	1層	2層左	1層	2層左	1層	2層右	1層	2層左	1層	2層左
	A	B	C	D	E	F	a	d	a	d	a	d	a	d	a	c	a	c	a	d	a	c	a	c	a	d	a	c	a	c
木本花粉																														
モミ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
ツガ属	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	2	−	1	−	2	1	−	−	1	−	1	3
マツ属	2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	2	−	3	−	−	1	−	−	3	−	2	1	3	2	−	2	1	−
コウヤマキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	−	2	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−
スギ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カバノキ属	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ハンノキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ブナ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
コナラ属コナラ亜属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
コナラ属アカガシ亜属	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
ニレ属−ケヤキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
ツツジ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
草本花粉																														
イネ科	1	4	2	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	−	3	−	11	−	4	−	−	−	6	−	1	1	−	−	−	−
サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	1	1	−	−	−		1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
ソバ属	6	2	4	−	−	−	−	−	2	−	−	−	1	−	2	−	−	−	1	−	2	−	4	−	1	−	1	−	1	−
アカザ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ナデシコ科	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	1	−	1	−	2	−	−	−	−	−	−	−
キク亜科	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−
タンポポ亜科	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	4	−	−	−	3	−	−	−	−	−	1	−
不明花粉																														
不明花粉	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
シダ類胞子																														
ヒカゲノカズラ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ゼンマイ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−
イノモトソウ属	3	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	2	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
他のシダ類胞子	274	184	219	10	3	6	50	2	139	4	117	13	229	20	133	3	165	4	258	5	207	7	281	13	137	6	27	32	85	35
合　計																														
木本花粉	4	0	3	0	0	0	0	0	2	0	1	0	3	0	7	0	3	2	2	0	5	0	7	2	5	2	1	2	3	3
草本花粉	8	7	7	0	0	1	1	1	7	0	0	0	1	0	5	1	13	1	12	1	4	0	17	1	2	1	1	0	2	0
不明花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	278	185	220	10	3	6	51	2	139	4	117	13	229	20	135	3	166	4	262	5	207	7	282	13	138	7	27	32	85	35
合計(不明を除く)	290	192	230	10	3	7	52	3	148	4	118	13	233	20	147	4	182	7	276	6	216	7	306	16	145	10	29	34	90	38

することは難しい。ただし、各地点のピット埋土上部のａ層準、基本層序の土壌層Ⅱ層・Ⅰ層からは栽培植物のソバ属花粉がほぼ普遍的に産出している。ソバ属花粉は虫媒性で、花粉生産量も少ないため、僅かの産出でも近隣での栽培が示唆される種類である。今回の場合、産出したソバ属花粉化石は全体的に保存状態が悪いことから、風化作用によって消失しているものも多いと推測される。また、今回のような土壌中の花粉・胞子化石は局地的な植生を強く反映している場合が多い（例えば三浦 ,1990、三宅・中越 ,1998）。これらことを複合的に捉えると、ピット埋土上部、土壌層Ⅱ・Ⅰ形成期には調査地点においてソバ属が栽培されていた可能性が考えられる。

また、これまでの近畿・中国地方の花粉化石群集の全体的な傾向をみると、弥生時代以前は常緑広葉樹花粉化石が多いが、弥生時代以降、開発に伴う草地化の影響で草本花粉が増加、古墳時代以降はマツ属が増加を開始し、中・近世以降急増することが確認されている（安田・三好編著 ,1998　那須 ,1980）。今回は花粉化石が少ないため断定はできないが、中世以降と推定される土壌層Ⅱ層・Ⅰ層では常緑広葉樹の花粉化石がほとんど見られないなど、既往の調査成果と同調的である。

引用文献

Brooks,J.&Shaw,G.1971,Recent developments in the chemistry,biochemistoru,geochemistry and post-tetrad ontogeny of sporopolleninns derived from pollen and spore exines.
“Pollen:Development and Physiology”（ed.Heslop-Harrison,J.）99-114,Butterworths、London.

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms（An introduction to palynology. I）.Almqvist&Wiksells,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta（Illustrations）（An Introduction to Palynology. II）,147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

Habinga,A.J.1964,Investigation into the differential corrosion susceptibility of pollen and spores.Pollen et Spores,6:621-635.

宮脇　昭編著，1984, 日本植生誌　近畿 , 至文堂 ,596p.

三宅　尚・中越信和，1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態 . 植生史研究 ,6,1,15-30.

三浦　修，1990, 森林土壌の花粉分析－方法論的問題と森林群落の動態研究への適用 . 植生史研究 ,5,3-18.

中村　純，1967, 花粉分析 . 古今書院 ,232p.

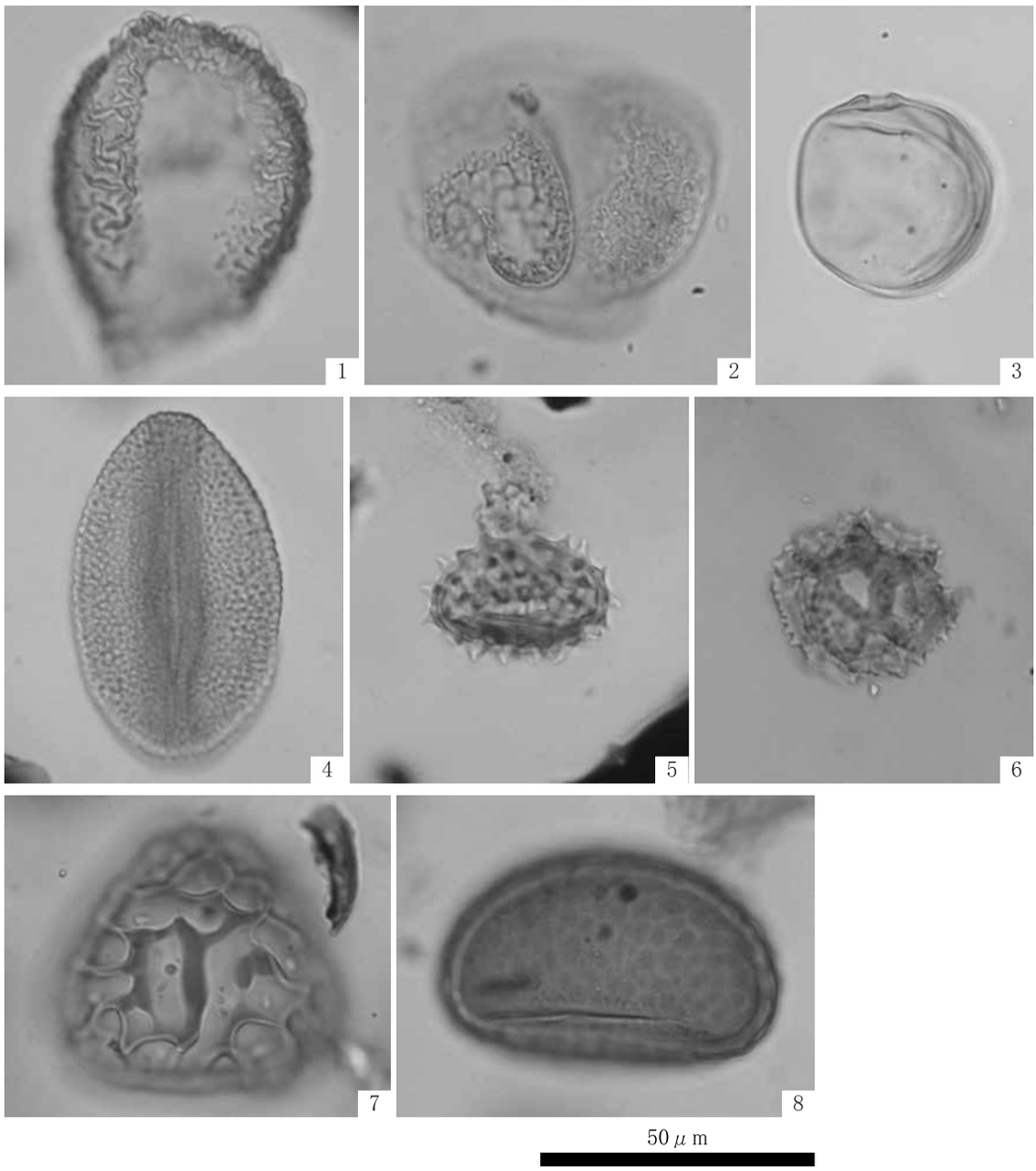
中村　純，1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.

那須孝悌，1980, 花粉分析からみた二次林の出現 . 関西自然保護機構会報 ,4,3-9.

島倉巳三郎，1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 ,60p.

徳永重元・山内輝子，1971, 花粉・胞子 . 化石の研究法 , 共立出版株式会社 ,50-73.

安田喜憲・三好教夫，1998, 図説日本列島植生史 .302p.



１.ツガ属(耕作痕列群09 P4 1層 a)
２.マツ属(耕作痕列群09 P4 1層 a)
３.イネ科(耕作痕列群09 P4 1層 a)
４.ソバ属(1区南壁 土壌層Ⅱ)
５.キク亜科(耕作痕列群09 P4 1層 a)
６.タンポポ亜科(耕作痕列群09 P4 1層 a)
７.シダ類胞子(耕作痕列群09 P2 1層 a)
８.シダ類胞子(耕作痕列群09 P2 1層 a)

第131図　花粉化石

第２節　坂本・土井の畑遺跡の石材同定

藤根　久（パレオ・ラボ）

１．はじめに

坂本・土井の畑遺跡は、多可郡多可町中区坂本地内に所在する古墳時代後期から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。調査では、平安時代末～鎌倉時代の大規模な畑地や掘立柱建物、奈良時代の溝、古墳時代後期の竪穴住居跡や溝が検出された。

ここでは、坂本・土井の畑遺跡から出土した磨石および川原石について、肉眼観察による石材同定を行った。

２．試料と方法

試料は、坂本・土井の畑遺跡から出土した磨石１点と近接河川（杉原川）の川原石９点である（第23表）。

石材同定は、主に肉眼により行った。なお、マイクロスコープを用いて代表的な石材の表面組織を撮影した（第132図）。

第23表　石器および川原石の肉眼的特徴と同定結果

No.	岩石名	遺物	特徴	図版 No.
1	閃緑岩	磨　石	石英、長石、輝石が等粒状、黒色系	3
2	閃緑岩	川原石	石英、長石、輝石が等粒状、緑灰色系	4
3	閃緑岩	川原石	石英、長石、輝石が等粒状、緑灰色系	
4	閃緑岩	川原石	石英、長石、輝石が等粒状、緑灰色系	
5	流紋岩	川原石	灰色～黒灰色粒子が斑状、白色系	1
6	流紋岩	川原石	灰色～黒灰色粒子が斑状、白色系	2
7	閃緑岩	川原石	黒灰色～白色粒子斑状、緑灰色系	
8	閃緑岩	川原石	石英、長石、輝石が等粒状、緑灰色系	
9	閃緑岩	川原石	石英、長石、輝石が等粒状、緑灰色系	
10	閃緑岩	川原石	石英、長石、輝石が等粒状、緑灰色系	

３．結果

第23表に、肉眼による石材の同定結果を示す。

以下に、同定した岩石の特徴について述べる。岩石の記載は、観察による色調や構成鉱物、岩石組織の特徴等について行った。

１）流紋岩（第132図－１・２）

灰色～黒灰色粒子の斑晶質の白色岩石である。

２）閃緑岩（第132図－３・４）

輝石や雲母あるいは長石などからなる等粒組織を有する黒色および緑灰色の岩石である。

４．考察

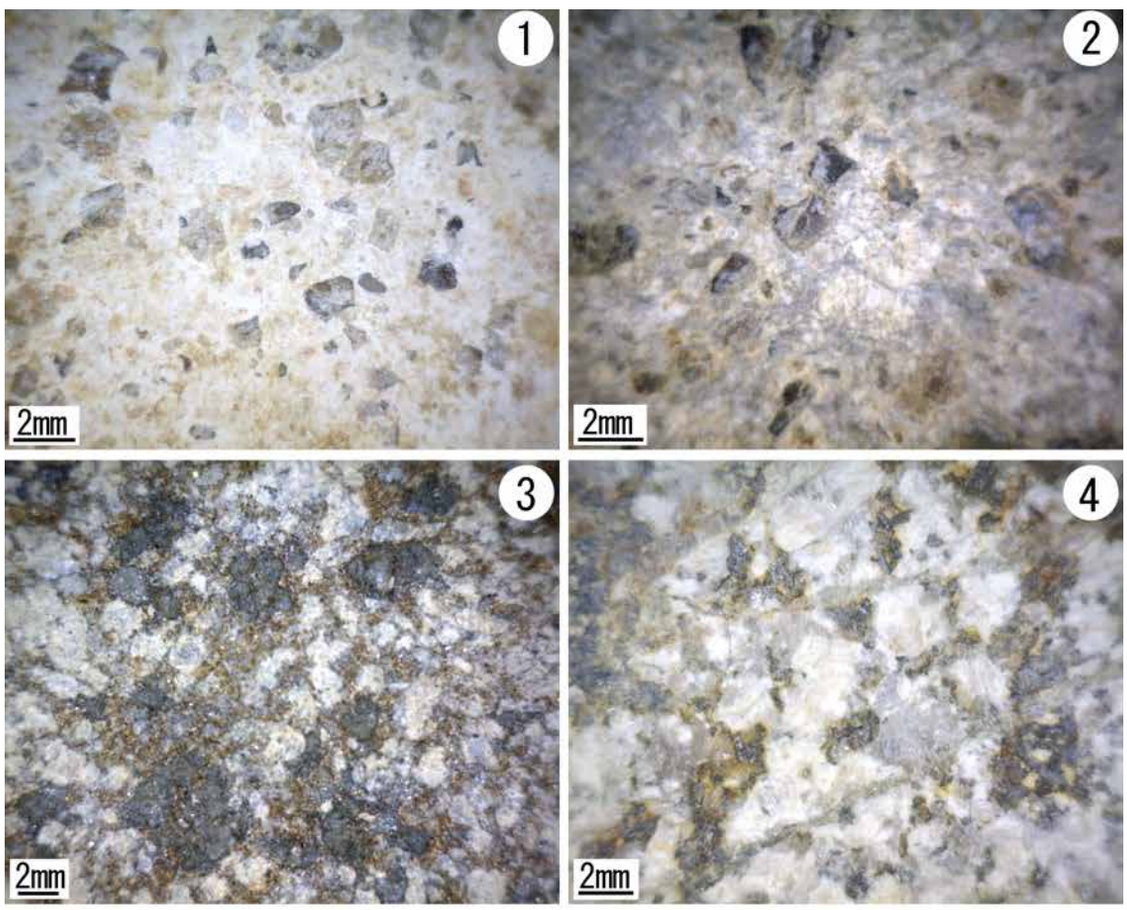
遺跡周辺には、中生代白亜紀～古第三紀の流紋岩及びディサイト火砕岩類及び溶岩が広く分布し、礫岩・砂岩・泥岩及び凝灰岩も分布する。また、隣接して流れる杉原川の上流域には、中生代白亜紀～古

第三紀の石英閃緑岩・閃緑岩及び閃緑ひん岩が分布する（宮田ほか，1985；第 133 図）。

調査において検出された磨石は、円磨した閃緑岩を用いていることから、隣接する杉原川など川原石を採取して利用したと考えられる。

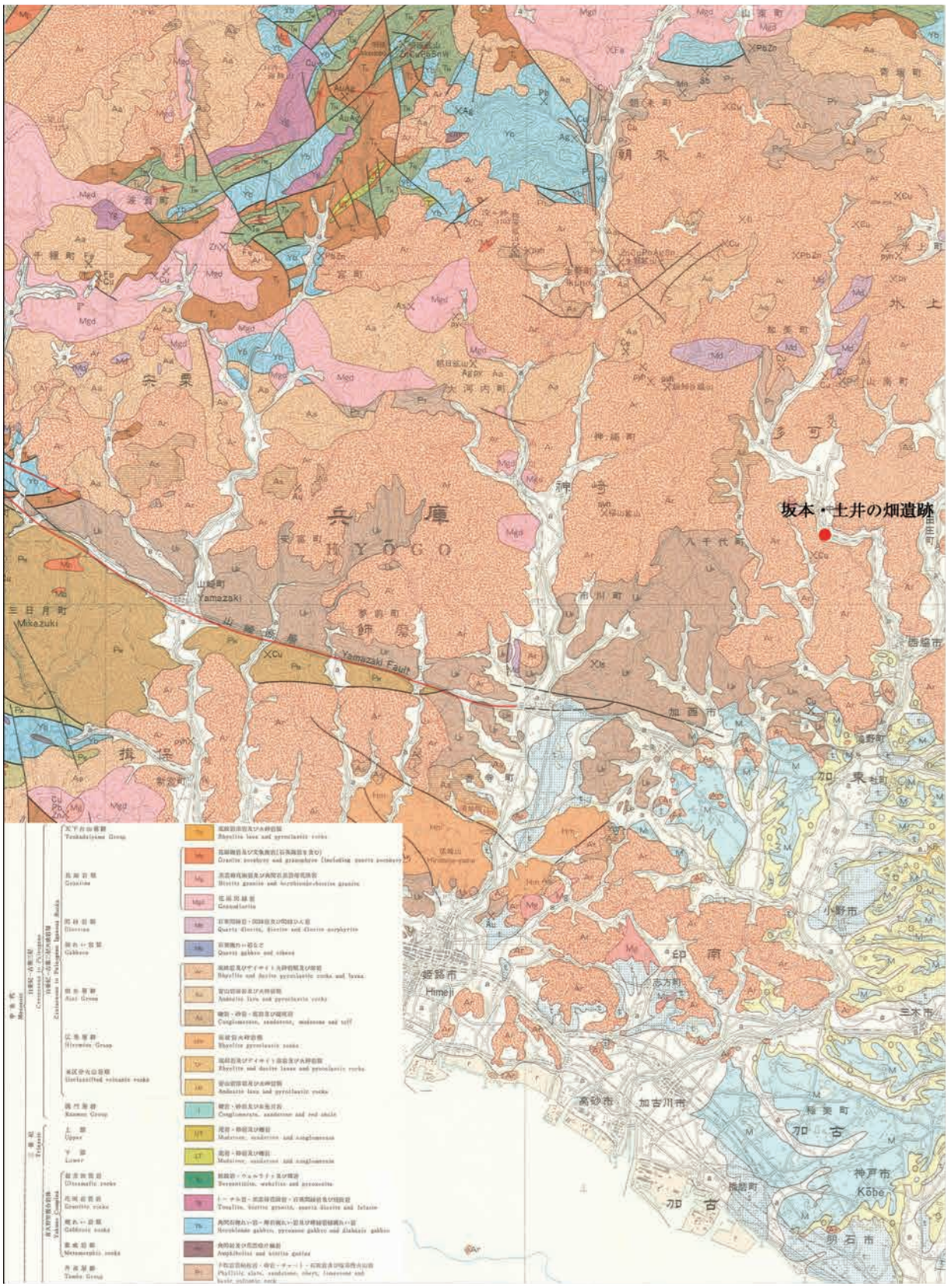
引用文献

宮田清雄・宮村　学・吉田史郎（1985）20 万分の 1 地質図幅「姫路」．地質調査所．



1. 流紋岩（№5）　2. 流紋岩（№6）　3. 閃緑岩（№1）　4. 閃緑岩（№2）

第 132 図　坂本・土井の畑遺跡出土石材のマイクロスコープ写真



第 133 図　坂本・土井の畑遺跡の位置と周辺の地質
（宮田ほか（1985）の 20 万分の 1 地質図幅の一部を改変）

第５章　遺物のまとめ

第１節　弥生土器

⑴　弥生土器の検討

器種としては、甕形土器・壺形土器が出土している。出土した資料は計５点とごく僅かで、いずれも出土地区は１区に限られる。そのうち２点が遺構に伴うもので、残りは包含層より出土したものである。次に器種ごとに言及する。

甕形土器

41・42・152・168 の４点が出土している。41 と 42 は、口縁部の破片であり、口縁部下に平行する篦書き沈線を有する。沈線の条数は、41 が５条、42 が７条といずれも多条である。また、両個体の口縁端部にはキザミが施されている。いずれも包含層より出土している。152 と 168 は底部の破片である。152 は、底部の厚い粘土円板に粘土紐を接合して体部を立ち上げている。168 は、底部径は 152 に比して小さく、また底部内面は半球状に丸く窪む。152 と 168 は底部外面にタテハケメが施されている。いずれの資料も、胎土中に含まれる砂粒が目立ち、粗い。152 はＳＤ 09 より出土し、168 は包含層より出土している。

壺形土器

151 の１点が出土している。151 は、底部の破片である。底部外面の周縁は凸型に少し高くなっており、底面中央が接地しない。体部は、粘土紐を輪積みにして成形され、その中央に粘土を詰めて底面が作り出されている。体部外面にはタテハケメが施されている。胎土は砂粒が目立ち、粗く、152 と類似する。ＳＤ 09 より出土している。

⑵　時期的検討

41 と 42 については、平行沈線の多条化などの特徴から、弥生時代前期の中でも新しい時期、畿内Ⅰ様式新段階に併行する時期に位置付けられる。ただし、42 については、破片資料であるが、７条の篦書き沈線のうち、上の３条と下の４条の間が少し離れる点にやや新しい要素が見られる。また、いずれも口縁部の屈曲が弱い。以上のことを考慮すると、41 と 42 については厳密な時期については判断が難しいが、ここでは前期末から中期初頭の位置付けを考えておく。次に、51 については底面の作り方に注目する。長友朋子・田中元浩による西播磨地域の弥生土器の研究によれば、151 のような底面の作り方は、Ⅱ期（畿内Ⅱ様式併行）に現れると想定されている[1]。この見地を重視すると、151 は中期初頭に位置付けても大過ない。同じＳＤ 09 から出土し、同様な胎土や作り方が認められる 152 についても同様の位置付けができる。そして、168 についても製作技法や胎土が粗い点を重視し、同様の時期に位置付けておく。

⑶　小結

以上、特徴と時期について検討してきた。今回、弥生土器は、資料点数も少なく、いずれも破片資料であるが、甕型土器と壷型土器が出土している。特徴と時期について検討すると、甕形土器は、前期末から中期初頭に、壷形土器は中期初頭に位置付けが考えられた。今回出土した弥生土器は、総じて前期末～中期初頭の時期的な位置付けが想定される。

〔註〕

⑴　長友朋子・田中元浩　2007 「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年―播磨編―』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第５号　大手前史学研究所

第２節　古墳時代

竪穴住居跡（ＳＨ01・ＳＨ02）から、土師器と須恵器が出土している。今回の古墳時代の遺物の出土は、これらの遺構に限られる。ここでは、土器の特徴や時期について検討する。時期について検討する際、編年観が確立している須恵器を軸とする。須恵器の編年については田辺昭三による陶邑編年[1]に基づく。

⑴　須恵器

①須恵器の検討

杯Ｈ蓋・杯Ｈ・高杯の各器種が出土している。

杯Ｈ蓋　102・116・117の３点である。102・116・117は、天井部から体部にかけての約1/3の範囲に回転ヘラケズリが施される。102は、口縁部は体部から垂下し、口縁端部内面には沈線が一条入り、口縁端部を丸く仕上げる。一方、116と117は口縁端部に内傾する面をもつ。また、102・116・117は天井部内面には置台の痕跡が認められる。いずれもＭＴ８５段階に位置付けられるが、口縁端部を見ると116と117がやや古い様相が窺える。102はＳＨ02から出土し、116と117はＳＨ02内土坑１より出土している。

杯Ｈ　103・104・118・119の４点である。118・119は口縁部をやや内傾しながら立ち上がる。103と104は口縁部を欠失するが、118と119と同様の断面形になると考えられる。ただし、受部についてみると、118と119がやや強く摘み出して断面形が突起状になるのに対し、103と104は断面三角形状になっており、やや新しい様相が窺える。いずれも、ＭＴ８５段階に位置付けられる。103と104はＳＨ01から出土し、118と119はＳＨ02から出土している。

高杯　105の１点である。105は脚柱部の破片で、外面に細かい波状文が施された後、波状文を挟む形で、二条の沈線が施されている。当資料についても、杯Ｈと同様のＭＴ８５段階に位置付けられる。105はＳＨ01より出土している。

②時期的検討

以上、須恵器について検討した結果、今回確認できた資料はＭＴ８５段階の位置付けに限定される。出土資料は破片であり、点数も少ないが、須恵器杯Ｈについてみると、形態にわずかであるが差異がみられる。杯Ｈ蓋については、ＳＨ01から出土した102は口縁部内面に沈線が入り、端部を丸く収めるという特徴を持つのに対し、ＳＨ02から出土した116と117は口縁端部に内傾する面を持つという古い様相がみられる。

次に、杯Ｈについてみると、その受部に差異が見いだせる。ＳＨ01から出土する103と104は、受部を外上方ないし水平方向に摘み出すが、その下側基部はあまりくびれを持たず、断面形がやや三角形状になる。これに対し、ＳＨ02から出土する118と119は、受部を外上方に強く摘み出して、断面形が突起状になっており、103と104に比して古い様相といえる。つまり、数少ない資料のなかで杯Ｈについてみると、ＳＨ01から出土する資料に比して、ＳＨ02から出土する資料の方が古い様相が垣間見える。限定された時期のなかでも、僅かであるが前後関係が想起され、ＳＨ02がＳＨ01に対して少し先行して存在していた可能性がある。

⑵　土師器

①土師器の検討

甕・小型甕・短頸壷・椀・甑の各器種が出土している。

甕　甕形土器のうち、復元推定値を含めた腹径が10㎝以上のものを甕として分類した。今回出土した甕は、口縁部から底部まで復元できる資料が認められなかったが、口縁部から頸部にかけての部分が特徴的であり、ここを中心にして甕Ａ～Ｃに分類できる。

甕Ａは、頸部が「く」の字型に屈曲し、口縁端部に外傾する面を持つものである（106・107）。この種類の甕は、外面については体部にタテハケメを施し、頸部から口縁部にかけてヨコナデを施す。一方、内面については、体部は縦方向の板ナデが、頸部はヨコハケメが、口縁部はヨコナデが施されている。体部を欠失しているが、長胴甕になるとみられる。口縁端部や屈曲部は、後述する甕Ｂより古い様相が窺える。106はＳＨ02内土坑１より出土し、107はＳＨ02埋土から出土している。

甕Ｂは、頸部が明瞭に屈曲せず、緩やか括れるもので、口縁端部を丸く仕上げる長胴甕である（97・98・108～110）。この種類の甕は、外面については体部から頸部にかけてタテハケメが施こされた後、口縁部から頸部上半かけてヨコナデされる。一方、内面については、体部を工具によって撫で付けるもの（97）、ハケメを施すもの（98）、ヘラケズリするもの（108～110）、が認められる。そして、頸部については基本的にはヨコハケメが施されるが、工具によって横方向に撫で付けされるもの（109）も認められる。いずれにせよ、板状工具を用いて器壁内面を調整することで、頸部の屈曲を弱く作り出す点は共通する。97と98はＳＨ01から出土し、108～110はＳＨ02から出土している。

甕Ｃは、頸部を「く」の字型に屈曲させ、口縁部を外反させながら端部をやや尖らせつつ丸く収めるものである（112・113）。112は、復元すると口径よりも腹径が大きくなるとみられるが、113は腹径が口径とほぼ同じかそれ以下に復元できると考えられる。甕Ｃはさらに細分化できそうだが、資料数が少ないため、ここでは保留しておく。ただし、両個体とも体部外面にタテハケメを施す共通点がある。112はＳＨ01の埋土から、113はＳＨ02内土坑１から出土している。

小型甕　小型甕は114の１点である。甕形土器のうち､腹径が10㎝未満のものを小型甕として分類した。114は、体部から底部のみが残る。体部外面には工具を利用したミガキに近いナデツケが施される。ＳＨ02から出土している

短頸壷　短頸壷は99の１点のみである。体部はやや横に広がる球胴型で、底部は平底になる。口縁部は体部から垂直に立ち上がり、端部を尖らせつつ少し外反させる。ＳＨ01から出土している。

椀　椀は100の１点のみである。体部はやや内湾しつつ外側に広がる。口縁部は、外面が強くヨコナデされて薄くなり、体部との境に段ができる。また、口縁端部には僅かなキザミが入る。ＳＨ01から出土している。

甑　甑は101と115の２点が出土している。101と115ともに把手の破片である。両個体の明瞭な差は、体部への接合方法と外面の調整に見られる。101は、体部に差し込んで接合し、外面にハケメ調整を施す。115は、体部外面に貼り付けて接合し、外面にユビオサエの痕跡が残る。

②時期的検討

今回古墳時代の土器が出土した遺構がＳＨ01とＳＨ02に限られる。資料数も少なく、時期的にも非常に限定され、供伴して出土する須恵器杯ＨからＭＴ８５段階の枠に収まる。

土師器については､出土資料が少ない中で甕の出土量が目立つ。土師器甕の時期的な検討を試みるが、古墳時代後期の土師器の時期についてはあまり研究が進んでおらず、不明な部分も多く明確に時期を特定することは難しい。今回出土した土師器は、ＭＴ８５段階併行期に限定される。そのなかでの微妙な差異を指摘することで土師器の時期的特徴の可能性について触れておきたい。

今回出土した土師器甕のうち、甕Ｂに着目する。甕ＢはＳＨ01・ＳＨ02で出土しているが、出土遺構によって体部内面の調整方法に違いがみられる。ＳＨ02の甕Ｂ体部内面はヘラケズリによって調整するが、ＳＨ01の甕Ｂはヘラケズリを施さず、板ナデやヨコハケメ調整を施している。このような調整手法の差異は、先後関係を有する出土遺構の差異と符合する点を重視すれば、単に製作手法の差のみだけでなく時期的な差も内包することを暗示するように思われる。つまり、甕Ｂの調整手法は体部内面をヘラケズリするものから、ヘラケズリしないものへ変化する可能性がある。ただし、極限られた資料のみのため、あくまで可能性の指摘のみにとどめておく。

③土器組成の検討

土器組成について詳しく検討するには資料数が限られており難しいため、ここでは特徴を指摘するのみにとどめておく。特徴として注視されるのは、やはりＳＨ02から出土した甕の多様性である。ＳＨ01では甕Ｂのみが認められるのに対し、ＳＨ02では甕Ａ～Ｃが認められる。この組成の差は、単に出土の有無のみともいえるが、ＳＨ01とＳＨ02の時期的差異を考慮すると､時期的差異の可能性も否定できず、特にＳＨ02のみに、やや古い様相を示す甕Ａが認められる点は示唆的である。

⑶　小結

以上、古墳時代の須恵器と土師器について検討してきた。ここでは、その結果を簡潔にまとめる。

今回出土した土器は、ＳＨ01とＳＨ02のみから出土している。出土する資料数は少ない。いずれからも出土する須恵器杯Ｈから、ＭＴ８５段階に限定される。ＳＨ01とＳＨ02は基本的にほぼ同時期に存在していたとみられる。しかしその中でもＳＨ02の資料はやや古い様相を示す。このことから、ＳＨ02はＳＨ01にわずかに先行すると考えられた。一方、土師器については、甕の出土が目立ち、Ａ～Ｃの三種類が認められた。その中でも､甕ＢについてＳＨ02とＳＨ01に体部内面の調整法に差異が認められた。須恵器の先後関係を前提とした場合、時期的な差を内包する可能性を指摘した。また、土器組成の観点からも、土師器甕ＡがＳＨ02にのみ出土することも時期的差異に起因する可能性を暗示するものと考えた。数少ない資料の中であるため、僅かな時期差の可能性の指摘のみにとどめておく。

〔註〕

⑴　田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1981

第３節　奈良時代～平安時代中期

今回の調査では、奈良時代～平安時代前半の土器が出土している。当該期の土器は、土師器・須恵器・緑釉陶器が出土している。主な出土遺構はＳＤ03・ＳＤ05・ＳＤ07・ＳＤ08の溝や、ＳＢ10の柱穴やその他の柱穴などで、それ以外は包含層から出土したものである。なお、平安時代後期～末期の遺物については、次節で取り上げるため、本節では除外する。

⑴　土師器の検討

甕（132・153～155）が出土しており、甕Ａと甕Ｂに分類できる。そのうち、甕Ａはさらに甕Ａａ・甕Ａｂに細分できる。

甕Ａａは、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が少し外反しながら外上方に延びる長胴甕である。この種類の甕は、器壁が体部よりも頸部から口縁部にかけての部分が肥厚する。そして、口縁端面が外傾する。また､最大径が体部よりも口縁部にある点も特徴的である。体部外面にはハケメ調整が施される。153と154が該当する。甕Ａｂは、形態的特徴・体部外面の調整方法は甕Ａａと同じであるが、口径が小さいものである。155が該当する。

甕Ｂは、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が少し外反しながら外上方に延びる球胴甕である。この種類の甕は、甕Ａとは異なり、器壁が体部から口縁部にかけてほぼ同じ厚さだが、口縁端部に向かってやや薄く尖らせて仕上げている。そして、最大径は口径と体部のほぼ同じである。132が該当する。

これらの甕の時期的な位置付けについては、当該期の土師器の編年があまり確立されていないため、厳密な判断は困難である。しかしながら、最大径に注目すると、甕Ａの最大径は口径にあり、甕Ｂは体部と口径が最大径になる。この点を重視して判断すると､いずれの資料も８世紀代の所産と考えられる。

当該期の遺構は、153～155が出土したＳＤ08と、132が出土したＳＢ10－Ｐ４である。

⑵　須恵器の検討

杯Ａ（48・131・144)、杯Ｂ（44・45・149・171)、杯Ｂ蓋（169)、皿Ｂ（170)、椀（47)、壷Ｋ（150)、壷Ｌ（46・142)、甕Ａ（148)、鉢Ｄ（130）が出土している。

杯Ａ　杯Ａは、48・131・144の３点である。48は、底部から体部への立ち上がり部分が角張らずになだらかで、その境目の器壁はやや厚くなる。体部は外上方へやや直線的に立ち上がり、口縁部に向かって器壁が少し薄くなり、口縁部は僅かに外反しやや尖り気味に収める。底部には回転ヘラキリ後ナデ調整の痕跡が残る。131は、底部から体部の立ち上がりにかけて少し丸みを帯び、体部は上方へやや直線的に立ち上がり、口縁端部を少し尖らせて収める。底部内面中央には窪みを持つ。底部外面は回転ヘラキリの後削り調整が施される。白沢３号窯に類例がみられる。144は、断面形態については48と同じであるが、ただし器高が低くなり、口径が広くなる。また、底部には回転糸切りの痕跡が認められる。

これらの年代について見ると、131が最も古く８世紀前半に位置付けられる。48と141について見ると、48は器高が141より高く、底部に回転ヘラキリが認められることから、141より先行すると考えられる。そして、48の器形についてみると、投松６号窯の杯Ａｘに立ち上がり部分が類似する。ただし、これよりはさらに器高が低くなり、口径もやや広がることから、それより後出するとみられる。また、投松６号窯例は底部を回転ヘラキリの後にヘラケズリを施すが、48は回転ヘラキリの後ナデ調整をし

ており、調整法に省略化がみられることも後出的といえる。投松６号窯例は平城宮Ⅴ段階を中心とする時期が想定されており[1]、48 と 141 は後出することから、９世紀を中心とする位置付けが想定される。

出土地は、48 が１区包含層、131 がＳＢ 10 －Ｐ１、144 がＳＤ 08 である。

杯Ｂ　杯Ｂは、44・45・149・171 の４点である。171 は、体部下半に稜を持ち、口縁部が外反する特徴的な資料である。いずれの資料も貼り付け高台だが、45 は高台部分がやや潰れる。年代的位置付けは、44 と 149 が８世紀前半、171 が８世紀、45 は８世紀中頃に位置付けられる[2]。

44 と 45 は１区第１面包含層、171 は１区第２面包含層より出土し、149 はＳＤ 07 から出土している。

杯Ｂ蓋　杯Ｂ蓋は、169 の１点である。169 は天井部が丸みを持つ笠形の蓋で、口縁部はくびれがなく断面三角形になっており、端部の外面は垂下し、内面にかえり部分は作らない。つまみ部は欠失するが、天井部に回転ヘラケズリが施される。８世紀前半に位置付けられる。１区第２面包含層より出土している。

皿Ｂ　皿Ｂは 170 の１点である。高台は粘土紐貼り付けで、体部外面はミガキが施される。口縁部内面には一条の沈線が入る。８世紀に位置付けられる。１区第２面包含層から出土している。

椀　椀は 47 の１点である。高台は粘土紐貼り付けで、底部外面には静止糸切りの痕跡が残る。神出窯跡群の製品とみられ、10 世紀中頃から 11 世紀頃に位置付けられる。１区第１面包含層から出土している。

壺Ｋ　壺Ｋは 150 の１点で、いわゆる長頸壺である。150 は頸部のみの破片で口縁部は欠失している。外面には一条の突線が施される。8 世紀前半に位置付けられる。ＳＤ 07 から出土している。

壷Ｌ　壷Ｌは 46 と 142 の２点である。46 は、口縁部を大きく外反させて、端部内側をつまみ出し、断面三角形になる。142 は、口縁部を外反させて、端部縁辺を上下に延ばして厚くなって面を持つ。口縁端面は垂直方向になる。46 は、9 世紀頃に位置付けられ、142 は少なくとも奈良時代後半～平安時代に位置付けられる。46 は１区第１面包含層より出土し、142 はＳＤ 03 より出土している。なお、46 については外面全体に自然釉が全体にかかり、色調は灰黄褐色を呈しており、胎土・焼成が志方窯跡群に類似する。

甕Ａ　甕Ａは 148 の１点である。口縁端部は面を持ち、端部の内側縁辺を少し上方につまみ上げる。もう一方の外側縁辺はやや外側に張り出す。平安時代の所産と考えられる。ＳＤ 05 から出土している。

鉢Ｄ　鉢Ｄは、130 の１点である。基本的にはロクロ成形だが、体部下半に回転ヘラケズリを施して整形する。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はやや内湾させながら外上方へのびる。口縁端部は、上方を向く面を持つ。130 は、東播系須恵器で 10 世紀中頃～ 11 世紀に位置付けられる。ＳＢ 10 －Ｐ３より出土している。

⑶　緑釉陶器の検討

椀（182）が１点のみ出土している。182 は、底部の破片で、削り出し輪高台である。底部は高台内側も含めて、内外面に施釉される。高橋照彦氏による緑釉陶器編年[3]に依れば、182 は畿内Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられ、９世紀後半～末の所産と考えられる。また、緑釉陶器は、近接する坂本・土井の後遺跡おいて顕著な出土例がある。今回出土した資料についても、何らかの関連性があるものとみられる。

⑷　小結

以上、奈良時代～平安時代中期の土師器・須恵器・緑釉陶器について検討してきた。今回の調査で出

土した当該期の土器は、８世紀を所属時期とするものが約半数以上を占め、平安時代前期～中期のものが緑釉陶器も含めてそれに続く。少なくとも、当該期の遺構として認められるのは、８世紀の遺物のみが確認できたＳＤ07とＳＤ08である。特にＳＤ07については８世紀前半に限定できる。一方、平安時代前期～中期の遺構については、ＳＢ10が当該期に廃棄された可能性がある。その他の遺構は、共伴する遺物に時期幅があるなど、明確に当該期に位置付けられる遺構は基本的になかった。

⑴　森内秀造 「白沢・志方窯跡群における遺物の特徴」『志方窯跡群Ⅱ―投松支群―　山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告』兵庫県文化財調査報告第217冊　兵庫県教育委員会　2000

⑵　以下、須恵器に関する記述は森内秀造氏のご教示によるものである。

⑶　高橋照彦「緑釉陶器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

第４節　中世

今回の調査では、主に耕作痕・掘立柱建物跡・溝・土坑・墓から出土している。出土土器は、土師器・須恵器・陶器・磁器である。本節では、土器の時期を中心に検討していく。対象とするのは平安時代後期～室町時代とする。

⑴　土師器の検討

皿・小皿・椀・鍋・羽釜が出土している。

皿　底部から体部と口縁部が外上方にやや高く立ち上がるもので、口径が10cm以上、器高が３cm以上５cm未満のものを基本的に皿として分類した。ただし、器高が３cm未満のものでも、口径が10cmを超えるものについても皿に含める。さらに、ロクロ成形による皿Ａと手捏ね成形による皿Ｂに大別できる。

皿Ａは、皿Ａａ・皿Ａｂに細分できる。皿Ａａは、体部から外上方へ立ち上がり、口縁部は外反しながら広がる。器高は４cm以上５cm未満である。体部からの立ち上がりが直線的なものと、少し内湾するものがある。133・156～158が該当する。底面で観察できる調整痕は、133が回転ヘラキリ痕、156～158が回転糸切り痕である。皿Ａｂは、体部から口縁部にかけて直線的に延びるものである。器高は３cm以上４cm未満である。立ち上がりがやや直線的なものからやや内湾気味のものもある。22・120・210が該当する。底面調整は、22が回転ヘラキリで、120と210が回転糸切りである。

皿Ｂは、１～３・６～10・30・36・49・50・183・188～194・209・211・212が該当する。皿Ｂは、基本的に回転による切り離しを伴わずに成形されたもので、全体にナデ仕上げされ、底面にかすかにユビオサエの痕跡が残る。

次に、これらの所属時期について問題となる。当該期の土師器皿に関しては、宮原文隆によって編年案が提示されている[(1)]。ここでは、以後、その編年案を宮原土師器皿編年と呼称し、これに依拠して検討する。まず、皿Ａａについてであるが、宮原土師器皿編年の皿Ａと皿Ｂの中間的な様相をみせており、Ⅰ段階～Ⅱ段階後半の位置付けが考えられる。そして皿Ａｂは、宮原土師器皿編年の皿Ｃに対応し、Ⅱ段階後半～末に位置付けられる。皿Ｂについては、宮原土師器皿編年の皿Ｅに対応し、Ⅲ段階に位置付けられる。それぞれの年代は、皿Ａａが11世紀後半、皿Ａｂが11世紀後半～12世紀前半、皿Ｂが13世紀の所産である。

小皿　底部から口縁部が短く外上方に立ち上がるもので、口径が10cm未満、器高が３cm未満の皿を小皿として分類した。小皿は、さらにロクロ成形による小皿Ａと手捏ね成形による小皿Ｂに大別できる。

小皿Ａは、口縁端部が外反する小皿Ａａと体部が外上方に短く立ち上がる小皿Ａｂに細分できる。小皿Ａａは、19・159～164が該当する。164は底面には回転ヘラキリ痕が残る。底面が欠損する162を除き、回転糸切り痕を残す。小皿Ａｂは、18・20・52・125～128・165～167が該当する。18と166は、底面に回転ヘラキリ痕が残る。ナデ調整痕によって判別不能な128を除き、その他は回転糸切り痕が残る。

小皿Ｂは、底部は比較的丸みを持たせて仕上げられ、底面にはユビオサエの痕跡が残る。そして口縁部内外面にはヨコナデ調整の痕跡が残る。特に内面のナデ調整については、底部内面から口縁部にかけて「の」字状に一連にナデ調整を施すものも存在する。

これらの所属時期について、宮原土師器皿編年に依拠して検討すると、小皿Ａａが Ⅱ段階後半に、小皿Ａｂが Ⅱ段階末に、小皿Ｂが Ⅲ段階に位置付けられる。すなわち、その年代は小皿Ａａが11世紀後

半～ 12 世紀前半、小皿Ａｂが 11 世紀末～ 13 世紀初め、小皿Ｂが 13 世紀の所産が考えられる。ただし、ＳＸ 01 では、小皿Ａａ（159 ～ 164）と小皿Ａｂ（165 ～ 167）が供伴しており、小皿Ａａと小皿Ａｂは 11 世紀末～ 12 世紀前半の所産という位置付けが想定される。

椀　椀は 137 と 139 の２点が出土している。139 は、底部のみの破片で 137 とは接合点はないが同一個体と考えられる。137 は口縁部から体部の破片で、器壁内外面にロクロナデが残り、ロクロ成形による製品とわかる。また口縁部はやや薄く仕上げられており、口縁端部はやや強く摘んで外反させる。同様の断面形は須恵器椀にもみられる。139 は底部の破片である。底部は摩滅しており調整については不明である。わずかな破片断面を観察すると、底部から体部へは比較的直に多胎上がることがわかる。おなじく、外面には煤が付着する。これらは宮原土師器皿編年のⅡ段階後半に該当し、11 世紀の所産である。

鍋　鍋は、口縁端部の形態から鍋Ａと鍋Ｂに大別できる。鍋Ａは、口縁端部の断面形がほぼ方形状を呈し、端面が外傾するものである。13・27・34・53・54・201・215 が該当する。なかには端部内縁を僅かに上方へ摘み出すもの（54・215）や、外縁を僅かに下方に摘み出すもの（13・27）がある。34・54・215 を見ると、口縁部から体部にかけては「く」の字状に屈曲し、体部は強く張り出さないようである。

一方、鍋Ｂは、口縁端部の外縁を水平に摘み出すもので、端面はほぼ上方を向くものである。55・180・185・200 が該当する。いわゆる「播但型」の鍋である。口縁部から体部にかけては概して「く」の字状に屈曲する。体部について知れる資料は 185 のみで、やや下膨れ状に広がるようである。

次に、所属時期について問題となる。当該期の土師器鍋の編年は、宮原文隆[2]と長谷川眞[3]によってそれぞれ研究が進められている。それぞれ「宮原鍋編年」、「長谷川鍋編年」と呼称し、これらに依拠して検討する。まず、いわゆる播但型鍋の鍋Ｂについてであるが、宮原鍋編年ではⅡａ期に該当し、12 世紀末の年代が与えられている。長谷川鍋編年では、甕形タイプ・播但型のⅠ期に該当し 13 世紀前半の年代が与えられている。両者の編年の年代設定には少なからず差がある。ここでは、ひとまず 12 世紀末～ 13 世紀前半という位置付けで把握しておく。

一方、鍋Ａについては、宮原鍋編年ではⅠ期からⅡａ期の間への位置付けが想定されるが、資料の制約により明確な編年及び年代設定が確立されていない。また、長谷川鍋編年もⅠ期より前については研究されていない。ここで鍋Ａに含まれる 215 について注目する。215 は３区ＳＢ 19 － Ｐ 11 より出土しており、同一建物のＰ 12・Ｐ 13 からはそれぞれ 214 と 213 の須恵器椀Ｂが出土している。213 および 214 は、後述するように 12 世紀末～ 13 世紀初の所産であり、215 には同様の年代的位置付けが想定できる。

そして、この段階の土師器煮炊具の編年については、丹波の初田遺跡の出土甕の分析[4]が参考になる。ここでは古代の甕型土器から鍋への成立過程が提示されている。９世紀末～ 10 世紀初頭の長胴砲弾形を成す体部から、11 世紀・12 世紀の球胴形の体部へ、そして 13 世紀には体部がやや扁平化して播但型が成立する。そして、11 世紀から 12 世紀の段階には外面のタタキ成形技法が見られるようになり、12 世紀から 13 世紀の播但型の成立段階では、タタキメが縦方向から斜め方向を経て水平方向に変化すると指摘される。この観点からすれば、215 は体部が球胴形で、外面のタタキメも斜めになっており齟齬はなく、むしろ好例といえる。また、215 は宮原鍋編年のⅠ期からⅡａ期の間を埋める資料ともいえる。そして、今回出土した鍋Ｂは 34・54・201 のように外面のタタキメが水平のものもあり、播但型成立前の過渡的な様相ととらえることができる。従って鍋Ｂについては、215 を指標として 12 世紀末から 13 世紀初めの年代的位置付けが想定される。

羽釜　羽釜は耕作痕列 17 のＰ１から、17 の口縁部と鍔部分の破片が出土しているのみである。口縁部

の立ち上がりは短く、鍔部の位置も高い。色調はにぶい赤褐色を呈し、硬く焼き上げられている。北山城地域でみられる三足羽釜の可能性がある。13 世紀の年代的位置付けが考えられる。

⑵　須恵器の検討

椀・小椀・小皿・鉢・甕が出土している。

椀　当遺跡から出土した当該期の椀は、平高台を持つ椀Ａと平高台を持たない底面をもつ椀Ｂに大別できる。椀Ａは、23・24・38・56 ～ 60・122・146・147・172・176・177・184 が該当する。今回確認できた資料の高台部の側面は未調整である。また、椀Ａのなかには底面中央が一段下がって窪むものと、そうでないものがみられる。この種類の椀は、基本的に体部が内湾する。一方、椀Ｂは、14・15・25・39・40・61 ～ 65・135・205・213・214 が該当する。この種類の椀の底面には、回転糸切り痕が残る。また、体部から口縁部かけてはわずかに内湾するものの、ほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。底部を欠くが体部はほぼ直線的に外上方へ広がる 26・33・66・129・141・203・204 も椀Ｂに含まれると考えられる。なお、椀Ｂの中には底径が大きく、器高がやや低い 205 のようなやや新しい要素を持つものも見られる。

これらの時期について、森田稔による編年[5]（以後、森田編年と呼称）に依れば、椀Ａは第Ⅰ期第１段階に位置付けられ、11 世紀後半の所産と考えられる。そして、椀Ｂは森田編年の第Ⅱ期第２段階に位置付けられ、12 世紀末～ 13 世紀初頭の所産と考えられる。ただし、205 についてはやや新しい第Ⅲ期１段階に該当し、13 世紀の所産と考えられる。

小椀　底部から体部と口縁部が内湾しながら外上方に立ち上がるもので、器高が低く、口径が 11cm以下の椀を小椀として分類した。73 と 145 が該当する。145 は平高台で、底部外面には回転糸切り痕が残る。高台部の側面は成形時まま未調整である。73 については、底部を欠くものの、同様の底部と思われる。

これらの所属時期について特定は難しいが、平高台を有する点を重視して 11 世紀後半～ 12 世紀前半の位置付けが考えられる。

小皿　口径 10cm以下で器高が 3 cm未満のものを小皿として分類した。29・74 ～ 82・136・178・179・181・202・206 が該当する。今回確認できた小皿の底面には回転糸切り痕が残る。当該地域および当該時期の須恵器の小皿の編年についてはほとんど確立されておらず、宮原文隆による当該時期の土師器皿の編年の併行関係の中で仮説が立てられているのみである[6]。宮原土師器皿編年によれば、Ⅱ段階末～Ⅲ段階前半に収まる可能性があり、12 世紀中頃から 13 世紀初頭の所産と考えられる。

鉢　鉢は 67 ～ 72 で、いずれも包含層から出土している。鉢は、口縁端部断面が方形状を呈するもの（69 ～ 71）と、口縁端部内縁が上方に立ち上がり、外縁部が外側下方に張り出して三角形状を呈するもの（67・72）、の２種類に分けられる。前者は、69 のみ口縁端面が上方を向くが、他は端面が外傾する。後者は、67 は口縁端部内縁が低く立ち上がるが、72 は同部分が高く立ち上がり、やや後出的である。

これらの時期については、森田編年に依れば、前者の 68 ～ 71 は第Ⅰ期に位置付けられ、11 世紀後半から 12 世紀前半の所産と考えられる。一方、後者の 67 は第Ⅱ期第２段階、12 世紀末～ 13 世紀初頭に、72 は第Ⅲ期第１段階、13 世紀の位置付けが考えられる。

甕　甕は、16 が出土している。16 は、頸部外面には平行文のタタキメが施されたあとナデ調整される。頸部内面は、接合の痕跡とユビオサエの痕が残る。口縁端部はやや厚く、端面をもち内部外縁をわずかに上方に摘み出す。焼成は甘くやや瓦質を呈し、胎土は密で砂粒もほとんど含まれない。いわゆる東播系の範疇におさまる製品とみられ、12 ～ 13 世紀頃の所産に位置付けられる[7]。

⑶　陶器の検討

天目茶碗と香炉が出土している（図版３）。

天目茶碗は、95 の１点が出土している。口縁部から体部の破片である。体部は緩やかに屈曲して、口縁端部は短くくびれて外反する。胎土は密で淡黄灰色を呈する。１区包含層から出土している。岡田章一氏より、95 は美濃焼で 16 世紀後半の所産として位置付けられるとのご教示を得た。

香炉は、96 の１点が出土している。体部から底部にかけて残存する破片で、底部外面には回転糸切りの痕跡残る。また、底部の縁辺部には、３点の１㎝大の丸い粘土塊を潰して等間隔に貼り付けて脚部を作り出している。底部内面にはロクロナデによる螺旋状の溝が残り、施釉されない。体部外面には、わずかに灰釉が施された痕跡が残る。１区包含層から出土している。96 は瀬戸焼で、15 ～ 16 世紀頃に位置付けられる[8]。

⑷　磁器の検討

白磁と青磁が出土している。器種分類及び編年については、主に太宰府市教育委員会編集の『太宰府条坊跡ＸＶ』でまとめられた陶磁器分類及び編年[9]に依拠する（以後、これに基づく分類および編年をそれぞれ「太宰府編年」･「太宰府分類」と呼称する）。

白磁　皿と碗が出土している。

皿は、83 の１点のみ出土した。口縁部から体部の破片である。体部はやや内側に屈曲し、口縁部は直口になる。屈曲部の体部内面には沈線状の段を有する。無文で、施釉はやや厚めにかかる。太宰府分類の皿Ⅷ類（Ⅷ―１ａ）に位置付けられる。太宰府編年のＣ期にあたり、12 世紀中頃～ 12 世紀後半の所産だが、消費地遺跡としては 12 世紀後半～ 13 世紀初頭の位置付けが考えられる。

碗は 32・85 ～ 91・174 が出土した。32 は口縁部から体部にかけての破片である。碗は、口縁端部外面にやや面を持ち、断面形が三角形状に肥厚する特徴を有し、底部内面に沈線が認められる。

84 ～ 86 は口縁部の破片で、口縁端部は断面三角形状の肉厚な玉縁を有する。86・87・174 は底部から体部の破片である。いずれも体部外面から高台部に回転ヘラケズリを施す。ただし、高台部の削りは浅い。87 は高台部が欠失するが、88 と同様のものである。86・87・174 は釉薬が高台部には及ばない。底部内面にはいずれも一条の沈線が施される。このような特徴から太宰府分類の碗Ⅳ類（Ⅳ－１・２ａ）に該当する。89 は、口縁部から体部にかけての破片で、口縁部には小さな玉縁を有し、無文である。太宰府分類の碗Ⅱ類（Ⅱ―１・２）に該当する。90 は､底部から体部の破片で､高台部は削り出し成形である。高台部外面が比較的直に、また内面はやや膨らみながら内面を削っており、太宰府分類の碗Ⅱ類に該当する。91 は、底部の破片である。高台部は削り出しよって、細く高く直立する。釉薬は、高台部まで一部垂れているが､基本的には体部と高台部境目まで施される。また､見込み部分には櫛描き文が施される。91 は、太宰府分類の碗Ｖ類に該当する。

32・85 ～ 91・174 は、太宰府編年のＣ期にあたり、11 世紀後半から 12 世紀前半の所産である。消費地遺跡としての時期としては 12 世紀後半から 13 世紀前半までの位置付けが考えられる[10]。

青磁　碗が出土している。

碗は、92 ～ 94・143 が出土している。92 は口縁部から体部の破片で、口縁端部は少し外反する。体部外面には、素地に縦方向の粗い篦書きを複数条施し、退化した蓮弁文が表現されている。また、内面には短く細かな櫛描き文が施される。釉薬は全体に薄く施されて、黄色を呈する。龍泉窯系青磁碗に含まれると考えられる。93 は､口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は丸くやや肉厚で直口となる。

胎土は密で灰色を呈し、釉薬はオリーブ色を帯び、無文である。太宰府分類（太宰府 2000）龍泉窯系青磁碗Ⅰ類に該当する。94 は､口縁部から体部にかけての破片である。器壁はやや肉厚で､わずかに内湾し、口縁端部は丸くおさまる。体部外面には、軸と剣頭がずれ、退化した細蓮弁が表現される劃花文が施される。143 は碗の口縁部から体部にかけての破片である。143 は、口縁部はごくわずかに外反する。内面には素地を工具で浅く削って描かれた草花文が施される。太宰府分類（太宰府 2000）の龍泉窯系青磁の碗Ⅰ類（Ⅰ－２）に該当する。

各遺物の時期については、92 は 15 世紀～ 16 世紀前半、93 は 13 世紀前半、94 は 16 世紀後半、143 は 13 世紀前半の位置付けが考えられる[11]。

⑸　小結

以上の各土器、各器種の検討を踏まえて、当該期、特に遺構に関連する平安時代後期～鎌倉時代にかけての出土土器をもとに、中世Ⅰ期とⅡ期の大きく２時期に区分できる。

中世Ⅰ期（11 世紀後半～ 13 世紀初）

土師器：皿Ａａ・皿Ａｂ・小皿Ａａ・小皿Ａｂ

須恵器：椀Ａ・小皿・小椀・甕

中世Ⅱ期（13 世紀）

土師器：皿Ｂ・小皿Ｂ・鍋Ａ・鍋Ｂ

須恵器：椀Ｂ

磁器：白磁碗Ⅳ類・龍泉窯系青磁碗Ⅰ類

〔註〕

⑴　宮原文隆「円満寺遺跡出土の土器類について」『円満寺遺跡』中町文化財報告７　中町教育委員会　1994

⑵　宮原文隆「中世の土師質堝について」『門前・上山遺跡』中町文化財報告２　中町教育委員会　1992

⑶　長谷川眞「播磨における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎的研究　21』 日本中世土器研究会　2007

⑷　山田清朝「平安時代～鎌倉時代の土器について」『初田遺跡』兵庫県文化財調査報告書第 116 冊　兵庫県教育委員会　1992

⑸　森田稔「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

⑹　前掲（１）

⑺　森内秀造氏より、産地としての確証を得ないが、断面形状や胎土から宮の池窯跡（三木市）に類例がみられるとのご教示を得た。

⑻　岡田章一氏よりご教示頂いた。

⑼　太宰府教育委員会『太宰府条坊跡ＸＶ　―陶磁器分類編―』太宰府市の文化財第 49 集　太宰府市教育委員会　2000

⑽　岡田章一氏よりご教示頂いた。

⑾　岡田章一氏よりご教示頂いた。

第６章　遺構のまとめ

第１節　検出面と遺構の概要

１．はじめに

今回の調査では、第１面と第２面に分けて遺構を検出した。そして、前章までに、個別遺構の所属時期について報告してきた。本章では、第１節において、各面ごとにこれらの確認できた遺構を、各所属時期ごとにまとめる。そして、第２節において、それらを併せて検討し、報告する。なお、遺構の所属時期は、弥生時代中期・古墳時代後期・奈良時代・中世（平安時代中期末～鎌倉時代）である。

２．第１面の遺構

第３章において報告した第１面検出遺構をまとめると、すべて中世に位置付けられる。以下の第24表に遺構種ごとに整理して提示する。

第１面は、耕作痕列を中心に検出した面といえる。そして、これに関連する遺構として鋤溝群がある。また、列挙したその他の遺構には耕作痕列群と関連するものもあるが、さらに時期を細分できるものもある。これについては改めて詳述する。

第24表　第１面遺構一覧

時期	耕作痕列		鋤溝	柱穴	溝	土坑	
中世	耕作痕列群１	耕作痕列群10	鋤溝群01	Ｐ01	ＳＤ01	ＳＫ01	ＳＫ13
	耕作痕列群２	耕作痕列群11	鋤溝群02	Ｐ02	ＳＤ02	ＳＫ02	ＳＫ14
	耕作痕列群３	耕作痕列群12		Ｐ03		ＳＫ03	ＳＫ15
	耕作痕列群４	耕作痕列群13		Ｐ04		ＳＫ04	
	耕作痕列群５	耕作痕列群14		Ｐ05		ＳＫ05	
	耕作痕列群６	耕作痕列15		Ｐ06		ＳＫ08	
	耕作痕列群７	耕作痕列16		Ｐ07		ＳＫ09	
	耕作痕列群８	耕作痕列17		Ｐ08		ＳＫ11	
	耕作痕列群９			Ｐ09		ＳＫ12	

３．第２面の遺構

第３章において報告した第２面検出遺構をまとめると、各遺構の所属時期は、弥生時代中期・古墳時代後期・奈良時代・中世に位置付けられる。

以下の第25表に時期別・遺構種別に整理して提示する。

第25表　第２面遺構一覧

時期	竪穴住居	掘立柱建物		柱穴	溝	土坑	墓
弥生時代中期					ＳＤ06 ＳＤ09 ＳＤ12	ＳＫ07	
古墳時代後期	ＳＨ01 ＳＨ02						
奈良時代				Ｐ12	ＳＤ07 ＳＤ08	ＳＫ10	
中世		ＳＢ01	ＳＢ11	Ｐ10	ＳＤ03	ＳＫ06	ＳＸ01
		ＳＢ02	ＳＢ12	Ｐ11	ＳＤ04	ＳＫ08	
		ＳＢ03	ＳＢ13	Ｐ13	ＳＤ05	ＳＫ09	
		ＳＢ04	ＳＢ14	Ｐ14	ＳＤ10	ＳＫ16	
		ＳＢ05	ＳＢ15	Ｐ15	ＳＤ11	ＳＫ17	
		ＳＢ06	ＳＢ16	Ｐ16	ＳＤ13		
		ＳＢ07	ＳＢ17	Ｐ17	ＳＤ14		
		ＳＢ08	ＳＢ18	Ｐ18			
		ＳＢ09	ＳＢ19				
		ＳＢ10					

４．小結

以上、各時期別・遺構種別に列挙してきた。遺構検出面としての第２面では、複数時期にわたる遺構を検出しており、中でも中世については検出した遺構が最も多い。

当該期の遺構として注目すべきは、19 棟の掘立柱建物である。耕作痕列群が主に検出された第１面に対し、主に第２面において掘立柱建物群が検出された点についていえば、同じ中世として括った耕作痕列群と掘立柱建物群には時期差が存在すると考えられる。また、いくつかの掘立柱建物は重なった状態で検出されている。少なくとも、複数時期にわたって建て替えが行われたことが推察される。

そして、これらに関連するその他の遺構の存在も重要であり、これらについても時期が細分可能である。次節では、中世の時期細分について検討する。

第２節　遺構の検討

本節では、前節での整理を踏まえてさらに所属時期ごとにまとめ、検討を加えていく。第１項では、弥生時代中期、古墳時代後期、奈良時代までを扱う。中世については、前章で示した中世Ⅰ期と中世Ⅱ期からさらに遺構の所属時期が細分されるため、それぞれ別に第２項および第３項を設けて検討・報告する。第４項では、第４章の花粉分析結果を受けて、当遺跡の中世における土地利用の特徴である耕作痕の性格について検討する。そして、最後に第５項を設け、上記の各項をまとめるとともに本調査成果と遺跡についての所見を述べる。

１．弥生時代中期・古墳時代後期・奈良時代の遺構

弥生時代中期の遺構（第 134 図）　当該期に位置付けられる遺構は、弥生土器甕と壷の底部が出土したＳＤ 09 である。

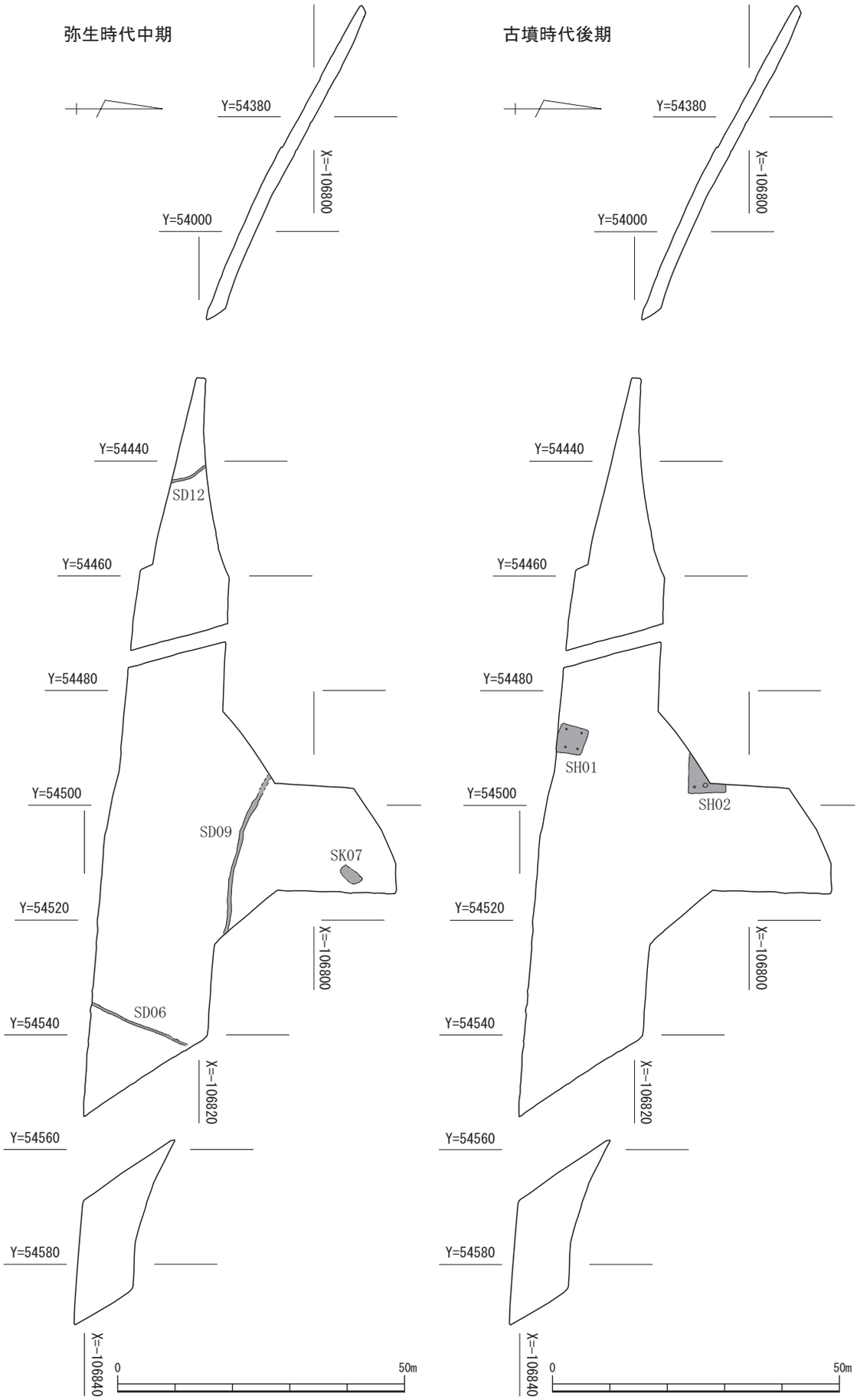
そして、これと同時期に位置付けられる可能性があるのが、埋土の母材が同質のＳＤ 06・ＳＫ 07・ＳＤ 12 である。ただし、ＳＫ 07 については、埋土には、黒ボク土層と基盤層を由来とするブロックは認められるものの、土壌層Ⅳから上層の土が認められないことから、古墳時代以前に開削された可能性もある。

古墳時代後期の遺構（第 134 図）　当該期に位置付けられる遺構は、ＳＨ 01 とＳＨ 02 のみである。これらの遺構からは、田辺編年ＭＴ８５段階に位置付けられる須恵器杯Ｈ・杯Ｈ蓋が出土している。

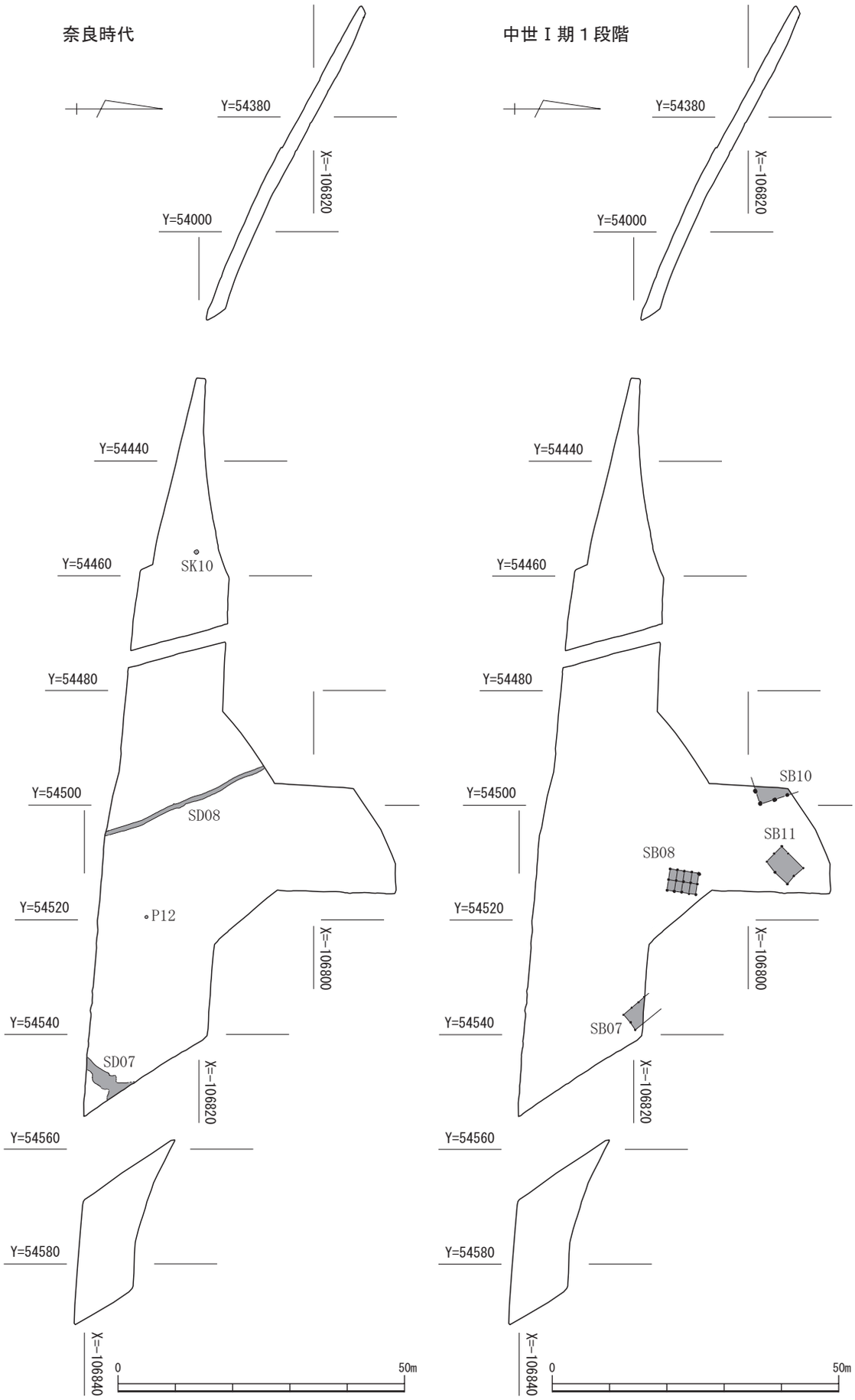
奈良時代の遺構（第 135 図）

当該期に位置付けられる遺構は、まず８世紀前半の須恵器が出土するＳＤ 07、そして同時期の土師器甕が出土するＳＤ 08、当該期の製塩土器が出土するＰ 12 である。そして、埋土が土壌層Ⅲ由来であることから、ＳＫ 10 も当該期に形成された可能性がある。

ただし、土壌層Ⅲが堆積した時期は８世紀前半～ 13 世紀初めに推定され、ＳＫ 10 の形成に関してはやや時期幅が存在する。しかし、ＳＫ 10 については、13 世紀初め頃所産の遺物が出土したＳＤ 10 の下層で検出されており、少なくとも８世紀前半～ 12 世紀のうちに形成された可能性がある。



第 134 図　遺構の変遷　弥生時代・古墳時代



第 135 図　遺構の変遷　奈良時代・中世(1)

２．中世Ⅰ期（11 世紀前半～ 13 世紀前半）の遺構

中世の遺構は、第１面で検出した耕作痕列群が展開する時期と、第２面で検出した掘立柱建物群が展開する時期とに大別でき、後者が前者に先行する。この２つの時期は、遺物の検討において区分した中世Ⅱ期と中世Ⅰ期とにそれぞれほぼ対応する。出土遺物や遺構埋土から、中世Ⅰ期は 11 世紀～ 13 世紀初めの時期に、中世Ⅱ期は 13 世紀代に位置付けられる。ただし、中世Ⅰ期に関しては埋土を時期判断の基準とした遺構の場合、８世紀前半から存在する可能性を有するもつものがある。

本項では、中世Ⅰ期の各遺構の時期的なまとまりを検討し、報告する。当該期は、第２面で検出した掘立柱建物が主体となる時期である。今回検出した掘立柱建物は、重なり合うものや棟軸方向が共通するものやずれるものがある。出土遺物と遺構埋土の検討から、中世Ⅰ期は、１～４段階の４つの時期的なまとまりに細分できる。Ⅰ期１段階は 11 世紀前半頃、２段階は 11 世紀後半、３段階は 11 世紀末～ 12 世紀中頃まで、４段階は 12 世紀末～ 13 世紀前半に位置付けられる。

⑴　１段階（11 世紀前半頃）（第 135 図）

当該期は、可能性として８世紀前半から 11 世紀前半頃までに存在していたと推測される掘立柱建物を包括する段階である。ただし、埋土が土壌層Ⅲの場合、存在の可能性としては８世紀まで考慮されるが、実質的には平安時代後期以降に存在していたとみられる。当該期に位置付けられる遺構は、ＳＢ 07・ＳＢ 08・ＳＢ 10・ＳＢ 11 である。

ＳＢ 07 はＳＤ 05 の下層に、ＳＢ 11 はＳＤ 03 の下層に位置する。ＳＤ 03 とＳＤ 05 は、11 世紀後半以降に形成されたことから、少なくともこれより古く位置付けられる。また、この２者は、互いに棟軸方向が約 90° 振っている関係性があり、同時に存在した可能性が高い。

ＳＢ 08 は、出土遺物こそないが、埋土が土壌層Ⅲ上面より掘削したものであることから、土壌層Ⅲの堆積時期、すなわち８世紀前半から 11 世紀の間に形成された可能性がある。

ＳＢ 10 は、柱穴から 10 世紀中頃から 11 世紀に位置付けられる東播系須恵器鉢が出土しており、少なくとも 11 世紀までに廃絶したものとみられる。

なお、建物の併存関係については、ＳＢ 07 とＳＢ 11 にその可能性を指摘できるのみで、他のものの併存関係は不明である。

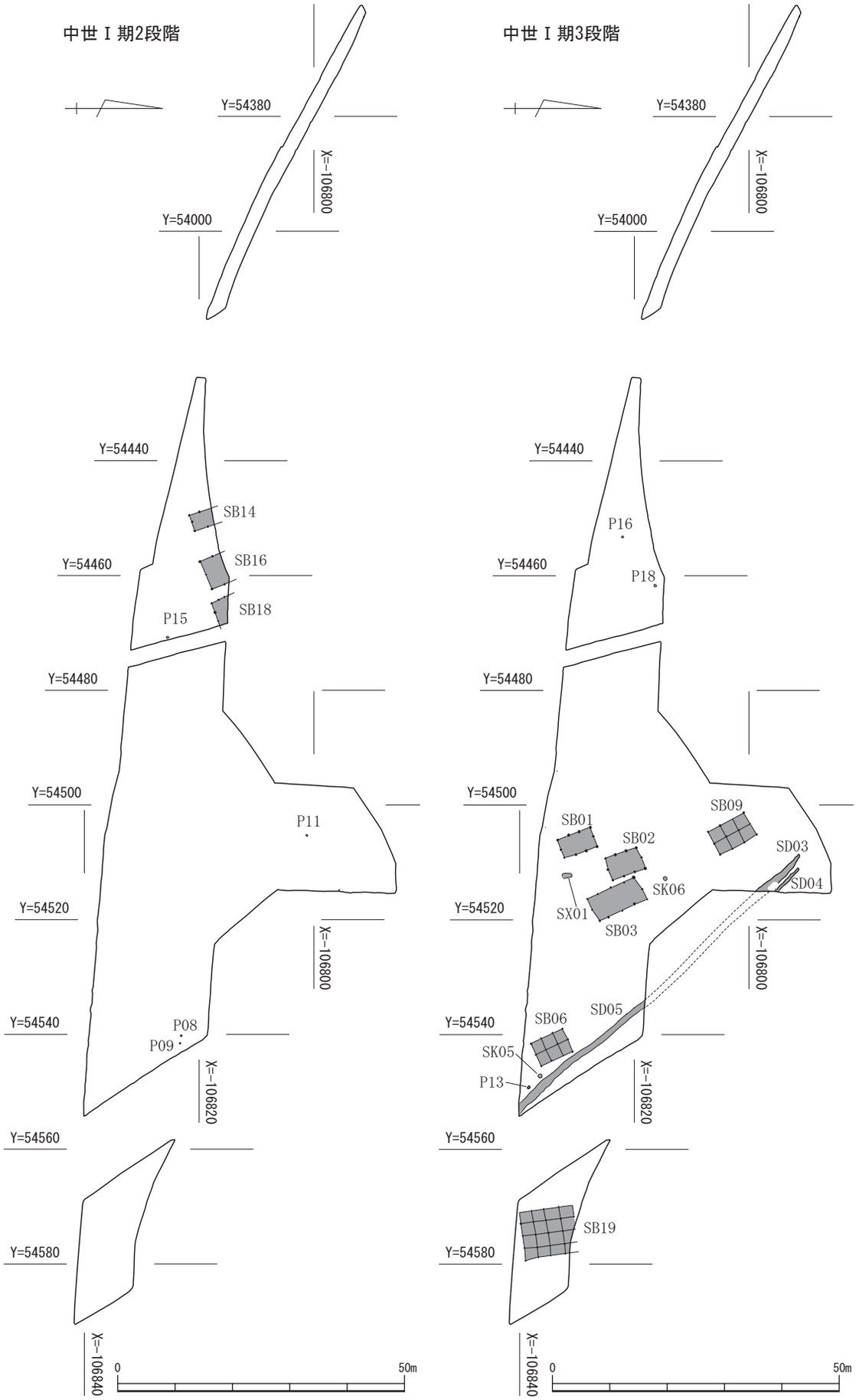
⑵　２段階（11 世紀後半）（第 136 図）

当該期は、11 世紀後半を下限とする遺物が出土する掘立柱建物、およびそれに関連する遺構を包括する段階である。出土遺物として須恵器椀Ａ、すなわち平高台を有する椀が指標となる。当該期に位置付けられる遺構は、ＳＢ 14・ＳＢ 16・ＳＢ 18、Ｐ 08・Ｐ 09・Ｐ 11・Ｐ 15 である。

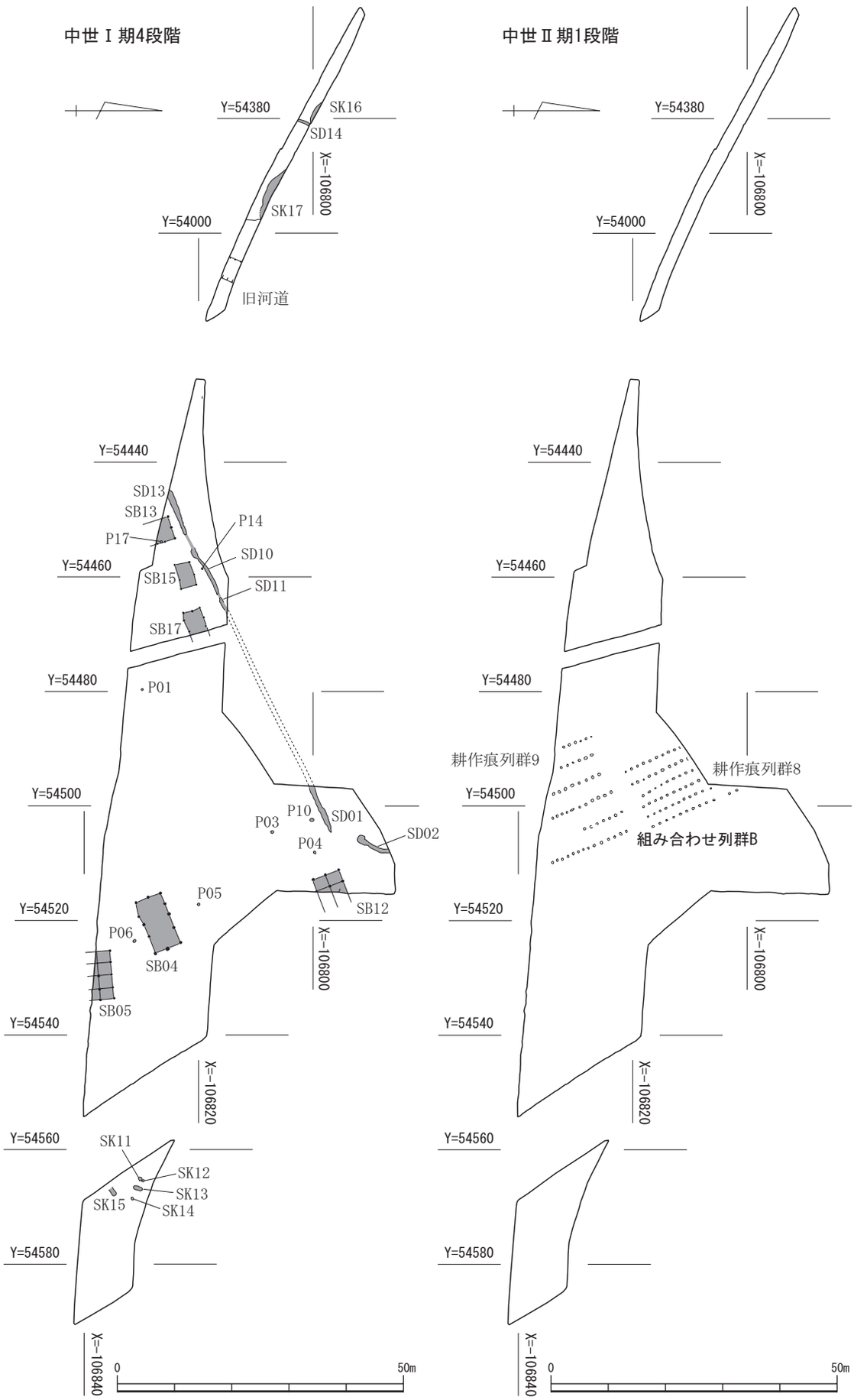
ＳＢ 14 からは、須恵器椀Ａが出土しており、それと同様の棟軸方向を示すＳＢ 16 とＳＢ 18 も併行関係にある建物とした。また、ＳＢ 16 とＳＢ 18 は、後述するＳＤ 10・ＳＤ 11 と重なり、それらより先行することから、近接する同様の棟軸方向を示す掘立柱建物ＳＢ 13・ＳＢ 15・ＳＢ 17 とは区別できる。

⑶　３段階（11 世紀末～ 12 世紀中頃）（第 136 図）

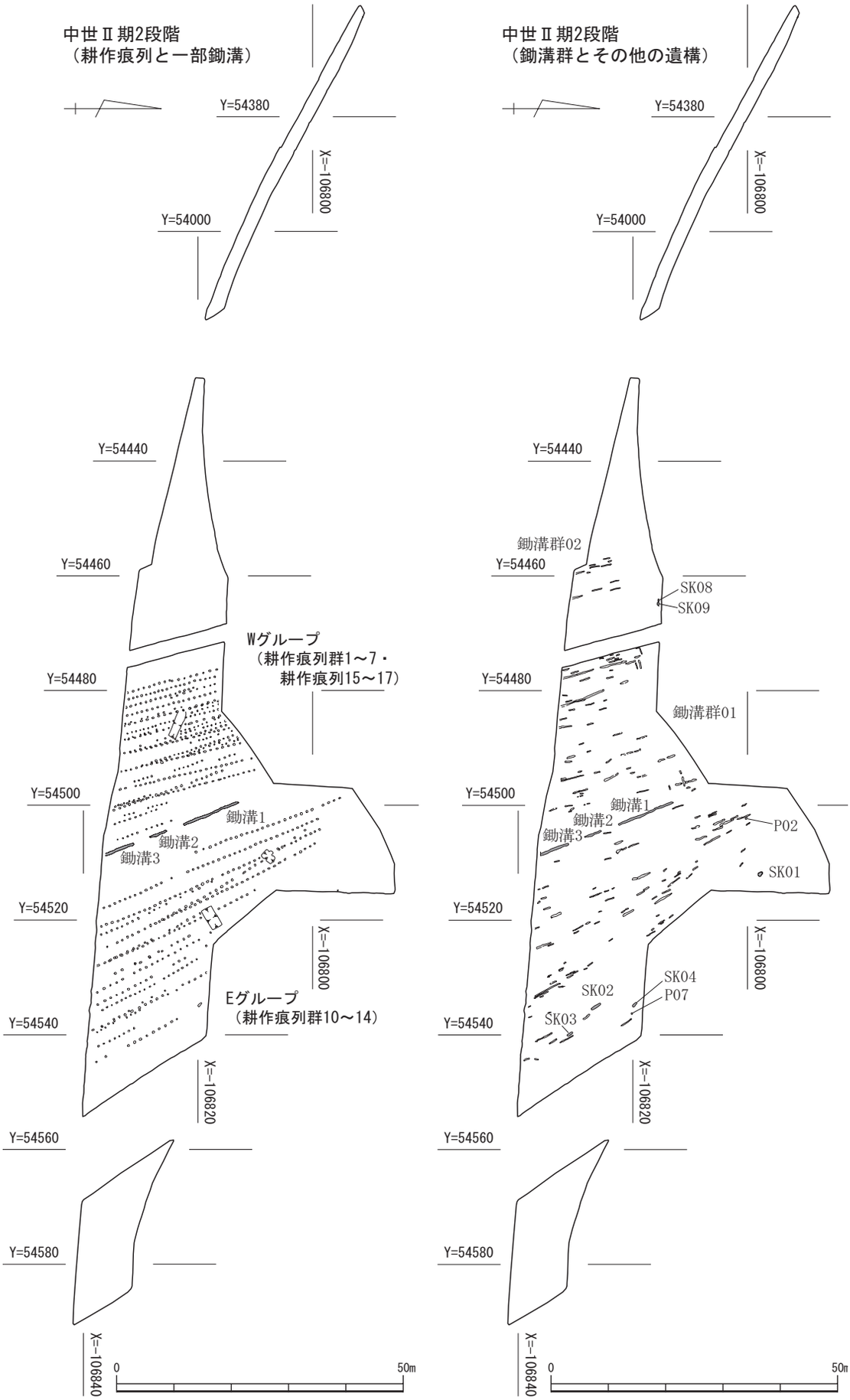
当該期は、時期の特定できたＳＢ 09 を軸に、それに関連する遺構および時期的に併行する遺構を包括する段階である。当該期に位置付けられる遺構は、ＳＢ 09 を含めてＳＢ 01・ＳＢ 02・ＳＢ 03・ＳＢ 06・



第 136 図　遺構の変遷　中世(2)



第 137 図　遺構の変遷　中世(3)



第 138 図　遺構の変遷　中世(4)

ＳＢ 19・Ｐ 13・Ｐ 16・Ｐ 18・ＳＤ 03・ＳＤ 04・ＳＤ 05・ＳＫ 05・ＳＫ 06・ＳＸ 01 である。

ＳＢ 09 は、出土遺物から 11 世紀末～ 12 世紀中頃には廃絶したとみられる。ＳＢ 01・ＳＢ 02・ＳＢ 03・ＳＢ 06・ＳＢ 19 は、ＳＢ 09 と棟軸方向はほぼ同じであり、同段階に位置付けられる。

ＳＤ 03 とＳＤ 05 は同一直線上にある遺構で、本来は同一の遺構とみられる。埋土下層からは 11 世紀後半頃の遺物が出土しており、少なくともこの頃には開削されたものとみられ、埋土上層出土の青磁碗から 13 世紀までには埋没したと考えられる。ＳＤ 03 とＳＤ 05 の延びる方向は、ＳＢ 09 を中心とする建物群の棟軸方向とほぼ平行しており、これらの関連性は極めて高いと判断される。また、ＳＤ 04 についても、ＳＤ 03 と近接した位置に平行に延びており、関連性があると推測される。

ＳＸ 01 は、土師器皿が一括で出土しており、11 世紀後半～ 12 世紀中頃に埋葬されたとみられる。ＳＸ 01 の長軸方向も、建物群の棟軸方向や溝の延びる方向と同じであり、関連性の高さが伺える。

⑷　４段階（12 世紀末～ 13 世紀前半）（第 137 図）

当該期は、時期の特定をできたＳＢ 05 を軸に、それと関連する遺構および時期的に併行する遺構を包括する段階である。耕作痕列群が成立するまでを時期の下限とする。当該期に位置付けられる遺構は、ＳＢ 04・ＳＢ 05・ＳＢ 12・ＳＢ 13・ＳＢ 15・ＳＢ 17、Ｐ 01・Ｐ 03・Ｐ 04・Ｐ 05・Ｐ 06・Ｐ 10・Ｐ 14・Ｐ 17、ＳＤ 01・ＳＤ 02・ＳＤ 10・ＳＤ 11・ＳＤ 13・ＳＤ 14、ＳＫ 11 ～ＳＫ 17 である。

ＳＢ 09 は、土師器小皿Ｂが出土遺物の下限であり、13 世紀に位置付けられる。これと棟軸が共通するのがＳＢ 04・ＳＢ 12・ＳＢ 15・ＳＢ 17 である。ＳＢ 13 は、棟軸方向が約 90° 振った形になるが、ここからも 13 世紀に位置付けられる土師器皿Ｂが出土しており、同段階のものとして認識できる。

ＳＤ 01・ＳＤ 10・ＳＤ 11・ＳＤ 13 は、同一直線上に延びる溝であるが、これらは同一の遺構と考えられる。これらの溝からは 13 世紀に位置付けられる土師器皿Ｂや土師器小皿Ｂが出土する。また、ＳＤ 01 の下層からは 12 世紀後半から 13 世紀前半に位置付けられる白磁碗が出土しており、下限をここに絞ることができる。この一連の溝の延びる方向は、建物群の棟軸方向と同じである。特にＳＢ 13・ＳＢ 15・ＳＢ 17 の並びは、一連の溝の南側に沿った形で隣接しており、これらの溝に制限されているとみられる。そして、前段階に位置付けたＳＢ 14・ＳＢ 16・ＳＢ 18 が、この段階の建物ＳＢ 13・ＳＢ 15・ＳＢ 17 と棟軸方向と同一ではあるが、古い時期に存在したことが知り得るのも、この一連の溝が上層に位置することによる。

３．中世Ⅱ期（13 世紀中頃～後半）の遺構（第 137 図・第 138 図）

前項でも触れたが、中世の遺構は中世Ⅰ期とⅡ期に区分でき、本項では中世Ⅱ期の各遺構の時期的なまとまりを検討し、報告する。当該期は、掘立柱建物跡の廃絶後に耕作痕列群が展開する時期である。今回確認できた耕作痕列群は、列軸がＮ 13° ～ 20° Ｗを中心とするものと、Ｎ 23° ～ 29° Ｗを中心とするものの２群に大別できる（第 26 表・第 27 表）。耕作痕列群１～７が前者に該当し、１区の西半部に集中する傾向にある。ここでは、Ｗグループと呼称する。

一方、後者には耕作痕列群８～ 14 が該当し、１区の東半部に集中する傾向にあり、これらをＥグループと呼称する。ただし、Ｅグループは、耕作痕列群８と耕作痕列群９が西側に位置し、その一部がＷグループと重複する。しかし、耕作痕列群の全体的傾向としては、列軸の方位と集中位置には何らかの相関性が窺える。

第 26 表　耕作痕列群一覧表 (1)

耕作痕列群番号	列数	各列の延長(m)	列群の最大幅(m)	列群の面積（㎡）	列の間隔（m）		
					各列間隔	最小幅	最大幅
耕作痕列群 1	3	1 列目：8.5 2 列目：8.2 3 列目：7.55	5.8	49.3	1 － 2 列目：2.3 ～ 2.7 2 － 3 列目：2.7 ～ 3.0	2.30	3.00
耕作痕列群 2	4	1 列目：8 2 列目：12.6 3 列目：10.4 4 列目：6	8	100.8	1 － 2 列目：2.3 ～ 2.4 2 － 3 列目：2.7 3 － 4 列目：2.6	2.30	2.70
耕作痕列群 3	4	1 列目：16.5 2 列目：16.7 3 列目：18 4 列目：9	7.6	136.8	1 － 2 列目：2.5 ～ 2.8 2 － 3 列目：2.35 ～ 2.5 3 － 4 列目：2.0 ～ 2.6	2.00	2.80
耕作痕列群 4	5	1 列目：5 2 列目：7.2 3 列目：7.7 4 列目：9.5 5 列目：3.2	9.5	85.5	1 － 2 列目：2.35 ～ 2.4 2 － 3 列目：2.5 ～ 2.8 3 － 4 列目：1.8 ～ 1.95 4 － 5 列目：2.25 ～ 2.4	1.80	2.80
耕作痕列群 5	2	1 列目：15.6 2 列目：16.8	3.4	57.1	1 － 2 列目：2.8 ～ 3.35	2.80	3.35
耕作痕列群 6	7	1 列目：15.9 2 列目：16.3 3 列目：17 4 列目：18.6 5 列目：21.6 6 列目：24 7 列目：25.6	18	460.8	1 － 2 列目：2.6 ～ 2.7 2 － 3 列目：3.1 3 － 4 列目：3 ～ 3.2 4 － 5 列目：3 ～ 3.7 5 － 6 列目：3 ～ 3.1 6 － 7 列目：2.1 ～ 2.7	2.10	3.70
耕作痕列群 7	4	1 列目：3.2 2 列目：6.2 3 列目：8 4 列目：10.2	8.8	89.76	1 － 2 列目：3.1 2 － 3 列目：2.7 ～ 2.9 3 － 4 列目：2.7	2.70	3.10
耕作痕列群 8	6	1 列目：10.6 2 列目：10.8 3 列目：10 4 列目：11 5 列目：12.3 6 列目：16.4	11.2	183.68	1 － 2 列目：2.35 ～ 2.5 2 － 3 列目：2.3 ～ 2.6 3 － 4 列目：1.8 ～ 2.2 4 － 5 列目：1.9 ～ 2 5 － 6 列目：2 ～ 2.3	1.80	2.60
耕作痕列群 9	6	1 列目：4.6 2 列目：5.3 3 列目：7.6 4 列目：9.6 5 列目：6.3 6 列目：12	12	144	1 － 2 列目：3.1 ～ 3.2 2 － 3 列目：3.6 ～ 3.7 3 － 4 列目：3.7 ～ 3.8 4 － 5 列目：3.8 ～ 4 5 － 6 列目：3.2 ～ 3.4	3.10	3.80
耕作痕列群 10	5	1 列目：26.5 2 列目：40.7 3 列目：41.8 4 列目：40.6 5 列目：30.5	12 （南側）	501.6	1 － 2 列目：2.2（北） 2 － 3 列目：3.3（南）・2（北） 3 － 4 列目：3.4（南）・1.9（北） 4 － 5 列目：2.9（南）	1.90	3.40
耕作痕列群 11	4	1 列目：21.6 2 列目：29.7 3 列目：18.2 4 列目：26.4	7.5	305.25	1 － 2 列目：1.7 ～ 2.2 2 － 3 列目：2.3 3 － 4 列目：2.7	1.70	2.70
耕作痕列群 12	4	1 列目：8.8 2 列目：21.8 3 列目：14.8 4 列目：7.2	10.1	220.18	1 － 2 列目：3.1 ～ 3.3 2 － 3 列目：3.2 ～ 3.5 3 － 4 列目：3 ～ 3.2	3.00	3.50
耕作痕列群 13	3	1 列目：22.6 2 列目：19 3 列目：22	6.1	137.86	1 － 2 列目：2.9 ～ 3.15 2 － 3 列目：2.9 ～ 3	2.90	3.15
耕作痕列群 14	2	1 列目：12.2 2 列目：16.3	5	81.5	1 － 2 列目：4.8 ～ 5	4.80	5.00
耕作痕列 15	1	5.2	—	—	—	—	—
耕作痕列 16	1	25	—	—	—	—	—
耕作痕列 17	1	7.8	—	—	—	—	—

第 27 表　耕作痕列群一覧表 (2)

列の軸方向	耕作痕の間隔（m）	出土遺物報告番号	グループ	組合せ列群	切り合い関係	位置関係（近接・重複・ズレ）（※番号は耕作痕列群）
N15°～17° W	1～1.2	1	W	A	3 を切る	2・4・6
N15° 30″～17° W	0.8～1.0	2・13	W	—	—	1・3・4・6・9
N14°～17° W	1～1.2	8·11·14	W	—	1 に切られる	2・4・5・6・7・8・9
N16°～18° W	0.8～0.9	6	W	—	—	1・3・5・6・7・8・15
N16°～18° 30″ W	0.8～0.9	9・15	W	A	—	3・4・6・9
N13°～15° W	0.8～1.0	7・12	W	—	3 に切られる 9 を切る	1・2・4・5・7・8・15・16・17
N16°～19° W	0.8～1.0	なし	W	A	9 を切る	4・6・16・17
N24°～25° W	1.2～1.3	なし	E	B	—	4・6・11・16
N23°～25° W	1.2～1.3	なし	E	B	7 に切られる 6 に切られる	2・3・4・5・11・16・17
N20°～27° W（北側） N23°～26° W（南側）	0.9～1.0	4	E	C	11 を切る	—
N26°～29° W N35° W（2 列目北側）	1.0～1.2	なし	E	—	10 に切られる	12・13
N25°～28° W	1.0～1.2	なし	E	—	—	11・13・14
N27°～28° W	1.0～1.2	なし	E	C	—	11・12・14
N27°～28° W	1.0～1.2	なし	E	—	—	12・13
N18° W	0.8	16	W	A	—	5・6
N20° W	0.9～1.0	3	W	—	—	6～9
N16° 30″ W	0.8～0.9	10	W	—	—	6～9

今回耕作痕列群から出土した遺物から耕作痕列群間あるいはグループ間に細かな時期差を判別することは難しい。そこで、まず各グループ間において耕作痕列群の重なりや切り合い関係や、耕作痕列群同士の位置関係が隣接するのか、群内の列間隔に近いのかといった点を軸に、耕作痕列群の集合を検討する。さらに、これを踏まえて、各グループ間の比較・検討をする。

なお、耕作痕列 15 ～ 17 は、列軸方位としてはWグループに属し、同グループの中であわせて検討する。また、その他の関連する遺構については上記を踏まえて適宜検討を加える。

⑴　Wグループ（耕作痕列群１～７・耕作痕列 15 ～ 17）

Wグループ内における耕作痕列群（以下、耕作痕列群を列群と略称する。）の位置関係および切り合い関係について、最初に整理しておく。

まず、グループ内の切り合い関係についてまとめる。手がかりとなるのが、１区の西半部を全体的に占める列群６である。列群６は、Wグループの多くの列群と重なる位置関係にある。これを切るものが、列群３である。そして、列群３を切るものが、列群１である。すなわち、切り合い関係として、列群６→３→１の順序が導き出せる。

次に、位置関係についてまとめる。まず、列群同士に切り合い関係はないが、位置が重なるものについては、列群間の関連性が低いものと判断できる。さらに、各列群における列同士の間隔を判断基準として、それより近接し過ぎるものや離れすぎるものも除外できる。ただし、離れる間隔が、基準となる間隔で等分できるようなものは関連性を考慮する。また、列群同士が離れているが、列の軸が同軸上に揃うような場合も、関連性の高いものとして判断する。このような判断基準を通すと、列同士の間隔の近似する列群のまとまりが抽出可能である。これを踏まえると、列群１・列群５・列群７・耕作痕列 15（以下、耕作痕列を列と略称する。）のまとまりが抽出できた。これを組合せ列群Ａと呼称する。

以上の切り合い関係と位置関係から、列群６→列群３→組合せ列群Ａという順序が判断できる。この変遷をみると、列群６のように耕作痕列が調査区の西半部全体に展開していた可能性が想定される。他のWグループの列群 2、列群 4、列 16・列 17 は位置関係の点から、まとまりの抽出や順序の特定ができなかったが、これらについても同様に、調査区西半部に広く展開していたものの一部の可能性が考えられる。

⑵　Ｅグループ（耕作痕列群８～ 14）

Ｅグループ内における列群の位置関係および切り合い関係について、最初に整理しておく。

まず、グループ内の切り合い関係については、列群 10 が列群 11 を切ることのみが確認でき、列群 11 →列群 10 の変遷が把握できる。

次に位置関係については、Wグループと同じ判断基準でみると、列群８と列群９のまとまりと、列群 10 と列群 13 のまとまりが抽出できる。前者を組合せ列群Ｂ、後者を組合せ列群Ｃと呼称する。

組合せ列群Ｂについて見ると、列群８と列群９は、１区中央部においてそれぞれ北側と南側に相対して位置する。列群８の各列南端部やもう一方の列群９の各列北端部は、それぞれほぼ揃った状態で検出されており、その各列群の揃った端部同士の間隔は約 3.4 ｍとほぼ一定の値を見せている。各列群の列間隔や、列全体が広がる幅も異なるものの、列群間端部の配置がほぼ揃う状況を見ると、明確な遺構はみられないが東西を指向する区画ラインを意識した働きが推測され、関連性が深いと考えられる。また、

列群８と列群９の耕作痕規模が他列群よりやや大きい点が共通することも、関連性の深さを伺わせる。

組合せ列群Ｃについて見ると、列群 10 と列群 13 の各列の間隔は、南側ではほぼ近い値を示す。ただ、列群同士の間隔は、各列の間隔に比して南側ではやや広くなるものの、北側に行くにつれて近似値を示しており、南側から北側にむかって列間隔が狭まる傾向にあるという点で、列群 10 と列群 13 は関連性が深いものと考えられる。

組合せ列群Ｂと組合せ列群Ｃの間には、切り合い関係はないが、位置関係の点から併存する可能性は指摘できる。しかし、鋤溝群 01 との関係の中で、その可能性は低いと推察される。詳細については後述するが、鋤溝群 01 の鋤溝１・２・３を境として、その以東と以西では鋤溝の軸方位がそれぞれの列群の軸方位と対応している。つまり、鋤溝群 01 と関連する列群は、鋤溝１・２・３によって区画されているとみられる。その中で、組合せ列群ＢはＷグループと重なり、かつ鋤溝１・２・３とも重なっており、鋤溝群 01 の示す区画のあり方に沿わない一群と考えられる。したがって、組合せ列群Ｂと組合せ列群Ｃの間には、併存的な関係性よりも時期的な差異があると判断できる。その先後関係については後述するが、Ｗグループの列群７が列群９を切ることから、組合せ列群Ｂ→組合せ列群Ｃが考えられる。

その他の列群 11・列群 12・列群 13 については、組合せ列群Ｃを含めたそれぞれと切り合い関係はないものの、部分的に重なる様相を示すが、位置関係の点と併せて考慮してもまとまりの抽出や順序の特定ができなかった。しかしながら、組合せ列群Ｃと同様に調査区東半に広く展開していたものの一部の可能性が考えられる。また、組合せ列群Ｂとの関係については、前述の点からこれらの列群が後出すると推察される。

以上の検討から、列群 11 →組合せ列群Ｃという順序が判断できる。そして、位置関係から、組合せ列群Ｂと組合せ列群Ｃを抽出したが、そこには時期的な差異があり、組合せ列群Ｂ→列群 11 →組合せ列群Ｃという変遷が想定される。

⑶　鋤溝群 01・02 の検討と位置付け

鋤溝群 01 は、１区全体に広がって検出されている。鋤溝は概ね南北方向を指向しているが、厳密には少し異なっており、軸方位は若干西に振れる。軸方位が西に振れる状況は、２区の西側で確認できた鋤溝群 02 にも共通する。ここで注目すべき点は、鋤溝群 01 の軸方位である。鋤溝群 01 は１区中央に他の鋤溝よりも長く、幅広い鋤溝１・２・３が展開する。これを境として、鋤溝の軸方位が以東と以西で異なり、以西はＮ 15°～ 16°Ｗ前後で、以東はＮ 26°～ 30°Ｗ前後を測る。鋤溝群 02 についてはＮ 14°～ 15°Ｗを測り、鋤溝１・２・３以西と同じ様相を示す。そして、鋤溝１・２・３自体はＮ 22°Ｗを測る。

このような鋤溝群の軸方位のあり方は、耕作痕列群のＷグループ・Ｅグループの軸方位にそれぞれ対応する。つまり、鋤溝群 01 は耕作痕列群との関連性が極めて高く、鋤溝１・２・３を境として耕作痕列群のＷグループ・Ｅグループが区画されている可能性が考えられる。言い換えれば、鋤溝１・２・３は南北を指向する区画ラインとして耕作痕列群を東西に分ける機能があったといえる。また、鋤溝のなかにも耕作痕列群と接した形、あるいは沿った形で検出されたものもいくつかあることから、同時に形成された可能性も考えられ、極めて関連性が深いものと想定される。

ここで、問題となるのが列群８・列群９の組み合わせ列群Ｂについてであるが、この一群はＥグループに所属しながら、唯一鋤溝１・２・３と切り合い関係は認められないものの位置的に重なる。すなわち、組み合わせ列群Ｂと鋤溝群 01 の存在の間に時期差があったと考えられる。そして、その前後関係

の根拠については次項に詳述するが、組み合わせ列群Ｂに対して鋤溝群 01 が後出する。

以上のことを踏まえると、鋤溝群は耕作痕列群と関連性が深く、鋤溝１・２・３には、耕作痕列群のＷグループと組み合わせ、列群Ｂを除いたＥグループを区切る境界としての機能が想定される。そして、鋤溝群は、耕作痕列群と同時に形成されたとみられ、鋤溝群 02 について見ると、２区では耕作痕列群が検出できなかったが本来は２区まで耕作痕列群が広がっていた可能性がある。時期については、組み合わせ列群Ｂの段階から、鋤溝群 01・02 が展開する段階へ変化したことが推察される。

⑷　ＷグループとＥグループ間について

ＷグループとＥグループの関係については、Ｗグループの列群７がＥグループの列群９の上から切り合うという事実を嚆矢として検討していく。列群９→列群７という構図から、先述した組合せ列群Ｂ→組合せ列群Ａという順序が考えられる。そして、組合せ列群Ａは後述する鋤溝群 01 の鋤溝１・２・３の以西の軸方位と共通しており、その区画的様相の範疇に収まるもの考えられる。この点について、先述した組合せ列群Ｃについても同様のものとして確認した。

これを踏まえて、組合せ列群Ｂ→組合せ列群Ａという流れを、先述した組合せ列群Ｂ→組合せ列群Ｃという変遷と併せて考えてみると、組合せ列群Ａと組合せ列群Ｃの先後関係については判断できないが、組合せ列群Ｂ→組合せ列群Ａ・Ｃという流れとなる。さらに区画について注目する。組合せ列群Ｂは、東西を指向する区画ラインを意識している可能性を先に指摘した。また、組合せ列群Ａ・Ｃは鋤溝群 01 の区画と大きく関連し、南北を指向する区画ラインとみられる鋤溝１・２・３によって東西に区分される。つまり、東西指向の区画ラインに規定された組合せ列群Ｂ→南北指向の区画ラインに規定された組合せ列群Ａ・Ｃという構図が想定される。

⑸　その他の遺構との関係

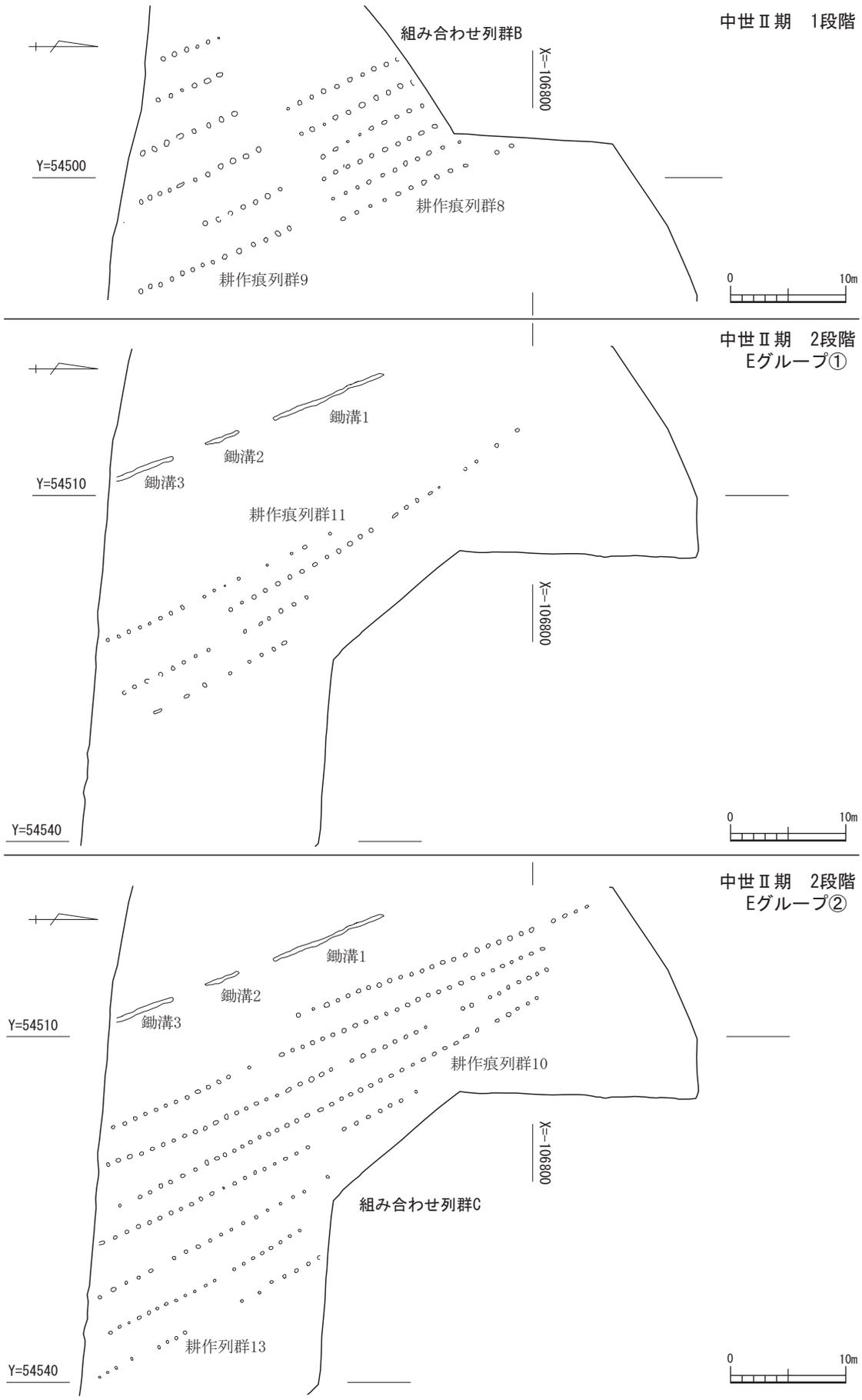
他に耕作痕列群に関連すると考えられる遺構は、Ｐ 07、ＳＫ 01・ＳＫ 02・ＳＫ 03・ＳＫ 04・ＳＫ 08・ＳＫ 09 が挙げられる。まず、Ｐ 07 についてであるが、検出状況としてはＳＤ 05 の上部に位置しており、埋土にも土壌層Ⅱが認められる。列こそなさないものの、耕作痕の一部と考えられる。

次にＳＫ 02・ＳＫ 03・ＳＫ 04 については長楕円の平面形であるが、その長軸の軸方位はＮ 28°～ 29°Ｗを測り、耕作痕列群Ｅグループの軸方位と共通しており、関連性が高いと考えられる。土取りによって形成されたとみられる。ＳＫ 01 については、平面形こそ楕円形ではなく性格も明確なことは分からないがが、所属時期として耕作痕と同時期に位置付けられ、耕作痕に関連すると考えられる。また、ＳＫ 08・ＳＫ 09 については２区において互いに接した状態で検出しているが、それぞれの断面形は逆台形を呈している。２区では列として検出できなかった耕作痕の一部の可能性がある。

⑹　耕作痕列群の順序について

以上の検討を踏まえると、中世Ⅱ期における耕作痕列群の変遷については２段階に区分でき、次の通りにまとめられる（第 139 図）。

１段階　１段階は、東西を指向する区画ラインに規定された耕作痕列群である。当段階に位置付けられるのは、Ｅグループの耕作痕列群８・9、すなわち組合せ列群Ｂである。区画ラインは、耕作痕列群８と耕作痕列群９の直線的な空閑地に伺うことができる。



第 139 図　中世Ⅱ期 1・2 段階 E グループ変遷図

２段階　２段階は、南北を指向する区画ラインに規定された耕作痕列群である。このときの区画ラインは鋤溝１・２・３が該当する。当段階に位置付けられるのは、列軸がＮ 13°～ 20°Ｗを中心とするＷグループと、Ｎ 23°～ 29°Ｗを中心とするＥグループ（組合せ列群Ｂは除く）耕作痕列群である。それぞれのグループは、耕作痕の組み合わせと切り合い関係から前後関係を知ることができる。

Ｗグループ（第 140 図）　当グループは、耕作痕列群１～７と耕作痕列 15 ～ 17 が該当する。これらの内、耕作痕の切り合い関係から、①耕作痕列群６→②耕作痕列群３→③組合せ列群Ａ（耕作痕列群１・５・7、耕作痕列 15）の順序が分かる。耕作痕列群２・4、耕作痕列 16・17 については不明である。これらの耕作痕列群に関連する遺構は、鋤溝１・２・３より西に位置する鋤溝群 01 と鋤溝群 02 である。また耕作痕列に関連性が深いとみられるのが、ＳＫ 08 とＳＫ 09 である。これについては、列として検出されなかったが、耕作痕の可能性も否定できない。

Ｅグループ（組合せ列群Ｂを除く）　当グループは、耕作痕列群 10 ～ 14 が該当する。これらの内、耕作痕の切り合い関係から、①耕作痕列群 11 →②組合せ列群Ｃ（耕作痕列群 10・13）の順序が判明する。耕作痕列群 12・14 については不明である。これらの耕作痕列群に関連する遺構は、鋤溝１・２・３以東に位置する鋤溝群 01 とである。また、これらの耕作痕列群に関連性が深いとみられる遺構は、ＳＫ 01・ＳＫ 02・ＳＫ 03・ＳＫ 04・Ｐ 07 である。

以上、耕作痕列群時期変遷についてまとめてきたが、各グループ内では変遷を確認することができた。しかしながら、第２段階のグループ間における列群については、切り合い関係が認められなかったためグループ間の前後関係や併存関係については不明である。

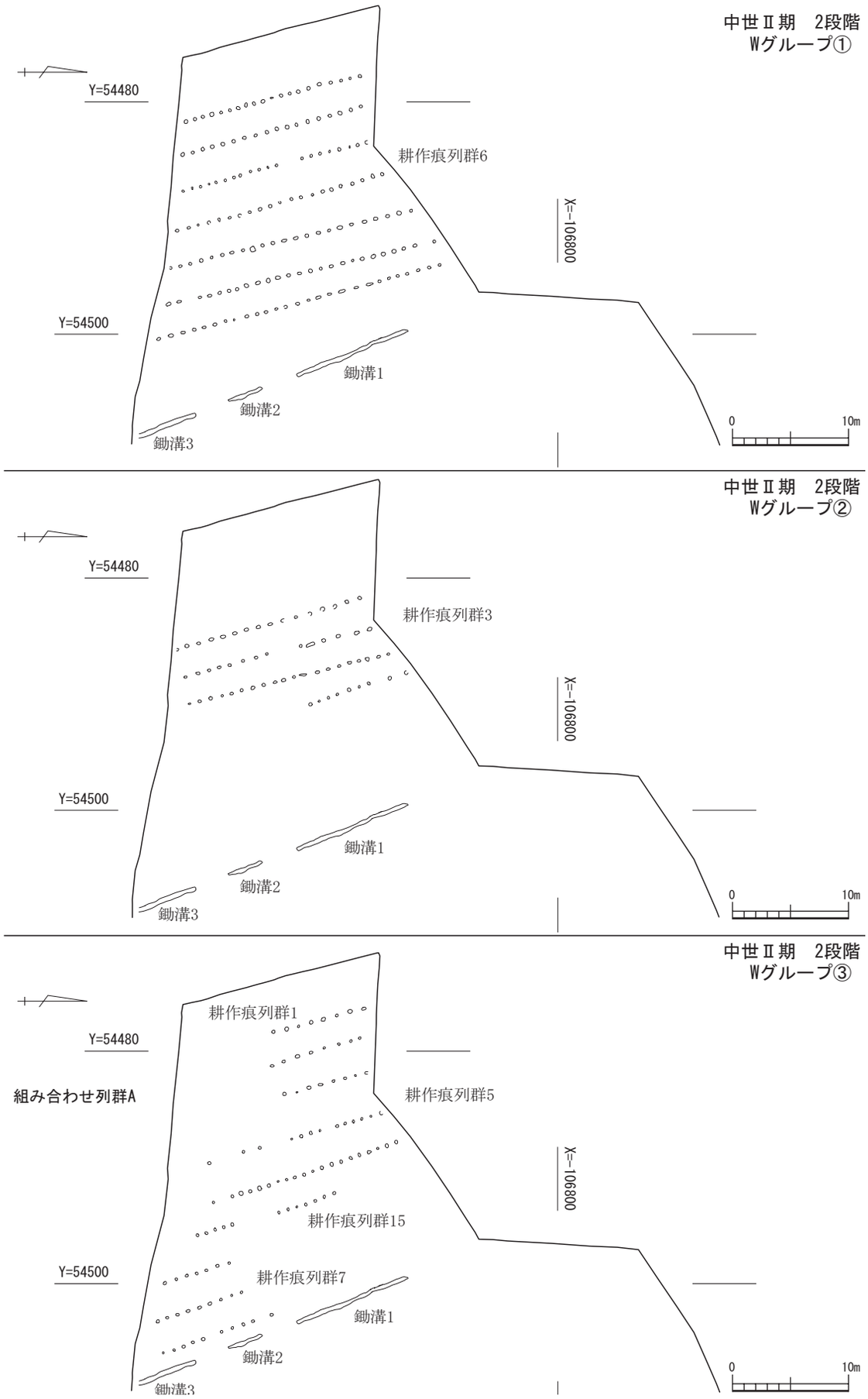
なお、１段階の組合せ列群は、中世Ⅰ期４段階の遺構との切り合い関係については、当調査区においては認められない。そして、出土遺物からの細かな時期差の断定が困難な中では、Ⅰ期４段階の遺構とⅡ期１段階の組合せ列群Ｂの明確な時期差は求められない。本報告では、あくまで検出面と埋土から判断した差によって区分している。したがって、両段階において遺構が必ずしも明確に区分できるものではなく、併存していた可能性がある。その場合、段階区分についても両段階が同一と見ることが可能であることを指摘しておく。

４．耕作痕列の検討

⑴　耕作痕の性格について

今回の調査で検出した多数の耕作痕が、規則的に並んで列をなし、またその列がほぼ同じ間隔で並んで列群をなし、さらにそれが複数時期にわたって形成されていることは、これまでに報告してきたとおりである。このような耕作痕列群のあり方は、何らかの作物の管理栽培が行われていた可能性が極めて高いことを示す。では、どのような作物の栽培が考えられるのであろうか。

今回、作物栽培の種類について明らかにするために耕作痕埋土の花粉分析を実施し、第４章にその分析結果を示した。分析の結果、全般に花粉化石の保存状態が悪く、多くの花粉化石が分解消失したものと判断されている。その保存状態の悪いなかで、ソバ属の花粉化石が耕作痕埋土から普遍的に産出していることから、栽培種のひとつであった可能性が指摘されている。確かに、ソバ属の栽培の可能性は完全に否定できない。しかし、これまでに報告してきた耕作痕列群の規模と照らし合わせると、単純に首肯しがたい。耕作痕は少なくとも直径 40cm 前後、深さは検出面からでさえ 10cm ～ 20cm 程度である。耕作痕の帰属層である土壌層Ⅱが上部からの擾乱をもし受けていなかった場合、さらに深くなる可能性



第 140 図　中世Ⅱ期 2 段階 W グループ変遷図

もある。また、耕作痕同士の間隔は約１m、耕作痕列の間隔は２m～３mである。ソバは草本類の一年草であり、栽培する場合播種深度は１cm 程度と浅く、収穫する場合も刈り取るため、今回検出したような穴が形成されるとは想像しにくい。

改めて、耕作痕が形成される要因を考えると、まず鋤などの農具によって穴を掘削することで形成された可能性がある。この場合、土の天地返しや畝間を形成といった活動の痕跡ではなく、作物の植え穴の形成が考えられる。そして、もう一つは栽培作物の収穫あるいは廃棄時における根茎の抜き取りによって形成された可能性、あるいは根の腐朽痕の可能性が考えられ、総じて根株の痕跡と言い換えることができよう。耕作痕の埋土を見ると、埋土下面には鋤による明確な耕具の痕跡は認められなかったが、埋土下部に下層のブロック土が堆積するものや、樹根状の痕跡が見えるものもある。しかしながら、埋土の痕跡からは植え穴なのか、根株の痕跡なのか、明確に判別することは困難である。いずれにせよ、これまでに耕作痕と呼称してきた小穴は、何らかの作物の根株に関連して形成された痕跡と考えられる。

ここで依然と残るのは、どのような作物が栽培されていたのかという問題である。どのような栽培植物であれば、報告してきた耕作痕のような痕跡になるのであろうか。また、耕作痕列群とこれまで呼称してきたような耕作痕同士および耕作痕列同士の配置間隔や規模が必要な栽培植物とは、どのようなものであろうか。

まず、耕作痕が根株に関連して形成されたという痕跡を前提として検討する。今回検出した耕作痕は、基本層序における土壌層Ⅱに該当し、遺構埋土あるいは、土壌層Ⅰ直下に薄い層が堆積するのみである。土壌層Ⅱは、田畑に関する土壌層Ⅰによって上部を擾乱されたために、残存度が低いとみられる。耕作痕の検出面における規模は、直径約 20cm ～ 40cm、検出面からの深さ約 10cm ～ 20cm であり、さらにこれよりも少し大きい可能性がある。このような痕跡が残る植物は、まず草本類ではなく木本類の根株であると考えられる。さらに根株の規模を考慮すると、木本類の中でもおそらく低木（灌木）である可能性がある。また、耕作痕が大規模な列と列群をなすことから、植物の栽培管理が行われていたことが分かる。

⑵　本報告における「耕作痕」の名称について

これまでに検出された多量の小穴群を、田畑を営むために土を起こす何らかの耕耘作用によって形成された遺構群という意味で耕作痕と呼称してきた。耕作という語句は、厳密には田畑を営むために土を撹拌することによって作物が生育しやすい状況をつくるということにつきるが、今回「耕作痕」について検討してきた結果､厳密には作物の栽培痕・根株痕の可能性が高いという認識を得た。しかしながら、厳密に特定できなかったため、ここでは田畑を営む際に形成された痕跡という広義的な意味の中で、あえて耕作痕と呼称しておく。

⑶　坂本・土井の畑遺跡隣接地の耕作痕列の軸方向について

坂本・土井の畑遺跡の耕作痕列および鋤溝群の軸方向については、これまでに報告してきた通り、概ね南北を指向する。これらの軸方向を現地表の地割りに見られる畔と比較すると、ほぼ同一方向を指向する。特に、鋤溝１・２・３については、現地表の南北を指向する地割りの畔とほぼ同位置で平行する。また、耕作痕列群 10・11 は、北側に向かうに従って東側の耕作痕列が西側へ緩やかに曲がり、耕作痕列

の間隔が狭くなる特徴を持つ。この列のあり方についても現地表と比較すると、地割り畔が北西方向に緩やかに曲がるあり方に近い形を示す。おそらく、調査区北側でみられた旧地形が北東側に向かって落ち込む状況と関連して地割りの畔や耕作痕列群 10・11 の北側が北西へ曲がるものと考えられる。

また、当遺跡の南東に近接する曽我井・沢田遺跡においても耕作痕列が確認されている。その軸方向は当遺跡の耕作痕とは異なり、約 90° 振る形で検出されている[1]。この軸方向について、現地表の地割りと比較すると、現地表の北側畔の方向と一致している。

このように見ていくと、現地表に残る地割りは、耕作痕列群が形成された時期に遡りえると推察され、耕作痕列群は地形に合わせて形成されたと考えられる。逆に言えば、耕作痕列が展開する中世Ⅱ期２段階において、大きく土地開発が行われ、農地として土地区画の整備が大規模に実施されたと考えられる。

⑷　耕作痕列群の類例（第 141 図）

耕作痕列群の類例は、管見の限りでは兵庫県下において２例認められる。三田市に所在する溝ノ尾遺跡（ＡＷ－ 71）と北台遺跡（ＡＷ－ 62）である。いずれの遺跡も兵庫県教育委員会が青野ダム建設に伴う発掘調査が実施されている。

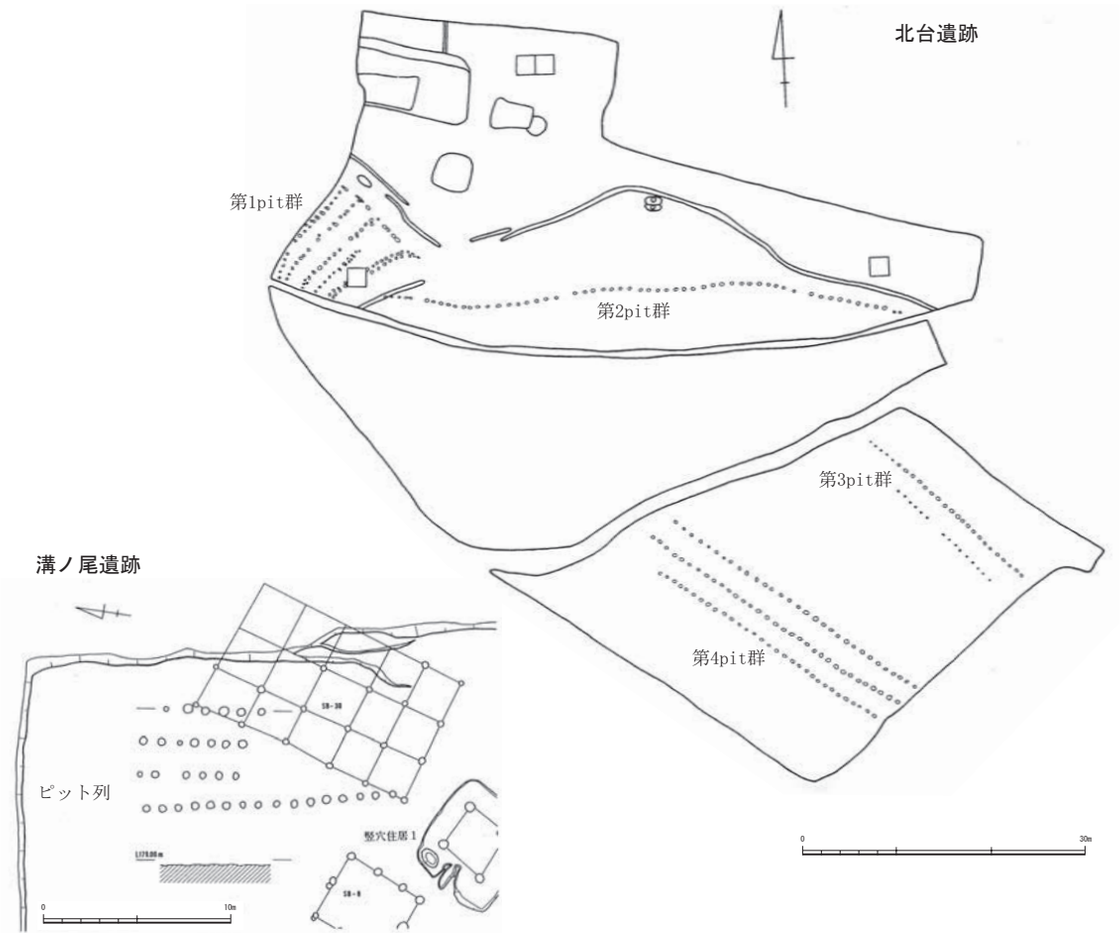
溝ノ尾遺跡は、三田市末西字溝ノ尾に所在する。この遺跡からは、南北方向（Ｎ７°Ｗ～Ｎ 11°Ｗ）へ４列に並ぶピット列が検出されている。報告文によれば、ピットは「径 40 ～ 50cm の不整円または隅丸方形」で、「深さ 10cm 以下の浅い擂り鉢状を呈して」おり、「南北のピットの間隔は 85 ～ 90cm」を測るという。平面図上で列の間隔を計測すると約 1.8 ｍになる。また、報告文ではこのピット列について「何らかの植物の苗床といった考えもあながち否定出来ない」との見解が提示されている[2]。時期については 15 世紀頃が想定されている。

北台遺跡は、三田市末西字北台・野手西に所在する。この遺跡では、一定の方向性を持って並ぶ第１～４pit 群が検出されている[3]。その中でも、今回坂本・土井の畑遺跡で検出した耕作痕列群と類似するのは第３・４pit 群である。報告文によれば、第３pit 群は「２列が北西から南東方向に延びる。北列は堀り方径 40cm 前後で、ほぼ１ｍ間隔に並ぶ。南のものは、掘り方径 25cm 前後で、約１ｍ間隔で並ぶ。」また、第４pit 群は「３列が第３pit 群と同方向に延びる。各列とも堀り方径約 40cm で、ほぼ１ｍ間隔で並ぶ」という。平面図上で列の間隔を計測すると、第３・４pit 群ともに約 2.8 ｍになる。また、報告文では。これらの pit 群について「住居及び畑地を取り囲む柵列と考えるのが最適」との見解が提示されている[4]。また、時期については中世に位置付けられている。

溝ノ尾遺跡のピット列・北台遺跡の第３・４pit 群の規模について見ると、坂本・土井の畑遺跡の耕作痕列群とほぼ同じといえる。溝ノ尾遺跡のピット列については、断面形状を見ても、坂本・土井の畑遺跡例と同様の性格が推察される。

一方、北台遺跡については、報告文では柵列との見解が示されている。断面形状が報告されておらず、確実なことはいえないものの、平面規模を重視すると、やはり坂本・土井の畑遺跡例との類似性が高く、同様の性格が考えられる。さらに、pit 群が指向する方向を見ると、pit 群が検出された調査区の現地表に残る畔と同一であることをみると、やはり土地区画に規制された何らかの農業活動の痕跡と考える方が自然である。

しかしながら、これらの類例については花粉分析など実施されていないため、より具体的な性格は不明である。今後も、このような類例を収集し、小穴群の性格について検討を深めていく必要がある。



第 141 図　耕作痕列群の類例

⑸　まとめ

以上、当遺跡の特徴ともいえる耕作痕について検討してきた。残念ながら、埋土の花粉分析からは栽培植物が明確に何であるか特定できなかった。耕作痕・耕作痕列・耕作痕列群の規模や配列から推察すると、低木の可能性が考えられた。兵庫県下においても、当遺跡のように大規模に管理栽培を示す遺構が検出された例は極めて少ない。その中においても当遺跡の歴史的に重要と考えられる。今後、当報告によって耕作痕に対する認識が広まり、類例が増加すれば、栽培植物の種類や当該期の作物栽培のあり方がさらに明らかになってゆくと期待したい。

５．坂本・土井の畑遺跡の土地利用の変遷

これまでに、検出した遺構を時代ごとに位置付けてきた。本項では、改めてその成果を整理し、当該遺跡の土地利用の変遷を提示し、まとめとする（第 28 表）。

⑴　中世以前

当該遺跡では、最も古い遺構として弥生時代中期初頭の溝３条のみが検出されている。溝はやや直線的で、人為的に作られたものと考えられる。しかしながら、溝に関連する遺構がないため、その具体的な性格については不明だが、当遺跡が集落の一部あるいはその近辺に存在していた可能性がある。なお、遺物のみであるが弥生時代前期の甕型土器が出土しており、少なくともこの時期から人間の活動がみられる。

次に遺構がみられるのが古墳時代後期である。当該期の遺構として竪穴住居跡が２棟検出されている。２棟からはＭＴ８５段階の須恵器杯身・蓋が出土しており、ほぼ同時期に存在していたことがわかり、当該遺跡が集落として機能していた可能性が考えられる。

次に見られるのが、奈良時代の遺構である。当該期の遺構としては、溝が２条検出されている。特に、ＳＤ08は、北西－南東を指向する直線的な溝で、条里に関連する溝の可能性がある。ただし、当該期に集落として機能していたかは不明だが、近接する糀屋・土井の後遺跡では、奈良時代の建物跡が２棟検出されており、少なくとも集落の一部かその近辺に存在した可能性がある。

⑵　中世以後

その後、当該遺跡で遺構が確認できるのは平安時代中期末に入ってからで、遺構の広がりは鎌倉時代にかけて連綿と続く。そこで、本報告書ではその連続性を重視して平安時代中期末から後期も含めて便宜的に中世として一括し、中世Ⅰ期とⅡ期に大きく二つの時期に区分した。

中世Ⅰ期は、11世紀前半から13世紀前半までの時期で、時代としては、平安時代中期末～鎌倉時代初め頃までに相当する。当該期は、掘立柱建物跡が展開する時期で、掘立柱建物の組み合わせから４段階に区分できる。１段階は、11世紀前半頃に、２段階は11世紀後半、３段階は11世紀末～12世紀中頃まで、４段階は12世紀末～13世紀前半に相当する。

１段階は当遺跡において掘立柱建物が現れる段階であるが、掘立柱建物間にはほとんど関連性を見いだせず、併行して存在した可能性は低い。２段階は、当遺跡においては西側に掘立柱建物が現れる時期である。そして、３段階は、南北方向を意識した掘立柱建物が複数棟展開する時期である。また、建物群の東側に建物の棟軸に近い南北を指向する溝、ＳＤ03・ＳＤ04・ＳＤ05が検出されており、何らかの区画溝の可能性もある。検出木棺墓と見られるＳＸ01は建物の集合部付近に検出されており、屋敷墓の可能性もある。この段階が中世Ⅰ期において掘立柱建物の隆盛期といえる。４段階も、３段階と同様に掘立柱建物が展開する時期である。ただし、この段階は建物の棟軸が東西指向に変化する。また、これらと関連するのがＳＤ01・10・11・13で、これらの東西方向に直線的に延びる溝で、これについてもこの段階の区画溝とみられる。

中世Ⅰ期の当該遺跡は、居住域として機能していたことがわかり、特に３・４段階において活発な展開が認められる。同時期の建物は、北西に近接する糀屋・土井の後遺跡において５棟の建物跡が検出されている。緑釉陶器・灰釉陶器・白磁等の出土遺物から一般集落を構成するものではなく、在地荘園領主の居地として推定されている[5]。坂本・土井の畑遺跡からも緑釉陶器や白磁が出土していることから、坂本・土井の畑遺跡と関連性の高さが伺え、同様の居地あるいはそれに関連する建物群であったと推測される。

中世Ⅱ期は、13世紀中頃～後半までの時期で、時代としては鎌倉時代に相当する。当該期には、掘立柱建物が見られなくなって耕作痕が広く展開する時期で、大きく２段階に区分できる。１段階は、耕作痕列群８・９の組合せ列群Ｂが調査区中央部に出現する段階である。東西指向の区画ラインによって規定される。そして、２段階は、耕作痕列群が南北指向の区画ラインによって東西に区分される段階である。この段階では、複数の耕作痕列群が認められ、幾度にわたる作物栽培が行われたことがわかる。特にこの段階の南北区画ラインは調査前の現地表においても確認でき、現代の畦の位置とほぼ符合する。また、列群10に見られた耕作痕列の間隔が狭くなって西側へ偏っていく状況が、現地表の北側の畦のラインが地形の変化に沿って北西側へ弧を描いて曲がっていく形に合致する。これらのことは当地域の地割区画

がこの時期まで遡ることができることを示唆する。

１段階の耕作痕列群は、局所的な広がりが確認できたが、２段階においては１区全体での広がりがみられ、２区の鋤溝群 02 を合わせると、調査区の大半に展開していたことがわかる。中世Ⅱ期の当該遺跡は、農地として利用されており、耕作痕は規則的な配置をみせ、調査区全体に広がることからも、大規模に作物を生産していたとみられる。

中世Ⅰ期の居住域から、Ⅱ期への農地への利用という生産域への大きな転換があった時期は、ちょうど平安時代から鎌倉時代への移行期に相当する。当地域の土地利用の変遷の歴史的背景について明らかにしていく上で、興味深い成果といえる。また、全国的にみても当遺跡のあり方は、当該期の土地利用の歴史を考える上でも重要な成果であると考えられる。

〔註〕

⑴　安平勝利 2013『曽我井・沢田遺跡Ⅱ～（国）427 号（曽我井バイパス２期）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査～』多可町文化財報告 20　多可町教育委員会

⑵　兵庫県教育委員会　1988「溝ノ尾遺跡（ＡＷ－ 71)」『青野ダムに伴う発掘調査報告書（２）―本文編―』兵庫県文化財調査報告書第 62 冊　兵庫県教育委員会

⑶　兵庫県教育委員会　1988「北台遺跡（ＡＷ－ 62)」『青野ダムに伴う発掘調査報告書（２）―本文編―』兵庫県文化財調査報告書第 62 冊　兵庫県教育委員会

⑷　前掲註４と同じ

⑸　中町教育委員会『糀屋・土井の後遺跡―ウェルマート建設に関わる文化財発掘調査―』中町文化財報告 14　1997

第 28 表　時期別遺構一覧

時期		竪穴住居	掘立柱建物	耕作痕列		鋤溝	小穴・柱穴	溝	土坑	墓
				Ｗグループ	Ｅグループ					
弥生時代中期								ＳＤ 06 ＳＤ 09 ＳＤ 12	ＳＫ 07	
古墳時代後期		ＳＨ 01 ＳＨ 02								
奈良時代							Ｐ 12	ＳＤ 07 ＳＤ 08	ＳＫ 10	
中世Ⅰ期	１段階		ＳＢ 07 ＳＢ 08 ＳＢ 10 ＳＢ 11							
	２段階		ＳＢ 14 ＳＢ 16 ＳＢ 18				Ｐ 08 Ｐ 09 Ｐ 11 Ｐ 15			
	３段階		ＳＢ 01 ＳＢ 02 ＳＢ 03 ＳＢ 06 ＳＢ 09 ＳＢ 19				Ｐ 13 Ｐ 16 Ｐ 18	ＳＤ 03 ＳＤ 04 ＳＤ 05	ＳＫ 05 ＳＫ 06	ＳＸ 01
	４段階		ＳＢ 04 ＳＢ 05 ＳＢ 12 ＳＢ 13 ＳＢ 15 ＳＢ 17				Ｐ 01 Ｐ 03 Ｐ 04 Ｐ 05 Ｐ 06 Ｐ 10 Ｐ 14 Ｐ 17	ＳＤ 01 ＳＤ 02 ＳＤ 10 ＳＤ 11 ＳＤ 13 ＳＤ 14	ＳＫ 11 ＳＫ 12 ＳＫ 13 ＳＫ 14 ＳＫ 15 ＳＫ 16 ＳＫ 17	
中世Ⅱ期	１段階				耕作痕列群 8 耕作痕列群 9					
	２段階			① 耕作痕列群 6	① 耕作痕列群 11	鋤溝群 01 鋤溝群 02	Ｐ 02 Ｐ 07		ＳＫ 01 ＳＫ 02 ＳＫ 03 ＳＫ 04 ＳＫ 08 ＳＫ 09	
				② 耕作痕列群 3	② 耕作痕列群 10 耕作痕列群 13					
				③ 耕作痕列群 1 耕作痕列群 5 耕作痕列群 7						
				不明 耕作痕列群 2 耕作痕列群 4 耕作痕列 15 耕作痕列 16 耕作痕列 17	不明 耕作痕列群 12 耕作痕列群 14					

第７章　総括

最後に、調査成果等を箇条書きにし、本報告のまとめとしたい。

１．坂本・土井の畑遺跡は、多可郡多可町中区坂本に所在する遺跡である。

２．一級河川加古川の支流である杉原川の中流域に位置し、その右岸の沖積低地に立地する。また、微地形分析によると、調査地は微高地の縁辺部付近にあたる。また、検出遺構の時期から、微高地の大半は完新世段丘Ⅰ面に、東端部（３区）は完新世段丘Ⅱ面に立地するものと考えられる。

３．調査は、（国）427 号　（曽我井バイパス）地域自主戦略交付金事業に伴うもので、１区から５区にわけて実施した。

４．調査は、黒ボク層の第１面と第２面の２面で遺構を検出した。この結果、第１面では、平安時代後期を中心とした遺構、第２面では弥生時代中期初頭・古墳時代・奈良時代～平安時代の遺構・遺物を検出している。

５．第１面で検出した以降は、耕作痕列群を主体とした遺構群である。40cm 大の小穴が列をなすもので、数列からなる耕作痕列群を 14 単位確認した。小穴内を中心に土壌中の花粉分析を行ったが、残念ながら作物を特定する試料を得ることはできなかった。

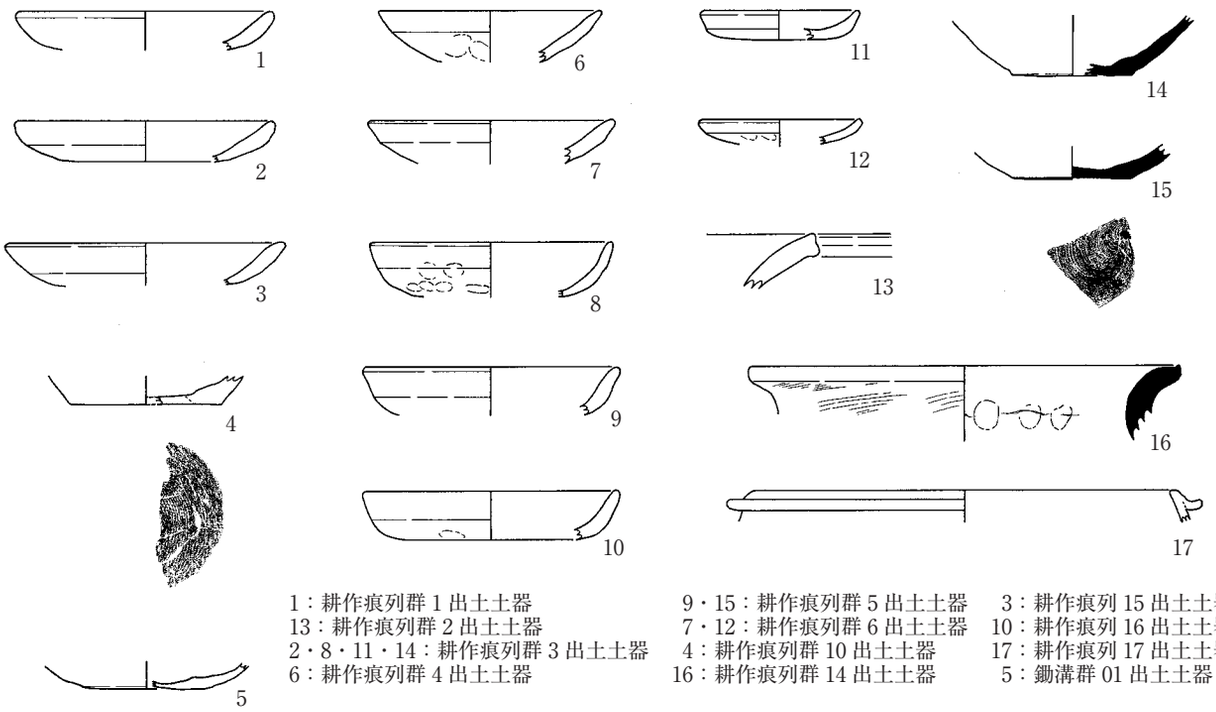
　なお、作物の候補として楮が考えられ、杉原紙研究所（多可町加美区）に検出後の小穴を実見していただいた。しかし、楮の根株は横方向に広がる傾向があることから、その可能性には否定的であるとの意見をいただいている。

６．第２面で検出した遺構は、弥生時代中期初頭の溝状遺構、古墳時代後期の住居跡、平安時代後期の掘立柱建物群・木棺墓・土坑・溝状遺構等である。なかでも、弥生時代中期初頭の遺構・遺物については、多可町内では初例にちかい資料である。当地における弥生文化の流入を検討する上で、貴重な成果といえるものである。

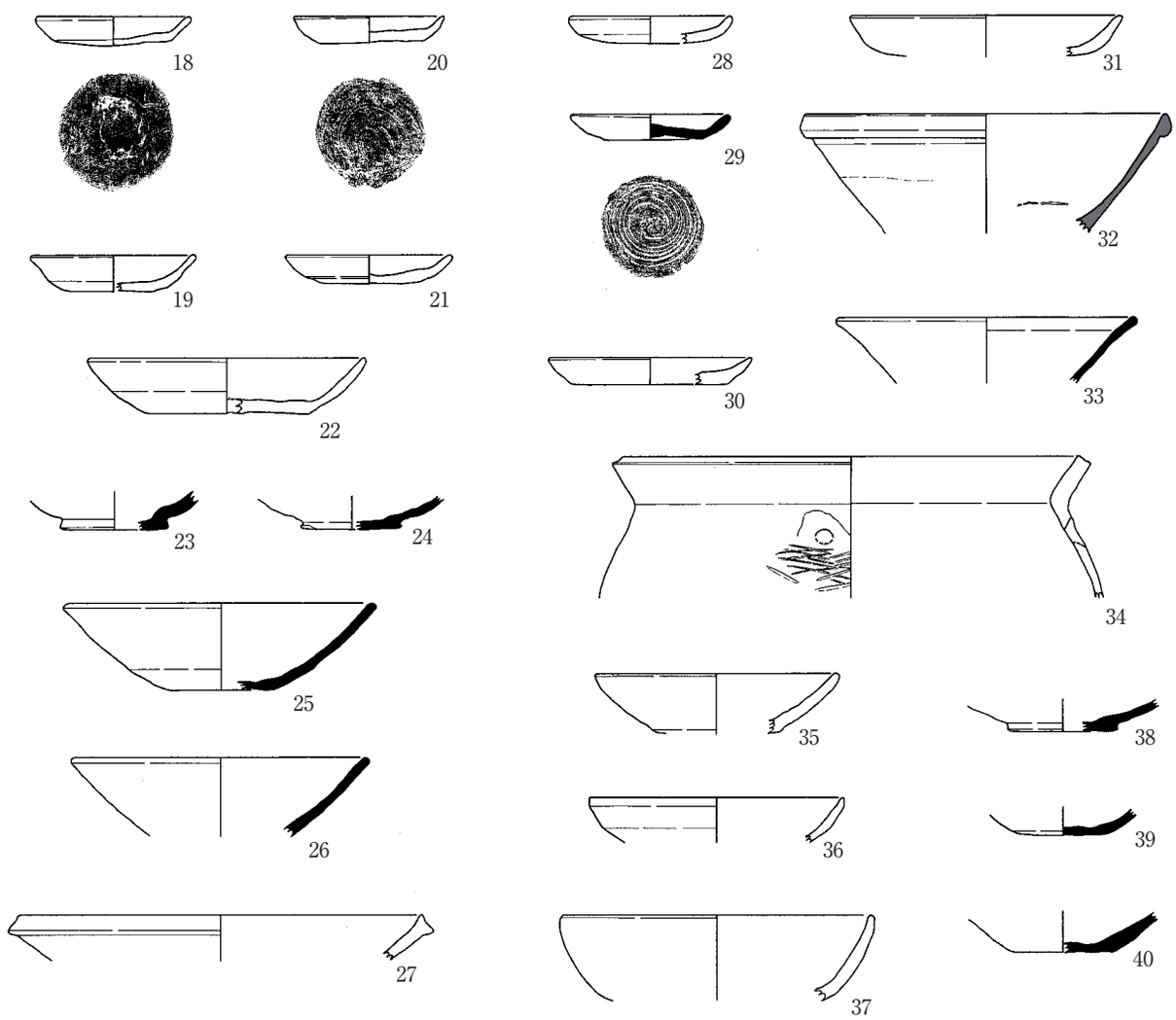
７．以上の調査成果から、当地は弥生時代中期初頭以来、平安時代後期にかけて居住地として利用されていた。その後、鎌倉時代以降、耕作痕列群に代表されるように、畠地化されたことが明らかとなった。特に、耕作痕列群埋没後の層中の花粉の大半がソバであることは注目される成果である。本遺跡が所在する坂本地区の字名「土井の畑」と地名の由来ともかかわるものと考えられる。

図　　版

図版 1

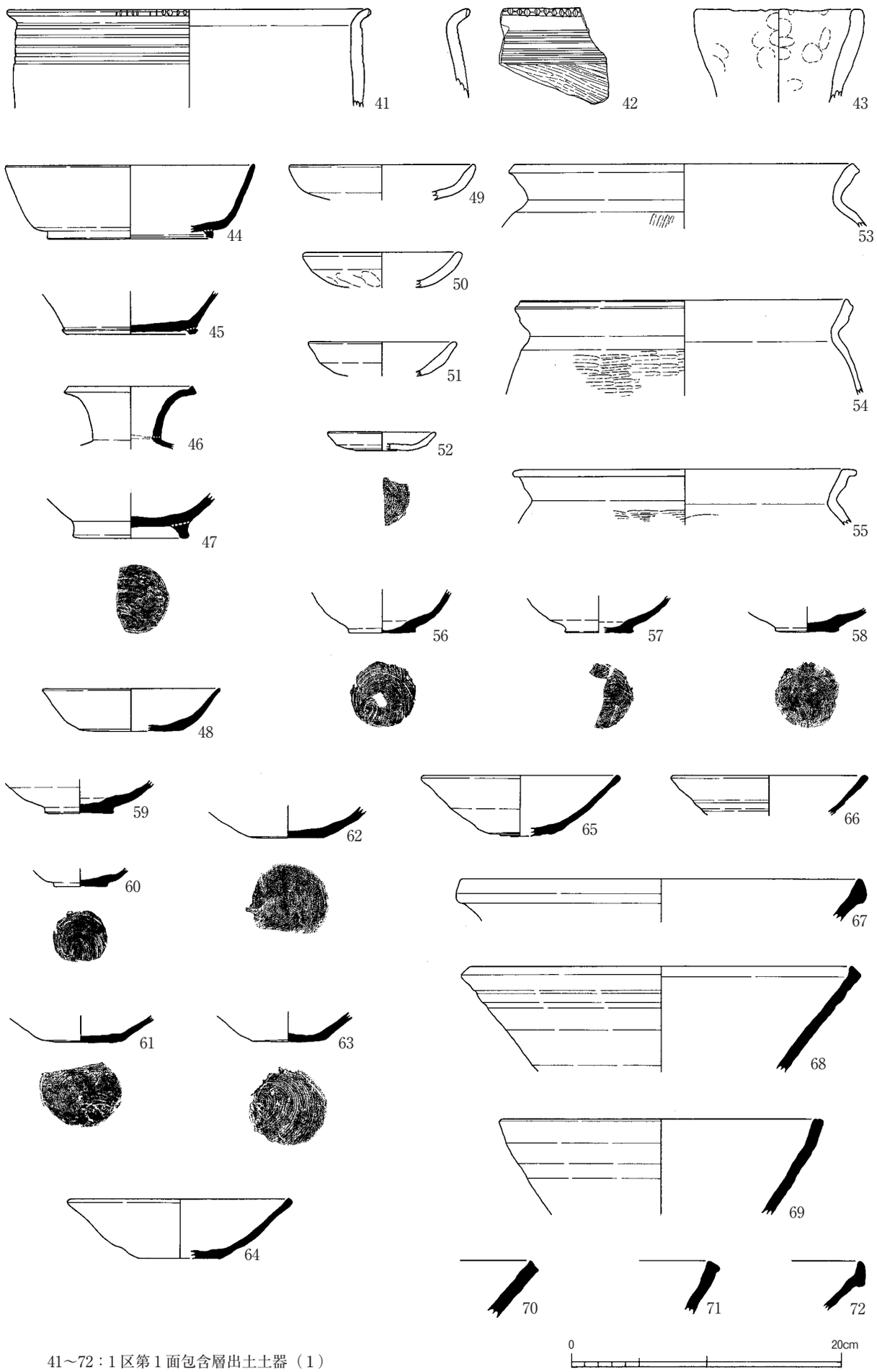


1：耕作痕列群 1 出土土器
13：耕作痕列群 2 出土土器
2・8・11・14：耕作痕列群 3 出土土器
6：耕作痕列群 4 出土土器
9・15：耕作痕列群 5 出土土器
7・12：耕作痕列群 6 出土土器
4：耕作痕列群 10 出土土器
16：耕作痕列群 14 出土土器
3：耕作痕列 15 出土土器
10：耕作痕列 16 出土土器
17：耕作痕列 17 出土土器
5：鋤溝群 01 出土土器



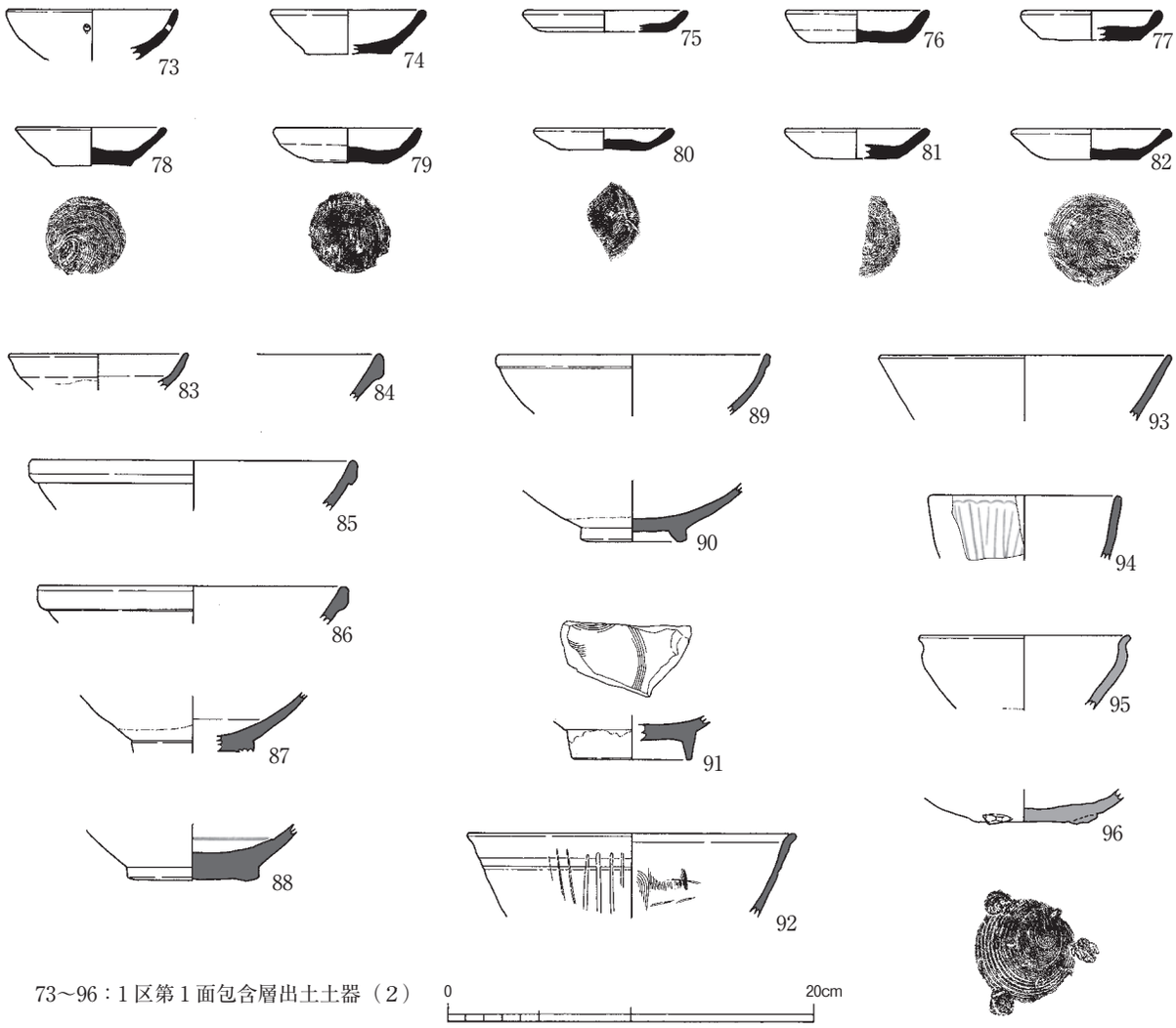
18～27：柱穴出土土器
28～32：SD01 出土土器
33・34：SD02 出土土器
38・39：SK01 出土土器
36：SK02 出土土器
40：SK03 出土土器
37：SK04 出土土器
35：SK05 出土土器

0 20cm

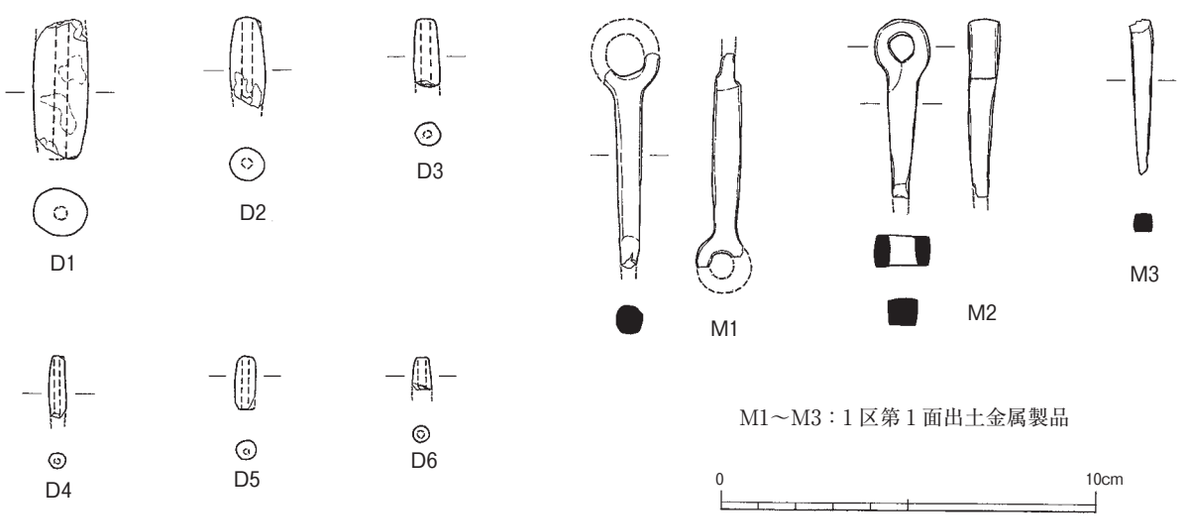


41～72：1区第1面包含層出土土器（1）

図版 3

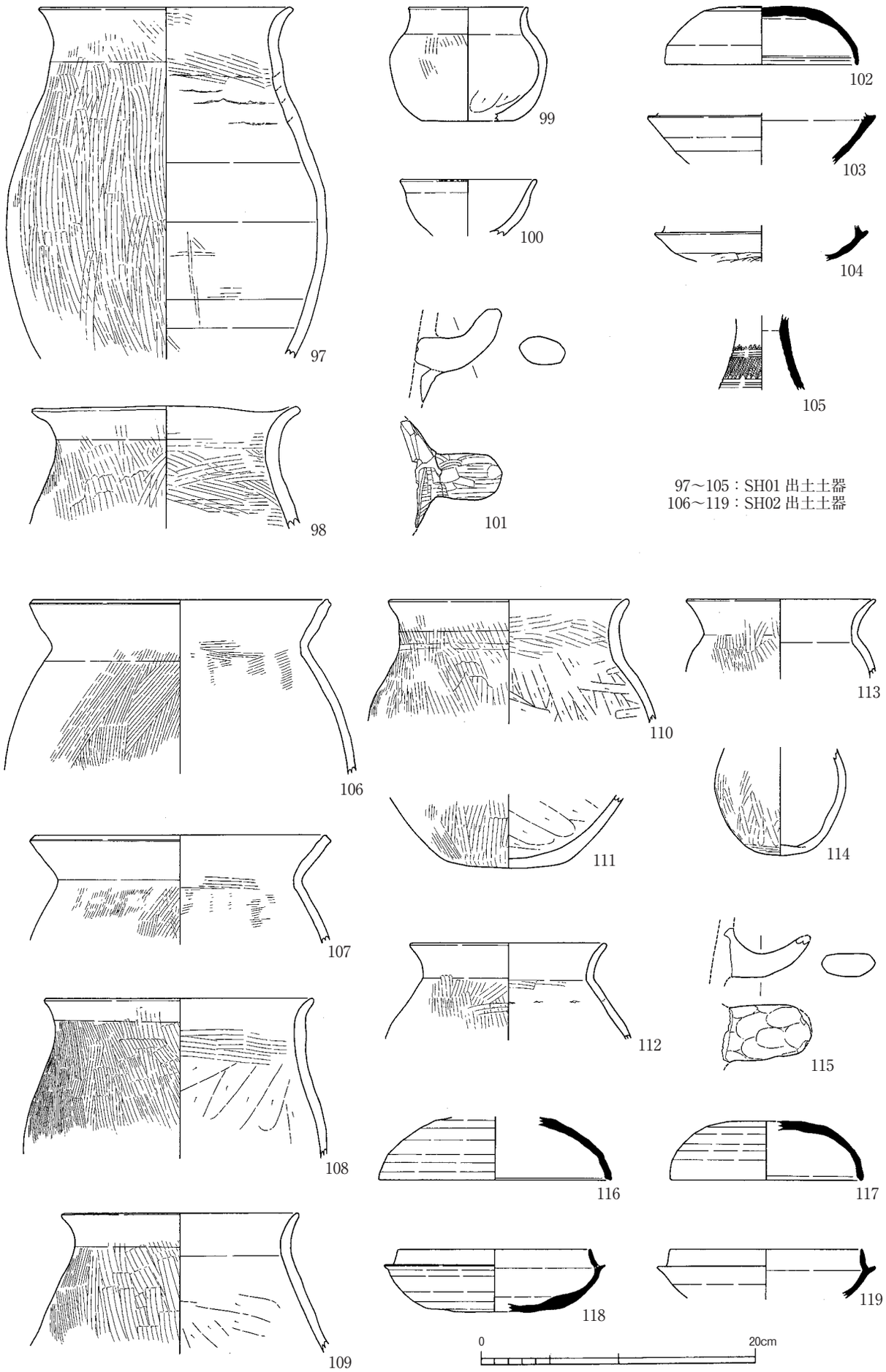


73～96：1 区第 1 面包含層出土土器（2）



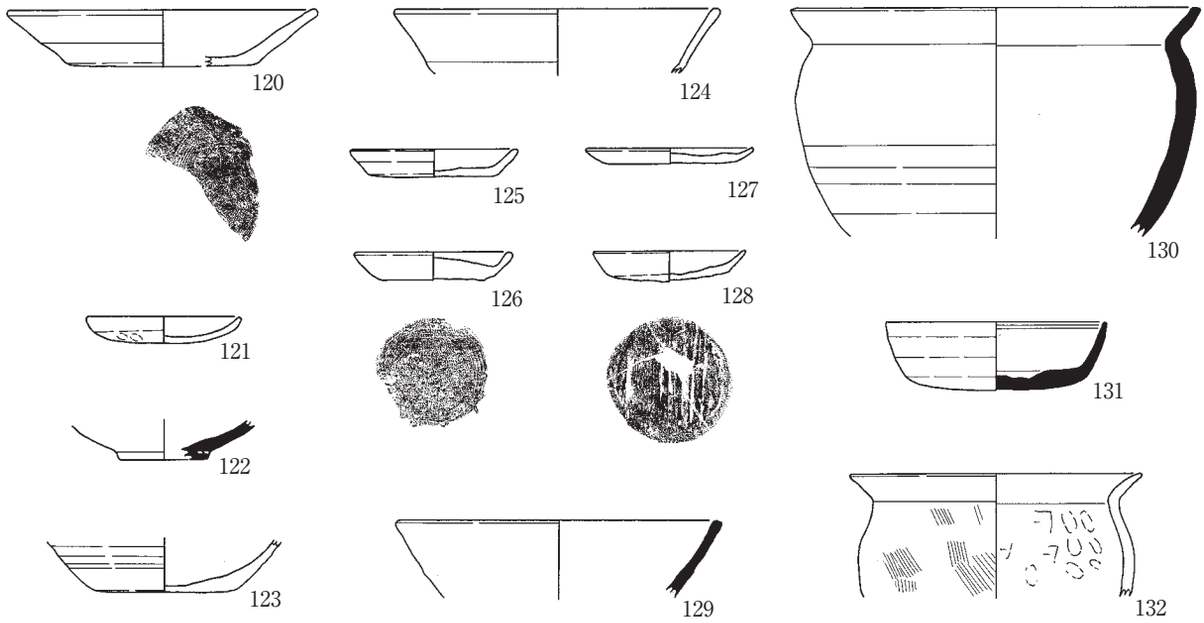
M1～M3：1 区第 1 面出土金属製品

D1・D2・D4～D6：1 区第 1 面包含層出土土製品
D3：SD01 出土土製品

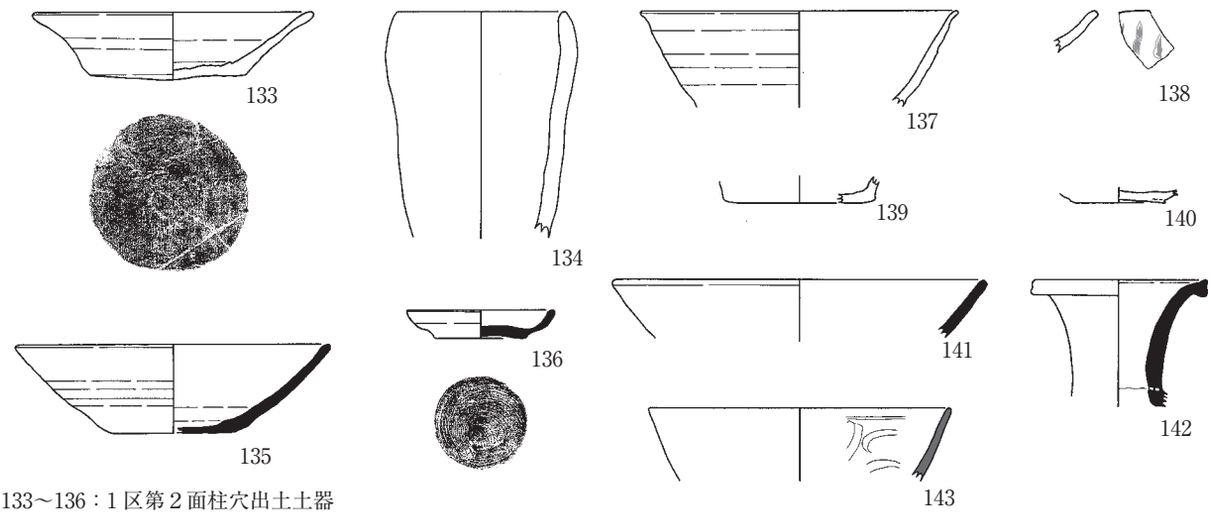


97～105：SH01 出土土器
106～119：SH02 出土土器

図版 5

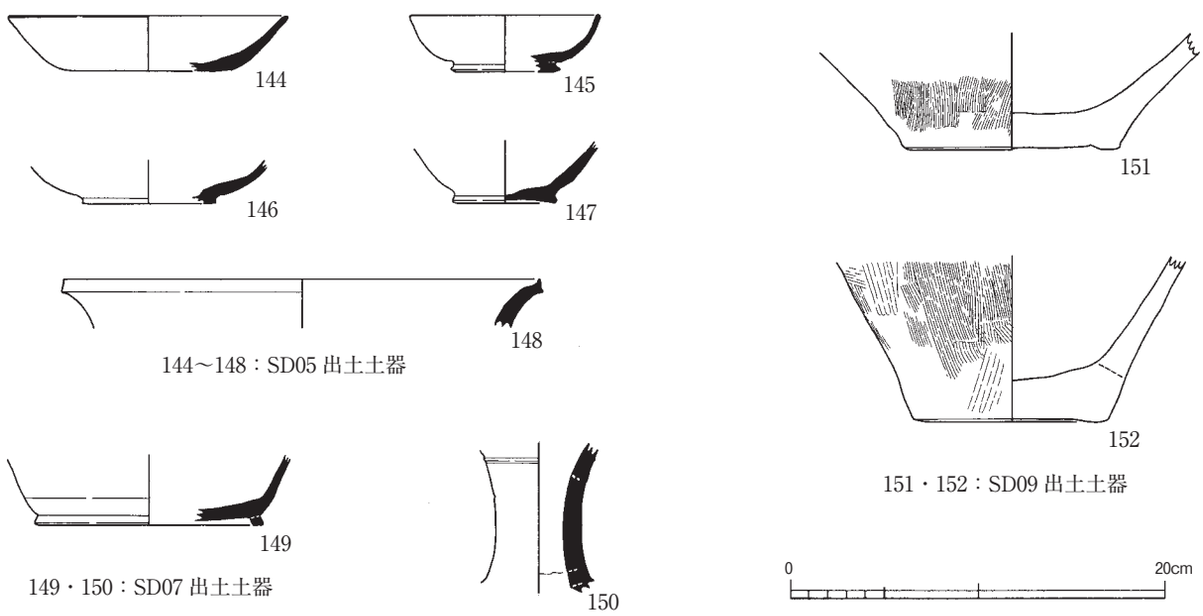


120～122：SB05 出土土器　　123～129：SB09 出土土器　　130～132：SB10 出土土器



133～136：1 区第 2 面柱穴出土土器

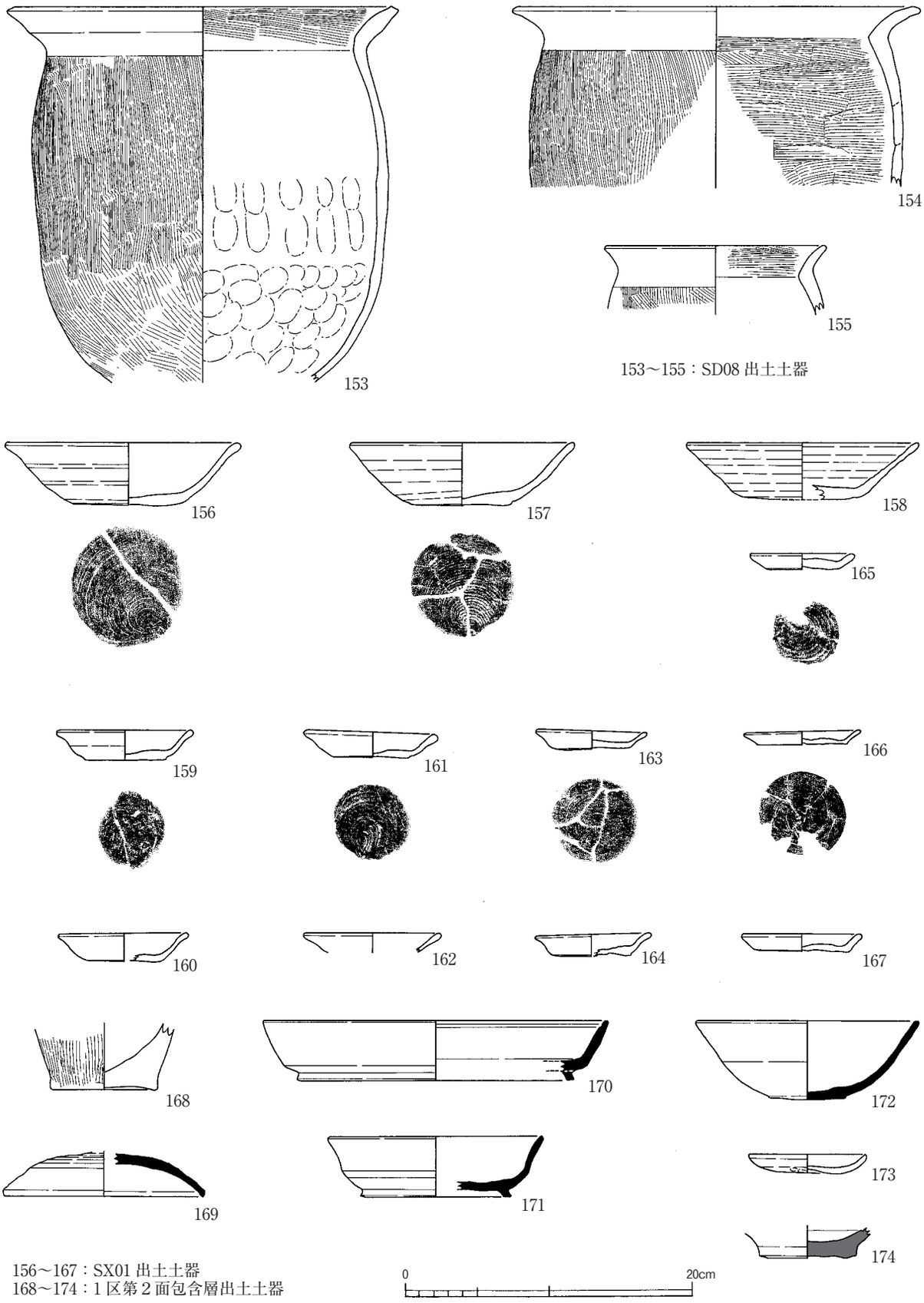
137～143：SD03 出土土器



144～148：SD05 出土土器

151・152：SD09 出土土器

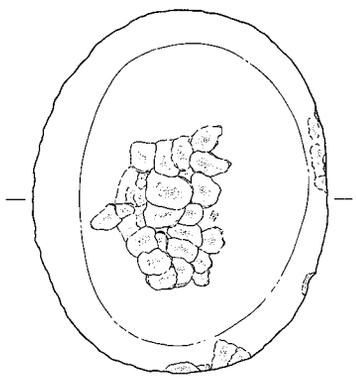
149・150：SD07 出土土器



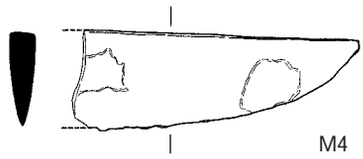
153～155：SD08 出土土器

156～167：SX01 出土土器
168～174：1 区第 2 面包含層出土土器

図版 7



S1

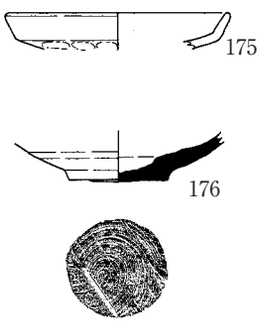


M4

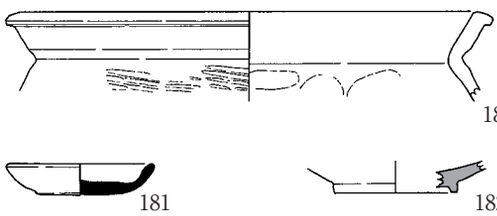
M5

S1：SH02 出土石製品
M4：P13 出土金属製品
M5：SB12 出土金属製品

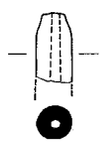
0 10cm



175 176 177 178 179



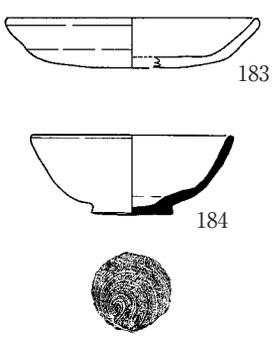
180 181 182



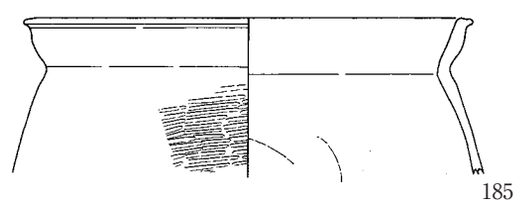
D7

175・176：2 区第 1 面柱穴出土土器
177～179：SD10 出土土器
180～182：2 区第 1 面包含層出土土器
D7・D8：2 区第 1 面出土土製品

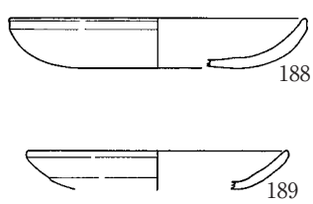
D8



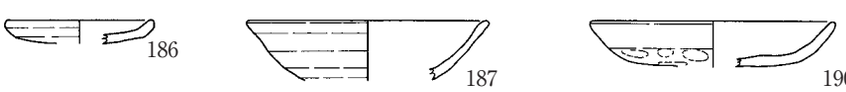
183 184



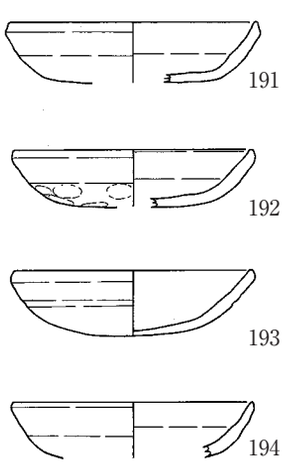
185



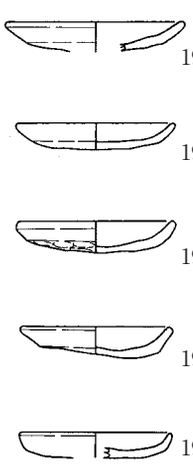
188 189



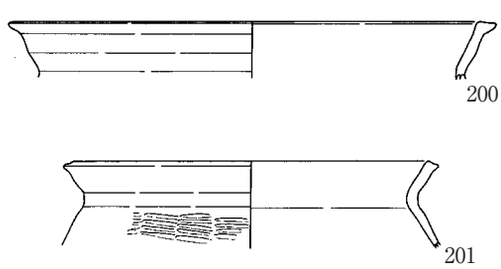
186 187 190



191 192 193 194



195 196 197 198 199

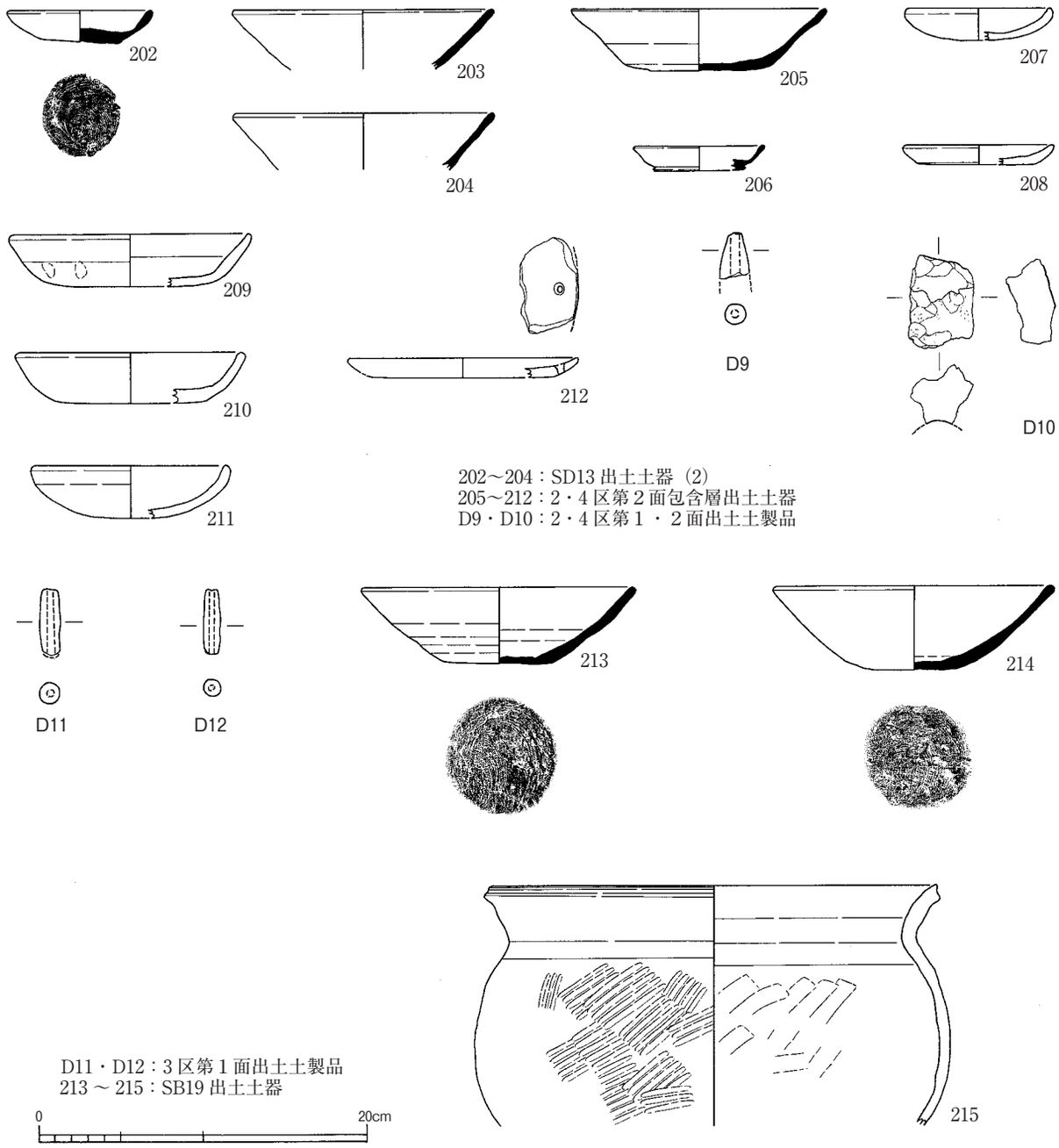


200

201

183：SB13 出土土器
184：SB14 出土土器
185～187：2・4 区第 2 面柱穴出土土器
188～201：SD13 出土土器（1）

0 20cm



202～204：SD13 出土土器（2）
205～212：2・4 区第 2 面包含層出土土器
D9・D10：2・4 区第 1 ・ 2 面出土土製品

D11・D12：3 区第 1 面出土土製品
213 ～ 215：SB19 出土土器

出土土器観察表１

№.	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
1	１区	第１面	耕作痕列群1-P2	土師器	皿	(13.3)	(2.1)	—			口縁部 1/8 底部わずか	
2	１区	第１面	耕作痕列群3-P6	土師器	皿	(13.5)	2.2	—			口縁部～底部 1/8	
3	１区	第１面	耕作痕列15-P1	土師器	皿	(14.5)	2.3	—			口縁部～底部 1/10	
4	１区	第１面	耕作痕列群10-P2	土師器	皿	—	—	(8.0)			体部わずか 底部 1/3	
5	１区	第１面	鋤溝群1-鋤溝4	土師器	皿	—	—	(7.0)			体部～底部 1/5	良
6	１区	第１面	耕作痕列群4-P1	土師器	皿	(11.7)	(2.7)	—			口縁部～底部 1/10	
7	１区	第１面	耕作痕列群6-P4	土師器	皿	(12.7)	(2.3)				口縁部～底部 1/5	
8	１区	第１面	耕作痕列群3-P7	土師器	皿	(12.7)	(2.9)	—			口縁部～底部 1/4	良
9	１区	第１面	耕作痕列群5-P2	土師器	皿	(13.4)	(2.5)	—			口縁部～体部わずか	
10	１区	第１面	耕作痕列16-P1	土師器	皿	(13.5)	2.6	—			口縁部～底部 1/10	
11	１区	第１面	耕作痕列群3-P5	土師器	小皿	(8.1)	1.6				口縁部わずか 底部 1/4	
12	１区	第１面	耕作痕列群6-P2	土師器	小皿	(8.4)	(1.3)				口縁部～底部 1/6	
13	１区	第１面	耕作痕列群2-P1	土師器	鍋	—	(2.85)	—			口縁部わずか	
14	１区	第１面	耕作痕列群3-P2	須恵器	椀	—	—	(6.5)			体部～底部 1/4	良
15	１区	第１面	耕作痕列群5-P1	須恵器	椀	—	—	(6.4)			体部～底部 1/5	良
16	１区	第１面	耕作痕列群14-P1	須恵器	甕	(23.0)	—	—			口縁部～頸部わずか	良
17	１区	第１面	耕作痕列17-P1	土師器	羽釜	(22.4)	—			最大径 (25.4)	口縁部 1/12	
18	１区	第１面	P03	土師器	小皿	8.3	1.6	6.3			口縁部 2/3 体部～底部 完存	
19	１区	第１面	P05	土師器	小皿	(8.8)	2.0	(4.4)			口縁部～底部 1/2	良

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
にぶい橙	1㎜大の長石極微量に含む　赤色粒子含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ		1	35
灰白	1㎜以下のチャート･長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ		1	35
にぶい黄橙	0.1㎜以下の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ		1	35
灰白	1㎜以下の石英・長石微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		1	35
にぶい黄褐～灰黄褐	0.3㎜以下の石英・赤色粒微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：体部ロクロナデ・底部中央ふくらみを撫で潰す		1	35
橙	1㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：口縁部ヨコナデ・体部～底部ユビオサエ 内面：体部～口縁部ヨコナデ		1	35
にぶい橙	1㎜以下の長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ		1	35
橙	0.5㎜以下の石英・長石極微量に含む比較的細かい	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビ押さえ後ナデ 内面：底部～口縁部ヨコナデ		1	37
灰白	0.1㎜以下の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ		1	35
浅黄橙	4㎜以下の長石・極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ		1	35
にぶい橙	0.1㎜大の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：底部～口縁部ヨコナデ		1	35
橙	0.5㎜大の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：底部～口縁部ヨコナデ	やや歪みあり	1	35
にぶい黄橙	1～3㎜大の石英・長石･チャート多量に含む	外面：口縁部ヨコナデ・口縁端部わずかにつまみ出し 内面：口縁部ヨコナデ		1	36
灰	0.3 ～ 03㎜大の石英･長石・チャート微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ後底部ナデ		1	36
灰	1㎜以下の石英・長石･チャート微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ・底部中央ユビオサエ		1	36
灰～暗灰	1㎜以下の石英・チャート微量に含む	外面：頸部平行目タタキ後ナデ・口縁部ヨコナデ 内面：頸部ユビオサエ・口縁部ヨコナデ		1	36
にぶい赤褐	0.5㎜大の石英・長石微量に含む	外面：口縁部～鍔部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	鍔部下部煤付着･三足羽釜か	1	36
にぶい橙	2㎜以下の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ後底部不定ナデ		1	37
にぶい橙	0.1㎜大の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：体部～口縁部ヨコナデ		1	37

出土土器観察表 2

No.	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
20	1 区	第 1 面	P06	土師器	小皿	8.2	1.5	5.6			ほぼ完存	良
21	1 区	第 1 面	P06	土師器	小皿	(8.9)	1.55	5.4			口縁部 1/8 体部～底部 1/2	良
22	1 区	第 1 面	P03	土師器	皿	(15.0)	3.1	(9.1)			口縁部～体部 わずか 底部 1/3	
23	1 区	第 1 面	P08	須恵器	椀	—	—	(5.9)			体部～底部 わずか	良
24	1 区	第 1 面	P09	須恵器	椀	—	—	(5.5)			体部～底部 1/2	良
25	1 区	第 1 面	P02	須恵器	椀	(16.6)	4.7	(6.0)			口縁部～底部 1/6	やや 不良
26	1 区	第 1 面	P04	須恵器	椀	(15.9)	—	—	—		口縁部～体部 1/5	良
27	1 区	第 1 面	P01	土師器	鍋	(22.0)	—	—			口縁部わずか	
28	1 区	第 1 面	SD01	土師器	小皿	(8.8)	1.5	(4.5)			口縁部～底部 1/4	良
29	1 区	第 1 面	SD01	須恵器	小皿	8.45	1.4	5.5			完存	良
30	1 区	第 1 面	SD01	土師器	皿	(11.0)	1.5	(8.6)			口縁部～底部 1/4	良
31	1 区	第 1 面	SD01	土師器	皿	(14.6)	2.2	(12.3)			口縁部～底部 1/4	良
32	1 区	第 1 面	SD01	白磁	碗	(19.6)	—	—			口縁部～体部 わずか	良
33	1 区	第 1 面	SD02	須恵器	椀	(16.2)	—	—			口縁部～体部 1/9	良
34	1 区	第 1 面	SD02	土師器	鍋	(24.8)	—	—	(23.8)		口縁部～体部 2/5	良
35	1 区	第 1 面	SK05	土師器	皿	(13.0)	(3.3)	(7.2)			口縁部～体部 1/9 底部 1/6	良
36	1 区	第 1 面	SK02	土師器	皿	13.9	—	—			口縁部～底部 わずか	良
37	1 区	第 1 面	SK04	土師器	椀	(17.0)	—	—			口縁部～体部 わずか	良
38	1 区	第 1 面	SK01	須恵器	椀	—	—	(6.0)			体部～底部 1/6	やや 不良

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
橙	5㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		1	37
橙	2㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ		1	37
橙	2㎜以下の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ後底部ナデ	底部粘土円盤づくり	1	38
灰白	1㎜以下の長石含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ	粘土円柱挽き出し	1	38
灰	0.5㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		1	38
黄灰	4㎜以下の石英・長石・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		1	37
灰白～灰	1.5㎜以下の石英・長石・チャート微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		1	38
にぶい黄橙	2㎜大の石英・長石・チャート少量に含む	外面：口縁部ヨコナデ・口縁端部わずかにつまみ出し 内面：口縁部ヨコナデ		1	38
浅黄橙	1㎜以下の長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ 内面：底部～口縁部ヨコナデ		1	39
灰白	1㎜大の長石･チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		1	37
浅黄橙	1㎜以下の長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：底部～口縁部ヨコナデ		1	39
にぶい黄橙	1㎜以下の長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：底部～口縁部ヨコナデ		1	39
灰オリーブ	φ 2㎜以下砂粒極微量に含む	外面：体部上半～口縁部施釉・体部下半露胎、ロクロナデ 内面：体部～口縁部施釉	体部内面下半に輪状沈線あり	1	39
灰白	1㎜以下の長石・黒色粒少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		1	39
にぶい黄橙～灰黄褐	2㎜以下の石英・長石･チャート多量に含む	外面：体部タタキ（平行目）・口縁部～頸部ヨコナデ 内面：体部ナデ・頸部～口縁部ヨコナデ	体部に焼成後の穿孔（φ1.8cm）有り･外面煤付着	1	37
橙	0.5㎜大の石英・赤色粒極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部糸切り 内面：体部～口縁部ロクロナデ		1	40
橙～にぶい黄橙	1㎜以下の長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・口縁端部上方につまみ出す・底部摩滅 内面：体部～口縁部ヨコナデ		1	40
浅黄橙	2㎜以下の長石・石英微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		1	40
灰～灰褐	1㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部静止糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		1	40

出土土器観察表 3

№	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
39	1 区	第 1 面	SK01	須恵器	椀	—	—	5.65			体部わずか 底部ほぼ完存	やや不良
40	1 区	第 1 面	SK03	須恵器	椀	—	—	5.4			体部～底部 1/2	良
41	1 区	第 1 面	包含層	弥生土器	甕	(26.5)	残 7.2	—	(25.5)	腹径 (26.0)	口縁部 1/12	普通
42	1 区	第 1 面	包含層	弥生土器	甕	—	残 6.5	—			口縁部～体部 わずか	
43	1 区	第 1 面	包含層	製塩土器	—	(12.0)	—	—			口縁部～体部 1/7	良
44	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	杯 B	(18.3)	5.4	(12.2)			口縁部～体部 わずか 高台部 1/6	普通
45	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	杯 B	—	—	(10.0)			体部～底部 1/5	普通
46	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	壺 L	9.25	4.6 (頸高)	—	5.1		口縁部～頸部 3/4	良
47	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	—	残 3.3	(8.5)			体部わずか 底部 2/3	良
48	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	杯 A	(13.1)	3.15	(7.8)			口縁部～体部 1/4 底部 1/3	良
49	1 区	第 1 面	包含層	土師器	皿	(13.5)	(2.6)	—			口縁部～体部 1/4 底部ごくわずか	やや不良
50	1 区	第 1 面	包含層	土師器	皿	(11.3)	(2.5)	—			口縁部～底部 1/6	
51	1 区	第 1 面	包含層	土師器	皿	(10.55)	(2.5)	—			口縁部～体部 1/9 底部わずか	
52	1 区	第 1 面	包含層	土師器	小皿	(7.9)	1.4	(5.5)			口縁部～体部 1/4 底部 1/2	普通
53	1 区	第 1 面	包含層	土師器	鍋	(25.0)	—	—	(23.2)		口縁部～頸部 1/10 体部わずか	
54	1 区	第 1 面	包含層	土師器	鍋	(24.0)	—	—	(22.9)		口縁部～頸部 1/8 体部わずか	
55	1 区	第 1 面	包含層	土師器	鍋	(24.0)	—	—	(22.6)		口縁部～頸部 1/8 体部ごくわずか	
56	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	—	—	5.0			体部わずか 底部完存	やや不良
57	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	—	—	(5.1)			体部ごくわずか 底部 1/2	普通

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
灰白	0.5㎜前後の石英・長石・チャートやや多量に含む	外面：体部摩滅・底部静止糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		1	40
灰白～灰	1㎜以下の長石極微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		1	40
浅黄橙～にぶい黄褐	3㎜以下の石英・長石・チャート中量に含む	外面：体部ナデ・体部～頸部5条沈線文・口縁部折り曲げ・口縁端部キザミ 内面：体部～口縁部ナデ		2	41
にぶい橙	6㎜以下のチャート・長石・石英中量に含む	外面：体部ヘラミガキ・体部～頸部7条の沈線文を施す・口縁部外側に折り曲げ・口縁端部キザミ 内面：体部～頸部ナデ・口縁部ヨコナデ		2	41
褐灰	3㎜以下の石英・長石多量に含む	外面：体部～口縁部ユビオサエ後ナデ・口縁端面不調整 内面：体部～口縁部ユビオサエ後ナデ	土師質	2	41
灰	0.5㎜以下の長石・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・高台部粘土紐貼り付けロクロナデ 内面：底部～口縁部ロクロナデ後底部～体部下半一部ナデ		2	41
灰白～灰	0.5㎜以下の長石極微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転ヘラキリ後ナデ・高台部粘土紐貼り付け後ナデ 内面：底部～体部ロクロナデ後底部ナデ		2	41
灰黄褐	極細砂多く含む	外面：頸部～口縁部ロクロナデ、体部に貼り付け接合 内面：頸部～口縁部ロクロナデ・口縁端部少し上につまみ上げる		2	42
灰	6㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部静止糸切り・高台粘土紐貼り付け後ヨコナデ 内面：底部～体部ロクロナデ後ナデ		2	41
灰白～暗灰	1㎜以下の長石・チャート極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り後ナデ 内面：底部～口縁部ロクロナデ		2	42
灰白	1㎜以下のチャート極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部不定ナデ 内面：底部不定ナデ・口縁部ヨコナデ		2	43
にぶい橙～にぶい黄橙	2㎜以下の石英・長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ 内面：底部～口縁部ヨコナデ		2	43
にぶい黄橙	0.2㎜前後の長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ		2	43
橙	2㎜以下の長石・石英微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		2	43
淡橙	2㎜以下の石英・長石・チャート中量に含む	外面：体部タテタタキ（平行）・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部ナデ・頸部～口縁部ヨコナデ		2	43
にぶい黄橙～灰白	2㎜以下の長石少量に含む	外面：体部ヨコタタキ（平行）・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部～頸部ナデ・頸部～口縁部ヨコナデ		2	43
灰～暗灰	3㎜以下の石英・長石・チャート中量に含む	外面：体部ヨコタタキ(平行)・頸部～口縁部ヨコナデ・口縁端部水平に摘み出し 内面：体部オサエ(当て具痕)後ナデ・頸部～口縁部ヨコナデ		2	43
灰白	3.5㎜以下の石英・チャート中量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ	底部に穿ったような孔あり	2	44
灰白～黄灰	6㎜以下の長石・チャート中量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		2	44

出土土器観察表 4

№	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
58	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	—	—	4.7			体部ごくわずか 底部完存	良
59	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	—	(2.45)	(5.1)			体部 1/4 底部 1/2	良
60	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	—	—	4.0			体部ごくわずか 底部完存	普通
61	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	—	—	5.9			体部わずか 底部 3/4	良
62	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	—	残 2.3	5.8			体部わずか 底部 5/6	良
63	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	—	—	5.6			体部わずか 底部ほぼ完存	普通
64	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	(16.1)	4.4	(6.0)			口縁部～底部 1/4	良
65	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	(14.35)	4.5	(5.1)			口縁部～底部 1/2	普通
66	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	椀	(14.1)	—	—			口縁部～体部 1/9	良
67	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	鉢	(29.5)	残 3.1	—			口縁部わずか	普通
68	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	鉢	(28.2)	残 7.8	—			口縁部～体部 わずか	やや 不良
69	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	鉢	(23.4)	—	—			口縁部～体部 1/12	普通
70	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	鉢	—	残 4.2	—			口縁部ごく わずか	良
71	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	鉢	—	残 3.9	—			口縁部わずか	普通
72	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	鉢	—	残 3.7	—			口縁部ごく わずか	良
73	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	小椀	(9.1)	—	—			口縁部～体部 1/9	普通
74	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	小皿	(8.1)	2.4	(4.75)			口縁部～底部 1/2	良
75	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	小皿	(8.6)	1.2	(6.9)			口縁部～底部 1/6	やや 不良
76	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	小皿	(7.6)	1.8	(5.5)			口縁部～体部 1/7 底部 1/3	普通

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
灰	6㎜以下の長石少量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		2	44
灰白	1.5㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		2	44
灰白	3㎜以下のチャート中量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		2	44
灰白	1㎜以下の長石・チャート少量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ 内面：底部～体部ロクロナデ		2	44
灰	5㎜以下の長石微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ・底部ナデ		2	44
灰白	極細砂多く含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		2	44
灰	1㎜以下の長石・石英・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		2	44
灰	0.5㎜以下の長石・石英・微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ後底部～体部下半一部ナデ		2	42
灰	1 ～ 1.5㎜大の長石・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		2	45
灰～暗灰	2㎜以下の長石・チャート中量に含む	外面：口縁部ロクロナデ 内面：口縁部ロクロナデ		2	45
灰白～黄灰	5㎜以下の長石・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		2	45
明紫灰～暗灰	1㎜以下の長石・石英・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ後一部ヨコナデ		2	45
灰・灰褐	4㎜以下の長石極微量に含む	外面：口縁部ロクロナデ 内面：口縁部ロクロナデ		2	45
灰～黄灰	2㎜以下の長石・チャート少量に含む	外面：口縁部ロクロナデ 内面：口縁部ロクロナデ		2	45
灰～暗灰	5㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：口縁部ロクロナデ 内面：口縁部ロクロナデ		2	45
灰～灰白	0.1㎜大の長石･石英極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：底部～口縁部ロクロナデ	焼成前に体部に穿孔（φ 3㎜）	3	42・46
灰白～灰	0.3㎜前後の石英・長石少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		3	42
灰	1㎜以下の長石微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		3	46
灰白～暗灰	2㎜以下の石英・長石・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		3	46

出土土器観察表 5

№	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
77	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	小皿	(7.2)	1.6	(5.5)			口縁部～体部 1/6 底部 1/4	良
78	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	小皿	7.8	2.1	4.35			ほぼ完存	やや良
79	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	小皿	7.8	1.95	4.2			完存	良
80	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	小皿	(7.3)	1.2	(4.7)			口縁部～底部 1/3	良
81	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	小皿	(7.6)	1.6	(4.5)			口縁部～底部 1/3	良
82	1 区	第 1 面	包含層	須恵器	小皿	8.25	1.65	5.0			完存	良
83	1 区	第 1 面	包含層	白磁	皿	(9.5)	残 2.0	—			口縁部～体部 1/6	普通
84	1 区	第 1 面	包含層	白磁	碗	—	残 2.6	—			口縁部ごくわずか	普通
85	1 区	第 1 面	包含層	白磁	碗	(17.3)	—	—			口縁部 1/16	
86	1 区	第 1 面	包含層	白磁	碗	(16.6)	残 2.0	—			口縁部 1/12	普通
87	1 区	第 1 面	包含層	白磁	碗	—	—	—			体部～底部 1/4	良
88	1 区	第 1 面	包含層	白磁	碗	—	残 3.0	(7.1)			体部わずか 底部 1/2	
89	1 区	第 1 面	包含層	白磁	碗	(14.7)	—	—			口縁部 1/12 体部ごくわずか	
90	1 区	第 1 面	包含層	白磁	碗	—	残 3.2	5.8			体部わずか 底部完存	
91	1 区	第 1 面	包含層	白磁	碗	—	残 2.4	(6.5)			体部ごくわずか 底部 1/2	
92	1 区	第 1 面	包含層	青磁	碗	(17.7)	—	—			口縁部～体部 1/10	普通
93	1 区	第 1 面	包含層	青磁	碗	(15.8)	残 3.55	—			口縁部～体部 1/10	普通
94	1 区	第 1 面	包含層	青磁	碗	(10.1)	残 3.5	—			口縁部～体部 1/8	
95	1 区	第 1 面	包含層	美濃焼	天目茶碗	(11.4)	残 4.0	—			口縁部～体部 1/6	普通

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
灰	1mm以下の長石・チャート微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		3	46
灰	1mm大の石英極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		3	42
灰	1mm大の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		3	42
灰白	1mm以下の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		3	46
灰	1.5mm大の長石少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		3	46
灰白～黄灰	1mm以下のチャート極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		3	42
オリーブ黄～灰白	密	外面：体部～口縁部施釉・体部下方一部露胎 内面：体部～口縁部施釉		3	47
灰白	密	外面：口縁部施釉 内面：口縁部施釉		3	47
灰白	密	外面：口縁部施釉 内面：口縁部施釉		3	47
灰白	密	外面：口縁部施釉 内面：口縁部施釉		3	47
灰白	1mm以下の長石微量に含む	外面：体部施釉・体部下方～高台部露胎・高台部削り出し 内面：体部～底部施釉	見込みに輪状沈線あり	3	47
灰白 オリーブ灰	1mm以下の長石微量に含む	外面：底部～体部回転ヘラケズリ・高台削り出し 内面：底部～体部素地に一条沈線施文後施釉		3	47
灰白	密	外面：体部～口縁部施釉 内面：体部～口縁部施釉		3	47
灰白・浅黄	1mm以下の長石微量に含む	外面：体部上部施釉・体部下部～底部回転ヘラ削り・高台削り出し 内面：体部～底部施釉		3	42
灰白 明青灰	1mm以下の長石微量に含む	外面：底部回転ヘラケズリ・高台削り出し・体部施釉 内面：底部素地に櫛目で施文後施釉		3	47
オリーブ黄～灰	密	外面：体部～口縁部素地に文様彫り込み後施釉 内面：体部～口縁部素地に文様彫り込み後施釉		3	47
オリーブ	密	外面：体部～口縁部施釉 内面：体部～口縁部施釉		3	47
暗オリーブ灰	密	外面：体部～口縁部素地にヘラで花弁文を施した後施釉 内面：体部～口縁部施釉		3	47
褐～にぶい橙	密	外面：体部～口縁部施釉 内面：体部～口縁部施釉		3	48

出土土器観察表 6

No.	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
96	1 区	第 1 面	包含層	瀬戸焼	香炉	—	残 1.85	5.5			体部ごくわずか 底部ほぼ完存	やや不良
97	1 区	第 2 面	SH01	土師器	甕	(18.1)	—	—	(16.4)	最大径 (23.5)	口縁部～体部 1/4	
98	1 区	第 2 面	SH01	土師器	甕	18.95			16.4		口縁部～体部 3/4	良
99	1 区	第 2 面	SH01	土師器	短頸壺	(8.5)	8.2	(6.8)	(8.5)	最大径 (11.5)	口縁部 1/2 体部 1/3 底部わずか	
100	1 区	第 2 面	SH01	土師器	椀	(9.8)	—	—		腹径 (9.65)	受部～体部 1/12	良
101	1 区	第 2 面	SH01	土師器	甑	長さ 4.6	幅 4.4	厚み 2.0		器高 (6.7)	片側把手のみ 完存	
102	1 区	第 2 面	SH01	須恵器	杯 H 蓋	(13.9)	4.2	—			天井部～口縁部 3/4	不良
103	1 区	第 2 面	SH01	須恵器	杯 H	—	—			受部径 (16.6)	受部～底部 1/10	やや不良
104	1 区	第 2 面	SH01	須恵器	杯 H	—		—		受部径 (15.6)	受部～底部 1/10	不良
105	1 区	第 2 面	SH01	須恵器	高杯	—	残 5.4	—			脚柱のみ	良
106	1 区	第 2 面	SH02	土師器	甕	(21.4)	—	—	(18.7)		口縁部～体部 1/9	良
107	1 区	第 2 面	SH02	土師器	甕	(21.2)	—	—	(17.85)		口縁部～体部 1/8	良
108	1 区	第 2 面	SH02	土師器	甕	(19.4)	—	—	(18.3)		口縁部ほぼ完存 体部わずか	
109	1 区	第 2 面	SH02	土師器	甕	17.0	—	—	(15.7)		口縁部～体部 3/4	
110	1 区	第 2 面	SH02	土師器	甕	17.05	—	—	16.1		口縁部～体部 1/2	良
111	1 区	第 2 面	SH02 内 土坑 1	土師器	甕	—	—	9.0			体部わずか 底部完存	
112	1 区	第 2 面	SH02	土師器	甕	(14.0)	—	—	(12.5)		口縁部～体部 1/6	
113	1 区	第 2 面	SH02	土師器	甕	(13.6)	—	—	(11.3)		口縁部～体部 わずか	
114	1 区	第 2 面	SH02	土師器	小型甕	—	—	5.0		腹径 (9.5)	体部～底部完存	良

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
灰白	3㎜以下のチャート極微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り・底部と体部の境界に胎土目３カ所貼り付け 内面：底部～体部ロクロナデ		3	48
にぶい橙	2㎜以下の石英・長石・チャート少量に含む	外面：体部～頸部タテハケメ･頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部下半ヨコナデツケ後タテナデ･体部上半ヨコナデツケ･頸部ヨコハケメ･頸部～口縁部ヨコナデ		4	50
にぶい黄橙	2㎜以下の石英・長石・チャート少量に含む	外面：体部～頸部タテハケメ・口縁部ヨコナデ 内面：体部～頸部ヨコハケメ・口縁部ヨコナデ		4	50
にぶい赤褐	2㎜以下の石英・長石・チャート少量に含む	外面：底部～体部下部ヘラケズリ･体部タテハケメ､摩滅･口縁部ヨコナデ 内面：底部～体部下部タテヘラケズリ･体部～口縁部ヨコナデ	体部外面に二次的な被熱による色調変化と剥離あり	4	50
浅黄橙	2㎜以下の石英・チャート他多量に含む	外面：体部ナデ･口縁部ヨコナデ･口縁端部わずかなキザミ 内面：体部ナデ・口縁部ヨコナデ		4	50
にぶい橙	3㎜以下の石英・チャート少量に含む	外面：ハケメ後一部ナデ 内面：オサエ		4	51
灰白	3㎜以下の長石微量に含む	外面：口縁部～体部ロクロナデ・天井部回転ヘラ削り・天井部中央ナデ 内面：口縁部～天井部ロクロナデ・口縁部に凹線	天井部内面に置き台痕あり	4	51
灰	0.1㎜以下の石英・長石・チャート少量に含む	外面：体部～受部ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ 内面：体部ロクロナデ		4	51
灰白	0.5㎜以下の石英少量に含む	外面：体部～受部ロクロナデ・底部静止ヘラケズリ 内面：体部ロクロナデ		4	51
灰白	1㎜以下の長石微量に含む	外面：ロクロナデのち波状文を施す。その上から二条の沈線を上下に二単位施す。 内面：ロクロナデ・杯部との接合部付近タテヘラケズリ		4	51
にぶい橙	1㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部～頸部タテハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部タテ板ナデ・体部～頸部ヨコハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ		4	51
にぶい黄橙	1㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部タテハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部タテ板ナデ・頸部ヨコハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ		4	52
にぶい橙	4㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部～頸部タテハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部タテヘラケズリ・体部～頸部ヨコハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ		4	52
明褐灰	4㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部タテハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部ヨコヘラケズリ・体部～頸部板ナデツケ・頸部～口縁部ヨコナデ		4	52
浅黄	1㎜前後の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部～頸部タテハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部タテヘラケズリ・体部～頸部ヨコハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ		4	52
にぶい橙	3㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：底部ハケメ～体部タテハケメ 内面：底部ナデ・体部ヨコヘラケズリ		4	52
灰黄褐	2㎜以下の石英・チャート・中量に含む	外面：体部タテハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部ヨコナデ・体部～頸部ヨコハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ		4	53
にぶい黄橙	3㎜以下の石英・チャート・中量に含む	外面：体部タテハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部ヨコナデ・頸部～口縁部ヨコナデ		4	53
橙	2㎜以下の石英・チャート多量に含む	外面：体部棒状工具によるタテナデツケ・底部ナデ 内面：底部ナデ・体部下部ヨコナデ、中腹部タテナデ、上部ヨコナデ	中腹部帯状に煤付着	4	52

出土土器観察表 7

No.	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
115	1 区	第 2 面	SH02 土抗 1	土師器	甑	長さ 5.6	幅 4.0	厚み 1.6		器高 (3.5)	片側把手のみ ほぼ完存	
116	1 区	第 2 面	SH02 土抗 1	須恵器	杯 H 蓋	(16.9)	(4.5)				天井部～口縁部 1/8	良
117	1 区	第 2 面	SH02 土抗 1	須恵器	杯 H 蓋	(13.8)	4.3				天井部～口縁部 1/4	良
118	1 区	第 2 面	SH02	須恵器	杯 H	(13.9)	4.6	—		受部径 (16.2)	口縁部～底部 1/4	良
119	1 区	第 2 面	SH02	須恵器	杯 H	(14.0)	—	—		受部径 (16.0)	口縁部～体部 わずか	やや 不良
120	1 区	第 2 面	SB05-P2	土師器	皿	(16.3)	3.0	(10.0)			口縁部～底部 1/4	良
121	1 区	第 2 面	SB05-P4	土師器	小皿	8.0	1.4	7.7			完存	良
122	1 区	第 2 面	SB05-P6	須恵器	椀	—	—	(4.7)			体部～底部 わずか	良
123	1 区	第 2 面	SB09-P5	土師器	皿	—	—	(7.4)			体部～底部 1/3	良
124	1 区	第 2 面	SB09-P5	土師器	皿	(17.0)	—	—			口縁部～体部 わずか	良
125	1 区	第 2 面	SB09-P6	土師器	小皿	(8.65)	1.45	(7.0)			口縁部～底部 1/4	良
126	1 区	第 2 面	SB09-P5	土師器	小皿	(8.0)	1.5	5.5			口縁部～体部 1/4 底部完存	良
127	1 区	第 2 面	SB09-P8	土師器	小皿	(8.8)	0.85	(7.0)			口縁部～底部 わずか	良
128	1 区	第 2 面	SB09-P5	土師器	小皿	8.0	1.6	6.4			ほぼ完存	良
129	1 区	第 2 面	SB09-P6	須恵器	椀	(16.8)	4.2	—			口縁部～体部 わずか	やや 不良
130	1 区	第 2 面	SB10-P3	須恵器	鉢 D	(21.0)	残 12.1	—	(19.6)	腹径 (21.5)	口縁部～体部 1/4	やや 良
131	1 区	第 2 面	SB10-P1	須恵器	杯 A	(11.7)	3.6	(6.6)			口縁部～底部 1/2	良
132	1 区	第 2 面	SB10-P4	土師器	甕	(15.4)	—	—	(13.2)	腹径 (14.7)	口縁部～体部 1/4	良
133	1 区	第 2 面	P11	土師器	皿	(14.6)	3.6	8.35			口縁部～体部 1/3 底部完存	

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
にぶい橙	3㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：オサエ後ナデ		4	52
灰	3㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：天井部～口縁部ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ 内面：天井部～口縁部ロクロナデ		4	52
灰白	5㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：天井部～口縁部ロクロナデ後天井部回転ヘラケズリ 内面：天井部～口縁部ロクロナデ後天井部ナデ	天井部中央に置き台の痕跡あり	4	53
灰白	2㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ 内面：底部～口縁部ロクロナデ後底部ナデ	底部中央に置き台の痕跡あり	4	53
黄灰	1㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		4	53
にぶい黄橙～黒褐	1㎜以下の石英・長石わずかに含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り後板ナデ（ハケメ残る） 内面：底部～口縁部ロクロナデ後底部ナデ		5	53
橙	1㎜以下のチャートわずかに含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：底部～口縁部ヨコナデ後底部ナデ		5	53
灰	1㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		5	53
橙	1㎜以下の長石微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ・		5	54
浅黄橙	1㎜以下の石英・チャート極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ		5	54
橙～褐灰	2㎜以下のチャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		5	54
橙	2㎜以下の長石・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		5	54
橙	1㎜以下のチャート多量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り後板ナデ、その後ナデ 内面：底部～口縁部ロクロナデ		5	54
橙～黄橙～黒	1㎜以下の長石・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部中央強い板ナデ後底部縁辺に沿ってヨコナデ 内面：底部～口縁部ヨコナデ後、底部ナデ		5	54
灰白～黒褐	1㎜以下の長石・チャート含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		5	54
灰白	3㎜以下の長石・チャート中量に含む	外面：体部下半回転ヘラケズリ･体部上半～口縁部ロクロナデ 内面：体部下半回転ロクロナデ後ヨコナデ･体部上半～口縁部ロクロナデ		5	55
灰	1㎜以下のチャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転ヘラ切りのちケズリ 内面：底部～口縁部ロクロナデ		5	55
灰黄褐～黒褐	1㎜以下の石英・長石・チャート・雲母含む	外面：体部ハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部ユビオサエ後板状工具によるヨコナデ		5	55
浅黄橙	1㎜大の長石中量に含む　0.5㎜以下の赤色粒やや多量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り後、板状工具による一部ナデ 内面：底部～口縁部ロクロナデ後、底部ナデ		5	55

出土土器観察表 8

№	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
134	1 区	第 2 面	P12	製塩土器	—	(8.8)	残 12.0			腹径 (10.2)	口縁部～体部 1/6	
135	1 区	第 2 面	P10	須恵器	椀	(16.4)	4.7	(6.5)			口縁部～底部 1/6	
136	1 区	第 2 面	P13	須恵器	小皿	(7.7)	1.5	4.9			口縁部～体部 1/2 底部完存	良
137	1 区	第 2 面	SD03	土師器	椀	(16.8)	—	—			口縁部～体部 わずか	良
138	1 区	第 2 面	SD03	土師器	皿	—	—	—			口縁部ごく わずか	良
139	1 区	第 2 面	SD03	土師器	椀	—	—	(8.0)			体部～底部 わずか	良
140	1 区	第 2 面	SD03	土師器	椀	—	—	5.0			体部ごくわずか 底部完存	良
141	1 区	第 2 面	SD03	須恵器	椀	(19.6)	—	—			口縁部 1/8	良
142	1 区	第 2 面	SD03	須恵器	壺 L	9.1	6.7 (頸高)	—	4.9		口縁部 3/4 頸部完存	良
143	1 区	第 2 面	SD03	青磁	碗	(16.0)	—	—			口縁部～体部 わずか	良
144	1 区	第 2 面	SD05	須恵器	杯 A	(14.8)	2.95	(9.0)			口縁部～底部 1/4	良
145	1 区	第 2 面	SD05	須恵器	小椀	(10.0)	3.05	(5.8)			口縁部～底部 1/3	良
146	1 区	第 2 面	SD05	須恵器	椀	—	—	(7.0)			体部～底部 わずか	良
147	1 区	第 2 面	SD05	須恵器	椀	—	—	(5.6)			体部～底部 2/3	良
148	1 区	第 2 面	SD05	須恵器	甕	(25.4)	—	—			口縁部わずか	良
149	1 区	第 2 面	SD07	須恵器	杯 B	—	残 3.7	(11.95)			体部～底部 1/4	良
150	1 区	第 2 面	SD07	須恵器	壺 K	—	残 7.87	—	5.6		頸部のみほぼ 完存	良
151	1 区	第 2 面	SD09	弥生土器	壺	—	残 6.2	11.5			体部わずか 底部完存	良
152	1 区	第 2 面	SD09	弥生土器	甕	—	残 8.8	10.3			体部わずか 底部 3/4	や不良

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
にぶい黄橙	3㎜以下の石英・長石多量に含む	外面：体部～口縁部ナデ 内面：体部～口縁部ナデ	土師質	5	55
灰	0.5㎜以下の長石少量に含む タール状黒色粒目立つ	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		5	55
灰	極細砂粒含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ヨコナデ		5	55
浅黄橙～黒	1㎜以下の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・口縁端部つまんで外反させる 内面：体部口縁部ロクロナデ	体部外面下半に煤付着	5	56
橙	1㎜以下の石英･長石極微量に含む	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	内面に墨書あり（文字不明）	5	56
にぶい黄橙～黒	1㎜以下の長石中量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部摩滅 内面：体部ロクロナデ	外面煤付着	5	56
浅黄橙	1㎜大のチャート・石英・長石含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り 内面：底部ロクロナデ		5	56
灰	2㎜以下のチャート・長石微量に含む	外面：口縁部ロクロナデ 内面：口縁部ロクロナデ		5	56
灰	1㎜以下の長石極微量に含む	外面：頸部～口縁部ロクロナデ・体部と貼り付け接合・口縁端部肥厚、つまみ出し 内面：頸部～口縁部ロクロナデ		5	56
灰オリーブ	密	外面：体部～口縁部素地に文様彫り込み後施釉 内面：体部～口縁部施釉		5	56
灰白	1㎜以下の長石微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り後ナデ 内面：底部～口縁部ロクロナデ		5	56
灰	1㎜以下の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		5	56
灰白	2㎜以下のチャート・長石・石英・微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ	粘土円柱挽き出し	5	
灰白	1㎜以下の長石極微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		5	
褐	1㎜以下の長石極微量に含む	外面：口縁部ロクロナデ 内面：口縁部ロクロナデ・口縁端縁上方につまみあげる		5	
灰白～暗オリーブ灰	2㎜以下の長石・チャート少量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ後ナデ・高台部粘土紐貼り付け後ナデ 内面：底部～体部ナデ		5	56
明オリーブ灰～暗オリーブ灰	1㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：頸部ロクロナデ・上部に一条の突線 内面：頸部ロクロナデ・下部に貼り付け接合痕あり		5	56
浅黄橙～暗灰	4㎜以下の石英・長石チャート多量に含む	外面：体部タテハケメ・底部ナデ 内面：底部ナデ後底部～体部ヨコナデ	体部外面に黒斑あり	5	57
黄橙～黒	3㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部タテハケメ後一部タテミガキ・底部ナデ 内面：底部不定ナデ・体部ヨコナデ	体部外面に黒斑あり	5	57

出土土器観察表 9

№	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
153	1 区	第 2 面	SD08	土師器	甕	26.0	残 26.0	—	22.3	腹径 24.6	口縁部～頸部 完存 体部 4/5	
154	1 区	第 2 面	SD08	土師器	甕	(27.3)	残 12.4	—	(24.0)	腹径 (25.9)	口縁部～頸部 1/6 体部 1/8	良
155	1 区	第 2 面	SD08	土師器	甕	(15.1)	残 4.8	—	(13.55)		口縁部～頸部 1/4 体部わずか	良
156	1 区	第 2 面	SX01	土師器	皿	15.8	4.45	7.55			ほぼ完存	
157	1 区	第 2 面	SX01	土師器	皿	15.3	4.4	6.95			ほぼ完存	
158	1 区	第 2 面	SX01	土師器	皿	15.85	3.9	(7.9)			口縁部～体部 1/4 底 1/2	
159	1 区	第 2 面	SX01	土師器	小皿	(9.1)	2.1	(5.6)			口縁部～体部 1/2 底部 3/4	
160	1 区	第 2 面	SX01	土師器	小皿	8.75	2.0	5.2			ほぼ完存	
161	1 区	第 2 面	SX01	土師器	小皿	8.8	1.9	5.55			口縁部～体部 1/4 底部完存	
162	1 区	第 2 面	SX01	土師器	小皿	(9.0)	(1.3)	—			口縁部～体部 1/3	
163	1 区	第 2 面	SX01	土師器	小皿	7.5	1.5	5.3			ほぼ完存	
164	1 区	第 2 面	SX01	土師器	小皿	7.75	1.6	5.5			口縁部～体部 3/4 底部完存	
165	1 区	第 2 面	SX01	土師器	小皿	7.0	1.15	5.25			口縁部～体部 1/2 底部 3/4	
166	1 区	第 2 面	SX01	土師器	小皿	7.85	1.05	6.25			口縁部～体部 1/2 底部ほぼ完存	
167	1 区	第 2 面	SX01	土師器	小皿	8.1	1.3	6.75			口縁部～底部 3/4	
168	1 区	第 2 面	包含層	弥生土器	甕	—	残 4.6	(7.35)			体部ごくわずか 底部 1/4	良
169	1 区	第 2 面	包含層	須恵器	杯 B 蓋	(13.6)	残 3.05	—			天井部～口縁部 2/5	良
170	1 区	第 2 面	包含層	須恵器	皿 B	(23.7)	4.2	(19.2)			口縁部～底部 1/12	良
171	1 区	第 2 面	包含層	須恵器	杯 B	(14.7)	4.2	(10.4)			口縁部～体部 1/4 底部 1/3	良

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
灰黄褐～浅黄橙	3㎜以下の石英･長石チャート多量に含む(雲母目立つ)	外面：体部下半粗いタテハケメ後体部上半細かいタテハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部下半～中腹ユビオサエ後ナデ・体部上半ヨコナデ・頸部～口縁部ヨコハケメ	体部外面煤付着	6	57
にぶい黄橙	2㎜以下の石英・長石・チャート中量に含む	外面：体部タテハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部～頸部ヨコハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ		6	57
灰褐～褐灰	1.5㎜以下の長石・チャート多量に含む	外面：体部タテハケメ・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部～頸部ナデ・頸部～口縁部ヨコナデ		6	57
浅黄橙	3㎜以下の長石・チャート中量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部摩滅		6	57
浅黄橙	3㎜以下の長石・チャート中量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部摩滅		6	57
にぶい黄橙	0.3㎜以下の石英･長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ後底部ナデ		6	57
浅黄橙	1㎜以下の長石中量に含む	外面：体部～口縁部摩滅・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ・底部中央ナデ		6	58
浅黄橙	1㎜以下の石英・チャート中量に含む	外面：体部～口縁部摩滅・底部回転糸切り 内面：体部～口縁部摩滅		6	58
浅黄橙	2㎜以下の長石中量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部摩滅		6	58
浅黄橙	2㎜以下の長石少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		6	58
にぶい黄橙	0.5㎜以下の砂粒多量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部摩滅		6	58
浅黄橙	1㎜以下の石英・長石・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ後底部ナデ		6	58
にぶい橙	2㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		6	58
橙	1㎜以下の長石少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		6	58
にぶい黄橙	2㎜以下の長石・チャート中量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ後底部ナデ		6	59
内)にぶい橙 外)橙～にぶい橙	2.5㎜以下の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部タテハケメ・底部ナデ 内面：底部～体部タテハケメ		6	59
灰白～灰	1㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：天井部～口縁部ロクロナデ・天井部回転ヘラケズリ 内面：天井部～口縁部ロクロナデ・天井部ナデ	ツマミ部剥離	6	59
灰白	0.5㎜以下の石英・チャート極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・高台粘土紐貼り付け後ロクロナデ 内面：底部～口縁部ロクロナデ	口縁部内面に一条の沈線あり	6	59
灰白	1㎜以下の長石少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部ナデ・高台粘土紐貼り付け後ロクロナデ 内面：底部～口縁部ロクロナデ後底部ナデ		6	59

出土土器観察表 10

No.	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
172	1 区	第 2 面	包含層	須恵器	椀	(15.65)	5.45	(5.3)			口縁部～体部 2/5 底部 1/2	良
173	1 区	第 1 面	包含層	土師器	小皿	8.05	1.4	4.15			ほぼ完存	普通
174	1 区	第 2 面	包含層	白磁	碗	—	—	6.75			体部わずか 底部完存	良
175	2 区	第 1 面	P14	土師器	皿	(11.7)	(1.95)	(10.65)			口縁部～体部 1/7	良
176	2 区	第 1 面	P15	須恵器	椀	—	(2.7)	5.3			体部わずか 底部完存	良
177	2 区	第 1 面	SD10	須恵器	椀	—	(1.4)	(6.35)			底部 1/4	良
178	2 区	第 1 面	SD10	須恵器	小皿	(7.6)	1.6	(5.5)			口縁部 1/4	良
179	2 区	第 1 面	SD10	須恵器	小皿	(6.65)	1.45	(5.0)			口縁部わずか 底部 1/2	良
180	2 区	第 1 面	包含層	土師器	鍋	(24.2)	(4.7)	—	(22.8)		口縁部～体部 1/12	良
181	2 区	第 1 面	包含層	須恵器	小皿	(7.6)	1.7	4.6			口縁部わずか 底部完存	良
182	2 区	第 1 面	包含層	緑釉陶器	椀	—	(1.7)	(6.6)			底部 1/4	良
183	4 区	第 2 面	SB13-P1	土師器	皿	(13.3)	2.65	(8.8)			口縁部～体部 わずか 底部 1/5	良
184	4 区	第 2 面	SB14-P5	須恵器	椀	(10.6)	4.25	4.4			口縁部 2/3 体部～底部完存	良好
185	4 区	第 2 面	P16	土師器	鍋	(22.8)	(8.35)	—	(21.6)		口縁部～体部 1/12	良
186	4 区	第 2 面	P17	土師器	小皿	(7.6)	(1.25)	(7.0)			口縁部 1/7	良
187	4 区	第 2 面	P18	土師器	皿	(12.65)	(3.15)	—			口縁部 1/7	良
188	4 区	第 2 面	SD13	土師器	皿	(15.7)	2.65	(9.5)			口縁部～体部 1/15	良
189	4 区	第 2 面	SD13	土師器	皿	(13.8)	(2.00)	—			口縁部 1/9	良
190	4 区	第 2 面	SD13	土師器	皿	(12.8)	(2.4)	(9.0)			口縁部～体部 1/5	良
191	4 区	第 2 面	SD13	土師器	皿	(13.1)	(3.2)	(8.2)			口縁部～底部 1/3	良

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
灰白～灰	0.8㎜以下の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		6	59
にぶい橙	2㎜以下の長石・チャート少量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：底部～口縁部ヨコナデ後底部ナデ		6	59
胎)灰白 釉)明オリーブ灰	0.2㎜前後の石英・長石多量に含む 0.1㎜大の石英少量に含む	外面：体部ロクロナデのち回転ヘラケズリ・底部回転ヘラケズリ（露胎）・高台削り出し 内面：底部施釉		6	59
明褐灰	0.3㎜以下の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ 内面：体部～口縁部ヨコナデ		7	
灰	3㎜大の石英・長石・チャート極微量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～体部ロクロナデ		7	60
灰	1㎜以下の長石･石英中量に含む 黒色粒子少量に含む	外面：体部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：体部ロクロナデ		7	60
灰～暗灰	0.5㎜大の石英極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ		7	60
灰白	1㎜以下の石英微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：体部ロクロナデ		7	60
灰黄褐	1.5㎜以下の石英・長石・チャートやや多量に含む	外面：肩部タタキ（平行）・口縁部～頸部ヨコナデ 内面：肩部オサエ（当て具痕）・口縁部～頸部ヨコナデ		7	60
灰	0.8㎜以下の石英少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		7	60
灰白	0.5㎜以下の石英･長石極微量に含む	外面：体部～高台部・底部全面施釉 内面：底部施釉	削り出し輪高台	7	60
明黄褐	1㎜以下の石英少量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ		7	
灰白～暗灰	0.5 ～ 1㎜大の石英中量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ	粘土円柱ロクロ挽き出し	7	60
にぶい黄橙	0.8㎜以下の石英・長石・チャート・赤色粒多量に含む	外面：体部タタキ（平行）・頸部～口縁部ヨコナデ 内面：体部オサエ（当て具痕）・頸部～口縁部ヨコナデ		7	60
橙	1㎜程度の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：底部～口縁部ナデ		7	60
にぶい橙	0.1㎜大の長石少量に含む(石英微粒子表面に目立つ)	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		7	60
橙	0.8㎜以下の長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部摩滅 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部不定ナデ		7	61
橙	0.5㎜以下の石英・長石少量含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ		7	61
にぶい黄橙	1㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ		7	61
橙	1㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部不定ナデ		7	60

出土土器観察表 11

No.	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
192	4 区	第 2 面	SD13	土師器	皿	(12.6)	(3.1)	(5.0)			口縁部～底部 1/4	良
193	4 区	第 2 面	SD13	土師器	皿	(12.45)	3.5	(4.0)			口縁部 1/3 底部 1/2	良
194	4 区	第 2 面	SD13	土師器	皿	(12.7)	(2.9)	—			口縁部～体部 1/4 底部わずか	良
195	4 区	第 2 面	SD13	土師器	小皿	(9.25)	(1.6)	(7.45)			口縁部～底部 1/5	良
196	4 区	第 2 面	SD13	土師器	小皿	8.25	1.4	4.0			口縁部～底部 1/2	良
197	4 区	第 2 面	SD13	土師器	小皿	8.15	1.75	7.25			完存	良
198	4 区	第 2 面	SD13	土師器	小皿	7.8	1.65	6.45			完存	良好
199	4 区	第 2 面	SD13	土師器	小皿	(8.05)	(1.35)	(5.4)			口縁部～底部 1/4	良
200	4 区	第 2 面	SD13	土師器	鍋	(24.35)	(3.0)	—			口縁部 1/12	良
201	4 区	第 2 面	SD13	土師器	鍋	(18.85)	(4.65)	—	(17.8)		口縁部 1/7	良
202	4 区	第 2 面	SD13	須恵器	小皿	8.45	2.0	4.9			完存	良
203	4 区	第 2 面	SD13	須恵器	椀	(15.65)	(3.6)	—			口縁部 1/6	良
204	4 区	第 2 面	SD13	須恵器	椀	(15.65)	(3.4)	—			口縁部 1/6	良
205	4 区	第 2 面	包含層	須恵器	椀	(15.2)	3.75	6.0			口縁部～体部 1/6 底部 3/4	良
206	4 区	第 2 面	包含層	須恵器	小皿	(7.8)	1.5	(5.2)			口縁部～底部 2/9	良
207	4 区	第 2 面	包含層	土師器	小皿	(8.6)	1.93	(4.3)			口縁部～底部 1/2	良
208	4 区	第 2 面	包含層	土師器	小皿	(9.0)	1.2	(6.9)			口縁部～底部 1/4	良
209	4 区	第 2 面	包含層	土師器	皿	(14.4)	3.2	(7.9)			口縁部～底部 1/8	良
210	4 区	第 2 面	包含層	土師器	皿	(13.4)	3.1	(9.2)			口縁部～底部 1/8	良

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
灰黄褐	0.3㎜以下の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ		7	60
にぶい黄橙	0.8㎜以下の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部不定ナデ	体部に浅い沈線あり	7	62
にぶい黄橙	0.5㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ		7	61
橙	1㎜以下の石英・長石少量に含む 赤色粒多量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ		7	61
灰白～にぶい橙	0.5㎜以下の石英・長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ	口縁端部に煤付着	7	62
橙	1㎜以下の石英・長石少量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ		7	62
橙	0.3㎜以下の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ	ナデの最後は逆「の」字状に引き抜く	7	62
浅黄橙	0.5㎜以下の石英・長石・赤色粒やや多量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部摩滅 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ		7	61
浅黄橙	0.5㎜以下の石英・長石多量に含む	外面：口縁部ヨコナデ・口縁端部水平につまみ出し 内面：口縁部ヨコナデ		7	61
にぶい黄橙	0.8㎜以下のの石英・チャート・長石やや多量に含む	外面：肩部タタキ（平行）・口縁部～頸部ヨコナデ 内面：肩部ナデ・口縁部～頸部ヨコナデ	口縁部～頸部外面に煤付着	7	61
灰白～灰	1㎜以下の石英他微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		8	62
灰	0.5㎜以下の石英・長石他少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		8	61
灰	0.5㎜以下の石英・長石中量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ 内面：体部～口縁部ロクロナデ		8	61
灰	1㎜大の長石少量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		8	62
灰白	0.5㎜以下の長石・極微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		8	
浅黄橙～黄橙	0.5㎜以下の長石微量に含む	外面：体部～口縁部摩滅・底部ナデ 内面：底部～口縁部ヨコナデ		8	63
橙～にぶい橙	0.5㎜以下の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部不定ナデ		8	63
浅黄橙	0.5㎜以下の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部不定ナデ		8	63
橙～浅黄橙	1㎜以下の長石微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデのちヨコナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		8	63

出土土器観察表 12

No.	地区名	検出面	出土遺構	種別	器種	法量（cm）					残存状況	焼成
						口径	器高	底径	頸径	その他		
211	4区	第2面	包含層	土師器	皿	(11.2)	3.2	(4.7)			口縁部～底部 1/5	良
212	4区	第2面	包含層	土師器	皿	(13.8)	1.2	(11.0)			口縁部～底部 1/8	良
213	3区	第2面	SB19-P13	須恵器	椀	16.35	4.6	6.4			完存	良
214	3区	第2面	SB19-P12	須恵器	椀	(16.95)	5.1	4.25			口縁部～体部 1/4 底部完存	良
215	3区	第2面	SB19-P11	土師器	鍋	(27.0)	14.5	—	(24.9)	腹径 (28.9)	口縁部～体部 1/2	良

※法量の凡例：（　）内の数値は復元推定値。／「残」は、復元推定値が求められない残存良好資料の残存値。

出土土製品観察表

No.	出土地区	検出面	出土遺構出土層	器種	法量（cm）				残存状況	焼成
					長さ	幅	厚み	重量（g）		
D 1	1区	第1面	包含層	土錘	残 7.45	3.00	2.5	53.5	4/5	普通
D 2	1区	第1面	包含層	土錘	残 4.80	1.85	1.75	12.4	3/4	普通
D 3	1区	第1面	SD01	土錘	残 3.60	1.90	1.2	5.5	2/3	良
D 4	1区	第1面	包含層	土錘	残 3.30	0.95	0.85	2.2	2/3	やや不良
D 5	1区	第1面	包含層	土錘	2.80	1.10	1.0	3.4	ほぼ完存	
D 6	1区	第1面	包含層	土錘	残 1.70	1.05	0.85	1.4	1/2	やや不良
D 7	2区	第1面	SD11	土錘	残 3.70	1.90	1.9	11.3	2/3	良
D 8	2区	第1面	SK08	土錘	残 1.70	0.90	0.9	1.2	1/2	良
D 9	2・4区	第2面	包含層	土錘	残 2.80	1.80	1.85	6.0	1/3	良
D 10	4区	第2面	SK10	鞴羽口	残 5.60	残 4.0	残 3.6		口縁部 1/12	
D 11	3区	第1面	包含層	土錘	4.10	1.30	1.3	6.4	ほぼ完存	良
D 12	3区	第1面	包含層	土錘	3.95	1.10	1.05	4.2	完存	良

（　）内の数値は復元推定値。／「残」は、復元推定値が求められない残存良好資料の残存値。

出土金属製品観察表

No.	出土地区	検出面	出土遺構出土層	種　類	法量（cm）				残存状況	備考	図版	写真図版
					長さ	幅	厚み	重量(g)				
M 1	1区	第1面	包含層	煽り止	残 5.7	0.70	0.70	6.87	両輪部欠損	輪部残存幅1.4cm、推定幅3.6cm	3	49
M 2	1区	第1面	P 07	煽り止	残 4.7	1.50	0.80	8.44	下部欠損	上部環状に曲げる（φ 7㎜）	3	49
M 3	1区	第1面	耕作痕列群 13-P1	釘	残 4.1	0.60	0.65	2.66	上部欠損	上部欠損	3	49
M 4	1区	第1面	P 13	刀子	残 7.6	2.70	0.65	21.95	刃部の先端部		7	59
M 5	1区	第2面	SB12-P3	釘	残 3.0	0.40	0.40	0.95	下部欠損	頭部折り曲げて、頂部平坦になる（幅0.6×0.4cm）	7	59

※法量の凡例：（　）内の数値は復元推定値。／「残」は、復元推定値が求められない残存良好資料の残存値。／「－」は、計測部位が欠損して計測不能を示す。／空欄は属性がないため計測不能を示す。

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
浅黄橙	1㎜以下の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ		8	63
橙	0.1㎜大の長石極微量に含む	外面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ユビオサエ後ナデ 内面：体部～口縁部ヨコナデ・底部ナデ	体部に焼成後穿孔（φ４～5㎜）	8	62・63
灰	1㎜大のチャート・2㎜大の石英・長石中量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・底部回転糸切り 内面：底部～口縁部ロクロナデ		8	63
灰	1㎜大の石英・長石微量に含む	外面：体部～口縁部ロクロナデ・回転糸切り後ナデ 内面：底部～口縁部ロクロナデ		8	63
灰白～にぶい橙	2㎜大の石英・長石・チャート多量に含む	外面：体部タタキ（平行）・口縁部～頸部ヨコナデ 内面：体部オサエ（当て具痕）後板ナデ・口縁部～頸部ヨコナデ	外面煤付着	8	63

／「－」は、計測部位が欠損して計測不能を示す。／空欄は属性がないため計測不能を示す。

色調	胎土	調整	備考	図版	写真図版
浅黄橙	1㎜以下の長石･石英･チャート多量に含む	外面：ナデ 内面：通し穴（φ 7㎜）	大型	3	49
灰白～橙	3㎜以下の長石･チャート中量に含む	外面：ナデ 内面：通し穴（φ 5.5㎜）	中型	3	49
灰白	1㎜大の石英･長石･チャート微量に含む	外面：ナデ 内面：通し穴（φ 4㎜）	中型	3	49
灰黄橙～にぶい橙	0.5㎜以下のチャート極微量に含む	外面：ナデ 内面：通し穴（φ 2.5㎜）	小型	3	49
にぶい黄橙	0.3㎜大の長石少量に含む	外面：ナデ 内面：通し穴（φ 3㎜）	小型	3	49
灰白	0.5㎜以下のチャート極微量に含む	外面：ナデ 内面：通し穴（φ 4㎜）	小型	3	49
灰白	0.5㎜以下の石英・長石微量に含む	外面：ナデ 内面：通し穴（φ 5㎜）	中型	7	60
灰白	1㎜大の石英・長石少量含にむ	外面：ナデ 内面：通し穴（φ 4㎜）	小型	7	60
灰白～暗灰	0.1㎜大の長石極微量に含む	外面：ナデ 内面：通し穴（φ 4.5㎜）	中型	8	60
灰～灰白～オリーブ灰	0.5㎜以下の長石極微量に含む	外面：金属熔解物付着 内面：不調整		8	63
黒褐～黒	0.2㎜前後の石英・長石中量に含む	外面：ナデ 内面：通し穴（φ 4㎜）	小型	8	63
灰白	1㎜大の長石極微量に含む	外面：ユビオサエ後ナデ 内面：通し穴（φ 3.5㎜）	小型	8	63

／「－」は、計測部位が欠損して計測不能を示す。／空欄は属性がないため計測不能を示す。

出土石製品観察表

No.	出土地区	検出面	出土遺構出土層	種　類	法量（cm）				残存状況	備考	図版	写真図版
					長さ	幅	厚み	重量(g)				
S1	１区	第２面	ＳＨ02	叩石	9.6	7.86	4.68	554	ほぼ完存	石材は花崗岩。片側広幅面に敲打痕あり。	7	59

※法量の凡例：（　）内の数値は復元推定値。／「残」は、復元推定値が求められない残存良好資料の残存値。／「－」は、計測部位が欠損して計測不能を示す。／空欄は属性がないため計測不能を示す。

報　告　書　抄　録

ふりがな	さかもとどいのはたいせき
書名	坂本・土井の畑遺跡
副書名	（国）427号（曽我井バイパス）地域自主戦略交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第462冊
編著者名	山田清朝・垣内拓郎・パリノ・サーヴェイ株式会社・藤根　久
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内） TEL 079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号　TEL 078-362-3784
発行年月日	2014年（平成26年）3月28日

所収遺跡名（遺跡調査番号）	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
坂本・土井の畑遺跡（2011253）	多可郡多可町中区坂本	2833	260245	35°03′50″	134°93′00″	平成23年8月22日～12月22日	2623㎡	（国）427号（曽我井バイパス）地域自主戦略交付金事業
坂本・土井の畑遺跡（2011251）						平成23年7月25日	12㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂本・土井の畑遺跡	集落	弥生	溝	弥生土器	
		古墳	竪穴住居	須恵器・土師器	
		奈良	溝	須恵器・土師器・製塩土器	
		鎌倉	掘立柱建物・溝・木棺墓・耕作痕列	須恵器・土師器・白磁・青磁	

概要	遺構を2面にわたり検出。第1面では、中世の耕作痕列群を検出した。このなかで、弥生時代中期初頭の遺構の検出は、多可町内では初例である。また、耕作第2面では、弥生時代中期初頭の溝、古墳時代後期の住居跡、奈良時代～平安時代の溝、中世の掘立柱建物跡・木棺墓等を検出した。痕列群については、畠作にともなう遺構と考えられるが、土壌分析ではその詳細を明らかにすることはできなかった。

写 真 図 版

写真図版1　遺構

1区・2区第1面
全景　西から

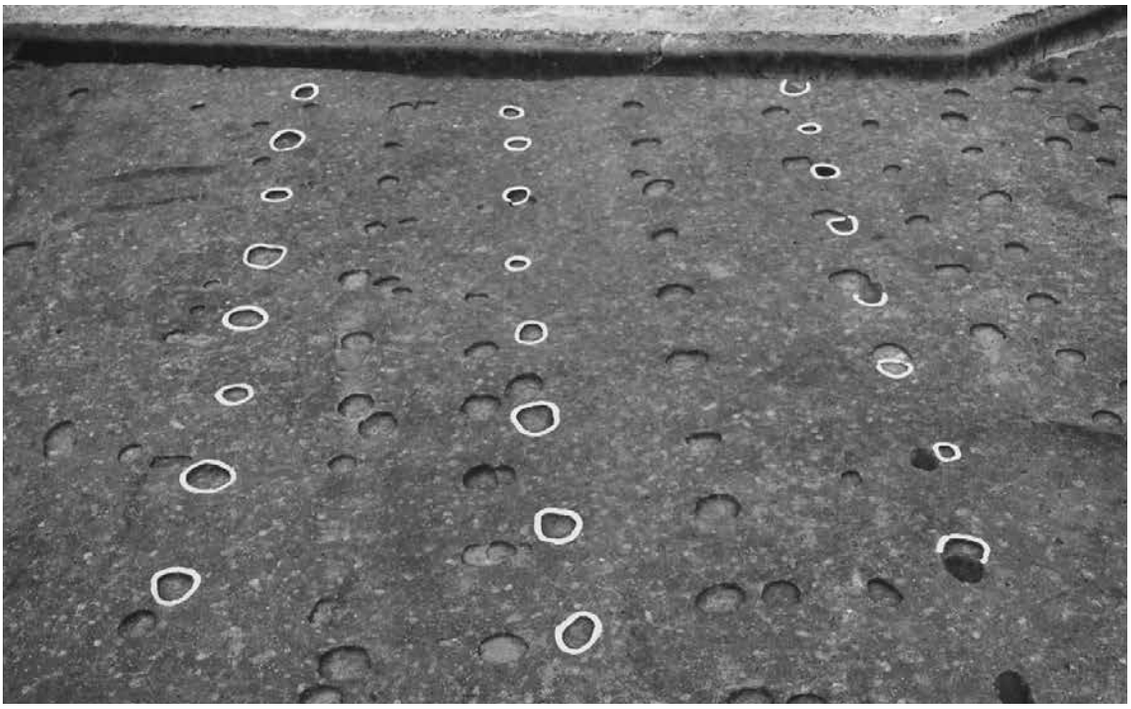
1区第1面　全景
西から

1区第1面全景
北西から

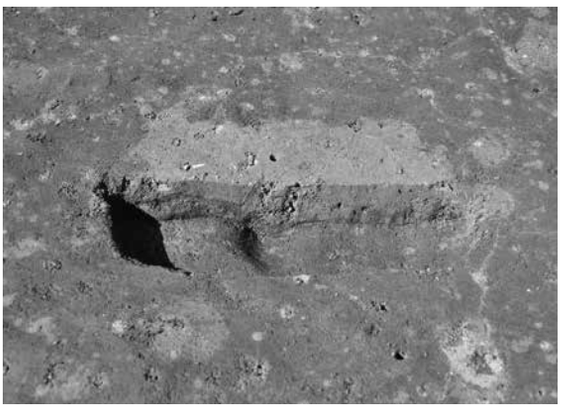
1区第1面全景
南から

写真図版3　遺構

1区第1面全景
南東から



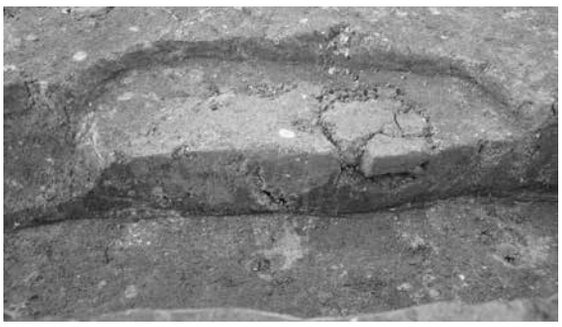
耕作痕列群１　南から



（左）耕作痕列群１
P1断面　東から

（右）耕作痕列群１
P3断面　南から

耕作痕列群２　北から



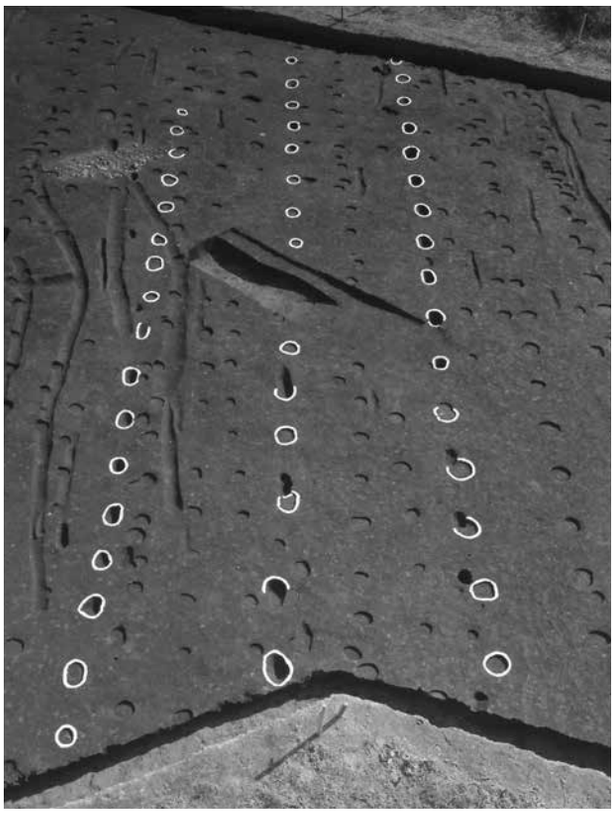
（左）耕作痕列群2
P1断面　東から

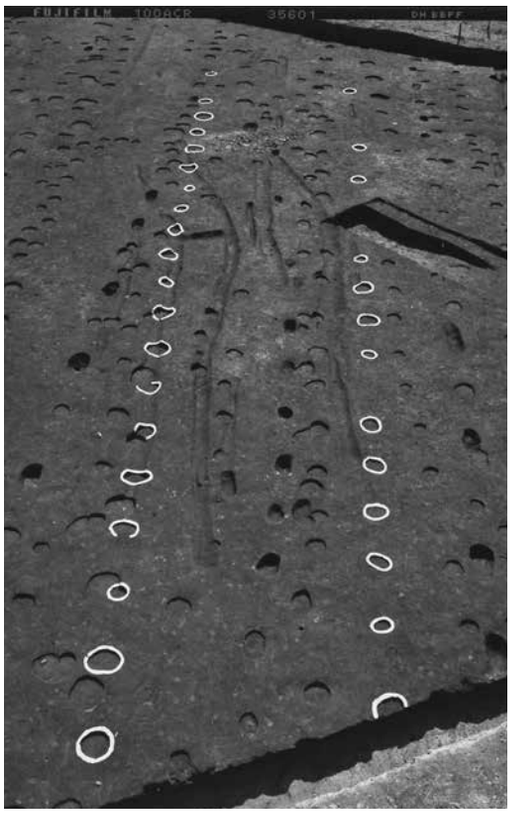
（右）耕作痕列群3
P3断面　東から

（左）耕作痕列群２
P2断面　南から

（右）耕作痕列群３
P7断面　南から

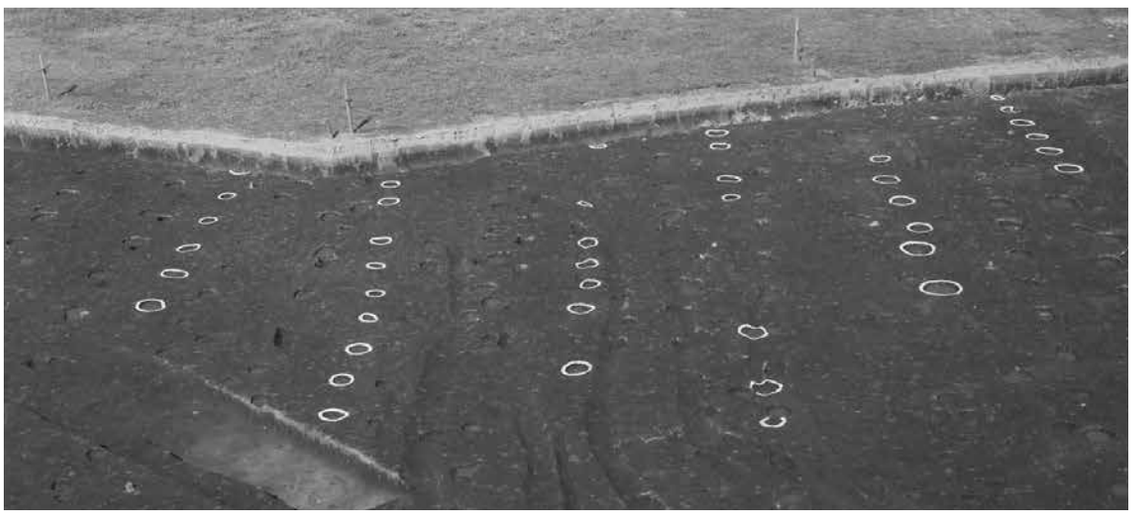
写真図版5　遺構





（左）耕作痕列群３
北から

（右）耕作痕列群５
北から



耕作痕列群４　南から

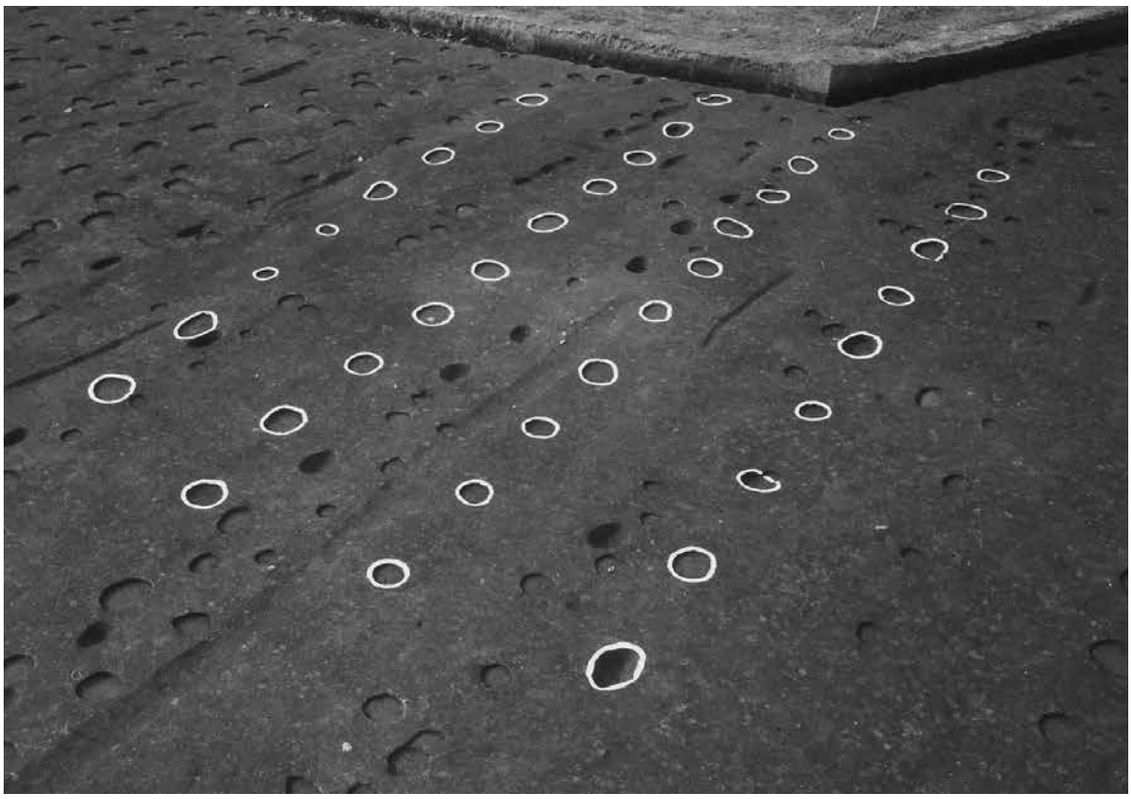
（左）耕作痕列群６
P1断面　南から

（右）耕作痕列群６
P3断面　南から

（左）耕作痕列群６
P5断面　東から

（右）耕作痕列群６
P6断面　東から

耕作痕列群７　北から



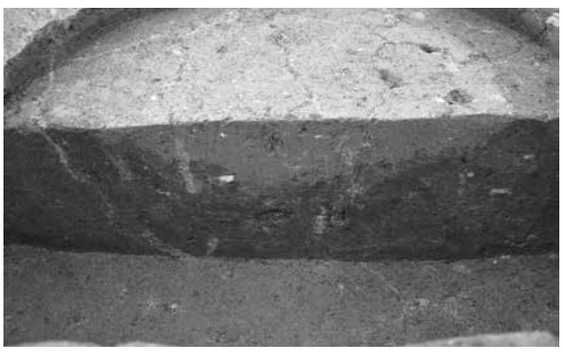
耕作痕列群８　南から

（左）耕作痕列群８
P2断面　東から

（右）耕作痕列群８
P3断面　南から

写真図版7　遺構

耕作痕列群９　北から



（左）耕作痕列群９
　　P2断面　東から

（右）耕作痕列群９
　　P4断面　東から

（左）耕作痕列群９
　　P3断面　東から

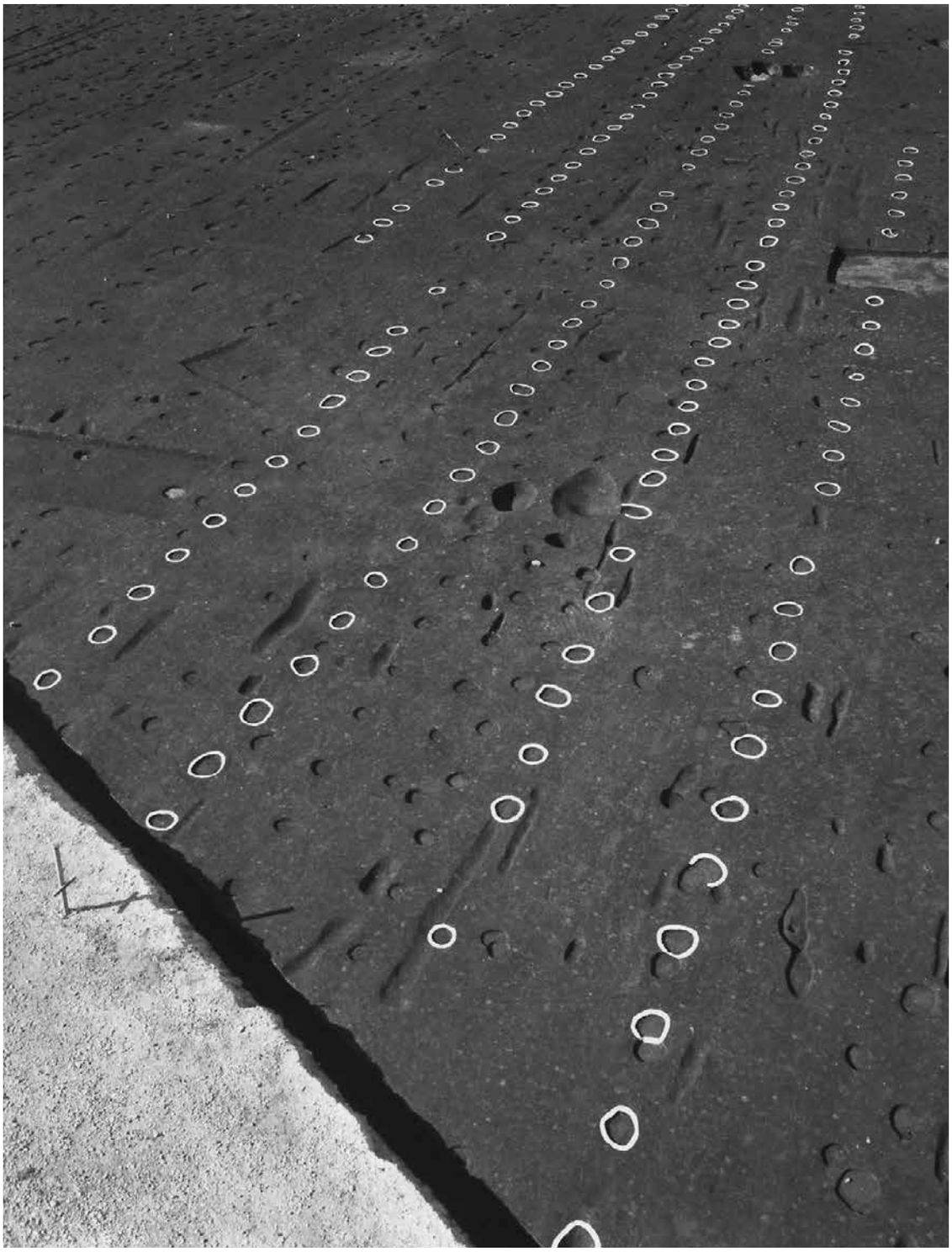
（右）耕作痕列群９
　　P5断面　東から

（左）耕作痕列群10
　　P1断面　東から

（右）耕作痕列群10
　　P3断面　東から

（左）耕作痕列群10
P6断面　南から

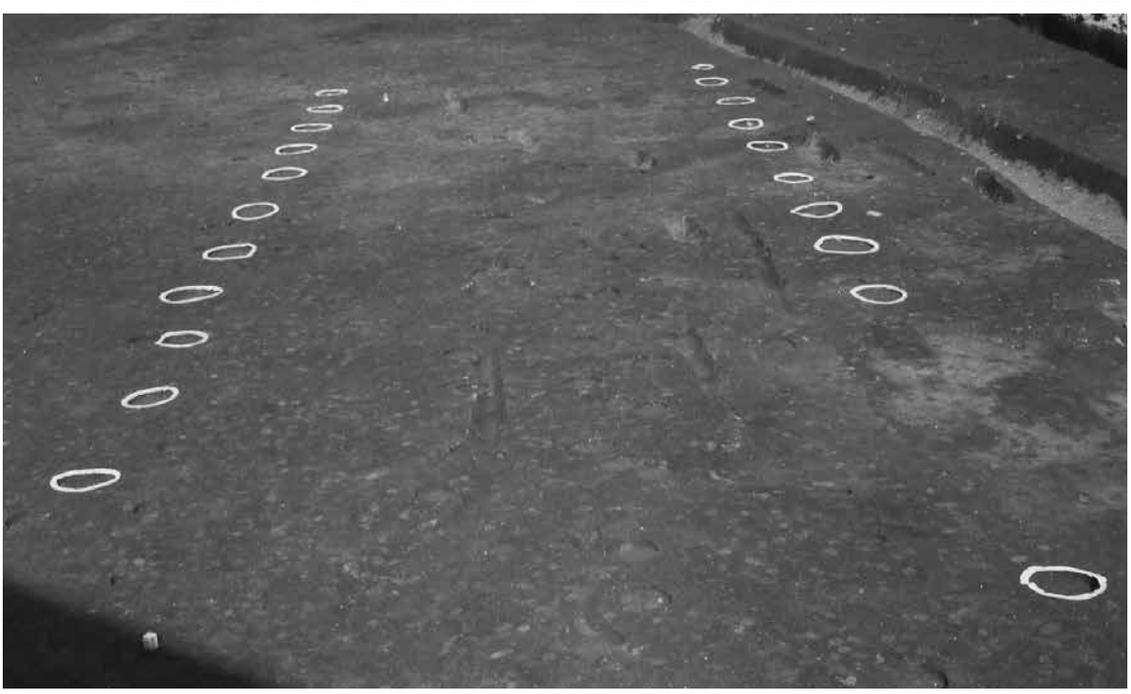
（右）耕作痕列群10
P6断面　南から



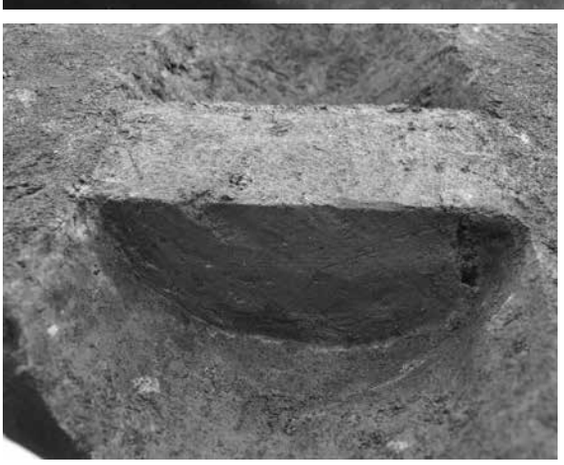
耕作痕列群10 南から

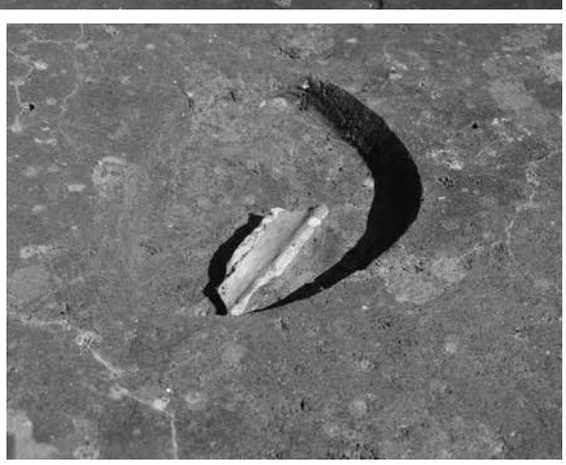
写真図版9　遺構

耕作痕列群12
北西から



耕作痕列群14 南から

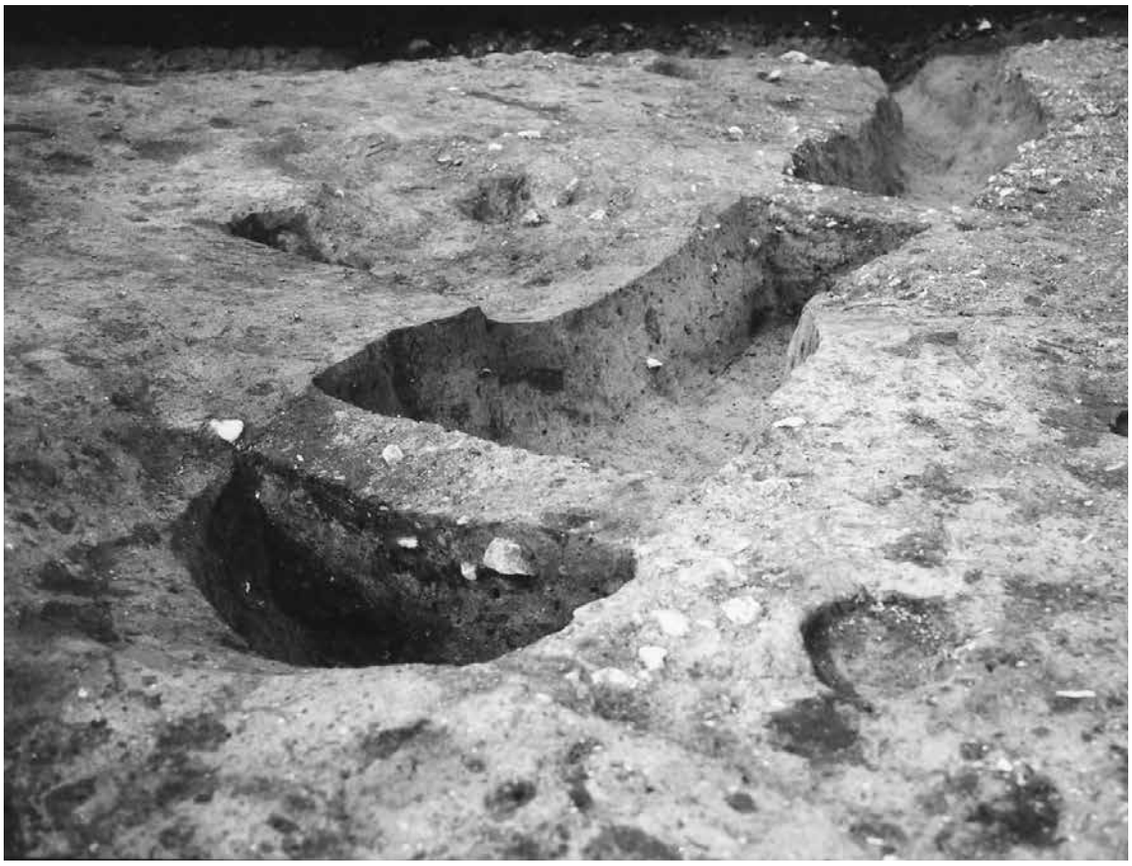




（左）耕作痕列群12
P1断面　南から

（右）耕作痕列群14
P1土器出土状況
南から

SD01全景
北東から

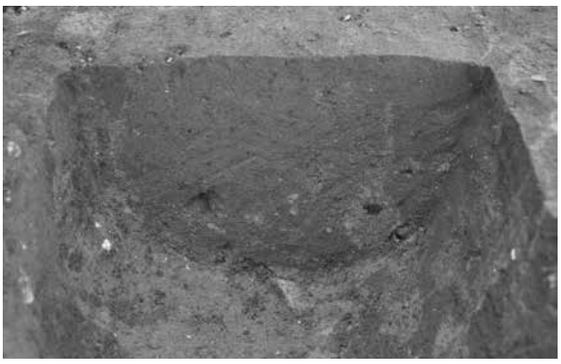


SD02全景　南から

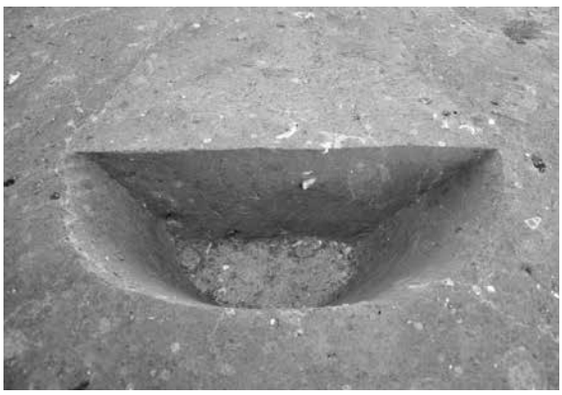
（左）SD02断面①
北から

（右）SD02断面②
北東から

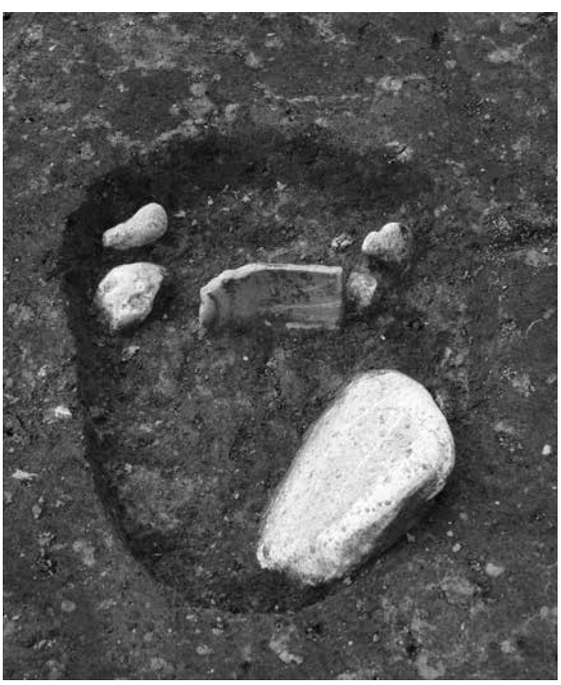
写真図版11　遺構



（左）SK02断面
南から
（右）SK03断面
南から



（左）SK04断面
北から
（右）SK05断面
南から

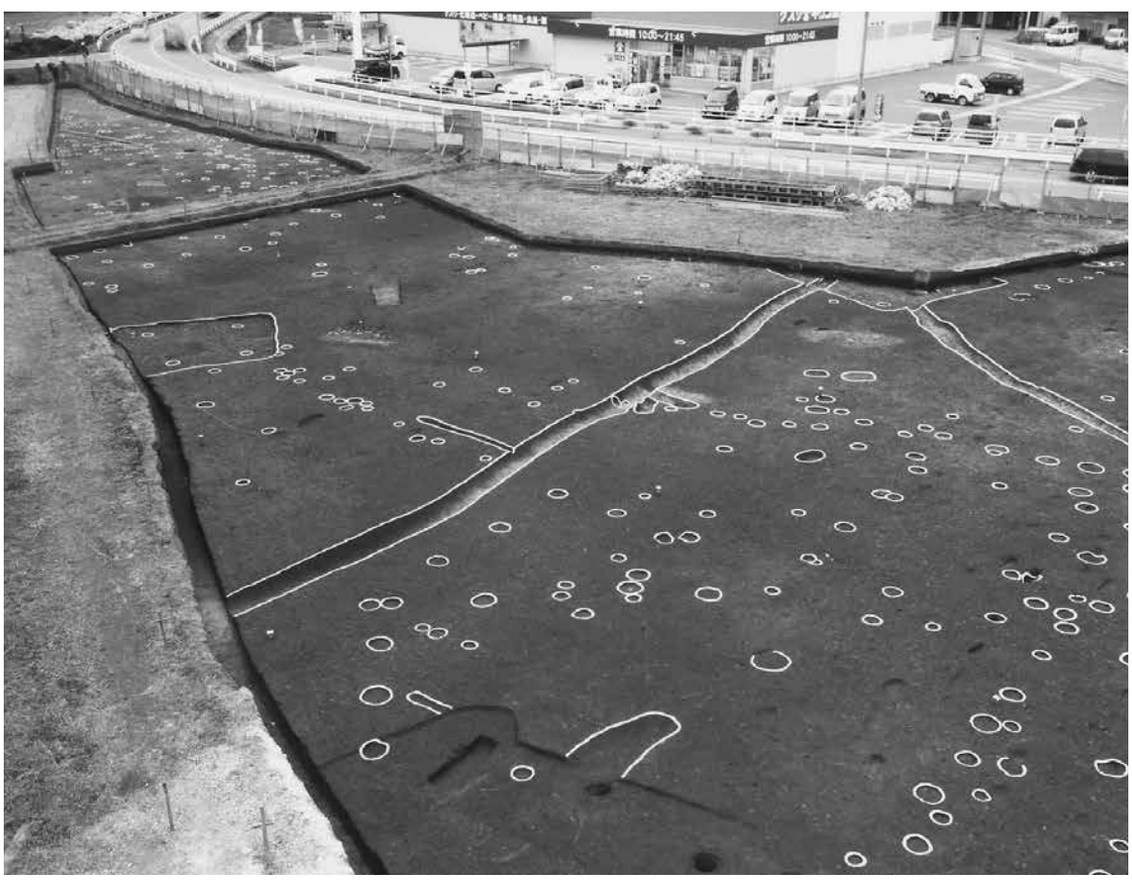


（左）P02土器出土
状況　南から
（右上）鋤溝群01
鋤溝2　南から
（右下）鋤溝群01
鋤溝3　南から

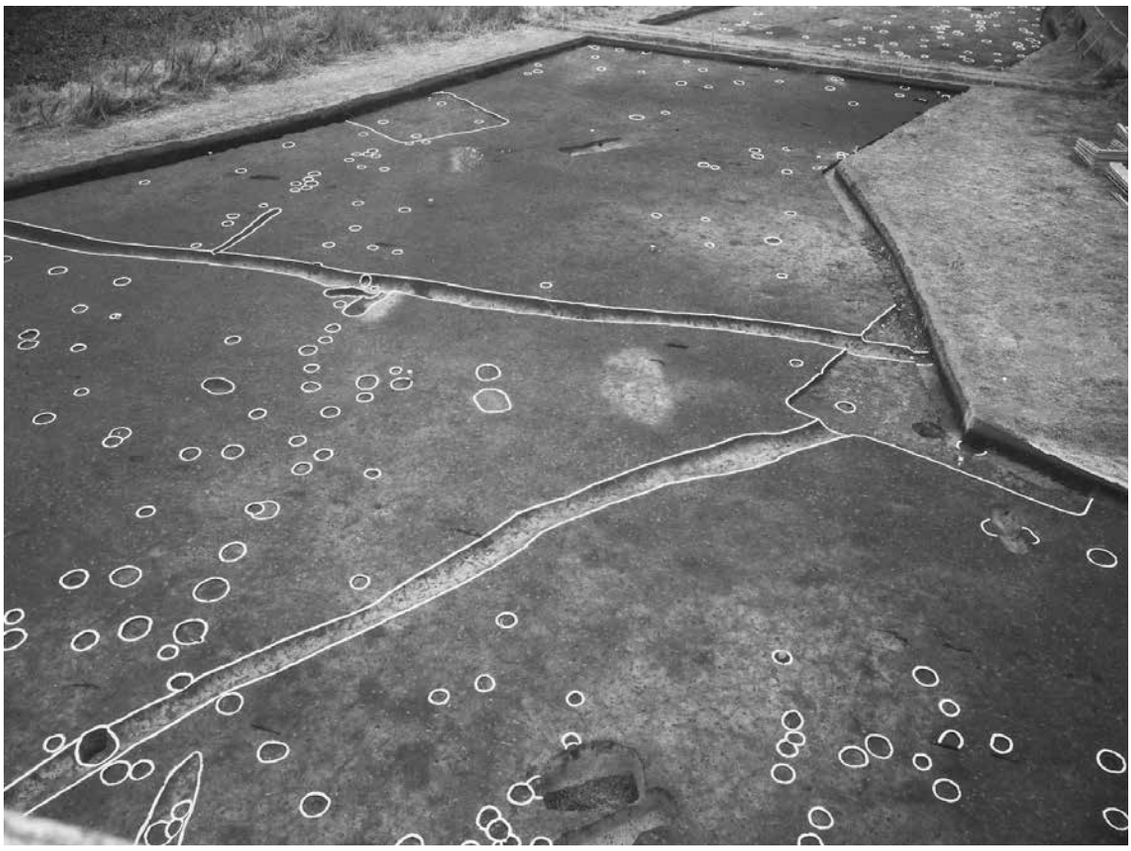
第2面　俯瞰

写真図版13　遺構

第2面全景　西から



第2面西半部
南東から



第2面西半部
北東から

第2面東半部　南から

写真図版15　遺構

SH01　東から

SH01　北から

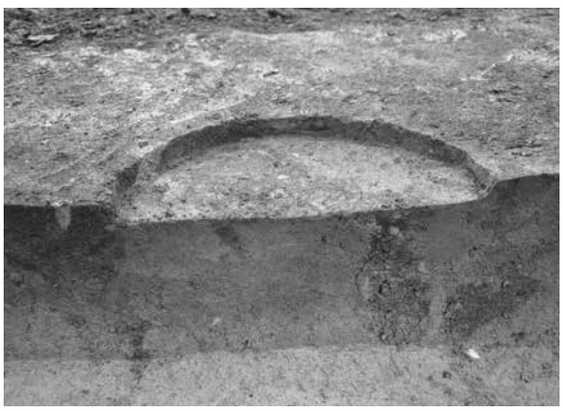
SH01土器　東から

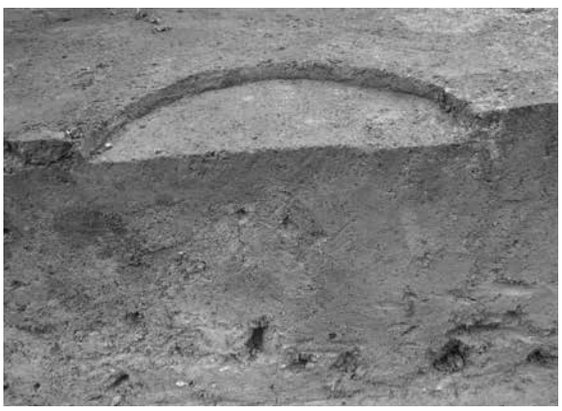
（左）SH01
土器出土状況
北から

（右）SH01
97出土状況
東から

（左）SH01
98出土状況
東から

（右）SH01
99出土状況
東から





（左）SH02　P1
東から

（右）SH02　P2
東から

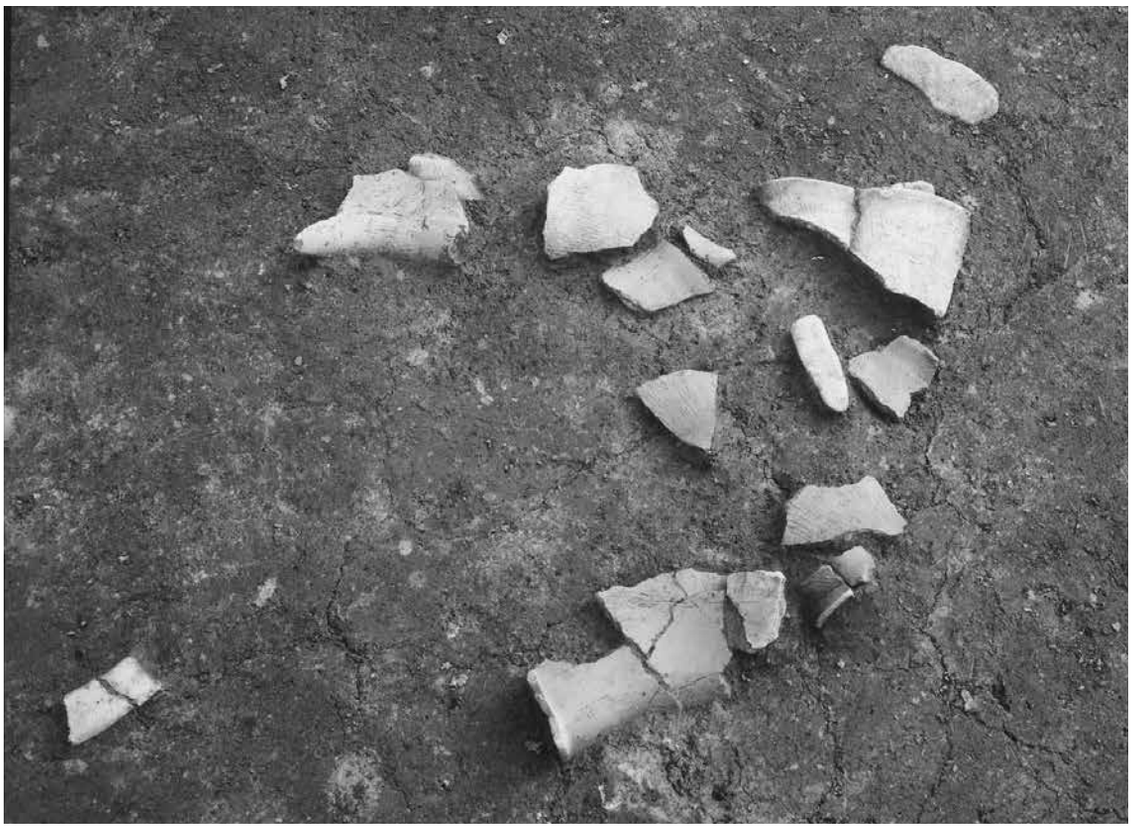
写真図版17　遺構

SH02全景　東から

SH02全景　南東から

SH02全景　南から

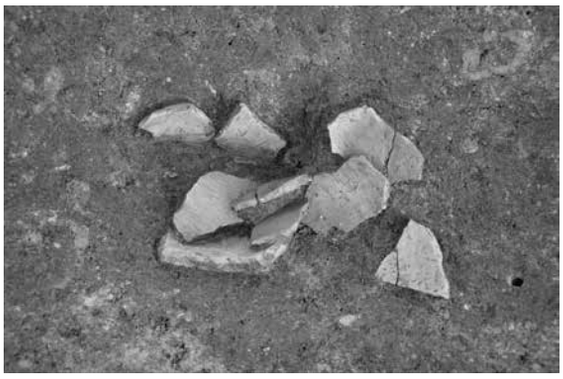
SH02
土器出土状況
東から



SH02
土器出土状況
西から

（左）SH02
116出土状況
西から

（右）SH02
115出土状況
北から

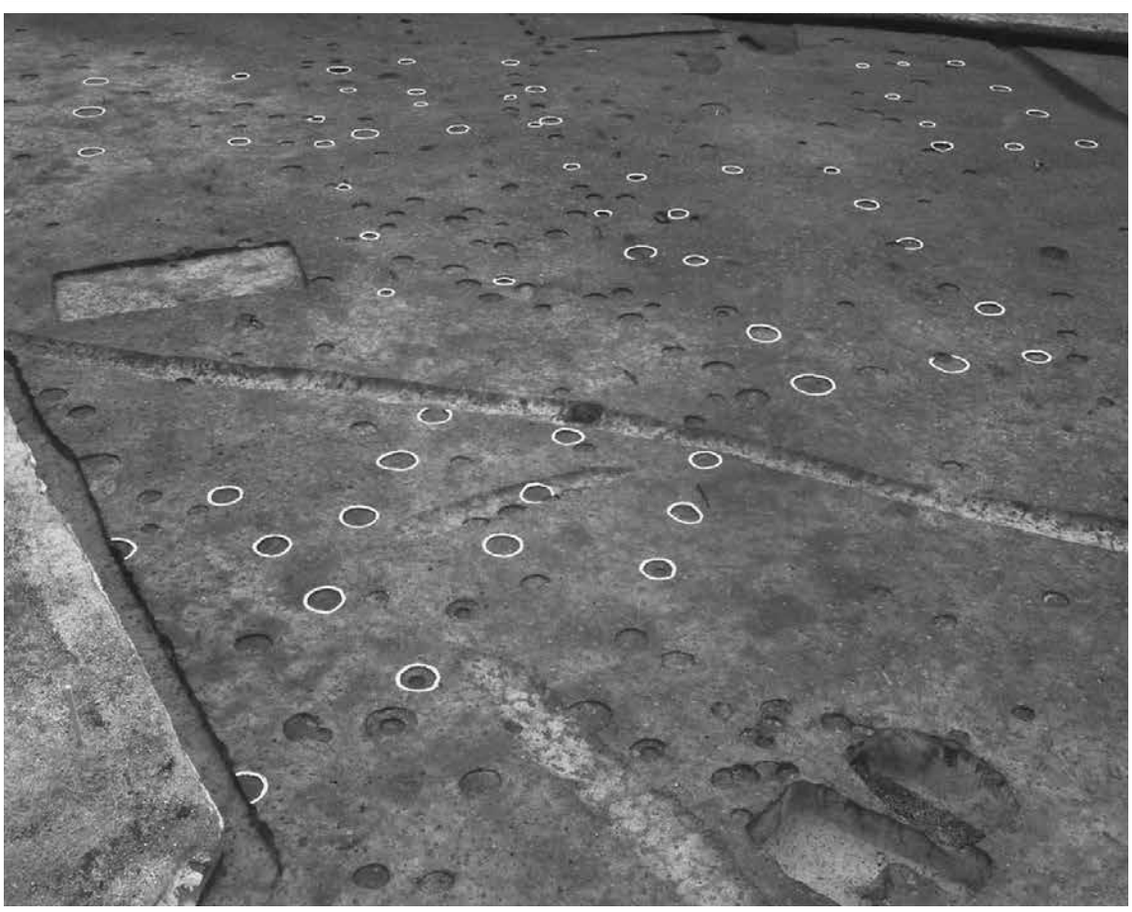


（左）SH02
117出土状況
西から

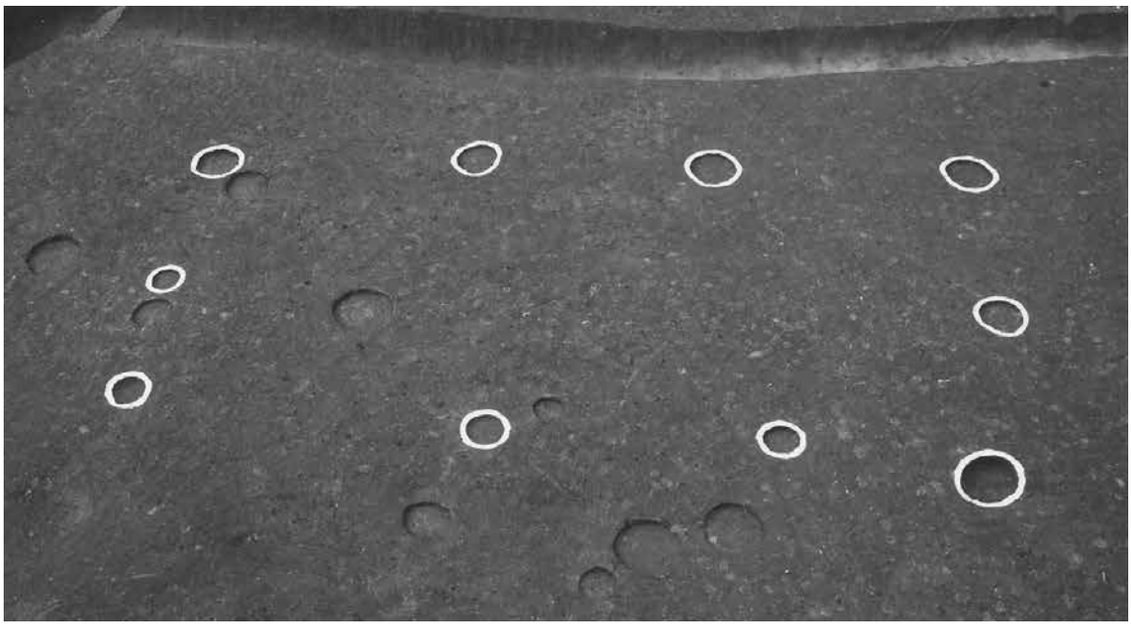
（右）SH02
108出土状況
西から

写真図版19　遺構

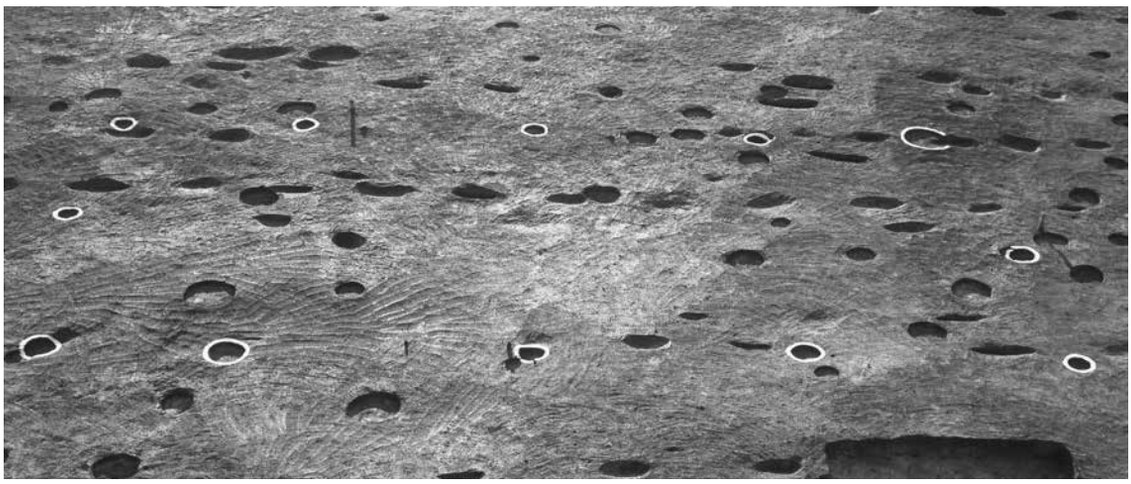
第2面建物群　南から



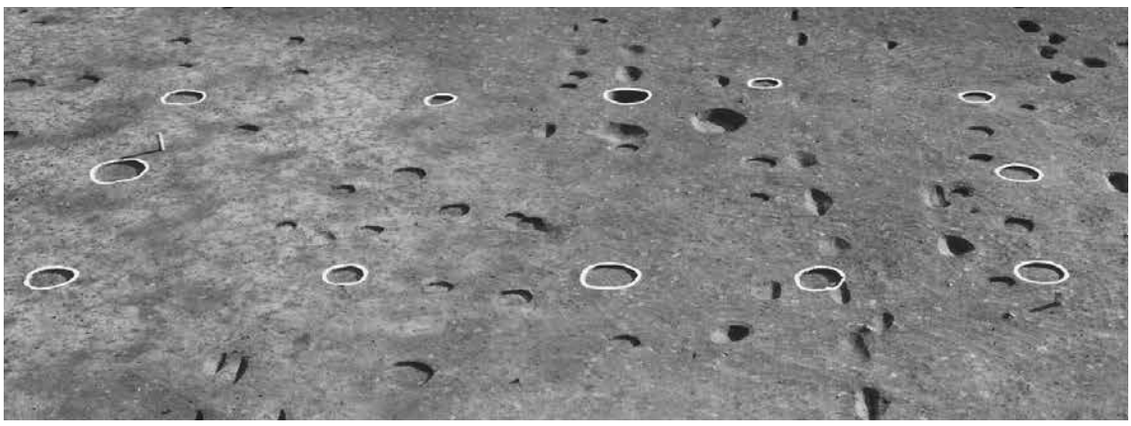
第2面建物群　北から



SB01　東から



SB03　東から



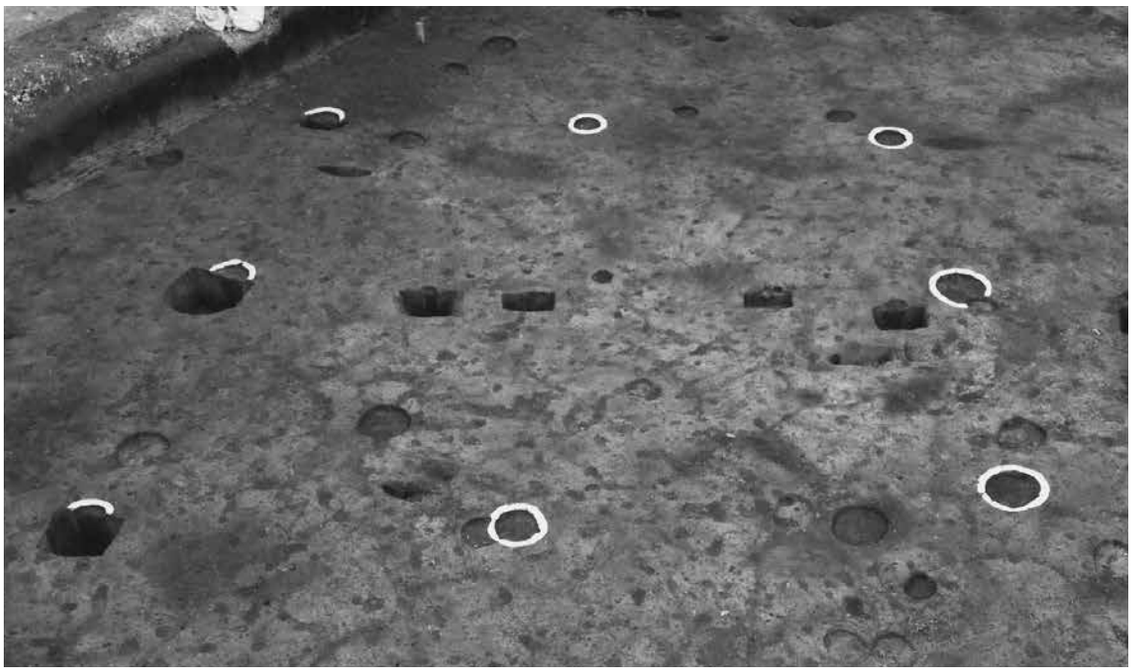
SB04　北から

SB05　北から

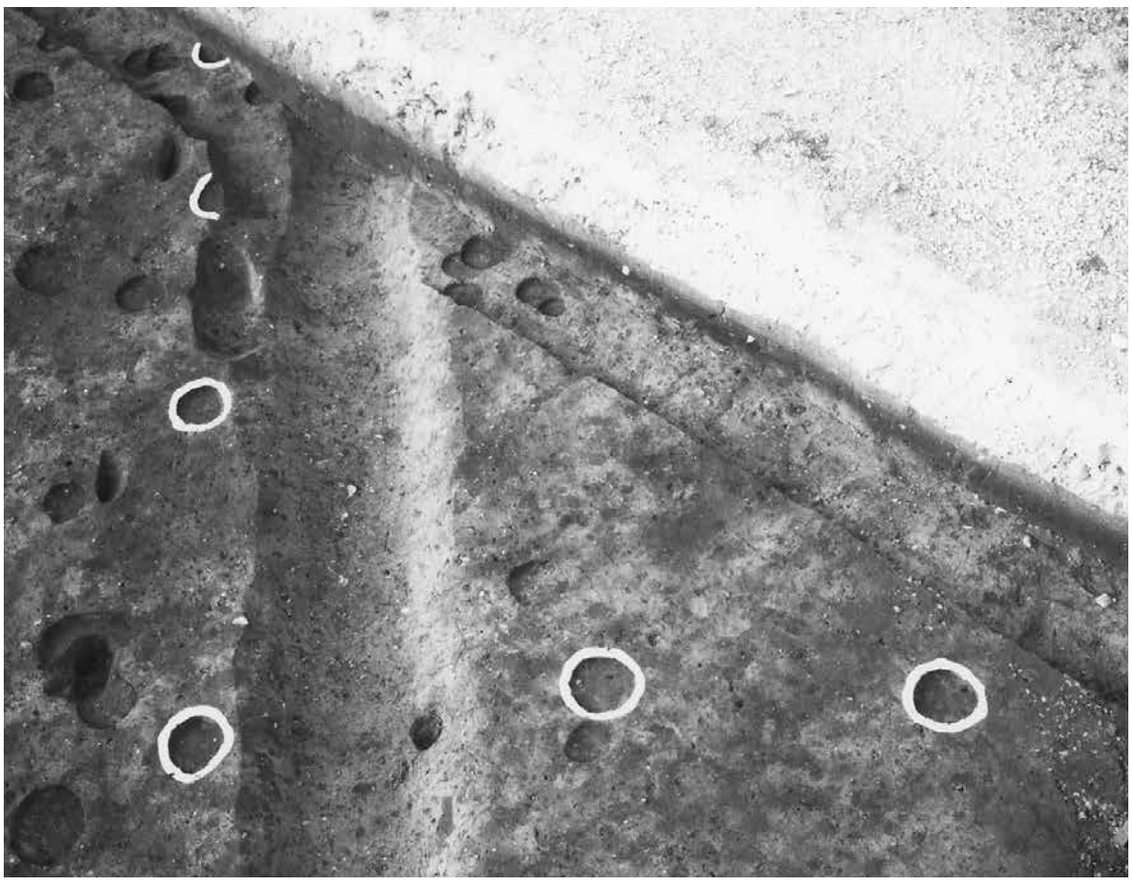
写真図版21　遺構

（左）SB05
P2断面　北から

（右）SB05
P2土器出土状況
北から



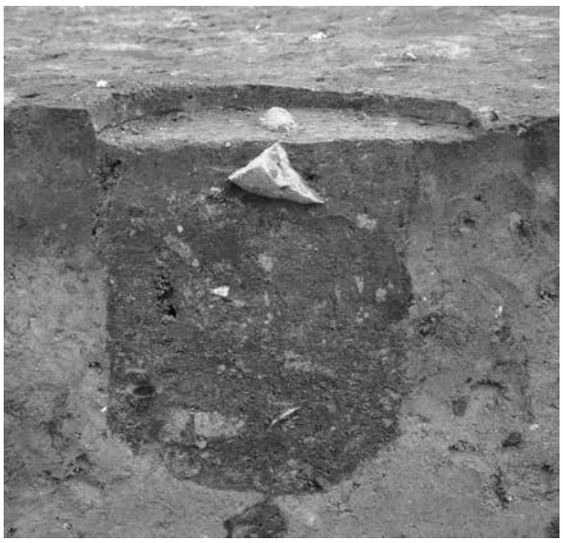
SB06　東から



SB07　南から

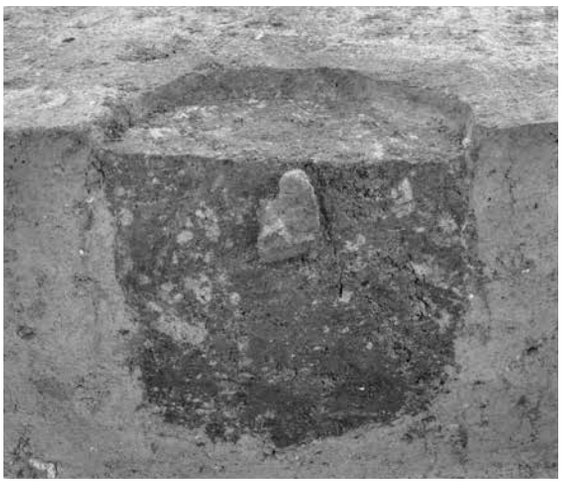
（左）SB09
P5断面　西から

（右）SB09
P6断面　西から



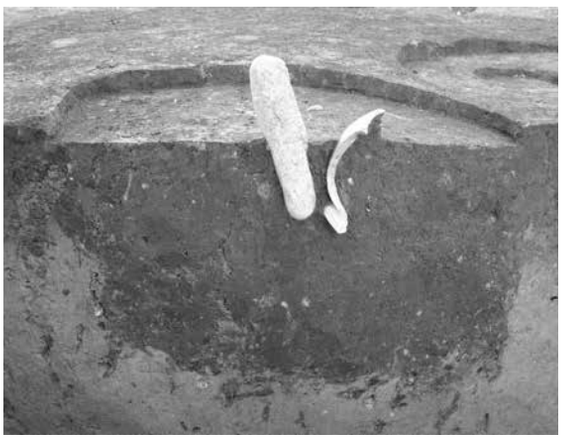
（左）SB09
P5土器出土状況
西から

（右）SB09
P8断面　西から



（左）SB10
P1土器出土状況
東から

（右）SB10
P3断面　南から

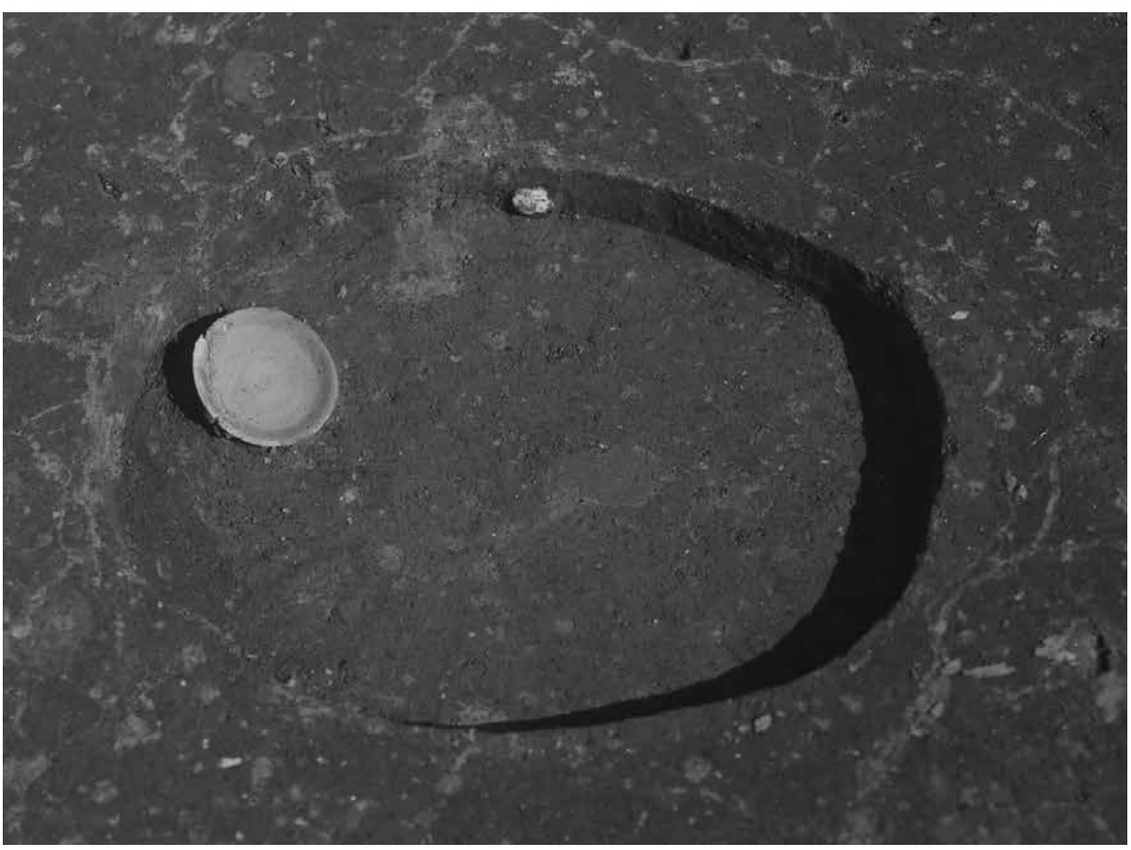


（左）SB10
P2断面　東から

（右）SB10
P4断面　南から

写真図版23　遺構

SB11　南東から



P06土器出土状況
西から

SX01全景　北から

（左）SX01
土器出土状況
東から

（右）SX01
土器出土状況
南から

写真図版25　遺構

（左）SD03断面
南から
（右）SD04断面
南東から

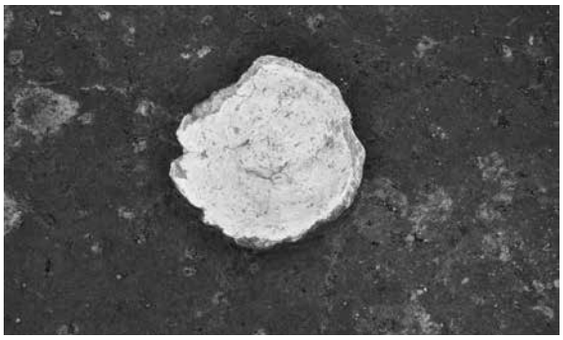
（左）SD05
全景　南から
（右上）SD05
断面Ａ　南から
（右下）SD05
断面Ｂ　南から

（左）SD06
Ａ断面　南から
（右）SD06
Ｂ断面　南から

（左）SD08Ａ断面
南から
（右）SD08Ｂ断面
南から

SD08
土器出土状況
東から

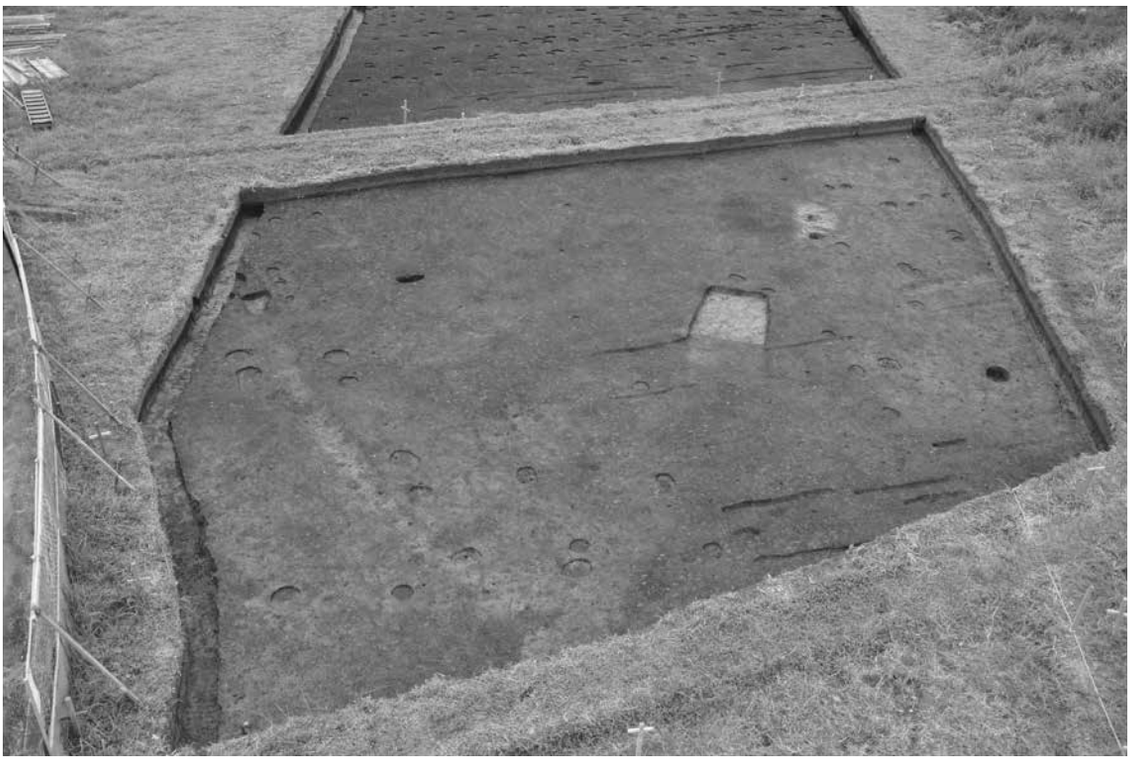
（左）SD09A断面
東から
（右）SD09B断面
東から



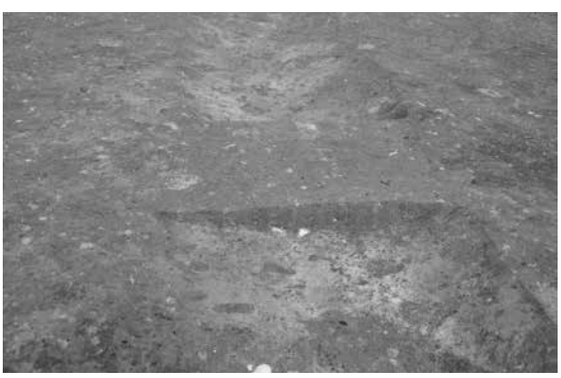
（左）SD09
151出土状況
南から
（右）SD09
152出土状況
北から

（左）SK06断面
南から
（右）SK07断面
南から

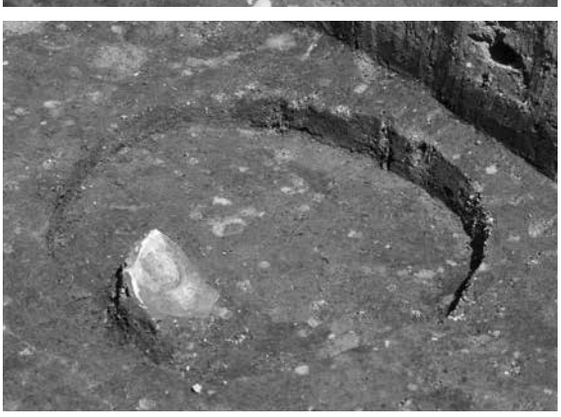
写真図版27　遺構



第1面全景　西から



（左）SD10断面
西から
（右）SD11断面
西から



（左）P15
土器出土状況
南西から
（右）SK09断面
北から

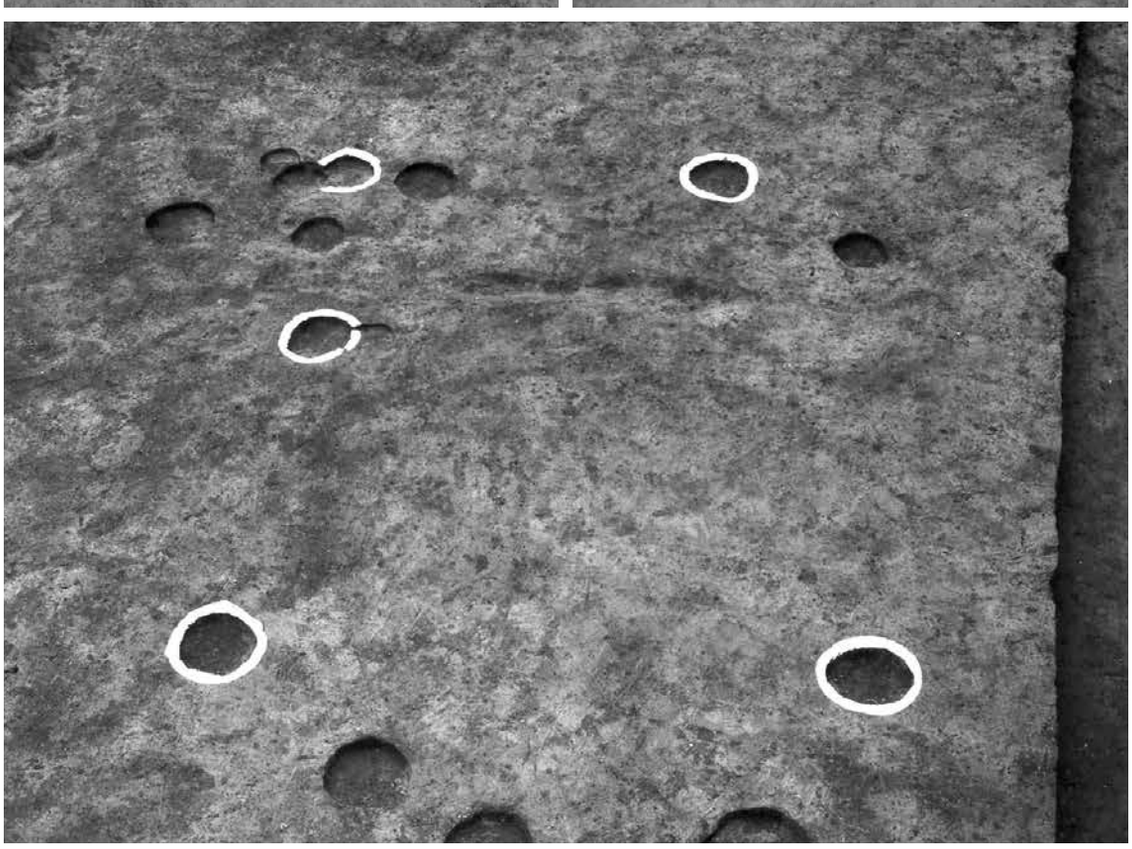
第2面全景　東から

第2面全景　西から

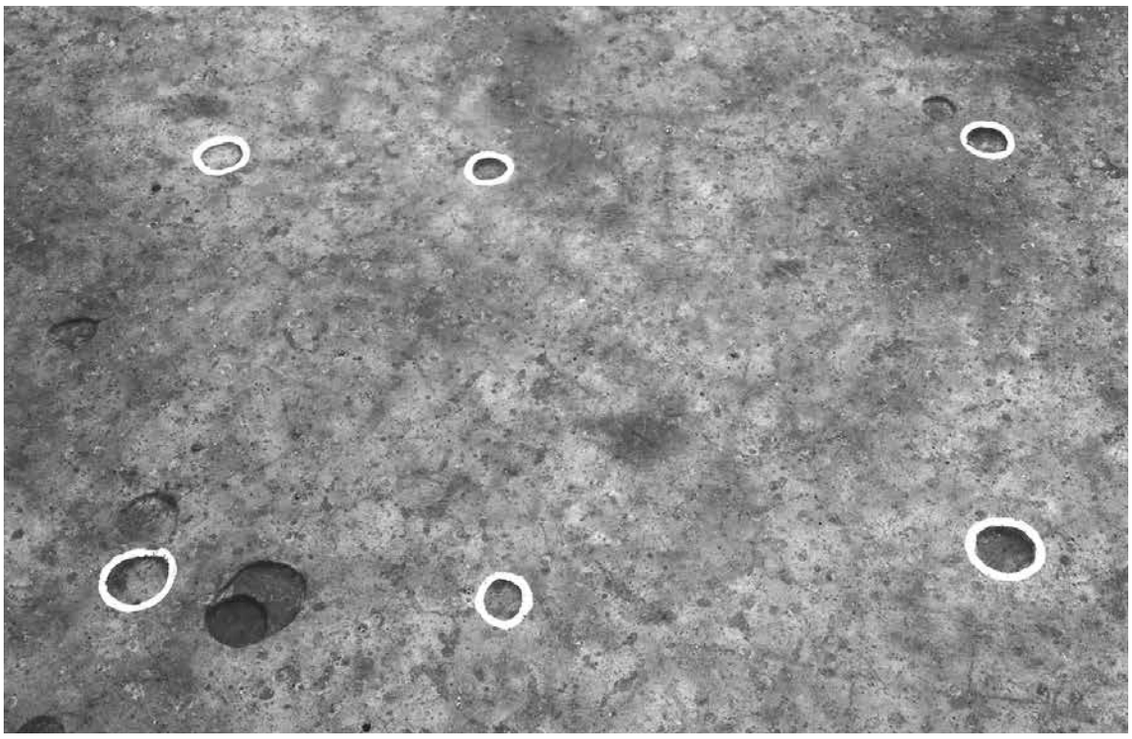
写真図版29　遺構

SB13　北から

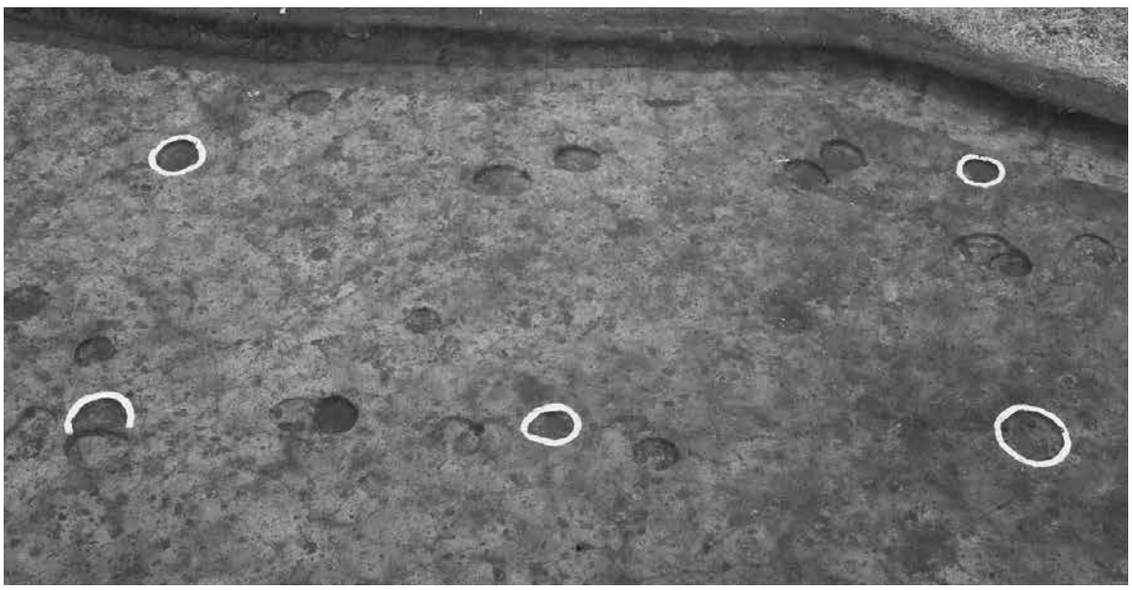
（左）SB13－P1断面
北から
（右）SB14　P5
土器出土状況
西から



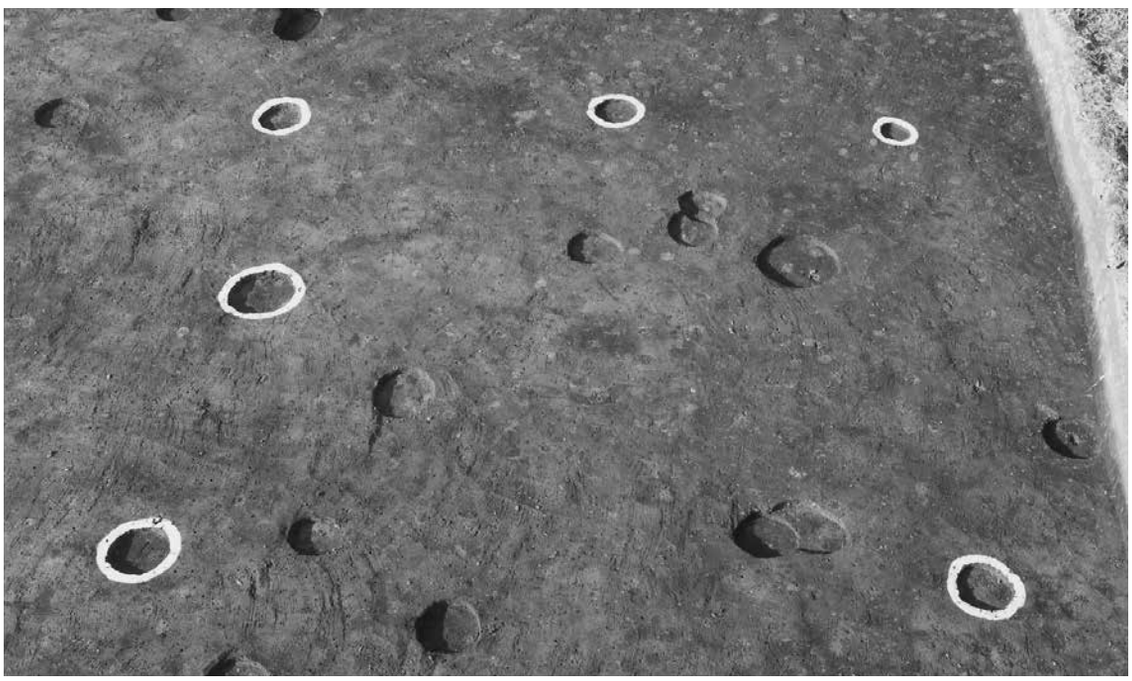
SB14　東から



SB15　北から



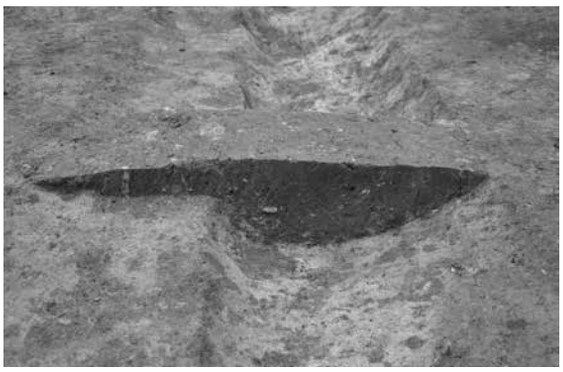
SB16　南から



SB17　南から

写真図版31　遺構

SB18　南から



（左）SD12断面
南から
（右）SD13断面
西から

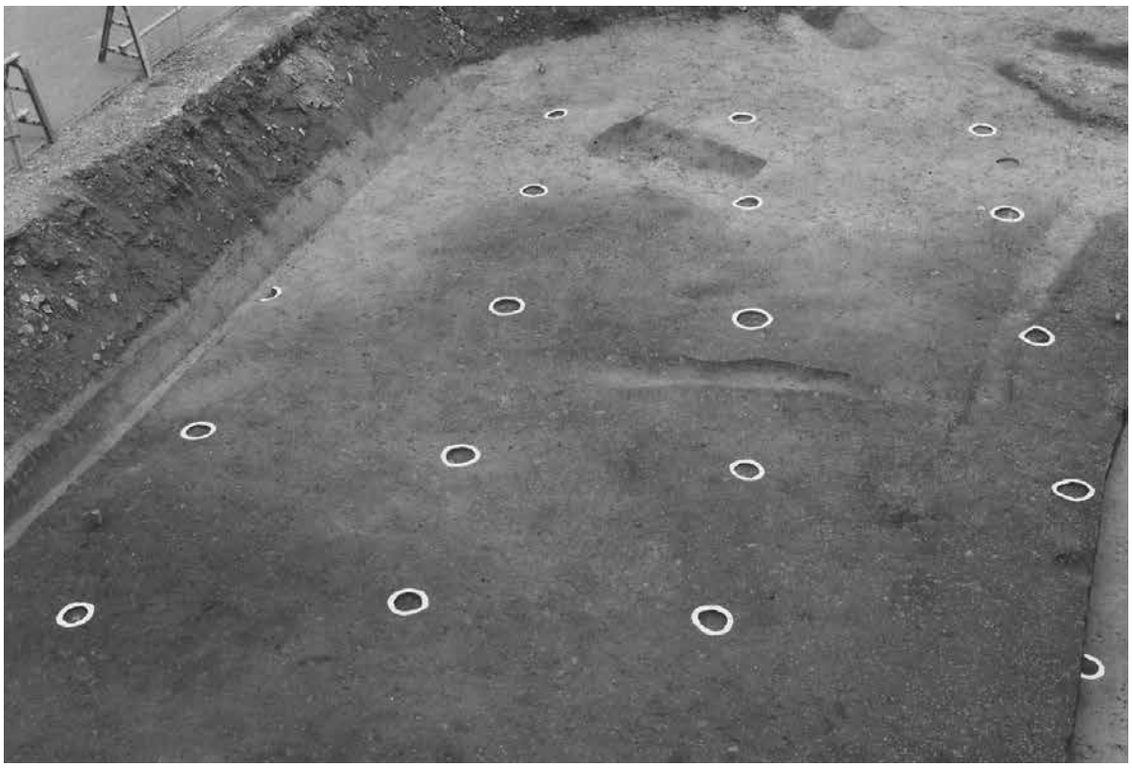
SD13
土器出土状況
北から

（左）SD13
202出土状況
南から
（右）SK10断面
南から

第1面全景　東から

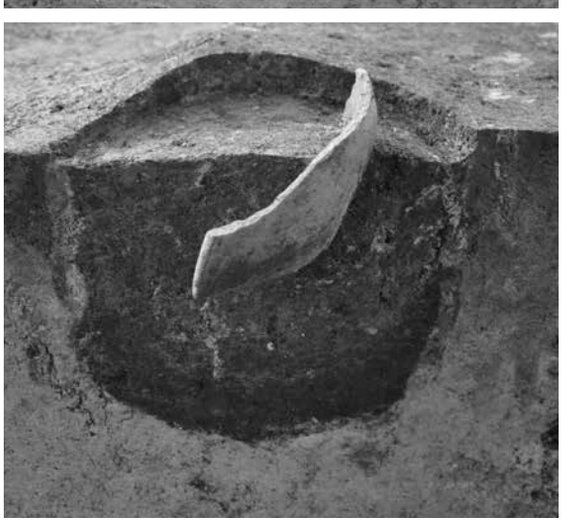
（左）SK14断面
南から
（右）SK15断面
東から

写真図版33　遺構



SB19　東から

（左）SB19－P11断面
東から
（右）SB19－P11
土器出土状況
東から

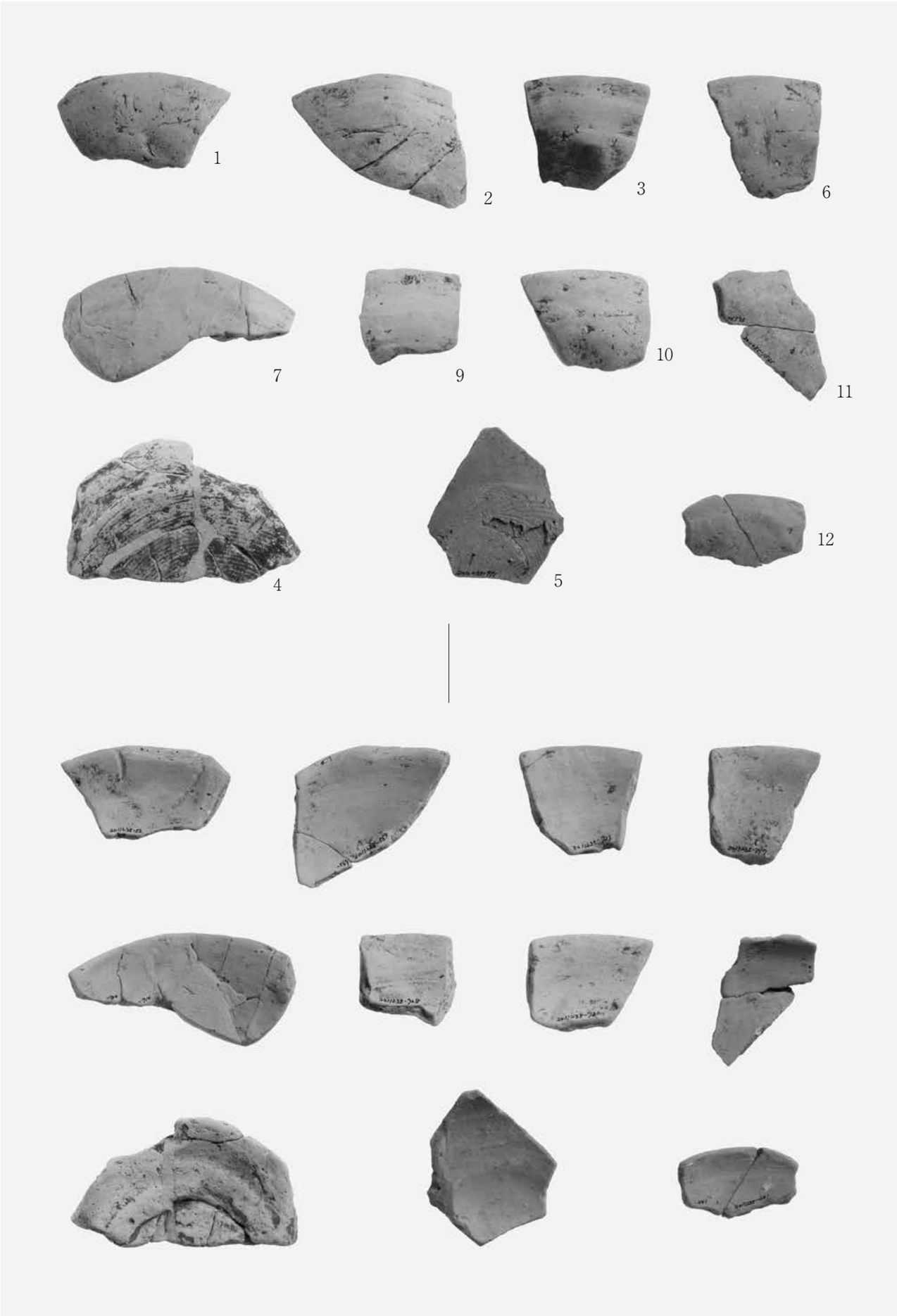


（左）SB19－P12断面
東から
（右）SB19- P13断面
南から

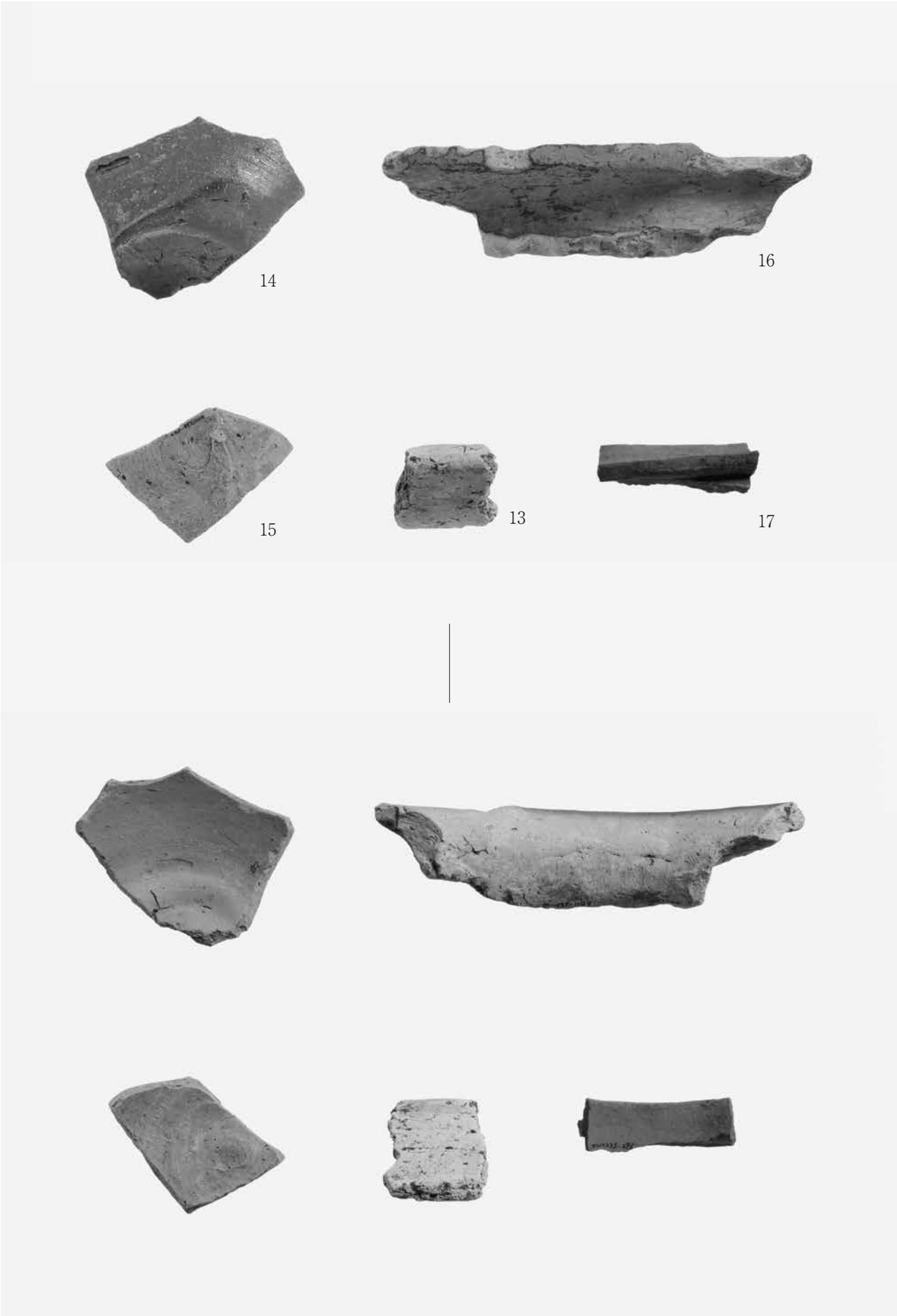
全景　北西から

全景　南東から

写真図版35　遺物



1：耕作痕列群 1 出土土器　2・11：耕作痕列群 3 出土土器　3：耕作痕列 15 出土土器　4：耕作痕列群 10 出土土器
5：鋤溝群 01 出土土器　6：耕作痕列群 4 出土土器　7・12：耕作痕列群 6 出土土器　9：耕作痕列群 05 出土土器
10：耕作痕列 16 出土土器



13：耕作痕列群２出土土器　14：耕作痕列群３出土土器　15：耕作痕列群５出土土器
16：耕作痕列群 14 出土土器　17：耕作痕列 17 出土土器

写真図版37　遺物

8

21

18

25

19

34

20

29

8：耕作痕列群３出土土器　18～21・25：柱穴出土土器　29：SD01 出土土器　34：SD02 出土土器

22

26

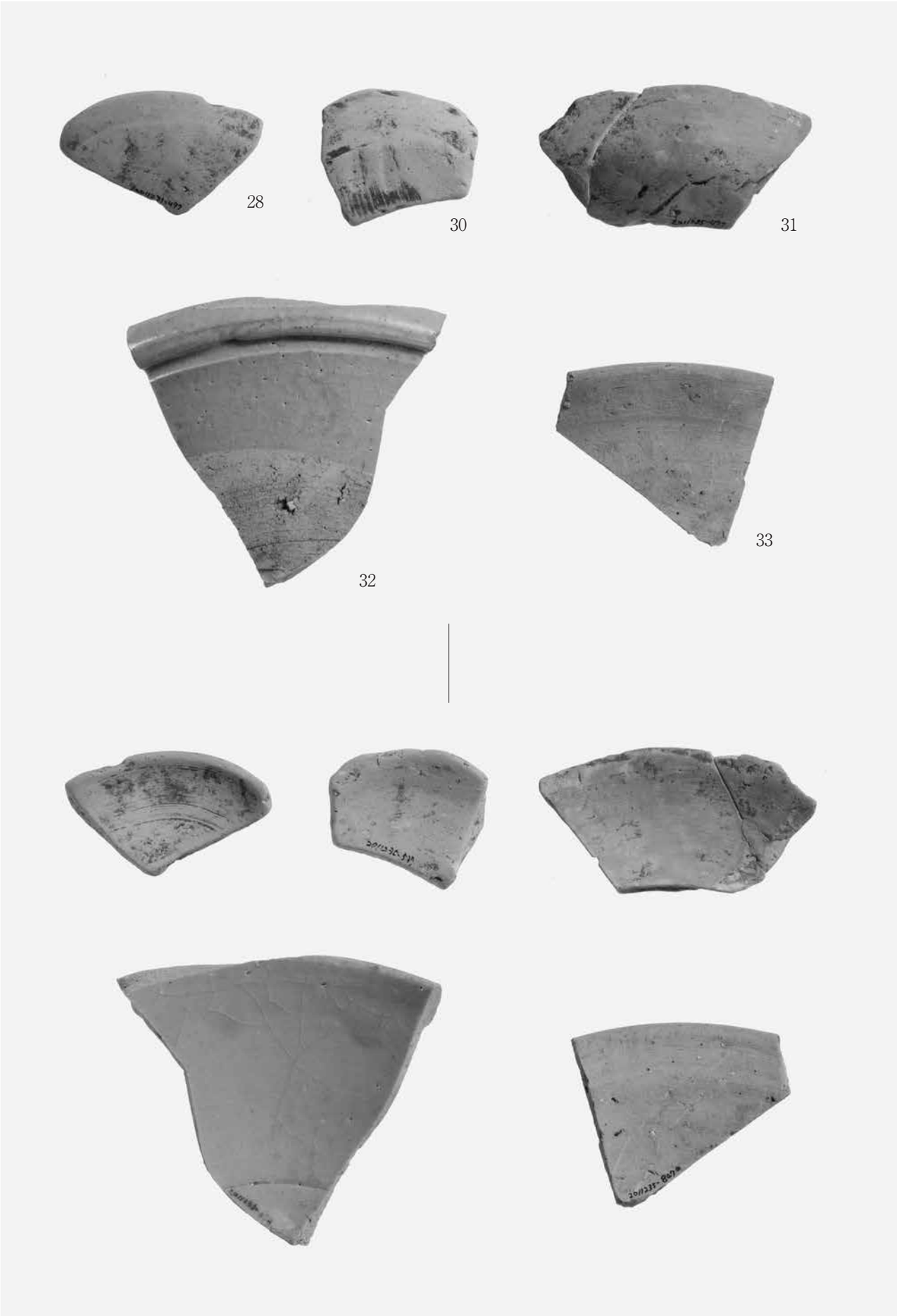
23

24

27

22 ～ 24・26・27：柱穴出土土器

写真図版39　遺物

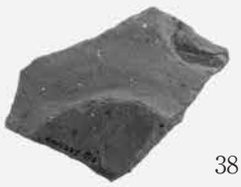


28・30 ～ 32：SD01 出土土器　33：SD02 出土土器

35

36

37

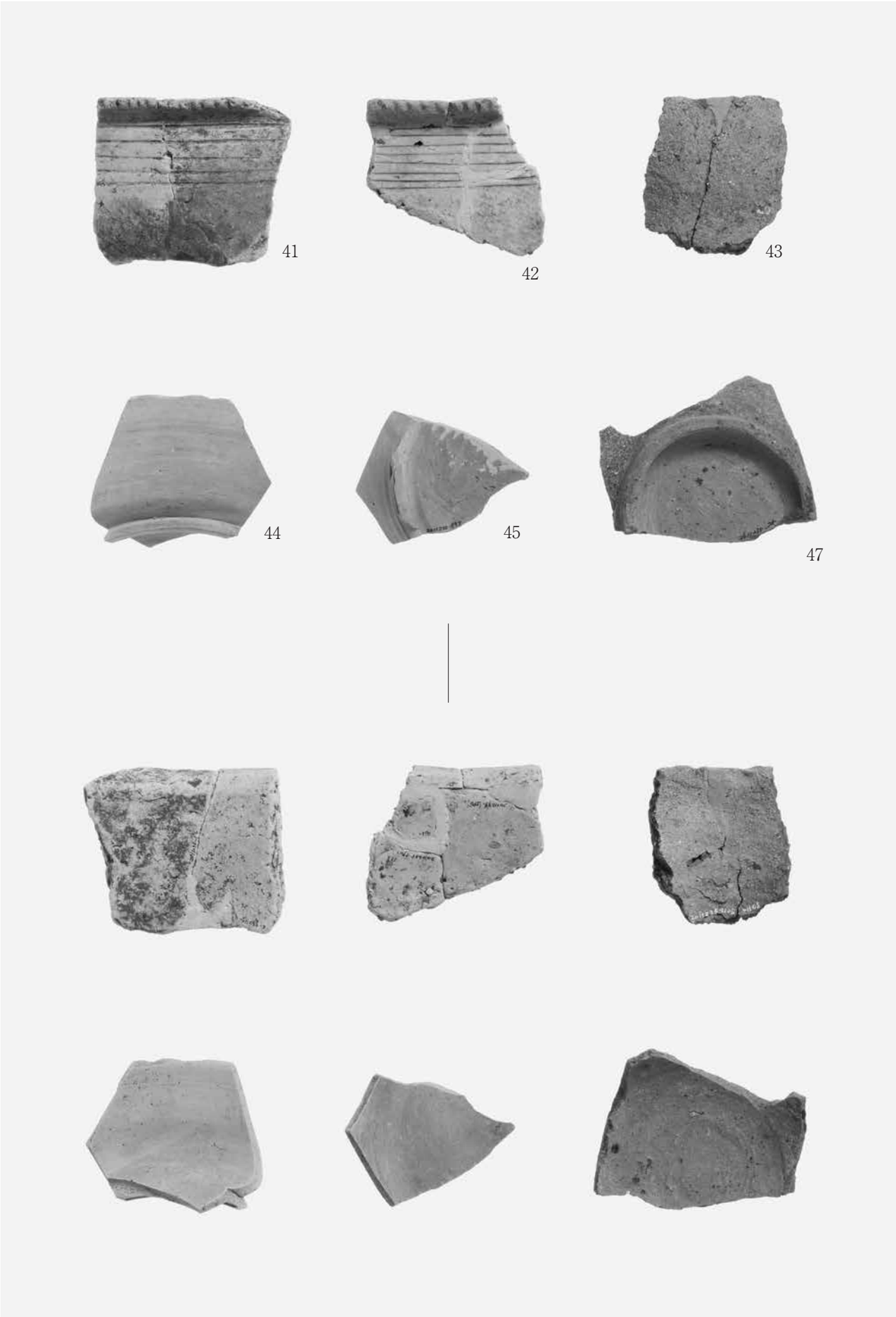

38

39

40

35：SK05 出土土器　36：SK02 出土土器　37：SK04 出土土器　38・39：SK01 出土土器　40：SK03 出土土器

写真図版41　遺物



41 ～ 45・47：1 区第 1 面包含層出土土器

46

48

65

73

74

78

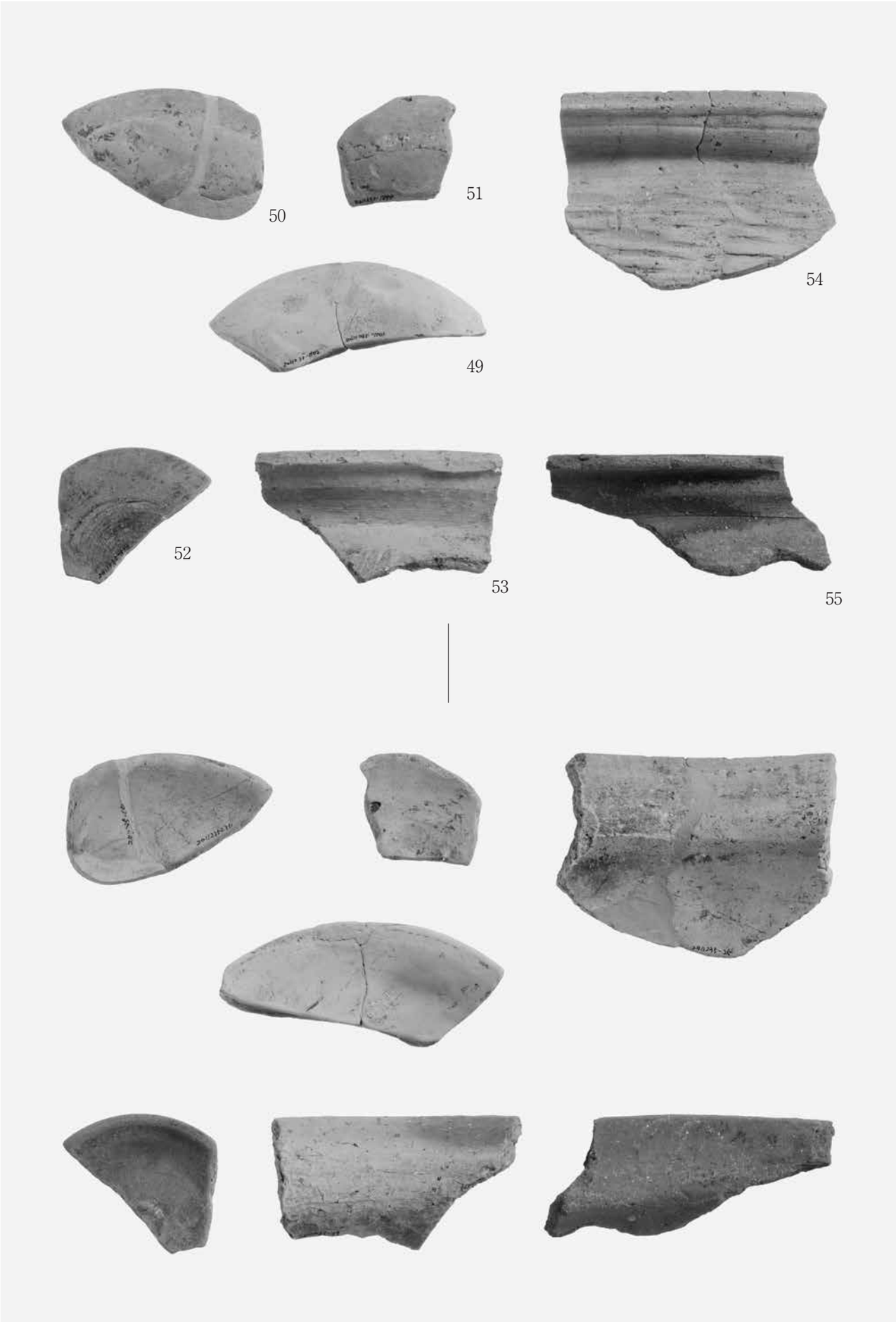
79

82

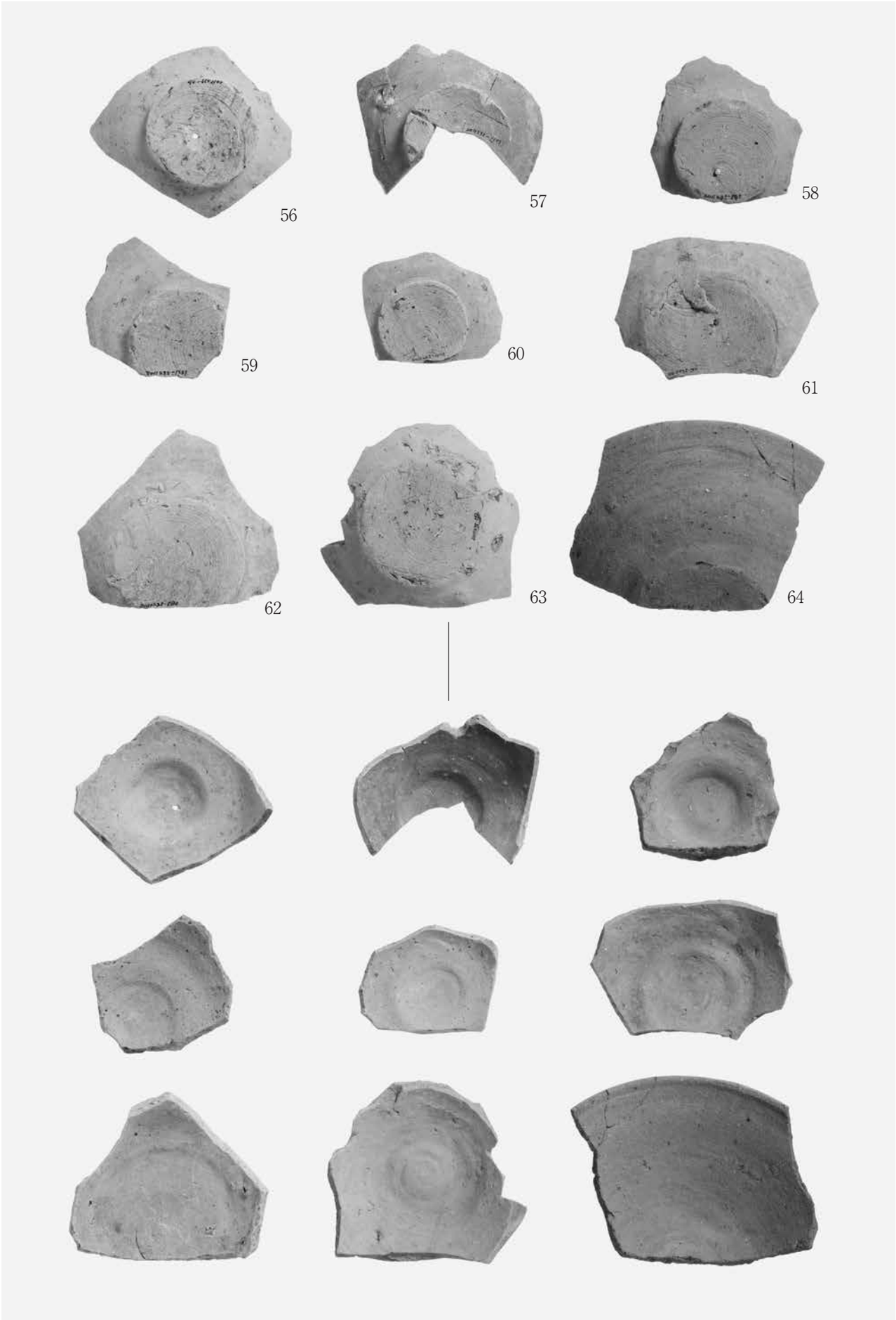
90

46・48・65・73・74・78・79・82・90：１区第１面包含層出土土器

写真図版43　遺物

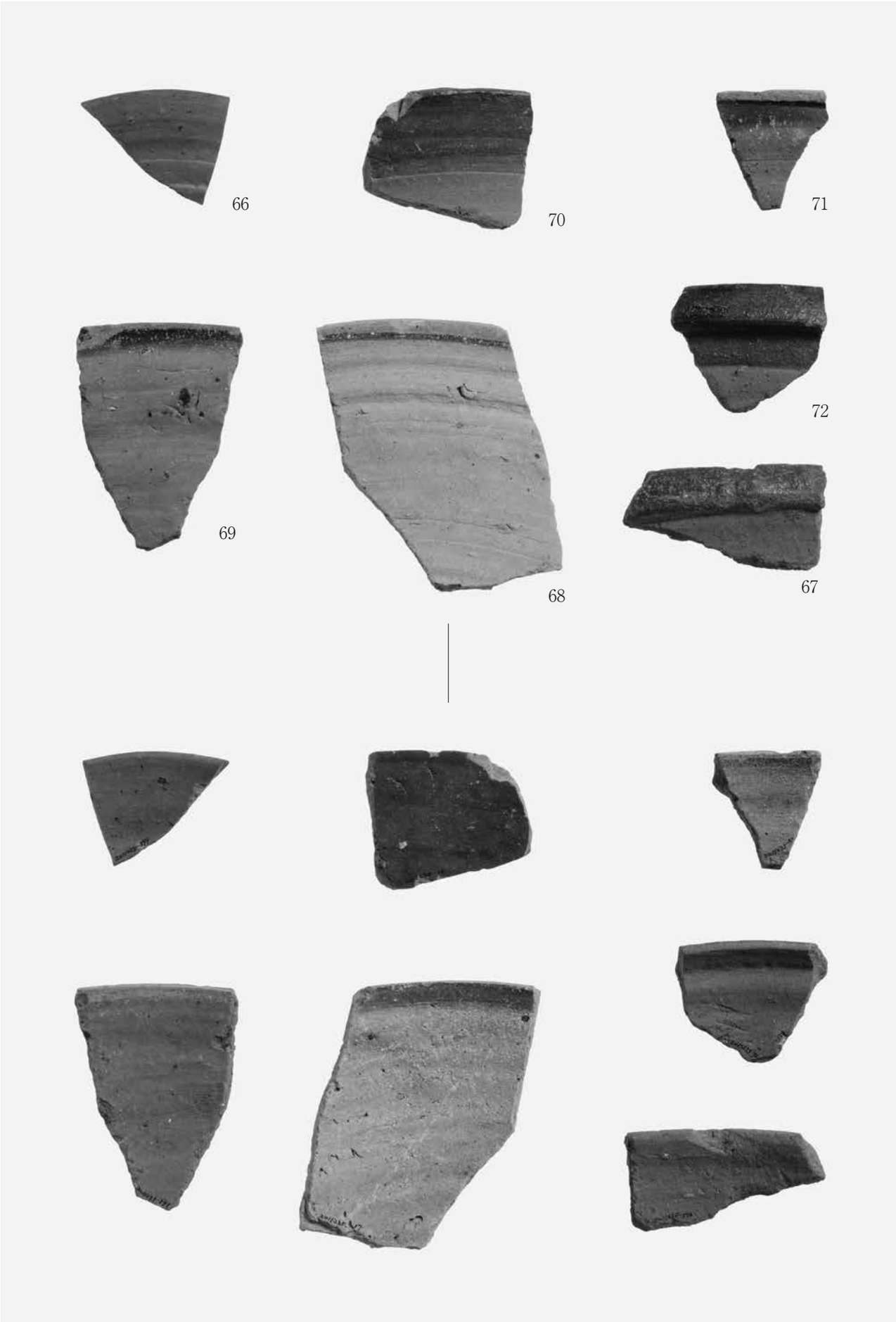


49 ～ 55： 1 区第 1 面包含層出土土器

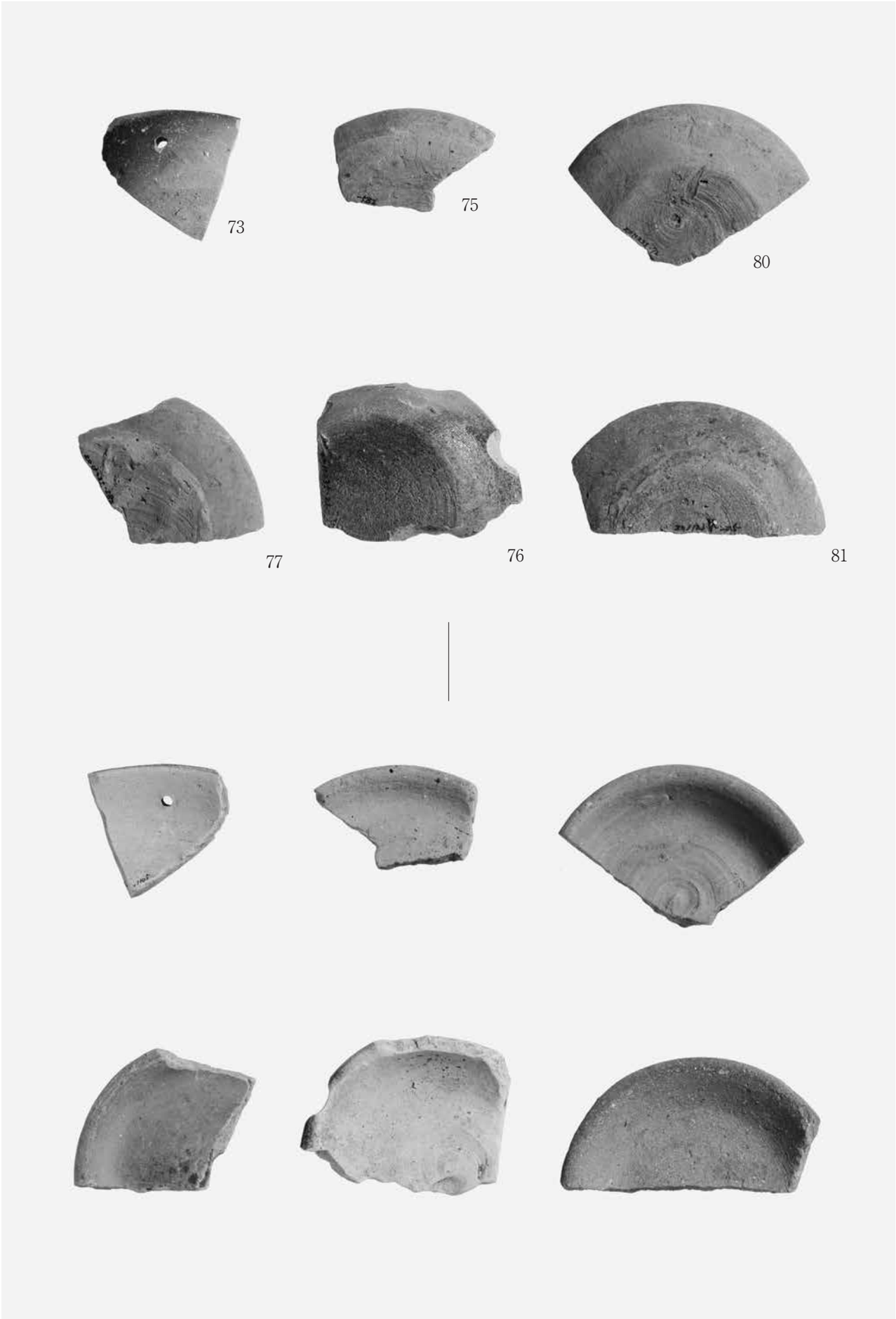


56 ～ 64： 1 区第 1 面包含層出土土器

写真図版45　遺物

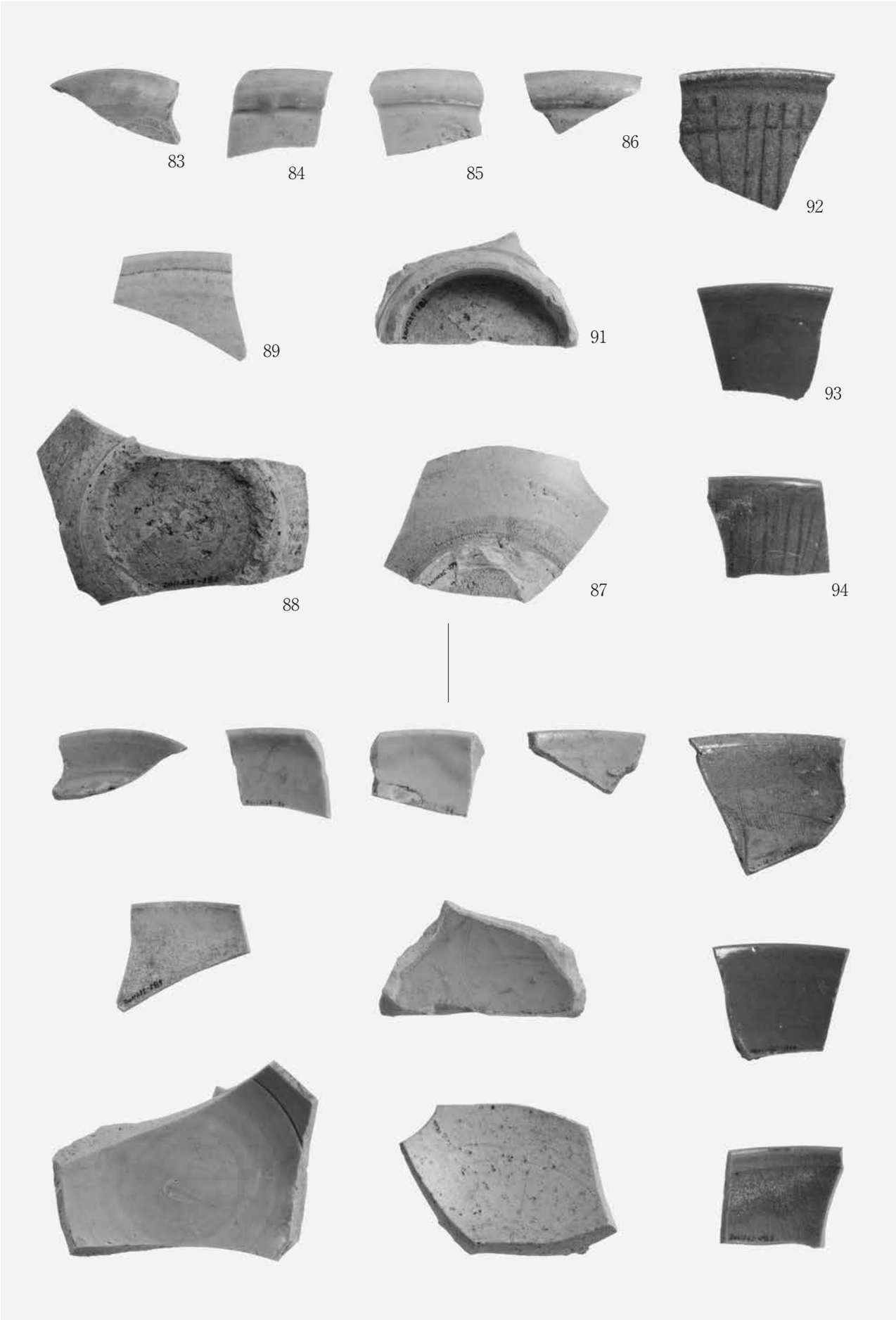


66 ～ 72： 1 区第 1 面包含層出土土器

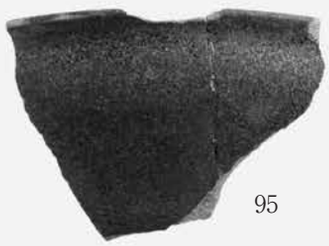


73・75～77・80・81：１区第１面包含層出土土器

写真図版47　遺物



83 ～ 89・91 ～ 94： 1 区第 1 面包含層出土土器



95

96

95・96：１区第１面包含層出土土器

写真図版49　遺物

M1 ～ M3： 1 区第 1 面出土鉄製品　D1 ～ D6： 1 区第 1 面出土土器製品

97

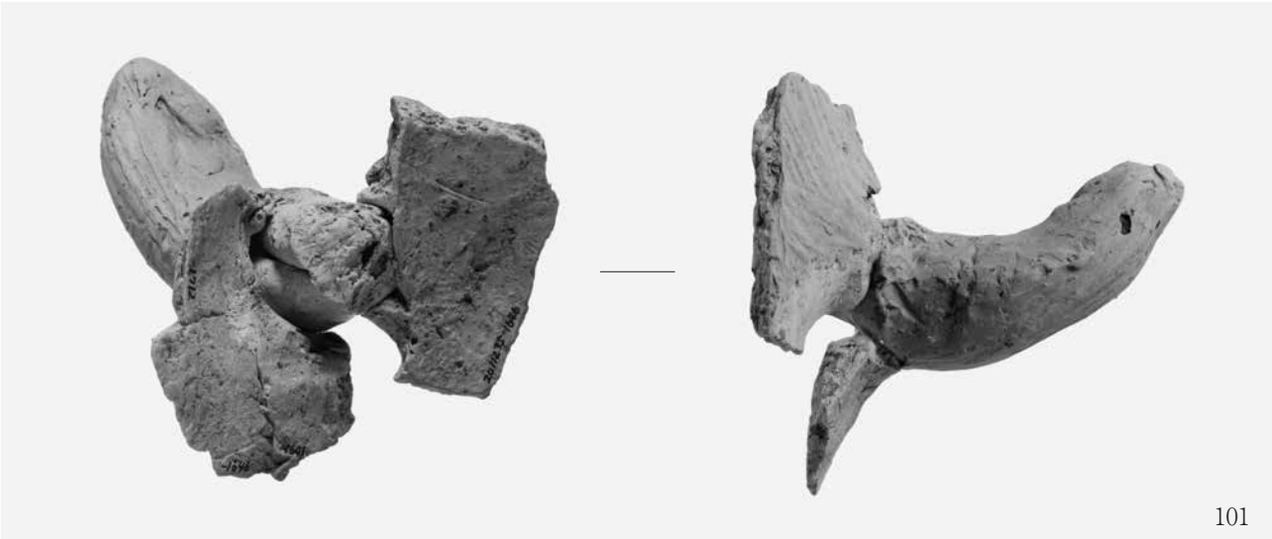
98

99

100

97 ～ 100：SH01 出土土器

写真図版51　遺物


101

103

102

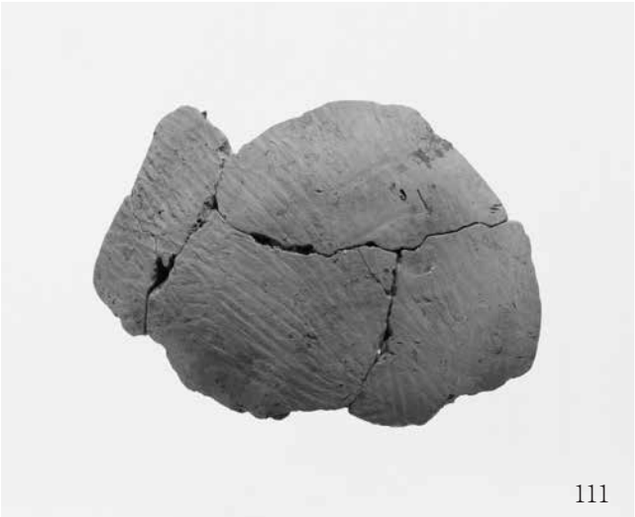
104

105

106

101 ～ 105：SH01 出土土器　106：SH02 出土土器

107


111

108

114

109

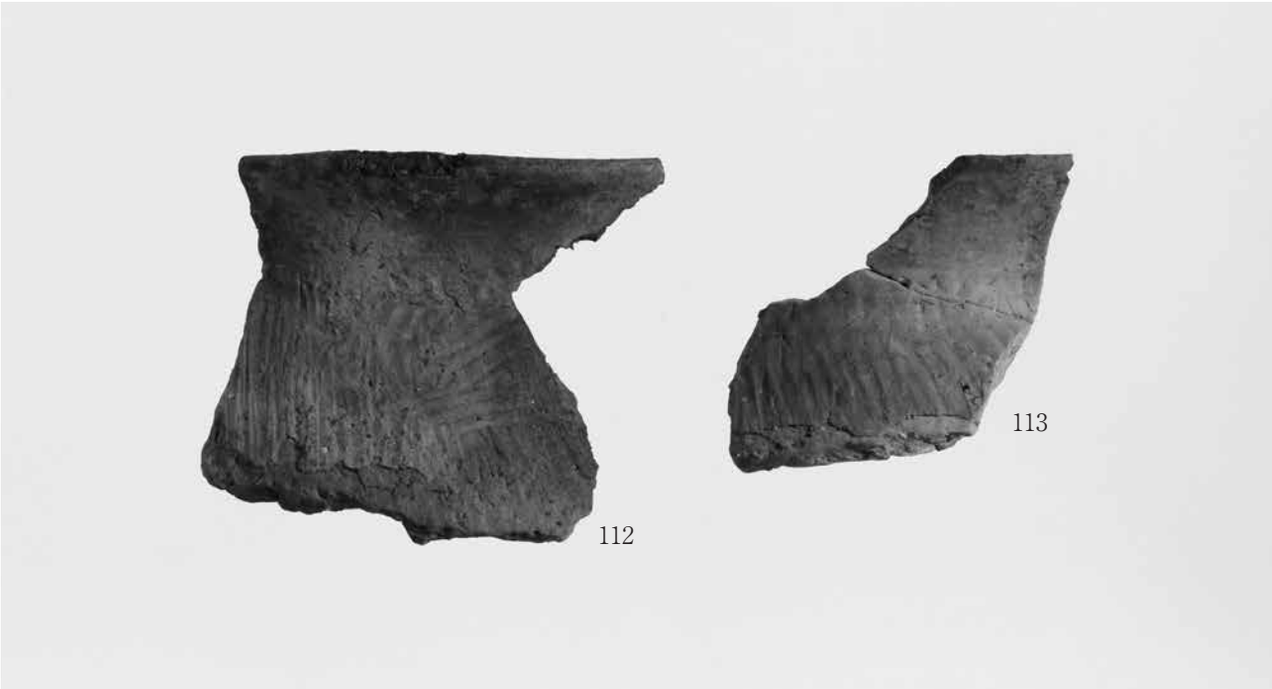
115

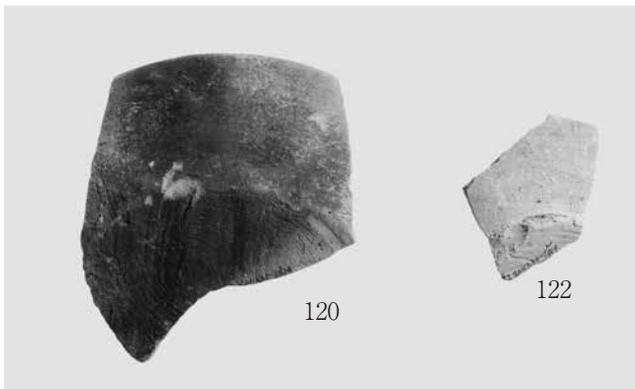
110

116

107 ～ 111・114 ～ 116：SH02 出土土器

写真図版53　遺物





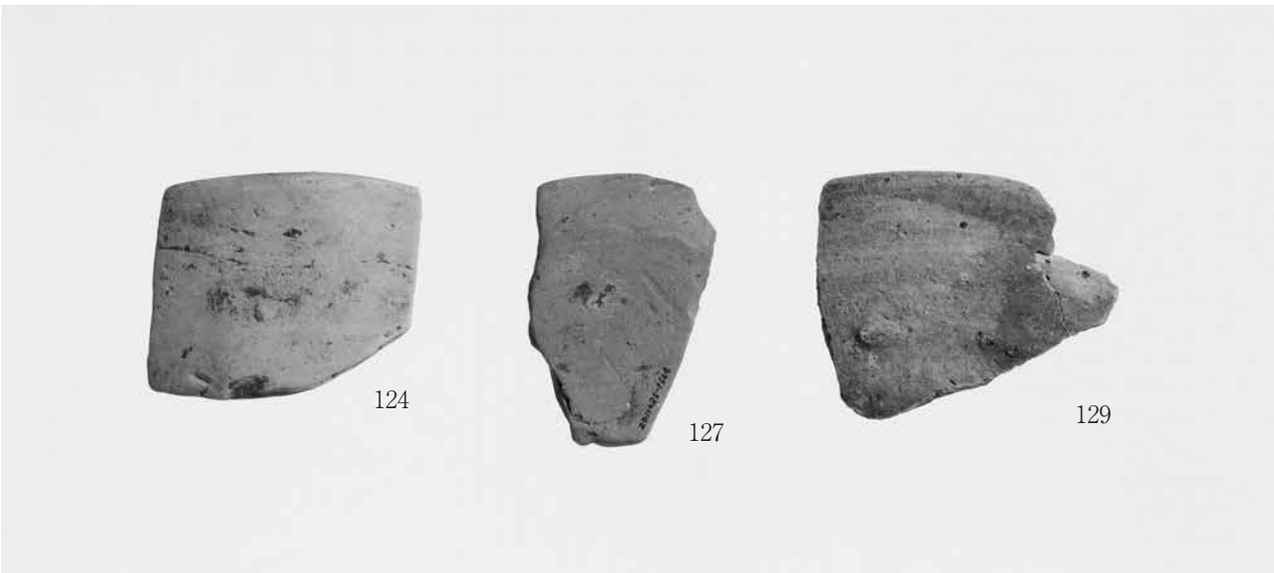
112・113・117 ～ 119：SH02 出土土器　120 ～ 122：SB05 出土土器

123

126

125

128


124
127
129

123 ～ 129：SB09 出土土器

写真図版55　遺物

130

131

132

134

133

135

136

130 ～ 132：SB10 出土土器　133 ～ 136：１区第２面柱穴出土土器

137

138

141

139

140

143

142

149

144

145

150

137 ～ 143：SD03 出土土器　144・145：SD05 出土土器　149・150：SD07 出土土器

写真図版57　遺物

151

152

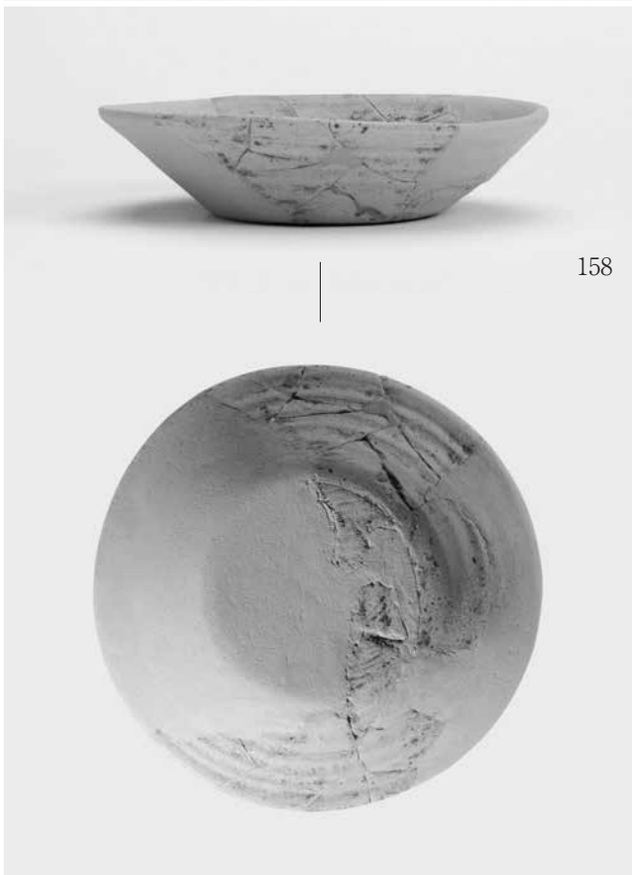
153

154

155

156

157


158

151・152：SD09 出土土器　153 ～ 155：SD08 出土土器　156 ～ 158：SX01 出土土器

159

163

161

165

162

166

160

164

159 ～ 166：SX01 出土土器

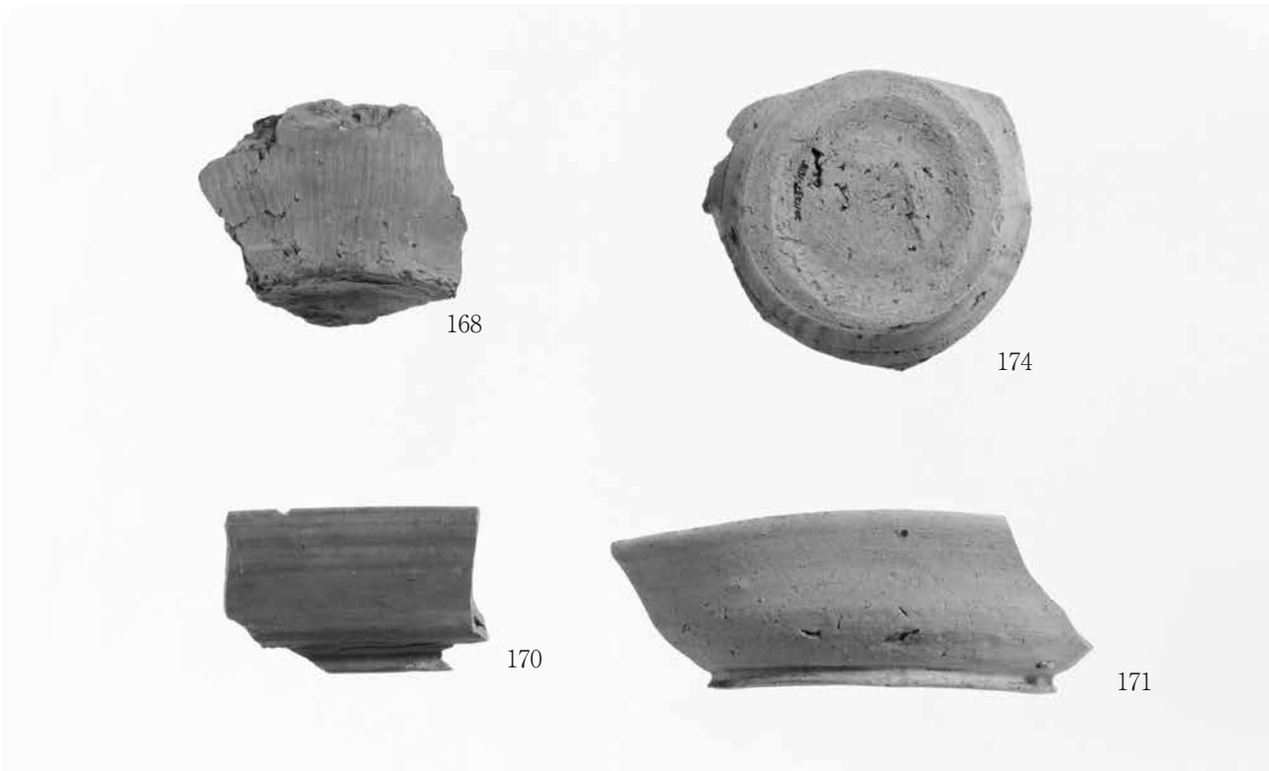
写真図版59　遺物

167

173

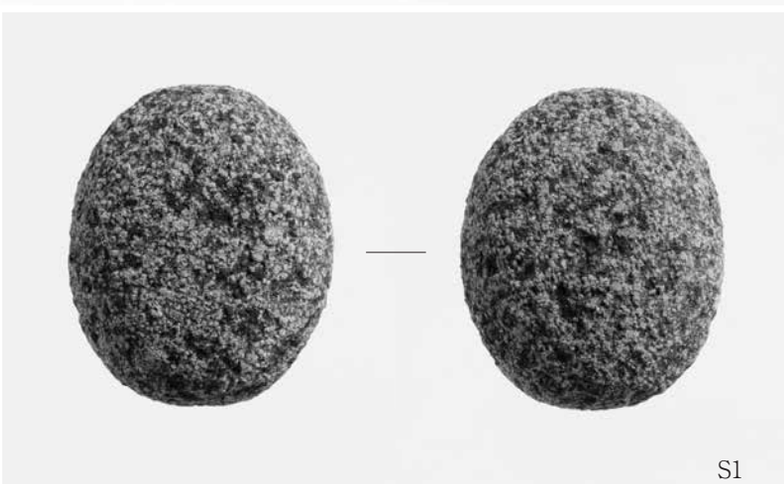
169

172

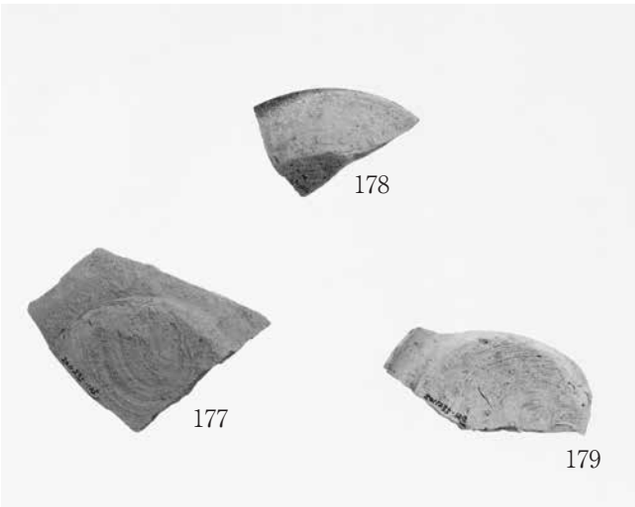

168
174
170
171

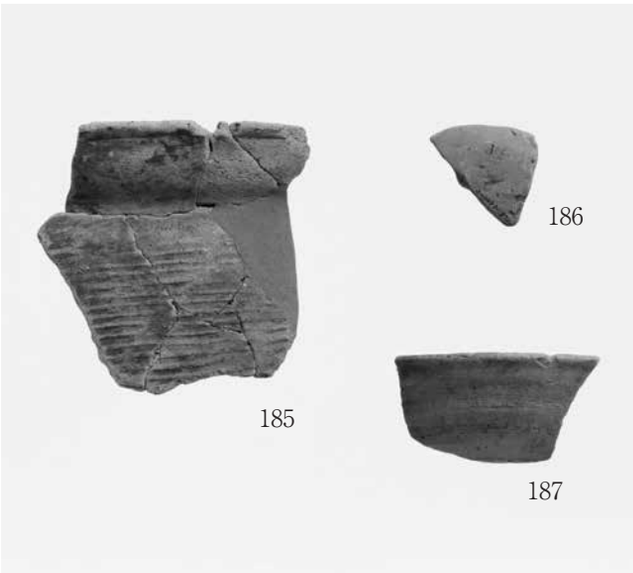
M4

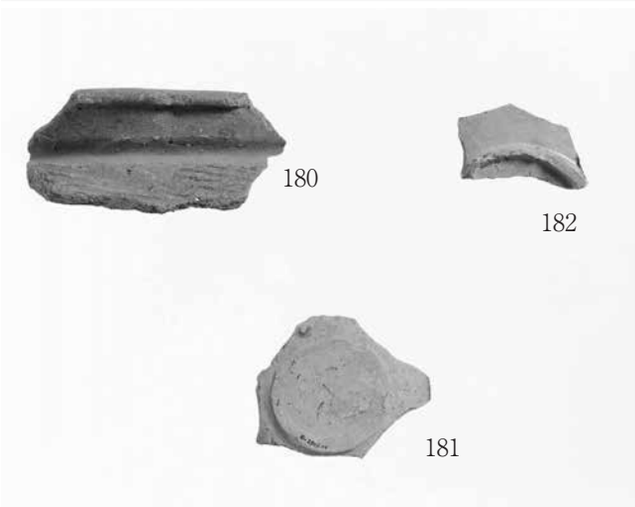
M5

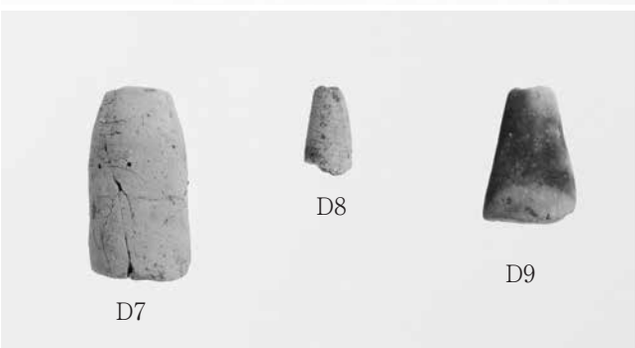

S1

167：SX01 出土土器　168 ～ 174： 1 区第 2 面包含層出土土器　S1：SH02 出土石製品　M4：P13 出土金属製品
M5：SB12 出土金属製品



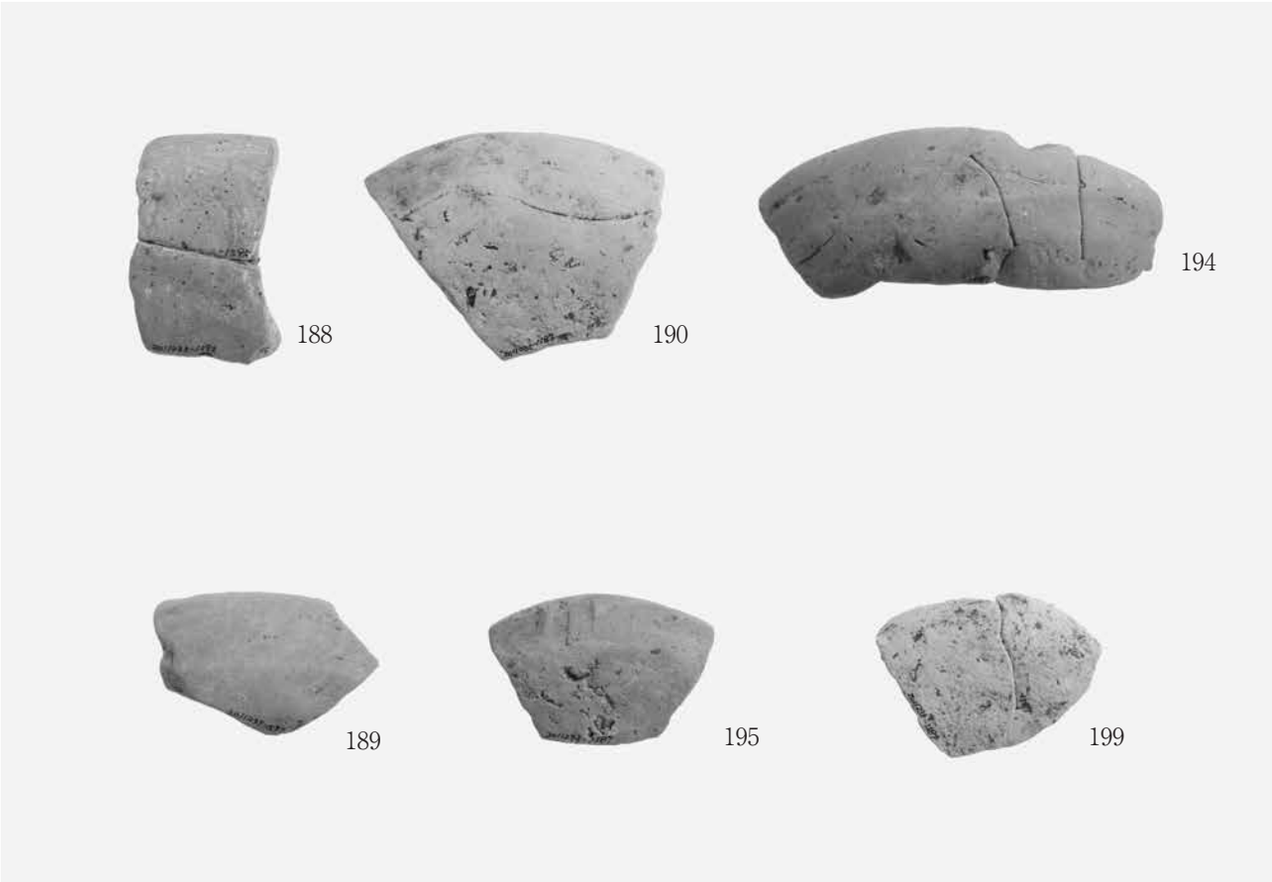


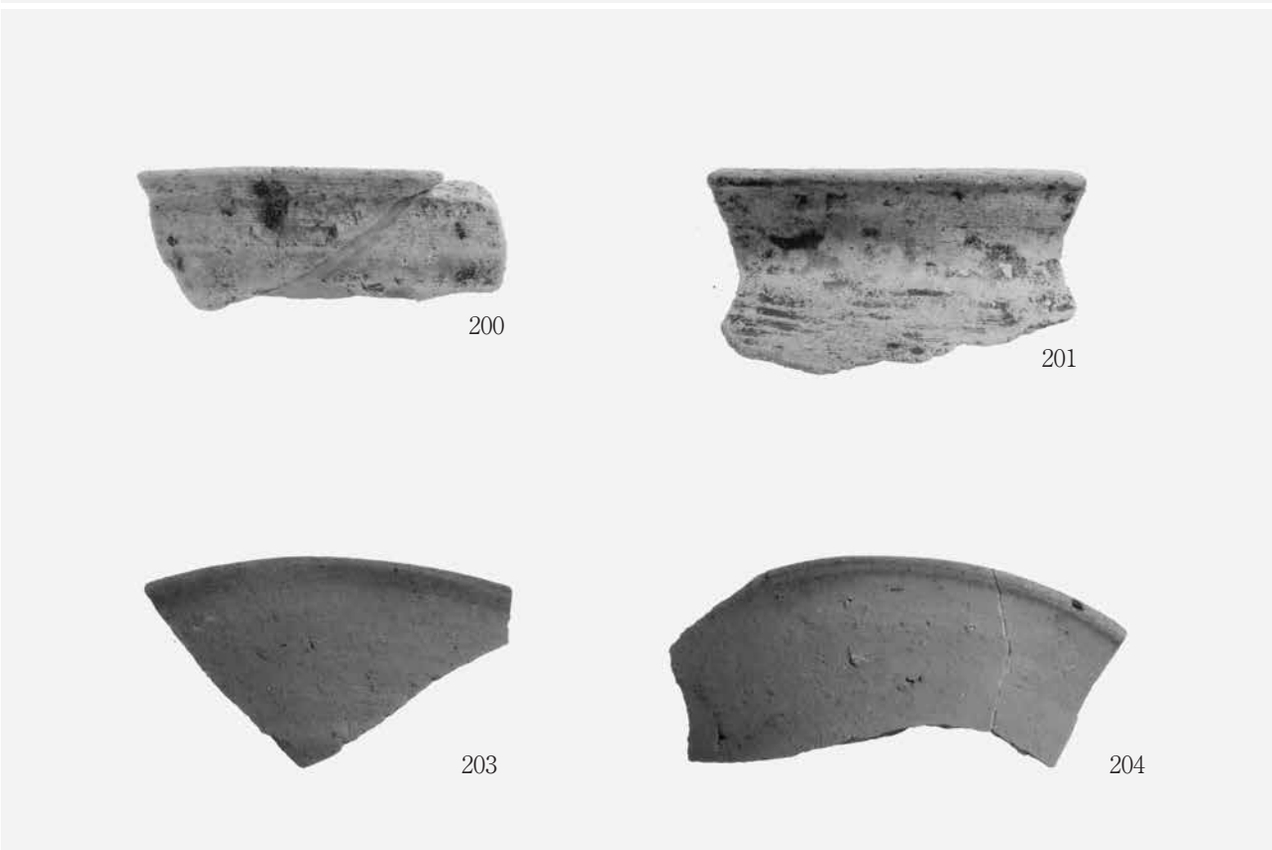




176：２区第１面柱穴出土土器　177 ～ 179：SD10 出土土器　180 ～ 182：２区第１面包含層出土土器
184：SB14 出土土器　185 ～ 187：2・４区第２面柱穴出土土器　191・192：SD13 出土土器
D7・D8：２区第１面出土土製品　D9：２・４区第１面出土土製品

写真図版61　遺物





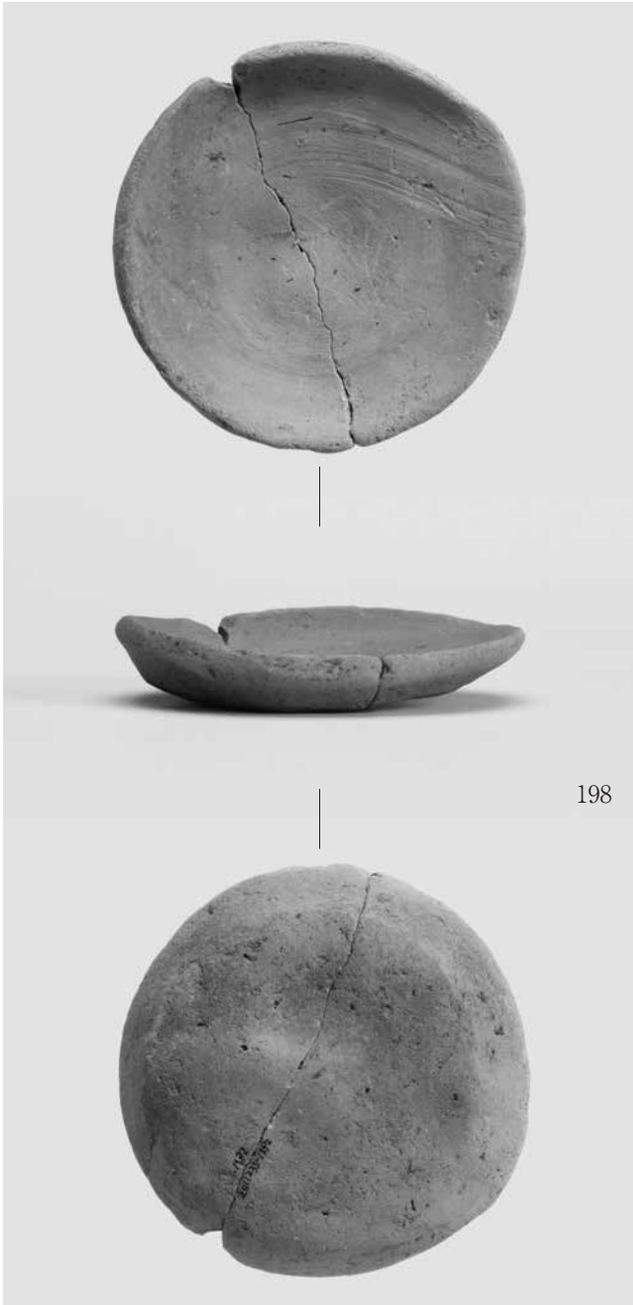
188 ～ 190・194・195・199 ～ 201・203・204：SD13 出土土器

193

196

197

202

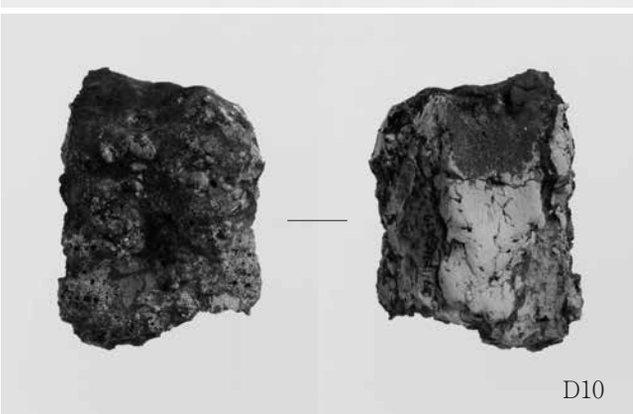

198

205

212

193・196・197・198・202：SD13 出土土器　205・212：2・4 区第 2 面包含層出土土器

写真図版63　遺物



207～212：２・４区第２面包含層出土土器　213～215：SB19 出土土器　D10：２・４区第２面出土土製品
D11・D12：３区第１面出土土製品

兵庫県文化財調査報告　第４６２冊

多可町

坂本・土井の畑遺跡

－（国）427 号　（曽我井バイパス）地域自主戦略交付金事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 26（2014）年 3 月 28 日　発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号
（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会
〒 650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印刷：ウニスガ印刷 株式会社
〒 677-0053　兵庫県西脇市和布町 39-1